

日本漢文史

籍叢刊

第四輯

系譜咏史詩

三十一



上海交通大學出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

圖書在版編目(CIP)數據

日本漢文史籍叢刊. 第4輯, 傳記 / 周斌, 孫錦泉,
粟品孝主編 — 上海: 上海交通大學出版社, 2014

ISBN 978-7-313-12132-5

I. ①日… II. ①周… ②孫… ③粟… III. 日本—
歷史—史籍—叢刊②歷史人物—傳記—日本 IV. ①K313-55

中國版本圖書館 CIP 數據核字(2014)第 225726 號

日本漢文史籍叢刊 第四輯 傳記

主 編 周 斌 孫錦泉 粟品孝

副主編 陳小法 尤 佳

上海交通大學出版社出版發行 北京人天書店有限公司經銷

(上海市番禺路 951 號 郵政編碼 200030)

電話:64071208 出版人:韓建民

北京中獻拓方科技發展有限公司印刷

開本:889mm×1194mm 1/16

印張:1021 字數:14611 千字

2014 年 10 月第 1 版 2014 年 10 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-313-12132-5/K

定價:26350.00 圓(全三十一冊)

版權所有 侵權必究

統 籌 陳建華 施 維 劉邦權

責任編輯 陳建華 劉邦權

裝幀設計 陳燕靜

第四輯目錄

第一冊目錄（總第90冊）

傳記

別傳

聖德太子傳曆……………一

右大臣吉備公傳纂釋……………四三

朱舜水記事纂錄……………二三三

義公行實……………三八七

津輕藩祖略記……………四〇三

藩祖盛烈記……………四一七

仙臺藩祖實錄……………四六五

第二冊目錄（總第91冊）

先考行狀……………一

櫻老加藤先生年譜……………一五

中洲三島先生年譜……………三七

津田永忠君年譜……………七五

欽仰錄……………八九

佐倉宗吾義民傳……………一〇九

福島安正君小傳及紀行梗概	一二五
--------------	-----

蕃山先生年譜	一四一
--------	-----

蕃山先生行狀	一五九
--------	-----

松岡先生年譜	一六五
--------	-----

箕山浜野先生行實	一八三
----------	-----

加藤清正傳	二一一
-------	-----

水戶烈公行實	二二九
--------	-----

惺窩先生行狀	二四七
--------	-----

羅山先生年譜	二六九
--------	-----

羅山先生行狀	三〇五
--------	-----

鵝峰先生林學士自叙譜略	三二九
-------------	-----

自叙譜略	三四七
------	-----

煉霞翁年譜	三九五
-------	-----

先師澹齋長沼君行狀集成定本	四一一
---------------	-----

國史館日錄 (卷一—卷二)	四三三
---------------	-----

第三冊目錄 (總第92冊)

國史館日錄 (卷三—卷十一)	一
----------------	---

第四冊目錄 (總第93冊)

國史館日錄 (續) (卷十二—卷二十二)	一
----------------------	---

日間瑣事備忘錄 (卷一—卷五)	三八七
-----------------	-----

第五冊目錄 (總第94冊)

日間瑣事備忘錄 續（卷六—卷二十五）……………一

第六冊目錄（總第95冊）
日間瑣事備忘錄 續（卷二十六—卷四十六）……………一

第七冊目錄（總第96冊）
日間瑣事備忘錄 續（卷四十七—卷六十七）……………一

第八冊目錄（總第97冊）
日間瑣事備忘錄 續（卷六十八—卷八十七）……………一

第九冊目錄（總第98冊）
日間瑣事備忘錄 續（卷八十八—卷一百七）……………一

第十冊目錄（總第99冊）
日間瑣事備忘錄 續（卷一百八—卷一百一十二、後編卷一—卷十四）……………一

第十一冊目錄（總第100冊）
日間瑣事備忘錄 續（後編卷十五—卷三十一）……………一

第十二冊目錄（總第101冊）
日間瑣事備忘錄 續（後編卷三十二—卷四十四）……………一

第十三冊目錄（總第102冊）
日間瑣事備忘錄 續（後編卷四十五—卷五十四）……………一

義魁清河正明傳……………三七九

叢傳

本朝言行錄……………四七一

第十四冊目錄（總第103冊）

本朝言行錄	續(卷三—卷四、跋)	一
皇朝言行錄	附：巡覺日記、枕上閑課	三五
名賢言行略		一二五
本朝名臣言行錄		一九七
先正傳		二二一
尾張名家誌初篇		二七一
仙臺人物史		三〇一
本朝遯史		三二九
扶桑隱逸傳		三七五
隱逸全傳		四四一
皇和表忠錄		四八七
三名家略年譜		四九九

第十五冊目錄(總第104冊)

今世武臣傳	一
明治史傳	二一
近古史傳	四五
南部五世傳	一〇九
足利將軍傳	一二一
豐臣四將傳	一五三
前賢故實	一七三

第十六冊目錄(總第105冊)

赤穂義人錄 一

補正赤穂四十七士傳 三七

本朝孝子傳 一六三

本朝列女傳 二六一

烈婦傳 四四七

大東列女傳 四六一

近世佳人傳 四八九

(初編卷之上、卷之下)

第十七冊目錄(總第106冊)

近世佳人傳 一

續(二編卷之上——三編卷之下)

婦女明鑒 六三

新譚 九七

先哲叢談 一一七

先哲叢談後編 二三七

先哲叢談續編 三八一

(序、凡例、目錄、卷之一——卷之十)

第十八冊目錄(總第107冊)

先哲叢談續編 一

續(卷之十一——卷之十二)

近世先哲叢談 三七

南木誌 一四三

三楠遺規 二四五

三忠傳 二七一

日本義烈傳 三一七

日本忠臣錄	三六九
-------	-----

尚友小史	四〇九
------	-----

師友志	四三七
-----	-----

續浪華鄉友錄	四五五
--------	-----

大日本中興先覺志	四七五
----------	-----

第十九冊目錄（總第108冊）

河內名流傳	一
-------	---

義勇芳軌	四三
------	----

高山正之傳 蒲生秀實墓表	七九
--------------	----

學古剩議	九一
------	----

近世人鏡錄	一二九
-------	-----

近世偉人傳（一編—五編卷之上）	三〇三
-----------------	-----

第二十冊目錄（總第109冊）

近世偉人傳 續（五編卷之下、義集初編—義集五編、禮集初編）	一
-------------------------------	---

明哲純義典	三三五
-------	-----

名節錄	三四九
-----	-----

三名士傳	四〇七
------	-----

明徵錄	四一九
-----	-----

第二十一冊目錄（總第110冊）

日本藩史（菊地序、自序、例言、引用書目、目次、卷之一—卷之七）	一
---------------------------------	---

第二十二冊目錄（總第111冊）

日本藩史 續（卷之八、正誤） 一

柏原藩史 六九

津輕藩史 二五九

鹿島外史 三六九

求麻外史 （卷一—卷二） 四七九

第二十三冊目錄（總第112冊）

求麻外史 續（卷三—卷四、跋） 一

橘山遺事 四三

日本古今人物史 一三一

本朝武林傳 （序、凡例、卷一—卷八十八） 一二五

第二十四冊目錄（總第113冊）

本朝武林傳 續（卷第八十九—卷第九十五） 一

系譜

擊壤錄 二七

帝王御譜 一三三

帝皇略譜 二一三

本朝皇胤紹運錄 二五三

本朝紹運續錄 二九七

帝王譜略國朝記 三〇九

皇親譜略 三四一

皇國姓族誌 四四九

京都將軍家譜	四七一
--------	-----

織田信長譜	五一三
-------	-----

第二十五冊目錄（總第114冊）

豐臣秀吉譜	一
-------	---

鎌倉將軍家譜	七七
--------	----

聿修錄	九五
-----	----

伊達世臣家譜略記	一三三
----------	-----

諸家知譜拙記	一六七
--------	-----

源平系圖	二四一
------	-----

訂正增補百家系譜	二五五
----------	-----

系圖綜覽（例言、目次、第一）	四四三
----------------	-----

第二十六冊目錄（總第115冊）

系圖綜覽（第一、第二）	一
-------------	---

第二十七冊目錄（總第116冊）

系圖綜覽（第二）	一
----------	---

新編纂圖本朝尊卑分脈系譜雜類要集（卷第一—卷第二）	三六七
---------------------------	-----

第二十八冊目錄（總第117冊）

新編纂圖本朝尊卑分脈系譜雜類要集（卷第二—卷第六）	一
---------------------------	---

第二十九冊目錄（總第118冊）

新編纂圖本朝尊卑分脈系譜雜類要集（卷第七—卷第十四）	一
----------------------------	---

第三十冊目錄（總第119冊）

新編纂圖本朝尊卑分脈系譜雜類要集 續（卷第十五—卷第二十、索引）……………一

柏原織田家臣系譜……………三三三

茶人大系譜……………四五—

華族鑑……………四七七

第三十一冊目錄（總第120冊）

平安人物志……………一

南山小譜……………四五

日本外史系譜……………八三

日本外史補系譜……………一〇九

詠史詩

國詩史略……………一二五

近世詩史……………一六一

東洋詩史……………一九三

詩史……………二一九

弔楠公詩編……………二四三

佛山堂詠史絕句鈔……………二五一

日本詠史百律……………二五五

日本詠史新樂府……………二六九

讀史雜詠……………二九一

征清詩史……………三二九

讀正續日本外史……………三九一

日本外史樂府	四四一
北總詩誌	四七三
瀛史百詠	四九三
海外詠史百絕	五二一

第三十一冊目錄(總第120冊)

平安人物志	一
南山小譜	四五
日本外史系譜	八三
日本外史補系譜	一〇九

詠史詩

國詩史略	一二五
近世詩史	一六一
東洋詩史	一九三
詩史	二一九
弔楠公詩編	二四三
佛山堂詠史絕句鈔	二五一
日本詠史百律	二五五
日本詠史新樂府	二六九
讀史雜詠	二九一
征清詩史	三二九
讀正續日本外史	三九一
日本外史樂府	四四一
北總詩誌	四七三

瀛史百詠

海外詠史百絕

.....

四九三
五二一

弄翰子 撰

平安人物志

天保九年（一八三八）刻本

據天保九年（一八三八）刻本影印

天保戌再刻

平安人物誌

華雒書房

尚書堂
竹簡堂
梓

凡例

一舊刻專以知文雅之人姓名字號居處倍稱等爲主今亦從之雖旁及一技藝然若武技俗藝之類則不載之蓋以文爲主也

一此編隨門而即錄之故

平安人物志 凡例

德之長少則綴之全無序秩且如居處時有遷移可不免異與覽者恕

予嘗憫舊刻有遺脫故欲盡載現存之士無遺脫普訪四方而索求之然未及爲全聚而沒者相繼則難緩

之於是急命剗剗爲如其所遺脫他

日應必補入矣覽者勿咎踈漏

一篇中載技藝之士者各以其所長爲

至至是則間有不文者覽者宜留意

而勿怪其不齊矣

一緇流居處往往不在近故未得一一

平安人物志 凡例

二

詳其字號今唯從所聞載之他日得

之當具載而已

天保九年戊戌夏

弄翰子記

平安人物誌目次

上卷

儒家

初丁

詩人

立才

韻學

六才

書家

七才

文書

九才

篆刻

十才

中卷

和歌

和學

連歌

有職

衣紋

画家

大画

鑒筆

平安人物志

目次

三

下卷

醫家

物産

種藝

數

易學

文雅

律學

樂

平語

七絃

箏

碁

鞠

奇工

良工

細工

附錄

女流

緇流

追加

聞人

目次終

平安人物誌 卷之上

弄翰子編輯

儒家

漫筆書錦圖
非作序次

松永昌國

号宸翰講習堂
堀川二條南

松永臨次郎

源 寵

字天爵号梅莊居
秋新所室町九太町南

北小路大學助

中嶋 規

字景寬号棕隱
丸太町河東

中嶋文吉

棕陰軒詩集

自初集至四集

平安人物志

木下 辰

字 号桃里
一条新町西

木下彌三郎

藤 弘濟

字 号古義堂
堀川下立賣北

伊藤壽賀藏

清田 裕

字公緯号鶴車
堀町竹屋町

清田丹藏

猪飼彦博

字文卿号敬所
前町九太町北

猪飼敬所

史通點綴

菊子傳遺

平 止章

字子含号貞庵
油小路松原北

岡崎謹吉

寺嶋天祐

字吉公号白鹿
二条堀町東

寺嶋俊平

堀 正輔

字君弼
中賣小川西松之下

堀 内記

琴 廷調

字無絃号春樵
四条東洞院東

梅土

春樵詩草

摩嶋長弘

字子教号松南
金座三条北

摩嶋助太郎

貫名 芭

字君茂号海屋
木屋町二条南

貫名泰次郎

平安人物志

平 祐憲

字肅号懶庵
仁和寺門前

杉本主稅

鈴木 棟

字隆父号機泉
柳馬場竹屋町北

鈴木恕平

佐々木公明

字伯章号柳所
塔之壇松木町

佐々木藏人

佐 尊信

字章之号南山
中賣新町西

五十君貞次郎

鈴木世孝

字子養号南山
梅小路府政館

鈴木俊平

村田富年

字大椿号藍間
箸屋町室町西

村田岩五郎

仁科

字 号白谷
卜川東勢屋町

仁科源藏

白谷詩集

堀 正路

字 号
油小路四條北

堀 禎次

越智立敬

字 号
下立賣新町西

合田左源次

拾 大年

字 号
字詠達号昇殿園
知惠光院一条北

十河湖一郎

河内

字 号
中長者町西瀨屋西

河内主膳

千手興成

字 号
字立淑号旭山
三條西洞院東

千手謙齋

井上 觀

字 号
字持藏号靜軒
御幸町東川北

井上貞吉

平安人物志

山本

字 号
六角新町西

山本勘四郎

大喜田巖

字 号
佛具屋町北路南
字君璋号東山

大喜多左司馬

川上 顯

字 号
字信侯号難辨
十太坊止子条北

川上義左衛門

牧 輓

字 号
字信侯号難辨
堺町押小路北

牧 善助

木寺方恭

字 号
字士敬号霞堂
城西

木寺順平

源 季忍

字 号
字君成号東巖
岡崎村

平賀顯次郎

薩埵天放

字 号
字克明号日新館
般舟院前

薩埵玄藏

塚田季陳

字 号
字恪度号
桂宮御長家

塚田數馬

小沼質勝

字 号
字大文号隻岳
葭屋町上長者町北

小沼大固

矢上 行

字 号
字子生号快雨
三條高倉西

矢上行助

池内 時

字 号
字士辰号陶所
知恩院宮御里坊

池内大學

久下長貞

字 号
字雲卿又憲園
新町今出川紀及第

久下馬輔

石嶋

城西

石嶋 某

平安人物志

伊 利恭

字 号
字師古号宇銘
聖護院村

伊地起出羽介

源 松苗

字 号
字富小路竹屋町南
号東園

岩垣大舍人助

中原章達

字 号
鳥丸中五賣北
國史略 東園百絶正續
増註十八史略

止 安藝守

藤原時善

字 号
字士憲号金谷
中五賣小川東

大口伊勢守

岩本美親

字 号
字士憲号金谷
城西 号蕉雨

岩本 某

麻田公藏

字 号
字津風
間屋町正西北

麻田武藏大掾

河本 綽	字君容号自安 新門前徑橋東	河本 恕平
柴田 惟敬	字 五条東洞院東	柴田 鳩翁
神 惟孝	字伯友号音齋 一条新町西	神 讓助
浅井 芳	字士芳号穀齋 西洞院二条北	浅井 才次郎
詩		
中嶋 棕隱	再出	
梅辻 春樵	再出	
平安人物志	再出	
摩嶋 松南	再出	
十河 昇霞	再出	
實名 海屋	再出	
白井 赤水	出医	
入江 有親	城西 出文人筆	入江 某
浦上 春琴	出文人筆	
源 亭	字 盆座御池北	樋口 源兵衛

辻 章連	再出	常 行寺
釋 慧海	号富小路錦小路北	
野口 景張	字方祖号蕪菴 室町綾小路南	野口 友亮
梁 緯	字公圖号皇巖 柳馬場二条北	梁川 新十郎
秋吉 錦水	出医部	
伊 默	字 塔之壇幸神町北	伊知 地木上
向川 貞	字幹夫号 妙顯寺中	向川 三助
平安人物志	再出	
川那部 侖	字棚坡号 東六条	川那部 恰
赤沢 萬	字太一号萬菴 諏訪町魚棚北	赤沢 多一郎
今 平共堅	字 豊田 号噴瀝	并河 内也
神 晋齋	再出	
韻學		
身人部 清好	字子成号文堂 油小路夷川北	水口 右近將監

書 筆法家上代様書家

位置不問巧拙

紀行享

書博士号
塔之壇

山口甲斐守

賀茂氏祥

字号
上賀茂

岡本近江守

賀茂直兄

出和歌部

賀茂保海

字号
上賀茂

岡本大藏

藤原恒固

字号
九太町富小路

松田内通

平安人物志

七

藤貞固

字叔幹号西郭
一条千本東

近藤亮平

隱岐隆俊

号事
栗田

隱岐大輔

越智

字号
知恩院門前

勝見主殿

源清行

字号清可
栗田檀髮堂前

山田兵庫

在

字号廣風
下川京

大谷廣風

○

河北房種

字伯隆号
室町竹屋町北

河北耕之助

源應周

字子行号一瓢齋
富小路三條北

福井直藏

藤原光完

字翁孫号務令堂
新門前繩手東

中村多門

平安人物志

八

源正韶

字鳳卿号南嘉又
東澤寺瑞雲師夷齋

池田左馬大允

宇野輯

字子熙号明軒
新町四條南

宇野真九郎

○文人書

紀惟德

字士恭号亦水
洛西壬生

白井元威

中嶋棕陰

三出

源 以匡

号桂花樓
城西

福田 某

雨森良寂

出医師

田邊 憲

字伯表号孝次
東寺山吹町

田邊飛驒

釋 仙友

名傳空号知惠
嵯峨化野

念佛 寺

鎌田昌弘

出医師

源 知義

字君虎号南鶴
高倉二条南

桐山虎三郎

平安人物志

文人畫

五

岩瀬貞諒

字子直
蛸菜師娘町東

岩瀬理平

雨森盛寅

字惟寅号教亭
鳥丸綾小路南

雨森善四郎

奥 正三

字 号
元誓願寺大宮西

奥村祥藏

中村 謙

字 号
鳥丸一条北

中村内記

長柄為實

字義卿号梅坂
二条西洞院前

長柄春龍

平 信敏

字有功号屠龍
新町一条北

山路右兵衛大尉

平村豊秋

字 号
御池西替町西

鹽瀬九郎右衛門

荒川一次

中町丸太町南

荒川重平

釋 義寛

字君栗号鶴山
東山西光寺中

的場 義

字方卿号天籟
室町二条南

的場順藏

長谷川長秀

字君実号鳳城
御幸町夷川北

長谷川作次郎

片岡光啓

号東阜

片岡範祐

佐登子

大倉氏室

登毛子

鳥丸蛸菜師南

田中氏

平安人物志

十

○

釋 玉樹

佛光寺中

前大善院

紀 廣成

出画部
一号敬羊旭樓

纂刻

列次非
微甲乙

三雲孝

字子孝号儒喃
河東九太町

三雲中書

金信

字言仁号月溪
今旌江州高嶋

芳田月溪

釋天年

字公福号百福堂
四糸坂町東

佐々木天阿

廣瀬君潔

字水壺号村谷

廣瀬俊平

雨森正弘

出医師

山本孔文

字郁夫号九華
三糸天王山子

山本孔文

平安人物志

纂刻

十一

釋月峰

出書部

釋義亮

出書部

田邊憲

出書部

羽倉可亭

号可亭
伏見橋岡

羽倉駿河守

海春喬

字
西替町姉小路北

天野善之助

賴綱

字子常号三壽
留小路姉小路北

賴常太

釋智嚴

号東岳又詩九
糸橋東

正林寺

源安信

字
丸太町寺町西

岡田孫兵衛

弘武

字止茂号廣峰又細江
木屋町樋口南

弘雄太郎

平安人物志

十二

平安人物志 卷之中

弄翰子編輯

和歌

非以巧拙
今次第

賀茂季鷹

号雲錦
上賀茂

山本安房守

正誤めつゝ
万葉集類句

富士日記
雲錦集

平 景樹

号東鳩又桂園
上岡寄村

香川長門介

新學異見
桂園一枝

百首異見
六字審異結

中空日記
薄氷

平安人物志

和歌

士

賀茂直兄

号
上賀茂

松田伊豫守

言葉皇路

大江千楯

号畫舍
錦小路新町東

城戸範次

麻那備廣道

瀧原宋閑

出區却

中川自休

号
平野社南

中川應然

穗井田忠友

号
城山

穗井田標助

荷田信愛

号
百万遍屋敷

羽倉紀伊守

平 基廣

号樟屋
栗田

並河織部

平 長廣

号柿園
鳥九四条北

大橋九右衛門

源 比礼雄

号審神又櫻生
聖讓院村

野口式部

藤原友千

号
室町九太町南

倉谷主水

藤原保之

号英舍
高山西洞院西

木間順次

川嶋秀盛

号玄々堂
御幸町三条南

川島

平安人物志

士

釋 空山

号松風軒
下主賣油小路西

香川木上

平 景嗣

号梅月堂
岡寄

橋本氏親權輿

橘 克邦

号
武京路室町西

富田右衛門

源 泰州

号千株館
蛸薬師富小路東

中嶋司書

中嶋勝称

号
近衛殿堀川御屋敷

小原慶雲

小原端木

号
木屋町三条南

田中正文

田中正文

号
鳥九出水北

田中

和學 列次不分次第

香川景樹 再出

城戸千楯 再出

大橋長廣 再出

六人部是香 号榮漢 西岡向日社

六人部縫殿 号榮漢 西岡向日社

春原元彦 新島丸荒神口 号播多宝

平安人物志 五

里村昌同 号花下 一条室町西

石井了珪 号菊水亭 栗田唐戸裏町

猪苗代謙道 上御灵中町

釋 晃溪 号藤坊 上醍醐

長濱尚次 号凌虛堂 八幡

世繼貞員 出文人画

六人部縫殿

榎並助之丞

岩橋通江

五

里村法橋

石井法橋

猪苗代法橋

吉祥院

長濱越前

有職 列次不分甲乙

中原職競 号 中立賣室町西

高橋清平 号 梨木町

坂上足保 号 清和院口

平安人物志 連歌有

紀 宗芳 号 梨木町北角

中原章武 号 島丸中主賣北

源 珍昌 号 田中村

鴨 東滿 号 下鴨

藤原信誠 号 上京古木町

藤井總博 号 深海堂 中長者町新町西

平田内匠

濱嶋志摩守

町口大判事

共

高橋若狹守

勢田豐前守

渡邊隱岐守

林 讚岐守

初川宮内少丞

藤井伊豫掾

号

号

号

連歌有

号

号

号

号

号

号

号

号

号

号

号

号

号

号

号

号

藤原常主

号 故常忠男
前人同居

連水左兵衛尉

同衣紋

小槻秀芳

号 新島丸荒神呂南

典鹿東市正

藤原康民

号 畠山町

泠川伊勢守

藤原祐享

号 安樂小路上主賣

長野對馬守

平安人物志

衣紋

十七

秦 武逸

号 主花止子

三上左邊將曹

藤原信誠

再出

藤井總博

再出

秦 景文

号 衣棚下長者町

三上大和守

木下 辰

再出

平 為勝

号 八条殿町

柴田右門

畫

非以巧拙次第

藤原光亨

字子正号鶴皋
寺町九太町

土佐土佐守

同 光清

字子纓号鏡水
前人男

同 伊勢守

同 光祿

字 号
右同所

土佐參河守

同 光文

字子炳号韓水
前人男

同 左邊將監

鶴澤守德

字 号
下長者町千本東

鶴澤探 春

同

字 号
前人男

同 探 龍

平安人物志

畫家

十八

藤原永岳

字公嶺号山樂
室町下主賣南

狩野縫殿之助

同

字 号
前人男九下賣南

同 内 記

源 應震

字百里号方壺子
姉小路室町東

圓山主 水

○

岸 駒

字貴然号可觀堂
北岩倉

岸 越前守

同 岱

字君鎮号同功館
東洞院九太町南

同 筑前介

同 慶

字士善号台岳
前人男

同 長門介

同 禮

字士弟号雪峰
前入男

岸大路左辺將曹

岸 良

字士良号西雲樓
室町四糸南

雅樂之助

同 文進

字士進号連山
前入男柳馬場根路北

同 德次

原 在明

字子德号寫照
中五賣室町西

原 内匠大允

同 在照

字子傷号觀瀾
前入男

同 辺江介

源 在親

字子氏号剛雄
小川中五賣北

梅戸紀伊守

平安人物志

十九

源 在謙

字子謙号靖壽
上長者町室町東

大嶋右馬大允

藤原常善

字之卿号秀芳
三糸東洞院東

大口加賀守

清原久成

字仲翼号奉秀
高倉夷川北

多村伊勢介

源 雅喬

字子秀号桃嶺
金座二糸北

嶋田越前大掾

紀 重就

字中孝号猶龍
武藏路室町西

座田中務少録

岡本豊彦

字中彦号鯉喬
四糸東洞院東

岡本司馬

吳 景文

字士藤号華漢
四糸東洞院西

松村要人

源 元篤

字士厚号松堂
錦小路西洞院東

村上松堂

同 元茂

字廣大号松嶺
前入男

同 源之丞

河村琦鳳

字五逸号竹裏館
金座夷川北

河村

琦鳳畫譜

琦鳳畫譜

紀 廣成

字菩提号既白
四糸東洞院西

東 暉菴

平安人物志

廿

長澤 鱗

字吞江
柳馬場四糸北

長澤蘆洲

同 道一

字實夫
前入男

同 蘆鳳

甲賀 璃

号白鍊堂
白川側接宮町

甲賀文麗

横山清暉

字成文号霞城
新町四糸北

横山主馬

源 來章

字 号蘆江堂
富小路姊小路北

中嶋字次郎

田中日華

字伯暉号月渚
堀町四糸北

田中辨二

錢 郁春

字士文号桂中樓
二糸堀町西

福智白瑛

鯉鱗電譜 有馬記行

吉村孝文

字君制号蘭涯
新町御前通南

吉村清之丞

藤原直興

油小路夷川北

三橋岩藏

比喜多盛盈

字不溢号吐月堂
室町出水北

比喜多宁隆

別所東溪

字号
柳馬場中池南

別所金五郎

高倉在孝

字子止号後素
六軒町一条北

高倉後素

藤原正隣

字子臣号君川
衣棚出水南

山口正隣

平安人物志

九二

田 俊

櫻町三条北

村田勇藏

豐臣可為

字士師号一惠
木屋町二条南

浮田藏之介

望月 輝

字子猷号玉川
室町竹屋町北

望月玉川

石田有汀

字号
東 助雪踏屋町

石田半平

杜 昂

字七 弦号鶴洲
東 院夷川北

杜 四郎

齊藤則順

字士 經号蘭亭
中 土 重室町西

齊藤樂亭

小澤定信

字士 出
新町武者小路南

小澤久米次郎

渡邊政信

号東山又松涯
富小路押小路南

渡邊周藏

川 芦汀

号芦汀
一条室町西

小川進介

吉田茂喬

号松御
鳥九好小路北

吉岡万壽

藤原 敬

字惟長号竹山
西六条

蒲生圖書

織田信彦

号東民
洛東團山

織田出雲

柴田仙溪

字
鳥丸押小路北

柴田仙溪

吉田廣均

字君平号拙霞
室町綾小路南

吉田喜十郎

平安人物志

九二

田本茂彦

号龍久奇
塔之壇幸神町

岡本兎毛

源 祐則

号春汀
山科

藤村

原田 篤

号飛蝶亭
北嵯峨

原田九門

紀 廣繁

字世昌号精舟
四条鳥九東

澤渡近江大掾

菅原景信

号虎嶽
御池衣棚東

堀山景映

中村 祥

字子善
室町松原南

中村春亭

木村 信

字成德号玉帶館
柳馬場五条北

木村秀嶽

近藤定安	字士行 河原町九太町北	近藤有芳
竹邨 德	字必勝 四条東洞院西	竹邨良明
源 信德	新町今出川南	津田吳輔
新見廣有	字大丰号露園 西替町三条北	新見大丰
北川春成	号明溪 二条橋東	北川春成
東 寅	字木星号長月 下川原	東 俊次
○		
平安人物志		九三
勝山仲起	号鶴子 新島丸切通	法眼琢眼
安倍仲行	号 前入男	勝山琢文
橘 泰	字東美号洞玉 西替町二条南	景山式部
海北有德	西陣	海北斎之祐
源 景福	号牧雲 木屋町松原南	宮服景輔
井上皐舟	字子儉号恭德 西洞院上長者町北	井上情平
泉 保	字子誠号春園 室町中五賣南	泉 雅次郎

分 和 大

谷口重安	号華明 洛北松崎	谷口勝次郎
中嶋富壽	字實文号華陽 聖護院	中嶋重輔
川邊 璉	字子玉号華陰 新町中五賣北	川邊元三郎
平子 明	字士精号雄峰 東洞院錦小路北	平子主殿
渡邊丹崖	字十里号半醒 東中筋御前通南	渡邊廣雲
源 如清	字子穆号梅園 東洞院綾小路南	黒田佐太郎
佐々木朗耀	錦小路烏丸東	佐々木安次郎
平安人物志		九四
百々廣年	字永丈 御幸町夷川北	百々菱華
藤原雅言	字号廣峯 柳馬場三条南	吉坂藤三郎
大肉 勤	字勉造号菜華 四条烏丸東	大角南田
藤原青春	号雪艇入廣隆 今越南紀	菱川吉左衛門
八島定岡	号五岳又丘山 木屋町三条北	八嶋岳亭
武澤楊岸	号風清号宇高泰 南泉町松屋町西	武澤法橋
横山信平	字華溪 室町一条南	横山嵐山

文人重 非以巧拙分次第

中林成昌

字伯明号竹洞
御幸町押小路北

中林竹洞

竹洞重譜

王 羸

字巨海号百谷
六角柳馬場東

小田良平

瀧 吉

字元詳号雲山
間之町二条南

山崎文軒

世繼真員

字伯周号希僊
三条高倉品

世繼希僊

鈴木世孝

再出

平安人物志

天八馬

光

山本

字号
衣棚御池北

山本梅逸

賀茂匡保

上賀茂

岡本但馬守

松 挹

字公劉号漢齋
木屋町四条北

松村公劉

紀 選

字伯举号春琴
釜座夷川北

浦上喜一郎

藤井靖

字不求号即龜
聖護院村

藤井雪堂

藤井春影

比文雅部

源 一貞

号而塘
百萬遍屋敷

黒田又市

赤井 貞

号蘭陽
錦小路東洞院東

赤井 某

雨森敬亭

再出

小泉慶雲

再出

挂 吳鳳

西替町二条南

挂 彦右衛門

岩 文垂

号
西洞院竹屋町北

岩城清右衛門

挂 有彰

号青洋又舍翠園
新町堀糸師南

挂 藤右衛門

大倉 穀

字國宝号義軒
新堀木町二条北

大倉 望山

平安人物志

光

田 成大

字子信号方里
堀町姉小路北

市田文次郎

今大路源秀

号悠山
聖護院

今大路

原 英

字文水号文榮
田崎

原 主稅

伏田舒喃

字仁甫号
田崎

伏田 弥左衛門

谷 卬之敬

字仲平号竹法
八幡

谷 卬仲平

秋 錦水

出医部

早藤春英

字春夫号万丈園
六角番小路西

早藤茂八郎

砂川

出文雅部

服坂

徵

字元明号湖山
錦小路越屋町東

服坂文吉

橋震佳

号都花園
一条新町西

下村真五郎

采子

号接鳳
富小路錦小路北

常行寺室

翹子

号紅蘭亭
柳馬場二条北

梁川氏室

小西游

字從之号松嶋
寺町姉小路北

小西元四郎

○ 平安人物志

七

釋良亮

号月峯
双林寺

金量院

釋義亮

号來青
前入男

長喜庵

釋清亮

号玉嶺前入男
同寺在大雅堂

松泉院

釋護法

字龍山
寺町崎茶師

安養寺

釋玉温

号孕俄通人
東福寺中

釋土樹

再出

釋魯堂

妙心寺中

雜華院

釋器外

全上

大心院

釋照阿

号月靜
灵山

正智院

釋大含

号出繼流

雲華院

釋子然

号楚山
誓願寺中

江岸院

釋隨同

号霞嘴
錦天神

歡喜光寺

釋幽明

叡山

平安人物志

古

八

釋梅岳

字俊玉号鐵若
余志光院中

吟松院

山田竜洲

字希溪号弄玉
四条富小路東

山田平馬

鑒古筆

菅原

字号
金座押小路南

大倉好舟

小林

字号
一条新町西

小林了可

清水

字号

清水了因

菅原

秀

字久長号不識菴
新町頭

武部了然

卷之中 畢

平安人物志

九

平安人物志 卷下

弄翰子編輯

醫家

各位異撰不
敢問優劣

源 需

字終吉号松亭
黒門之部額寺南

福井丹波守

同 晋

字貞吉号操園
前人男同居

同 近江守

源 德興

字伯益号旭峰
新町三条南

荻野河内守

高階經宣

字子順号沢園
路北堀場ヶ峯

高階安藝守

平安人物志

三

三

高階經由

字号
西替町御池北

同 美濃守

源 庭之

字士若号紫水
間之町夷川北

太田肥後守

同 成式

字号
前人男同居

同 出雲守

藤原有裕

字子輝号東園
堀町三条北

三角紀伊守

源 元敏

字号
鳥丸御池北

山科土佐守

(

賀茂成一

字号
元哲額寺御池東

藤木出羽守

同 成邦

字号
前人男同居

同 參河守

賀茂篤平

字号
鳥丸夷川北

藤木伊勢守

山科元晃

字耀卿号三嶋
御幸町二条北

仙壽院法眼

豐岡玄純

字君柄号壽山
中立賣新町西

敬勝院法眼

丹波恕安

字子的号東岸
小川今出川北

親康法眼

○

源 具訓

字号
御池通堀町

小林豐後介

平安人物志

三十一

源 隨

字有功号達所
元哲額寺黒門東

山本安房介

越智 博

字濟衆号怡庵丹
油小路出水北

百々大隅守

賀茂保之

字号
西陣伊佐町

岡本甲斐介

源 光通

字号
室町九太町北

伊良子主稅助

源 滿崇

字号
油小路九太町南

賀川若狹介

平 曄

字号
室町下長者町南

中山佐渡介

藤原實辰

字子星号活生洞
淨福寺今出川南

河原能登介

源 興隆	字昇平号東塘 甥系師高倉西	堤 薩摩介
杉山 信	字 号藤齋 鳥九三条北	杉山日向介
橘 致	字子達号東園 堀川堪木町南	山服道作
源 泰	字 号 中立賣小川西	福井駿助
高階經輔	字子正号芷園 画村	高階東軼
同 經	字祿 号枳園 御池東洞院東	同 清助
平安人物志	三三	
伴 質	字雲桂号錦水 室町二条南	秋吉雲桂
同 孚	字子和号 前人男	同 藤太
新宮 碩	号驅堅齋 室町夷川北	新宮涼庭
「窮理外科則	泰西瘦論	
梶 龍	号蘭齋又紅齋 盆座夷川北	小石元瑞
百々俊德	字克明号漢陰 鳥九二条南	百々内藏太
竹中 恭	字子讓号蒼庵 東洞院節小路北	竹中獻吉

同	字 号 錦小路鳥九東	同 秀四郎
大村重矩	字士準号藍川 衣棚下立賣北	大村文輔
鎌田昌弘	字 号 三条東洞院角	鎌田康吉
川越	故衡山先生之嗣 号泰華園六所坂町西	川越一郎
渋谷貞光	字子輝号禮廬以二郎 羊末長代教授泰華園	渋谷悰逸
和氣義啓	字鶴齋号桃塙 東洞院蛸染師南	小森縫殿助
平安人物志	三三	
蘭方樞機 病因精義	泰西方鑑	
和氣惟良	字 号 新町佛光寺南	淺井參河介
源 克淳	字 号 鳥九下立賣北	大町全計少允
宗岡行忠	字 号 東洞院夷川北	青木丹波介
藤原興仲	字 号蘭齋 大佛正面大川西	奥澤若挾介
源 之紀	字大禮号坦齋 富小路御池南	奥 常陸大掾
源 玄俊	字秀甫号乳足堂 綾小路室町西	今藤常陸大掾

○ 茅原 定

字叔同号虚舟
下立賣油小路東

茅原丈助

詩經名物集成
東藩日記
茅窓漫錄

村上 允

字迪夫号鶴舟
東洞院御池南

村上陽道

雨森正弘

号上親号栗軒
東洞院上条南

雨森良叔

森田義章

字俊民号染義齋
三条島九東

森田二郎

馬嶋

号小島
雷小路三条北

大樂

平安人物志

三五

平 益夫

字天放号堯臺
車座町押小路南

平津水太一郎

古訓医傳

解莊

○

白井惟德

字士恭号赤水
洛西士生

白井元藏

同 周善

字資卿号拙園
大宮高止北

同 元輔

安代 敬

字萬世号杏園
新町一条北

安代啟輔

丘本政德

字伯共号雲嶺
岩上綾小路南

丘本正吉

山厓 洪

字洪夫号渠陽
四糸高倉西

山厓周乙

丹波元鵬

字萬里号松隱
寺町綾小路南

中山安碩

武川守之

字恭榮号南齋
室町四糸南

武川幸順

三宅

字 号
大佛馬町

三宅

和氣 順

字 号
松原大黒町

鈴木可一郎

瀧原宋閑

号小竹葉舍
聖護院村

瀧原將監

源 天叙

字典公号春鹿
東洞院御池南

寺嶋榮作

平安人物志

三五

源 纓

字君清号龍庵
室町四糸北

山本静達

武部維則

字景行号石山
島九糸北

武部主鈴

源 陵

字有政号如水
元哲願寺十本東

淺野主計

金匱要略書

久野

字 号
堀町三条南

久野玄恭

服部廣業

字之勤号梵南
島九佛光寺南

服部慶順

山本世孺

出物産部

本川 篤	字子敬号蘭齋 蛸藥師柳馬場東	本川 主殿
日野	字号 東洞院四糸北	日野 昂哉
服部	字号 四條東洞院西	服部 厚謙
源 文煥	字子達号一貫齋 一貫町安原南	賀川 玄道
柴田	号 表屋町二糸北	柴田 養悅
惟孝一	号 佛光寺室町東	米山 檢校
吉 一	号 烏丸藥路南	土本 檢校
平安人物志		三五六
楠 一	号 上長者町室町西	村中 勾當
秀庵 一	号上古堂 新町丸太町北	市橋 勾當
物 產	不敢問優劣	
水野 廣葉	字士勤号皓山又 觀生堂實路藥路北	水野 源之進
山本 世孺	字仲直号亡羊 油小路五糸北	山本 永吉
同 篤慶	字仲錫号裕堂 前八男同居	同 沈三郎
濱嶋 清平	再出	

藤原 成允	字寬甫号鈍齋 大宮七糸北	田中 寬大夫
越智 崧	字雲鉏号灌園 烏丸二條南	百々 三郎
梯 謙	字子益号梨亭 烏丸御池南	梯 晋造
杉山 久	字禮卿号靖齋 烏丸三糸北	杉山 恭藏
沢村 滿籌	字号 七糸大宮	沢村 重兵衛
平 延年	字号 新町武者小路北	山澄 静安
若村 基	字丁土号拙霞 揚梅醒井東	若村 基三郎
平安人物志		三五六
山屋 繼	字述夫号快雪 四糸高倉西	山屋 繼一郎
藤 蔓	字丈号刺溪	加藤 啓造
奥 之紀	再出	
藤 尚賢	字則甫号魯齋 堀町長川北	内藤 主馬
古方 藥性辨		
中原 章達	再出	
小森 義啓	再出	

新宮涼庭 再出

奥澤蘭雞 再出

種藝 信筆揭出請
莫問後先

源光通 再出

平幸胤 字号
下岡崎 子葉安藝守

平安人物志 三十八

同正胤 字遠清号子源
前人男同居 同陸奥守

岡本善祐 字号
新田村 出本全芳

岩佐義竹 字号
百万遍屋敷 岩佐政之進

井口貞幹 字号
上長者町室町西 井口久七郎

數 非以巧拙分次第

三木高 字吉号
寺岡四糸北 三木宗右衛門

榎淨門 字子春号南郊
東寺山吹町 榎豐後法照

算法圓理解 照闇算法

同淨壽 字士德号松陰堂
前人男 榎大輔法眼

沢田重定 字号
姉小路妹止子 沢田力右衛門

中島晋 字康族号鵬渾
佛具屋町魚棚北 中嶋音三郎

加藤誠之 字子固号均奇
鼓屋町三条南 加藤政一助

樋口房室 字子善号東湖
錦小路西洞院東 樋口貞五郎

平安人物志 三十九

○算數
玄機

下村政良 字惟選号謙斎
室町九太町北 下村甚之丞

茶屋實壽 字号
柳馬場四糸南 茶室金四郎

土田冲 字号
四糸室町西 土田元一

戸田通元 字号
東洞院四糸南 戸田久左衛門

八木爲貞 号成器軒
洛西壬生 八木成器

同 爲次

号資始軒
前人男

同 平八郎

南部正賀

号觀東堂
洛西壬生

南部與左衛門

藤村信安

号南峰
洛東岡崎村

藤村健次郎

河崎邦矩

号吉更舍
車屋町九太町南

河崎善兵衛

箕田一

号
御影堂地内

箕田源二

三宅到榮

号竹葉軒
柳馬場竹屋町北

三宅又兵衛

平安人物志

易學

松井稀星

字淺光号
大佛境内

松井舍人

藤 尚賢

字則南号魯齋
堀町夷川北

文雅

列次非微甲乙

穗積尚義

字
城西

鈴木

其

伊 止邦

字時用号畔山
二條馬場屋敷

伊黑甚右衛門

藤原剛寬

号
城西

松井 某

源 真足

号青峰
片岡町

佐々木壽六

山田道貞

字
三條柳馬場

山田咸輔

教 誠

号
北野

梅 椿坊

平 椿孫

号齊堂野夫
城西

平塚 某

堀 經信

字
寺町六角南

小川源右衛門

平安人物志

池田東籬

再出

所著諸書百余篇不遺技藝

岸 岱

再出

藤原明忠

号春影又藤井
知恩院袋町

藤井上總大掾

素 廣濟

号
上御灵前

林 木工助

足田千益

号
東寺

足田右近

專 明

号古芳館
六角堂

池 之 坊

太吾多泰山 再出

木村熊櫟 号三光亭
新町三条北

木村清右衛門

岡本宣顯 号南岡
洛西神足村

岡本弥兵衛

同 宣盛 号北阜
前入弟

同 三郎兵衛

釋 阿 号
圓山

也 阿 弥

鈴鹿正路 号松亭
吉田

鈴鹿主殿

熊谷直恭 号陽居堂
姊小路寺町西

熊谷久右衛門

平安人物志

四十二

殿村 号
聖護院村

殿村源兵衛

釋 良順 出衆部

福田實楯 字 号
高止東洞院東

福田九兵衛

藤原重高 号夏北
堀町錦小路北

梅川吉平

藤原鷹信 号冷水亭
寺町五条北

近藤健次郎

庄村一利 字貞甫号茂中
蔭屋町中幸丸

庄村新次郎

釋 知準 号可奉
姊小路妹止子

前榮正寺

木田千賀磨 号
鉢屋町松原南 木田亥右衛門

橘 正辰 字 号優學齋
西六条 嶋田左衛門權太尉

不破松亨 城西 不破 某

下田蓬谷 城西 下田 某

堀江長裕 号君水樓
堀川御池南 堀江源兵衛

源 順義 号恋亭又落扮舍
烏丸一条南 出 和泉守

泰 真雄 字 号茂山陰
知恩院袋町 松室近江守

平安人物志

四十三

竹中 亨 字子貞号梅逸
東洞院蛸薬師北 竹中久兵衛

村瀬心之 字勘作号五猪
烏丸蛸薬師南 村瀬勘作

渋谷蟬廬 再出

服山梅屋 城西 服山 某

服部 字 号
錦小路室町西 服部五郎左衛門

二階堂淳昌 字文種号祥齋
烏丸御池北 二階堂織部

後藤常友 字伯典号鳳齋
堀町二条南 後藤言中

物部維連

号量科
富小路四条北

御園法眼

森田

号春卿
狸橋通古門前北

森田相模

釋正順

字如王号岱童
知恩院袋町

伴豐前

有川

号梅隱
一条堀川

有川利彦門

野山靖

字渾純号
三条新町東

野山千秣

高田攀

字君直号春塘
上州藩

高田隆助

源高就

号威卿
油小路二条南

三井某

平安人物志

四十四

藤田章之

字号入敬齋
又樂山西六条

藤田大等

山田

城西
号神園

山田某

賜目翼

字季雲号西阜
小川二条北

賜目長兵衛

山路屠龍

再出

源義休

字子超号翠松園
六角富小路西

四方政兵衛

山本

号戲蝶園花栖
油小路六角南

山本源兵衛

浦井隆屋

号有國又信忠堂
中主賣堀川東

浦井五一郎

砂川柳系

再出

中川

号余米
城西

中川某

藤原実備

字文進号實齋
妹土子

小寺正藏

源宗岡

字号源雪
室町下幸賣北

永井某

源高英

字号
油小路御池北

三井某

源高福

字子成号聽泉
同所

三井某

吉岡

城西

吉岡某

平安人物志

四十五

今藤玄俊

再出

野村茂俊

号骨月齋
四条東洞院西

野村今兵衛

片山

字号稔角
油小路山前通北

片山長兵衛

○

林 久敬

号砂長又得閑斎
錦小路堰町東

林 八兵衛

清水長義

号蘭丸又佩舎園
夷川寺町

清水万兵衛

桂 有彰

再出

嶋 真美

号菊之舎
両替町三条北

嶋田八郎左衛門

長 數災

号白菊亭
六角島丸西

長谷川仙助

藤 頼國

号尊照
衣棚二条

階藤治右衛門

平安人物志

四十六

○

成田蒼虬

号南亭
下川京

成田無葬

築瀬千崖

号色薰堂
双林寺中

築瀬冷齋

笹山吳厓

号夜半亭又香舟
御池衣棚東

笹山元吉

北村朝陽

号俳仙堂
富小路姉小路北

北村

北川棋價

号枯魚堂
四条富小路西

北川万藏

荒木万頼

号花神窓
下立賣室町西

荒木

律学 律美

弓 武

号
新町武者小路北

弓削刑部

○

平 宗城

号天然堂
谷座三条北

遠藤禮藏

平安人物志

四十七

釋 宗淵

号
大京東山

普賢院

樂 列次非傲甲乙

今大路源定

号
聖護院村

今大路 某

山本宗明

号
聖護院村

山本 某

竹内永演

号
一条北今止子

竹内帶刀

高畑勝之

号
寺町三条北

高畑敬吾

鎌田義則

号
柳馬場二条南

鎌田三郎大夫

登美子	笙 琴	高畑氏室
秋良順	姑 因幡堂	西坊
明樂	唐韻	
雨森	再出	
小野勝候	鳥丸二条南	小野伊織
井関重信	字好古 高倉魚棚南	井関太仲
平安人物志	樂 明樂	四八
山本定顯	字德夫号鯉泉 御幸町佛光寺北	山本鯉泉
平語		
藤井雪堂	再出	
星野仲明	字欽 佛光寺鳥丸東	星野主殿
河邑琦鳳	再出	
宮股景輔	再出	
山田道貞	再出	

真子		藤井氏室
源爲善	号 二条東洞院西	簀内幸次郎
源政富	号 押小路高倉東	簀内宗右衛門
牧慇齋	再出	
七絃琴		
釋玉樹	再出	
平安人物志	平語 七絃	四九
左登子	再出	
弓武	再出	
第		
登世子	押小路琴屋町	海傳氏
松峯子	東洞院二条北	安村氏
中村永壽	号拂雲斎 四条鳥丸東	中村周藏
光子	登世子女	海傳氏

碁

加藤正明

号 百万遍屋敷

加藤主税

河北房種

再出

合原正甫

号 衣棚二条北

合原正甫

田俊

再出

秋徳圓

字至深 丸太町河東

摩加圓坊

村岡定勝

上男羽

村岡林右衛門

平安人物志

鞠

山科幸成

高倉六角北

山科東藏

桑原正義

号 烏丸御池北

桑原

中井武成

号 柳馬場押小路南

中井正次右衛門

同武和

号 前入男

同正太郎

嶋本廣褒

号 同所

島本三郎九郎

奇工

望月吉壽

号 精保堂 富小路四条南

木地利兵衛

戸田

号 飛涼舟 寺町五条北

戸田理兵衛

良工

片岡安道

号 岐學 東洞院松原

片岡友輔

宮川長造

号 延壽軒 知恩院古門前

宮川蝶三郎

田村完演

号 灌園 烏丸御池北

田村三郎助

平安人物志

四方龍文

号 龍文堂 富小路四条北

四方安之助

高橋仁阿

号 道八又松風亭 五条坂

法橋道八

藤知春

号 梅可堂 四条榎屋町西

畑梅可

大月光弘

号 柳馬場夷川南

大月喜八

皆山光久

号 二条小川

皆山直市

澤光則

号 車屋町竹屋町北

澤甚太郎

竹千尋

号 竹舟 御池小川西

竹内武藏

陶

樂也

号九峰
栗田

陶師燧翁

合

藤原信美

号勝庵又飛笑
栗田

阪田東二

合

清水

号
清水坂

清水六兵衛

刀鍛

駒井慶任

号
東寺甲町

駒井安藝

細奇工

合 刀雕

上嶋景利

号
新町御池南

上嶋十吉

小嶋正名

字順夫号茶園
六角高倉東

小嶋形嶺

平安人物志

細奇

十一

合

登美子

再出

合 書細

別所良顯

字之敏号和園
西替町二条南

別所雄助

合

高橋逸

字至德号藍園
柳馬場佛光寺南

高橋市三郎

附錄

女流 位置不問甲乙

正壽尼 哥 消息文 向屋町 柏舎後室

寛子 城西 哥 深谷氏室

柳子 哥 不明門魚棚北 田中氏室

久能子 哥 新町錦小路北 木村氏母

節花 哥 旧名射代子 室町四条南 志村氏母

平安人物志 女流 五十三

倭名子 哥書 富小路竹屋町南 一井氏

綾子 医哥 新町綾小路南 山本氏

保子 哥 東洞院高辻北 竹村氏室

道子 哥書 下立賣衣棚西

期月尼 哥 永觀堂前 松月菴

婦龙子 書俳 号普翠 西洞院四条南 柴田氏母

登美子 哥 榎木町西洞院西 木村氏母

宣子 父雅 西六条 下橋氏母

貞幸尼 全 西六条 片山氏母

信性尼 全 東寺 松浦氏母

蓮月尼 歌連 寓居千富田氏 大田垣氏

平安人物志 辛四

細流 只在卷名細流 何書品第

釋 乙雲 西庄 三宮寺

釋 惠友 梅尾

釋 大光 智山

台 釋

釋 貫海 比叡

釋 愚菴 全

禪

釋 實了 字實嚴 田中村

釋 玄洲 天童 雲居庵

釋 大觀 南禪

釋 立道 号致道 洛西 正定院

釋 法然院

釋 等壽寺

釋 人澄 西田中川原 安樂寺

平安人物志

卷五

五

釋 亮範 西山 光明寺

釋 義聞 洛東 西光寺

釋 自謙 瑞泉寺

釋 玄肅 光林寺

釋 廓忍 明覺寺

釋 墨龍 著書 太極圖說 御覽 却嫌編 金鈞卯

萬行寺

釋 杳旭 照見寺

淨

而

東門

釋 淨眼 光明寺

釋 與隆 正念寺隱居

釋 僧朗 光隆身 正念寺

釋 大含 号鴻雪 雲華院

釋 德龍 香樹院

釋 圓解 華香院

釋 靈毗 開悟院

平安人物志

卷六

釋 圓龍 覺了寺

釋 澄玄 大津 唯信寺

釋 日運 字智耀号妙用 本園寺

釋 日玄 字火象号玄海 本能寺

釋 日行 妙顯寺

釋 知準 再出 榮正寺隱居

台 象而

釋 摩訶三毒

追加

聞人

荒井公廉

字兼平号鳴門
淀炭藩

荒井半藏

中村

号願鳳又三樓
新町二条南

中村九兵衛

岡本

号
東寺山吹町

岡本一學

井上宗延

号桂窓庵
室町下三賣北

井上治兵衛

平安人物志

聞人

五七

安村親民

号服清
衣棚押小路南

安村貞次

岡田勝卓

字孟博号柳水
今在丹及

岡田

山田敬直

字其正号愷菴
城南八幡

山田九一

長谷川管緒

号摘舍
今在泉及

長谷川三折

中川 故

字其德号壺山
今在浪華

中川修亭

平田止水

洛北幡枝隱士

平田頼母

觀音經和詮抄
同世三時義記
會 一休指國物語會

源 基定

前人從父弟

出

岡本通實

字天民号孝齊
増養師東洞院東

岡本忠大

平安人物志

五六

○近國之部

平井庸慎

字子謹号舟山
丹州園部

平井守善

名家方選三篇
名家方選初續三刻
訓家勸孝錄前注

昭屋 孝

字久卿号恕亭
全

昭屋二郎

歷史綱目
字原

奥平魯人

字西愚号翁山
全龜山

奥平甚兵衛

輕森野楊

号半月亭
今

輕森

中川邊仙	西村公喬	岡野恒	林葆光	堀爲信	邊求放	瀧世儵	平安人物志	森精	平无咎	藤原則名	滕元美	長紳	林維悅	奥村台
字局父号華岳 今突抜丁	字仲迁号禽江 今花芝丁	字公耻号璞巷 今西御門丁	字環中号梅昂 今	字李春号	字心甫号笠峰 橋本町	字子敬号清經 南半田町		字伯順号肘山 高天市町	字道遠号松巢 椿井町	字子守町	字璽父号石亭 柳生藩	字仲書号玉圃 南都半田丁	字文剛号謙堂	号 江州膳所
中川華岳	西村禽江	岡野松壽	小林梅昂	堀朔堂	渡邊	滝長藏	卒	森策馬	山中左京	森田越後介	兒玉銀兵衛	長谷嶺吉	岡林謙次	奥村菅次

儒 全 茶 敬 工 文人 藝 儒 醫 詩 文 歌

祝部希烈

号
江及坂本

生源寺 某

黒田

字
膳所侯藩
号玄亭

黒田五平治

上原

字
大津
号

上原 某

今中

字
江州高島郡海津
号九華

今中

釋

号
同
浅井郡新井

圓 光 寺

辻

号
同
國友

辻 宗 範

國友

号
同
呀

國友藤平

平安人物志

六士

祝部成節

字
同
士貞号秋水
坂本社人

樹下阿波守

中村

号
同
栗園
江及水口

中村和藏

加藤如重

号
同
江及清水
江及清水

加藤五兵衛

古河恒齋

字
同
順信号鶴堂
同大津

古河立祐

榑園

字
同
公恭号竹嶼
同大溝

横田秋藏

藤原孝美

号
同
萬載洞
南都飛鳥川邊

松森竹亭

釋 純道

号
同
南俊
南都佐保山

眉間寺

[illegible]

平安人物志

Handwritten musical notation on five-line staves, featuring various rhythmic values and melodic lines.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise, written on aged paper with horizontal ruling lines. The text is arranged in several lines, with some words written in larger, more decorative script (possibly Thuluth or similar) and others in smaller, more practical script. The ink is dark, and the paper shows signs of wear and discoloration.

平定人物志

大塚九と少り夏

修徳乃徳主ふふ

尚書堂藏版書目唐刻和刻古法帖賣買正舖

晉王羲之官奴帖 一帖蘇東坡天際帖 行書一帖

唐人宗法帖 帖同乳母帖 行書一帖

星鳳樓帖 自虞至唐十二帖董其昌墨妙 行書一帖

蘇東坡集帖 行書一帖同詩帖 行書一帖

同赤壁賦 行書一帖同十七帖 行書一帖

同定公法帖 行書一帖同般若心經 行書一帖

東坡滿庭芳帖 大字行書一帖同琵琶引 行書一帖

董其昌陰符經 行書一帖子昂天馬賦 行書一帖

同晚晴賦 行書一帖同岬庵詩 行書一帖

同神仙篇 行書一帖同洛神賦 行書一帖

同將軍帖 行書一帖董其昌畫錦堂記 大字行書一帖

同寶鼎歌 行書一帖同龍虎帖 行書一帖

宋蘇朱法帖 東坡五帖古法帖流筆新製數品

宋元章畫鶴之碑 一帖五經 行書一帖

同無為章 行書一帖 行書一帖 七冊

晉王羲之大雅集 一帖宋東坡畫記 正書一帖

同行書十七帖 正書一帖同席丘詩 正書一帖

同王獻之驚群帖 正書一帖宋元章十紙說 正書一帖

漢蔡邕郭有道碑 正書一帖同少年行帖 正書一帖

唐懷素客舍帖 正書一帖同尺牘九帖 正書一帖

唐歐陽詢化度寺碑 正書一帖趙子昂赤壁賦 正書一帖

同離騷帖 一帖同滕王閣序 正書一帖

唐李邕神廟碑 一帖同白雲齊法帖 正書一帖

祝枝山君王帖 正書一帖文徵明醉翁亭記 正書一帖

同秋真八首 正書一帖大雅堂八景詩帖 正書一帖

道風海陽帖 正書一帖溫疫論解 宋先生註解 五冊

同秋菽帖 正書一帖校書字引尚書堂教小本

行成卿琵琶行 正書一帖俳諧其角七部集 二冊

同胡旋女 正書一帖同葭勺題林抄 五冊

三韻苑三十六歌仙 正書一帖同新題林抄 五冊

尊圓親王體以呂波 正書一帖洛陽十三靈驗記 一冊

王羲之鵞群帖 大字草書 正刻 一帖 子昂龍巖 草書 正刻 一帖

同 般若心經 人字草書 正刻 一帖 同龍興寺牌 楷書 正刻 一帖

同 筆陳圖 楷書 正刻 一帖 同海棠詩 大字草書 正刻 一帖

歐陽詢行書帖 楷書 正刻 一帖 同行書十字文 大字草書 正刻 一帖

張旭不記序 楷書 正刻 一帖 董其昌日飲帖 大字草書 正刻 一帖

懷素聖母章 草書 大字 正刻 一帖 同 東方帖 大字草書 正刻 一帖

東坡醉翁亭記 草書大字 正刻 一帖 同 家訓章 行書 正刻 一帖

同 表忠觀碑 行書 正刻 一帖 特建帖 行書 正刻 一帖

東坡黃庭帖 行書 正刻 一帖 米元章希丘詩帖 行書 正刻 一帖

文徵明石文帖 大字行書 正刻 一帖 趙子昂玄武殿碑 行書 正刻 一帖

草訣百韻歌 無刻道會 正刻 一帖 同胡笳十八拍 行書 正刻 一帖

中庸古注 漢鄭玄註 正刻 一帖 文徵明言懷帖 大字 正刻 一帖

婦人方彙 正刻 一帖 董其昌洛神賦 楷書 正刻 一帖

同 方考 正刻 一帖 皇帝帖 楷書 正刻 一帖

大雅堂指畫十字文 正刻 一帖 正陽帖 行書 正刻 一帖

無幻艸變百韻 正刻 一帖 卜居帖 行書 正刻 一帖

鐘繇十字文 正刻 一帖 顏魯公神道碑 正刻 無刻 一帖

王獻之漆帖 正刻 一帖 智永白龍千字文 正刻 一帖

晉王羲之草書帖 正刻 一帖 米元章墨妙 正刻 一帖

虞世南行草帖 正刻 一帖 同 繼錦堂法帖 正刻 一帖

歐陽詢溫公碑 正刻 一帖 同 水勢帖 正刻 一帖

同 十首法帖 正刻 一帖 同 長年帖 正刻 一帖

唐艸聖三大家帖 懷素 張旭 李白 正刻 一帖 同 獅子贊 大字 正刻 一帖

柳公權玄秘塔碑 正刻 一帖 同 天馬賦 中字 正刻 一帖

東坡大江東帖 行書 正刻 一帖 董其昌唐絕帖 行書 正刻 一帖

趙子昂浣花帖 行書 正刻 一帖 文徵明十字文 行書 正刻 一帖

同 艸庵詩 正刻 一帖 同 牛門朝見帖 中字 正刻 一帖

同 蘭亭記 正刻 一帖 同 詩帖 大字 正刻 一帖

草彙 自漢至明諸名家之草書 正刻 一帖 二王法帖 正刻 一帖

萬象千字文 篆刻 篆書 正刻 一帖 枝山草沒百韻 正刻 一帖

篆書唐詩選五言絕句 正刻 一帖 龍州廬秋月帖 正刻 一帖

同 七言絕句 正刻 一帖 龍州廬秋月帖 正刻 一帖

[illegible]

醫方口尖頭書

北史及子

三冊西漢余稿

釋大淵

三冊

千金方藥註

松岡文遠

四冊同詩之部

同

二冊

食療正要

同

四冊大學

東山堂

冊

廣參品

同

一冊相劍正傳

近藤堂

冊

怡顏齋介品

同

二冊古今和歌集

小本

冊

古狀捕書

增補新刻

一冊同卷懷形

漢書

冊

本草原始

同

五冊同解

官正字

冊

俗字彙

中世字

二冊增補以呂波韻

寸亦

冊

李邕雲麾將軍帖

一帖歐陽詢滕王閣序

一帖

董其昌華林帖

行書

一帖近藤春夜帖

八分書

一帖

了昂香雪堂法帖

行書

一帖御家慶文帖

藤見先生

三帖

同前赤壁賦

行書

一帖王元美尺牘

同

冊

東坡西湖詩帖

同

一帖拋入花簿

十葉流

二冊

同歸去來詩帖

同

一帖同後篇

同

三冊

吳立綱古千字文

行書

一帖同三篇

東山

冊

葉元章鳴玉館法帖

同

一帖同精微

同

冊

東坡三條通判馬瑒書

書林

堺屋仁氏御板

古法帖流筆新製品彙

宣志

諸家細字

一技價銀五元

同

東坡一瀉

一技價銀五元

綴文

諸家習筆

一技價銀六元

生華

諸家消息

一技價銀九元

同

東坡一瀉

一技價銀九元

吐虹

諸家清書

一技價銀壹元

天朗

諸家法書

一技價銀一五五分

龍鬚友

諸家二行

一技價銀二八分

貯雲

諸家一行

一技價銀四三分

同木軸

同上

一技價銀六文目

同大

諸家大字

一技價銀十二文

同大

諸家一字書

一技價金壹步二朱

同大

諸家一字書

一技價金壹步二朱

訪曰敝書雖不換筆用元筆而不能成書以精筆而可

到遠志余年未好古法帖因茲諸家之可應選筆謀而

製之好士之君子庶幾知駕賜味覽云書博尚書堂藏

浪華人物志

天保九年戌五月

改刻

御池通高倉東入

竹簡堂 榑屋利助

三条通榑馬場角

京都書肆

尚書堂 坂屋仁兵衛

赤心居士 著

南山小譜

舊刊本

據舊刊本影印

南山譜序

みづからよの山よき
たまたま世にうけ
三代のことがの事のははば
たれとたれとやうきと
まうたまうたまうのま
ひもすくすくたまうの世
△すくすくたまう 考へ并へ
る書いてたまうたまうた
まうたまうたまうた
たまうたまうたまうた
のひびく人このちすた

序

たまたまたまたま
りたり、わがま環山梯の
そとたまたまたまたま
しと考へたまたまのひ
すくすくたまたまたまた
れくすくたまたまたまた
たまたまたまたまたまた
三つのままたまたまた
ものままたまたまたま
ままたまたまたまたまた
よりままたまたまたま
まのままたまたまたま

子うたまたまそのひ
るまがりは系とては
に族のままたまたまた
わくままたまたまたま
のひて南山譜と名
あかうたまたまたまた
と考へたまたまたまた
るべたまたまたまたま
のままたまたまたま
得ままたまたまたま
てままたまたまたま
しとんと、赤心居士

序

南山小譜 目錄

後醍醐天皇并皇子皇女譜 十

後村上天皇并皇子皇女譜 十

後龜山天皇并皇子皇女譜 十

後醍醐天皇三世三世皇孫譜 十

後村上天皇三世三世皇孫譜 十

後龜山天皇三世三世皇孫譜 十

御猶子親王法親王譜 十

以上南朝三代皇親等之譜

諸臣譜

攝關家 藤原氏

近衛殿 十
二條殿 十

一條殿 十

諸家

源氏

北畠 十

中院 十

土御門 十

大河内 十

公泉 十

千種 十

龜谷 十

中院 十

藤原氏

洞院 十

冷泉 十

三條 十

今出川 十

大炊御門 十

吉田 十

万里小路 十

春日 十

唐橋 十

木造 十

木造 十

六條 十

中院 十

一條 十

堀川 十

同流 十

賀茂 十

西園寺 十

花山院 十

九條 十

中御門 十

堀川 十

葉室 十

二條 十

五條 十

滋野井 十

坊門 十

日野 十

中御門 十

中御門 十

法性寺 十

園 十

平氏

唐橋 十

烏丸 十

大中臣氏

紀氏

紀氏

紀伊國造 十

津守氏

四條 十

御子左 十

阿野 十

近衛 十

勸修寺 十

京極 十

一條 十

甘露寺 十

九條 十

三條 十

葉室 十

唐橋 十

烏丸 十

紀氏

紀氏

紀伊國造 十

津守氏

度會氏

村松 十

荒木田氏

清原氏

葉室 十

父祖未詳人々

九平六人 十

武士

源氏

新田 十

大館 十

堀口 十

大嶋 十

服屋 十

大館 十

一井 十

鳥山 十

大井田 甲中 里見 世良田 江田 岩松 桃井 吉見 土岐 足助 村上 名和 渡辺 平氏 色川 千葉 相馬 大多和 江戸 南条 津久井 藤原氏 甲中 里見 江田 岩松 桃井 吉見 石川 足助 足助 名和 二見 坂戸 千葉 相馬 河嶋 花岡 津久井

菊池 結城 小山 二階堂 井伊 天野 宇都宮 狩野 少貳 越智氏 河野 得能 得能 三宅氏 和田 橘氏 楠木 楠木 結城 益戸 小山 信夫 足立 宇都宮 狩野 淡川 河野 土居 得能 児嶋

楠木 和田 和野 橋本 橋本 神宮寺 氏姓未詳人々 櫻山 萩野 阿房 一条 石黒 田村 妻鹿 白川 畑 僧徒 東南院 小野 護持院 淨土寺 大塔 太田 匹地 津葉 小保 高松 今木 鹿子木 篠塚 木寺 武蔵房 法勝寺 妙光寺 理教坊 殿法印 安居院 道場坊 大輔房 治部房 習禪房 光林房 金蓮房 岡本房 木寺 武蔵房 護正院 八尾 成願坊 帥法眼 侍從房 奈良法師 勝行房 兼実房 大夫房 桂林房 中坊 参河房 吉水院

後醍醐天皇

御諱尊治

後宇多帝第二皇子

御母談天門院藤原忠子

正應元年十月二日降誕

正安四年六月十六日立親王

嘉元元年十二月廿日元服

同日叙三品

同二年三月廿日任太宰帥

德治二年三月廿二日遷中務卿

同三年九月十九日立皇太子

文保二年二月廿六日受禪

同三年三月廿九日即位

同四年十一月廿日太嘗會

元弘元年八月廿一日夜出皇居

幸南都後遷御笠置

同二年三月七日幸隱岐嶋

同三年閏二月廿四日密出隱岐嶋

幸伯耆國舟上山

同年六月四日還幸京都

同月五日入御三条富小路殿

延元元年十二月廿二日夜密出花山

院以三神畀遷幸吉野

同四年八月十五日讓位於皇太子

一宮

同月十六日崩壽五十二
同年十月廿三日葬于吉野郡塔
尾山陵北向

尊良親王

母贈從三位藤原為子權大納言為世卿女

應長元年 月 日生

正中二年 月 日元服

二品 中務卿

元弘元年八月從帝入笠置遷入河內國東条城

同年十月二日自出就囚

同二年三月八日被配土佐國畑

同三年八月既洛

同年九月廿日叙一品

延元元年十月奉太子入北國

同二年三月六日於越前國金崎城自殺年二十七

世良親王

母遊義門院一条參議左中將實俊卿女

同四年八月十五日讓位於皇太子

信濃宮

正和元年 月 日生

嘉曆元年 月 日元服

二品 上野太守 太宰帥

元德二年九月十七日薨年十九

建武三年九月十五日贈一品

宗良親王

母同尊良親王

正和二年 月 日生

正中三年四月為妙法院性寺僧

正資法名尊澄

元德二年十二月十四日叙三品補天台座主

元弘元年八月與弟大塔宮率三千衆從應官軍

同二年三月八日被配讚岐國

同三年八月率四國兵既洛

建武三年三月十六日叙二品還補天台座主

延元元年六月 日叙一品

同二年還俗任中務卿

改名宗良

正平七年閏二月六日任征東大將軍

大塔宮

天授三年十一月於長谷寺出家

弘和元年十月撰新葉和歌集

奉覽被擬勅撰集

元中二年八月十七日薨于遠江國

井伊谷年七十三号冷港寺

護良親王

母氏部卿三位源親子權大納言

源師親卿女

正和四年 月 日生

嘉曆元年九月為梨本兼鎮法親王資法名尊雲

同二年十二月六日親王宣下叙三品補天台座主

同三年十月八日為大塔門跡

元德二年三月廿七日叙二品

同年十二月 日辭座主

元弘元年八月與尊澄法親王同志率山門徒應官軍

同年入紀伊國十津川還俗

改名尊邦後改護良

兵部卿式部卿

同三年七月廿三日任征東大將軍

建武元年十月廿日被幽常磐井

聖護院宮	越中宮
殿 同年十月十五日被配親國鎌倉 同年七月廿三日為足利直義 家人淵忍義博被害年廿八 靜尊法親王 母同世良親王 聖護院門跡覺助法親王資 始名惠尊又改尊珍後改今名 嘉慶三年正月廿日立親王 同月卅日准三后宣下 元德三年十二月叙三品補三井長 吏三山檢校 元弘二年三月被配但馬國 同三年四月率但馬國兵應宣軍 建武二年三月廿六日叙三品	恒性法親王 母理子內親王龜山帝女 大覺寺性勝法親王資 元弘二年三月九月被配越中國 同三年二月十九日為名越貞持 被害

花園宮	前坊
滿良親王 母中納言典侍藤親子中納言 宗親卿女 元亨三年 月 日生 延元元年入尾張國波豆埜城 同三年入土佐國 貞國元年於建仁寺出家 法名無丈元遷 同四年渡海入于元國到福州 正平五年皈朝住筑前國博多 石城山後移住遠江國興山 元中二年創建深奧山方廣寺 同七年閏三月廿二日寂年六八	恒良親王 母新待賢門院藤簾子贈左 大臣公廣女 正中元年 月 日生 元弘元年被幽六波羅詠歌 建武元年正月廿三日立皇太子 延元元年十月行啓于北國 同三年三月六日金崎城落七日為 足利高經所擒入京

將軍宮	醍醐宮
成良親王 母同恒良親王 正中二年 月 日生 元弘三年十月八日元服叙四品 任上野太守 建武元年十二月補征夷大將軍 入東國 延元元年十月足利尊氏私立光 明院為太子立此親王為太子 同年十二月廿六日廢太子位 同三年四月 <small>或作廿一日</small> 中鴉毒薨 年十四	泉尊法親王 母少納言內侍贈左大臣隆實女 始名尊直佳勸修寺東南院 任大僧都 貞國 年 月 日親王宣下

大聖院宮	後村上院	鎮西宮
法仁法親王 母大納言三位局從三位為道卿 之女 正中二年 月 日生 建武元年 月 日立親王 名躬良 <small>或作良</small> 延元三年十二月廿八日得度 入仁和寺大聖院 法名法仁 正平六年二月廿二日直叙三品 補六勝寺檢校東寺長者 同七年十月廿五日薨年廿八	義良親王 後改義良後村上天皇是也 傳見于後村上天皇系下	懷良親王 母同法仁法親王 延元三年七月入東國於伊豆崎 遇暴風漂著四國 貞國元年三月任征西大將軍移

河	宮院兼一	宮川白
尊性法親王	玄圓法親王 母從二位守子左大臣藤原泰公女 一乘院覺乘大僧正資 二品 貞福寺別當 法務 早世	行肥後國八代郡高田 正平七年十月叙二品 子時式部 文中三年十月叙一品 元中五年三月十六日薨于高田 年六 同年月 日葬于肥後國八代郡 宮地村麓山悟真寺 聖助法親王 母少將內侍大藏卿菅原在仲卿女 聖護院靜尊法親王資 三井長吏三山檢校 新熊野別當 後述世

院門政宣	宮院法妙	宮內
惟子內親王 母後京極院藤原太子太政大臣 實兼公女 元應元年六月廿六日內親王宣下 同年十月廿八日叙一品 元德三年十二月十九日為齋宮 同三年正月十日准三后	最惠法親王 母同玄田法親王 妙法院 建德元年十月 日叙 皇子 母昭訓門院近衛局 早世	母同護良親王 報恩寺尊智法親王資 住河內國龍泉寺 延元四年 月 日親王宣下 貞觀二年 月 日叙三品

宮齋前
元弘元年八月十三日止齋宮 同三年十月為先嚴院妻后 同三年正月十七日北朝立為中宮 建武三年二月日院号宣政門院 貞觀元年五月廿九日濟出光嚴上 皇宮入保安寺為尼年廿六 祥子內親王 母同後村上帝 元弘三年十二月廿八日為齋宮 依兵乱事不遂群行而止 延元元年十月准三后 後入保安寺為尼 妙子內親王 母同護良親王 今林尼衆 依子內親王 母同尊良親王 後入嵯峨今林為尼号聲尼 瓊子內親王

母同尊良親王 元弘三年 月 日為尼 今林尼衆号聰尼 皇女 母同世良親王 今林尼衆 皇女 母遊義門院左衛門督局中納言 為忠卿女 今林尼衆 皇女 母同尊良親王 皇子內親王 母後宇多院權中納言局右大臣 藤公泰公女 皇女 母未詳 鎌倉松岡東慶寺五世住持 号用堂和尚	六
--	---

應永三年八月八日已刻寂

皇女

母左衛門督局右中將基時朝臣女

皇女

母民部卿局為閑白基嗣公室後離別為尼

皇女

母贈從位藤實子左大臣實雄

公女
早世

瑜子內親王

母大納言局大納言藤公敏之女

皇女

母坊門局右大弁清忠女

幸子內親王

母新室町院瑜子內親王後伏見

帝之女

皇女

母同法仁法親王

皇女

母左馬權頭貞義女
賜吉永院法印宗信生尊壽光

以上後醍醐天皇皇子皇女也

後村上天皇

御諱義良 始憲良

後醍醐天皇第十二皇子

御母新待賢門院藤原藤子

嘉曆三年九月 日降誕

元弘三年十月一日下向陸奥國

鎮守府將軍源顯家供奉之

建武元年六月 日立親王在國

延元元年正月十四日上洛

同年二月廿六日元服

同日叙三品任陸奥太守

同年三月廿四日下向于任國

同年二月廿八日飯吉野皇弟

同年三月廿日叙三品

同年閏七月廿五日更詔令下向

陸奥國鎮守府將軍源顯信

品入道親房等從之八月廿五日

癸卯九月十日於伊豆崎邊暴

風船漂著伊勢國篠嶋

同四年三月 日飯吉野皇居

同月四日立皇太子

同年八月十五日受禪

同年十月三日即位

同五年四月廿八日改元興國

同年十月十七日大嘗會

貞和七年十二月八日改元正平

正平三年正月六日出金峰山皇

居迂御天川與元太後改字賀

名生

正平廿三年三月九日讓位

同月十日崩於河內國觀心寺

行宮壽壽四十一歲云於佳言行宮

同年四月廿日葬于河內國錦部

郡檜尾山陵

後龜山院 長慶院

成親王

母嘉喜門院藤原勝子福恩寺

閑白內大臣經家女

後龜山院是也傳見于下條

成親王

母同後龜山院

正平廿三年三月 日立皇太弟

後進太上天皇号奉極長慶院

居紀伊國玉川里

成親王

母大藏卿局

文中三年正月 日叙三品任太宰

帥 後任式部卿

元中九年十月 日薨

法名梅陰祐常

成親王

母同後龜山院

正平十五年 月 日生于佳言

三品 太宰帥

建德二年九月下向于鎮西

護性院宮		鎮西宮	新
元中 年 月 日薨	說成親王 母新待賢門院冷泉局 天授元年三月 日叙三品任上 野太守 後出家法名惠覺	師成親王 母同惟成親王 天授三年正月 日叙三品任上 部卿 後出家法名惠梵号木阿 應永廿九年九月 日薨于周防 国山口 同月 日葬于山口法泉寺	良成親王 母同說成親王 下向于鎮西菊池武朝伺候之 憲子內親王

宣陽門院		南朝第三代
母中宮源顯子二品入道親房 卿女 貞國四年 月 日生 正平七年正月十四日叙一品 天授四年二月 日院号宣下 新宣陽門院 元中八年六月 日薨于伊勢国 司源顯泰卿多氣山莊年四 十八 良子內親王 母同後龜山院 无品 為大納言源顯泰院室 以上後村上帝之皇子皇女也	後龜山天皇 御諱應成 後村上帝第一皇子 御母嘉喜門院藤原勝子 正平二年五月十一日降誕 同六年八月 日立親王	

同十二年正月廿日立皇太子 同年二月朔日元服 同廿三年三月九日受禪 同廿五年正月廿日改元建德 或書至七月廿日改元恐非 建德三年三月廿三日改元文中 或書至十月四日改元據古文書非 文中二年十月朔日行即位礼 同四年五月廿七日改元天授 天授七年二月十日改元弘和 弘和四年四月廿八日改元元中 元中九年十月南北議和 同年閏十月二日入夜獻筆入洛 直幸嵯峨大覺寺殿 同月五日讓三種袖器於後小松 帝 應永元年二月廿三日上尊号 同夜落飾 法諱覺理 灌頂諱金剛心 同三年四月十二日崩于大覺 寺殿壽七十八 同月 日葬于北嵯峨福壽寺

宮一	宮二	小倉宮
世恭親王 母從二位藤原教子関白左大 臣教基之女 正平十五年十二月 日生 文中元年 月 日元服 一品 太宰帥 天授三年七月十日薨年六 葬如意輪寺	師泰親王 母權典侍局中納言藤原光女 正平十七年 月 日生 建德元年 月 日叙四品 元中九年講和之後隱河内国 應永廿九年密集共士 同三十年四月廿三日為皇入道 道端被弒年六十二 法名覺瑜号長德寺	良恭親王 母中宮源信子右大臣顯信女 建德元年八月 日生 天授五年二月 日立皇太子

正僧宮		十念寺上人	
元中九年南北和睦之時從父 帝入大覺寺殿 正長元年七月奔伊勢國揭北 畠石中將滿雅奉兵滿雅戰 死威不再振後飯京落飾入 嵯峨招慶院		尊聖 母 勸修寺真胤僧正資 大僧正 永享四年七月 日寂	
行悟 母 田滿院行助法親王資 大僧正 三井長吏 天寺寺別當		真阿 母 應永十六年 月 日出家 三女 創建十念寺 永享十二年七月 日寂年六七	

西應寺宮		尊良親王	
琮瑱 母 出家十念寺二世上人		守永親王 母後京極院御通殿右大臣藤 公顯云女 延元二年 月 日元服 上野太守 後叙品 弘和三年六月廿日出家	
泰子內親王 母同良恭親王 為園白左大臣冬實云室		良玄	
以上後龜山帝之皇子皇女也			

遠江宮		宗良親王	
母同守永 一乘院実玄僧都資 為三条園白良基云猶子入寺 大僧正		良良親王 母狩野介藤原貞長女 貞國三年 月 日生 正平八年閏三月 日入遠江國秋 葉城 同十四年四月被擒入京	
女王 母大納言高侍權大納言藤為 世々女 今林尼衆		女王 母	
世良親王			

宇津峯宮		源朝臣尹良	
天授三年九月十日依病薨于 京年三十七		母并伊介藤原道政女 或云和久左門尉敦貞女 正平十九年 月 日生 天授五年 月 日親王宣下 二品上總太守 兵部卿 元中三年八月 日賜源朝臣姓 叙正三位任征東大將軍兼右 大將	
同月入駿河國 同九年十月南北合休之後留 南方謀回復 應永三十二年八月十五日於信乃 國浪合山麓大川原歿為敵 被圍自殺年六十一 号大龍寺 葬于聖光寺		女王 母同尹良	

為三河守平定省室

源尹重

母世良田藏人政義女

元平三年正月日叙從五位下

幼名良王

後祢中務大輔

永享七年十二月廿九日入尾張

國海部郡津嶋

同十年九月日卒

号瑞泉寺

良新

母同尹重

津嶋社務永室祖

信重

母大橋修理亮平貞元女

幼名神王

嗣外舅大橋三河守信吉家

護良親王

陸良親王

母一品道源親房之妹

建武元年二月日生

正平六年三月舉兵於播磨國

赤松則祐從之

同八年二月入丹波國高山寺城

丹波丹後但馬安應之

同年月日立親王

常陸太守

同十五年四月日任征夷將軍

同月廿五日微變志通武家夜燒

賀名生皇居

同月廿六日入道園白師基舉兵

討之親敗績自殺年廿七

女王

母竹原八郎入道宗規女

某

母不詳

出家遊行土代上人

十三

後醍醐院

懷良親王

源良宗

母菊池肥後守武光妹

正平十八年月生

始名雅良王

後改良宗

稱後醍醐院越後守

良忠

母

稱後醍醐院伊豆守

以上後醍醐帝之皇孫也

寬成親王

尊聖

母

出家入勸修寺

大僧正 安祥寺寺務

真福寺四世

恭成親王

恭邦王

母中納言局中納言顯時之女

南北合休之後隱河內國

後出家法名賴瑜

尾張國中嶋郡大須莊真福寺

任瑜上人資

一本系面係後村上帝弟王皇太子

說成親王

四悟

母楠左馬頭正式女

四滿院行悟大僧正資

大僧正 三井長吏

嘉吉二年月日寂于河內國

義有王

十五

妙福院官

母同四悟
始出家法名四胤
円満院四悟大僧正資
後還俗名義有
文安元年八月於河内国八幡城
拳兵不利
同三年八月於紀伊国湯淺阿瀬
川城又拳兵
同四年十二月廿三日城落自殺
以上後村上帝之皇孫也
良恭親王
義仁王
母大納言守房女
後改良仁 後入道名義息
南北合体之時留于伊勢国
忘永世二年九月入美濃国於可
児崎為主岐持益被虜
正長元年十二月日被害
教尊

万壽寺官

母同義仁
始名義仁王
正長元年七月父親王奔据伊勢
国司比島滿雅謀立此王為繼体
事不成而滿雅戰死後入勸修
寺為僧法名教尊
勸修寺尊聖大僧正資
大僧正 安祥寺寺務
尊義王
母同義仁
永享元年九月入万壽寺出家
法名空因号金藏主
後還俗名尊義
嘉吉三年九月廿三日夜乱入土
御門殿放火奪神玺
同月廿五日据比枝山戰軍敗於
中堂自殺
尊慶王
母大納言経恭女
住大和国吉野
後遁世為時宗僧

市河宮

河野宮

北山宮

女王
母同尊慶
尊秀王
母色川左兵衛平威定女
擁神玺据吉野自稱南方新皇
又稱自天大王
長祿元年十二月三日於吉野大河
内宮為赤松黨被害年十六
後葬神野谷金剛寺
忠義王
母同尊秀
長祿元年十二月三日於河野谷
宮為赤松黨被害年十六
後葬河野谷金剛寺
尊雅王
母
兄尊秀王薨後代擁神玺
長祿二年八月廿七日夜赤松家人
小寺入道性說襲于津川宮王

花町宮

五辻宮

花懷邦親王
三式部卿邦世親王男
母
後村上帝御猶子
上野太守
守良親王
龜山帝第五皇子
母中納言藤実住女
四品兵部卿 後出家覺靜
潛居近江国伊吹山下
元弘三年近江伊勢国人奉
親王据伊吹山下大平寺城
延元三年九月御船漂着遠江
国入井伊城
蒙莊逃入于北山高野上高福
寺
同月廿八日夜薨于高福寺
号高福院
以上後龜山帝之皇孫也

遍智院宮	土御門宮	南門跡
聖尊法親王 後二條帝第五皇子 母權大納言局右大臣藤公泰女 二品 東南院 建德元年九月廿七日於法身院 入寂年六十七	仁譽法親王 式部卿恒明親王男 母永福門院東御方左大臣藤 實泰女 聖護院常譽法親王次男 二品 三山檢校 南北御合休之後入尾張國大 須庄北野真福寺為三世 改名任瑜 應永廿九年七月日寂	深勝法親王 式部卿恒明親王男 母 始無親王且下泰南山後為 後村上帝御猶子立親王

二品 南北御合休之後依他阿 上人為遊行第十二世上人 應永七年十月廿四日寂	顯王 雅明親王曾孫 正三位 彈正 治部卿 延元三年六月 日於吉野薨
---	--

近衛殿	經家
藤原經忠 関白左大臣家平三男 母家女房 從位左大臣関白氏長者 延元二年四月五日泰南山 左大臣從一位 如故 延元四年八月十五日後村上帝 受禪詔為関白 正平六年十二月 日辭 同七年八月十三日薨年五十一 号堀川殿	母松山院右大臣家定女 正平七年泰南山 同年 月 日叙從二位任權大 納言 同十三年八月 日任内大臣 同十四年 月 日叙從一位 同十五年 月 日辭 同二十年正月 日関白氏長者 同廿四年二月 日辭

二條殿	勝子
藤原師基 関白太政大臣兼基三男 母内藏權頭源兼任女 權大納言 正二位 延元二年正月泰南山 同三年正月 日任内大臣 同四年正月 日叙從一位 同年三月四日兼東宮傳 同 八月十五日止傳 貞國元年九月 日左大臣 正平六年十一月廿八日関白 氏長者 同十年二月 日辭 同十四年六月十七日出家年卒 号光明基院	同年三月廿一日薨年三十八 号福恩寺

同廿年正月廿三日薨年六十六

教基

母

延元四年三月十五日從三位

左中將如故

貞國三年二月權中納言正三位

同四年 月 日權大納言

正平二年正三位兼左大將

同八年七月內大臣

同九年二月五日從一位

同十年三月七日右大臣

同十三年二月日關白氏長者

同十三年八月左大臣

同二十年正月辭

天授三年七月出家

教忠

母

貞國六年二月權中納言

正平六年正月權大納言從三位

正平十年於南都戰死

十九

冬實

母

正平十年七月廿二日權中納言

同十四年十月權大納言

同十五年兼左大將

同十七年右大臣于時正位

同十九年左大臣從一位

同廿四年關白氏長者

一條

藤原內嗣

關白左大臣經連男

母從位綸子太政大臣公賢女

權大納言正三位

正平十二年二月歸順

更任權大納言從二位

同十七年出家年廿七

北源親房

權大納言師重男

母入道右少將隆重女

正三位大納言使別當

春日

顯信

母

鎮守大將軍陸奧大介

權大納言

顯家

母從一位藤行子

左衛門督使別當

權中納言從二位

鎮守府大將軍陸奧大介

延元三年五月廿二日於攝津

國安倍野戰死年廿一

号長興寺道音

贈從一位右大臣

淳和院葉學院別當

元德三年九月十七日出家

法名覺玄或作宗玄

延元元年十月四日參南山

年 月 日從一位

正平六年十二月廿八日准三后

同十四年四月十八日薨時年

六十七

号天德院白宗覺玄

中院

顯能

母

伊勢國司

右大臣從一位東宮傅

天授六年十二月出家

弘和三年七月廿八日薨

年五十八

号源光院端常覺辛

唐橋

顯雄

母

大納言正二位

天授三年正月八日內大臣

号覺山勝進

顯成

二十

土御門					
顯能	親能	親紗	守親 陸奥国司 内大臣 從位	信親	顯信 土御門入道右大臣 准后親房二男
					母 權大納言正三位 右大將 元中三年二月廿八日薨

木造					
死	右中將 永享元年七月廿八日於岩田戰	滿雅 伊勢国司	死	滿泰 左少將 從五位 應永六年十月廿九日於界浦討	顯俊 母 正三位
					入道右大臣 准后親房三男 顯泰 母野呂上野介隆俊女 伊勢国司 權大納言正三位 右大將 應永九年十月廿九日薨 室樹院弘覺常敬

木造			大河内		
俊康 始俊泰 權大納言正三位 應永廿七年三月廿六日出家	俊通 早世	顯俊 正三位 右大臣顯能三男	房雄	顯雄 大納言 准后親房四男	長福寺祐出常滿 顯雅 從三位 右中將 嘉應元年出家 海印寺秋芳常桂

冷源					
顯時 母准后親房女 權中納言正三位 元中四年二月 日薨	顯紗 内大臣從一位 元中三年正月廿四日薨	定能 定紗	持定 左少將 元德二年九月世良親王薨時 出家法名景雲	年五十 華嚴寺覺空	准后親房兄弟 母參議藤忠繼女 參議從二位 右衛門督 元弘元年七月五日出家 正平六年四月十八日薨

種子		六条	
顯光		有忠	
從三位 左兵衛督		權中納言 正二位 内大臣有房之男	
有光		有顯	
權中納言 正二位 正平七年 歸順後又候北方		左少將 出家	
忠顯		顯經	
參議 左中將 彈正 大弼 從三位		權大納言 正二位	
元弘二年三月七日 從帝于隱岐 延元元年正月 日出家 同年六月六日 於山門討死			

天授三年九月四日薨		源光忠	
實權中納言光顯之男 權中納言從三位 應永廿九年正月廿九日薨		六条内大臣有房之男 權大納言正三位彈正尹 元德三年二月十八日薨 贈左大臣	
親光		具光	
權大納言正三位 正平六年十月歸降 同十八年十月又歸北方		准大臣從位權大納言	
忠雲 大塔 大僧正			

源李光		具忠	
始李忠 贈左大臣 光忠 之弟 從三位 右大弁 延元四年九月六日 於吉野出家	具氏 權大納言 正二位 元中六年 月 日薨	具教	參議 左中將 從三位 正平十年 月 日薨 或云 正平七年五月十一日 於八幡陣討死
師光	源雅行	具泰	家房 少將 延元三年六月八幡合戰有功

<p>「家房」 少將 延元三年六月八幡合戰有功</p>		<p>源具行 參議雅行<small>之弟</small> 中納言從三位左門督 元弘元年九月被執 同二年正月囚于佐々木道譽 家六月十九日於柏原被殺</p>		<p>「家資」 「家泰」 家親</p>		<p>龜谷 源具秀 具顯朝臣男 左中將 忠具 從三位</p>		<p>一条 源具信 内大臣具親<small>之男</small> 參議左中將從三位 正平十年十月七日薨 廿五</p>	
-------------------------------------	--	--	--	-----------------------------	--	--	--	--	--

川堀	院中		流庶我久
源具明 權大納言基俊孫基親男	「雅平」 建武三年十月三日於越中 討死	定清 右中將 越中守 建武三年十月三日於越中 討死	源定成 正三位家定男 陸奥守 元弘以來義軍忠後遁世 法名阿道
		定平 始名良定 權大納言 正二位	家房 左少將 具定

院洞		藤原公賢
實世 母家女房 權中納言使別當左門督 正二位 大學頭 延元二年參南山 左大臣從一位東宮傳 正平十三年八月十九日薨年 五十一 葬于大和國与喜山 号与喜左大臣	藤原公賢 左大臣實泰之男 母從三位季子中納言公雄之 之女 右大臣東宮傳從一位 延元二年正月九日參南山 太政大臣 正平十四年四月十五日出家 法名空元 同十五年四月六日薨年七 号遍照光院	藤原氏 實

實清	實夏 母從三位光子光久朝臣女 權中納言 正三位 正平七年歸順五月十日 還幸後留候北京	定世 左少將 公行 母權大納言實孝之女 正平二年七月廿七日出家 早世	藤公敏 左大臣實泰之男 權大納言按察使 正三位 元弘元年八月廿日薨置臨 幸供奉 同年十月十日出家年四十 法名宗隆 同三年四月配于下野國
----	--	---	--

賀藤實守	泉冷 藤公泰 左大臣實泰之男 母家女房中務大輔藤兼賴 之女 權大納言 正三位 正平六年十二月參南山 右大臣從一位 同十四年四月十五日出家年五 十三法名覺元	實茂 左大臣實泰之男 母從三位康子藤永定女 權中納言從二位 正平六年十二月參南山 内大臣從一位右大將	慈靜 僧正 權大納言 正三位 正平十四年八月日薨
------	--	---	-----------------------------------

<p>正平廿三年出奔北方 文中元年四月十日薨年辛九</p>	<p>公信 公益</p>	<p>實夏 太政大臣公賢之男 北方左大臣</p>	<p>公夏 權大納言 正三位 按察使 文中二年十月日薨</p>	<p>三條 藤原實教 内大臣公秀之男 權大納言 從二位 正平廿九年 月日薨</p>	<p>西園寺 藤原公重 内大臣實衡之男 内大臣 正三位</p>
-----------------------------------	------------------	----------------------------------	---	---	---

<p>正平十七年十一月泰南山 右大臣 從一位 正平廿二年 月日薨年壬子</p>	<p>實長 權中納言 正三位 応永廿五年六月六日薨</p>	<p>今出川 藤原實顯 右大臣公頭之男 母官原在綱朝臣女 参議 正三位 左中將</p>	<p>公冬 權大納言 正三位 左近大將 文中三年 月日薨</p>	<p>花山院 藤原師賢 内大臣師信之男 母参議忠繼之孫女僧惠女 大納言 正三位 彈正尹 元弘元年九月廿七日出家</p>
---	---------------------------------------	---	--	---

<p>法名素貞 同二年九月配于下総国 同年十月廿九日薨年四十六 建武元年贈太政大臣諡大貞公</p>	<p>家賢 母右大臣家定之女 内大臣 右大將 正三位 正平廿一年六月廿三日薨 年六十七 号妙光寺</p>	<p>信賢 母内藏頭源仲時女 大納言 正平十三年薨</p>	<p>長親 右大臣 從一位 右大將 元中九年出家号耕雲 法名明魏 応永廿九年 月日薨 長賢</p>
---	--	---	---

<p>權中納言 正平 年 月 日薨</p>	<p>僧元要 上人 入唐</p>	<p>大炊御門 藤原信忠 内大臣冬信之男 權中納言 正三位 正平十一年 月日薨</p>	<p>九條 藤原為顯 左兵衛督教頭之男 左中將</p>	<p>信頭 助定</p>	<p>吉田 藤原定房 權大納言 經長之男 内大臣 從一位 延元三年正月廿三日薨年五十五</p>
---------------------------	----------------------	---	---	------------------	---

中御門		万小路	
藤原光任	大納言 正二位 天授二年三月日薨	藤原宣房	藤原
	守房 權大納言 從二位	從三位資通男 權大納言 從一位 元弘元年被執	推中納言左門督 使別當 正二位 元弘元年正月配于常陸 建武元年十月五日入岩倉出家
右中弁光方男	權大納言 正二位 正平十二年 月 日薨	經高	權大納言 從二位

堀川		光李	
藤原光繼	天授六年三月廿八日薨 正五位上	光有	權大納言 正二位
	參議 右大弁 從三位 元弘元年十月十六日出家 同三年配于常陸 同三年五月廿日於配所被害	後龜山帝第二皇子乳父 弘和三年八月六日薨	權大納言 正二位
仲房	藏人頭左大弁 正四位上 正平六年十月十一日於南山 同月十八日歿北京	光李	權大納言 正二位

葉藤原光顯		藤原隆資	
參議 光定男	參議 從三位 秋田城介 出羽守 延元元年五月廿日於任國被斬 年卅九	左中將 隆實朝臣男	大納言 從一位 使別當 善勝寺長 正平七年五月十日於幡陣討死 年六十一
	光資 出羽守 民部卿 左大弁 權大納言 正二位	隆量	左少將 從四位上 元弘元年被殺

隆俊		藤原隆敏	
隆任	左少將 從四位下 候兵部少親王討死	大納言 隆隆男	左少將 出家
	木三頭	有資	右少將 伊豫國司 延元三年十二月下向于任國
隆俊	內大臣 從一位 權大納言 文中二年八月十日於河內國天野陣討死	隆保	參議 從三位 正平八年薨
藤原	父未詳 元弘元年被執		

条五	御子左	条二
藤為嗣	<p>藤為忠 為藤三男 參議正四下 正平六年歸順 權中納言正三位 應永六年六月十八日薨卒五</p>	<p>藤原為明 權中納言為藤三男 參議從三位 正平六年歸順後歸北方</p>

<p>參議為實男 從三位 正平七年歸順</p>	<p>野阿藤原公廉</p>	<p>左中將公仲朝臣男 左中將 正位下 正平六年贈左大臣</p>	<p>實廉</p>	<p>左兵卫督 從三位</p>	<p>本主繼</p>	<p>權大納言 正三位 正平十年十一月 薨</p>	<p>廉子</p>	<p>後村上帝御母 從三位 准后</p>	<p>正平六年十二月廿八日院号宣下 新待賢門院</p>	<p>同十三年四月廿八日薨</p>	<p>實村 或作實秋</p>
-----------------------------	---------------	--	-----------	-----------------	------------	-------------------------------	-----------	--------------------------	---------------------------------	-------------------	--------------------

坊門	近衛	滋野井
<p>藤清忠 左中將俊輔朝臣男 參議右大臣從二位 延元三年三月廿日薨年五十六</p>	<p>藤公量 太宰權帥實春男 權大納言正三位 太宰權帥 正平十六年五月十二日薨年三十二</p>	<p>藤實勝 參議右中將公尚男 右中將正四位下 參議 正平七年五月十一日於播磨討死</p>

野日	勸修寺
<p>藤原資朝 權大納言俊光男 權中納言從三位使別當 正中二年五月十日向十餘倉 同年 月 日配于佐渡國 元弘元年五月廿九日配所被斬</p>	<p>藤原經方 內大臣經顯男 權中納言從三位 正平十七年十二月廿四日於南山 治部 後出家</p>

京極		中御門	
藤俊基 治部少輔 藏人右中弁大内記從四位下 正中二年五月十日下向于鎌倉 元弘元年七月十一日再被執 同三年於鎌倉葛原岡被斬		藤原宗重 參議左大弁冬定男 從三位 左大弁 正平六年十二月歸順後歸北	
俊業 文章生		俊孝 冬定男	

一條		中御門	
藤原行房 從二位經尹男 右京大夫美乃守 元弘元年被執 同二年三月七日從帝于隱岐 延元二年於越前國金崎自 害年四十九		藤原宣明 參議經宣男 參議左大弁從三位	
宗泰 參議左大弁正四位下 延元元年八月十五日北方別官 同二年二月十七日為尊氏被 殺年廿七		甘藤原藤長 權中納言隆長男	

寺		三條		園		九條		寺	
藏人頭左大弁正五位上		藤原實任 右中將公種朝臣男 民部卿彈正大弼文章博士 權中納言正三位 延元三年十二月三日薨年五十五		藤原基隆 從三位基光男 右中將		藤原光經 春宮權大進定光男 權大納言右門督使別當 正二位民部卿 延元元年出家		藤原康長 從三位親泰男 左兵衛督左中將	

唐橋		平時經		平惟純	
權中納言宗經男 權大納言正二位 弘和二年八月日薨		權中納言宗經男 藏人右中弁左門佐 權大納言從二位 天授四年十二月日薨		治部卿高弟男 太宰權帥大藏卿文章博士 權中納言正二位 延元三年三月泰南山 貞國三年正月廿日出家 法名宴儀 同四年四月十八日薨年五十八	
經氏 左馬頭		惟材			

藏人少納言		惟長 藏人 右大弁 正五位下		鳥平成輔 權中納言惟輔之男 治部卿 彈正大弼 藏人頭 參議 正二位 元弘元年九月被執 同三年五月廿三日於伊豆國早 川宿被殺		行輔 平惟顯 宮内權大輔兼顯朝臣男 大中臣氏		大中臣隆実 榮主隆隆之男 從二位榮主神祇權大副 建武三年正月廿三日薨 卒二	
-------	--	-------------------	--	---	--	---------------------------------	--	--	--

隆基 從二位神祇權大副		大中臣隆昌 父祖未詳 祭主		大中臣為量 父祖未詳 從四位下		大中臣清衡 或作清胤 父祖未詳 五位		紀俊文 從五位下 淑氏男 從三位 紀伊國造 目前宮神主		親文 從三位 紀伊國造 目前宮神主		紀伊國造	
----------------	--	---------------------	--	-----------------------	--	--------------------------	--	--------------------------------------	--	-------------------------	--	------	--

種文 從五位上		俊長 從五位下 紀伊國造 後於北方從三位被聽昇殿		紀淑俊 從四位下 紀國造淑文之男 從五位下		津守國夏 正五位下 國冬男 後宇多院北面 元德三年任住吉神主 從三位 正平七年二月廿八日正三位 同八年五月十六日薨		國量 住吉神主 從三位 應永五年十二月於北方從三位 同九年 月 日薨	
------------	--	--------------------------------	--	-----------------------------	--	---	--	---	--

國久 五位 應永三年住吉權神主從四位下		國貴 從五位下		度會朝棟 度會朝親男 從三位 外宮祢宜		度會朝材 朝棟弟 朝景		朝英 五位		松村 度會家行 從三位 外宮祢宜		威行 五位 行治 五位	
---------------------------	--	------------	--	---------------------------	--	-------------------	--	----------	--	------------------------	--	----------------------	--

度會通詮 父祖未詳 五位	藤原公長 右大臣 從二位 左大將	藤原師兼 權大納言 正三位 大學頭 春宮大夫 元中七年二月 薨	藤原實興 權大納言 正二位	藤原長資 權中納言 從二位	藤原時長 權中納言 從三位 左大弁	藤原季修 權大納言	藤原實秀 權中納言 藏人頭 左中將
--------------------	---------------------	--	------------------	------------------	----------------------	--------------	----------------------

父祖不見人	藤原公長 右大臣 從二位 左大將	藤原師兼 權大納言 正三位 大學頭 春宮大夫 元中七年二月 薨	藤原實興 權大納言 正二位	藤原長資 權中納言 從二位	藤原時長 權中納言 從三位 左大弁	藤原季修 權大納言	藤原實秀 權中納言 藏人頭 左中將
-------	---------------------	--	------------------	------------------	----------------------	--------------	----------------------

御左子	藤原仲威	藤原為宣 權中納言	藤原資繼 或作資次 權大納言 檢非違使別當	宗實 權大納言	雅賢 中納言 正平七年五月十日於八幡討死	惟季 中納言	氏定 權中納言	忠成 權中納言
-----	------	--------------	--------------------------	------------	----------------------------	-----------	------------	------------

藤原正雄	時熙 右大弁	藤原公廣 參議 左中將	光實 左近中將	經清 藏人 權右中弁	藤原維教 參議 左門督 正三位 元中七年 月 薨	藤原有氏 參議 從三位 元中六年十二月五日薨	參議 從三位 文中二年 月 薨
------	-----------	----------------	------------	---------------	--------------------------------	------------------------------	--------------------

正三位 左京大夫 左少弁
藏人

藤原定冬

權中納言 正三位 參議

光守

右中弁 勘解由次官

元弘三年五月諫主上于松上山

清頭

少納言 右馬權頭

藤原勝兼

春宮大夫

菅原在仲 修理大夫 淳弟朝臣男

大藏卿 從三位

延元三年九月九日薨年五十四

菅原在氏 宮内卿國高之男

從四位下 兵部大輔

菅原為基

五位

中原章言

四位

中原重綱

五位

三善賴衡

四位

三善資連

左兵衛尉

栗田久盛

四位

植櫻樹十株於後醍醐帝山陵之邊

滋野宗真

五位

坂上賴隆 或作賴澄

五位

和氣景繁

刑部大輔

延元元年十月候後醍醐帝于

花山院供奉至吉野元太

正平七年五月十日於八幡陣

討死

豐原兼秋 清秋男

左近將監 五位 樂人

元弘元年八月廿四日供奉入南

都同九月被執

泰久武

隨身 同上

大神景光

源賴武

四位

源重泰

五位 左兵衛尉

内大臣定房薨後落髮

源成直

右兵衛督

源宗治

從三位 右中將

貞治六年二月薨于鎮西

吉房

侍從

延元四年九月遁世号松翁

源資氏

武家

新源義貞

次郎太郎朝氏男

小太郎 右馬助 播磨守

元弘三年二月十日賜論旨

同年三月奉大塔宮令旨奉兵

建武元年賜上野播磨

延元元年二月日左近中將

正四位下 左兵督 昇殿

十六箇國管領

同三年閏七月日於越前攻藤崎

中矢自殺年三十八

源光院學阿

正平八年二月贈正三位中納言

義顯

小太郎 越後守 從五位下

建武元年賜越後

延元二年三月六日於越前金

崎城自殺年十八

義興

左兵五位 正五位下 左近將監

二

正平十四年十月十三日於武藏國

矢口渡為竹沢良衡江戶亮

寬所誑溺水自殺

法名正英

後有美建祠於彼辺号新田

大明神

義宗

左兵五位 左少將 正西下

武藏守 昇殿

忘永六年七月十四日於伊豆道

後卒年七十五

金龍寺大幢全活

貞方

兵部大輔 入道寛慶

忘永十七年就廣野殺于七里

濱

源義助

義貞朝臣弟

次郎

右門佐 左馬權頭 彈正右弼

治部大輔 兵庫助 正五位下

三

建武元年賜駿河

貞國元年五月五日於伊豆國

國府卒

義治

右門佐 左馬權頭 從五位上

式部丞

天授四年 月 日卒

義隆

相摸守 陸奥守

天授六年二月從四位下少將

忘永十年四月廿五日於底倉

被殺年四十九

大源宗氏

大館二郎家氏男

又二郎

元弘三年五月十八日於鎌倉

稻村崎討死

氏明

跡二郎 左馬助

延元三年春為伊与守護
貞國元年九月三日於伊与
國世田城自害

幸氏

孫二郎 中務少輔

属足利尊氏

建武三年正月廿八日於近江國

觀音寺為北畠顯家之被

討取首

宗兼

源三

氏兼

六郎

義冬

治部少輔 実者細川頼春子

氏清

伊賀守

貞國四年到伊勢湊國司

正平十年於吉野

<p>正平十六年入伊賀据岡城 忘永廿九年八月十九日卒 年七十六 慈光院顯山</p>	<p>大源有氏 大館宗氏弟 三郎 左近藏人 延元三年正月於京討死</p>	<p>僧賴負 大藏律師</p>	<p>大源氏時 左馬助</p>	<p>大源義氏 左馬助</p>	<p>堀源貞義 堀口孫三郎家貞男 母駿河守有時女 左馬權頭美乃守從四下</p>
---	--	---------------------	---------------------	---------------------	---

<p>貞滿 大炊助美乃守 三郎</p>	<p>行義 四郎</p>	<p>義滿 三郎 左京亮</p>	<p>貞元 四郎</p>	<p>井源貞政 堀口貞義弟 一井孫三郎 民部權大輔 從五位上 延元三年三月六日於越前金 崎討死</p>	<p>政家 左近將監 從五位下 与父同時討死</p>
-------------------------	------------------	----------------------	------------------	---	------------------------------------

<p>大源義政 大嶋又太郎義貞男 兵庫頭讚岐守治部丞 建武元年補武者所</p>	<p>義高 左門佐兵庫助遠江守 後出家法名法西</p>	<p>義世 兵庫頭左近尉從五下</p>	<p>守之 讚岐守</p>	<p>鳥源義俊 左京亮家成男 修理亮</p>	<p>大井源經隆 藏人左近尉義隆男</p>
---	-------------------------------------	-------------------------	-------------------	--------------------------------	---------------------------

<p>藏人太夫 從五位下</p>	<p>經兼 遠江守從五下民部丞 與國三年於越後卒 年四十二</p>	<p>氏經 式部大輔彈正弼從四下 正平九年於本國卒年卅八</p>	<p>經世 左馬助</p>	<p>經景 彈正少弼</p>	<p>中田源經氏 里見甲又太郎重經男 甲七郎 藏人</p>	<p>政繼 左近藏人 氏政</p>
------------------	---	--	-------------------	--------------------	---------------------------------------	---------------------------

修理亮 貞國四年於上野國討死 年二十五		見里源重義 掃部助氏義男 又太郎 掃部助	見里源義胤 藏人民部少輔義宗男 里見五郎	見里源義益 父未詳 大膳亮	見里源時成 伊賀守義成男 <small>今按恐非義成男時成</small> 伊賀守
---------------------------	--	----------------------------	----------------------------	---------------------	---

世源義政 下野守政經男 伊子守 正平十九年七月十九日飯順 同年八月兄弟三人鎌倉如家 堂自殺		田江源滿氏 世良田三河守賴氏男 江田三郎	義氏 江田三郎 行氏 江田三郎	行義 江田三郎 兵部少輔修理亮	行忠 丹後守	江源一
--	--	----------------------------	--------------------------	--------------------	-----------	-----

田江田九郎 延元元年正月於京討死	岩源經家 岩松下野太郎政經男 岩松小太郎 或作三郎	松源義正 兵士藏人	桃源尚義 桃井又三郎滿氏男 弥三郎 元弘元年於鎌倉討死	井義通 孫三郎 刑部大輔	義威 修理亮	胤義 孫三郎
---------------------	---------------------------------	--------------	--------------------------------------	-----------------	-----------	-----------

直氏 四郎	義任 左五門佐	桃源直常 桃井六郎直賴男 右馬權頭播磨守彈正太弼 正平七年屬義宗	直和 中務少輔 右馬助 建德元年三月十六日与足利義經戰于長次討死	源顯氏 桃井兵庫助	源義繁 桃井駿河守	源敏祐 桃井左京進
----------	------------	---	--	--------------	--------------	--------------

<p>吉源賴氏 吉見三郎為賴男 彦四郎 奥国四年七月七日級順</p>	<p>吉源尊賴 吉見孫太郎義世男 中務太輔</p>	<p>吉源賴武 右馬頭</p>	<p>石源義純 石川藏人義通男 飛騨守 元弘元年笠置敗軍之時被門前父子自害</p>	<p>義右 初一九 義冬 牛熊丸</p>
--	-----------------------------------	---------------------	---	----------------------------------

<p>要</p>	<p>成家 龜松丸</p>	<p>土源賴兼 去岐隱岐孫郎賴貞男 土岐十郎 元亨年中奉主上密詔事露被殺</p>	<p>賴古 去岐千郎太郎 從五位下 賴孝 土岐千郎二郎 藏人左兵衛尉</p>	<p>足源重範 足助六郎二郎貞親男 足助三郎</p>	<p>重政 足助九郎 元弘元年八月被捕於六条河原被斬首</p>
----------	-------------------	--	--	------------------------------------	---

<p>足源重藤 佐渡守重方男 足助佐渡十郎</p>	<p>重經 二郎 重宗 二郎三郎</p>	<p>重武 三郎</p>	<p>賢尊 僧 鄉公 元弘三年五月廿六日於鎌倉葛西谷討死</p>	<p>重信 三郎太郎 元弘三年五月廿二日於鎌倉葛西谷戰討死</p>	<p>足源重連 佐渡守重方男 足助佐渡四郎</p>
-----------------------------------	----------------------------------	------------------	--	---	-----------------------------------

<p>四六</p>	<p>重成 孫三郎 元弘三年 月日於鎌倉前濱討死</p>	<p>足源重春 從五位下</p>	<p>村源義光 村上彦四郎 元弘三年二月一日於吉野討死</p>	<p>義隆 村上弥四郎 兵部藏人 元弘三年二月一日從大塔宮討死</p>	<p>和名源長年 始名長高依勅改名 村上太郎行高男 又太郎 左門尉 伯耆守 元弘三年閏三月奉勅守護船上</p>
-----------	--------------------------------------	----------------------	---	---	---

山皇居 同年三月三日賜伯耆國 建武元年加賜因幡國 延元元年七月十三日於京討死 法名釈阿	義高 伯耆三郎 判官 正五位上 延元元年十月十日於南都出家 同三年五月廿二日於界浦討死 年卅七	高光 左門尉 延元元年十月一日於坂本病 死年廿二	義重 兵庫允 延元三年五月廿二日於界浦討 死	名 源長義 伯耆守長年弟
---	---	-----------------------------------	---------------------------------	--------------------

但馬權守 從五位下	長生 太郎左門尉 大藏少輔 延元三年五月廿二日討死	僧源盛 長年弟 信乃法眼 正平十三年十二月十三日於代 死年五十六	源行村 道致入道男 名和二郎 左門尉 豐前守	源行実 道致入道男 長年從弟 備中守 從五位下 正平七年四月三日於伯耆討死	入道覺妙 行高七男 正平十六年三月廿日死
-----------	---------------------------------	--	------------------------------	--	----------------------------

源高政 名和左京進	源貞村 正平七年四月三日於伯耆合戰 与行実高政等共討死	源長氏 名和兵庫允 正平七年四月廿五日於八幡討死	源長秋 名和修理亮	二源光遠 左門尉 從五位下 遠江守	光長 左衛尉 左門尉 縫殿助 越後守 從五位下	光家
--------------	-----------------------------------	--------------------------------	--------------	----------------------	-------------------------------	----

左衛尉	二源 内舍人 左門尉 後入道 法名知心	渡源 瀧口 中務少輔	某 左近將監	坂源 左門尉 康鄉男	康藤 左門尉	平氏
-----	---------------------------	---------------	-----------	---------------	-----------	----

色平威忠
左兵衛尉 從五位下

威氏
左兵衛尉

千平宗胤
千葉介賴胤一男
千葉太郎 千葉介
元弘三年屬官軍後討死
子孫在肥前國

千平貞胤
千葉胤宗男
從四位下 千葉介
北余高時滅亡之後屬仁田
義貞有戰功
後變志屬足利氏

馬相平親胤
相馬弥五郎重胤男
出羽守
正平六年二月十三日賜陸奥
國郡守護職

和多大平義勝
三浦大和孫太郎義綱男
太多和平六左門尉

胤賴
治部少輔 讚岐守

馬相平光胤
相馬親胤弟
相馬弥二郎
延元元年五月於陸奥討死

馬相平胤忠
相馬二郎左尉胤基男

胤長
相馬小二郎

忠重

相馬四郎左門尉
延元元年山門之役屬官軍
与本間孫四郎源資成同討
賊兵顯其名

河平維賴
左近藏人

江平景氏
民部丞

花平兼隆
平太左門尉
延元元年十月廿四日大塔若
宮賞賜三河田

南平宗元
南條出羽前司

津平長重
瀧口左門尉
貞國五年四月任中官少進

久津平豐重
新待賢門院判官代
左門尉

元弘三年舉兵襲鎌倉

藤原氏

池菊藤原武時
肥後守 掃部助 正五位下
後剃髮法名寂阿
元弘三年三月十三日於筑前博
多津戰死

武重
肥後守
正平四年 月 日卒

武光
肥後守 從四位下

賴隆
肥後三郎
元弘三年三月十三日与父同討死

武義

剃髮法名自閑
天授三年八月十三日討死

隆寂

僧号阿日坊 元弘三年三月十三日与父同死 討死	武安 天授三年八月十二日討死	武政 肥後守 從五位下 文中三年六月廿六日卒	武朝	城 結藤原宗廣 上野介廣綱男 上野介從五位下 後剝髮号道忠法名源秀 延元三年九月遇難風漂著 安濃津遂罹病死	親光 結城太田判官 延元元年正月尊氏入洛時偽 降泰而刺大友左近將監為
------------------------------	-------------------	------------------------------	----	--	---

衆被殺	親朝 大藏權大輔 修理大夫 上総守護 貞國五年正月叛屬尊氏	親廣 大藏少輔 七郎左門尉	親政 藏人 建德二年六月十四日与斯波兼 頼戰討死	城 結藤原朝常 大藏權大輔親朝男 三河守 正平五年歸順	城 結藤兼光 大藏少輔 延元元年十月十日到南都出家
-----	--	------------------	-----------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------

益藤原行助 左門尉宗行男 和泉守從五位下 左門尉	顯助 下野守從五位下 左門尉 延元元年正月討死	山小 藤原秀朝 下野守貞朝男 使左門尉 建武三年七月三日与北条時行 合戰時討死	山小 藤原義政 左門佐氏政男 左馬助 下野守 天授六年五月歸順 弘和二年十月十日降氏滿 利長号永賢 同三年三月廿三日据精尾奥城 同年四月十三日自殺
--------------------------------	-------------------------------	---	--

二階堂 藤原貞藤 出羽守行藤男 出羽守 利長号道瀝 元弘三年七月赦死賜懸命 地以有賢才之因也	兼藤 檢非違使 山城守 法名道義	信 藤原重信 信夫太郎	井 藤原道政 井伊介 仕家良親王	足 藤原遠宣 安藝守 延元元年十月十日到南都出家	天 藤原政貞
---	------------------------	----------------	------------------------	--------------------------------	--------

野	宇都宮	野	狩	野	宇都宮	野
藤原公綱	藤原泰藤	藤原貞長	藤原貞細	藤原貞細	藤原貞細	藤原貞細
下野守貞細男	三川守時綱男	狩野介	左近將監	左近將監	左近將監	左近將監
治部大輔 左馬權頭	左近將監	仕宗良親王				
延元元年十月出家						
正平十一年十月 早卒						
正服菴理蓮						
正平十一年十月 早卒						
正服菴理蓮						

河	河	武	少	川	河	野
越智通直	越智通直	藤原冬資	藤原冬資	藤原義孝	越智通直	越智通直
始名通亮	始名通亮	太宰少貳	太宰少貳	刑部大輔	始名通亮	始名通亮
河野通朝男	河野通朝男	天授元年四月 歸順	天授元年四月 歸順	建武二年七月廿二日 北条	河野通朝男	河野通朝男
		合戰討死	合戰討死	時行合戰討死		
		天授元年四月 歸順	天授元年四月 歸順			
		天授元年四月 歸順	天授元年四月 歸順			
		天授元年四月 歸順	天授元年四月 歸順			

能	居	能	能	能	能	能
越智通直	越智通直	越智通直	越智通直	越智通直	越智通直	越智通直
備後守通方男	備後守通方男	備後守通方男	備後守通方男	備後守通方男	備後守通方男	備後守通方男
越後守	越後守	越後守	越後守	越後守	越後守	越後守

嶋	田	嶋	嶋	嶋	嶋	嶋
高徳	高徳	高徳	高徳	高徳	高徳	高徳
児嶋備後三郎	児嶋備後三郎	児嶋備後三郎	児嶋備後三郎	児嶋備後三郎	児嶋備後三郎	児嶋備後三郎
入道志純	入道志純	入道志純	入道志純	入道志純	入道志純	入道志純
元弘元年 並置城破帝西狩於	元弘元年 並置城破帝西狩於	元弘元年 並置城破帝西狩於	元弘元年 並置城破帝西狩於	元弘元年 並置城破帝西狩於	元弘元年 並置城破帝西狩於	元弘元年 並置城破帝西狩於
是欲奪車駕于路事不成夜	是欲奪車駕于路事不成夜	是欲奪車駕于路事不成夜	是欲奪車駕于路事不成夜	是欲奪車駕于路事不成夜	是欲奪車駕于路事不成夜	是欲奪車駕于路事不成夜

楠橘氏 後至院庶御館所櫻樹書京詩云 後至矣諸行在	
楠橘正成 橘正遠男 或云子男或正澄男 多聞兵衛 檢非違使 左門尉 河內守 從四位下 元弘元年八月有召泰笠置皇 居奉勅奉義兵 建武元年賜攝津河內 延元元年五月廿五日於兵庫自 殺年四十三 贈正三位左近衛中將 号靈樂光寺大田義龍	正行 帶刀左門尉河內守正五下 正平二年七月起兵 同三年正月五日於四條戰 自殺年廿五 号孝順院精忠義真
正時	

楠橘光正 楠木五郎左門尉入道常泉 承享元年九月担義教事頭	正元 小三郎 河內守 明德四年三月廿五日入京担義 滿事不成死	正勝 二本作正秀 二郎 左門尉 左馬助 元中九年五月出千劍破城漂泊 于吉野十津川	正儀 三郎 左門尉 左馬權頭 参議 左近衛督 從四位下 天授四年四月廿八日卒 小光寺秀峯義瑞	自殺 妙解院聖諦女義 二郎 左門尉 大和守 從五位上 正平三年正月吾子兄正行共
------------------------------------	---	---	--	--

楠橘正親 楠木十郎 高福院官仕候 高福院官仕候	和橘正隆 和橘正隆 和橘正隆 延元元年五月廿五日与正成共	和橘正李 河內守正成弟 和橘正李 延元元年五月廿五日与正 成共自殺年卅二	楠橘正類 河內守正成玄孫 楠木二郎 文安元年奉高福院官令旨 舉兵於八幡山軍敗退于紀伊 国湯淺城 同四年十二月三日於湯淺戰死	就擒 同月廿三日於六条河原被斬
----------------------------------	---------------------------------------	--	---	--------------------

橋橘正高 橋本民部大輔 天授五年任式部大輔	橋橘正茂 橋本九郎左門尉	和橘正武 和泉守 左門尉 正平十年十二月卅日補壽成門 院藏人	和橘正貞 左近衛尉	橋正忠 和泉五郎 正平七年九月病死	僧源秀 和泉新發意 正平三年正月五月討死
-----------------------------	-----------------	---	--------------	-------------------------	----------------------------

江 南 橋 正 忠 南江備前守	寺 宮 神 橋 正 師 神宮寺太郎兵衛尉 延元元年九月廿五日從正成自 殺	美 佐 宇 橋 正 安 宇佐美河内守 延元元年五月廿五日從正成自 殺	本 橋 正 貞 橋本八郎 延元元年五月廿五日從正成自 殺	本 橋 正 督 橋本宮内少輔 天授元年八月廿五日王九城叛	同六年七月十七日与山名氏清合 戰討死
--------------------------------	--	--	--	---	---------------------------

野 荻 朝 忠 荻野彦六 元弘三年屬忠顯朝臣入京而 据高寺城	田 太 守 延 太田三郎左門尉 元弘三年三月奉靜尊親王 吉起兵入京 同年四月八日討死	山 櫻 茲 俊 櫻山四郎入道 元弘元年九月起義兵奈備 中国宮城 同年十月詣吉備津宮殺妻子 燒宮自殺	延元元年九月廿五日從正成自 殺 氏姓不見人々
--	---	---	------------------------------

葉 津 清 文 津葉五郎 延元三年二月被大聖寺城	一 為 治 一条駿河守	田 和 岸 治 氏 岸和田弥五郎 延元元年十月四日据東条城	房 阿 國 清 阿房五郎 延元元年起義和泉	地 匹 資 高 匹地九郎
---	----------------------	---	--------------------------------------	--------------------------

白 為 貞	木 今 範 家 今木新藏人	鹿 妻 長 宗 妻鹿孫三郎	松 高 賴 重 高松三郎 元弘三年十月与細川定禪 戰不利	村 田 則 義 田村庄司 元中三年六月討死	小 義 弘 小侯宮内少輔 正平七年歸順	黑 石 盛 行 石黒左近太夫將監 貞國三年据貴船山城
-------------	---------------------------	---------------------------	--	--------------------------------------	---------------------------------	---

河	鹿	木子	畑	篠
貞基 鹿子木大炊助	貞直 鹿子木民部大輔	時能 畑六郎左門尉	重英 或云平氏畠山重忠次孫 篠塚伊賀守	貞基 或云平氏畠山重忠次孫 篠塚伊賀守
白河出羽推守 貞國四年七月据常陸国河内 城舉兵			貞國元年十月廿一日於越前 国鷹巣城合戰蒙死 四月廿四日遂死	貞國元年九月伊予国世田城 陷棄敵船走于隱岐

東	南	淨	土	小	野	峯
聖尋 鷹司関白基忠公男 聖德僧正資 東大寺別當東寺長者 法務 大僧正 号東南院僧正 元弘元年所執 同三年五月十日配于下総国	院南 聖尋 鷹司関白基忠公男 聖德僧正資 東大寺別當東寺長者 法務 大僧正 号東南院僧正 元弘元年所執 同三年五月十日配于下総国	淨 忠山 号淨土寺僧正 元弘元年七月廿三日配于越後	土 寺 元弘元年七月廿三日配于越後	小 文親 号小野僧正 醍醐座主 元弘元年七月廿三日配于硫黄 嶋	野 嶋 正平十二年八月 日寂	峯 春雅 号峯僧正 元弘元年所執

護	持	院	大	塔	法	勝	寺
賴意 日野護持院 大僧正 東寺長者 醍醐座主 兼仁和寺諸院家	院持 賴意 日野護持院 大僧正 東寺長者 醍醐座主 兼仁和寺諸院家	院持 賴意 日野護持院 大僧正 東寺長者 醍醐座主 兼仁和寺諸院家	大 忠雲 中院贈左大臣光忠公男 号大塔僧正 大僧正 正平六年十月十九日管領梶 井妙法院无量壽院尋禪 鎌倉大御堂天王寺別當	塔 忠雲 中院贈左大臣光忠公男 号大塔僧正 大僧正 正平六年十月十九日管領梶 井妙法院无量壽院尋禪 鎌倉大御堂天王寺別當	法 四觀 法勝寺 住鎌倉大戒寺 元弘元年六月就擒	勝 寺 法勝寺 住鎌倉大戒寺 元弘元年六月就擒	寺 法勝寺 住鎌倉大戒寺 元弘元年六月就擒

護	正	院	妙	光	坊	八	尾	理	教	坊	成
護 正院大僧都 妙法院家 元弘元年八月廿八日坂本合戰 不利而降于武家	院正 護 正院大僧都 妙法院家 元弘元年八月廿八日坂本合戰 不利而降于武家	院正 護 正院大僧都 妙法院家 元弘元年八月廿八日坂本合戰 不利而降于武家	妙 玄尊 妙光坊阿闍梨 梨本院家 元弘元年八月廿八日於坂本挑 戰	光 玄尊 妙光坊阿闍梨 梨本院家 元弘元年八月廿八日於坂本挑 戰	坊 玄尊 妙光坊阿闍梨 梨本院家 元弘元年八月廿八日於坂本挑 戰	八 賢幸 河内国八尾別當 權大僧都 權僧正 延元三年七月廿四日寂 卒七	尾 賢幸 河内国八尾別當 權大僧都 權僧正 延元三年七月廿四日寂 卒七	理 映秀 理教坊阿闍梨 延元元年九月廿三日与小笠原 貞宗戰于安食馬場討死	教 映秀 理教坊阿闍梨 延元元年九月廿三日与小笠原 貞宗戰于安食馬場討死	坊 映秀 理教坊阿闍梨 延元元年九月廿三日与小笠原 貞宗戰于安食馬場討死	成 源俊 一作亮金

願坊	殿法印	安居院
成願坊律師 延元元年九月七日于小笠原 貞宗合戰討死	良忠 權大僧都良室子 号殿法印 為伯父二条園白師忠之子奉 候大塔宮 元弘三年六月廿二日被召出于六 波羅禁園忽被園戶遁出 公尋僧正附法弟子大力入 建武二年十二月二日被殺	澄俊 妙法院執事法印律師 元弘元年八月廿八日所執

帥法眼	道場坊	侍從房	大輔房	知教	俊增
寒武三年十二月二日被殺 太田帥法眼 延元二年三月六日於金崎自殺	祐覺 道場坊助注記 延元元年十二月廿五日於阿弥 院峯被斬	快智 岸和田侍從房 延元二年四月十六日据卷尾寺 舉旗	岸和田大輔房 延元二年四月十六日与快智共 舉旗	知教 奈良法師	俊增

行海	治部房	勝行房	習淨房	乘實房	光玄尊
奈良法師 元弘元年九月被執	志賀良本治部房 元弘元年九月被執	勝行房侍從堅者 元弘元年九月被執	習淨房 元弘元年九月被執	乘實房 元弘元年九月被執	光玄尊

林房	大快房	金蓮房	桂林房	固快房	中坊
光林房 元弘二年從大塔宮寺熱野	所大夫房 細將執姪 延元四年九月被弑而死	金蓮房伯耆 元弘元年八月廿八日坂本合戰討 死	桂林房讚岐 元弘元年八月廿八日於坂本討死	固快房播磨堅者 元弘元年八月廿八日坂本合戰有 殊功	中坊小相模

寺木	參河房	武藏房	吉水院		
木寺相模	昭本參河房	武藏房	吉水法印		
元弘二年從大塔宮于熊野	元弘二年從大塔宮于熊野	元弘二年從大塔宮于熊野	尊壽丸之父吉野山京執行		
			慈遍		
			卜部兼顯子兼好法師兄		
			大僧正		
			興國元年著神風和記三卷獻		
			上南山		

棗院藏板		空
------	--	---

名取善十郎等 編

日本外史系譜

明治八年（一八七五）甲府内藤溫故堂刻本

據明治八年（一八七五）甲府内藤
溫故堂刻本影印

明治八年四月刻成

名取善十郎
穴水朝次郎
輯述

日本外史系譜

甲府書林

内藤温故堂藏版

大猷
、歌
、而

○山梨縣令公日本外史系譜題辭

一

新復
如然
線不

明治八年二月於南嶽
餘霞樓

紫朗書

日本外史卷之一源氏前記

甲斐國

名取善十郎輯述
穴水朝次郎輯述

平氏系譜

桓武天皇

本系

葛原親王

四品式部卿母參議長野女
贈正一位夫人多治比真宗

高見王

高望王

上總公寬平元年賜姓平朝
臣子孫世為武臣其旗用赤

國香

鎮守府將軍常陸大
掾為姪將門所攻殺

良將

鎮守府
將軍

日本外史系譜

一

良兼

下總
守

良文

貞盛

常陸掾從四位下鎮守府將
軍兼陸奥守世呼曰平將軍

將門

稱和馬小二郎良將之第三
子也借稱平親王謀反伏誅

正平

維衡

下野守坐私闖謫淡路居伊
勢子孫因家馬稱伊勢平氏

正盛

因幡讚岐等
守

忠盛

刑部卿
下

忠政

保元亂後為
清盛所殺

按惠管抄平氏西
走為威德在外史
蓋無原平盛氏記

清盛

從一位太政大臣准
三宮別號淨海

經盛

大正三位太皇太后宮大夫兼備理
皇太子參議壇浦之敗刺髮赴海死

經正

皇太子參議壇浦之敗
四位后官亮但馬守正

經俊

若狹守戰死
死于一谷

敦盛

大無職掌世呼曰無官
戰死下谷

敦盛

世曰門脇戰死下谷
三位

通盛

越前守戰死中官亮從
三位

教經

正五位下戰死能登
谷

業盛

從五位下戰死
戰

賴盛

正二位權大納言稱池
日本外史系譜

二

忠度

正四位下左兵衛佐
戰死

為盛

右兵衛佐紀伊守
戰死

重盛

正二位內大臣松養為子
名證空世稱小松殿

基盛

正四位下大和守清盛
位下大和守清盛

行盛

正四位下左馬頭
戰死

宗盛

內大臣從一位源賴朝呼曰讚岐
權正三位右衛門督新于近江篠原

清宗

正三位右衛門督
與父同新於野路

能宗

被新京師
戰死

知盛

從三位參議權中
戰死

知章

武藏守戰死
死于一谷

本書作右記

知忠 建久七年自

重衡 左近衛權中將從

知度 從五位上參河守

清房 戰死五位淡路

維俊 春宮

清定 實大外記中原師元子清盛養子式

清邦 實權大納言藤原邦綱子清盛

良衡

維盛 藏人頭從三位

日本外史系譜

C三

六代 披髮為文覺弟子更名妙覺世稱三位

資盛 右近衛權中將從三位

盛綱 後北條氏臣其

親真 為越前織田祠官子號織田權

清經 正四位下左近衛中將投

有盛 從四位下左近衛

師盛 備前守戰死

忠房 侍從丹後守因稱丹後

日本外史卷之二 三源氏正記

源氏系譜

清和天皇

貞純親王 四品中務卿上總常陸太守攝太皇太后

經基 正四位下鎮守府將軍世呼曰六

經生 從五位上孫世為武臣其旗用白

滿仲 並賜姓源朝臣後守

賴光 左馬權頭正四位下新發智贈從三位

賴國 攝津守左馬權頭攝津源氏

日本外史系譜

四

賴親 左衛門尉檢非違使信濃大和等

僧源賢 小名美女九事僧大和源氏

賴信 鎮守府將軍從四位

賴義 小名王代九鎮守府將軍正四位

義家 守府將軍正四位

義綱 賀茂二郎左衛門下右衛門尉鎮

義光 從五位上刑部少輔子孫稱甲斐源

義親 對馬守從五位

義國 使判三郎從五位下檢非違

義忠 檢非違使河內守李父

義重 新田氏祖

義康 氏祖

為義 攝太皇太后

義朝 從五位上判官代世稱六條判官

義賢 春宮帶刀長為

義賢 初名義平所殺

賴賢 左衛門尉藏人保元

義嗣 攝津守左馬權頭攝津源氏

義房 攝津守左馬權頭攝津源氏

賴仲 攝津守左馬權頭攝津源氏

義久 攝津守左馬權頭攝津源氏

為宗 攝津守左馬權頭攝津源氏

為成 攝津守左馬權頭攝津源氏

為朝 攝津守左馬權頭攝津源氏

為仲 攝津守左馬權頭攝津源氏

行家 攝津守左馬權頭攝津源氏

乙若 攝津守左馬權頭攝津源氏

龜若 攝津守左馬權頭攝津源氏

日本外史系譜

五

日本外史系譜

〇六

鶴若

天王四子皆為義朝所殺

仲家

義仲

義高

義平

朝長

賴朝

義門

希義

隆盛

範賴

義世

尊賴

全成

賴全

時元

義圓

義經

義朝四子皆為義朝所殺

義仲治承五年八月八日院藏人稱六

義高治承五年八月八日院藏人稱六

義平治承五年八月八日院藏人稱六

朝長治承五年八月八日院藏人稱六

賴朝治承五年八月八日院藏人稱六

義門治承五年八月八日院藏人稱六

希義治承五年八月八日院藏人稱六

隆盛治承五年八月八日院藏人稱六

範賴治承五年八月八日院藏人稱六

義世治承五年八月八日院藏人稱六

尊賴治承五年八月八日院藏人稱六

全成治承五年八月八日院藏人稱六

賴全治承五年八月八日院藏人稱六

時元治承五年八月八日院藏人稱六

義圓治承五年八月八日院藏人稱六

義經治承五年八月八日院藏人稱六

義經治承五年八月八日院藏人稱六

義經治承五年八月八日院藏人稱六

日本外史系譜

〇七

賴家

一幡

公曉

千壽

實朝

僧貞

女某

三幡

賴綱

賴政

仲綱

賴兼

賴茂

賴氏

廣綱

國政

兼綱

女某

女某

陸奥衣川左衛門督從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

北條時政從三位正夷大將軍為

有	宗
綱	綱
經	五左
自	衛
毀	門
	尉
	肥
	後
	守
	從
	治
	尉
	從
	五
	位
	下
	為
	源
	義
	佐

朝時
時常
公時
貞家
高家
時威
時威
時威

時兼	高時 及時 行敗 其子 時行 起兵 北國
時基	足利 氏兵 敗自 其子 時行 起兵 北國
名越高家	中尾 張守 與赤 松則 村戰 孤川
時氏	從五位 下 從五位 下 從五位 下 從五位 下
經時	正五位 下 正五位 下 正五位 下 正五位 下
時賴	稱五位 下 稱五位 下 稱五位 下 稱五位 下
時定	從五位 下 從五位 下 從五位 下 從五位 下
時輔	稱三位 下 稱三位 下 稱三位 下 稱三位 下
時宗	位上 位上 位上 位上
宗政	右近衛 守 右近衛 守 右近衛 守 右近衛 守
師時	守 守 守 守
宗方	守 守 守 守
貞時	守 守 守 守
高時	守 守 守 守
泰家	守 守 守 守
邦時	守 守 守 守
時行	守 守 守 守

重時
時茂
時範
範貞
長時
義宗
久時
英時
實泰
實時
實政

阿曾時治	走時 行匿 在相 模 高時 子也
附北條氏族親疎未詳	
北條範貞	鎮六波 羅 北條
北條英時	鎮六波 羅 北條
金澤貞冬	鎮六波 羅 北條
北條實政	鎮六波 羅 北條

日本外史系譜

十二

日本外史卷之五新田氏前記

楠氏系譜 兒島氏 名和氏 菊池氏
土居氏 得能氏 北畠氏

楠正康

河內人。世居金剛山西。本姓楠氏。左大臣諸兄後裔也。

正成

守義。河內大夫。判官。臣。戰死於湊河。

正李

勳。七郎。為帶刀直衛中將。及武者。所從正。

正行

河內守。與敵將高師直戰於四條。下兼。

正儀

左衛門尉。兼左馬頭。河內守。左兵衛督。

正時

共死。正行賢秀等百四十餘人。戰死。宗族。

正秀

武。等。數。建。功。弘。兄。勤。王。與。族。和。田。正。忠。正。

楠氏族

和。田。正。遠。稱。五。郎。元。弘。初。從。正。成。起。兵。軍。功。居。

和。田。正。朝

幼。稱。還。奏。其。狀。與。新。兵。衛。四。條。戰。死。之。

賢。秀

幼。稱。還。奏。其。狀。與。新。兵。衛。四。條。戰。死。之。

和。田。正。武

為。直。為。新。卒。湯。淺。者。所。斬。死。野。行。宮。典。

敏達天皇 推古天皇 三野王 橘諸兄 奈良宮 島原宮 真村 廣相 公村 好古 為政 行資 成經 兼遠 或仲 正達 或作正康 初名也

二曰和。田。正。遠。正。成。事。也。或。作。正。成。是。也。與。久。氏。同。名。之。理。

和。田。正。忠。稱。五。郎。正。平。七。年。與。正。儀。奉。車。駕。此。餘。楠。氏。之。族。楠。本。正。時。神。官。正。種。生。美。大。家。二。後。者。相。繼。不。絕。云。

兒島氏

和。田。範。長

本。姓。三。宅。相。傳。天。日。槍。之。裔。居。備。前。

兒島高德

共。城。國。釋。遇。亦。自。和。山。陽。出。立。後。守。備。前。

日本外史系譜

所終

名和氏

名和行秋

又。稱。村。上。氏。村。上。帝。皇。子。具。平。親。王。

行高

初。名。長。高。後。從。上。山。帝。逃。隱。於。章。和。港。

長年

伯。四。位。下。左。衛。門。尉。兼。伯。耆。守。為。因。幡。叙。

長重

稱。太。郎。左。衛。門。足。利。義。詮。犯。男。山。行。營。

長生

氏高

義高

基長

高光

顯興

肥後八代城

土居氏 得能氏

河野通信

土居通治

得能通言

車駕長生乃下馬名生事急委神鏡于
射如兩能免而還板腕薄矢中者十
餘述不能洞人以為異松煙薰布畫近國
初上旗山兵未疑兵望見旗章不致進清高
將士三千米以攻使直武章所後與從
以兵位檢非違使武章所後與從
正五位上源賴朝家戰死堀河年三十七
弟義重從源賴朝家戰死堀河年三十七
孫三郎源賴朝家戰死堀河年三十七
衆火屋舍不使賊踪率衆奪戰走之
衆追擊基長曰彼尋來降者何須窮追
衆乃止降者果多後為僧居高野山
幼名止降者果多後為僧居高野山
發故頭多帝引之戰年十四先與黃楊
以為行賞之信後叙正六仁上與父從
駕延曆寺戰後叙正六仁上與父從
實基長所生叙從四位下為檢非違使
彈正大弼伯著守正平十三年率族人
往肥後從征西將軍懷良親王勤王居

河野與兒島同姓世著於伊豫承久
役通信死王事其庶子分為兩家
任備後守帝御北條上與通言共舉
義討長門探題北條時直走之迎
調車駕于河原走之氏犯京師伐直
義于豐島河原走之氏犯京師伐直
稱於三郎尊氏再關與通治
拒於湊河不利從駕于關與通治
通治陳白島岡拒之有功義貞
奉皇太子略北國與通治及族
人徒行抵鹽津會大雪士馬凍
餒不能戰乃刀植地自盡死通
治從皇太子守金砂城自死通
衆自投通治通言曉諭能執節
始終人皆歎惜焉

通鄉

彈正

菊池氏

藤原隆家

政則

則隆

能隆

武房

隆盛

時隆

武時

武重

武敏

賴隆

隆章

任備前守與彈正並勇悍善戰奉賜屋
金谷經氏等共代細川賴春戰於十町
全經氏等共代細川賴春戰於十町
彈正某國走備後不知其所終
藤原隆家中納言太
宰權帥
寬仁中刀伊賊犯
西陸禦之有功
為太宰少監延久二年賜肥後
菊池郡子孫因家焉世著姓
承久之役奉教勤王
是武時大世祖也
日本外史系譜
武房文永弘安間擊
蒙古賊有功
隆盛與叔父武本爭地詐之鎌倉北條氏判
歸地於時隆武本憤遂與時隆相刺死
稱二弟時隆幸松上奉義旗伐鎮西探題
北條英時會小貳大友來救衆寡不敵
與次子等四人進戰死後捕正成奏曰
元弘功臣第一
武重建武中從義貞後守後為左京大夫
武敏軍重養為子為掃部助起兵本國應官
貳貞經氏攻太宰府焚其器械貞經自殺
賴隆英時俱戰沒
隆章後守護代從父戰沒

武吉 武光 武義 武士 武政 武朝

武吉 初七郎泰河之戰武重使往視其狀時官
武光 初七郎泰河之戰武重使往視其狀時官
武義 初七郎泰河之戰武重使往視其狀時官
武士 初七郎泰河之戰武重使往視其狀時官
武政 初七郎泰河之戰武重使往視其狀時官
武朝 初七郎泰河之戰武重使往視其狀時官

北畠氏

具平親王之後

源師重權大

親房

顯家

師戰不利... 顯家... 親房... 具平親王之後... 源師重權大

顯成

顯信

守親

顯能

顯泰

滿雅

顯時

顯國

顯成 侍吉野行在... 顯信 總督東國... 守親 賴尚言... 顯能 親王... 顯泰 右大臣... 滿雅 兵部... 顯時 親王... 顯國 國主...

日本外史卷之六新田氏正記

新田氏系譜

八幡太郎源義家 義國 從五位下式部大

義重 食新田郡 義包 義房 政氏

基氏 朝氏 皆襲色新田遂以為

義貞 初以北勝氏僅國金剛山得大塔官令
東歸舉義攻鎌倉高時伏誅帝在兵
庫上授書建武元年入朝叙從四位上
左兵衛督兼播磨守上野守護足利尊
氏授節刀奉皇子尊良東伐不利召
還禦賊官軍敗退要戰克之賊敗走逃
左近衛中將既而戰西上尊氏降款
奉皇太子往北國更為經略延元三年

日本外史系譜

攻藤島有飛矢中額終自刎而死年三十八

脇屋義助

入京為武勳義貞稱義兵建武初
之戰前鋒失利功拜古師之戰大克
尊氏西奔以功拜古師之戰大克
昇殿義貞戰後攻足利走高
經詣古野拜刑部卿伊豫人奏
請將帥使義助往第四國軍事
官軍復振其五月病卒諸軍沮
喪四國相尋陷沒

義治

從五位上左衛門尉式部大輔為金
崎後援伐高經新善光寺城取之由
是威名稍振與義興等擊尊氏于金
井原取鎌倉正平中與義宗起兵不
克奔出羽不知所終

義隆

包舉義軍白河氏滿將大兵來擊衆潰
脫走入陸奥後與氏滿遺兵鑒之二人遂
稱刑部少輔與義家子貞方同匿信濃

義顯

二來後逃匿箱根山中為人所告兵
士來捕乃聞死
稱小太郎每從父在征戰間以功為越
後守護大渡之戰躬力關被敵創帝臨
一之守金崎見兵八萬餘面城敵相拒
鐵以十餘人卒乃與兵十萬自陵城良久
見以下士卒悉自死得免者四人降者
幼僅十二人云
萬從德壽九延元二年應北畠氏將兵三
萬攻鎌倉俱西元二年戰青野頭家戰
沒前賜名信左衛門王師敗績奔吉野
御治攻鎌倉擊左衛門走之平七年與
或曰義宗于笛吹嶺將攻鎌倉二州既
敗再舉從之乃走河村清急約北畠
相與再舉從之乃走河村清急約北畠
發兵來捕忽已亡將匿請奉城後越諸
基氏頗惠囑我故將往來出沒等誘殺
于

義興

日本外史系譜
矢口渡後世立祠祀之云
兄義頭卒立為嗣時六歲任武藏守左
兵衛佐聽早殿與義興義治久陽東國
以同降其乘帝使由良誅尊氏乃御等
詮不可失其實授左近衛少將乃御等
追至石濱數萬人擊尊氏于金井原破
失據確義治攻越後取其半正平二十
與義興義治攻越後取其半正平二十
三年與義治攻越後取其半正平二十
為相繼守元中二年與義興義治攻越
浪合潛集宗族足利氏滿遣兵鑒之二
脫走入陸奥與氏滿遺兵鑒之二人遂
于白走氏滿將十一年與義興義治攻
覺復千葉兼胤所捕倉陰糾合義故事
實是而後大興事詳于才編云

義宗

貞方
實是而後大興事詳于才編云

貞方

實是而後大興事詳于才編云

日本外史自卷之七至九足利氏正記

足利氏系譜

八幡太郎源義家

義國為事關

義康

新田氏祖義重弟也仕鳥羽上皇為北

義清

利陸奧判官補藏人聽昇殿

義長

與平氏戰水島死之

義兼

上總義氏正四位下

賴氏

大治部家時式部

日本外史系譜

主

尊氏

初名高氏稱又太郎權大納言正二位

直義

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

直冬

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

冬氏

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

義詮

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

基氏

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

義滿

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

義滿

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

義滿

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

義滿

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

義滿

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

義滿

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

義滿

初名高氏又忠義左兵衛督征夷副

義滿

從二位權大納言

義時

從一位權大納言

義重

從一位權大納言

義嗣

從一位權大納言

義教

從一位權大納言

義昭

從一位權大納言

義勝

從一位權大納言

義政

從一位權大納言

義尚

從一位權大納言

義視

從一位權大納言

義材

從一位權大納言

政知

從一位權大納言

茶茶

從一位權大納言

義澄

從一位權大納言

義晴

從一位權大納言

義雄

從一位權大納言

義輝

從一位權大納言

義昭

從一位權大納言

義昭

從一位權大納言

義昭

從一位權大納言

義昭

從一位權大納言

義昭

從一位權大納言

義昭

從一位權大納言

義昭

從一位權大納言

依毛利氏居鞆津慶長二年薨贈准三

周島 居鹿苑寺為賊平田

義榮 依三好三黨冀望為將

義助 義種以後世實子阿波居平島呼平嶋

氏滿 幼名金王九關東管領從三位左兵衛

滿兼 安稱勝光院世呼其家号録倉御所

滿直 姪持氏自秋

滿隆 稱新御堂應永二十四年與姪持氏

滿貞 氏及義川殿同持

滿秀 為日光山別當

日本外史系譜

三

持氏 關東管領永享十一年與上杉憲實戰自殺于永安寺

義久 父同自賢王與

春王 父之亡時為乳母長尾氏所挈遁走日

安王 父仇嘉吉元年結城氏朝欲擊上杉氏復

成氏 初名永壽王左兵衛督稱

政氏 古河公方明應六年卒

高基 左馬頭左

義明 古兵衛佐号御弓御所天文七年與伊勢氏大戰中飛箭死

基賴

晴氏 左馬頭左兵衛督天文二十三年為北條氏康所滅老於關宿

義氏 實北條氏康所生嗣晴氏後為左馬頭

國朝 氏東伐求足利氏後得基賴孫國朝立

呼喜連川公方云野喜連川給五千石

日本外史系譜

五

日本外史卷之十足利氏後記

後北條氏系譜

平維衡 貞盛子也為是

正度 越前守

李衡 上總父子孫

貞行 仕足利義滿為奏者掌山納

貞國 父職掌

貞親 同伊勢守

貞藤 備中

日本外史系譜

〇二十五

長氏

稱新九郎初仕足利義親在伊勢後海
東國依婿夫令川義忠樹立稱北條氏
別號早雲永正十六年卒于龜山歲
八十八

氏綱

左京大夫天文十

氏康

左京大夫從五位下元龜

氏政

左京大夫從五位下天正十八年

氏輝

左京大夫從五位下

景虎

小字三郎為良

氏直

左京大夫從五位下相模

氏規

美濃守與氏直同入高野山

氏房

稱十郎與氏直〇自長氏國千相模至

氏盛

美濃

氏信

美濃

氏宗

久太

氏治

伊勢

氏朝

速江守世々相

北條氏勝

氏綱孫也稱左衛門大夫小田原

重氏

實保科正直子也氏勝養子大坂之役

日本外史系譜

〇二十六

日本外史卷之十一 足利氏後記

武田氏系譜

新羅三郎源義光 從五位上
稱武田氏者

義清

信光

信滿

信重

信成

信武

信宗

信綱

信時

信政

信光

信義

信清

信光

信實

信龍

義信

日本外史系譜

主

有信元子幼信重入為殿主結城之役
信重 信元子幼信重入為殿主結城之役
信滿 信元子幼信重入為殿主結城之役
信光 信元子幼信重入為殿主結城之役
信成 信元子幼信重入為殿主結城之役
信武 信元子幼信重入為殿主結城之役
信宗 信元子幼信重入為殿主結城之役
信綱 信元子幼信重入為殿主結城之役
信時 信元子幼信重入為殿主結城之役
信政 信元子幼信重入為殿主結城之役
信光 信元子幼信重入為殿主結城之役
信義 信元子幼信重入為殿主結城之役
信清 信元子幼信重入為殿主結城之役
信光 信元子幼信重入為殿主結城之役
信實 信元子幼信重入為殿主結城之役
信龍 信元子幼信重入為殿主結城之役
義信 信元子幼信重入為殿主結城之役

信守
信昌
信龍
信虎

上杉氏系譜 本長尾氏

鎌倉權五郎景政 平良文十
景弘 景政五世孫也

藤景 長尾氏嗣也 養上杉藤景為嗣實藤原

為景 藤原十二世後也 食丹波上杉邑因氏焉

晴景 天文十六年為一向賊將江波某所誘殺

日本外史系譜

天

景康 為權臣昭田
景房 與景康被殺

輝虎 小字虎千代 更名景虎 削髮號謙信 彈

景虎 為三郎實北 傳氏康子 天正七年

景勝 為喜平次 從三位中納言 景子 元祿九年卒

定勝 彈正少將 景子 元祿九年卒

綱勝 侍從 景子 元祿九年卒

綱憲 實吉良上野公義

英子 彈正大野

勝賴 稱四郎 承訪賴後 大正十年為鐵

信貞 稱三郎 勝賴後 與從

信勝 稱太郎 直承信玄後

景成
景政
白景武其弘
從勝景至為景
之系未詳

日本外史卷之十二 足利氏後記

毛利氏系譜 本姓土師宿祢

備中 介本主 出於阿保親王

音人 從三位左大臣 阿保親王

千古 從四位上 伊豫權

匡房 正二位 兼大藏卿 世稱江帥

廣元 右近衛將監 久部心輔 從五位下 武藏

親廣 右近衛將監 久部心輔 從五位下 武藏

李光 左近衛將監 久部心輔 從五位下 武藏

日本外史系譜

三九

廣元

維光

成實

重光

重光

重光

重光

重光

重光

就勝 總領事 發覺見殺

元就 小字和壽 少輔 弘元 從四位下

興元 備中守 弘元 從四位下

豐元 仁治部少輔 弘元 從四位下

直衡 守越後 弘元 從四位下

匡時 少輔 弘元 從四位下

師親 備中守 弘元 從四位下

貞親 左近衛將監 弘元 從四位下

經光 左近衛將監 弘元 從四位下

時親 波羅理亮 弘元 從四位下

親茂 備中守 弘元 從四位下

廣房 備中守 弘元 從四位下

光房 備中守 弘元 從四位下

熙房 備中守 弘元 從四位下

弘元 備中守 弘元 從四位下

幸松 備中守 弘元 從四位下

元就 備中守 弘元 從四位下

元就 備中守 弘元 從四位下

元就 備中守 弘元 從四位下

元就 備中守 弘元 從四位下

元就 備中守 弘元 從四位下

元就 備中守 弘元 從四位下

元就 備中守 弘元 從四位下

元就 備中守 弘元 從四位下

元就 備中守 弘元 從四位下

元就 備中守 弘元 從四位下

元就 備中守 弘元 從四位下

秀元 備中守 弘元 從四位下

日本外史系譜

三九

隆元 備中守 弘元 從四位下

元春 備中守 弘元 從四位下

隆景 備中守 弘元 從四位下

元秋 備中守 弘元 從四位下

元清 備中守 弘元 從四位下

元政 備中守 弘元 從四位下

元康 備中守 弘元 從四位下

元綱 備中守 弘元 從四位下

秀包 備中守 弘元 從四位下

輝元 備中守 弘元 從四位下

秀元 備中守 弘元 從四位下

秀就 備中守 弘元 從四位下

就隆 備中守 弘元 從四位下

元知 備中守 弘元 從四位下

元長 備中守 弘元 從四位下

元氏 備中守 弘元 從四位下

廣家 備中守 弘元 從四位下

秀秋 備中守 弘元 從四位下

森高 備中守 弘元 從四位下

日本外史卷之十三十四德川氏前記

織田氏系譜

親真 親基 親行 行廣 太廣 基實 廣村 兵昌 常勝 常任 勝久 久長 敏定

平重盛 內大臣正二位

資盛 新三位中將越前守

親真 稱權大夫元醫中平氏舉族死亡母懷

敏定 親真十五世孫也稱三

敏信 左馬助守事斯波義敏

信定 正忠 彦五郎 秀龍下稱義就

日本外史系譜

信秀 彈正忠備後

信光 稱津田孫三郎內

信次 稱孫長島一右衛門尉上野

信廣 正二年與信次同戰死

信長 幼字吉法師右大臣從二位兼右近衛

信包 上總父

信行 稱勳十郎武藏守有奪嫡之

信澄 稱七兵衛尉為明智秀女婿故

信治 稱九郎元龜元年

信時 守安藝

信興 稱孝七元龜二年與一

秀成 稱年戰死左衛門尉天正二

長益 稱源吾從四位下

長正 稱雲生奇丹後

尚長 武藏守一曰大和守從

信忠 幼字奇妙從三位左近衛中將

信雄 幼字茶筌為北畠氏後從二位內大

信孝 幼字三七為神戶氏後天正十

日本外史系譜

秀勝 次九為秀吉所養封于丹波左近

勝長 稱源三郎

秀信 原敗後逃于高野山數歲卒

秀雄 萬石先父卒于大野國除

信良 兵部大輔從四位下少將食

信友 食大和守多郡後從丹波柏原守

日本外史從十五至十七之卷德川氏前記

豐臣氏系譜

○彌助 尾張愛智郡中邑人

○號阿彌 秀之僕、秀吉之繼父、

秀吉

秀長

秀俊

女某

秀勝

秀次

秀秋

鶴松

秀頼

小字曰吉、自稱木下藤吉、又羽柴氏、
關白太政大臣賜姓、豐臣、天正十九
年致仕、自稱太閤、慶長三年八月薨、
年六十三、詔賜號豐國明神、
秀吉異父弟也、小字小一郎、仕大納
言、稱大和、大納言、天正十九年卒、
實秀次弟也、為秀長嗣、任大
納言、後蜻蛉瀑死、無嗣、國除、
日本外史系譜

秀吉異父妹、初諱佐治、
日向後嫁德川東照公、
實織田右府之子、太閤養為
子、封于丹波、稱丹波少將、
太閤妹也、始稱三好、菜為豐臣氏嗣
除正二位、關白、文祿四年有罪、見放、高
野山、廢為庶人、令自裁、
太閤夫人淺井氏之兄、木下家定子
也、太閤養為子、出為小早川隆景嗣、
天正十九年氏出、
幼字棄丸、從一位右大臣、元和元年大
坂城陷、自盡、豐臣氏滅矣、有一男一女、
男名國松、南八歲、皆捕見殺、

日本外史自十八至二十二之卷德川氏正記

德川氏系譜

清和天皇

經基王 天皇孫也始

義家

經基之孫也 義國 居上野縣新

義重

式部大輔 氏新田守寺尾城

義康

判官 氏足利與義重

義季

共助 賴朝討滅平氏

賴氏

邑因氏馬稱四郎 食德川

敦氏

郎二 家持 二郎

日本外史系譜

○三四

滿義

二孫 修理亮 助新田義貞

親李

討滅北條氏 子鍾倉

有親

右京亮 從新田貞方起兵 陸奥不克逃

親氏

初子長阿弥 廣親 新五郎是

泰親

初子德壽 養子松平氏 稱太郎左衛門

信廣

門居松平村 下後世良田氏

信光

幼子次郎三郎 和泉守居岡

親忠

代子也 幼字竹十 男女四十餘人

親長

稱太郎 修理 居岩津

神皇正統記

乘元 稱源太郎 加賀守 宇大給

長親 出雲守 居安詳

親房 允馬

超譽 住智

親光 丞利部

長家 安祥左

長忠 右京

乘清 加賀右衛門

信忠 居安祥 左京亮 大

親盛 永福三年 老左京亮 大

日本外史系譜

○三五

信定 稱與一 郎又

利長 稱藤井內膳正 郎又

義春 稱甚太 郎又

清康 小字次郎 二郎 居岡 奇國人 稱曰岡崎

信孝 稱三木

康孝 稱鶴殿 十

廣忠 稱二郎 三郎 任參河守 天文十八

成譽 幼字竹十 代稱二 郎三 郎名元信 更元

家康 幼字竹十 代稱二 郎三 郎名元信 更元

日本外史系譜終

官許明治八年一月

同四月發兌

三都

大坂

柳原喜兵衛

岡田茂兵衛

淺井吉兵衛

西京

村上勘兵衛

書林

東京

勝村次右衛門

稻田佐兵衛

山中市兵衛

牧野吉兵衛

甲府

内藤傳右衛門藏版

名取善十郎等 編

日本外史補系譜

明治八年（一八七五）甲府溫故堂刻本

據明治八年（一八七五）甲府溫故
堂刻本影印

明治八年四月刻成

名取善十郎
穴水朝次郎
輯述

日本外史補系譜

甲府書林

内藤温故堂藏版

跋

○日本外史系譜序

○

補

附

○日本外史系譜序

○二

寶

明治八年正月

鈴木利雄

○日本外史系譜序

○三

○北昌氏

村上天皇

具平親王

二品中務卿、稱後中書王、又十種殿、又六條宮、母中務卿代明親王女、從四位上王女

源師房

仁中賜姓源朝臣、從一位太政大臣、贈正一位、土御門

顯房

右近衛大將、贈正一位、右大臣、稱六條右府

雅實

從一位太政大臣、稱久我氏、雅髮跡、遺覺

○日本外史補系譜

○一

雅定

右大臣、稱中院氏、雅髮跡、遺如

通方

稱土御門大納言、雅定曾孫也

雅家

通方第三子也、稱北昌氏、又萬里小路

師親

權大

師重

權大

親房

准三宮、從一位右近衛大將、或稱中院氏、剃髮宗玄、薨年六十二

顯家

鎮守府大將軍、推中納言、從一位、戰、薨、年二十一、贈從一位、右大臣

顯成

檢非違使、別當、從二位、權大納言、後村上帝侍、吉野行在

顯信

右大臣、從三位、中納言、戰、没于筑前大

甲斐國

名取善十郎

輯述

穴水朝次郎

守親

親能

子孫在、隱與山、羽者稱、成國氏、雅國司

顯泰一作顯康

顯能 右大臣、從三位、準三宮、伊勢國司、或曰源貞平之子、親房子養之云

顯雄

官位

中宮

入後村上帝宮、為女御、進中宮

信親

中納言

守親

大納言、陸奥國司

親統

官位

顯泰

正二位、權大納言、兼右近衛大將

顯俊

稱木造氏

俊康

持康

○日本外史補系譜

○二

雅俊

初名

滿泰

親能、左近衛

滿雅

中將、稱大河

顯雅

內氏

教具

從二位、權大納言

政卿

從四位上、右近衛中將、剃髮、無外、逸方

親鄉

出繼大

村親

正三位、權大納言、剃髮、稱江心

親忠

與親忠並出、繼大河內氏

親泰

與親忠並出、繼大河內氏

孝緣東興福寺別當

具威出繼神戶

晴具從四位下參議

具教言辨三位權中納

具政繼木造氏

具親為南都東院主

具房左近衛少將平信長子

親顯正四位下參議實中院中

○日本外史補系譜

○上

姓氏錄云多良
公任那國主備利
久年王之授也欽
明帝朝長化

正恒從四位上

藤根

宗範

茂村

保威

弘真

貞長

貞威

弘威

滿威

威房

貞威

一本大内系圖
作義弘子弘茂

○大内氏

百濟王餘璋

琳聖

正恒

滿威

弘成

重弘

弘世

義弘

推古天皇時授化
居周防多々良濱

賜姓多良從居大
内子孫以大内為氏

正恒之裔也事源
賴朝任周防守

弘貞

弘幸

從五位上同防權
介長門石見守護

弘太從四位上左京權
大夫華髮卿有繁一作佛實

○日本外史補系譜

○下

滿弘從三位守

弘茂從三位

威見從三位

持世從四位上刑部少輔周
防權介長門石見守護

持威

教弘從四位下左京太
夫承持世後為嗣

教幸從四位上

政弘從四位上

義興從三位

高弘從三位

義隆太宰大貳周防長門二位前
 義房實義隆姊夫土佐國司一係
 信房實前關白藤原義子三位中將

○日本外史補系譜

○五

義家
義國
義康
義兼
義氏
長氏
滿氏上總介左衛門尉

○今川氏

源義家

義康義家孫也

長氏義康四世之孫領參河吉良莊稱五郎左衛門

滿氏稱吉良氏

國氏稱四郎長氏携國氏老于幡豆郡今川村因氏焉

基氏稱藏人太

範國稱五郎削髮歸心省屬足利尊氏為遠江及駿河守護

範氏稱五郎中務大輔上總介

○日本外史補系譜

○六

貞世稱三郎正四位下遠江守護左京亮伊豫守九州探題削髮歸了俊

貞臣從四位下伊豫守

氏兼後改直世守正少弼越前守

仲秋初名國泰後賴泰左衛門佐中務少輔為貞世養子襲其封號更名仲高

直世

氏家上總介

泰範上總介氏

範政上總介氏

範忠上總介治

義忠上總介

氏親 修理大夫

僧大原 為清見寺主

氏輝 上總介

義元 從四位下

氏直 從四位下 刑部大輔兼上總介 削髮歸宗

範以 左馬

高久 新六郎 德川台德公給祿千石 更姓品川以別宗家

澄存

範英 德川台德公給祿五百石 世襲今川氏及大猷公時加給五百石云

○日本外史補系譜

〇七

義光

義清 武田氏

遠光 加賀見

女孫之字 忍也

○三好氏

源義光 新羅三郎

遠光 義光之玄孫 也任信濃守

光朝 秋山

長清 生千甲 雙小笠原 終加賀養二郎 左京大夫 相模信濃守 阿波守 義

長房 長清次子 居阿波 三好郡 因氏 為屬細川氏部下 為阿波守 義

義長 長房八世孫也

之長 義長孫也 更名長輝 終筑前守 事細川義春 為家宰 削髮歸奇雲

長秀

賴澄 與兄長秀共為北畠材親所殺

○日本外史補系譜

〇八

長則

長光 與父奇雲兄長則共為細川尚春所殺

元長 終筑前守 以嫡孫直承 奇雲後嗣 髮歸海雲

範長 知名千熊 終孫次郎 更名長慶 終筑前守 從四位下 修理大夫

實休

冬康 攝津守 為後 路安宅氏後 存保 出繼十河 一存 後

一存 左衛門督 為續 岐十河氏後

慶興 終孫次郎 任筑前守 更名義長 一存

義誥 終左京大夫 實一存 子也 長慶養為嗣

○自長房起阿波至義誥十四世三百八十餘年而亡

姓氏錄左京將恭
上
泰造泰始皇帝
五世孫融通王之
後也

○長曾我部氏

秦河勝山城葛野人事于

能俊河勝二十世之裔自信濃徒

信能俊河勝二十世之裔自信濃徒

兼能兼綱能重元親

文兼元門兼序

國親知字十雄削髮肺覺世

○日本外史補系譜 ○九

元親稱宮内少輔正四

親貞稱左京進親實稱左京進

親泰長養為子秀

親房

信親

親和稱五郎次郎為

親忠津野勝次郎為

盛親髮初名祐夢

○島津氏 明國音呼島津為石曼子

源賴朝征夷大將軍正二位

忠久初為惟宗廣言登月姓惟宗後更島津

忠國修理亮陸奥守

友久稱又七郎右馬頭相模守

忠良門相模守

春久陸奥守

忠治陸奥守

忠隆陸奥守

勝久初名忠義稱八郎修理

貴久下修理大夫陸奥守

義久初名忠義稱八郎修理

義弘初名忠義稱八郎修理

歲久初名忠義稱八郎修理

家久初名忠義稱八郎修理

久保初名忠義稱八郎修理

家久初名忠義稱八郎修理

光久初名忠義稱八郎修理

○日本外史補系譜 ○十

能直嘗為中原親
能所子養後復本
姓始以次友為氏
為左近將監任量
俊守善檢非遺使
子孫襲為守護
奉行世雄西土

藩幹譜曰
能直 丹波次官
中庶親能子
也實親能親
嫡男母次友
郎次友藤原
親家女云

親本
親泰
親時
貞親
貞宗
貞親
氏泰
宗匡
親著
親世
親著
親隆
孝親
親綱
親繁
政親
親治

○大友氏

源賴朝爭大友經家女利根屋有身賜
藤原親範生能直舅外祖姓稱大友氏
能直 初字市法師為左近衛將監豐後前
守鎮五世探也左近衛將監

貞宗 能直五世探也左近衛將監
兼近江守藤原具簡

貞順

貞載 三郎九近衛將監
立花為結城親光所終

宗匡

氏泰 足利尊氏授以源氏大炊助式部大友
氏行 氏泰嗣

氏時 為氏泰嗣
刑部大輔

○日本外史補系譜

○十一

親世 修理權太夫
親著 承親祖高

親著

持直 親著立嗣
親隆 承親為嗣

孝親 自執親著
親綱 承親為嗣

親繁 承親為嗣
政親 承親為嗣

親治 承親為嗣

親治 承親為嗣

親治 承親為嗣

義右 見政親
義長

立花親將監宗匡
親直
親政
宗政
鑑光
鑑俊
親善
鑑連
按親善者鑑載初
名
重次初孫高橋氏
重次後伯姓云

義鑑 從三位左馬頭為其臣田
義武 肥後
義鎮 宗親
義長 內氏
八郎某

義統 有罪被放
義延 孫世為屬下主云

義統 有罪被放
義延 孫世為屬下主云

義統 有罪被放
義延 孫世為屬下主云

○日本外史補系譜

○十二

○立花氏

鑑載 能直裔宗匡六世孫
也世為立花親主

鑑連 本戶次氏承鑑載後戶次氏亦出於
鑑直商戶火重秀鑑連其五世孫也

宗茂 初名統虎實高橋鑑連子鑑連養為
從前髮跡立齋

忠茂 初字千熊九左近衛將監從四
位下侍從飛騨守致仕號好雲

直次 初名統增飛騨守致仕號好雲
氏正東照公賜祿五十石冒姓立花

種次 從五位下主膳正兩
家子孫相繼至今云

淺井系圖

公綱

公雅

雅綱

公政

祐政

長政

○淺井氏

三條大納言藤原公綱

嘉祿中得罪貶近江守
食野村持清居淺井郡

重政

父殿中所生及長事持
清領淺井郡因氏焉

忠政

賢政

教政

守新次郎駿河
守更赤尾

亮政

前守使五位下
守新三郎自稱備

政信

大和守
守新助

久政

如守新九郎更下
守野守叙從五位下

○日本外史補系譜

○十三

長政

守新九郎備前守從五位下
寬文九年贈從三位中納言

萬壽

長所織田信
長所殺

次子某

母生始四月乳
懷北逃

長女

妃淀君豐臣太閤
秀賴母也

次女

桓氏

三女

皇后德川台德公即大猷公及東福
母也贈從一位稱崇源院

○朝倉氏

孝德天皇

有間皇子

居紀伊藤代齋明
帝四年謀反伏誅

表米

天智帝時拒外寇以功賜姓日下部為
但馬養父郡大領卒後祀為神號赤淵

乙長

表米後
五世也

磯經

仕朝來郡大領
居朝倉因氏焉

高主

磯主後九世也林太郎太夫事平氏
及源氏興失其米邑後有功復旧邑

廣景

利高經領越前坂井郡居黑九城
高景後七世也林孫右衛門事足

○日本外史補系譜

○十四

正景

從足利尊氏有功賜其偏名曰高景為
遠江守後輔斯波義持世為家宰云

氏景

守美作
貞景守下野
教景守美濃

家景

下野守左
衛門尉

敏景

稱彈正左衛門代斯波義
敏治一乘谷削髮號美林

遠江

為教賀
景豐

氏景

稱小太郎敏景第五子也
為敦賀郡司削髮號宗滿

教景

為敦賀郡司削髮號宗滿

景紀

稱孫九郎更
九郎左衛門

貞景

稱彈正左
衛門

景高

孝景

稱彈正左衛門尉

景隆

信景
稱孫次郎更義
景任左衛門督

○日本外史補系譜

○十五

日本史烈傳

新羅王

天日槍

但馬諸助

但馬諸持

清彥

田道間守

姓氏錄石京諸家

下三宅連新羅

國王子天日槍命

之後也

○宇喜田氏

水姓
三宅

百濟王

天日槍
垂仁帝三年
歸化居但馬

和田範長

天日槍裔也
居備前邑久郡和田
和備後守延元元年死
事

兒島高德

稱備後三郎王師敗削髮
歸志純
伊勢連參河生三子云

高秀

自高秀至族
家之系未詳

能家

高秀之後裔也
事赤松氏
出浦上則宗稱和泉守

興家

直家

稱八郎從五
位下和泉守

忠家

稱七郎任
出雲守

日本外史補系譜

○十六

春家

龜松

大

秀家

左近衛中將從三位參議權中納言
諡八大島卒島中謫居五十年年八十

秀勝

稱八郎同父
諡八大島

○里見氏

新田義重

林太郎從五位下大炊助、薙髮
更名上西牧膳鎮守府將軍

義俊

食邑於上野礪波郡里見太郎
見因氏焉、里見太郎

義成

林里見冠者從五位下伊賀守

義直

殷富門院藏人判官代承久
中賜美濃國光寺村住焉

義秀

判官小太郎

忠義

少輔任刑部

義胤

林五郎刑部少輔移居上野

義連

少輔任刑部

基義

少輔

家兼

備後守

家基

大炊助假
月足利氏

義實

林左馬助

○日本外史補系譜

○一七

成義

幼字若松更林里見刑部大輔

義通

上總

義豐

幼字竹若

實堯

左兵衛督

義堯

刑部大輔、刑部左馬頭、泰叟、人

義弘

左馬頭、國人、人

義頼

林太郎

梅王

義康

四位侍從、安房守

忠義

幼名謀鶴、德川台德公賜偏名從四位、侍從、安房守、慶長十九年有罪配伯耆、元和八年卒、配所里見氏亡

伊達系圖

○伊達氏

河邊左大臣藤原魚名

正二位兼太宰帥

中納言山陰

魚名女孫也、從三位兼民部卿

藏人朝宗

山陰之裔也、文治中從常陸中村住

宗村

任常陸介從源賴朝代藤原泰衡以切、領陸奥伊達郡因氏焉、後削髮號念西

政宗

念西之後也

氏宗

少輔任兵部

泰宗

兵部少輔

成宗

文明中為陸奥守護

尚宗

大膳

植宗

為陸奥探題

晴宗

左京大夫

○日本外史補系譜

○一八

輝宗

左京大夫

政景

上野介

政宗

知名覺天參議權中納言

秀宗

侍從、熱遠江守從四位下、封伊豫守和島十萬石

忠宗

從四位下、少將、燕陸奥守

按伊達便覽志系譜所引也

左大臣魚名

肥前守實宗

轉常陸、陸奥、常陸、陸奥、中村

藏人侍從秀宗 任下野守從下野聞賀
野後復從常陸真壁郡

助宗

光隆

藏人朝宗 母源為義女
以政事類朝 有宗 大

重宗

村宗 為朝宗嗣文治中封
伊達郡因稱伊達氏

據此則自朝宗高祖實宗時從常陸中村矣錄以備考云、

○日本外史補系譜

○十九

修理大夫藏賴

直家

滿直

滿家

義春

義秋

滿氏

義淳

義定

義守

○寂上氏

源義家 位八幡太郎正四
位下鎮守府將軍

足利義國 式部大輔居
上野新田聚

家兼 義國八世
孫伊豫守

兼賴 家兼次子也修理大夫事足利尊氏為
出羽按察使從寂上郡因氏焉治于山

義守 兼賴
裔也 義光 從四位下左
兵衛權少將

義康 修理
大夫

家親 從五位下
駿河守

○日本外史補系譜

○二十

義成 稱大藏
大輔

義俊 從近江食
一萬石

義智 嗣甫三歲削封
半食五十石

左大臣源名
藤成
豐澤
村雄
秀卿
千時
千晴
千常

○蒲生氏

鎮守府將軍藤原秀郷從四位下 下野
武藏而國守

千晴秀郷之次
子相模介

雅俊稱太郎自陸奥徙近
江蒲生郡因氏焉

俊賢事源
賴朝

秀朝俊賢後七世建武中
屬足利尊氏有功

貞秀秀朝後七世左兵衛
大夫前髮辨智閑

秀行利部大輔事
足利義輝
秀紀稱藤
左衛門大夫

高郷左衛門大夫
事六角義賢

○日本外史補系譜

○主

定秀稱藤十郎
下野守

賢秀稱藤太郎後左兵衛
大夫共事六角氏

氏郷初名賦秀稱藤三郎更忠三郎飛彈守
從三位參議食與羽一百二十萬石

秀行飛彈守從四位下侍
從食會津六十萬石

忠郷下野守從四位上參議卒無
子祀純實寬永四年正月也

日本外史補系譜了

日本外史補系譜

官許明治八年一月

同四月發兌

三都

大坂

柳原喜兵衛

岡田茂兵衛

淺井吉兵衛

西京

村上勘兵衛

書林

東京

勝村次右衛門

稻田佐兵衛

山中兵衛

牧野吉兵衛

甲府

内藤傳右衛門藏版

大槻磐溪 著

國詩史略

明治四年（一八七一）東京須原屋伊八刻本

據明治四年（一八七二）東京須原屋
伊八刻本影印

國詩史畧叙

我瑞穗之國縱橫六萬里上下
三千丰畝網羅其盛衰治亂之
蹟於區區小詩中多遺漏踈脫
可知矣雖然百風氣之升降世

咬菜園七種

國詩史畧卷二 序一

石原隱居

態之變遷以俟文運之興廢與
夫聖主賢相忠臣義士英雄
豪傑之成敗得失或述之叙事
或發諸議論賡穿馳騁細大靡
遺式之括之二十八字凡二百

有餘皆庶幾足使小子後生瞻

於國事者吟詠諷誦以爲他日
讀全史之道也與蓋詩文之道
譬諸瑞穗之精炊而爲飯文之
實也釀而爲酒詩之華也然飯

咬菜園七種

國詩史畧卷二 序二

石原隱居

之用止於可以飽耳酒則可以
醉可以歌可以歡笑而起舞則
文之實有時乎不若詩之華也
是余作詩史畧之本志讀者其
亦諒其婆心可也

慶應丁卯嘉平月

磐溪老人平宗識

明治五年歲在辛卯春三月書於
天京寓次 鎮鼎山推曾崇

咬菜園七種

國詩史畧卷上 序三

石原隱居

國詩史畧卷之上

仙臺 大槻清崇 著

神武帝朝二首 帝元年辛酉即東周惠王十七年

辛酉紀元垂紗長人皇一世是真王地天通絕民神判此理茫茫不可量

掃蕩妖氛百恠沈秋津洲立有誰侵欲知一姓綿綿盛明達確如基業深

咬菜園七種 國詩史畧卷之一 石原厚房

帝天照大神五世孫也生而明達意確如也 三十一一年國號秋津洲

崇神帝朝一首 元年甲申即漢武帝天漢四年

無為九世仰堯階傳到瑞籬文武開四道將軍

巡察遍威靈始見任那來

自神武十傳至崇神遷於磯城曰瑞籬宮十年始置將軍於四道任那始入貢

聖仁帝朝三首 元年乙酉即後漢光武建武元年

君王枕膝睡哈嚙為怨吾兄暗淚催自有妾心

通帝夢錦蛇繞頸兩方來

皇后兄狹穗彥謀反授后七首圖之后悲懼交至波落帝面帝驚寤曰朕夢云云后告實曰錦蛇七首雨乃妾淚已帝曰是非汝罪也命將討狹穗彥皇后與兄俱焚死何物力人誇絕倫雲州野見獨爭衡朝天一蹶

奚其速成此當場蹶速名

當麻蹶速與野見宿禰角力於御前蹶速折其胛骨而斃朝廷有相撲儀始于此

一洗生理蹄哭風象人土偶奏奇功只言作偏竟無後傳到千年管相公

帝三十二年野見宿禰獻土偶代殉死 按菅公野見氏裔

咬菜園一種 國詩史畧卷之一 石原厚房

景行帝朝二首 元年辛未即後漢明帝永平十四年

赫怒手加黃鉞誅不恭熊襲距邦初得非餘賊

表心服來獻西溟赤腹魚

十二年筑紫熊襲叛帝親征誅其巨魁餘眾咸降海人始上腹赤魚

萬里東征奏凱回碓氷嶺上遠洋開投身激浪

知何處腸斷吾妻喚不來

四十年東夷叛帝遣皇子日本武代征路逢暴風妃捕姬投海而死風乃止

仲哀帝朝二首 元年壬申即後漢獻帝初平三年

錦登_二中_一拜丈夫裝一片降旗我武揚不惟三韓

容易服胎中負_レ勒有_二天皇_一

神功皇后征新羅路生皇子腕肉如勒名曰譽田又稱胎中天皇

滿載綾羅爛似山西藩歲貢八十船何知當日

封珍寶圖籍文書收得還

新羅王中降右進入國都封重寶府庫獨收圖籍文書而還我邦傳文字蓋始此

應神帝朝三首元年庚寅即晉武帝泰始六年上距神武八百二十八年

怡怡色養只承顏母后垂簾馭九寰六十餘年

咬菜園七種 國詩史畧卷二 三 石原隱居

皇太子曾無嫌隙見其間

帝生三歲為皇太子七十一歲乃即位儲位蓋六十七年

淳龐漸散運將中八百餘年太古風不獨東韓

獻論語勾吳遙貢織縫工

十六年百濟王仁來獻論語千字文吾邦傳經典始此

驚恠_レ姜兮誤聖聽五朝元老殆蒙刑誰將肖貌

代君死成就大臣三百齡

武內弟甘美內誣兄以謀反帝遣使殺之有真根子者隱其忠代死武內訴冤釋之

仁德帝朝二首元年癸酉即晉愍帝建興元年

三年讓位意何公孤竹弟兄名欲空却愛遠人

歌頌好臘梅春發浪華風

皇太子稱即子與兄大鷦鷯相讓三年太子知其志不可奪自殺兄乃即位韓人

王仁作和歌以頌之開耶木華歌即是

卑宮薄食勸農耕一旦登高無限情萬竈炊煙

接天起午鷄聲裡覺春生

或云登高臺歌後人追頌之詞非帝御製余未決其是否

咬菜園七種 國詩史畧卷上 四 石原隱居

履中帝朝一首元年庚子即東晉安帝隆安四年

龍舟晴泛市磯風一片花飄御盞中寒節逢春

亦天意遷都新造稚櫻宮

帝遷都磐余是冬宴園池花墜杯中帝疑其非時侍臣得花枝以獻帝悅名宮稚櫻

允恭帝朝一首元年壬子即東晉安帝義熙八年

予是天生篤疾人溫溫克讓泣群臣忍妃捧水

凍將死呼返明香宮裡春

忍妃即忍坂大中姬帝即位於達明日香宮

安康帝朝一首

元年甲午即宋孝武帝孝建元年

昏惑誤誅皇林初奪妻為后計尤疎令而得反何容易七歲眉輪游戲餘

皇林即大草香皇子帝信讒殺之又納其妻中蒂姬為皇后眉輪王大草香之子

雄畧帝朝一首

元年丁酉即宋孝武帝大明元年

君王嗜殺擅狂威自有英明悔昨非一諫同車游獵樂山豬并獲善言歸

帝獵葛城山野豬突至命舍人刺之舍人怖而避之豬觸帝蹴殺之將斬舍人皇后

咬菜園七種

國詩史畧卷上

五

石原隱居

諫曰以獸殺人無乃不可乎帝欣然曰獵者獲禽朕獲善言樂哉遂與后上車而歸

清寧帝朝一首

元年庚申即齊高帝建元二年

不輕殺戮不荒禽薶栗宮成帝德深親錄囚徒

察風俗生來白髮愛民心

帝生而白髮及長愛民遂即位於薶栗宮

顯宗帝朝二首

元年乙丑即齊武帝永明三年

弟兄遜位歲過三二計相推更美談他日重熙

聖天子稚郎死讓豈無慚

顯宗諱彧計

非讐是后偶相忘悲父念深迷大綱咄咄將為伍員續阿兄一諫泣天皇

顯宗悲父非命欲殺雄畧陵仁賢固諫而止仁賢顯宗兄

繼體帝朝一首

元年丁亥即梁武帝天監六年

北鄙羈人帝室疏尊嚴正色入宮初前朝敝政居然改致意農桑萬姓蘇

帝應神五世之孫先帝崩無嗣大臣定策迎帝於越前立之即位之初詔勸農桑

咬菜園七種

國詩史畧卷上

六

石原隱居

宣化帝朝一首

元年丙辰即梁武帝大同二年

千載鍾情佐用媛化為貞石豈虛文幾度登高瞻望遠領巾麾盡任那雲

帝二年新羅侵任那遣使于焉等援之其妾佐用媛悲不自禁登山望之遂化石云

蓋望夫石之類

欽明帝朝二首

元年庚申即梁武帝大同六年

金像齋來百濟王贊稱佛德說無量倉梯飛禍

平城穢遺毒昭然日月傷

並聽兩議斷公平。皇帝之明真箇明。焚滅伽藍。投佛像。笑看梁武餓臺城。

帝十三年百濟王明始獻釋迦金像及經論曰此法能生無量無邊福德果報帝盜群臣蘇我稻目進曰宜尊禮物部尾與等曰今并蕃神恐致國神譴怒帝遂從尾與等議投佛像於難波堀江悉焚伽藍按梁武帝殂於帝十一年距佛法入於我邦僅二年

崇峻帝朝一首 元年戊申即隋文帝開皇八年

佛法東來王業衰。當時惑溺孰其魁。千秋遺恨

咬菜園七種 國詩史畧卷上 七 石原隱居

紆機會不斫豬頭絕禍胎。

帝惡馬子驕縱欲加殺戮以其與厩戶俱好佛交厚故固諫而止會有獻山豬帝指曰安得斷朕所惡頭如此豬乎馬子大懼遂殺帝

推古帝朝二首 元年癸丑即隋文帝開皇十三年

謾道豐聰耳有神。一時訴訟聽十人。如今攝政兼無眼。逆賊居然位大臣。

是為女主之始推古之立也不親萬機命皇太子厩戶攝政馬子以與太子善其為大臣如故

瞿曇懲惡亦非私。太子聰明知不知。弒逆誅之。過去報十條。憲法欲何為。

按憲法六曰見惡必匡十一曰宣明賞罰皆非太子自罪之言乎

皇極帝朝三首 元年壬寅即唐太宗貞觀十六年

斑鳩自縊立慈悲。蘇賊志成威。福移泉下上官

應謝佛。黨奸業報在吾兒。

皇孫山背王入斑鳩寺為入鹿所襲王與子弟妃妾俱縊而死厩戶子孫於是悉絕

趙陪蹴鞠鞠將飛。靴脫匆匆跪奉之。他日同心

咬菜園七種 國詩史畧卷上 八 石原隱居

戮妖鹿。深沈定計是斯時。

鎌足欲與中大兄俱舉事未有由偶陪其蹴鞠遂得親近以相濟焉

天威咫尺九賓列。奉表舞陽振恐初。殿前斫賊

何其快。不似荊卿劍術疎。

帝四年六月韓使入貢中大兄與鎌足合謀誅入鹿於鞠座之前按石川麻呂讀表文手戰聲頭頗似秦舞陽

孝德帝朝一首 元年乙巳即唐太宗貞觀十九年

大化紀元年號初。良規懿範不勝書。仰欽宸是

王言富自正正人何藹如

是為年滿之始二年戒諸國曰凡欲
致治者當先正己而後正人如不自正何
能正人可不慎哉

齊明帝朝一首 元年乙卯即唐高宗永徽六年

武尊田道再長驅未見蝦夷歸版圖一蹴羊蹄

侵肅慎破天荒在比羅夫

帝五年遣阿部比羅夫再討蝦夷進至內
入龍以後於羊蹄為政所置郡鎮遂伐肅
慎虜四十
九人以歸

咬菜園七種 國詩史卷十九

天智帝朝二首 元年戊辰即唐高宗總章元年

退讓恬然避下風即天偉業跡將空却裁制度

定朝典景仰中興滋賀宮

曾戮元光安九重制儀定律翼中宗槐門世福

藤家祖千古雲高多武峯

帝歷孝德齊明二朝在儲位十餘年若將
終身母帝崩尚素服稱制六年而登祚其
無所利之心蓋天性也大織冠鑲足公與
之戮力協心以成中興之業蓋君臣遭遇
今古無二
者非耶

帝大友朝二首 元年壬申即唐高宗咸亨三年

風骨非常眼射人老翁捧日夢中文何圖巨猾
來伺隙一舉兩分天下雲

帝為人魁偉眼光射人嘗夢有朱衣老翁
捧日授帝有人奪去無足歎曰恐有巨猾

帝德載天地三才並泰昌萬國表臣義
述懷曰道德承天訓豐稔寄真宰羞無監
撫術安能臨四海是為吾邦詩賦之始

放虎南山翼忽生傷心寧忍說壬申誰將燕隸

來倫擬只決兵機不殺人

咬菜園七種 國詩史卷上十

世謂之壬申之變
燕隸即明太宗

文武帝朝二首 元年丁酉即唐中宗嗣聖十四年

百濟王仁阿直岐曾傳經典入京師聖明今日

禮文備大學新脩釋奠儀

阿直岐王仁之來在應神朝帝大寶元年
二月丁巳始釋奠於大學廣蓋距應神十
六年九四
百十七年

葉家去入葛城山巖窟鍊形三十年汲水採薪

皆鬼役扶桑有箇一飛仙

帝三年五月流役小角於伊豆島後逢赦得還復以鐵鉢盛母浮海往唐

元正帝朝二首帝養老元年丁巳即唐玄宗開元五年

賑恤惇鰥表孝貞宵衣旰食濟蒼生洋洋養老雍熙化不愧女中堯舜名

元明元正二帝內行端潔和煦及物蓋女主之良也

鞭策行春督有秋誨吾子弟殖田疇先勞後逸與人誦東里亡來道筑州

道首名為筑後守教督耕種時時按行不遵教者譴責之老少皆怨然至收入莫不

咬菜園七種國詩史畧卷上 十一 石原隱居

悅服及卒百姓祠之

聖武帝朝二首帝神龜元年甲子即唐玄宗開元十二年

只脩宮室不窮兵聖武心殊漢武情糜爛陳陳太倉粟半身大佛卅年成

自佛法入我邦百七十餘年天子崇奉其教者實自帝始

妖僧說法煽淫風儒士巧持胡廣中欲斬二姦除弊事臣愚五笑豈愚忠

太宰少貳藤原廣嗣深惡僧玄昉又與吉備夷備不協上表陳時政得失其五曰臣

請賜尚方劍交夷二盜帝不納

孝謙帝朝六首帝天平勝寶元年己丑即唐玄宗天寶八年

遣唐奉使謁玄宗天寶歸來勝寶中憤見祿山亂宮掖醜聲聞外褒如充

天平勝寶六年遣唐副使吉備真備至自唐明年安祿山反

何心釋奠祭宣尼表孝旌貞亦若為忍見滿朝無氣節百官相率拜禪師

天平神護元年以僧道鏡為大政大臣禪師

咬菜園七種國詩史畧卷上 十二 石原隱居

肯教妖鏡穢吾名擎日精忠神亦驚自有嚴師路豐永高風早學伯夷清

和氣清麻呂奉使字佐八幡也路豐永謂清麻呂曰道鏡若登天位吾當從伯夷而

游耳蓋激之也

感動人神震八埏和公直節上衝天遙遙西海處流後也有分封藤百川

清麻呂之流大隅參議百川慙其忠烈割封二十戶給之

遇赦還京亦是天妖僧謫死定何邊老來鑿水

通民利。百里攝堤來去船。

延曆中清麻呂為攝津大夫河攝之界鑿川築堤西通於海民賴之薨年六十七

奉使唐朝誰最雄折衝尊俎有斯公。含元殿上

賀正日大食新羅趨下風。

大伴古麻呂

光仁帝朝四首

帝寶龜元年庚戌即唐代宗太曆五年

滋賀中興天意存。壬申成敗且休論。天潢別派

七朝盡。正紗終歸天智孫。

吹葉園七種

國詩史卷上 十三

石原隱居

孝謙帝崩無嗣大臣定策迎施基皇子子白壁王立之實天智帝之孫也

朝衡留學果何為擬向海西詞藻開。賺得唐家

秘書監。青蓮摩詰闋清才。

阿倍仲麻呂為留學生入唐改姓名曰朝衡玄宗授秘書監故又曰秘書監監也

託身異域五十年。榮貴思歸無復緣。三笠山頭

一輪月。長留絕唱在東天。

帝元年仲麻呂死於唐年七十

身立本朝稱帝師。宮闈穢德蔑聞知。楚材晉用

晁書監也。勝備公危不持。

六年右大臣真備薨年八十三

桓武帝朝三首

帝延曆元年壬戌即唐德宗建中三年按自神武紀元至

此凡一千四百四十一

三十六峯嵐翠明。一條鴨綠繞皇城。自從奠鼎

平安地。萬古無人問重輕。

帝十三年遷都於山背詔曰山背為國山河襟帶自然作城宜改作山城士民謳歌

稱平安宮從之遂為萬世不遷之都

吹葉園七種

國詩史卷上 十四

石原隱居

延曆中堂枕鴨河。樓臺倒影落晴波。南朝四百

八十寺。不及三千子院多。

髯如金線眼如準。鎮壓東邊瞻澤城。塚墓餘威

尚鳴動。立身棺底護皇京。

坂上田村麻呂薨於弘仁二年賜墓地三町使其屍立棺中向平安城而葬之後國

家將有事則其墓鳴動云

嵯峨帝朝二首

帝弘仁元年庚寅即唐憲宗元和五年

御墨淋漓鳳勢騰。弘仁宸翰古來稱。誰知變格

難儔處自有青龍五筆僧。

僧空海口及左右手足捕筆並書世稱五筆和尚

棲林幽鳥逢春澤隱澗寒葩帶日光正是山莊

賞花宴恩霑才藻內親王。

有智子內親王十四年二月帝幸其山莊內親王探韻賦詩曰寂寂幽莊水樹裡

仙輿一降一池塘栖林孤鳥識春澤隱澗寒花見日光泉聲近報初雷響山色高晴

暮雨行從此更知恩顧渥生涯何以答穹蒼時年十七帝大褒賞之授位三品又書

賜御製詩

咬菜園七種

國詩史畧卷上 十五

石原隱居

文德帝朝二首

帝仁壽元年辛未即唐宣宗大中五年

中古文章屬阿誰野篁才調冠當時可無老杜

驚人句一字空爭白俗詩。

帝嘗示篁一聯曰閑閣唯聞朝暮鼓登樓遙望往來船篁曰遙作空更妙帝笑曰此

樂天句本作空聊以試卿爾

通明才在濟生民幽恠何曾惑鬼神一掃巫妖

開水利西門豹後有斯人。

美濃介藤原高房

清和帝朝四首

帝貞觀二年庚辰即唐懿宗咸通元年

晝日一齋三戒持萬機之政棄如遺暗中只恐

金甌缺外威強梁權下移。

帝深信佛法未三十去天位政刑之柄一委之藤原氏三日一齋不御鹽豉古今又

主之奉佛未有如帝精練薰脩者也

撫循兩備豈無人恩信感民誰及君姦盜改心

来自首封將賊絹送移文。

備中守藤原保則

咬菜園七種

國詩史畧卷上 十六

石原隱居

吾慕貞觀國宰臣推誠化物最堪親愛才兼有

知人鑒風采依稀東漢人。

其在讚岐管原道真代為守保則語曰吾見其志恐非明哲保身之士後果如其言

牧民用緩懷夷猛掃蕩邊塵奏偉功要識恩威

兼行妙將才先薦野春風。

保則晚為出羽權守與小野春風討平夷虜邊境無復風魚之警識者傳焉

宇多帝朝三首

帝寬平元年己酉即唐昭宗龍紀元年

兩朝伊霍託元勳無乃貪權固寵臣咄咄阿衡

無職掌。放他厩馬，做間人。

仁和三年以藤原基經為關白。關白職始此。

拔擢老成脩典刑。商周治具在朝廷。紫宸障子

圖賢聖。便是天皇黼宸銘。

寬平二年昭宣公薨。帝謀抑藤原氏。權擢菅原道真大用之。嘗命畫工金岡圖殿障子。其勵志如此。

周以來名臣像於紫宸殿障子。其勵志如此。

萬機餘暇足吟遊。殿敷金岡畫藻流。更向詞林

補佳典。十三夜月賽中秋。

咬菜園七種 國詩史卷一十七

石原隱片

吾邦九月十三夜賞月與中秋同。其盛實始於帝。

醍醐帝朝五首 帝延喜元年辛酉即唐昭宗天復元年

仁德遺風延喜慈。勵精能使萬民肥。溫言挾纊

人皆感。何況寒宵脫御衣。

調理和羹助廟謨。儒門台鼎古來無。可憐末路

青蠅點。終被藤家紫奪朱。

延喜元年貶右大臣道真為太宰權帥。蓋藤原時平等譴之也。

孤月秋寒紫海風。從容歌詠樂天終。恠逢雷雨

復官爵。豈有啣冤菅相公。

菅公在筑紫九月十日賦詩曰。去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在。

此捧持每曰拜餘香。

藤榮菅辱可如何。紃袴儒紳自異科。若把平生

論得失。右流左死不爭多。

時平與道真並為左右大臣。道真被貶。時平薨。時有右流左死之語。

菅公去後數儒門。實用抱才三耀存。振起紀綱

修版藉洋洋。封事五千言。

咬菜園七種 國詩史卷上 十八

石原隱片

三善清行字耀配其姓又稱三耀其意見封事陳便宜十二事大要不過張紀綱修版藉以復物力云

復物力云

朱雀帝朝二首 帝天慶元年戌戌即五代晉高祖天福三年

帝王神器有誰移。笑殺新皇舉事癡。準擬周公

求士急。吐餐握髮引人嗤。

黃雞鬪散滅埃塵。野馬臺高萬古春。畢竟神州

一妖物。翰音登極更何人。

天慶元年平將門反。建都於下總。藤島置文武百官。僭號新皇。世謂之天慶之亂。

將門西年生易中孚上九象曰翰音登于天何可長也

村上帝朝三首帝天曆元年丁未即五代漢高祖天福十二年

欲知天曆勝前朝萬乘屈尊詢下僚主殿夜深

多燎燭率分堂外草蕭蕭

按多燎燭劇務至夜也堂外生草租入少輸也

聖作清新韻致深管生得得是何心曉園試聽

宮鶯轉竹裡爭如御柳陰

帝嘗與管原文時賦宮鶯轉曉光帝詩先成曰露濃緩語園花底月落高歌御柳陰

咬菜園七種 國詩只尺卷二 十九 石居隱方

文時曰西樓月落花間曲中殿燈殘竹裏音帝問其優劣不答強之乃曰臣作犯帝

座升一等

文物迺天仰兩朝管公遺韻未全消一章封事

論三敝欲補便宜十二條

文時管公孫也其封事一曰禁奢侈二曰停賣官三曰不廢鴻臚館便宜十二條

即言清行意見封事

冷泉帝朝一首帝安和元年戊辰即宋太祖開寶元年

至尊呼院是何稱臣子衷情痛不勝誰續三舩

經緯筆列朝謚號奉山陵

宇多以來無謚冷泉而後不稱天皇但安德後醍醐二朝以亂離故不奉院號是可

謂幸者欽

一條帝朝三首帝永延元年丁亥即宋太宗雍熙四年

君王儒雅愛閨秀太似謝家爭絮鹽未了香爐

峯雪詔御前褰起水晶簾

清原元輔女少納言

遷轉中書儘自優雄才博學未堪酬扶桑果被

咬菜園七種 國詩只尺卷上 二十 石居隱方

浮雲掩遺物蕭然有菟裘

兼明親王世謂之前中書

清才早已負文名恬退戴君殊有情前後中書

孰優劣具平未必減東平

具平親王世謂之後中書王嘗題橘正通遺編曰文華留作荊山玉風骨消為

萬里塵未會茫茫天道理滿朝朱紫彼何人真清才也

三條帝朝一首帝長和元年壬子即宋真宗大中祥符五年

欲廢天皇立外孫舅家威焰可當難忍聞銀海

明將涸更進太醫金液丹。

御堂關
白道長

後一條帝朝二首帝寬仁元年丁巳即
宋真宗天禧元年

一家三后虎相臣。跋扈將軍或後身。最是上東

門第宴月圓無缺謾騎人。

關白歌曰此世遠波我世登曾思布
望月乃欲多留事毛無登思邊波

容媚權門繁有徒。賢哉右府獨持扶。侃然正色

安天子。妾婦叢中見丈夫。

咬菜園七種 國詩史畧卷上 十一 石屑隱居

藤原實資 實資為人剛直
不附權貴時人號曰賢右府

後冷泉帝朝二首帝永承元年丙戌即
宋仁宗慶曆六年

蕩盡厨川鐵蒺藜。漲天神火卷風靈。可憐長狄

專車骨。六郡山河無處埋。

陸奥守源賴義 天喜五年安倍賴時伏
誅康平三年貞任伏誅 世謂之前九年

役之

鳳詔銜來向虎狼。百塲苦戰十三霜。連連執訊

安安馘遺跡空留耳納堂。

賴義卒東征之役歸京建堂於六條坊
門北埋所獲敵職之餘名曰耳納堂

後三條帝朝四首帝延久元年己酉即
宋神宗熙寧二年

拜跪焚香禮北辰。悔吾踐祚欲云云。奮髯一躍

登天位。肯許權臣巧舞文。

升年積憤一時伸。駕馭藤門跋扈臣。春日神威

今日盡。掀髯呼返拂衣人。

匡回衰運勃然興。延久剛明信有徵。自抽蘆竹

截為準。一定量平宣旨升。

咬菜園七種 國詩史畧卷上 十二 石屑隱居

帝在東宮二十三年在位僅四年以多病
讓位皇太子明年遂崩天下莫弗痛惜焉

藤原賴通曰帝而早崩
我邦之不幸莫大焉

侍讀春宮十五秋。一朝出守挽難留。州民縱發

甘棠詠。莫忘多年風月遊。

藤原實政為春宮學士十五年帝親信之
相歡如朋友其出為甲斐守帝賦詩餞之

轉結即
帝成句

白河帝朝二首帝承曆二年戊午即
宋神宗元豐元年

愛賞憎刑獨自專。無端收得相門權。君王不省

民心改[○]不[○]怨[○]藤家去^テ怨[○]天。

自書金字大藏經。法勝寺前雲欲暝。幾慶落成。

逢帝怒。一盤囚雨下幽囚。

時人謂之
雨禁獄

掘河帝朝五首 帝寬治元年丁卯即
宋哲宗元祐二年

班荆對坐說中情。露滴鐵衣山月明。幾曲寶篋

傳秘訣。餘音嫋嫋徹天清。

新羅三
郎義光

咬菜園七種 國詩史畧卷上 廿三 石原隱居

勿來關外好風吹。與賊亂平何日歸。滿路落花

埋不盡。殘紅猶逐馬蹄飛。

老從江帥學兵機。今日東征覺昨非。立馬邊城

知有仗。水禽欲下忽驚飛。

三年敵懷志纔酬。其奈貂蟬輕曹叅。不把官符

下私鬪。路旁空弃二酋頭。

八幡太師義家 寬治五年義家獲清原
武衡家衡斬之 世謂之後三年之役

耽戀詩歌與管絃。委權武弁鎮東邊。流人他日

傳飛檄。爭戴源家豈獨天。

宗德帝朝一首 帝天治元年甲辰即
宋徽宗宣和六年

稚女牽衣蹴墜床。決然削髮去無方。翩翩濁世

好男子。託跡歌僧占一場。

佐藤憲清
憲史作義

後白河帝朝一首 帝保元元年丙子即南
宋高宗紹興二十九年

保元輕舉誤君臣。師出無名況悖倫。欲啓金滕

問心事。夢中重祚禱何神。

咬菜園七種 國詩史畧卷上 廿四 石原隱居

保元
之亂

二條帝朝八首 帝平治元年己卯即南
宋高宗紹興二十九年

破他賊膽却招辜。窘逼堪憐素志孤。慎始棄終

深意在。明皇并奏祿山圖。

藤原通憲薙髮稱信西 通憲圖唐安祿
山事實以進覽且曰唐玄宗近世之賢主
也然而慎其始棄其終伏望披此圖慎政
教之得失然則不止以信類比祿山其意
專在諫
帝也

朝士濫刑未免私。宮人變奏亦徒為。天文推步

知何用。算盡生理。入穴時。

肯使元光。擅主張。衛門意氣。膽堂堂。昂然直坐。

朝班上。束帶當頭。笏有光。

左衛門督藤原光賴。賊信賴欲乘間殺光賴。所執笏有光信賴畏而不敢發。

棹將口舌挫。兇威翻轉勤。王向背機。老境秋高。

桂里月。香風動影上。吟衣。

光賴後居桂里。世稱桂大納言。

赤幟飄風。白旆斜。郁芳門外戰如麻。三語果能。

咬菜園七種。國詩史畧卷上。廿五

石原隱居

平國賊。平安平治。屬平家。

平治之亂。

營救人孤。亦一奇。非關佞佛好慈悲。短身湮齒。

十三歲。可忍風丰。似阿兒。

清盛後母池禪尼。

漫天雪。攢笠檐。飛相抱相携。行道遲。誰向呱呱。

聲裡辨。吞牛氣。在第三兒。

義朝妾常磐。

果然鞍馬稚牛兒。殲滅平家。靡孑遺。末路芳山。衝雪走。記麼隨母出都時。

高倉帝朝八首。帝嘉應元年己丑。即南宋孝宗乾道五年。

為是君王詞藻優。仕丁亦自解風流。幾枝折去。

煖村酒。未害林間紅葉秋。

風流不讓海棠顛。至性感神。花壽延。夜夜艷毒。

三七日。香雲暖處擁春眠。

藤原成範。信西之子也。性愛櫻花。移芳野山櫻。環植宅畔。嘗禱神。迎花。壽花為不萎。

咬菜園七種。國詩史畧卷上。廿六

石原隱居

者三七日。帝愛其風流。賜書曰。櫻町中納言。

何獨經筵啓沃功。學兼今古折其衷。表章曾釋。

中庸句。不待淳熙朱晦翁。

大外記。清原賴業。按賴業所表。唯中庸無大學也。

八郎死去。海茫茫。留得源家一派光。今日琉球。

三十島。祖宗猶仰舜天王。

鎮西八郎為朝。

相公權勢有誰加。揚扇招回紅日斜。應是藤門。

强弩末。傾將威福。府平家。

平相國
清盛

至誠諫。感阿翁。頑也似。烝烝不格姦。末路何心。
忘愛日。慙慙所死。向熊山。

小松内
府重盛

蓬壺驕溢見幾遲。却有前王後佛知。早及秋風
吹未到。去歌何草不黃詩。

舞妓祇
王阿佛

咬菜園七種

國詩史畧卷上 廿七

石原隱居

濡髮人眠燭影沈。不知鮮血迸孤衾。暗中賺去
狂童手。白得青天皁日心。

源渡妻
袈裟

安德帝朝十七首

帝養和元年辛丑即
南宋孝宗淳熙八年

鼓動諸源占俠魁。羌川力戰亦雄哉。可憐射殺
恠禽手。不掃暗中流矢來。

源三位
賴政

誰激英雄復父讎。儒門不逞搢紳流。寧知墮落

僧文覺。感動懷中枯蠲體。

白旂連天簇虎貔。兩軍夾水暫相持。弱平不用
强弓弩。驚起羣禽走赤旗。

遷都爭道福原便。誰測相公迷是非。獨有通才
藤大辨。片言啓發悔心機。

左大辨藤
原長方

福原狂暴北條奸。何代能無悖逆臣。板屋三間
牢御所。如何絕島石門貧。

咬菜園七種

國詩史畧卷上 廿八

石原隱居

攝洋驚浪始稱平。萬石埋經一島成。狂後留名
唯此舉。應呼淨海小長城。

攝津輪田。碕地勢險惡。漕運甚艱。清盛憂
之。命寫一切經於石。沈以填之。而功成名
曰。經島。行
旅便之。

已分鴻毛一死輕。孤川回騎欲何行。鎧縫挾得
自家集。要託歌人留姓名。

薩摩守忠度。後俊成撰千載集。取其故
鄉花一首曰。連也。滋賀乃都波荒。仁志速
昔奈加羅乃。
山櫻加奈。

四絃彈罷却咨嗟。忍把寶槽沈海沙。果是後來
盲目者。哀音幾曲演平家。

皇后宮
亮經正

宇川先渡是高綱。落後鐵驪空奮驤。誰識英雄
攬心妙。不將池月付源郎。

佐木四郎高綱
源郎言源太也

駿馬龍鍾仆在坡。栗津戰死淚滂沱。將軍有勝
重瞳處。不道虞兮奈若何。

咬菜園七種

國詩史畧卷上

廿九

石屑隱居

旭將軍
義仲

揚鞭直向後門來。俯視城中閑若雷。輕騎三千
約人馬。曹鞍相觸下崔嵬。

罵成豬突彼何知。舩櫓空爭順逆機。三日海程
呼吸際。排空激浪卷帆飛。

九郎判
官義經

自從西討出邊陲。曝骨沙場素所期。感泣將軍
功德大。營埋并貲大夫驪。

奧人佐藤嗣信戰死於八島
大夫驪即義經所騎名馬名

單騎橫弓立海阿。千軍萬馬喚如何。掠空命中
窮頭日。搖曳餘紅落碧波。

那須餘
一宗隆

一箭功名八島春。水軍感歎陸軍親。却嫌絕技
不堪養。枉射船頭狂舞人。

事見平語弓流條按朱用純曰凡事當
留餘地得意不宜再往其餘一之謂歟

幾搏東兵向海投。能州驚力世無儔。難何短將

咬菜園七種

國詩史畧卷上

三十

石屑隱居

巧相避。趨捷跳過八隻舟。

能登守
教經

水濱誰復問平家。劍璽銷沈蟹支沙。裂帛一聲
吹鬼火。寄將冤恨在琵琶。

國詩史畧卷之上

國詩史畧卷之下

仙臺 大槻清崇 著

後鳥羽帝朝四首

帝文治二年丙午即南宋孝宗淳熙十三年自神武

至此九一千八百四十三年

新開霸府代兵權誰道金甌欽不全。莽操覬覦長絕跡。繇繇皇紗萬斯年。

文治二年源賴朝為總追捕使是為武人大君之始

咬菜園七種

國詩史畧卷下

石原隱居

源家兄弟兩超倫。小忿何心廢懿親。纔剪鵲鴿

原上草。蕭牆已有牝雞晨。

老衲自忘衣袂緇。英雄接膝話兵時。出門一步

便行脚。投與銀貓付小兒。

西行法師

一奉衾裯妾亦臣。包羞且舞鶴岡春。綠車歌罷雙行淚。灑向芳山踏雪人。

義經姬靜

土御門帝朝六首

帝正治元年己未即宋寧宗慶元五年

武門創業見巍巍。儉素家風世未知。為是奢華傷士氣。快刀手截侍臣衣。

賴朝嘗召藤原俊兼衣服鮮麗賴朝命取其刀親截其裔戒之曰若千葉土肥等廉卒汝何不思之

燕翼無謀貽子孫。報他舊德至情存。我頭不斷留吾髮。盡是池尼顯顯恩。

池尼即池禪尼顯顯源五盛安也

咬菜園七種

國詩史畧卷下

石原隱居

英雄心跡不難量。寧問子孫三世亡。赫赫生前

大功業。一棺纔闔落冥茫。

我恠隱謀扶霸功。曹家文若克全終。屠豚殺犬

渾無管。獅子身中有寄蟲。

大江廣元藤原兼實曰賴朝委任廣元猶獅子身中蟲

簾內執權才絕倫。早知子奪屬家臣。嫁將一面菱花鏡。買夢分明是買真。

尼將軍政子

追捕功成，威力加。鑑都坐，領小京華。君尤臣劬，何神速。纔奪朝權，便奪家。

北條時政

順德帝朝四首

帝建曆元年辛未即南宋寧宗嘉定四年

三世將軍創守勞，幡神帳外一宵刀。連天霸氣，瞥然盡。華表鶴鳴，銀杏高。

賴朝起兵至實朝被弑三世四十年而亡

帝為源宗討賊臣，諸豪勿負故家恩。惜哉承父

咬菜園七種

國詩史畧卷下

三

石原隱居

不出此。激怒姦雄，訴大冤。

後鳥羽上皇討北條氏

十九萬人先啓行，海山分路入皇京。君王好戰

未心飽，更進二十餘萬兵。

竄流天子，即陪臣。悖逆古今無比倫。誰測老天

憐萬姓，放還到底愛民人。

後堀河帝朝三首

帝貞應元年壬午即南宋寧宗嘉定十五年

鎌倉不改舊山河，執命陪臣權更多。護衛京城

鎮天下，新開兩府六波羅。

身將節儉自扶持，天下小康民忘疲。商畧高僧，教寡慾。無為亦有有為時。

北條泰時嘗見僧高辨問治國之要高辨曰是在子之心耳心苟寡慾則人人化德而嚮風矣泰時服膺其言果風化大行

後深草帝朝三首

帝寶治元年丁未即南宋理宗淳和七年

業鏡高懸三十年，臨終大道始坦然。前途尚有

閻王怒，不向西天歸國權。

咬菜園七種

國詩史畧卷下

四

石原隱居

最明寺時賴

誰似能勞文伯母，清風松下老禪尼。細心效績，何周密。糊補破窓，緣格移。

時賴母松下禪尼國語公父文伯母曰君子能勞後世有繼男女效績德則有辟

敝帽褰衣君且寬，敲門剥啄夜將闌。一條紙燭

照殘鼓，來助酣醺終夕歡。

大佛陸奥守宣時

後宇多帝朝二首

帝弘安四年辛巳即元世祖至元十八年

肯使腥羶染帝州。太郎廟算有餘籌。他年大捷龍山快。已在龍門斬使秋。

相撲太郎時宗 建治元年斬元使杜世忠等於鎌倉龍口

運用自存方寸中。授他裨將禦胡戎。倒橋未斬髯奴盡。一半狂風奪汝功。

弘安四年六月元虜兵據五龍山鎮西探題北條實政督兵壓岸而陣部將草野七郎夜襲燒虜船殺十餘人河野通有以輕舟進倒橋為梯登虜艦殺數百人我兵繼進力戰虜退保鷹島范文虎懼先逃閏七月大風起虜艦敗虜爭上陸擊殲之

咬菜園七種 國詩史畧卷下 五 石原隱居

按弘安諸將苦戰殲敵如此而舉世歸之神風之力何耶

後醍醐帝朝十八首 帝元弘元年辛未即元明宗至順二年

群葵哮嗽闢盈庭。田樂歌終醉未醒。只見眼前天狗舞。不知圓頂是妖靈。

北條高時

笠山南指萬峯間。天下真成容座難。且借巖陰供假寐。松風拂露御衣寒。

帝歌曰指天往笠置乃山遠出志與利天加下仁波隱如毛無 藤房和曰奈何世

武賴武隆登天立寄波猶袖奴羅源松乃下露

櫻樹題詩表寸忠。君王喜色動春風。誰知五字長城外。十字長城有此公。

備後三郎高德

般若門前報曉光。賊兵亂入索親王。經函探盡啞然笑。大塔不逢逢大唐。

護良親王嘗居延曆寺大塔下因稱大塔宮

城門層腹氣何雄。誑敵親王鮮血紅。今日寧論

咬菜園七種 國詩史畧卷下 六 石原隱居

北宮黜賣降。紀信讓奇忠。

左馬權頭村上義光親王嘗目義光為北宮黜

豐聰太子策無餘。算到九十五代初。留得千年未來記。斥他良將戮東魚。

天王寺藏上宮太子未來記或云非真有此事楠子蓋託以固人心耳

披山帶壑陣營成。捍禦應機善用兵。八十萬人攻不陷。忠臣一膽是長城。

楠正成築千劍破城援焉

雲橫絕島海波收。南指船山送御舟。正是東軍覆巢窟。金剛山下解圍秋。

元弘三年帝出
隱岐幸船上山

關東罪惡貫盈天。何事能支九世安。勤儉家風傳祖法。留心民事不貪官。

址條氏以陪臣執天下權
者九世百二十餘年而亡

九世報讎翻手間。人神共怒豈非天。却憐承久誤時會。瘴雨蠻風十九年。

咬菜園七種 國詩史畧卷下 七 石原隱居

朝發雲州天馬來。呼祥喚瑞奏謏辭。九重自有神龍出。一諫晦蹤千里之。

藤原房數言政事得失不聽及
其諫天馬遂棄官而去不知所之

棄兒饑賊豈人情。土窟幽囚事可驚。誰料艷妻中夜泣。鼓將簧舌壞維城。

大塔宮薨於土窟蓋足
利直義使入弒之也

天子蒙塵運未傾。勤王諸將尚縱橫。賊圍可潰死傷勇。無乃斯公太早生。

延元元年正成
戰死於湊川

奉駕東山誘賊師。絕其糧道夾攻之。君王不用十全策。枉使忠臣死海碕。

蓋參議藤原
清忠沮之也

可無下物佐高筵。海鷗攫魚飛墜船。餘一謾誇穿扇技。冲天有箇四郎弦。

本間孫四
郎忠秀

君王好色愛其妃。百姓不同同阿誰。國賊難除憐一將。內家禁裡賜吳姬。

咬菜園七種 國詩史畧卷下 八 石原隱居

藤原行房妹入宮充掌侍有姿色義貞夜
直見月下彈琴心動焉贈歌道情不報帝
聞憐之至延元初曲宴賜酒副以掌侍義
貞專愛縫綴無復進征之志議者憾焉

西來大敵苦驅除。人道虞姬掣後裾。討賊未終香恨死。誓天猶繫錦囊書。

延元三年左中將
義貞戰死於越前

花擁行宮春酒馨。芳山深處小朝廷。當初一夢終成讖。南木之陰御座寧。

後村上帝朝七首帝興國元年庚辰即元順宗至元六年

誣奏忠臣飾叛心。寺門切髻泣丹忱。惟來逆賊

霸天下。權譎愚人謀亦深。

足利高氏

買積還珠。天子仁艷姬也喜嫁忠臣。丈夫須曝

河邊骨。忍作春閨夢裡人。

楠正行辭韓內侍歌曰登天毛世仁長良布可毛有奴身乃假乃契速奈何天結武

史家特筆有誰傳。野乘紛紛多倒顛。一部神皇

咬菜園七種 國詩史畧卷九 石原隱居

正紗記。春秋遺旨。在斯編。

源親房正紗記成於興國元年

讀到延元慨以慷。南風不競北方強。無端記得

王彭語。劉敗鬢眉曹敗狂。

按王彭曰塗巷小兒聽說古話劉玄德敗則鬢眉出淨曹操敗則狂喜曰快

中原戎馬陣雲連。轉瞬朝南暮北天。避世東山

耽筆硯。徒然之草豈徒然。

兼公未必勝西公。一味禪心各種風。均是前朝

北面士。嘯遨玩世將無同。

僧兼好閑居東山吉田寂於北朝觀應元年

桑門老宿獨清軒。始講程朱道學源。他日修成

太平記。果麼筆削得公論。

僧玄慧號獨清軒

後龜山帝朝二首帝正平廿三年戊申即明太祖洪武元年

忠臣一去學夫權。南北休兵十二年。應是男兒

忍羞辱。容身賊窟息民肩。

咬菜園七種 國詩史畧卷下 十 石原隱居

楠正儀降於正平末歸順於弘和初中間十二年

中朝文字落浮屠。翡翠蘭苕優有餘。且向五山

求巨擘。只推絕海掣鯨魚。

僧絕海應安中入明太祖問徐福事絕海賦詩答之曰熊野峯前徐福祠滿山藥草

雨餘肥只今東海波濤穩萬里長風好早歸

後小松帝朝三首帝應永元年甲戌即明太祖洪武廿七年

休將擁立咎姦雄。正閭雖分胤則同。骨肉禮成

南北合。相傳神器到無窮。

元中元年
南北混一

輔成幼主豈無功。燕翼謀存五戒中。最是斯翁見機早。起尋禪榻卧清風。

細川賴之則髮辨常久作詩曰人生五十愧無功花木春過夏已中滿室蒼蠅掃難去起尋禪榻卧清風

鹿苑寶幢金碧光。三層高閣北山莊。果然玩物喪其志。甘受朱家恭獻王。

鹿苑院義滿

咬菜園七種 國詩史畧卷下 十一

石原隱居

後花園帝朝二首 帝永享元年己酉即明宣宗宣德四年

購籍置田存典刑。一翼絃誦子衿青。講文亂世誰堪比。五季老馮刊五經。

安房守上杉憲實其領邑有足利學校歲久衰廢憲實繕修之為置土田購書籍生徒日盛當干戈騷擾之時足利之學獨著天下云

莫將三尺侮圓顙。三國之君不易圖。鶴飼曲終頭輒落。任他醉客踰垣趨。

嘉吉元年赤松滿祐大將軍義教滿祐為人矮陋義教呼曰三尺八道

後土御門帝朝三首 帝應仁元年丁亥即明憲宗成化元年

猿攬犬挈為敵讎。無端殺運逼皇州。應仁一結東西陣。戰到慶長纔便休。

應仁之亂按細川勝元申年生山名宗全成年生

滿載人頭八輛車。黑風吹血暗京華。東山別有閒天地。鼙鼓聲中鬪品茶。

東山義政

山仰富峯人道灌。築城江戶果前緣。百年卜得

咬菜園七種 國詩史畧卷下 十二

石原隱居

繁華地門泊西洋萬里船。

按今之大城即太田道灌所經始而洋船碇泊有如此者

後柏原帝朝二首 帝永正元年甲子即明孝宗弘治十七年

當此虎爭龍鬪秋。誅姦討逆有餘謀。遙遙仗劍行千里。掘險鑿開關八州。

北條早雲取伊豆荻山提馬

流寓羈人畫策深。暗中何處散千金。八州猛士

供鷹犬。不是英雄誰攬心。

早雲嘗召儒士說兵書曰主將之法務攬英雄之心早雲聞之曰止吾既得之矣是其所所以雄霸八州歟

後奈良帝朝二首 帝天文元年壬辰即明世宗嘉靖十一年

屹然嚴島立中流憶起松郎齧齒遊休嘆從奴

祈藝主神靈冥護十三州

毛利元就知名松壽丸

海天風雨助奇兵半夜艤舳破浪行誰道亂離

無義戰水濱問罪戮狂鯨

咬菜園七種 國詩史畧卷下 十三 石原隱居

元就誅陶賊於嚴島

正親町帝朝九首 帝天正元年癸酉即明神宗萬曆元年

越奇峻正各誇功建幟中原志已空四郡之爭

兒戲耳到頭角力決雌雄

甲越川中島之戰

海倒山崩城欲傾三原大勝未收兵何來暗砲

飛過耳寥亮猶聞尺八聲

武田信玄其攻野田城中銑病創遂死於信州去年詠松間花云立並布加比古

曾奈計連山櫻松仁十年乃色波奈良波天終成讖云

爭鹿中原舍我誰壯人技倆彼何知千軍未發

身先死遺恨京城皮履兒

上杉謙信謙信卒於天正六年後信玄五年矣雅好藝文九月十三夜會諸將宴

飲賦詩曰霜滿軍營秋氣清數行過雁月三更越山併得能州景遮莫家鄉念遠征

十三世業一朝亡寄跡雄藩殘喘長末路差強

人意處不將家姓假猿郎

足利義昭足利氏十三世二百餘年而亡義昭亦好藝文其在近江賦詩曰落魄

咬菜園七種 國詩史畧卷下 十四 石原隱居

江湖暗結愁孤舟一夜思悠悠天公亦憫吾生否月白蘆花淺水秋

滅駿亡濃神速中無端入洛壯皇宮尊王高義

足千古不獨然除緇賊功

總見公織田信長

十萬精兵破甲還凱歌徐入駿河間裏區大半

歸孤掌快觀扶桑第一山

公西歸枉路觀富岳於東海

避辭茶色飾其真却笑豺狼不顧身自殺一聞

礫慈母甘心又作弑君人

明智光秀 孟叟云殺父之父人亦殺其父然則非自殺之也一聞耳

天錫英雄豈偶然為鼓毆爵有狂鷗放他猴面

羽柴筑前守秀吉

誓梟賊首弔英靈慶戰天王山下兵自是天誅不旋踵一峯何必較輸贏

秀吉誅光秀按山崎之戰光秀指天王山令曰不取彼則輸矣秀吉令曰取此必

咬菜園七種

國詩史畧卷下 十五

石原隱居

羸笑一令之下成敗判焉此說信乎否

後陽成帝朝十二首帝慶長元年丙申即明神宗萬曆二十四年

織公一跌有豐公成就尊王前後功掃盡戰塵

開紫陌連天帝關五雲中

御輦高颺金鳳凰百官迎扈燦成行雙懸日月

臨私第飽使蒼生仰末光

聚樂臨幸

戰鼓纔收茗讌茶相公屈第學千翁破甑折匕

連城價籠絡群雄墮殼中

北野茗齋

殿上使魁豪爽襟直視公卿做藝林一擲纏頭片時散棚空三萬五千金

關白領金

喚為吾友獨源公一洗古今凡主空華胄人奴寧有種只將大度馭群雄

關白游鎌倉撫源征夷塑像曰我創業之友千載唯子按趙秋谷詩明祖子持一

咬菜園七種

國詩史畧卷下 十六

石原隱居

杯酒布衣劉季是吾友

兩雄偉業各千秋一片痴情何處求若比居然

安大佛千群放鶴尚風流

彦根侯嘗射一鶴其脚有金牌題曰建久其某年蓋源右將所放千隻之一也侯感

悼立墳湖北曰瘞鶴塚錄以存奇事

山花自落豈無期何事春風不待時却恠大封

移輿日多情倚柱為誰悲

蒲生氏鄉

墜馬如松死。僅生碧蹄。大捷撼韓明。翻將餘勇鼓文運。紫海洋洋。絃誦聲。

小早川隆景

懸軍冒險。入胡城。瑋肆生擒空。有情莫道胸中乏成算。雞林贏得夜叉名。

加藤清正

臣心如水。豈其然。滿腹雄才老倍圓。慨歎外征無紀律。欲移元帥握全權。

咬菜園七種

國詩史畧卷十

十七

石屑隱居

黑田如水孝高

相公一怒渡滄瀛。國本纔搖內難生。幸矣霜臺竭吾職。孤憑極諫遏親征。

淺野彈正長政

英雄豪舉快平生。纔到黃泉大夢醒。兩度征韓何所獲。一封耳塚草青青。

慶長三年
豐太閤薨

後水尾帝朝一首

帝元和元年乙卯即明萬曆四十三年自神武至此

二千二百七十五年

枉被孤兒寡婦傾。金湯曾築浪華城。自吾得失無遺恨。留與後人歌太平。

元和元年大坂城陷豐臣氏亡

總計二百十五首

國詩史畧卷之下止

咬菜園七種

國詩史畧卷下

十八

石屑隱居

皇朝十八孝傳

皇朝十八孝傳

晋陶潛作孝傳合天子諸侯卿大夫士庶人

凡十八人余今勸此作十八孝傳其目如左

公卿孝傳

中將道信 參議良繩 藤原吉野

内大臣伊周

大夫士孝傳

紀夏井 山田古嗣 丈部三兒

咬菜園七種

十八孝傳

目錄

石原隱居

隨身公助

庶人孝傳

丹生弘吉 美濃樵夫 孝僧某

婦女孝傳

妃兄媛 金繼女 橘逸勢女 舞女微妙

武人孝傳

曾我兄弟 日野阿新 左衛門佐氏賴

以上十八人

皇朝十八孝傳

仙臺 大槻清崇 著

公卿孝傳

中將道信九條相國為光之子也正曆三年公薨道信哀惋至切久而不衰將欲終三年之喪而時制止於期不得違衆而獨行之乃泣除服自賦國歌曰限有盤今日脫捨都藤衣果奈幾咬菜園七種

十八孝傳

石原隱居

物者淚奈利計里譯曰有制無如除服何餘哀唯有淚滂沱

參議良繩字朝台備前守大津之子也 文德帝齊衡元年聞父大津罹疾於任國即欲走往問之帝不許既而計至良繩慟哭嘔血氣絕數刻僅蘇貞觀三年母紀氏寢疾良繩晝夜扶持不離左右及其遭喪又解官職毀瘠過度殆至滅性

藤原吉野參議綱繼之子仕至正三位中納言二親在堂定省無虧嘗家有鮮肉父遣人分取之會吉野趨朝未歸庖人斬而不獻也吉野歸聞之大悔恨泣讓庖人終身不復啖肉

內大臣伊周有罪謫於播州母高階氏悲之遂疾伏蓐羸憊日甚夢寐之間唯有欲見兒一語耳伊周聞之痛入心骨謂及其未瞑得與母一相見雖罹極刑吾無恨焉竊亡出配所微服潛咬菜園七種

十八孝傳

石原隱居

行以歸於家遂得見母於殘喘中事覺朝議以其犯法也不原更貶之太宰府 磐溪子曰嗚乎道信之喪父止於期所謂是欲終之而不可得者其心亦可悲矣然細玩國歌意則其服心喪可知吉野終身不肉食良繩嘔血氣絕皆出其至性者矣若夫伊周之亡貶所而必一見母雖非理義之正而孝子之至情自不得不然耳

大夫士孝傳

美濃守紀善岑之子夏井為父廉直事母至孝為讚岐守政化大行及任滿百姓相率詣闕請留更留二年及去贈遺一無所受貞觀七年拜肥後守母石井氏聞而哭之人問其故則曰吾聞肥後之俗國宰至清則身必不得全矣吾兒廉直其不終乎母死夏井哀慕過人建一堂安其遺骸晨夕事之不異生時遂終三年之喪

咬葉園七種

十八孝傳

三

石原隱居

山田宿禰古嗣天性篤孝廉謹寡言幼喪母敬事從母嘗讀韓詩外傳至於樹欲靜而風不止子欲養而親不待流涕不禁卷帙為之沾濡後遭父喪哀毀過禮仕為大外記公卿薦以備顧問古嗣好推獎文士多見舉用承和中出為阿波介大著政績初阿波多旱災古嗣莅任築塘蓄水以備溉灌民賴其利仁壽中卒年五十六下毛野公助父武則攝政兼家隨身也公助從

父賭射於右近馬場不勝武則大怒捷之衆人中公助伏而受其杖武則怒解而去或謂公助曰子盍逃焉公助曰吾父老而足弱我走父必追之追而顛躓或有損傷是重吾罪也是以不避聞者感動竟以孝行著

養老四年漆部司令史大部石勝有罪與秦犬磨並處流竄其三兒祖父九十二歲安頭九九歲乙九七歲同詣官冒死伏請冀兄弟三人沒

咬葉園七種

十八孝傳

四

石原隱居

為官奴以贖父罪帝感其孝思特命免石勝獨令犬磨赴配所

磐溪子曰夏井之建堂安遺體事太似丁蘭而其終三年之喪則非蘭可比也古嗣風樹之感至卷帙為之沾濡信乃臯魚之知己而公助之受杖不敢避則韓伯瑜之臭味也至大部三兒以總角之童贖父之罪則又賢乎緹縈媼皓也遠矣

庶人孝傳

丹生弘吉、若狹遠敷郡人。幼喪父，獨與母居。常力田奉養，愉色婉容，溫清弗懈。每朝詣父墓，揮踊哭泣。其所耕田，雖逢水旱風蝗，未嘗被害。鄉里以為孝感之所致也。貞觀十二年，勅叙位二階。

美濃樵夫，當耆郡人。事親至孝。家貧乏財，常採樵以供養。其父嗜酒，樵夫賒於市以進。一日伐

咬菜園七種

十八孝傳

五

石原隱居

薪於山，誤踐石，顛醺然，覺有酒氣，心恠之，作見石間有泉涌焉，色太似酒，就嘗之，則芳烈甘美。樵夫大喜，汲歸供父。事聞于朝，車駕幸美濃，觀其醴泉，以為孝感之所致，名曰養老之瀑。因以紀元實。元正帝養老元年也。

孝僧不知何許人，住洛外一寺，養母。其側奉之甚謹。母性嗜生魚，僧常買魚於市以供之。會白河上皇詔天下禁屠殺，僧無由獲魚，母為之

不樂，往往至廢食。僧不堪悲惋，乃數往桂川，以窺魚，遂捕得二小魚，大喜，將歸供母。為巡吏所執，并魚送之。官僧泣然流涕曰：貧道有母性嗜生魚，無魚不食。今方卧病，貧道不忍坐視其斃。顧身既犯國禁，宜速就刑。所切冀者，此魚饋之，母使其得食一下咽，則萬死無所憾矣。聞者感泣。上皇聞之，特原其罪，賜金帛以反之。

磐溪子曰：余嘗題二十四孝圖曰：埋兒寧有賜

咬菜園七種

十八孝傳

六

石原隱居

金理供母，翻驚舍側，泉冷笑齊諧，惑盲俗。二十四孝半因緣，今作此傳。樵夫醴泉事頗似說，因緣然孝弟之至通於神明，經既有明文，則不可謂必無此事也。如孝僧之自捕獲二小魚，此則可以破雙鯉躍出之妄誕矣。

婦女孝傳

應神帝幸難波，居大隅宮。一日登高臺而遠望焉。妃兄媛侍坐，西望嗟嘆者久之。帝問曰：汝

何嘆兄媛泣曰妾近日慕父母之情戀戀不能已願得暫歸省親帝惻然憫之曰汝不見二親者多年今欲定省於愛日之誠理所當然乃徵淡路水手八十人航海送之吉備

衣縫造金繼女本右京人居河內志紀郡生十二歲喪父哭泣之哀感動人母欲嫁之女逃住父墓側旦夕哀慟母不復言於是獨與母居每父忌日齋食誦經祈其冥福境內有患賀河冬咬菜園一種十八孝傳七石原隱居

月人病涉女與母謀買雜木造假槁以便往來積十五年不止母年八十而終女哭不絕聲承和八年勅叙三階免戶田租表其門閭

承和九年橘逸勢坐事配於伊豆女妙沖悲泣徒步從之監護吏叱使去女乃晝止夜行至遠江板築驛逸勢死于逆旅女慟哭遂收屍葬之結廬其側日夜悲泣如事生者十年嘉祥三年有詔赦逸勢罪妙沖乃自負柩還改葬京師當

時藉藉莫弗稱其孝

舞女微妙本良家子建仁中僑寓鎌倉將軍賴家觀其舞於比企能員第態度妙絕拍掌歎賞能員謂將軍曰此女遠至自京師必有所請於幕府將軍乃親問之微妙泣曰妾父右兵衛為成遭讒放於奥州妾母病之以死妾時僅七歲零丁孤苦稍長思慕之情益切而罔知父存亡因思若學歌舞以買父愛憐或得由以通信於

咬菜園一種十八孝傳八

石原隱居

父今幸承溫問伏願賜哀恤焉將軍乃遣使奥州為搜訪之使者反命曰為成既死于徙所微妙聞之慟哭絕地即日入壽福寺削髮為尼改名持蓮終身誦經以祈父冥福

磐溪子曰兄媛為天子之妃錦衣玉食一無所慕而獨戀戀於父母是貴妾中所僅有而金繼女不思嫵婉之好而畢生竭力乎二親又賤女中所絕無也至二妙之追慕父母一則悲泣十

年一則終身憂色亦可謂女中少連大連矣

武人孝傳

曾我十郎五郎河津祐泰二子也祐泰為工藤祐經所殺二子養於曾我氏時十郎五歲五郎三歲母撫兩孤曰汝等成長能報父讎乎十郎泣曰兒等成長必能斬讎頭耳稍長嬉戲每以擊刺為事當此之時源右將賴朝管轄天下兵馬祐經特見親信建久四年夏賴朝獵於富士咬菜園七種

十八孝傳

九

石原隱居

野祐經從焉祐成時致大喜曰天也遂往富士野行營直入祐經卧所是夜祐經招倡妓大醉酣寢兄弟蹴席呼曰祐成時致為父報讎盍起敵之祐經驚覺矯首則兄弟揮刀交下遂殺之時祐成二十二時致二十

禽鳥猶有父使我孤者誰肯容父讎共戴天兄弟同死已有期嶽麓獵罷營未徹幸矣我獲獨見遺雷聲夜黑五月雨潛入卧內人不

知十八年讎在眼前快於千歲一開拊就枕

呼醒爛熟夢丈夫寧欺醉死人讎起抽刀刀

纔見兩銚交先身首分嗚乎大野三驅追猪

逐鹿兒戲爾二蘇孝烈殪封狐舊作二蘇復讐歌附此

後醍醐帝將征鎌倉日野資朝與謀焉事泄北

條氏怒竄資朝於佐渡使州牧本間氏就殺之

阿新時年十二與母居洛西聞之不勝哀痛欲

與父同死請之母乃從一力間關至敦賀託商

咬菜園七種

十八孝傳

十

石原隱居

船達佐渡至本間氏請一見父不許元德二年資朝遂殺於貶所本間族三郎斬之也本間氏乃火化之收骨授阿新阿新攀慕怨號曰噫本間氏使我不得見父於生前此怨不可不報遂候深夜入卧內無得也旁見三郎卧云是亦讎也抽刀刺之走出而門闔池邊多竹阿新攀其一竿則竹自偃過池上遂達海濱追者百餘人至則船已遠去

左衛門佐氏賴修理大夫道朝長子也為父順孝畧涉經史將軍義詮寵之父道朝愛其庶子義將欲使代已執政竊譖氏賴於將軍義詮氏賴心知之而不見辭色一日會親故謂之曰知子莫若父吾父之不愛我知吾不肖也我將屏跡山林以避之遂棄妻子入高野山斷髮易服改名心勝將軍深惜其才屢勸其還京不聽其意蓋欲使父心安也

咬菜園七種

十八孝傳

十一

石原隱居

磐溪子曰曾我兄弟為父報讎之事閭巷婦孺且知之今不必贊賞而日野氏之子以十二齡之童徒步萬里輾轉航海以達絕島亦其一往情深之不能已者矣若其斬三郎以自快雖未必當理然君子取其心而恕其事可也氏賴之晦跡以成父志則與夫逃之荊蠻者殆同其揆嗚呼亦可謂孝矣夫

皇朝十八孝傳止

大槻磐翁著

明治四年辛未十一月

淺草茅町二丁目

東京書林

須原屋伊八發兌



鸚

雙

二

七

六

乙

太田真琴 編輯

近世詩史

明治九年（一八七六）東京府玉山堂刻本

據明治九年（一八七六）東京府玉
山堂刻本影印

南摩網紀閱
太田真琴輯

近世詩史

全二冊

東京書賈

玉山堂
清風閣梓

近世詩史序

登高樓而眺于遠海。忽而黑雲翻墨。忽而白雨跳珠。忽而狂風捲地。忽而怒濤蹴天。萬斛之船。飄揚如葉。浮沈於波間。其危在瞬息。乃倚樓者。呼杯酒。顧而樂也。從壁上而觀于普法之戰。忽而龍虎擺陣。忽而雷電轟空。忽而奮擊酣戰。忽而伏尸蔽野。其間神出鬼沒。不可方物。勝敗之機。決于轉瞬。乃觀者。掀髯拍掌。以爲雄快也。於是乎起天下之事。當局者苦。而傍觀者樂也。入史者勞。而讀史者逸也。作詩者愁。而觀之者喜也。黃山谷曰。安知忠臣痛至骨。後世但賞瓊琚詞。不其然乎。我邦嘉永以還。至明治爲事變之最錯雜者。而世既不私。私史此編。則集近世名人之詩。可與時事相表裡者。另開生面。出人意表。名曰詩史。固

近世詩史序

其當矣。嗚呼。後之讀此編者。如觀魚龍曼
衍之戲。如聽黃帝咸池之樂。心目眩亂。精
神酣暢。稱奇叫快。而孰知花鳥風月。片言
短章。亦往往發于忠義慷慨。艱難痛苦之
餘乎哉。刻既竣。太田真琴介南摩羽峰乞
余題言。遂不辭而書之。

明治八年十月廿日 敬字中村正直

近世詩史

序

二

近世詩史叙

三百篇以降。詩之於世。其習以爲
季項羽爲近焉。季之詩。慷慨自
見。帝者之氣象。羽之歌。然壯不自
諱。取之。以激其豪氣。舒其苦。久
米士雲之吟。墨海樂唱和之韻。苗
見子記。善詩。發於自然之情。所
謂天籟者。斯文以歸。入以傳。其真
後人之詩。故志播之。友弁。詠山。越
之樂。男兒。述古。妓之怨。其工。雖可。極
亦何異。子波。我亦。吟。其。夢。夜。照。以
之際。或勸。王。或佐。帝。遂。編。其。本。
西文。解。而。慷慨。之餘。爲。詩。或。我。
勝。而。志。盡。或。子。取。而。擢。懷。其。善。
亦。伸。宣。懷。之。類。能。有。言。作。詩。
不。能。自。止。也。夫。曰。生。其。詩。之。名。詩。

史以詩之可以充史系也。抑後古
之際。使僕學出。各有可為。而亦無記
者。則並立于朝。憶我。吾少。是雖
新。海也。併。水。詩。可。後。挑。而。其
而。既。而。差。不。善。神。於。其。其。其。
乙亥冬十二月。

海東李海庵後

近世詩史

近世詩史序

火龍吹炎。午熱以燬。頭痛目眩。因臥於閣下。
太田真琴。携以寒衣。使余名而汗之。序之。
余披讀之。汎。手。有。正。雅。之。音。則。立。廟。堂。
以。贊。維。新。之。政。者。如。浩。之。字。其。盛。文。之。者。
則。脫。海。外。取。長。補。短。以。助。開。明。之。治。者。
也。其。然。奮。然。有。勇。剛。之。音。則。勸。錦。旗。
行。之。軍。士。也。慨。然。愴。然。有。慨。嘆。之。多。為。
師。興。尸。戴。而。冠。者。也。觀。之。詩。之。不。知。其。
多。業。之。有。事。業。可。以。想。見。其。人。矣。詩。之。
為。史。蓋。少。之。誣。也。余。拘。案。啜。之。以。笑。切。
切。而。嘆。頌。痛。然。金。不。復。覺。其。熱。其。何。
也。乃。名。曰。近。世。詩。史。研。朱。汗。之。誣。余。
詩。此。終。汗。歟。授。筆。曰。吾。為。何。取。此。凡。
磔。而。滿。之。金。玉。中。其。真。琴。曰。此。之。信。子。
所。實。應。其。論。之。有。拙。乎。於是。批。評。終。

夢。追思流離艱苦一日。悽然魂消。

明治八年八月二十日。識於東京五環若屋。

而摩綱記

膠石庄田垣書 (三) 膽

叙

懸玻璃鏡。勾引光線。形象隱然。皆可看出。若照水之巧也。小西之樣。隨觸隨鳴。事以五應。清濁之和。多大同琴之妙也。創意之奇。以強奪造化。可以娛人。身自忘然。其所寄者。止於聲。象形可古。田舎梨。細羅。佐名。家之。待為之。

序

下二卷。命田舎。待使。開卷。必見人之所遭遇。與其所抱負者。一目瞭然。故其入彀。大政有和聲。聲之。音出。從王事。見車騎。馬蕭之聲。撫旌也。乃乃。耳去。困之。音。桂。射也。乃。松。系。程。祿。之。張。以。他。子。以。弟。德。同。上。異。曲。也。世。事。狀。以。漆。木。此。卷。可。謂。後。言。之。玻。璃。鏡。強。新。之。

大尚琴志の耶若に應聲律富
性情則能寄鏡琴之不能寄者
而理亂之機又焉動思之道存焉
真琴之可取者存此永獨惜其
采予詩收之卷中余詩不成調與
大尚琴志相反真琴不持玻璃鏡
而照破之者何也及其微序者
以衆之

序

明治九年二月

小笠原勝脩撰

近世詩史上卷

榎本武揚

菱田重禧

雲井龍雄

安部井政治

木戸孝允

奥平居正

玉出佐太夫

人見勝太郎

大木喬任

中村正直

副島種臣

西鄉隆盛

勝安芳

大鳥圭介

近世詩史

目錄

伊藤博文

陸奥宗光

中島信行

柳原前光

熊谷武五郎

永井玄蕃

小松濟治

重野安繹

竹添進一郎

加藤弘之

杉浦誠

牧野貞成

下卷

南摩綱紀

秋月胤永

中井弘三

大久保利通

澤簡德

白戸隆盛

大久保一翁

吉田某

岩上昂

前原一誠

廣澤安任

東久世通禧

卷某

石井竹陽

北條竹潭

小笠原勝脩

大庭機

關場忠武

近世詩史

目錄

田中玄昌

柳田友廣

近世詩史上卷

太田真琴編輯

搜水武揚

海軍中將兼特命全權公使靜岡人

羽州路上望鳥海山

碧血痕存舊戰袍。壯圖一蹶氣猶豪。松陰涼動羽州路。白雪際天鳥海高。

船過喜望峯。再得貿易風。

帆影參差月似弓。大洲東去有無中。船頭一笑笑

近世詩史

上卷

相祝。又駕南球貿易風。

囚中作

自歎身世與心違。胸裡汗青未治饑。天道耐疑。又耐怨。人間誰是又誰非。故朋失路。東西沒老母在堂。漁雁稀。入夢昨冬酣戰日。劍花和雪亂紛飛。

長林吊列王之墓

長林烟雨鎖孤栖。末路英雄意轉迷。今日來吊人。不見霸王樹畔列王啼。為多霸王樹有鳥曰列王故三四及之

書感

惻惻動人

非德從來暗大機。十年事業與心違。山川路隔向誰訴。天地家遙何處歸。白馬蹴冰波。絕境丹心貫日思。王畿此身縱令為蝦土。魂向慶應陵下飛。

出五稜郭

心事可想

孤城看將陷。軍氣亂如絲。殘卒語深夜。精兵異往時。草身甘就戮。百歲愧愆期。成敗兵家事。何須苛論焉。

近世詩史

上卷

二

菱田車禧

子海鵬。美濃大垣人。

飲普水魯雲閣

陸州刺史開佳宴。普水魯雲秋色多。忽有紅妝含笑至。兩行坐客眼先波。

戊辰人目前。一夕就縛將屠腹。賦此自貽。

昔學飲酬君父恩。一燈空伴卅餘年。從容就死是

今夕。只恨丹心未徹天。

青樓作

古人所難

陸州刺史亦風流

妙
真元經

夜山低處一燈青。珠唱紅歌酒未醒。少女如花年
十二倚欄忍。瞋數春星。

逸題

五日參朝一日閑。蓬頭鹿服跨洋鞍。春風不使英
雄老。花滿船頭十二欄。

臨發青森賦以似諸子

一封謄奏九重天。男子胸間日月寬。參議若能取
吾議。重來踏破勿來關。

近世詩人

二采

三

雲井龍雄

羽州米澤人明治辛未
歲有罪被斬于小塚原

送釋俊師

生當雄圖蓋四海。死當芳聲傳千祀。功名非有遠
出群。豈足喚為真男兒。俊師膽大而氣豪。憤世風
入祇林逃。雖有津梁敷無處。難奈天下之滔滔。惜
君奇才抑塞不得逞。枉方其袍圓其頂。何事代鉢
僅。潔身不為鹽梅調。大鼎天下之溺援。可拔人生
豈無得志秋。或至虎吞狼食王土割裂八州之草。

豪氣雲天

任君馬蹄跡。君今去向東海道。到處山河感多
少。古城殘壘趙耶韓。勝敗有迹猶可討。駿之山兮
參之水。英雄所起地形好。知君到此氣慨然。當悟
大丈夫不可空老。

雨中觀海棠有感

綠濕紅沈悄無力。恰是楊妃啼後色。花容如愁何
所愁。我向花問花默。想昔濱殿之雨。莊把酒賦
詩賞海棠。當時同盟今四散。或為魯連或張良。須

無限感慨

近世詩人

二采

四

水火不碎其志。往々激昂就死地。死者無首送
廷生者海。為猶唱義。嗟我赤城讒脫身。再舉無策
久遠。巡今對此花。想往事。愁淚和雨紅沾巾。

失題

小小讀破萬卷書。欲討聖源遡洙泗。道與世背無
用處。放蕩却是一俠徒。破產傾身多結客。奮為六
王進奇策。山東豪傑半屬望。共謂秦兵擊可卻。從
散約解壯圖。違天高。地厚亦踟躕。一朝自悔心恍

真個豪傑
語罷風起
筆端

雄心千里

壯絕
絕人快

然深耻平生氣宇窄。君不見有窮女字婦城一飛。
走月夕為家。我亦將遠探其窟。手攀天挂折其花。
亦不見緱山仙子其名。晉駕鶴漂渺斬雲陣。我亦
將極八宏橫絕弱水。進我輒聞說八小州外別有
五大州。長風好放破浪舟。烏拉之山大平海去矣。
一聞全地球一世俊髦盡把臂。萬國奇勝盡屬眸。
然後稅駕故山。蕭洒伴松菊。一世能事庶幾將始
休。

近世詩史

一卷

五

禁錮中送人之東京

不忍池水繞東台。腥風帶雨撥寒灰。豺狼橫道老
龍逸。吉祥之閣安在哉。君不見元和定鼎肇基趾。
威武西震覺羅氏。舜雨堯風六十州。朱門金殿八
千市。滄海為田天命移。難奈文恬又武嬉。前門防
虎後門狼。大廈一傾無人支。噫嘻獲鹿忒鹿機。一
髮懷古慨今竦。毛骨君今攔鞭遊其墟。百感知聚
君一瞥。如今何物猶依舊。墨田之花高輪月。

字々悲壯

豪氣吞宇
宙

失題

天門之窄々。於甕不容射。鉤一管仲。燈增無恙舊。
鱗麒生歸江湖真一夢。自笑豪氣猶未摧。每經一
難。一倍來。昨視蜻蛚洲首尾。向何處欲試我才。講
學平生護此志。道窮命乖何足怪。只須痛飲醉自
寬。埋首之山到處翠。

全

欲回狂瀾濟一世。道之窮通未肯計。直氣吐來震

近世詩史

二卷

六

真勇紀不
受人掛制

九重滿眼神肢足。外藩天日不照孤臣心。枉被浮
雲遮且蔽。欲死則死。生則生。我時豈容易使人擊。
盤車夕過東寧川。目擊湖山淚沾袂。回首遭逢夢
耶真。壯圖只有水東逝。嗚呼縱令此山如礪。此川
如帶。區々之志安能替。

戊辰歲晚

會津人戊辰之役與
幕兵到箱館戰死

海潮到枕欲曉。天感慨撫胸。獨不眠。一劍未酬亡

豪情可想

國恨北辰星下送殘年

交交回頭半委塵豈圖此地獨迎春燈前暗灑幽

懷淚是不尋常送歲人

過函關

挽回頽勢在此間不達丹心敢不還廟議恐遲胸

裡策肩輿如矢渡函關

飲野貞成 仙臺人

送三好五郎之北海道

近世詩史 二卷

地球一塊物何又論西東行矣成偉業可助造化

功鯢魚振大鬣躍入北溟中

木戶孝允 參議
長州人

戊辰作

去歲王師迫我境今朝孤劍入他鄉回頭世事變

如夢一片依然男子腸

偶成

一穗寒燈照眼明沈思默坐無限情回頭知己人

亦是先天
下之憂々
任天下之
責者元如
此

已遠丈夫畢竟豈計名艱難他年萬骨枯廟堂風

色幾變更歲如流水逝不返人似草木爭春榮邦

家前路不容易三千餘萬奈蒼生山堂夜半夢難

結千壑萬山風雨聲

書懷

天道不知是歟非陰雲漠々日光微我君即閣看

難見春雨和涕滿破衣

奧平居正 長門人戊辰之役將兵到
于越後後判事于佐渡

近世詩史 上卷

寄小川某

長銀短衣有誰憐遊說諸侯亦有年收此長旗擒

將手南軒撚虱小春天

寄前原一誠

上帝茫無悔禍期函館尚滯八千師豺狼在野孤

何問廟堂諸老何猖披壯士暮年志未歇悲歌慷慨

慨何激越安得秋高馬肥時玉關橫樂賦秋月

寄友人

亦是王猛
流亞

志在千里

直是大丈夫心腸

眼中無五州何論東

無限慨嘆

七八種有
味

其喜可知
也

慷慨悲憤
字字拂風
霜

人間機巧逐年開。文物典章何在哉。都鄙既無脩
漢學。詩書必不待秦灰。世丁厄運。吾當默天有定
時。君莫哀。請見離邊梅一朵。却從雪裡挽春回。

玉虫佐太夫仙臺人曾遊海外戊辰之役首謀殉國

歸自米利堅

萬里鯨濤幾苦難。當時豈料得生還。焚耶非夢看
初覺。翠黛依然故國山。

失題

近世詩史

二卷

九

要將一言拂妖氛。高議直衝萬里雲。寧計誠心不
貫徹。適使污辱及我君。此辱恐為皇國辱。欲起救
之。苦無術。平生所讀果何書。平生所食果何粟。上
書。川陶非黨人。伏闕陳東古忠臣。子直說吳將救
魯。相如佐趙能抗秦。青史所載多如此。讀之感憤
不能已。嗚呼諸君意如何。鴻毛泰山同一死。

人見勝太郎靜岡人戊辰之役率兵到函館

就囚赴鎮西途中口占

人臣唯欲致人臣。齧雪卧薪蝦鳶春。防衆孤軍終
敗績。忍飢殘粟幾酸辛。身囚天末多離友。道經故
鄉難值親。惱殺秋風不相待。片帆直謝浪華津。

已巳暮秋北豐囚中作

秋堂風冷雨潛潛。一點禪燈客枕閒。豪氣未消半
霄夢。指揮殘卒戰函山。

下淀川

多少冤魂奈恨何。激城雨暗亂啼鴉。無情最是長

近世詩史

上卷

十

江水依舊溶溶入浪華。

大水喬任參議兼司法卿肥前佐賀人

戊辰十月二日聞賊徒降伏有感

紀綱落地七百年。今日錦旗新輝天。大仇一敗肝
膽碎。百萬虎將征北邊。幸有天人相歸向。廟堂衣
冠多名賢。唯憂毫釐誤。千里誰建長策定乾坤。監
撫漸要慮終止。經營妙機有張弛。四海凸凹皇山
川。億兆蚩蚩皇赤子。苟能軼至公。無彼我心可維

萬世飭綱紀。君不見累代聖皇仁。均天萬世之下。實戴稱。昨夜捷報不堪喜。反覆更閱名氏篇。

中村正直

學敬宇靜岡人究漢洋學曾學于英國數年

詠法國新報

復見滿城春色回。樓臺如畫鬱崔嵬。善人治法秉公義。霸主威權化劫灰。諸葛推誠敷情悅。重華好問四門開。請君試閱古今史。福慶多由禍害來。

僻村牧師歌

譯西國名士詩

近世詩史

上卷

十一

千古名言
足於內者
無求於外
釋氏之神

一叢樹林圍小屋。中有牧師守幽獨。一年所得四十金。自謂衣食既豐足。不解諂諛不求權。勢不變其說。以適時俗。不願其身陞高位。貪世間難恃之利祿。但願扶起窮民無告者。同受來生無疆之真福。門前豈有長者車。案上何見貴人牘。臭穢丐子是賓客。家人慣看頗不覺。或有驕奢敗家者。悔悟往事祈收錄。一見許之如舊識。誘迪何肯憚繁複。白頭老兵坐爐邊。一手倚杖語真樸。主人但慙其

懇切

筆活動
使人有目擊之思

一結悠然

其喜想

衰朽。往時善惡寧推鞠。吁嗟乎牧師但願拯救窮

苦民。其過偏在德善。通常至垂死病者。拊指示真

理度。迷津憂愁消去。快樂生肉身。一脫靈琳全寺

觀講道會。老少溫然其容。鵲其言。彼或欲朝而來

者。聞之感慨讚真神。會散牧師步歸家。野人簇擁

皆朴純。村童自後戲牽衣。欲博師之笑。開唇師果

驟然回其頭。慈父之愛見于顏。茲輩有憂師代傷

茲輩有喜師代歡。吁嗟乎牧師虔誠人。身在塵世

近世詩史 上卷

十二

心在天。君不見高山腰脚纏風雨。日光永遠照其巔。

巔

副寫種臣

前參議兼外務卿佐賀人

通州阻雨

使事完。成持節還。自嗤身世未全閑。通州夜雨達

憲。夢重謁清皇。咫尺間。

辭職有作

學涉古今才未真。粗豪為性德無隣。只有聖恩與

天大為容獨立不羈民

西鄉隆盛

前參議陸軍大將鹿兒島人

楠公

把此志者真能有幾人

明壽奇策不可模。正勤王事是真儒。懷君一死七生語。抱此忠魂今有無。

偶成

英雄之氣溢紙上

幾壁辛酸志始堅。丈夫玉碎耻靴全。我家遺法人知否。不為兒孫買美田。

近世詩又

上卷

主

送兵士之東京

王家衰弱使人驚。憂憤殞身千百兵。忠義凝成腸鐵石。為慍為礎築堅城。

辭闕

憤懣之氣迸筆端

獨不適事情。豈聞談笑聲。雪羞論戰畧。忘義唱和平。奈指多奇怪。武戾難再生。正邪今何判。後世自知清。

偶成

高路不似人熱

平生蘭交分外清。今朝有約已斜陽。倚門倚戶相候久。春夜長於秋夜長。

勝安芳

參議海軍卿靜岡人

失題

昔人去不歸。空餘首陽薇。萬嶽誰知己。一簣換朝衣。孤舟大江晚。滿天雪霏霏。

偶作

君不聞。火船雄飛數萬里。宇宙雖廣咫尺裡。颺舉

近世詩又

上卷

主

靜々壯雄

長驅入蒼茫。恍然恰如遊海市。車輪轉濤鯨尾。動高帆。飄颻鵬翼起。南極沈沈。初月輝。冰山壘壘。連天峙。俯推海圖仰窺天。形象歷々掌上視。無數島嶼翠一痕。翠裡包含幾洲里。一自宇內歸掌摩。竟恣吞噬。碧眼士。嗚呼人世局促何足恃。小信大義誤。非是既將功名謝。雲波向誰更說海軍技。安得遠識如伯氏。大令天下定基趾。

偶成

職大憂慮

起得正大

達人之語

其危累即
不當使人
瞻寒

天地育生無偏私。日月照物自至公。千山花香長
春節。萬木榮。添高秋風。四時循環。豈徒爾。世人難
解造化。爭小利。兮失大利。誇微功。兮誤全功。嗚
呼。千載一時實。此際典廢尤思金。始終微力難奈
報。今日半世空蒙主恩洪。辱知師友骨半朽。接面
交朋意難通。痴迷獨隣大道迂。蹉跎常恐孤愚忠。
酸辛知否。世味美真味。却在無味中。

逸題

近世詩史

上卷

十五

四立彈飛下三逢白。又圍二收敗散卒。回首事々
非高議。罵超群。崇論招衆議。東台戊辰天。涕泗橫
舊衣。

偶成

謬從辱祿仕。舉止失其是。猛省悟昨非。豈又不足
耻。永歎破窻下。百年亦如此。殘生今幾許。偷生不
若死。

全

寓意深沈

無限感慨

豪壯

心事青天
白日

羣動日駭々。聊足慰煩襟。世上風雨惡。鴉雀悲疎
林。豈何張密羅。尚憶有好音。後事今難言。昂然表
素心。

大鳥圭介 工學權頭
靜岡人

偶成

政綱紛乱乱如絲。一死報恩在此時。十萬甲兵多
薄澆。丹心就義幾男兒。

出五稜郭

近世詩史

上卷

十六

兵氣衰頽事既窮。翻然代衆救茲身。獨羞一片男
兒骨。不曝白沙青艸中。

伊藤博文 參議兼工部
卿山口人

書懷

讀書燈底靜無譁。自笑平生苦蔽遮。好拋胸間人
欲念。獨觀寒月照梅花。

失題

活識獨應知。變遷平凡何足悟。虛玄活名萬世非。

滿身是
忠肝義膽

胸中
自有

雄豪

真是
挂石

吾忘注眼千秋
察先夷險往來如坦道
死生拋
肩任皇天我徒須盡勤
王事勿為一身圖瓦全

艤中作

艤艤遙到歐羅巴
指點看過佛利加
洗々碧天雲
產月茫々蒼海浪花
花一年身作他鄉客
萬里夢
歸故國家昨夜南
眠此已盡回頭帆上
北辰斜

飲某樓

豪氣堂々橫太空
日東誰令帝威隆
高樓傾盡三
近世詩史 上卷

杯酒天下英雄在眼中

次中為君韻

報國真情誰識深
非君無復語斯心
請見別代英
雄掌時勞變遷古
似今

陸哭宗光 舊神奈川縣令今
議官和歌山人

己巳五月奉敕赴東京

壯志未酬餘短身
斯行何又避辛酸
政治他年冠
千古皇道如今屬
維新天下安危歸
冷眼却家挂

石室無人一封泣
草濟時夜不負此
君與此民

次中為兄韵

福海投身不厭深
為君常抱此丹心
從來窮達憑
天命豈有人情違
古今

中為信行 神奈川縣
令高知人

淀川

此夜扁舟迴激川
蓬窗雨暗五月天
可憐世事艱
難際獨有羈人不
就眠

近世詩史 一卷

書懷

憂國真情日覺深
何時事業得素心
敢買小說世
人笑耻北皇基在
當今

柳原前光 全權公使
京師人

上海客中作

江吹上海樓々歌
管邀中秋絃聲如
雁天
如水皎月高懸吳
越州

熊谷武五郎 大藏大丞兼記
録頭秋田人

浩懷

憂心幾何
匪躬之志
志入責重

偶成

仕治民之
責者不可
無此心

事務難調時易去。秋風八月雨方繁。半夜吹燈聞
公冊。猶有堤防不築村。

永井玄蕃

失題

客中歲月一何忙。又見蕭條柳葉黃。五十米無記
三年時有夢歸鄉。芙蓉花落金風晚。蟋蟀聲
高玉露場。人事從來不如意。簿書檢了夜燒香。

近世詩史 三卷

小松濟治 六等判事和歌山縣人

歐洲客中作

孤客天涯殆若秋。鴻音迹絕更添愁。雁聲驚覺歸
鄉夢。鎌月如霜掛屋頭。

失題

嗚呼歲月遷。男兒芳志有誰憐。思親情淚燈
窗照。憂國鉄腸酒盞煎。勢至使然恨天地。時當可
歎思先賢。蕭々客舍堆書裡。卧送明治第四年。

重野安繹

正院六等出仕
号成齋流記爲人

送西鄉氏督兵赴北越疊韻三首

風霜秋冷釋松城。鐵騎判時旗幟明。不啻兵機貴
神速。莫教裘帽念西征。自江唐李光弼到軍。今
越匡胤建兵伐蜀會。汴京大雪。宋主念西征將士
寒凍解所御裘帽。馳中使賜之。

全

懋報高風七尾城。軍營依舊月光明。戎衣露坐悲
懷古。秋滿越山霜雁征。

近世詩史 二卷

全

胸中豁畧是長城。誓剪鯨鯢報聖明。吉甫來歸知
幾日。高堂飲御詠于征。自注。懷道濟北齊名將。時
喻亂賊出左傳。○小雅。六月。萬里長城。○新說
也。首章曰。王于出征。匡王國。其末章曰。來歸自鎬
飲御諸友。

舟遊

高揭蓬窓酌夕陽。樓峯容在水中央。是杯早晚芳
山裡。玉樹風前醉異香。

竹添進一郎

名光鴻字新卿号井々熊本人正院脩史局二等儒備

戊辰役中作

字々慷慨句々慷慨霜

以弟討兄臣討君六十余州無大倫徒將成敗論
曲直孰是逆賊孰王臣城上孤鳴月色濕燈前一
夜萬感集神州陸沈泉如何腥雨臘風天亦泣

加藤弘之

議官東
京人

壯觀樓作

烟波萬里轉吟望浴後呼杯又上樓併得房總武

達世詩人

二未

二十一

相景送迎米普魯英舟

杉浦

誠開拓使中判
官靜岡人

將還函館帳然得一首

醉滯京華已六旬新知舊識每相親邀遊今夜買

春客明日寒山衝雪人

近世詩史上卷終

近世詩史下卷

太田真琴編輯

南摩綱紀

正院權大主記字士
張号羽峯青森縣人

亂後客中作

小笠原勝修
批點

甲死越州乙野州亂離阻隔獨搔頭故山在眼魚
鴻絕遠道懷人雨雪稠北海風濤依舊怒東京文
物入新愁登臨偏怯魂銷盡落日寒雲古驛樓

兒女避兵男枕戈流離生死果如何懷人情向愁

近世詩史 一卷

邊切感世心從病裏多亂後江山空涕淚客中日

月易蹉跎悄然獨剔僧房燭欲和少陵同谷歌

健兒半死計相違九族分離何所依古寺寒燈形

吊影荒村積雪凍兼饑原頭白骨無人斂雲外青

山有夢歸誰向九天明曲直回思家國淚沾衣

鵲巢千里遠相依思入家鄉一涕歎蕭寺今吾彈

有劍荒村憐汝賦無衣寒雲東去連山岳飛雪西

來接海沂亂後乾坤渾慘澹病中况復故人違

秋月胤永

正院七等出仕字子
錫号韋軒青森縣人

失題

以下綱紀詳
心傷悲痛

京洛此時合獻謀謫居伏病北蝦洲死埋枯骨還
非惡唐太以南是帝州

寄與平居正

一字一淚
腸斷神傷

行無輿兮歸無家國破孤城亂雀鴉治不奏功戰
無畧微臣有罪今何嗟聞說天皇元聖明我公事
業發至誠恩賜赦書應非遠幾回額手望京城思

近世詩史 下卷

之々々々達晨愁滿胸臆淚沾襟風漸歷兮雲慘

澹何地置君又置親

中井弘三

外務省一等書
記生鹿兒島人

發長崎赴上海

愉快

遙指扶桑以外天三山五嶽在何邊火船驚忽如
飛鳥載破鯨濤萬重烟

入紅海

烟鎖亞羅比亞海雲迷阿非利加州客身已在青

廣而大井
蛙如余者

不能盡見

天外九萬鵬程一葉舟

偶懷友人

凍雲籠月海漫々船到歐洲夜轉寒京洛故人無
恙否尺素待汝報平安

無名氏 或云土州人某

吊雲井龍雄墓

星田之花兮可醉蓮湖之月兮可吟憶昔連騎遊
遊日櫻花爛熳月沈々錦城春暗辛未年人生沈

近世詩史 卷一

浮是天然若有孤信徹亡友感淚成泉至九泉

大久保利通 參議兼內務卿鹿兒島人

戊辰作

任重責人

陞舞千里向關東獨拜天顏恩賜洪一夜難酬臣
職重鞠躬願致太平功

澤簡德 若松縣令靜岡人

夜雨有感

任牧氏之責者其憂

如此戰餘殘弊何看來一夜鬢將皓無情窗外蕭

自深

夕雨偏向芭蕉葉上多

白戸隆盛 陸軍中佐靜岡人

下總國習志野原露營中作

真是露營之景

平原漠不辨西東深夜無燈物色空點滴徹夜營
裏雨驚濤衝耳野間風戎駒蹴地蹄生火煮飯穿
雲韻破穹枕石食蒿軍陣事卑尊共臥幕家中

大久保一翁 東京府知事靜岡人

偶成

近世詩史 下卷

避喧松下養殘軀滿案有書聊可娛誰是人間真

男子支頤獨看地球圖

吉田某

送援本中將赴任魯西重

唱歌陽關且倚樓七年五度話離愁北門勸靜須

任責邊境風塵何足憂渭樹江雲夢魂逐歐山亞

水客身悠答恩行道在今日不是遲々去國秋

岩上昂 元老院權少書記官土佐人

真景如畫

下淀川

一帶長流入洛通蓬窻涼迸水車風半灣蘆竹半灣柳青戰淡烟微雨中

大分客舍作

如此春風浩蕩何田園亦自競韶華異鄉山水非無趣只怕歸期及落花

前原一誠

長州人戊辰之役有功于王室

逸題

近世詩史 下卷

五

于戈未定事如麻身委艱難不思家默斬姦臣數曆月十年永負故山花

全

汗馬鉄衣過一春歸來欲脫却風塵一場殘醉曲肱睡不夢周公夢美人

廣澤安任

号淡烟青森縣人

歸農作

碌々偷生四十年東車西馬迹相連故人今若問

大開牧場

故有此作

何在芳草地頭牛睡邊

戊辰獄中作

一日來投堅鎖中無辜有罪附蒼穹大夫名節重於死任汝縱橫論此躬

遊學中作

離母遠遊非所安決然歸去勢亦難中心兀々支頤坐古社孤鳴曉月寒

懷剛

東久世通禧 從三位侍從

近世詩史 下卷

六

龜山營中供西鄉都督一餐

露營半歲勞王師懲罰功名轟四陸回想英雄千古感陰風五月渡瀘時

賢等可想

卷

佐賀縣中隔

佐賀縣兵役中作

散財百萬任人譏今日成功事不非併得火船與銅線天兵一々投好機

良器助捷決非浪費

全

其發則暴
其志則可
怒

前無後敵

一讀悽然

欲策征韓萬里功。紛紛今日說豐公。憐他一着男兒志。翻墜衫偷鼠竊中。

全

勤王一戰獨稱楠。不負夫君平日談。請看奇鋒冒巨賊。戎衣痕着鐵丸三。

全

奈此生靈菜色何。殘餘村落豈堪過。青燐隔水人耶鬼。始識前林露宿多。

近世詩史

丁卷

七

石井竹陽

字太奇三藩縣人

題台灣軍記

鄭氏威名數百年。東方英種豈徒然。知否明室遺臣手。已著神州第一鞭。

詠台灣

六大州開輪艦通。百都一瞬決雌雄。豈圖兩帝堂々陣。徐布彈丸黑子中。

全

戰罷貌貅猶駐台。北京未試使臣才。兩朝損益無人識。唯見歐商舩往來。

北條竹潭

米行詩記

余性好漫遊。嘗欲航海外。而歷覽其土地風俗。而未得也。今茲庚申幕廷建議。差使節于米利堅國。申定條約。余乃從外國局隊長成瀨君往焉。因得以償其素志矣。然海資火船。陸用火車。

近世詩史

下卷

八

欵忽往來其所歷殆一萬五千餘里。據我里而法不同而十晦朔之間。一周全地球。故其所目不能得其詳。姑詩其二三。得三十餘。要存其境于髣髴耳。

正月十八日午牌出海軍局。駕火輪舩。名包係米利堅所織。酉牌發品川港。抵橫濱。淹留。

遂以念三日辰牌啟程。房總之外。蒼波渺茫。

與天相際。即西人所謂太平洋矣。

火輪蹴浪上舟程。蓮岳開顏送君行。從是春洋千

萬里風潮勿負太平名。

連日陰晴無常。寒風挾雪。至念七夜。風威殊

烈。怒浪過船者屢次失脚。船一隻。米人云二

十年來所無。

颶母興雲雨。霈然魚龍出沒。撼坤乾。火船不直。

槁葉。狂浪簸揚。冲半天。

風脉變轉。舟路不中算。乃慮煤炭虧乏。謀至

三維斯焉。二月初七單午。轉舵南指。仲四日

近世詩史

下卷

九

入合諾魯港。是為三維斯都城。碇泊十二日。

開港僅經十二年。青欄粉壁。水濱連。桅檣林立。旗

号閃。輝是西洋商旅船。

二月念七發。三維斯焉。風順帆飽。船行迅速。

三月初七夜。坤位有光。輝映照。洋客稱。為北

光。蓋電氣也。初九日抵聖浮嵐。紫水港。々加

利福尼。一部。清人所謂舊金山者。即此矣。滯

泊八日。

西遊

紫水港。宛如括囊。灣回山繞。好風光。鑛金近日稱

豐富。商舶來開。交易場。

仲八日解纜而發。連日天晴。風順海穩。

語慣蠻音。猶未真。長鬚蓬髮類。西人。舟中稍解。洋

奴俗。一醉俱。顧日曜辰。

次石川。挂舟韻。

之。走天涯。漂泊身。航來日久。豈傷神。遊蹤願。遍五

洲地。籠絡青。瞳被髮人。

下卷

十

三十日船過大陽下。炎熱如燬。連夜不寐。聞

月初五抵巴那馬港。此間土地狹長。是為南

北米利堅方界之處。

一簇人烟。接海灣。春潮拍々。浴鷗閑。此間真個盆

池景。松塢蘆洲似假山。

初六日捨船上火輪車。下辰發。巴那馬。輪轉

風起。颭疾如箭。左右不辨物。至聖波普。婁小

憩。下午抵西斯達亞爾。此間鐵路二十餘里。

一瞬千里
非誣也

錢道蜿蜒絕萬坡火輪倏逐伏蛇過路傍草樹認難得恍訝奔流漲碧波

亞斯達亞爾為巴那馬東邊米人驛暗輪船而族名路初八日拔錨開駛沿古巴馬過墨

是可灣遶佛羅里達岬而東念三日抵凡項郎是為華盛頓河口翌念四日移坐河船亦

火輪也徹夜溯洄念五已牌抵華盛頓府即合眾國都城矣入海軍局遂車馬就館觀者

近世詩史
下卷

如堵淹留二十五日

劍銃如林列正兵護軍衛隊肅相迎家々齊表扣

觀意旭旆星旗閃滿城

華盛頓廟

真箇快傑

協和建國眾何違曾攘猾奴恣虐威三十三州餘澤遍高墳表德永巍々

四月廿日駕火車發程抵模爾氏孟兒錢道二十里許車行迅速不出一時此夜為我使

奇巧使人
驚目怪

節放烟火現日本使善來之文車聲馬語晚紛紛街上集觀人如雲烟火呈奇酬使者粲然現出蟹行文

奇絕奇巧
其智甚良

念一辰牌火車發行米牌抵邊爾士兒比亞投宿此間五十餘里有二大河皆鐵橋通火車又有江斷處半里許曰萊斯克巴那火車至岸火船即載而濟之其迅速可驚

奇絕奇巧
其智甚良

輪頭風起響轟々一瞬奔過百里程直到江流斷途處火船又載火車行

近世詩史
下卷

途處火船又載火車行

淹留六日旅館壯麗奪比土人稱為合眾國

第一

蓬萊三島
不帝

白壁青欄樓六層閨房三百繞階登數條傳命廊間釋一管分光煤氣燈懸壁菱花秋水淨醺風繡幙彩雲興淹留卜小嘗奇饌牛酪調成小脆冰

念八日火車啟行錢道三十餘里抵亞色伊捨車乘輪船未牌抵紐約合眾國大都府也

人口二百餘萬學校及養病育幼濟貧啞盲諸院悉備其繁華軼華盛頓府數等矣淹留

十三日

高閣層樓千萬家器壁如沸見繁華往來不用騎
雙脚到處街頭賣馬車

全

振振賢政日新乃知教育遍窮民啞能手語盲
能辨州內全無廢病人

全

全

何必尺書煩置郵製將電氣化工件一條銅線亘
山海傳命零時幾應酬

五月仲二上時輪火船名加馬十三日正午

解纜南東向並多聯海開駛

異鄉何必願淹留只恨天涯難再遊回顧都門情
未盡數聲号炮破離愁

全

誰知二字
久佳作直
當日來
如何

航去地球方半周歐羅北望水天悠披圖細閱緯
經度足底誰知是我州

念九日抵綠峯島々阿非里加一部隸于葡

萄牙土地礪確人烟稀疎僅得購煤炭駁泊

一日發船六月仲四過赤道下而南仲六旁

暮看月缺

推算積聚

月兔晚摩層浪生清光猶又五分明家山見缺在
前夜應自三更到五更

近世詩史

下卷

十四

連日風位不順船行獨資于火以故煤炭缺

匱海路甚緩糧水亦乏每食得一槐耳

火船炭盡任潮流客恨併牽機局憂蒼皮萬里人

烟遠薪水無由扣戶求

念一日抵羅安達隸于葡萄牙聞往昔葡人

開此港費財不貲而土地蒸熱民不能棲息

今其衰矣土人黝面拳髮骨格如獼猴不辨

男女每日購炭運水申牌拔錨而發

費長所常
若此

所以為文
明國

其盛時也

形狀得妙

至便之船
亦有此至
不便

真箇野蠻

拳髮如螺，膏似漆，身纏布襍，換衣裳，沙頭開店人，成市，憶起桂城羅漢堂。

七月初八始見南極星，此間連日風濤怒激。

船脚俯仰，西人稱喜望峯之風濤者，即是十

七日船向印度，廿日至南緯四十二度餘，愈

南而寒氣愈甚。

巨艦截波，排海鼇，長風萬里氣方豪，無端身已入

寒帶，月兔北奔南極高。

近世詩史 下卷

十五

次綾部萬里釣

乘孤酬志，豈偷安，不厭胡風吹拂冠，儻使火船如

我意，極南星下破寒冰。

次廣瀨松軒韵

航向歸程已三月，故園尚在日昇東，客心只祈火

輪力，願及菊花離落風。

念七八日風濤始穩，船乃東駛，至八月初八

北折向東印度。

已圖作周

半生漂泊事漫遊，火船已圍全地球，唯恨洋程不

思鄉

曾慰慈心告暫離，如今却悔負前辭，阿娘夜々秋

燈下萬里風濤勞，夢思

全

歸途枉路誤心期，瘴雨蠻烟情轉悲，遙識阿娘對

秋月呼兄，應問來何遲。

近世詩史 下卷

十六

仲秋夜泊瓜哇岬，自發羅安達凡四十餘日

始下錨

此是東西海水關，舟通島嶼岬鋪間，蘓門岸對瓜

哇岬，月照模糊西畢山。

十七日抵拔多比亞港，此間群島排列，暗礁

甚多，恐有掃觸之患，且測且進，拔多比亞在

東印度，隸于和蘭，商船輻湊，桅檣林立，將近

一大埠頭也，滯泊九日。

標烟百尺聳江濱。椰子林間三五鄰。風俗自知華土近。髯奴幾擔賣蒲苴。

全

繞屋園林綠欲迷。幾多門巷路東西。洞門石室多風致。不問先知漢客栖。

寫出賣語亦奇風致

重陽船抵香港。繫纜七日。香港道光相變之後。隸英國。英人曾置英華書院。講漢學。今學員其哀。得新聞紙云。八月念九。英佛陷北京。

近世詩史

下卷

十七

海門秋色夜方清。月照連橋影縱橫。閑倚船窗閱新報。知它西虜入京城。

全

人傳宮殿罹災難。奇策情無挫。虜肝料識順天城。裡月一宵變作曠原看。

十八日發香港。廿日過台灣。鄭成功舊據此地。奉朱明正朔。若干年。聞有朱裔據山東而謀恢復者。

真悲壯之詞

嵯峨連岳聳青空。黛色蒼々氣象雄。此去山東截水復生。當日鄭成功。

念三日見球島

百有三旬在客舟。歸程已覺入鄉州。旭日影升烟浪外。青山一黛是琉球。

上舊氣壯

自出香港連日秋熱。舟中用葛衣。至念五六日。寒氣頓甚。

航過台灣。日一開火輪。添力。片帆開。北風頓覺寒。

近世詩史

下卷

十八

莫筆雪風寒亦下悲

威甚應帶芙蓉峯雪來。洋俗一七日為一回。

念七泊三浦岬。念八入品川港。念八即我念七也。蓋此行逆日一周地球。故閏一日。

小笠原勝脩

字脩之。号千橋。若松縣人。開拓使。八等出仕。

亂後作

曉收原上骨。夜投原上村。々々空無雞犬。愁懷不可言。君辱不能死。國亡不能存。草間猶求活。愧彼泉下魂。

字々悲憤語々淒涼

一讀

秋夜

無家又無食故舊半黃泉露冷蒹葭月秋高鴻雁
天寒人卧病不寐夜如年莫怪霜侵鬢亂餘憂
自煎

歲晚書懷

歲月崢嶸鬢欲皤悠悠心事奈蹉跎南冠空灑新
亭淚一片山河落日多

多小意慨

大庭機

号松齋南蘇縣人若松縣少屬嘗在京都
典尼利氏木像首囚於信濃上田六年

近世詩史

一卷

十九

上田幽囚雜感

又見秋風起其如感慨何壯心猶有在忠膽未消
誓朝誦幽懷賦夕吟正氣歌恨逢多故日空作楚

承氣蕭初

因過

將發上田用賈嶋渡桑乾詩韻留別鍾美館

諸彦

幽囚待命六星霜何料生還發信陽莫怪臨歧垂
涕淚多情也似出家鄉

吾中有憂
亦是真情

關場忠武

青森縣中屬
青森縣人

山上途上偶成

慨然俯仰向誰語不願此身一日寧誘導將黎民
盡尔馬蹄踏破萬山青

田中玄昌

會津人曾遊學
于海外各國

佛京巴里

金殿玉樓巴里都馬車如織過街衢土人來驚多
何物即是那翁勇戰圖

近世詩史

下卷

二十

英倫敦府

英國威武天下推要衝兵備亦嚴哉圓崖圍岸高
千尺滿日渾無不砲臺

富強名不
空也

柳田文廣

字清卿號蕉鹿兒島人
正院八等出仕

記橫山正太郎死諫之事兼奠其墓

起得佳

希世之寶出海隅非璞非璧又非瑜徑寸志心照
六合靈光赫々嬌金烏姓是橫山名安武狀貌端
肅而魁梧靖思深沉存瞻略寤寐憂國形骸靡一

真愚臣
大夫

近世詩史

下卷

三十一

朝發憤辭鄉國書劍千里問鴻儒願以我君政
喜賢願以我民逢唐虞心謂國家有近患心謂廟
堂無遠圖北宋賢良論新法而漢學士議以輸運
聖言斯得治道馳私智必愆機樞古今事唯如一
轍天下治豈有二途俯觀瀛洲邈渺漫仰望彼蒼
茫模糊雒陽朝野腐崩土長安禁苑委荒蕪欲探
世論覈時事或問權貴或蒐蕩衷情迫切遂決死
此際激譽何足拘待詔門前留諫疏自謂官廳不
可汙退到鄰門夜將曉披襟披及自割屠勿謂所
為出客氣易簪結纓真丈夫書奏報到日將午欣
然拜闕絕吸呼骨瘁三田綠樹下神護九重
紫雲衢審々血誠百世鑑醇々讜論千載謨句々
痛快皆白玉字々剴切悉明珠鼎呂是重濟時義
鴻毛真輕獻君軀何讓龍逢比干輩愧殺秦檜
王倫徒和氣敢言稱伯仲平手死諫爭鎔銖利己
害人々皆是委美從俗君獨無高節凜乎抽地軸

近世詩史

下卷

三十二

近世詩史下卷終

逸氣飄然入天區後飛廉兮使奔屬前望舒兮令
先驅在天之靈耿不滅窮天極地參吁俞

明治九年四月一日出版

編輯者

太田真琴

東京第四大區三小區神田五軒町三番地

出版人

牧野善兵衛

同 第二大區示區芝口壹丁目四番地

同 第一大區示區通貳丁目拾九番地

稻田佐兵衛

織田完之 著

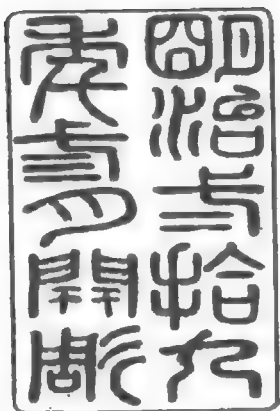
東洋詩史

明治二十九年（一八九六）東京博文館鉛排本

據明治二十九年（一八九六）東京
博文館鉛排本影印

東洋詩史

石埭居士周學篆



東河威者無所正而

其言必足以教

少人之類



東萊勸屋諭

生自其西欲

而不易曉

雲巢居士書



之戰者。直叙黃海之戰。將士之所以奮鬥。政廳之所以施設。莫一不實叙。乃如此則詩可爲史而讀焉。史可因詩而繹焉。其頌歌則謹嚴富麗。其紀實則真摯直截。皆各得其體。亦非與彼失體者同日論也。夫清國之詩文。流于浮言虛辭。竟速國運之衰弱矣。本邦方會奎運勃興之時。苟作詩文者。豈可不深鑒哉。

明治廿八年七月

珂北野口勝一謹撰

東洋詩史自序

東洋神武之邦。堂堂仁義之師。扶朝鮮懲清國。旭旗所嚮。草木靡風。平壤黃海之役。揚朝鮮救護之名譽。挫清國誇大之圖志。戰則必捷。攻則必取。如聞黃海之役。在世界十五海戰中。蓋稱激烈第一。威海衛陷。清國大怖。頻遣使臣來請和。終納臺灣諸島。以結和議之局。予遇此盛時。喜皇威之耀乎海外。想將士之勵於進戰。賦詩紀事。積至一百餘首。自謂是詩史也。而顧其詩。咄嗟吟咏。固缺鍊磨之功者多。然皆發於咨嗟咏嘆之餘。而無一虛設泛叙者。不與世間爭奇於片辭隻韻之間者同也。夫詩言志。志信則言自信。志僞則詩亦僞。讀近

世清人詩。皆浮靡虛飾。牽強僻典。吐無用之言。非仙則佛。荒唐不稽。主義所在。曖昧模糊。徒有示博銜奇之癖。更無精神一到之氣象。細推實用如何。則悉皆鹵莽之贅言耳。虛文迂濶之弊。至此而極矣。一朝有事。則每戰必敗。豈非道義頹廢。廉耻拂地之故乎。本邦人漫作詩。忘實用。稱風流。摸

東洋詩集自序

四

倣近世清人詩。以爲得意者。則恐無所益于世道人心。可不倣哉。可不戒哉。

明治廿八年五月

鷹洲外史自序

東洋詩史

應洲織田完之著

皇統

皇統聯綿豈偶然。二千五百五十年。臣民自古崇忠

孝親政萬機咸奉天

農政

我皇寶祚本無疆。四海同仁御萬方。肝食宵衣租稅
落五風十雨自豐穰

愛國篇

嗟我浦安國。天子惠元々。萬世一系統。大權在至尊。
忠孝兼廉節。不復費多言。誠思富庶策。經綸在養源。
先除洪水害。第一疏印旂。第二理內海。墾田起千村。
第三使華族。移住向北門。北海州十一新畝足曠原。
財散則民聚。悉是作田園。億兆兵食足。夷蠻何足論。

天皇軫念

天皇軫念在軍國。輿地披圖仔細看。營外洩聞人感
泣。戎裝夜擬遠征寒。

帝國議會決三案。曰軍事費追加。曰軍事公債

法律。曰朝鮮公債貸付案。

兩議院開成。柴忱軍資二億萬餘圓。三條三日與論
定。八十餘州報効心。

民心一致

普天率土我皇臣。一致四千餘萬人。夢暖愛真覺羅
氏。那知日本武如神。

外國

大鼎數遷天下謨。君臣情義有如無。一朝有事風塵

起。私用軍資利我軀。

西東北狄元禽獸。又有桀廷吠堯狗。海外衣冠詭異
徒。從來信義易相負。

詩魔

可憎尊大稱中華。風俗澆漓思挾邪。不省少陵忠厚
意。彫雲鏤月盡浮誇。
一榻茶烟例說禪。空中樓閣浪稱仙。終身詩句吐虛
語。魔道欺心名利牽。

阿片烟害至近年益甚。雲南地方產阿片。最加

聖曰清人實況

聖曰金瑤瑤上不覆烟俗

聖曰不知稍信命之苦

聖曰英法以天主教為

聖曰玉均化黃土味上

聖曰家。四百餘州大

聖曰孔聖仁義孔子之

聖曰孔聖仁義孔子之

聖曰孔聖仁義孔子之

聖曰孔聖仁義孔子之

聖曰孔聖仁義孔子之

多

滿清風俗易愚。名利耽。常塞胸得意。吹咽喪意。死始終徒仰阿芙蓉。

四億萬人十中一。喫他阿片出雲南。耗精促命。顏灰。

白。義氣鎖磨不識。噫。

嗜好當須要改撰。嚴禁阿片制程限。喫烟寧未至亡。

身。國府龍王秦野產。

朝鮮刺客洪鐘宇。殺金玉均於清國上海春申。

浦東和洋行。清人送其屍於朝鮮。處嚴刑。是忘。

善隣也。事在廿七年三月廿八日。

日域避難金玉均。甘言誘殺古春申。看他曲庇洪鐘宇。詐略放縱忘善隣。

聞孔廟生章有感

聖。賢。傳。付。嘲。排。苛。飲。隨。民。處。置。乖。聞。說。昇。平。夫。子。

廟。雨。催。草。色。上。空。階。

聞清國行旅困難。本朝諸國未曾有如此事也。

行旅困難。知幾何。資糧食被負擔過。泊舟栖樹無寧。

處。海盜糾紛山賊多。

聖曰亡不虞。漢書食種抄

聖曰影。惟其無如虹

聖曰所知。海原潮之八

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

聖曰。名亦實有。效。漢

清國應朝鮮囑。遣兵牙山。事在廿七年六月八日。

兵勇來從威海衛。一千五百同船濟。閱袁權略本亡。羊。自是朝鮮騎虎勢。

大島公使搭八重山艦。急赴朝鮮。

勸廢朝鮮冬至使。袁郎跋扈浪當衝。天令公使馳雄。

艦。青海潮通八百重。

本朝公使意軒。昂正議堂。眉目揚。袁氏遁逃。閔氏。

翼。京城烟月自清涼。

大島少將與麾下將士。邀飲大島公使於倭城。

山。事在廿七年六月十二日。

倭城。張宴奏軍歌。大月昇空。豪興多。勇士酒酣揮劍。

舞。帳中起問夜如何。

登北漢山

城壁連雲北漢山。韓兵不許入其關。試將拳銃射林。

鳥。一曲高歌劍舞還。

官吏臧否

清韓官吏太陰。檢收賄枉。冤惱黎黔。孰與神州皇化。

遍秋毫不犯事公廉

朝鮮

恬熙末俗安姑息一萬三千方里國旋轉乾坤贊革
新扶持自是神明力

對清意見

何有英雄侵略嫌扶持弱小是公廉欲開古陋施文
化懲伐奉天仁義兼

清國貢天津條約

出師已背天津約欲戡內訌吞寡弱只見無名不義

軍曾亡左武右文略

清國動軍事在廿七年七月中旬

清海風雲一黯然天津警報至仁川太沽水陸軍方
動盛字三營已上船

京城景福宮門外韓兵蠢動我兵擊斥之事在

廿七年七月廿三日

公使相携大院君宛如白鶴入鷄群登臨啓戶蠢乎
動喚起趨雷化六軍

清將聶士成榜示牙山縣文中有以朝鮮爲清

屬國之語於是韓廷決意通牒以要撤軍

士成告示屬邦文頃向牙山要撤軍一掃妖雲開草

昧東清西濁渭涇分

軍醫

戰迹尋傷者軍醫懸裏創溫言仁恕意藹々帶春光

雲峴官

雲峴官中持兩端玩他古印學曹瞞曹瞞畢竟何爲
者亂世英雄治世奸

韓廷布新政大院君起攝政廢棄清國條約報

之歐米諸國事在廿七年七月廿四日

攝政看他大院君絕清通我廣移文頑冥東匪伏還

起覆手雨飛翻手雲

韓廷衣冠繫苞桑踟躕誰憐閔惠堂昨日古筠罹慘

禍蚤時東學有餘殃

豐島之役是爲海戰之初擊走濟遠破廣乙沈

高陞捕操江事在廿七年七月廿五日

海軍豐島急飛艘清國水師叩擊撞廣乙損傷逃濟

遠高陞沒沈捕操江

千曰功名千戰死無還
第二爲大尉指亮之句
五日尋常一樣寒前月
有梅花開不問說大尉
越乎世界萬國知有安城

千曰日軍突以此役爲
九也此後此後我兵氣
清曰此後此後我兵氣
清曰此後此後我兵氣
清曰此後此後我兵氣

人法余不食不食不食
車不不不不不不不不

傳矣
千曰白神喇叭之聲震
內其聲千戰不還也
五曰結句七字入神出
五曰結句七字入神出

千曰足元白神喇叭之聲
狀宛然如聞

周曰牙山雲霧在丹丘
石壁之家人遊情物不

松崎大尉戰沒于安城渡事在廿七年七月廿八日

大尉麾兵閃電光縱令致死武維揚尋常一樣安城渡千載流芳新戰場

大島少將以左縱隊破清兵於成歡事在廿七年七月廿九日

牙山要害在成歡葉張軍勢錯盤少將一麾摧八堡俄成霜樹亂風看

喇叭手白神源次郎

銃彈貫喉群目瞠強鳴銅笛勵天兵縱令絕息能持管即至無聲猶有聲

襲牙山事在廿七年七月三十日

急襲牙山建日旌笑他鶴唳駭風聲資糧堆積皆逃去決背京南無隻兵

牙山三面繞丹山遠控南陽白石灣宏壯縣城人不守洪州雲際敵逃還

天皇設大本營於宮城中下詔宣戰清帝亦宣戰事在廿七年八月一日

勝曰通二十八字中有
一大略論
晉曰正氣無敵仁者
意曰當時在韓軍人之快
喜極而欲狂我神州敵愾
心之不可掩其如斯斯斯

勝曰是時一戰破會
周曰大島少將破清兵
營經破清而將至京城
歡迎情況如在目前

勅書宣戰起于戈十萬王師渡海波驕泰執迷宜擊破由來聖旨在平和
京城賀凱旋事在廿七年八月五日
旭日曠々照綵旂歡迎門外酒如泉龍山銅雀生佳氣萬歲聲高賀凱旋
聞福澤諭吉獻軍資
報効誰能沃赤心細君協贊感情深學人唱義先天下獨獻軍資壹萬金
混成旅團到開城府定部署將向平壤事在廿

七年八月

行到開城府論兵十日留麥田荒店曉鐵島大江秋
攻敵約三面懸軍臨九州白虹衝北斗平壤似浮瀛

第一軍渡赤壁江入黃州城

亂石奇松峙洞仙亭下秋排雲臨赤壁奪壘入黃州
廢驛餘幼老荒村失馬牛舍人關外路平壤暮雲愁

備前川上郡大賀村三宅菊次郎嘗從大島旅團長轉戰成歡牙山八月廿五日遂死船橋里其父利平得報喜謂我家之一大光榮也會親

勝曰此公而有此子古人
所謂英雄出孝子門者是
也
晉曰船橋里之戰清將
志誠極力阻戰其勢頗猛
烈我軍城之近陷平壤三
宅氏殉難可謂死有餘榮

又曰立石於船橋出特可
與從父子忠節矣

碑曰此時刻石可爲滿次
耶路路

周曰清軍捕我兵廣足
心我出則不然何
養數千俘虜悉懷仁

周曰泉宗神武天皇
州亦可想也

玉曰宛如見其勇壯之狀
一艦大同江之招人
千曰好絕句

勝曰滿州白島兵船敵我
亦堪稱

勝曰平壤之戰勝敵大勢
系之於敵敗實守而我
軍已知大局之勝矣
玉曰承三圖開一方當日
之戰圖如觀也

戚朋友開盛宴且獻金一百五十圓于陸軍省
父道吾兒死有榮獻金饗友見精誠美談傳到船橋
里三宅一家雙絕名

彼殘忍我寬仁

清軍殘害我邦人我捕清兵却擬醫病者加治健者
養數千俘虜悉懷仁

車駕發東京幸安藝廣島事在廿七年九月十
三日

我皇叙武且聰明夙設宮中大本營九月親軍臨廣

島堂々神靈發東京

游泳奮船者爲陸軍々曹川崎伊勢雄

大同門俯大同江鐵馬無由渡急龍游泳挺身羊角

島夜排蘆葦奪輕艘

我軍三面攻平壤事在廿七年九月十五日

紅旆牡丹臺上翻黃塵漲向大同門風雲叱咤彼何

者白馬將軍定玉昆

三面合攻開一方練光亭下夜茫茫軍聲徹夜彈如

霰衛將潛逃左將僵

晉曰此時刻石爲三村中
碑也見中則明書格圖
原田重吉見其死世人
知重吉知重吉者少也

原曰三河人種之氣盛於
原田二氏亦見焉

千曰白神小幡原田三千
實見其軍門三圖也

勝曰金玄二字開得鮮

勝曰吾軍人
首曰清軍所恃在騎兵
兵已如此清將將先墜

元山支隊一等卒原田霜吉進攻玄武門蒙創

顧呼原田重吉重吉扶起之敵丸中囁嚅而絕

三河北設樂郡段嶺村人事在廿七年九月十

五日

十有六人皆競雄挺身石火電光中金城鐵壁須臾
陷誰識先登死者功

開玄武門者曰原田重吉是亦元山支隊兵卒

三河東加茂郡豐榮村人

樓櫓緣山石作藩牡丹臺下陣雲屯誰攀壘壁成先

導金鎗始開玄武門

白馬如練

滿洲騎卒走江干狼狽無由避銃丸二百七十餘白

馬儘成素練一條看

清國海洋島之戰我艦隊第一遊擊吉野高千

穗秋津洲浪速本隊松島千代田嚴島橋立比

叙扶桑後備赤城西京之十二艦與清艦隊定

遠鎮遠經遠來遠致遠靖遠濟遠平遠超勇揚

威威遠廣甲廣丙外一艦合十四艦及水雷艇

蘇曰初澤外各國咸經我
邦而澤九一為島內人何
為此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也

蘇曰此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也

蘇曰此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也

蘇曰此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也

蘇曰此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也

蘇曰此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也
蘇曰此舉一舉而兩得也

六隻大激戰涉五時間。轟沈彼經遠。致遠。燒超

勇揚威。水師提督丁汝昌大敗走。謂之黃海之

戰。事在廿七年九月十六日。

巨艦。燦爛。互競雄。彼恃。大我精忠。轟沈四隻黃龍

走。海戰以來。絕代功。

吉野艦分隊長為一條公爵

先鋒吉野艦何雄猛。進侵危有偉功。武夫誰最

勇。金技玉業一條公。

靈應止于高千穗。艦檣上海軍大佐野村貞使

水兵某等之。少佐齋藤貢。致之大本營。供天覽。

黃海風雲歟。夕陽誰圖。征鳥坐帆檣。金眸玉爪堪搏

虎。天佑王師呈瑞祥。

越後蒲原郡荒橋村鈴木義政。臥病。其男十作

應招募。自北海道歸。憂父病。躊躇稍久。義政叱

曰。我等父子。生聖世。浴國恩。今汝在軍。藉幸應

召募。宜猛進。勇鬪以殉國。勿以父為念。其夜人

定。義政匍匐入古井而死。事在廿七年九月。

父在病床。兒遠征。躊躇憂迫。若為情。捐軀古井。勵軍

氣。寒月孤高。落木聲。

阿波名西郡高志村板東安太郎一家從軍者

四人

名西郡亦博其名。高志村中堪實。旌海內傳聞。稱異

數。一家徵募四人兵。

山地中將發巨文島赴大同江舟中。有小禽來

止。熟視則菊戴也。眾以為瑞兆。事在二十七年

十月十八日。

大風捲海浪浮天。朝發巨文驅戰船。菊戴上檣先瑞

兆。皆言皇化被朝鮮。

船入大同江

大同江是大千城。憫笑清人不識兵。如此山河拋棄

去。知他水陸共無成。

我先鋒隊渡鴨綠江入清境。先擊梨子園敵破

之事在廿七年十月廿四日

鴨綠江干霧霧昏。亂流追躡敵兵奔。山河不守知屈

弱。輕騎驅羊梨子園。

我第一軍進破虎山敵。事在廿七年十月廿五

勝曰：雄氣堂堂足虎山。
之戰。我軍必勝。勿與敵
軍。猶行無人之境。

玉曰：魏王英武。爲武尊
以來之壯。

勝曰：是亦如此。武是國
風也。天演而如此。吾等小
人。安得不勤骨。操焉。

勝曰：第二軍新銳之氣。還
噴。無敵守。

勝曰：曹賊。無敵。無有。溺
水。水之。般平。野。無。防。
國。非。所。可。佐。也。

勝曰：先王。於。功。最。所。用
軍。也。按。金。州。形。直。及。經。
論。可。謂。急。要。不。忘。平。生。

勝曰：天佑皇軍。

周曰：給。何。續。援。足。凡。連。戰。
連。勝。之。勢。

勝曰：宋。慶。八。十。戰。兵。書。
此。宅。清。將。中。將。也。

日

雄氣堂堂第一軍。進排林壑拂黃雲。三千五百餘人。
敵。獸。走。禽。飛。去。虎。山。

閑院宮戟仁親王在第一軍。與九連城敵大戰。

桂中將感其武勇。

日月分光萃一躬。千軍叱咤萬夫雄。親王膽力驚中
將。躍。馬。硝。煙。彈。雨。中。

第二軍上花園口。事在廿七年十月廿五日。

孤山鏖戰水師走。艦影一空陸無守。雄戟趙々第二

軍。喊。聲。湧。上。花。園。口。

自花園口到金州途中多平野。水流無隄防。云
潦。水。橫。流。無。定。河。青。天。平。野。接。明。沙。欲。施。禹。稷。經。綸。
術。蜀。黍。高。梁。特。地。多。

第六師團工兵架橋鴨綠江。

架橋無個一兵爭。鴨綠江寒朔雪晴。黍稷平鋪冰凍
上。六軍馳向九連城。

第一軍奪九連城。宋慶帳中有孫吳兵書。

宋慶逃去九連城。一掃遺塵充本營。掛壁日韓古圖。

繪。孫。吳。兵。藉。在。書。棚。

第一軍略取安東縣。陷鳳凰城。設民政廳。事在

廿七年十月下旬。

一麾陷落鳳凰城。直免歲租安庶氓。簞食壺漿人陸
續。政。廳。開。處。喜。相。迎。

鳳凰城置善後局。事在廿七年十一月。

德望無雙岳士謙。擇爲董事舉公廉。王師到處救塗
炭。雨。露。恩。光。民。具。瞻。

祝宴

少將傳令軍已平。牙營張宴起歡聲。佳辰恰是天長
節。歸。順。民。皆。入。鳳。城。

皇后陛下。賜御製綢帶於赤十字社。事在廿七

年十一月。

聖后愷仁在愛存。千箱綢帶出宮門。裏創海外赤十
社。臣。子。沾。巾。罔。極。恩。

第二軍天長節發獅子衙。

乘捷王師捧大牙。金州猶隔碧嵯峨。千兵齊賀天長
節。此。日。發。軍。獅子。衙。

勝曰：雄氣堂堂足虎山。
之戰。我軍必勝。勿與敵
軍。猶行無人之境。

玉曰：魏王英武。爲武尊
以來之壯。

勝曰：是亦如此。武是國
風也。天演而如此。吾等小
人。安得不勤骨。操焉。

勝曰：第二軍新銳之氣。還
噴。無敵守。

勝曰：曹賊。無敵。無有。溺
水。水之。般平。野。無。防。
國。非。所。可。佐。也。

勝曰：先王。於。功。最。所。用
軍。也。按。金。州。形。直。及。經。
論。可。謂。急。要。不。忘。平。生。

勝曰：天佑皇軍。

周曰：給。何。續。援。足。凡。連。戰。
連。勝。之。勢。

勝曰：宋。慶。八。十。戰。兵。書。
此。宅。清。將。中。將。也。

勝曰新印...
國寶也...
本邦...
即...
實曰...
也

勝曰...
也

勝曰...
也

勝曰...
也

紅水城在緬子窩附近。一名高麗城。蓋係一千
年前構造。昔爲高麗地。可想也。唐太祖降壹百
三十餘城。此城亦爲其一乎。傍有永寧寺。佛像
妍麗。如觀淺草奧山生人形云。
南面。雲門二重。千年郭廊。認韓封。夕陽紅照。永寧
寺。只見金仙帶笑容。

金州城先登二人。一曰少尉吉田梶次郎。二曰
軍曹野口三十郎。

永安門鎖甚堅牢。誰使清兵踏藉逃。爆烈二聲關扇

碎。先登少尉又軍曹。

第一軍占領岫巖。事在廿七年十一月十八日

盛銘毅字八旗兵。騎馬三千試抗衡。乘勝王師如破

竹風雲捲上岫巖城。

巴家黃嶺兩方攻。敵據孤城。藉與豐格子山前平野

遠。蟻群亂走夕嵐中。

三角山在石嘴子。我第二聯隊據焉。清兵二千

餘自旅順來圍。我兵擊退之。時龜井伯爵構寫

眞器寫實況。敵兵誤認做大碩。而怖走。事在廿

勝曰...
也

勝曰...
也

勝曰...
也

勝曰...
也

勝曰...
也

勝曰...
也

七年十一月廿日
三方山下戰塵。國亭午碩聲連夕暉。伯爵構來寫眞
器。敵兵誤認佛節機。

綿火藥

旅順灣中伏水雷。擬邀我艦付飛灰。豈知綿火如神
藥。應變臨機摧破來。

旅順口陷。此夕我軍樂隊奏樂於練兵場。事在

廿七年十一月廿一日

椅子山前。敵多黃金臺下拔營過。遂聲嚶吼知何

曲唱出千秋萬歲歌。

馬廐不堪風雨侵。大山大將憫俘擒。若干婦女分居

室。周給皆露仁恕心。

旅順城道台後園所見

道台衙後石湖涯。六角亭遭垂柳遮。官樣曲欄凝意

匠。盆梅茉莉水仙華。

萬歲旗

旅順捷聞人展眉。歡娛無處不銜卮。千門一樣如春

色。萬歲字新紅旭旗。

周曰：此處風景最勝，可
與京師並駕齊驅。其
言也。然如知此言可以一
省，則其人之福也。

周曰：此處風景最勝，可
與京師並駕齊驅。其
言也。然如知此言可以一
省，則其人之福也。

周曰：此處風景最勝，可
與京師並駕齊驅。其
言也。然如知此言可以一
省，則其人之福也。

京仁間將造鐵道

真成景福介朝鮮。亂後廓清勝亂前。二百萬圓稱國
是。京城鐵道到仁川。

滿洲武官

白旗都統黑龍將。昨博榮譽今惹謗。幾度銓衡誤武
官。可憐功罪無由償。

立見少將破劉家堡。事在廿七年十一月三十
日。

連山關接摩天嶺。逐敵本溪湖上聘。大雪擁山冰結

川。可堪深入返寒境。

第一軍報曰：大孤山下百餘村，人民歸順互市
運輸，無有拘滯。事在廿七年十二月。

大孤山畔百餘村。歸順咸懷皇國恩。互市開場商旅
集。郵程傳命壯丁奔。

可與林政

黎民懷惠唱康哉。農政當須計阜財。長白山前群嶺
黑。深林不乏棟梁材。

第二軍獻白鶴雌雄於大本營。是系金州副都

天龍可謂禽族中之冠等
者矣。

周曰：此處風景最勝，可
與京師並駕齊驅。其
言也。然如知此言可以一
省，則其人之福也。

周曰：此處風景最勝，可
與京師並駕齊驅。其
言也。然如知此言可以一
省，則其人之福也。

統順連所飼養

雙鶴朝天承寵隆。雪翎丹頂舞春風。鵬鵬高舉青雲
表。憶否金州舊竹籠。

金州灣結冰。山地中將切齒曰：若冰解則山海

關可一麾而陷也。龜井伯爵在傍詠歌曰：打出
留浪乃初花。見瑠時也。益良丈雄賀唐土乃春

占領金州稍苦悶。嚴冬冰結遼東灣。若令春意如儂
意。萬里長城顧指間。

東京上野有祝捷會。事在廿七年十二月九日。

東台捧出大旗章。震耀皇威宣國光。司祭讀文聲朗

朗。伶官奏樂響洋洋。池邊半島鵬鵬烟。火波際雙船焚
旆。橋鼓擊肩摩人五萬。可知時運向休祥。

東京牛込區若宮町。龜山貞時齡七十。臨終道
言贈金赤十字社。事在廿七年十二月九日。

齡及古稀何惜死。莫臨葬儀費多金。百圓新贈赤十
社。一片遺言報國心。

下總香取神社祝捷會。事在廿八年一月七日。
雲樹森々覆殿楹。萬人賽捷湧歡聲。學軍巨碩響東

之奇也

詩曰甘羅有心則得此詩
必當其時
周曰金湯亦或可也
千曰金湯亦或可也
宋曰金湯亦或可也
玉曰金湯亦或可也
馬金湯亦或可也

詩曰少尉亡安陸平營有
能望餘木氏有湖廣少
尉臨大節殉難宜與會
葬者上為餘人實遠州出
川之傳也
宋曰陸平營鎮雖有登
陸志等之著家好書後
於陸平營也乃亡安少尉
之一死其難其事有案
而然也
玉曰陸平營鎮雖有登
陸志等之著家好書後
於陸平營也乃亡安少尉
之一死其難其事有案
而然也
玉曰陸平營鎮雖有登
陸志等之著家好書後
於陸平營也乃亡安少尉
之一死其難其事有案
而然也

詩曰少尉死英靈得慰
其功勝千載不滅
千曰其人雖亡名則不朽

詩曰事壯難雄一腰骨城
玉曰結句合運學通理

一陸兵擒獲水雷艇

張家口子多諸田

山東破敵乏糧資奔竄無村謀旅炊秋味療飢功絕
大甘諸只合賜金瑪

威海衛之戰我水雷廿二號艇挺進射敵艦三
命中返艇坐礁為敵彈所反擊海軍少尉鈴木
虎十郎死之虎十郎遠江國佐野郡掛川二藤
村人夙入海軍兵學校學術大進為人雄拔有
氣慨好詩文有征清雜詠之著云事在廿八年

東洋詩史

二二

東洋詩史

二二

十二月五日

夜放魚雷三射艦曉遭反擊入寒波轟沈定遠降旗
白威海知君功最多

水雷第九號艇亦射敵艦達反射艇為碎海軍
大尉真野巖次郎適臥舷側得不死寄書鄉里
尾張海東郡佐依木村家兄守之助云事同上
月日

寄簡慰慰報阿兄射他鐵艦々方傾翻遭敵彈摧機
器萬死期時得一生

水師提督丁汝昌乞降

水師提督建降旗可憫裁書辭餽貽獨對梅花仰藥
死北洋軍備勢難支

山東援軍

山東巡撫李秉衡一萬八千餘騎兵呵喝欲援威海
衛沈波鐵鎖聞無聲

李伯沈吟

劉公島是比金湯陷落殉難丁汝昌恁々滿廷皆失
色沈吟獨有李鴻章

月廿二日

威海衛西三四里驤船待敵北郊村水師從失劉公
島靈爾鐵軍那足論

豪商三井高保建兵器製造所獻之

素封豪族志堪嘉不吝黃金數十車進獻最宜兵器
局近江源氏武臣家

日本在留佛蘭西人賀我征清軍連捷將獻地
球儀

周曰一寸地球儀也
世界二十八字時能宜揚
國光

佛人賀捷稍輸誠將獻瓊璣與玉衡球體飾銀觀世
界鍍金皇國表文明

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

第一軍轉戰牛莊營口事在廿八年三月初旬

唐曰二十八字沈三回
宋使解之則應至千萬言

盛京重鎮近擊退襲來兵轉戰牛莊市環攻營口城

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

凍鬚顏欲裂龜手銃難擎敵愾心腸熱咸懷報國誠

媾和使

唐曰二十八字沈三回
宋使解之則應至千萬言

徹德琳歸張邵至幾回撥撥媾和使遙聞渤海凍將

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

融李伯乘船任重寄

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

聞說朝真又暮僞縱令結約信難置明人和議遂欺

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

吾莫復當年沈氏類

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

日清媾和完結事在廿八年四月十七日

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

使臣相見到和同割讓臺灣與遼東天下萬民齊拍

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

手山川草木自春風

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

茨城縣人小山某齡踰七旬聞露國公使勸本

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

朝返金州憤慨不能寢草諭露國書其志可嘉

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

也

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

百戰山河唾手收擬施仁政撫金州叨勸返地舌含

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

又能保東洋調鼎不

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

周曰二十八字沈三回
宋使解之則應至千萬言

千曰此處無處有此候
唐曰二十八字沈三回
宋使解之則應至千萬言

車駕還東京事在廿八年五月三十日
人心歸々自熙雍萬戶千門遶六龍紫綬金章連恩
闕青天磨出玉芙蓉

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

謝恩使將再至

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

茫々青海起東風雄艦旗章旭日紅曾爲隣邦援水

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

火謝恩重見義和宮

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

澎湖島

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

澎湖島聳馬公城々外田家婦饁耕節物風光先快

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

意青青滿野落花生

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

始到淡水港土匪建青虎旗唱共和政治既而

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

降事在廿八年六月

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

淡水港頭雄艦移生民簞食迎王師天涯雨露新恩

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

澤青虎旗章化白旗

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

基隆港

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

舳艫相啣到基隆民似雞群爭出籠輕賦最宜除稅

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

政勸農只合亮天功

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

海暑南州費揣摩基隆東岸氣清和靛青樟腦焙茶

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

盛八斗山中石炭多

唐曰蒙難無處有此候
千曰機深源廣

周曰二十八字沈三回
宋使解之則應至千萬言

玉曰以忙農三字反客
嘲如無事輕妙

當日鐵嘴大嘴之名風
不虛也已成家之區後
陳之大驚其在此耶

當日有人言島野蠻人
不識孔明之為用今
則其後世出不止之愚

當日王侯將相人
之貴王侯之貴亦見子
之貴

當日學生夫處世事件
風過千

當日白雲白成黃是天
道所全也
當日白雲之黃白為雨
足其明

臺北府舊名大稻埕劉銘傳嘗開此府

大稻埕皆百姓家劉銘傳築作都華欲知臺北城中
富四萬女兒忙撰茶

臺南蠢動

臺南暖氣侵新竹仍族黑雲劉永福竿馬楚人無所
為休甘草賊蒙夷戮

臺灣府陷有童謠事在廿八年八月

天佑王師力六分將軍籌略占三分建領傾瀉臺南
熱硝彈之功只一分

觀清將所用軍廳於宮崎三翠家

臨風墜尾亂鬚談笑一揮宛似僧纖巧繡柯堪愛
翫只宜靜坐掃蒼蠅

臺南小春

臺南宛及小春時霜染黑旗成白旗多少狂花非本
色含英自有向陽葵

東洋詩史

別集

司農吟

天祖創農政安謨萬世垂欽哉農政要莅民貴仁慈
先撫老農輩舉一三隅隨力田或授位卑官作溝池
宵則勵絢索晨則趁東窗伍保助耕種儲蓄備歲飢
風俗歸敦厚奉上等國詩老農參學理饒益在耘耔
所期富國計所願護皇基

題畫

冉冉白雲秋滿山上樓殘雨夕陽間平生心事向誰

語只有寒流去不還

悼福住正兄二首明治廿六年七月

起家湯本地承教二宮門仰擬報天德俯將酬地恩
社聯三五國書著幾千言經濟舉生業令名終古存
築園還營宅農工厚聘招石皆供利用土最屬肥饒
山碧早雲寺水清朝日橋坦然湯本路道續孔昭々

悼松本校陰代佐藤秀顯

少小同心友如今有幾人曾期臨老境相共結芳隣
北馬途遙隔南船夢更頻俄驚君即世吾獨影隨身

100

神懸雜詠

奇巖萬狀又千形。探勝錦雲深處亭。諸國各區誇絕
壑。獨從溪畔望南溟。紅雲亭
天險由來不可攀。鬼工神削駭人間。懸空絕壁如城
廓。岌々巨巖重疊山。天城巖
孝感有人推孟宗。化工換地見靈容。回頭神駭山中
往。天半高抽大筍峰。玉筍峰
靜坐工夫禪定中。西來面壁有遺風。雲根元是無心
物。萬古長爲不倒翁。通磨岩

經小野宮故址拜惟喬親王墓。廿八年十一月九日
在五來時雪漲谿。千年殿宇作禾畦。親王兆域秋山
上。黃葉青苔沒古蹊。

詩仙堂

一乘寺裏訪村莊。六大天王華表傍。脩竹梅關通古
磴。唐詩三十六仙堂。

觀藤原惺齋翁書於石川柳汀家

高風逸韵性情摅。北肉山人七字書。教子莫如爲善
樂。金言玉語不欺吾。

實曰神懸之巖。惟喬親王墓。又曰。此巖。惟喬親王墓。又曰。此巖。惟喬親王墓。

實曰。天城巖。一名曰。天城巖。一名曰。天城巖。一名曰。天城巖。

實曰。玉筍峰。一名曰。玉筍峰。一名曰。玉筍峰。一名曰。玉筍峰。

實曰。通磨岩。一名曰。通磨岩。一名曰。通磨岩。一名曰。通磨岩。

實曰。小野宮。一名曰。小野宮。一名曰。小野宮。一名曰。小野宮。

實曰。一乘寺。一名曰。一乘寺。一名曰。一乘寺。一名曰。一乘寺。

實曰。高風。一名曰。高風。一名曰。高風。一名曰。高風。

跋

大義名分、忠孝廉節、皆以韵語叙去、毫無所凝滯、首々去華存實、莊重醇正、咸是厚生利用之本旨也哉

明治廿八年

狂塢江木千之拜識

東洋詩史跋

自客月上首至今臥病於鄉間、殆五旬餘日、其病篤時、鷹洲織田君寄尊著詩史一卷、見索批評、恨氣耗眼、一讀未畢、而暫閣之于塵几、頃病稍除、精神少快、於是乎藥餌屏擋之餘暇、且誦且批、惜篇之將盡也、惟病餘陋見、恐不足評高作、請恕其所不及、則幸甚

乙未七月下浣

辱交衣笠豪谷拜手

跋

鷹洲先生夙好經濟實用之學、不敢求聞達、盡力公益、以爲至樂、嘗修佐藤信淵翁家學、繼述不倦、其勸農治水、常立自家經驗之言、篤信而力行、吾道一以貫之、頃緒餘著東洋詩史、紀征清始末、起于皇統而止于勸農、一百廿餘首、其詩真率簡鍊、不

東洋詩史跋

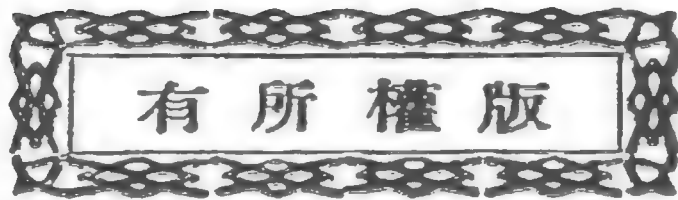
假彫琢、讀此則忠厚之意溢于言外、如親接其人、余竊謂近來學者浮薄輕佻、無些操守、阿諛權勢、卑々屈々、甘爲名利奴者、比々相望、其詩賦文章、纖弱誇張、塗飾人目、虛僞怪誕、使人催嘔吐、是爲今代文字之一大污辱矣、當此時、先生以卓異之見識、綽然有餘地、咄嗟賦詩、亦寓慷慨憂世

之氣象其首々雄渾悲壯其格調金聲玉振蓋如此者豈能爲時人之所喜哉乃知讀此詩而識先生之志者蓋不多于今世而多於後世矣

明治廿八年八月下浣

後進鬼頭玉汝謹跋

明治二十九年三月十四日印刷
明治二十九年三月十七日發行



著述兼發行者

織田完之

東京市牛込區拂方町九番地

印刷者

近藤圭造

同趣町區飯田町五丁目廿六番地

印刷所

近藤活版所

同趣町區飯田町五丁目廿六番地

東京市日本橋區本町三丁目

發兌所 博文館

正價金貳拾貳錢

秋月種樹（古香） 著

詩史

明治三十二年（一八九九）東京金港堂鉛排本

據明治三十二年（一八九九）東京
金港堂鉛排本影印

詩史序

讀詩如讀史。是或人評表枚之詩也。余好此體。欲因詩而證古今之事跡也。賴于成日本詠史樂府。申嶋子玉日本新樂府。共爲名作。行于世。然余不好樂府體。謂輕薄近兒戲也。故換以絕句。非敢襲諸大家爭詞句也。特賦數千年間之治亂興亡。是非得失耳。覽者請察焉。

明治三十二年一月 古 香 識

詩史

○神入窟

天照大神怒。入天石窟。天鈿女命。爲優於窟前。手力雄命。奉大神手。援出之。上天初晴。衆俱相見。面皆明白。

神入窟中。天地朦。爲優鈿女樂融融。巖肩忽啓

面皆白。第一勳推手力雄。

○叢雲

素蓋尊貶。謫出雲國。斬八頭蛇。得寶劔叢

雲以獻。即三種神器之一也。

素尊功績復何加。得劍叢雲護國家。天下若逢

姦賊出。斬之無異八頭蛇。

○東征

神武天皇東土征。先鋒不利。太和兵烏爲嚮導。

入熊野。長髓土蛛悉蕩平。

○征韓

神功皇后征三韓時。着二面兜。豐前英彥

山。今尚藏之。嘗經

天覽云。高齋蘭陵王長恭。面類婦人。乃着

假面對敵。

西征不用粉脂粧。二面兜頭日月光。休比蘭陵

戰時貌。胎中矧又有天皇。

○浦嶋

雄畧帝時。丹波入浦嶋子。與龜成婚。入海三年。及歸贖一筐。曰。謹勿開之。開之則容貌忽變。爲老翁。

龍宮婚媾及三年。浦嶋與龜有宿緣。知是開筐仙夢覺。容顏乍變舊華顛。

○馬如猪

崇峻帝戲言。斬馬子如猪。宮女以告馬子。

馬子弑帝。聖德太子十七憲法曰。見惡必匡。太子信佛。與馬子善。其行弑逆。知而不討。

帝言馬子與猪同。誰料禍根生後宮。匡惡不知何所指。一編憲法只論空。

○三寶奴

聖武帝信佛。祝髮。自稱三寶奴。

陸奧貢金有瑞符。歸功佛德。四民愉。僧尼得意。

堪追想。天子自稱三寶奴。

○道鏡

字佐八幡。祝人阿曾麻呂。託神勅曰。使道鏡爲帝。天下太平。和氣清麻呂往。字佐受神勅。奏道鏡無道。

汝道爲邪鏡。亦矇妄欺。神勅蔽天聰。古來一定君臣分。皇統維持和氣忠。

○將門

飯粒拾來平將門。秀鄉一見認其昏。關東蹂躪成何事。覲面猶誇吾帝孫。

○大江以言

一條帝時。大江以言。賦鷹詩。貶道長。因失文章博士。唐劉禹錫詠玄都觀桃。得罪於時相。

辭句詖。時意氣豪。青雲失脚美名高。一身得罪詩無朽。宛似劉郎曾賦桃。

○源賴義

賴義討貞任。遙拜京師。手取火。號神火。投之。壘柵皆焚。貞任出鬪。刺之。賴義子。義家。義光。共平武衡家衡之亂。鎮守將軍征伐勤。逆空神火柵皆焚。黑頭成白賊平定。更使兒曹建大勳。

○爲朝

世傳。爲朝入于流求。所謂舜天王者。即其

子也。

不願 朝廷爵位榮。鎮西風靡八郎名。箭長十五扶強力。一射餘威流鬼平。流鬼。舊流求。○瓶子倒

鹿谷有僧俊寬山莊。同志會議。瓶子顛。成親笑曰。平氏既倒。西光取瓶子集之。一坐大笑。取瓶子者。日本史從盛衰記。爲康賴然。諸本往往有爲西光者。今從之。

鹿谷山莊瓶子顛。西光取首興傾筵。何圖他日覆公餘。壇浦風波碎。

御船。易曰覆公餗。

○萬髑髏

清盛獨坐。見階下髑髏數百。合爲一頭。占者以爲義朝之厲。南都僧徒。怒平氏。造木丸。呼爲淨海頭。蹴擊弄之。

平氏第中。妖未休。髑髏數百合成球。相公傲睨無關意。何識我頭爲蹴毬。

○招日

嚴嶋經營元有期。未終工事夕陽垂。魯戈不及相公扇。日退一竿唯一麾。

魯陽公以戈招日。出于淮南子。

○馬烙印

仲綱有善馬。宗盛求之弗肯。賴政懼禍。強令贈之。宗盛烙印馬額。曰撻仲綱。仲綱怒。遂勸以仁王。謀除平氏。

馬額印成撻仲綱。烙痕何識禍機藏。親王飛檄

除平氏。震動乾坤。有烈光。

○鼠圖猫

賴朝配流在蛭嶋。奉以仁王令起兵。首藤經俊曰。流入圖平氏。鼠圖猫耳。賴朝破平氏。師于富士川。召經俊曰。鼠圖猫如何。令旨遙傳蛭島陸。流入蹶起有誰支。輸贏却似猫圖鼠。富士川頭飄白旗。

○高下駄

清盛常着高屐。伺候中御門氏。清盛生歲在子。耶馬臺詩所謂黑鼠是也。清盛患熱病。絕叫而薨。或夢閻羅遣火車迎清盛。中御門前高下駄。俄登太政大臣衙。誰言黑鼠化爲虎。終見閻羅送火車。

○火牛

義仲橫田河原之役。粟穀谷之戰。策略之妙。古今罕比。且如火牛。齊有田單。我有義

仲而已。世稱義仲曰旭將軍。

粟穀奇兵妙若神。將軍威與旭陽新。火牛突進
殲勍敵。義仲田單唯二人。

○熱盤試

賴朝試諸弟才。烙盤器而待執。執輒驚釋。
獨義經終不釋。賴朝心忌之。

手執熱盤諸弟驚。九郎顏色獨和平。阿兄不賞
能堪忍。骨肉他年糜爛生。

○宇治河

義仲分兵。扼宇治勢多。義經臨宇治河而
陣。梶原景季。佐佐木高綱。爭先濟。高綱乘
池月。景季乘磨墨。約馬纒而後。高綱先登。

約纒日本外史。作約條恐不審。和名抄。纒。馬腹帶也。按宇著。纒。爲馬腹帶。今用之。宇治川之役。人皆稱之。故不無外矣。若因字求聲。則約爲何狀也。

二騎爭先字治河。流水融雪激奔波。約纒無察
入欺我。池月既嘶前岸阿。

義經。記。宇治川之狀曰。山雪融。谷水解。水重大加。激流驚人。

及之。句
故二句

○賣傘兒

壇浦之變。宗盛不能死。初二位厄生女。畏清盛之怒。交換清水賣傘兒。宗盛是也。平氏滅亡壇浦陸。袞龍入海。世皆悲。宗盛無節真堪笑。彼是元來賣傘兒。

○伐一枝

伐一枝。當剪一指。辨慶筆跡。義經辭。口碑額。郁

長無絕。春好生田祠畔姿。

○義經

衣川之役。義經不死。經蝦夷入韃靼。寬永癸未年。越前新保入。漂流至韃靼地。觀義經畫像云。

搜索九郎六十州。神龍豈與蝦蟇。騰飛韃靼不毛地。更發清和一脉流。實親覺羅氏。義經之裔也。故國號清者。取清和源氏之稱云。

○髮換頭

鶴岡祭儀。賴家子公曉。斬實朝。源氏遂絕。欲葬實朝。不得首。以所遺髮代之。世傳。鶴岡之變。出于外舅北條氏之策也。源氏興亡在鶴岡。怪人跳出閃刀光。并將一髮棺纔蓋。外舅何爲獨不傷。

○北條高時

高時好狗鬪。天下獻鬻。天王寺妖靈星出。爲北條氏之亡兆也。

後醍醐天皇。欲除北條氏。時有天皇謀叛之語。

天下獻鬻。鬻是尊。增祖加役虐黎元。妖靈星出。非無兆。咄有 天皇謀叛言。

○大塔宮

足利高氏。媚于准后廉子。讒王。帝怒。放王于鎌倉。

身脫緇衣。着鐵衣。要除國賊。與心違。君王獨喜

佳人笑。土窟冥冥日不暉。

○松滴露

後醍醐天皇。已滅北條氏。不賞赤松則村之功。則村反。帝幸有王山。三日不食。疲甚。松露霑御衣。

封爵休慳五大夫。中原板蕩日多虞。有王山麓南巡夜。松下露零龍服濡。

○龍馬

出雲國獻龍馬。帝設宴觀之。藤房去。出雲龍馬到宮庭。龍不是龍如螭。帝祝祥瑞祥開御宴。藤公遁去字中脛。

○應仁

應仁之大亂。或題畠山義就門曰。右衛門佐。拜戴二物。御所之盃。山名之足。義就小字二郎。細川勝元。不援畠山政長。長政任尾張守。時人語曰。害尾張者。洲股川也。

舅婿爭衡大廈顛。應仁天地漲炎煙。二郎拜戴
盃兼足。害尾張爲洲股川。

○嚴嶋戰

有警師。出入元就家。元就知其爲陶氏間
謀。僞言。敵據嚴嶋。則吾事去矣。鼓師告之
陶氏。元就乘大風雨。掩擊。全姜敗死。
按摩無目口非勝。反間投機謀戰功。勁士三千
掩嚴嶋。吶喊聲起雨聲中。

○桶峽

桶峽之報至。信長奏猿樂。到夜五更。取山
路。衝中堅。獲義元。家康退據岡崎。
猿樂舞中兵畧存。忽聞桶峽凱歌喧。岡崎無守
神君入。餘慶終歸積善門。

○鎧上白布

川越之役。北條氏康。以八千兵。當上杉氏
八萬六千之兵。命尚白布於鎧上。遇不白

者輒斬。莫不一當百。曰。諺也。或古有怯於小敵。而勇於大敵者。以寡敵衆。何必始於今日。

入間河畔夜揚旗。白布如花兵甲奇。乘克勝剛當日戰。漢光武帝是良師。

○信玄詠櫻

信玄曾賦松間花。有立並甲斐古曾奈計禮之句。人以為武田氏滅亡之兆。松指松

平氏。
信玄橫槩詠櫻花。花落春衰及一家。請見蒼松無變色。蟠根偃蓋逐年加。

○栲頭

謙信伐小田原。關東名族多降。一日謁鶴岡祠。舉扇栲忍城主成田長康頭。長康叛。關東復皆歸相。

降服關東到處城。越公威似疾雷轟。群雄背叛

因何事。把扇擣頭舉動輕。

○撈鰕舞

長篠之役。信長設宴。使酒井忠次爲撈鰕舞。舞畢議戰。因進襲鳶巢之策。按野史家康傳。將士憚甲入勇武。勢不振。家康因設宴。命忠次起舞。衆粲然。蓋信長聞此事。更命舞邪。

拍手樽前笑語譁。興酣老将舞撈鰕。杯盤未撤

軍機熟。斬戮敵兵如仆麻。

○頭爲鼓

信長擊光秀頭曰。好禿頭。可以代鼓。光秀慚憤遂反。

右府越公皆太剛。太剛易折古箴彰。頭顱代鼓何狂態。光秀長康怨豈忘。

古語曰太剛易折。

志

○高松城

秀吉灌高松城。城將陷。告以本能寺變曰。

和戰惟所命。衆皆欲戰。小早川隆景曰。秀吉天授。今若背約。我屬無噍類。乃送質成和。

高松城壘水將平。誰料本能寺變生。大膽猿郎毫不秘。請和隆景見機明。

○天王山

秀吉與光秀會于山崎。北戰。瞻天王山。謂左右曰。今日之戰。使敵先獲此。非我利也。

乃命堀季政。堀尾吉晴往。賊兵已先擊。藏之。戰大勝。光秀死。

能制機先。勝算成。猿郎決戰。勢縱橫。假令今有百光秀。已逐天王山上兵。

○七本槍

柴田勝家至賤岳。使作間盛政。攻斬中川清秀。盛政稱夜叉玄蕃。扭勝不退兵。秀吉掩擊擒之。勝家走歸北庄。縱火自殺。

賤岳爭功。七本槍。挺身奮鬪。勇名揚。柴田一敗。
投烟火。遺恨夜叉。謾恃強。古語曰。強國。得之以小。失之以恃強。以

○撒龍王

秀吉將征北條氏。大募舟舶。時海運未通。
衆口洶洶。懼海神作祟。公西作戒龍王撒。
投之大洋。保無風波。

豐公豪氣兩間充。入鬼并收一藥籠。北伐舟師
畏風浪。龍王撒到海中宮。

○放虎深山

小田原之役。秀吉使伊達政宗執刀從。指
示列營曰。卿狙小戰。未睹天下之軍容。政
宗敬服。歸去。或曰。是放虎深山也。秀吉曰。
彼惡與我抗。

天下軍容今始知。城邊極目愁旌旗。深山放虎
入休怵。噬攫何能抗猛獅。

○拜賴朝像

豐公特拜賴朝竊干載唯君可共談。君起華流我寒族。成功難易我何慙。

○裂冊封

爲帝爲王天分存。何求外國冊封尊。呼還使者媾和破。藤吉滿腔日本魂。

○猿怒狗

神后征韓。題其城門曰。韓人爲日本狗。漢史。稱。

神后。爲卑彌呼。

日本狗群韓國奴。無人仰視。卑彌呼。猿郎一怒雞林震。萬里擴張

神后圖。

○高麗門

朝鮮之役。加藤清正。舶載門材而歸。以造外郭門。惜哉。西南之變。罹兵燹。悉亡之。清正子忠廣。有故國除。

鬼上官來敵駭奔。征韓兩役戰功尊。惜哉兒輩

失關鑰。熊本空存高麗門。

○日下人

秀吉之母。夢日輪入懷。有身。德川清康嘗

夢有文在握。曰是浮屠橫外占之。曰是爲

日下人。清康者。家康祖父也。

懷裏紅輪光彩。淫牝鷄豚犬不修身。長繩繫得

依誰手。天下終歸日下人。李太白賦。恨不掛長繩於
青天。俾西飛之白日。於

○大柿

家康討石田三成。兵到岐阜。或獻巨柿。家

康曰。大垣已入手。令左右爭取。

進兵岐阜。建葵旗。天下安危在此時。撒柿庭中。

衆競拾。凱旋賞賜亦如斯。

○關原

關原之役。小早川秀秋。送款于關東。西軍

敗績。戰已畢。家康下胡床。揖秀秋。秀秋不

敢仰視。

兵在關原上屯。一軍送款敵皆奔。神君徐下胡床拜。蒲伏金吾中納言。

○圍碁

家康謂世子秀忠曰。兵機如碁。輸贏之數。在全勢馬。

神君熟鍊戰場功。却以圍碁訓秀忠。一舉關原收大石。輸贏全局在胸中。

○金法馬

秀吉曾造金法馬五十枚。及大坂敗。家康賜之井伊等。秀次淫虐。秀吉怒。斬其妻妾三十餘人瘞尸。曰畜生塚。金法馬來傳子孫。子孫不守馬逃奔。貽謀何事太疎畧。唯見畜生墳尚存。

○丈山

大坂冬役。石川丈山在家康麾下。拉敵而仆之。戲曰。殺活在手。敵應聲曰。吹下香廬

詩

史
紀

一片雪。丈山放之。以其反軍律。故不錄功。
丈山入東山。
驍勇名高石丈山。先登拉敵浪華間。感他一片
香廬雪。加茂川東洗劍還。

明治三十二年三月廿七日印刷
同年三月三十日發行



著作
者

秋
月
種
樹

發行
兼
者

金港堂書籍株式會社

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

右社長

代表
者

原
亮
三
郎

東京市下谷區龍泉寺町四百十番地

印刷
所

三
協
合
資
會
社

東京市京橋區弓町廿四番地

堤大介 著

弔楠公詩編

明治十八年（一八八五）徳島鉛排本

據明治十八年（一八八五）
排本影印 德島鉛

弔楠公詩編

序
夫我國也者文武人材之多雖五大洲豈亦不必讓也昔元弘之際北條氏以積威之暴妄作氣勢自擅尊大藐視天朝其惡無論方是時不聞有一人倡忠前者也獨楠公應現夢之詔威舞手兵而進之以壯士氣禦東寇其防慮秘計動皆中於機以取勝於時雖古名將何加茲真挺羣奇傑奮然率先爲中興之倡其忠烈偉勳之事歷代國史記載觀縷且夕讀之感激忼憤不能自止而偶編詩弔之藁就之日武田氏懷一書來訪出示焉曰是我家從來傳秘楠公之遺書也今茲當公五百五十年祀故將刊而呈廟前慰忠魂因

書其概弁卷首云云余讀之其軍政精密國家紀綱細大縷陳真可愛之秘書也故以余拙詩附錄更跋是招狗尾續貂之嘆其詩是也明治十八年五月也

用補公詩

南海堤大介著

妖氛漢々彌虛壘補氏格誠天地通鼓厲勤王卜成業維持風教委全
勇如每軍國誠外只願恩君哀亂中一死殉難千古卷清忠貫日照
無窮

冬

補氏固無百里封不求聞達日從容協心三族臣熊羆浩氣一將躬虎
龍上下神交偶然出風雲際會夢中逢當時恢復君臨矢翅豆到今無
比隆

江

鍾々偉業實無雙金石忠腸固滿腔當日進征森嚴敗爾來因頓寇稍
降渠魁挫駒逃奔蹇首將息敢止倒扛不用窮追君勸說愛姬尤物美
家邦

支

兵食大權既下移皇天震怒欲回時威懷竭力勞王事振禦工夫屬賊
師好是海東倒妖羅生憎西土起茅騷兩雄犄角無雙牛猛烈妖氛不
克支

徵

獨守小城試一揮萬軍辟易忽披離天威重邊寇氛拂風氣搖動尋宿
飛命絕浮滬跨寥廓事傳金石極纖微他年史不勞編記水府明公勸
德輝

魚

悲夢行宮費詔書獨勞王事豈寧居精忠愛國堅如鐵誠義思君潔似
珠櫻驛訣兒俱不哭溪川逢第各相屬如斯微運亡身命君力元回西
椅輿

鳳

此公忠譽古今無殉國報恩固一途只攝武侯八陣法不須陳子六奇
謀當時恢復空湖敵後世勤王貽軌模意外中途墮成案奚疑因有敢

揮毫

齊

斗大孤城險巨隅攻軍蟻附用雲梯一聲砲破空摧地數萬伏尸忽塞
驚星賊奔逃悔輕侮醜徒狼狽念分機回天畢竟君之力成敗時手謀
噬臍

佐

補廷尉可操殊階正事任官諸將偕切憶振依舊未復頻謀行幸說難
肅會傳歌戒訓無貳屢示忠條論不乖父子後先玉璽地他懸日月照
天涯

灰

燒盛賊氛天未開挽回無術只悲哀北條苛政懲政削市國聖恩望振
核陳俗從來遠有號始知今日夢成堪當時飛出異黨風豈料被坊燕
雀猜

鳳

君是我朝第一人獨重社稷不謀身妖氛熾盛當時滅義烈餘光千古
新完備可尊補氏玉迷離須笑室町庶忠奸感報今明白國史讀知賊
與

文

姓元祐少字多開骨格清高智不群謀猷真平出機算功乘運備忠
純可恰系純垂衰絕深惜家名屬沒淪有志君屢過訪凜然生氣拜
芳芬

元

大業半勞絕口言名留廊廟慰忠魂匪躬豈倦勤王事生死何須世俗
論凜烈性靈千日月渾然意氣動乾坤此公何幸成原鬼寂滅餘光萬
劫存

寒

鐵倉未敗已衰殘黎庶無言候暗驛當日龍蛇南北起同時鬼域四方
拱挺衆決志無及烈報主捐身不朽丹歲月如流說移易依々滾水到

今塞

肅爾孤城金剛山寇兵圍繞少無間虛心受敵施謀密機智取人防禦
開闢外思威隨所發帳中妙算到時完致身大業中塗磨百世流芳蓋
九環

先

勳勳王弟一先四方義士事君前勢如雷電功播地氣似颶風力震
天公焰一興明復滅厥氣再發死猶然海西捲起惡波最使手懸支沒
濠川

蕭

楠公出進護南朝持角相扶倒北條年來虛網稍疎當日賊氛亦巨
消躬成大業將偏忘世屬小家主復臨上下如斯終失利夢兆何事已
塞々

荷

南帝蒙塵愛迫交楠公應夢出西郊圖生避地全躬衛伴死出城凶敵
梢心期平寇謀先獻意忘艱難命更拋回當畢竟君勳績欽慕世人唔
趙苞

豪

率時應詔不辭勞再起好氣尙鬱陶大寇來圍再三戰小兵逐退一時
塵忘家思義心如水舍命經生事似毛四大洲中古今傑精忠之量與
天高

歌

眇々微軀大任荷挽回一意豈無他隨從義士能盟約建起忠臣亦
和專獻真謀莫須臾又抗善說不聞那陳亡何似千年後祀典堂々傳
濠河

麻

元弘之際亂如麻賊風北條次第騎頻起妖氛惱定處又驚慘劫忠民
堪新田鉄鉞扶鼻窟楠氏節刀割寇家天網恢恢疎不漏到今滅後賊

名如

應詔專精轉思量獨城赤坂梁強梁賊軍統設魯般攻忠將亦施墨
防伴死全躬亡敵衛舍生殉國護君方感看百塔宮垣盛廟食歲時輝
德光

廣

北條末政背天情定處不安費隄生弱府威偏固結皇都正氣益紛
更當時忠傑君無出爾後寇寇雖以征一旦濠川煙白骨史中鶴照
英名

青

三騎銳起兩飛雁孤憤隨時欲教醒長杓渴涉兵燭退復垣鉅軍敵
等設施軍法固無匹繼記史傳視有靈王事致身千載下凜然生氣揚
芳馨

燕

應召決志國中興金剛小城禦巨寇農粟充積我墨守寇軍合勢敵
凌四方仰攻聚如蟻一瞬俯追散似蠅盡力匪躬勞王事豈論成敗轉
交承

尤

專輸思國爲君憂固結閨門起和州王事隨從似犄角賊徒附屬若蠅
頭設防慮無匹更布陳方殊有謀威敗天乎非戰罪於公豈是亦
奚尤

依

雖圖再起賊氣侵兄弟陣亡濠水源躬比處芽委克土名留金石化形
深渾然忠表輝天地卓爾義鑑照古今祀典永存傳諸事神威如在益
恭欽

草

醜賊時乎不仰南夢兆傑出獨稱楠義夜巡邏剋肝肺驚魂真平場手
欲思國忘家百般苦舍躬就紀一證甘精忠如此無今古祠廟拜知是

鬼參

鹽

夢兆楠木靈恩沾百堵小減益戒嚴炬火畏雄耳手段人欺敵好梅
鹽茫々籌策正奇合默默精思文武策恢復偉功君爲倡忠賜石奮似
膠粘

咸

卅首頌章總拙凡世闊妙手待夷至平生只感追慕賦今日繼思出風
街舊史紀殘頁策密還編載盡秘傳誠維知五百餘年後南海有人揭
德咸

〇五

明治十八年五月五日御旨

全年全月出版

市楠公之詩

初編

德島縣阿波國名東郡德島德品町
百十貳番地士族

編輯兼
出版人

堤

大介編輯

小本壹冊 定價拾錢

書肆

黑崎源助

同

黑崎精次

同

小川六郎

同

世渡谷文吉

同

高砂竹次郎

同

坂井万吉

賣 弘 所

正誤

一一丁目裏魚初行 費。ハ賚。ノ誤

一一丁目同魚末行 椅。ハ狩。ノ誤

一二丁目同塞初行 驛。ハ彈。ノ誤

一三丁目同歌二行 課。ハ謀。ノ誤

一四丁目同草初行 紀。ハ死。ノ誤

一五丁目表咸初行 間。ハ間。ノ誤

村上剛 著

佛山堂詠史絕句鈔

明治三年（一八七〇）刻本

據明治三年（一八七〇）刻本影印

佛山堂詠史絕句鈔

豐前 村上剛大有著

勢人某來傳齋藤鼎堂翁語曰予曾有海外異傳之著請予摘其大要綴爲韻語欲以並傳于世也余謏劣不敢當而先輩之命終不可辭焉因有此作

山郎誓欲取封侯治世無由施策謀舉眼茫々天地大立身何必丈夫州

忽挺孤身托賈駘臺灣島裏暫周旋彈丸豈是立功地更駕鵬雲向五天

卷一

萍蹤落還羅國方是干戈擾亂時大口如盆笑何事笑他行陣似兒嬉

將軍號令肅秋霜一萬精兵日本裝咄々大半何血刃長繩生縛六昆王

西域喧傳噍普長大功新賜大封疆區々領略琉球國一笑鎮西源八郎

舊侶相逢敬且恭金冠玉帶拜清容何圖同穴蠕々物化作雲霄百丈龍

衣冠遙拜曉吸紅玉帛源々來向東如欠首丘心一片事驚天地未英雄

君側淫邪欲一清何圖暗裏姦謀成姦謀能奪英雄命難奪千秋赫赫名

父業沈淪恨豈空提戈跳出翠閨中娥眉亦欲酬仇敵義烈能傳日本風

以上記山田仁左衛門事

瓊浦行商姓是濱生來豪膽大於身區々豈逐秋毫利快事驚人始是人

擬向臺灣受一廬農夫農具自蕭然誰圖短鉏長鑣外鬼策神謀載在船

月兔沈波曉渺然跳身直入海城煙吶喊驚破胡兒夢真個奇兵下自天

卷二

凜然秋水逼胸寒啼泣求生甲必丹能使國威振絕域勿爲荆聶一般看

獻物表誠誠可知紅綾翠錦白珠璣斯行更有快愉事虎穴生擒虎子歸

以上記濱田彌兵衛事

英兒墮地忽呱呱萬火齊明照海隅非孕東方靈淑氣老蚌爭得吐明珠

胸有經綸筆有花一朝榮達起於家儀同駙馬何殊寵萬口爭稱國姓爺

至言諫父淚流血苦節事君心本丹金印煌々忠孝伯自傷忠孝兩全難

大州七十二區分鬱々城樓倚碧雲呼作思明名亦
好可知一飯不忘君

千帆直泝大江風欲拂金陵賊穴空蹉跎可知時不
利莫將一敗罵英雄

臺灣奪却若探囊元是吾家舊土疆朱日茫々將墜
地纔於此裏揭餘光

海激風浪覆千舟賊尸如山積不流奮翼回溪真快
絕漢家弭異是同儔

承天立府自巍々講武習文民亦肥絕似當年諸葛
氏千辛嘯起漢炎衰

卷

三

一死傳家唯是忠合符千載有楠公英魂定合歸桑
梓感激相談冥漢中

以上記
鄭森事

人各有所嗜好者僕唯好讀書而不能多購藏
書僅有一二蠹冊而已矣中根鳳齋先生惘然
愛其志不倦餉其所藏活字板稀世之寶也僕
驚且喜猶饑餓而食芻豢也自今而後藏書有
餘而其樂無窮極也乃先所以刷此詩也

庚午十月

石川介識

多田信敏校字

大沼枕山 著

日本詠史百律

明治十六年（一八八三）東京下谷吟社刻本

據明治十六年（一八八三）東京下谷
吟社刻本影印

日本詠史百律

東京枕山大沼先生著

女嘉稱
男新吉 校

菅公

翰林超擢恩光發。戚里飛揚謗焰生。受故朋規寧信順。
奉前皇託只忠貞。業同伊尹能居宰。跡異周公不返京。
手捧賜衣玄解夜。清涼遠惹去年情。

菅三品

忠讜能兼語氣溫。也知家世古風存。佳聯早已過皇製。
封事還能塞俗源。薄命不昇三鼎職。多才敢忝大賢孫。
吾欽一種殊平素。水上花光獻麗言。

在原業平

東下迢迢自勢南。善歌曾與五仙參。怪來韶貌類少壯。
却被妙媛呼昔男。紫燕橋頭新詠發。白鷗津畔古情含。
天涯千古留佳話。憂國誰知恨不堪。

在原行平

能通吏務孰能倫。忘却皇孫至貴身。縮布賻家真死友。
饑糧給國是良臣。須磨當日無雙艷。獎學終生只一貧。
美貌善歌皮相耳。將言正士更才人。

小野小町

名姬敢與拙夫親。自分孤寒畢此身。雪鬢祇今衰歲暮。
錦心依舊少時春。舉朝皆欠憐才士。行路終爲乞食人。
地下芳魂應一笑。女中千古絕無倫。

紫式部

滿閣清風透紫袍。倚欄遺世意陶陶。薩陀慈影長堪倚。
藤相淫威儘可逃。筆底新詞連帖妙。湖頭古月一輪高。
京華文士爭趨熱。誰與名媛氣比豪。

八幡公

敢說桃園我族華。勤王征役被塵沙。窺眠車外虜心畏。
聽戰室中儒語誇。前九後三多創業。新田足利幾成家。
豈圖遺德川來大。異代洋洋海外加。

源義光

鴿原急難出京畿。笑舍門官收展微。得樂士誠傳秘曲。
有從臣勇助軍威。弟兄親愛誰能比。孫子繁滋固所稀。
不啻峽中稱武氏。信常笠竹族成圍。

源爲朝

忽然歸救父君憂。一塊些些視九州。欲禦前皇遐幸厄。
故呈大賤急攻謀。勁弓便抵連車礮。長箭能摧萬斛舟。
俯仰乾坤無敵者。凌濤獨笑赴琉球。

源義平

戴星晨夜入京城。可惜要讐計不成。鬼武者兄誇絕勇。惡源太號怖諸平。縱橫領此五十騎。斬擊逃他三百兵。運若不窮誰得捕。飛騰屋上似禽輕。

小松內府

貴矣平家第一兒。直衣烏帽好風姿。帝臣身只居中禁。日本人何倩外蠻。敵父惡名因子行。養他貞士護皇基。敢嗟遐邇諸源起。興替循環理所宜。

常盤

弓鞋冷徹踏玻璃。朝出龍門氣更淒。源氏編民平氏貴。大兒覓食小兒啼。經宵雪片方纔歇。耐凍松枝暫自低。

一又歌今集

他日鐵峯梅白裏。諸公似妾去途迷。

源賴政

此公才藝兩超然。達智門頭智可傳。夜殿射禽安帝寢。夏塘詠草博宮妍。榮遷豈敢居人後。義舉終能占族先。敗死宇治何用恨。自茲平氏挫其權。

源右大將

蛭島囚奴潛暗夜。蜻洲主領現晴晨。指揮兵馬權歸手。舉任公卿孰在身。政敵諸糧徵別處。取邦諸法據遺民。畠山千葉居前後。天下何州不畏親。

源義仲

比巨頭公性太寬。士無猜忌用皆完。三分地盡期諸葛。二十姬能壓木蘭。京洛誅求居不易。宇治守戰捷尤難。雖違帝旨堪稱快。連擊愚頑鼓判官。

政子

豈唯妹也貌難同。阿姊俊才今古空。巧矣金丞判夢想。勝於紅拂識英雄。戀依家族事雖狂。儼立幕庭言太公。莫道訓疎兒子劣。源宗究盛運將窮。

源義經

源九兵奇鬼豈能。少年精悍眼光凝。短刀林下除豪賊。高屐橋頭服惡僧。攝嶺躡雲連騎馬。讚洋燒浪一船燈。

一又歌今集

思量山海如平地。護口難踰險萬層。

已姬

君主粟津消似水。阿儂訣別只兢兢。獨歸岐岨欽真史。竟嫁和田笑野乘。昨日鞍頭成勇士。今朝庵裡學閑僧。將軍親故相逢處。悵望湖城說舊曾。

僧文覺

迷後誰圖卽悟初。殺他貞婦感空虛。幾年高尾修難行。千里鎌倉授令書。梵士尚存軍士貌。佐公深感馬公顛。惜師末路依前誤。擁稚兒亡恨有餘。

今井兼平

冠絕岐嶒勇士叢。見機決事有誰同。知鑣公憾神何朗。
略武州疆勢愈雄。詰闕勸降非素願。吞刀成死是丹衷。
想他樋口仍根井。憑仗斯人始奏功。

佐佐木高綱

弊甲何妨家世貧。弟兄父子盡忠臣。每聞征戰思君主。
及視相江似比隣。特寵賜駉鑣府廐。先登破浪宇川津。
武夫也自知玄理。事霸功成乃退身。

畠山重忠

秩父莊司不棄親。能兼義勇與忠純。墨田降謁兒勝父。
鐵拐扶攜馬比人。榛澤誠心歸部屬。北條姦計結聯姻。
憐君末路懲讒叟。不敢還鄉進授身。

辨慶

西塔慶公勇靡能。輸他公子捷身材。五條已契君臣了。
七器皆供使役來。安宅破嚴言直矣。衣川立冷跡音哉。
精魂不向天堂上。只向蝦夷絕海隈。

靜姬

豫州遠向北洋沂。泣向西京獨自歸。芳野雪深懷命薄。
鶴岡花落主恩微。官程迢遞迷行跡。野寺荒涼剩舞衣。
最憶堀川防賊夜。手披緋甲帶燈輝。

齋藤實盛

平替源興志巨伸。北征護老挺吾身。淩來白髮異陸展。
裝得錦衣非買臣。豈料就強凌弱世。尚存知義重恩人。
篠原一死餘榮在。岐岨公啼比父親。

熊谷直實

平生取直曲皆刪。征戰之中理一般。避判官來衝敵陣。
殺公子後脫塵寰。訟庭亡命氣何短。梵寺託生心始閒。
不敢背西吾佛在。宿僧迷路有慙顏。

梶原景季

受敵重圍體益輕。揮刀散髮擊縱橫。龍梅今占無雙譽。
驄馬曾羞第二名。豈比阿爺趨倭倭。只能之子守孤清。
爲他尤惜孤碕役。末路無奇死亂兵。

平重衡

敗衄其如被敵擒。花驄受箭數聲嘶。南都伐敵氣猶奮。
東國爲囚眉自低。一曲短歌如籍也。雙鬟小妓勝雲兮。
源公豈忍付刀俎。凝立隔牆情惻淒。

平忠度

金鼓聲中想詠言。英雄緩地養心源。欲將歌句傳千載。
故訪師家伺半門。夜宿仰花爲少主。春懷對月欠孤樽。
關心事了待明旦。賣勇何曾忘喪元。

平敦盛

公子韶顏避戰埃。城西徙倚宿雲開。暗林風冷帶餘雪。
青葉笛淒吹落梅。晝景轉知逃走恥。曉空先表別離哀。
被呼強敵能回馬。笑交刀氣勇哉。

平教經

震威水陸恣奔揚。不啻高箭亦長。小隊自調頻得用。
闔宗皆弱獨成強。枉勞臨海殺群卒。祇要踰船求九郎。
中納言存先可死。腋雙力士入茫洋。

平知盛

內府教喻語語真。遠酬皇旨勁而剛。不令闔族離京洛。
豈有連舟滯海濱。忍見英兒爲戰鬼。耐聞駿馬付仇人。

一
本
家
文
律

并兼智勇唯公是。甲冑還能任縉紳。

源右大臣

乃兄武貌弟文姿。諸將欲從理所宜。巨大敢尤船造匠。
優柔也勝傘工兒。一身究貴止先判。縷髮留哀死已知。
年少和歌臻妙域。西行諸老或輸之。

朝比奈義秀

足利之徒不耐煩。斷他鎧袖任他奔。一身早已擬諸隊。
隻手先能排大門。忽赴朝鮮收勇氣。曾於日本養英魂。
宜哉忠義義明叟。有此超然佳子孫。

北條時賴

祖風循法守清門。巨眼最明塵失昏。英子太郎張國勢。
良臣左衛布公恩。礫漿紙燭常依儉。管笠芒鞋遠問冤。
卅七莫言其命短。建長寺裏像長存。

青砥藤綱

與物無私理所然。心雖季世副高天。錢苞返彼廉如富。
刀室於君素亦鮮。理百務繁唯在直。撫諸民庶本非偏。
貨雖此子是王寶。撈得十錢拋百錢。

佐野常世

寶刀光鏽氣難消。大雪埋村轉寂寥。瘦馬求餐嘶暗處。
孤僧請宿話寒宵。鑪中捐拙皆雖燼。盆裡松梅儘可燒。

一
本
家
文
律

鎌府多年寃得理。暖如挾纊亦無驕。

北條時宗

言之容易行之難。掃盪元軍付紫瀾。能斷卽成非斷敗。
悔胡却洽畏胡彈。太郎長策幄中運。萬卒短兵船上攢。
生者三人而已矣。也知忽必烈肝寒。

護良王

豈料龍兒得虎牙。慨然提劍脫袈裟。計奇能匿貝多檀。
路儉暫投兵衛家。遠命新田勦賊窟。近援楠木護皇華。
中興底事言難達。簾內迷聽一朵花。

納言藤房

諫駿纔終迹便收。忍將王事付悠悠。至尊北嶺遷南嶺。
老子城州向豆州。禪室敢牽懷土夢。梵衣空裏濟時謀。
百年骨冷古常陸。熱海豈圖名鎮留。

大楠公

忠良入夢傳巖如。千窟秋風王氣舒。奇戰屢鏖關左雲。
遠威先挽海西輿。受來大任心逾慊。遂得中興力有餘。
最憶南薰京洛路。前驅萬騎向皇居。

新田公

故邦一葉只勤王。毫不營私在帝傍。或有謠言尼討伐。
何唯麗色礙忠剛。北山送駕言偏婉。南越移軍計未良。
御筆詔書臣獨得。此身雖朽帶榮光。

兒島高德

黃簑黑甲健精神。欲奪皇輿進退頻。豈啻此時爲志士。
亦期他日列謀臣。十言短詠風前夕。一樹殘芳雨後春。
名遂功成猶不退。勤王役役了終身。

櫻山茲俊

遙仰山陰正統王。嶂嶸雖小起山陽。難成偉烈千秋業。
易碎孤薰一樹芳。隣境不知兒島誓。遐邦只據老楠剛。
身存若及中興際。接到金峰尚崛強。

村上義光

視王猶帝肅然隨。未遇中興職太卑。代死竟能如紀信。
侍饑曾是似之推。危城幸矣披龍服。險路雄哉奪錦旗。
若使此人長扈從。鑣倉敢許賊徒窺。

名和長年

先知大義不須論。藁席何榮負至尊。名族連翩遐及邇。
英風凜烈弟兼昆。旗章且好煉成印。宸殿何妨柵是垣。
明旦助防豪賊逼。阿香驅電雨傾盆。

北畠顯家

少年恰值中興時。系出大潢有勇姿。出將入卿元一理。
修文講武豈分歧。京軍若保管根險。與卒應令鑣府危。
異士雖忘賢弟在。勤王西北氣防衰。

新田義助

舉義新田助阿兄。兒於竹下現豪英。危難扈駕如愁紹。
敗衄承官比孟明。向晚一家皆致死。扶衰四國豈思生。
南邊無復南風競。屬北天心事不成。

小楠公

賜刀三尺放光新。照得遺言泣鬼神。野草忽消孤點露。
宮花敢折一枝春。攝河泉地在其掌。百四十人兼此身。
苦戰四條忠與孝。可稱死重泰山均。

新田義興

武原欄入勢難停。受二姦欺肝所銘。生殆鎌倉深逼賊。死能矢口永停靈。他彼黯淡膠舟迹。林雨依稀騎馬形。足利十三縱究貴。為神誰復上丹青。

吉田兼好

非儒非道養心源。逃利逃名似漆園。須恕為人修豐簡。絕勝隨俗作諛言。奇哉數卷徒然草。類矣一篇齊物論。玩世不牽憂世念。南朝咫尺說之煩。

篠塚伊賀

十六騎中功最殊。號名早已震東隅。一身或獨張中隊。隻脚曾能倒九夫。鐵挺揮殘今浦曠。檜舟撐去隱岐孤。

有齊季女嫁謀士也似乃翁藏戰圖。

畑時能

二十餘人寡豈妨。如鷹據險氣揚揚。列營今日衆皆避。相撲昔時誰敢當。窺敵實虛良犬猛。攻他攻擊惡奴剛。此心雖鐵身非鐵。鎧裡其如盡是創。

細川頼之

軍才治街兩兼之。幕世十三如此稀。僧服辭官平日志。童坊戒士一時機。我欽禪榻其詞妙。誰責花亭所主非。南北和成民暫穩。史儒隱忍敢容譏。

結城氏朝

鎌倉雖暴勝于京。受佐公恩好起兵。執事讀書翻廢義。舉宗決死豈思生。將軍還俗誰能奉。郎主託讐吾所榮。擁得二王深自守。從他萬敵逼孤城。

足利義尚

老賊不以何取回。此言勇矣敵堪摧。惡徒未遽收蹤去。歌聖空能入夢來。慧質曾傳雲上種。游魂今逐陣中埃。樵談治要駐遺憾。葉葉令人和淚開。

太田持資

剔髮風姿類道真。恩威并播子仍親。大場壘在留庸主。江戶城成待至人。舉世皆傳歌詠古。一枝唯係棟梁春。

英雄帶醉且稱快。抵死何曾為叛臣。

北條長氏

南勢多平豈足收。東關歷險早相攸。六人先已輕千里。一劍終能耀八州。伊豆府聊安衆苦。小田原盡落五謀。齡躋米字真遐福。武將叢中少匹儔。

毛利元就

海宇平吞付渺冥。十州入手慰餘齡。吉田并占武田邑。來島能窺嚴島形。擇將守城防禦切。減租行賞士民寧。只因尼子未殘滅。憑仗二川留怒靈。

山中幸盛

鉤如玉月掛兜明。照取隱岐謀略成。助箇衰雲能抗敵。與他強藪屢雄爭。孤身敢擬堪延譽。一部曾經喚變兵。些敗乞降圖再造。根津就死巨爲情。

武田信玄

逐父如讐保國家。殺人如草著袈裟。年時盡把歌詞廢。將校皆教武備加。和越誰能窺甲冑。攻濃祇合向京華。憐君嗜好爲身害。一箇佳聲勝莫邪。

上杉謙信

承家斷慾著僧衣。與甲爭雄費幾時。春日山頭營巨郭。秋宵月下賦清詞。鐵騎城將如群蟻。皮履京人是小兒。

日本書紀卷之七

十三

天若假公齡數歲。懸軍乘勝到天涯。

織田右府

桶間一捷勢如雷。頑越強江戰幾回。先得特恩明主顧。何妨私意寓公猜。烈威終取阪城險。果殺竟招京寺災。此事也知嚴命遍。里無盜賊夜扉開。

柴田勝家

濃江百勝博封侯。備上杉攻蓋有謀。悔北勢霜應自悟。遇南越雪阻君驪。玄蕃其奈狂如鬼。又左從教巧附猴。地下應嗤丹羽叟。憤腸生怪自招尤。

荒木村重

十三郡忽落吾懷。劍首饅頭味美哉。謀叛別存丹悃在。羽柴仍使黑田來。主公猜意寧能解。男子雄心在不摧。敗死猶能勝右衛。有功終被放蒿萊。

蜂須賀正勝

當時舉義稻青儔。盜國齋藤是我讐。木下雖遙先議戰。竹中儘近未通謀。只知洲股役群醜。何料阿波封大侯。維子維孫兼勇智。蔚山阪府策勲侔。

鳥居勝高

孤城存後一身亡。喚做强來實是強。有志使臣同解子。無情敵主異莊王。明辭未畢吾何死。白刃成圍彼太狂。

日本書紀卷之七

十四

乃祖嘉名孫子繼。生存三百有星霜。

織田信忠

志貴城屠麾一揮。郎君少小武巍巍。峽中有路雖功遍。洛下無兵奈敵圍。運啟豐臣寧得識。衆遮安土豈容歸。織田氏命竭于此。三法師愚益失威。

豐臣太閤

英雄奇矣起人奴。近護宸居據阪都。謀虜數年疲玃紫。看花一日醉醍醐。窮奢只要終身快。鍾愛寧知嗣子愚。若使此公今日在。外邦城郭盡攻屠。

前田利家

含溫勇氣孰爭先。大老班高豈偶然。展卷精思娛老境。
揮槍血戰笑韶年。爲侯國冠主三國。結德川交媒細川。
不啻斯公功業偉。榮營氏後亦唯天。

長岡藤孝

年少追隨在室町。織豐之際以歌鳴。誰知家系出花所。
但見宿交通月卿。忽值紫宸馳特使。不妨丹後在圍城。
亂餘邦學重重秘。待得斯人付後生。

古川元春

播城忽受織田攻。欲襲京師策竟空。能奉交于知古訓。
不迷女色是真雄。難辭猴主威相役。誤受鯨魚毒一中。

十六

珍重吉川流益吉。倔強兒子與爺同。

小早川隆景

勇力雖多恃智謀。小川非小繞天流。羽柴可援分連隊。
毛利能撐保數州。快事暮年驅異虜。誠心死日戒宗侯。
亂餘已見太平象。北筑先聞絃誦稠。

黑田孝高

少年多略豁胸襟。播攝周馳靡士林。名護營中成諷切。
關原陣外建功深。鮮將兵意均張意。厭殺人。心類孟心。
智者見機能處變。先豐後德足嘉音。

蒲生氏卿

少年英敏主恩隆。邑土先能勝乃翁。偉略從來如織府。
巨封枉是受豐公。朝鮮渺渺難宣力。陸奧區區且奏功。
末路花飛仍玉碎。莫將短氣恨山風。

淺野長政

獄訟平反見至哀。伍他佞豎恨無窮。外親屬裏殊承旨。
五奉行間最奏功。已使麟兒依鬼將。更將狐魅悟猴公。
末途誠款通真主。誤不傳喪寵亦隆。

北條氏規

氣壓西軍幾倍過。祖宗所據敢貽他。千餘一意吾非寡。
五萬離心敵豈多。縱是受圍寧受敗。只能堪戰不堪和。

十六

小田原使此人守。天下兵攻將奈何。

加藤清正

水清山秀產斯人。喚虎童時勇壓真。爭得託孤如葛亮。
只敢防虜似張巡。威揚怒立生仍鬼。眇視跋興死是神。
一箇勝他千百輩。豐臣宜矣號豐臣。

加藤嘉明

涉危如坦詎輕軀。曾是七擒年少徒。四國城中催進發。
三韓海上恣奔趨。故僚脇坂交偏密。同氏加藤勇各殊。
憤戰雖然分水陸。長髯一樣貌非孤。

黑田長政

征韓年壯幾追奔。破晉州城未足論。趁戰早蒙名父澤。
奏功多受偉人恩。上交情款原非媚。下接威嚴豈自尊。
十二萬終添四十。誰疑跨竈令名繁。

藤堂高虎

重任耐勞肥海濱。歸來巧碍佞奴塵。知機最早遭良主。
受寵殊多並舊臣。和攝奏成連陣勝。野津築出兩城新。
扈隨死日生年似。數尺墳靈倚廟神。

脇坂安治

淡州封土小何辭。賞不酬功是一時。唐島競先能得疾。
關原衝背未為遲。水軍九鬼成新熟。獄隊加藤是舊知。

日本歌人七律

十七

最是傳家奇寶在。雙槍鬘鬘飾貂皮。

本多重信

苦諫吐情平素身。朴如周勃更天真。將焚重寶遭他患。
欲灼危疔與主馴。四國無雙奇僻士。三河第一老忠臣。
潛居也給三千石。恩意將言數萬勻。

鳥居元忠

曾被敵搶蹴至今。孤城迎主吐誠謀。會津事重衆宜赴。
伏見勢輕吾所禁。風露氣涼秋尚淺。君臣談熟夜終深。
百年生別哀於死。雖老英雄淚滿襟。

德川秀康

性似亡兄質少文。戮人十二勇名聞。付豐臣氏元由庶。
承結城家遂出群。南越侯封推始祖。北門鎖鑰待郎君。
堂堂列銳推關入。英氣衝他碓嶺雲。

酒井忠次

名族三河歷衆曹。斯人更復占榮褒。撈蝦舞裡謀偏秘。
擊角軍前氣更豪。封土寧輸姬路大。居城竟據鶴岡高。
勝他諸士身忘退。晚節求聞學古逃。

本多忠勝

十四揮刀歷叱聲。尾人誓避尾公迎。阪頭開敵爲餘賊。
山下還兵是老成。三國驪驅諸隊激。截蜻槍使萬軍驚。

日本歌人七律

十八

策勲豈啻關原役。中務從來莫與爭。

板倉勝重

千里關東隣比思。敵間消息報教知。九重宮穩防偏密。
五萬糧饒計太奇。駭府法輿邀奉此。阪都刺客捕誅之。
愛君憂國非私意。重任臨終付我兒。

井伊直政

名族遠州危欲亡。得真人顧始揚揚。成童蒞陣童容美。
化鬼攻讐鬼勢強。第一功名新鄧禹。無雙籌策小張良。
太平猶見戰時象。絕大朱門如赤裝。

水野勝成

速參每戰速登場。有外家親付。澹然嚴令。曾違三尺板。先驅只恃一條槍。忽從大阪爲軍帥。能保南都得策良。十萬黃薇封尚小。總隅竟守古城荒。

柳原康政

上野先登二八秋。深沈暗助主公猷。雖遭亂陣學能習。可見武夫風自優。小牧移文殊得義。上田滯陣未爲尤。有切不伐如之反。殿四天王蓋有由。

大久保忠教

武場進早退尤難。列在文班主意寬。曾見宗家爲諸客。猶辭厚祿與高官。甚哉此老煎肝熱。救矣諸臣失意寒。

日本歌人七律

十九

儘把微言名責實。鶴羹唯見菜青攢。

土井利勝

德川支派足恩波。生小爲臣姓喚他。護得嗣君逃黨禍。喻來後輩發公訶。仕經天正及寬永。封自佐倉移古河。宜矣暮年爲大老。服入隨處禮而和。

大久保忠隣

治城雄壯據嶙峋。護得江都氣色新。阪府送姬依衛手。京師成鎮啟讒唇。奕棋歛罷緩聽命。鎧仗送齋寧顧身。遠謫不言君主過。古今此段屬斯人。

松平忠直

阪城苦戰果如何。貴抵王孫直欠和。飽食死能離餓鬼。猛威生已類閻魔。破門第一先稱我。焚櫓縱橫豈讓。勇進惜公終不退。海西遠謫意蹉跎。

井伊直孝

斯人一出勢逾加。邸俯櫻田濠水涯。忽爾占先諸士座。偶然承後阿兄家。封書異日投交火。連戰當時逼浪華。先後戀都殊可仰。碑籠豪德一團霞。

本多忠朝

驍勇何曾減乃翁。阪城自擬策殊功。君顏發怒所傳命。臣意含傷宜棄躬。百里花驄行不進。十斤鐵挺力將窮。

日本歌人七律

十九

被創猶是踰溝倒。爭首西軍作幾叢。

林道春

正宗一派啟惺窩。之子玉成經琢磨。隆起才能宜展布。亂餘逸事好搜羅。文雖達意仍期博。學在修身亦要多。況有提携賢弟在。精研共及髮皤皤。

石川丈山

先登纔了已昇平。自此間邊送我生。身擬林逋留隱迹。詩聲安石見高情。晚途志士猶觀劍。終歲幽人不入城。豈料他年天子至。瓶梅一朶滿堂清。

德川義公

太平方始出斯公。偃武修文奏偉功。創出幾編新史正。
表成八字古臣忠。身忘富貴稱梅里。威壓妖魔記竹叢。
別有五倫難及處。養兄之子愛恩隆。

附錄

北條氏康

祖翁威德得非遺。三世還能出此兒。強弱甲常交兩熟。
東西總武戰雙奇。絕巘逼境何曾恃。大敵臨門似不知。
可見英襟有餘裕。每逢佳景著歌詞。

日本詠史百律

二十一

明治十六年四月十六日御屆

著者井出版人

東京府平民

大沼厚

下谷御徒町三丁目十番地

定價五拾錢

木邨嘉平刻

海棠窩主人 著

日本詠史新樂府

明治二年（一八六九）西京（京都）尚書堂刻本

據明治二年（一八六九）西京（京都）
尚書堂刻本影印

豐后中島子玉先生著

日方祿安新樂府

鳳城

三書房台梓

日本詠史新樂府

豐后 海棠窩主人著

天窟闔

天窟闔。六合黑。天窟開。六合白。一開一闔。唯丁日。懸將皇統長不落。餘光分照六木洲。何況劉興龐厥國。

天照太神一號太靈貴伊非諾長女御於高天原太神弟素盞鳴尊勇悍害物太神避入天石窟闔戸不出六合之中不辨晝夜於是羣臣會天安河原設燎奏樂天鈿女命為優於窟前歡笑甚樂太神微啓戸窺焉手太力雄命奉太神手強援出之天下復明矣六木洲一曰歐羅巴二曰亞非利加三曰以西把尼亞四曰利未亞五曰南華墨利加六曰北亞墨利加劉興龐秦姓

日本詠史

八頭蛇

八頭太蛇飲槽中。槽上雲氣如白虹。揮劍斬蛇劍少。却有一劍在尾端。蔑視龍泉與太阿。藏之可以鎮邦家。誰圖他日姦臣倒持柄。天下兩段斬如蛇。

太神謫尊於出雲國尊至數上見翁媼擁一少女而哭問之曰國有八頭蛇乎七女皆為之死今有一女亦將被害故哭耳尊云我能為汝除之乃設八槽驅以待焉果有巨蛇來飲尊拔劍斬蛇寸斷至尾及少刻視之得寶劍一初蛇所在上有雲氣因名劍曰雲雲後改稱草三種神寶之一也龍泉太阿皆劍名後醍醐帝之孫足利氏立後光嚴帝時三種神寶在南山眾皆以即位之例難之關白良基曰國家以尊氏為劍良基為璽何患無之自是之後分為南北朝

徐福來

率土濱皆王臣。普天下皆王土。三千男女來我邦。受廬亦應作我氓。別無平原與廣澤。徐福為玉知何王。
孝靈帝七十二年徐福率童男女三千人賣三墳五典來聘求藥不得遂留不歸或云止富士山今熊野有徐福祠徐福得平原廣澤而止為王焉見史記

朕夢惡

夫亦可愛。兄亦可愛。一身為妻亦為妹。來目官中夜漏長。醉枕后膝睡后傍。小蛇繞頸朕夢惡。提劍起問是何祥。愛夫愛兄兼愛子。抱子入城與兄死。

日本詠史

聖仁帝即位冊挾德姬為皇后后兄挾彥彥私謀不軌謂后曰兄與夫誰尤可愛后曰不若兄也挾彥彥取后首於懷授后曰汝以之刺帝后色沮挾彥彥強之后不得已而許焉帝幸來且居高宮枕后膝而卧后欲以此時弑帝而淚墜帝面帝驚寤曰朕今夢有小蛇繞頸大雨濡面是何祥哉后乃告以實帝驚曰是非汝罪也即日遣兵圍挾彥彥后乃抱皇子入城欲質皇子以省兄之死而圍愈急后乃出皇子於城外與兄死

二面堯

二面堯上日月光。不作女粧作男粧。對敵何減蘭陵王。吾面即是先皇面。莫道本蘭本女郎。況又胎中有天皇。

神后將征三韓。令曰。我雖婦人。借男壯。戰軍事。事成。群臣共有助。不咸子。一人有罪。豐前英彦山有。二面。梵傳云。神后征三韓時。所着以對敵。堯上有。日月文。製造奇古。嘗經御覽云。高齊蘭陵王長恭。面類美婦人。乃著假面。以對敵。與周師戰于金墉。城下。勇冠三軍。齊人壯之。乃作舞。以倣指揮。擊刺。之容。古樂府云。始識木蘭是女郎。

探神湯

武內直美內曲。明神寧無繩。與墨不爛。兄手爛。弟手。神湯下探分淑慝。骨肉相構事堪嗟。汝且謂我欲如。何七十老翁何所求。吾比疾羸更二百餘歲多。

應仁帝九年。武內弟甘美內護武內於帝曰。臣兄。親觀非望。密謀招三韓。據九島之地。而後東。忝中。日本詠史

原帝乃遣使案驗武內潛東歸。詰問訴免。兄弟爭。辨莫斷。其曲直。因祭神。祇於磯城川上。令二人探。湯以詛盟。甘美內手爛。武內無傷。乃赦復官。罰責。美內。熱之。武內時益三百餘歲云。七十老翁何所。求。王維詩。疾羸詩。

珠纒

莫奪珠纒。珠纒由來禍所纏。嫁人以禍不以婦好因。緣作惡因緣。他年珠纒猶未碎。可憐已無頭可戴。

安康帝為太子。大泊瀬。聘。播磨皇女。先使根使主。請其兄草香皇子。皇子大喜。乃獻以珠纒。使主見。之。私欲自取。詐奏曰。皇子不奉詔。因留纒不獻。帝。怒。使人殺皇子。自娶其妻。中。帝姬。以。播磨皇女。配。大泊瀬中。帝姬有子。曰。眉輪王。皇子見害時。猶幼。故得免罪。下日帝語姬曰。汝雖可愛。朕畏眉輪。眉。

輪聞之。乘帝醉。卧刺之。匿于圓大臣之家。大泊瀬。怒。燒殺之。大泊瀬立。是為雄略帝。吳女。三。帝使。根使主。娶之。后見使主所着之珠纒。大哭曰。是兄昔所獻之物也。帝詰之。得狀。遂殺之。

玉手篋

蟹吹笙。鼈調瑟。龍堂小姬捧盃出。臨別手贈玉手篋。封緘密於交契密。婦言不守可如何。歸來開篋。鬢忽。華。不恨添儂面上皺。猶憐似姬眼中波。

雄略帝時。丹州人浦島子。乘舟而釣。得大龜。化為。女。遂相携入海。共為夫婦之交。三年而歸。臨別。贈。一物。名曰玉手篋。且囑曰。謹勿開視。浦島子及歸。試開視之。有雲氣出。篋而去。顏色忽變為老衰之。狀。蓋留海中。數十年云。日本詠史

青蓋車

弟起舞。兄坐歌。隆準被人認龍種。陋巷來迎青蓋車。當初困苦乞為奴。跨牛往田與牛耕牽。此車又此牛。

雄略帝即位。以先帝欲以皇子市邊押盤為嗣。深。怨之。於是誘皇子殺之。其子隱計弘計兄弟避難。於播磨赤石。變姓名為縮細目家牧。飼牧牛馬。會。國司小循有事抵赤石。細目置酒款待。弘計謂隱。計曰。吾二人借匿已久。今當告以實。或得濟拔。億。計恐禍不敢從。弘計慨然曰。吾二人皆皇孫。假。令自告。買禍而不能終于困辱也。因相持而泣。夜。深。酒酣。互起歌舞。兄弟秉燭立侍。小循自撫弦。弘。計乃整衣而起。作歌。述其系小循大驚。離席再拜。急乘驛傳。詣京。以聞。帝遣侍臣以青蓋車迎入宮。遂立。億計為皇太子。弘計為皇子。億計讓弘。計立。是為顯宗帝。億計繼立。是為仁賢帝。

斬猪頭

斬猪頭頭輒墮斬猪容易斬馬難可憐一言買帝禍
尚方斬馬劍非鈍不斬凶豎名是馬君不見十七憲
法出聖德不知匡惡是何惡

崇峻帝即位稱日子馬子負定策之勲專肆驕縱
帝稍厭之將加刑戮以告皇子厩戶與馬子
共深信佛相親善因諫止之會有獻山猪者帝指
之曰何時如此猪斬吾所憎者頭宮女有寵哀怨
對者竊以告馬子馬子懼遣人刺帝於內寢立錄
明皇女是為推古帝厩戶不復討賊立為儲子後
帝命厩戶定憲法十七條其一條曰
見惡必匡世稱厩戶為聖德太子

朱衣老翁

祥祿擗天天洞開朱衣老翁捧日來取來忽復被人
奪金烏西舍事可哀當初視虎猶腐鼠誰知腐鼠是
活虎巖化為虎虎生翅攫奪紅日騰空去

天智及崩將立母弟大海人為皇太弟大海人辭
披緇剃髮入吉野人皆曰是虎生翅也又大海子
大友踐祚與大臣等議欲除皇叔託山陵事私集
兵大弟聞之大驚曰吾所以入吉野者欲以終天
命也今已如此豈可坐而待死乎乃以大伴吹負
為將以皇子高市監諸軍事破大友軍於瀬田大
友自刎太弟即位是為天武帝大友臨死賦詩曰
金烏臨西舍鼓聲催短命泉路無主客此夕離家
向大友嘗夢天中洞開朱衣老翁捧日而至以
授已忽有人自腋間出來奪去於是果如前夢

三寶奴

貢黃金驚喜黃金佛所致拜佛自稱三寶奴以袈換
緇如脫屣豈知母雞被人攘玄助飽吃穿籬菜

聖武帝天平感寶元年陸奧國始貢黃金帝方醉
心佛說謂黃金之出寔由佛德乃率皇后太子百
官行幸東大寺拜佛自稱三寶奴後視髮稱沙
彌勝滿是為天子披剃之始初太后病惡見人雖
上及親戚不得親近有僧玄助者善祈禳因屢召
入為咒後常出入中宮頗有醜聲廣嗣上言助以
左道蠱惑太后帝素信助因貶謫廣嗣於太
宰府廣嗣悲憤遂教佛家謂難為穿籬菜

一字褒貶

清麻呂穢麻呂喚馬呼牛不禁汝汝道何道鏡何鏡
明神寧許苓為帝當時使我遇馬遷應須同傳魯仲

連一字褒貶汝敢然

高野帝寵道鏡拜太政大臣居西宮前殿大臣以
下拜賀字佐祝人阿曾麻呂希旨託八幡神勅曰
令道鏡為帝天下太平於是使清麻呂往宇佐受
神勅清麻呂歸奏曰神勅我國開闢以來君臣分
定今道鏡無道敢觀觀非望宜斬以霽神之怒道
鏡大怒奪其本官更名穢麻呂流之大隅及光仁
帝立乃得召還苓為帝老子
諡魯仲連不帝奏見史記

拾飯

飯墮坐拾飯食輕卒忽被藤太窺漆指禁蠻汝安得
飯之墮坐猶可拾奈何他日渠頭落

平將軍反於關東下野藤原秀鄉往候之將
門方梳髮遽出款接俱食飯粒墮坐輒拾食之秀

鄉知其輕卒無成遂去與官軍與平貞盛戮力討滅之

鷹為鳩

鷹為鳩其形雖變眼不變有時側睨如掣電一旦弱翼被鷹蹴可憐青雲忽失足獨喜留名詩案中芳名有人比芬馥劉郎挑蘇老菊

一條帝時道長為閩白文章博士大江以言當以次進官道長奏曰以言以詩誹訕朝廷遂罷其詩有云鷹鳩未變三春眼鹿馬應迷二世情蓋斥道長道長故中傷之劉禹錫以詩玄都觀桃得罪於時相蘇子瞻以評荆公詩謫于儋州

君頭白

未擒賊君頭白既擒賊君頭黑神火遙空紛如雨六羣郡梟喪窟宅巨楯昇致賊酋屍立功邊陲真男子豈唯白髮變為黑家有佳兒君不死

天喜康平之際陸奧六郡首長賴時二子貞任宗任作亂時源賴義為陸奧太守兼鎮守府將軍與出羽清原光賴弟武則討之連破二柵乃會將士飲賴義謂武則曰子視吾面目奚若也對曰將軍盡忠於天子暴露于野十餘年髮皆白天地為動將士為奮破賊若大河臣今視將軍髮復半黑也獲貞任則全黑矣賴義追貞任到府中柵遙拜京師手取火号神火投之會風起柵皆火貞任獨身出闕眾刺之不殊載之巨楯六人昇至腰圍七尺長稱之數其罪斬之賴義子義家又為鎮守府將軍與弟義光皆英果善射後共平清原秀衡之亂

山法師一作三不奈

雨有罪下兩獄吾所欲為皆如意唯有三箇奈不得不奈鴨河不奈采不奈山法師犯輦轂

白河帝器度弘大信賞必罰剛斷果決政出宸衷相門欽手頗有後三條帝之風而愛憎任意任官授職不遵舊典凡以院宣号令天下置別當北面助于此嘗曰天下無不用朕命者唯不如慈者鴨河之水山法師采齒而巳帝信佛法嘗欲慶其所自書金字大藏經數遇雨停之帝怒以為兩有罪乃盛雨於器下之獄時人謂之因雨

叔父兒

新天子叔父兒豔妻有舌暗傾危綏皇一箭鑿混沌

或疑禍胎于斯時賢哉菟道稚郎子千載使人拜且起嗚呼菟道之魂獨不死

鳥羽太子受禪是為崇德帝帝母璋子幼養於白河法皇鍾愛之及長不衰頗涉物議鳥羽是以不子視崇德也戲目之曰叔父兒鳥羽寵姬曰得子号美福門院生皇子体仁今崇德養為太子四歲受禪是為近衛帝亡幾帝崩崇德希復位崇德皇子重仁又長而賢中外屬望而美福以近衛登世為出元祖乃密勸鳥羽立崇德同母弟雅仁足為後白河帝崇德憤恚遂釀成保元之亂經聖帝容資純孝及先帝崩專留心喪事悲哀無已初廢兄手研耳命久習朝政諒闇之間委事行之擅張威福包藏禍心圖害二弟上陰知之山陵事畢與母兄神八井身謀射殺之應仁帝少子菟道稚郎子遂伏劍而死欲立之稚郎子與皇兄大鶴鶴相讓

虛位三年推郎子曰兄之不立以吾猶在世也遂

破流鬼

丈夫何借王家爵吾是鎮西八郎足箭長幾許十五
扶百步無物逃我鏃射船船覆射馬馬仆電光一掣
如星落阿兄休笑吾弩弱末力能破流鬼國

為朝者為義第八子也其幼也交輒諸兄為義怒
故諸西海居子豐後與肥後平忠國相謀而侵大
小二十餘戰皆勝遂霸九州自稱鎮西八郎時年
十三保元之役賴長恐其不為用俄奏授藏人為
朝日死亡之不遑尚何以藏人為身是鎮西八郎
足矣弗拜為朝注鳴鏃射義朝以琳之箭飛成色
鑿兒臍而貫門鼻義朝曰汝唯未精耳為朝曰以
兄弟也乃復注深栗七郎藏義朝應弦而斃後流

日本詠史

于伊豆大島悉奪其租賦又累傍地并六島有之
至嘉應二年伊豆守茂光討之為朝邀射沈其戰
船或云後入流鬼國可謂聲
天王者即為朝之子也

伊勢瓶子

伊勢瓶子醋瓶子瓶子豈是廟堂器他日公卿集一
門承乏台鼎還瓶子瓶子倒覆公餽痛心不獨公餽
覆鉢中哀哀一塊肉

清盛之系出于伊勢父忠盛事鳥羽帝有寵自備
前守遷但馬守任刑部卿賜昇殿以其門望之微
也細神多愧與之伍謀乘寡刺之語泄及期忠盛
佩力而入其親兵亦哀甲而從馬衆謀破已宴闌
帝命忠盛起舞衆乃為轉色曰伊勢瓶子是醋瓶
子瓶子讀作平氏醋瓶諺音混同眇調忠盛之日

眇也仁安二年立皇子憲仁為皇太子太子之母
清盛妻妹也後太子立是為高倉帝清盛遷內太
臣陞從一位清盛又立其女為皇后一時榮貴莫
與比焉治承元年左近衛大將關大納言實宗成
親皆營求之既而重盛自右遷左於是二人皆不
能平共欲作亂與其黨西光會議于鹿谷鹿谷者
僧俊寬山莊也生有諫者成親斃然起快胃瓶于
側之曰平氏斃矣而光曰平氏之斃不如取首遂
取其捕黨罪之壇浦之役二位尼抱安德帝蹈海而
皆戰沒亦

萬觴體

風颯颯射老眸相公怒視觜欲裂階前累々萬觴體
晚吾頭尚可慎莫笑吾頭吾頭還有南面樂君頭被

日本詠史

十

人蹴為球

平氏第中末年甚多妖清盛一日獨坐見階下觴
毬數百合為一大頭晚清盛清盛亦瞑目蹴之須
臾而威占者以為為義義朝之屬南面集出于莊
子南都僧徒怨平氏造木丸呼為淨海頭蹴擊以
為戲

着高屐

高平太着高屐中御門前足踟躕一旦黑龍化為虎
棄股乘輦願未足願未足竟如何為君更有老閭羅
夜又相送大輪車

清盛傳西光至使跪階下清盛叱曰下奴侍過分
之寵欲危吾家西光笑曰何謂過分乎公之父但

馬守朝官所愧齒公為其嫡子常着高屐伺候中
御門氏人呼曰高平太公乃至太政大臣是之謂
過分耳清盛大怒命裂其口清盛生歲在子耶馬
墓詩所謂黑氣是也清盛陞位一位許乘輦入宮
養和元年二月清盛患煩熱浴於冷水水輒沸呼
弓色微門外曰閻羅遣大輪車迎取我矣病七日
薨歲六十四

麾夕日

麾夕日君扇能擬魯陽戈義和弭輿暫婆娑射朝日
君箭不及后羿弓王室如燬勢熾々家祭不供流人
首兒曹之祀吾豈受誰圖君宗與日亡捧日却是流
人手

日本詠史

十一

清盛嘗堂嚴島祠限以一日功未終而日欲沒乃
以扇麾之日為退一笑魯陽公與韓搗難戰酣日
暮援戈而揮之日反三舍出于淮南子日御曰義
和出于廣雅堯命羿仰射十日中九亦出于淮南
子後鳥羽帝以義和為朝日將軍義和入京縱土
卒大掠至奪衣食于途清盛臨死遺言曰我死之
後勿修冥福唯當新
賴朝首長之塚上

搦仲綱

搦仲綱跨仲綱馬額印字烙痕凹誰圖中有禍機藏
一馬先嘶萬里應乾坤變作血戰場君不見西海雲
腥龍鬬野蹈碎君家是此馬

伊豆守源仲綱有善馬宗盛求之弗獻復之使者
相望于途其父三位賴政懼禍強令獻焉宗盛謂

其怯也乃烙印馬額以仲綱二字搦入廣坐輒牽
出之日鞍於仲綱曰搦仲綱曰跨仲綱以為戲笑
仲綱聞而怒焉賴政曰吾老矣為汝死焉遂勸親
王以仁舉兵事雖不成首唱義誅亂感發天下義
氣卒除平氏者實
賴政父子之功也

巖圖猫

蛭島昔與巖蝦侶平氏是猫源氏巖富士川頭白旗
飄平氏是巖源氏猫巖窮噬猫猫輒走棄甲曳兵相
躡蹠如巖圖猫竟如何吾今宥汝為乳母豈無劍斬
首藤首

日本詠史

十三

賴朝之在蛭島倚北條時政會以仁王令旨至賴
朝大喜陰與時政謀舉兵使安達盛長傳令旨歷
說關八州豪傑首藤經俊獨不聽朝笑之曰以流
人圖平氏猶巖圖猫耳清盛聞石橋之敗大喜既
而聞賴朝未死兵勢復振則恐乃使孫維威弟忠
度以五萬騎拒之賴朝與維威夾富士川而陳河
水方漲兩軍相持未戰武田信光潛兵由間道夜
出西軍後道徑大澤鵝鴨驚起西軍大駭潰走賴
朝還鎌倉大行刑賞召首藤經俊曰巖圖猫如
何將斬之其母嘗乳養賴朝因為請哀宥之

馬條慢

馬條慢何不約口衙弓弦手約條不慮先鞭被人首
兩龍蹴波波噴雪汗灑荒道河邊血將軍御士如衙
馬一磬一控自有訣兩名馬奴榮傑

義仲行暴日甚法皇頗苦之私使使召賴朝來京
師賴朝委兵於範賴義經因令曰木曾阻我兵必

於宇治河。皆具善馬。可以騎渡。賴朝有駿馬二。曰
此月。曰摩墨。握原景季。請得此月。以先登。賴朝不
許。乃與摩墨。明日。佐々木高綱。自近江來。謁曰。臣
若從軍。不敢期。生欲一見。君訣別。且奉指揮也。馳
三日。乃達。臣唯一馬。罷不可用。故後期在此。乃出
池月。賜之。高綱喜。謝曰。高綱而不死。先登之功。必
不在他人矣。拜舞而出。已而範賴向勢多。義經向
宇治。義仲聞之。議我安。距宇治。撤橋板。查柵。張繩。
水中守之。義經以騎二萬五千。距東岸。有二騎。鞭
馬亂流而進。先者景季。後者高綱。高綱則起乘而
進。上岸。景季躍上。義經以全軍繼之。擊大破。
及上功簿。高綱為先登。第一。景季為第二。

相公怒

生女相公怒。生男相公喜。莫怪他年虎類狗。螺贏負
得蜩蛉子。督聲東風飄白旄。龍家舞入西海濤。國亡

日本詠史

十三

不敢以身殉。我戴我頭來自獻。猶解引衣掩眠兒。姐
肉加刀知不知。

清盛大人二位尼。嘗語曰。余生痛子重威後。又有
身故相國期。其男子而生女。余畏相國之怒。會清
水側有僧賣傘者。同時生男。因與之相換。宗盛是
也。出。虎不成。却類豹。馬換之。語。與於有子。螺贏負
之。出。于。讀。義仲。帥。師。南。上。次。于。嚴。岳。宗。威。率。其。族。
叔。安。德。帝。西。奔。與。源。義。經。大。戰。于。壇。浦。平。軍。敗。績。
二位尼抱安德帝。臨海而祖。諸威皆死。獨宗盛及
其子清宗。不能自決。仰天而立。或擗。宗盛墜于水。
清宗從之。然身輕不沈。相願而游。義威釣之。并虜
之。宗盛父子囚于義經六條堀川。第夜眠無衾。宗
盛以淨衣袖掩清宗。守者視之。有淚下者。賴朝召
見宗盛父子。加刀於俎肉。以示自決之意。然遂不
解其意云。

執兄盥

執兄盥湯沸。手爛。吾不辭。他年四海湧狂瀾。亦能隻
手為公支。忍吾久執盥中熱。奈兄急燃釜底其。

賴朝欲試諸弟之才。陰以火烙盥器。而使諸弟更
侍執焉。執執驚。獨義經終不厭。神色自若。賴
朝是以知其堪事。而心陰忌之。後遂為讎敵。
疾曹子建詩云。煮豆以豆其豆在釜中泣。

伐一枝

伐一枝。剪一指。此花江南之珍卉。義經辭。辨慶筆。口
碑傳芳長不絕。鵲原春風吹何烈。忽見紫荊樹摧裂。
倘教紫荊查無恙。梅花萬枝任人折。

日本詠史

十四

義經西征。至攝之生田。時梅花盛開。義經乃命辨
慶。署榜。建其側。曰。此花江南之所無。伐一枝。可剪
一指。田氏兄弟三人。從分財。時紫荊花盛開。夜諸
分。為三株。曉即儼然。相與歎曰。查本同株。聞分所
尚如此。人何不如此也。終
不復分為。出于齊諧記。

殺吾使

殺吾使。吾有辭。六十六州搜蹤跡。神龍無術可繼羈。
神龍寧顧蜺蜺群。飛騰直入韃靼雲。西海搏梟爪未
折。攫去清和一脉血。

賴朝使僧昌俊。襲義經堀川第。義經捕斬之。賴朝
聞之大喜。曰。殺吾使也。今而後。兵有辭矣。乃奏請
六十六州總追捕使。以搜義經。義經奔于奧。依其
刺史藤原秀衡。秀衡死。其子泰衡等。殺義經。或傳

義經入滿州其子孫尚威寬永癸未年越前新保人漂流至難地觀奴兒于門戶神面義經像云賴朝清和源氏再傳至于實朝而絕其終者獨有義經之子孫耳

葬髮

擊公柱臣眼有淚往不吉失公頭臣眼無淚淚唯血外家手握兵馬權源氏不絕纔如髮今日把髮代頭葬源氏之終與髮絕

北條氏召賴家于公曉至自京師用補霍岡別當公曉常憤父幽死謂實朝所為竊謀報復承久元年正月實朝將拜賀于霍岡祠大江廣元進謁曰臣平生未嘗出淚今無故泣然臣色疑焉君且微使秦公氏梳髮拔髮一縷與之咄曰吾遺物也已

日本詠史

十五

入祠門儀畢降階公曉自階側躍出揮刀斬實朝持其首逃去明日葬實朝不得首以所遺一髮代之源氏正統於是而絕公曉後為長尾定景所斬此時北條時政以外舅執權賴家之幽實朝之判皆出于其謀云

妖靈星

一作妖天子

天王寺妖靈星天狗空中語如人君莫索狗君即狗狗被主飼噉主手六師一移指為叛君臣之義亦何有君不見二十有二史何史嘗書叛天子

北條高時好闘狗常以為樂過令天下獻藝犬諸州與之爭進及四五斗飼以魚鳥著以錦繡倍稅充費民人大苦高時曾宴有天狗數十頭歌舞曰天王寺妖星識者以為北條氏亡之兆後醍醐

帝欲除北條氏時有天皇謀叛之語

笑中刀

不欲汝撥甲吾欲汝披緇狡免既盡良狗何為九泉含冤兒泣血白日不照土中窟君不見豔妻自有笑中刀君王柔腸為之烈

親王護良欲除高氏帝使右大辨清忠召護良且讓曰禍亂方定海內向化子乃脩戰守欲何為哉護良曰大難摧還俗適世用今事竣矣其毀冠服脩舊業護良對曰高氏竊包藏禍心不迫其勢微而除之則高時之逆可破矣帝聞而頷之遣使召就拜征夷將軍任兵部卿高氏懼貨于准后廉子謂王于帝廉子方壁預于公事言莫不聽高氏乃取王徵矣諸道兵馬書因准后上奏曰護良謀叛

日本詠史

十六

松一株

北風粉碎南山查血迸中原紛如雨樹拔草偃天板蕩幸有南枝能撐拄楠枝雖折尚扶疎獨憐摧殘松一株君王倘記避風雨酬渠何惜五大夫

後醍醐帝已滅北條氏太行刑賞尊氏義貞正成長年以下各為諸國守護獨赤松則村賞不及焉奪其播摩守護食以佐用莊初親王護良約則村曰汝致力王室則補播摩兩國守護因屢力戰建功親王為之奏請准后素嫉親王以故勸帝不許其請則村怨望遂叛登置之敗帝與藤房李房

幸有王山麓不飲食既三日帝疲甚因懇於松查
下會露零露衣帝乃詠歌曰索識氏逾覺客索祇
舞耶蜜溫兮曉識欲立呆滅伽識答爾矣客骨列
伽麼那識秦始皇帝避風雨於松查下因封松為
五大夫詳
于史記

君莫愛龍

君莫愛龍有龍無雲龍不靈他日雲遂辭龍去龍不
能躍猶蟬蛭北風吹起楠枝折再見鑾輿出鳳闕玉
璽抱來不與人醉眠櫻花滿山月

出雲國獻龍馬帝設宴觀之藤房曰明主所瑞者
人才奇異之物非所瑞矣帝不悅罷宴藤房數言
乃擯立後光嚴帝據京帝乃女裝潛奉神器南遷

日本詠史

十七

再以吉野為行在所此後二
帝各在位稱為南朝北朝

洲股川

以頭而戴脚世間豈有此倒顛御靈林下戰方酣憐
汝一蹶脚朝天為尾張害者誰子細川應改洲股川

畠山持國無子養侄政長為嗣任尾張守己而生
義就持國愛之欲廢政長政長託細川勝元勝元
私助政長義就奔河內或夜襲義就門曰右衛門
佐拜戴二物御所之盃山名之足義就意政長等
所為相隙益甚共戰于御靈林山名持豐聞義就
之更欲復之以為已助乃遣人援義就而勝元不
援政長政長竟敗走時人為之語曰細川宜改洲
股川害尾張者是此川勝元深愧之後與持豐構
兵連年不鮮及
二人死初讞

替師

摩吾肩替師手洩吾謀替師口嚴島一戰斃彘蛇風
助軍勢雷雨吼替師無目獨堪恨不使渠視陶賊首
陶全姜我大內義隆悉夷大內氏逆豐後國主大
友義鎮弟義長繼大內氏自擅國事毛利元就憎
全姜之逆也乃與周絕連年出兵攻藝諸城屬周
者周人赴援輒敗藝悉平全姜議大舉伐之初有
替師出入元就家者元就常使之摩肩雖密議之
時亦或在側元就覺其為全姜之問者乃偽言敬
若據嚴島則吾軍失利矣因築嚴島以為餌欲薄
諸險替師果告之全姜全姜攻嚴島元就率兵三
千次北岸乘風雨夜戒舟楫急掩其不
意周師敗績全姜自殺關軍盡周遂衰

把扇舞

日本詠史

六

把扇舞七砦警報來如織投扇起七砦皆煙天為黑
三千騎夜斫營兩龍相搏山欲裂風挾雷雨亂軍聲
一龍騰空一龍死傍有一龍奮龍尾白日風雲呼未
起

今川義元將大舉伐尾信長聞之築七砦以備焉
永祿三年五月十日義元率豆駮參遠江兵軍于
桶狹号五萬餘騎七砦告急信長乃會諸將設宴
奏陳樂自把扇舞教盛一勸夜將五更乃傳令曰
轉取山路偃旗鼓直衝中堅時風沙撲面雷雨暴
至師就驚山踰嶺則趾即捕狹矣皆鼓譟而下賊
麾下騷擾服部小平太路義元義元拔刀斫其膝
毛利秀高捨刺義元獲其首駿師大敗績東照神
君時在大高神君之出今川氏留其人守岡崎神
君至自師次大樹寺不敢入城及山間至守者棄

城遁去神君聞之曰人遺而後拾亦詎尤焉遂入
神君始拘于馬後徙于駿在外十四年於是始得
捕挾一戰天訪之東也

登天堂

卻生墮地獄前死登天堂據寺為城僧是賊剖符聚
徒勢披猖窺境虎狼未珍滅旦容巖草間活汝罪
拔髮尚難償奈何汝無髮可拔

神君使著沼定賴築佐時鍊儲未備定願巡邑微
業歲歉無所獲焉見邑中上宮寺有募貨齋糧委
積令人謂寺僧曰新城之振民不能給姑貸此以
副急尋當償還即令役夫盡數搬輸寺係一向宗
叔掠奪室而去定願懇之神君使酒井正親治其
日本詠史 十九

黨斬首惡以徇僧徒益怒舉兵而反各據寺為壘
聖人授一符署曰是舉為法除賊前死乃登天堂
却生終墮地獄其徒相傳扼腕煽動士大夫亦多
其門徒信其誑誘爭先往殲其後賊屢敗與其黨
蜂谷貞次因大窪氏謝罪請降神君
以四方多虞曲宥其黨皆殘死遂之

駿州馬

女廢織男廢耕滿城唯聽蹈歌聲倡優巧鐵劍鈍誰
使君走名義鎮能守家庭當日訓一戰何遽挫鋒刃
駿易之馬豈不駿

駿州之俗每中元士女麗服絃柱設場蹈歌三浦
義鎮以而首有寵好之德憑氏真盛行之國中靡
然成風民間往往廢耕織之業士之窮者或馳甲
伏鞍馬以給其費上下解體怨怒載塗信玄聞之

密結駿人以重賂攻今川氏奪駿氏真奔遠江懸
川城義元嘗誡氏真曰若既長未棄如志圖鷄走
狗文武兩廢今而弗懷知覆宗滅
家必矣氏真不以為意至是果驗

撈蝦舞

舉杯共觀撈蝦舞尊前拍手笑呵呵舞終杯殘更承
燭問公撈蝦術如何公等莫愁吾網疎今日蝦非前
日蝦吾網雖疎猶可用蝦鬚摧折足婆娑

長篠之後來皆怖武田氏無奮厲之氣神君設宴
使酒井忠次為撈蝦舞歡笑甚娛因共議軍事神
原引未方原例曰此戰必危矣神君曰昔信玄今
則勝賴也何怖之有及戰勝賴果敗武田氏由是
衰

日本詠史

拷吾面

舉君扇拷吾面不愁傷吾面唯恐破君扇扇破碎飛
衆骨破八州豪傑解如瓦吾面雖傷有瘥時君扇一
破難把持

越後謙信伐相聞東屬相者多降轉戰迫小田原
城事陷謙信一日如鎌倉謁鶴岡祠惠忍城主成
田長康不恭舉扇拷其面長康逃歸以忍
畔人多應之謙信班師聞東復皆為相

花窈窕

花窈窕松鬱蒼種花莫種松林際花空零落不比松
殺子預防子傲親骨肉相屠事駿辛國亡家滅與花

萎天下終歸姓松人

武田信玄諱松間花云荅即那刺蒲喀鹿谷坐那
絮列索骨刺爬那索索爾即先奢得兮路葵那刺
葵呢人以為信玄亡之讖信玄嗣子義信勇而得
士心信玄以其逐父惡義信効之隆人之子勝賴
有寵讓間乘之信玄乃下義信於獄誅以謀逆
斬之武田氏亡後亡幾而天下終歸松平氏

扮滿仲

扮滿仲酒間低頭意悲傷不覺老淚落酒觴殺吾愛
子免君子惜哉吾不得仲光

神君已廢夫人關口氏世子信康私迎賓之岡崎
關口氏有疾與甲醫減慶森遂萌禍心欲行大事
立世子勸之與甲通好共滅江以分其地令滅慶
如甲請焉勝賴悅許之已為其備恐世子不從未
日本詠史

發會侍女洩言於織田氏織田氏馳入告之且
狀世子十二罪關口氏伏誅神君使服部正成賜
世子死神君嘗觀教坊幸部萬滿仲者泣然流涕
日忠哉仲光殺子以免君之子今也亡夫左右皆
泣

鼓是頭

鼓是頭槌是手撾鼓為節節何急鼓小槌大皮欲裂
誰圖君槌先鼓折君不見別有鼓聲撼地來天王山

此響如雷

織田右府殘忍好殺遇諸巨無禮屢以非理虐光
秀等嘗置酒高會醉後光秀培其顛作鼓節光秀
怨望日久會播候秀吉之書至毛利氏親來援高
松機會不可失請遣出兵右府命光秀為先鋒及

期發遣時右府以小隊如京師館本能寺光秀夜
襲師令日須先入京師獻軍容而後西師濟挂川
光秀揚鞭號日鮮在本能寺力者有重賞衆始知
其反也味來國本能寺右府放火自殺時年四十
九秀吉討光秀與戰山崎光秀敗績將走坂本夜
典數騎過小栗栖土寇遮道築以竹槍洞嚴而死
秀吉獲其首
泉之本能寺

山陰獵

人絕糧馬絕芻雞狗馬血猶未啜圍城十萬欲為魚
欲戰則戰不怖汝一網打盡術豈無不擇鯁鯁與鯨
鯁海內之魚吾悉屠君不見魚入網中不能脫誰驅
之者山陽獵

日本詠史

三三

秀吉圍高松城灌之城中食盡請和甚勤已而本
能寺變報至秀吉故緩二日而後告毛利氏以實
且曰事既至此和與戰唯公所命不敢辭也毛利
氏將士皆以擊為便小早川隆景獨不可曰吾觀
秀吉天授之才也今而擊之吾未必勝此人若異
日得志於天下則吾屬無噍類矣不如厚遇乃送
質成和明智光秀
食封于丹波龜山

薯蕷為鰻

標一作瓢

薯蕷化為鰻搖尾又掉頭世主英雄寧有主忽見倍
隸作公侯飄標桐識如電掣玄菟青蜓風吹血惜哉
大廈一朝傾不及鰻魚占窟穴

俗間所行謳曲中有薯蕷為鰻藤吉作侯諱秀吉
以鰻為馬標以桐為旗識朝鮮一名玄菟郡青蜓

者吾邦之舊名

七條槍

七條槍爭蹂血竹竿挂頭重欲折夜又玄蕃來索敵手揮鐵棒飛霹靂猿郎一喝發大聲眼光射馬馬辟易嗚呼夜叉性烈若火燃却使舅柴燃作烟

作聞玄蕃盛政既獲中川清秀使人言勝家曰衆甚疲當疾明日而退勝家遣騎趣之盛政傲然曰全勝之威孰敢敵者舅氏老而怯耳既而秀吉大兵至威政望炬光大驚士卒困臥莫能興者秀吉自嶺南過之矢九兩下麾下皆離次叔功加藤清正福島正則加藤嘉明平野長泰脇坂安治片桐且元糟谷武則提槍跳進大破之于清水坂世傳之稱初賴七槍云世稱玄蕃為夜叉玄蕃玄蕃提

日本詠史

三

錢捧過秀吉秀吉目攝之人馬共辟易遂虜之勝家志曰我終為猿郎所困乃與室織曰氏登天守縱火自殺柴田氏亡時有作歌者曰乞舞勿當曉識路辨識逾玄思而喀紫兮豐慶黎勿發識爬苔骨黎勿立

虎祖那而

東海龍

移吾機東海龍東海龍王膽欲破吾豈敢起石尤風老猿來奪金箍棒與公前後謀龍宮似公面名悟空非公似猿猿面似公

豐太閣將征北條氏使長束正家督運大基舟船時東土梗塞海運未通衆口洶々懼海神作祟大閣咄作戒龍王機以投衆曰投之大洋保無風波民乃應募孫悟空奪金箍棒詳于西遊記秀吉

面肖猿

放虎山

放虎山虎隔不敢恣號怒吾有成算汝何知且看談笑收與羽虎不敢怒非虎怯更有猛獸猛於虎

小田原孤危者震怖爭送款于秀吉伊達政宗從百餘騎赴行臺秀吉使人責其專橫命悉致其侵據之地政宗謝曰臣死生唯命況土壞乎秀吉曰卿狙小戰未睹天下之軍容也乃自與臨絕壁使政宗持刀隨後指點天下之軍容以示之然後還歸左右曰是放虎深山也秀吉曰我示之堂々之陣彼既栗奉命之不暇焉敢與吾抗不血刃而定與羽非汝之所知也政宗退謂其人曰秀吉殆天授吾矢不攜貳矣

日本詠史

三

豐公拳

豐公拳源公肩千載悠悠創業友公肩唯可受尊拳公家舊族遍東州一呼祖肩皆為劉此拳之外無寸壤吾族比公贏一籌

秀吉觀於鶴岡命啓賴朝祠龜直上肅之曰子矣於流竄孤起自行伍俱不階寸土而能得志行于天下但孤為寒族子則華貴故其成功較有難易是孤所以贏一籌雖然我創業之友千載唯子三指像肯而出

日本刀

置鞍可比長白巖投鞭可絕鴨綠川日本刀斬日本

狗。春燕巢林人盡走。神兵當年遠飛鑣敵崩角降。及不膏。九泉倘遇卑彌呼。龍顏定怒汝實孫。斬日本狗。猶可怒汝何。鱗我日本刀。

長白山名鴨綠水名皆在明韓之界漢史稱神后為卑彌呼神后征三韓事已見于二面說注

讀封冊

讀封冊。相公側耳使側目。不致降表致封冊。叱汝吏官莫復讀。裂冊擲還使者頭。使者有舌與頭縮。嗚呼猿郎猿。愧死鹿苑鹿。

朝鮮之役和議已成秀吉引見明韓使者於伏見使僧承允讀其所贈冊書至曰封汝為日本國王

日本書史 二十五
秀吉大怒取冊扯裂之曰吾掌中握日本欲王則王何待汝之封乎和議復成足利義滿贈幣物於明請其冊封後當金閣於北山而老焉焉鹿苑院

猴而冠

肚內有塊物。塊物不除肚欲裂。引刀割肚塊輒出。龜形鷹紫色帶血。嗚呼肚內之塊不難除。彼猴而冠可何如。

越前侯丹波長秀為人質直雖羽柴氏起自寒微粹出已上重其復大讎屈意從之及損其織田氏自為盟主積不能平竊欲除之以興織田氏病其力不能辦徒負叛名以死居恒鞅々夙有痼疾晚節殆不自支每言癰塊欲殺我此亦我仇也卒引刀割肚剔出塊物龜形而鷹背刀癰正在背一時

哄傳奇之秀吉命醫員藏之

畜生塚

婦牝雞兒孤豚。更教道犬守家門。可恨貽厥謀太疎。猿郎不獨面背猿。凶豎渙色罪雖重。何事獨留畜生塚。

豐太閣有寵姬曰淀君太閣薨于秀賴幼且愚淀君溺縱參龍臣大野道大掣肘外政將士解體遂至于亡初大閣以秀次為嗣秀次為人昏虐日事敗遊菊亭右府暗秀次女美而發秀次娶焉其先夫之女亦美又取之母子並寵太閣深惡之又博求名妹凡以珠色聞者皆逼而渙致淫樂極醜石田三成又從諛之太閣怒併秀次妻妾三十餘人皆處斬瘞尸於一坑標曰畜生塚

黑百合

左手倒握綠雲髮。下瞥綠雲刀下落。冤血化為百合花。幽怨入花花色黑。唯為此花黑。遂使君族赤。

豐太閣封佐々成政于肥後曰先世之熱不可廢也且戒曰善拊諸城館主慎勿暴民成政多欲而寡恩既就國下令諸豪勾檢民田境內驛騷土寇大作諸豪祐之成政苦戰累月粗定之關白怒使入責讓成政至尼崎自裁國除初成政食封於越中監殺其妾名小百合者後以獻黑百合事得罪於北政所及肥後土寇起政所因誅之遂至于國除蓋小百合之厲債命也

高麗門

高麗門。高幾尺。京觀不減坑中。誠如何守門者太豚。

家以不與此門存。只有英名不磨滅萬古多於高麗門。

朝鮮以後加藤清正船載門材而歸封肥後時以爲外郭門今尚存云太閤收前後明韓之獻封于京師方廣寺前爲京觀世呼爲耳墳清正子忠廣有故國除

鯨君耳

不願得封侯唯願鯨君耳滑替還有揣摩存不比吮
離與舐痔侯伯賂遺唯恐後輿馬門前日輻湊非愛
君臭亦非嫌吾所愛者唯銅臭

曾呂利新左以滑替有龜太閤嘗問新左曰汝亦有所欲乎新左曰封侯非吾所敢望唯得朝夕鯨

日本詠史

君耳則足矣太閤而諾焉諸侯見之皆以爲告已陰事恐賂於新左新左因致富焉

日下人

勸公酒盤散藉以葵三葉墓爲徽號使敵懾七道風
羅腥海宇劉興羸蹶變寒暑日下人代木下人傾日
丹心自乃祖君手再捧虞淵日懸之東海扶桑樹

神君祖父善德公時戶田憲光以田原畔公伐之伊奈城主本多正忠邀公享之酒酣薦以葵一盤藉以三葵葉公悅而異之墓以爲徽號今葵草報于此公嘗夢有文在其握曰是且而洛泉無能解者浮屠撰外以折字占之曰是字爲日下人日下人而握之大柄在手也吉莫大焉然握而未啓不在其身或在後嗣也公大悅爲創龍海禪寺左側外國竹枝云天下終歸木下人太閤舊姓木下

蓋弁

取大垣

獻巨柿已兆大垣入吾手撒柿庭中使衆拾衆臣拜
賀皆躍舞凱旋賞汝亦如此五郡十郡任汝取

神君討賊石田三成大柿至岐阜或獻巨柿神君曰大垣已入手撒之地今左右爭取衆皆稱賀時人遂改大垣爲巨柿云蓋巨柿大垣邦訓通也

雉遇鷹

離雉遇蒼鷹伏身匿叢篠鷹不欲搏唯煖爪却搏離
雉同群鳥秋空一舉如雷掣關原原上紛毛血

日本詠史

三八

關原之役筑前中納言秀秋私送款于關東西軍既敗神君命召之及至神君下胡林揖之秀秋膝行蒲伏不能仰視福島正則附黑田長政耳曰秀秋爵位自隆今卒然卑屈醜亦甚矣長政微笑曰離雉遇蒼鷹不得不爾

白黑子

吾取白子汝取黑子算棋兼棋平賊策一局之棋圍
未解運吾籌取彼石取彼石賊若振落我棋唯算全
局勝敵子錯峙何足敵

淺野長政深得神君眷顧每侍圍棋及卒神君大痛悼遂廢棋不復着云神君謂世子秀忠曰兵機如基輪贏之數在全勢矣一局既制勝敵子錯峙何足介意如今西上事在濃尾關原已取巨魁雖

有百真田亦且降服舍
大取細非我所知也

莫捉子規

莫捉子規啼。不若待啼時。子規生兒喬木上。衆禽代
哺所生兒。中有一匹雛。衆禽為見欺。挾兒高飛出求
食。鵝被鷹搏兒亦危。衆禽飛散巢壞缺。子規今日果
啼血。

俗傳豐太閤與神君聯句。以子規為題。太閤曰。那
喀奴那刺。那喀奢氏。乞喀勿。難充々。祇思神君云。
那喀奴那刺。那骨蠻。曉
蠻答勿。難充々。祇思。

一片雪

日本詠史

二十九

要我則殺。要活則活。殺活在手。今如何。吹下香廬下
片雪。一語可喜。吾活汝。誰圖。朱紫被人奪。歸來洗刀
鴨川。水高眠六六峰前月。

石川四初名重之。大坂冬陣。在神君麾下。港出門
于玉造門。獲甲首而還。四驍勇練武事。又好讀書。
善和歌。事平。以其犯軍法也。賞不及焉。遂棄官之。
京師。應于北山。自号文山。又号六六山人。或傳四
已拉敵而仆之。戲曰。殺活在手。即刻若何。敵應色
曰。吹下香廬下片雪。四曰。此敵機捷。亦可愛。遂放
之。因之得罪。

金法馬一

君家金法馬。鑄之欲誰傳。柩肉未冷。被人奪。不獨家

國與山川。馬若有情。馬應泣。匹如辭。漢金銅仙。君不
見銅仙之汨汨化銘。

豐太閤曾作金法馬五十枚。及大坂敗。神君頒賜
其二。於伊井直孝。藤堂高虎。李賀有金銅仙人辭
漢歌。其中有云。空將漢月
出官門。憶君清淚如銘水。

五字訣

莫眎上。眎上多不及。世人戴笠。只於頭。汝輩莫卸心
頭笠。君不見兒孫唯守五字訣。千秋不墜太平業。

神君嘗謂侍臣曰。爾曹欲保家安身乎。我有五字
訣。曰。莫眎上。蓋和音折為五字。曰。字。噫。嗚。弁。那。

附舊作

日本詠史

三十

咬炒豆

咬炒豆。罵英雄。英雄眼孔大。如豆。渾落斯。翁牙齒中。
豆既盡。罵無窮。知否。今日耳。食徒拾翁唾。餘亦罵翁。

兒索餐

兒索餐。婦索錢。一衣賣向平安市。兒腹雖飽。父肌寒。
兒莫泣。婦莫歎。吾有一團和氣。在。茫茫宇宙。搏為丸。

計六十六首。附舊作二首。
九六十八首。

今茲仲夏。余遊浪華。訪小竹齋。几上有山陽翁
所著。日本詠史樂府一冊。時坐有俗客。不能卒

讀。及來京師。患瘡疾。過秋至冬。凡三閱月。愁悶無聊。苦無可排解者。因再借稿於翁而讀焉。再讀之後。覺病除十分之二。不特陳琳瘡風之撒也。樂府詠史者。明李西涯後。有清尤西堂。明史樂府。其他余未多見。至于詠國樂。則以翁為嚆矢矣。蓋翁之於國樂。識出人上。眼透紙背。故其發為詩。率皆落想自天外來。而以自家神力運之。如此六十六首。每首就題命意。不雜他語。而數千百年間。治亂興亡。是非得失。不待分說。隱隱透出。于楮墨之外。何等自在。何等警策。乃知其不棘手之妙也。余既謄一本而藏之。又做其體。連詠六十六首。以補其不足者。客有偕禪家機鋒語。嘲余者曰。再來不直半文錢。余哂而謝曰。翁之錢。取銅於山而鑄之。若余則鑄敗銅。以為錢耳。美惡固不待辨。然是亦不可謂非錢也。客不答。遂質之翁。

文政己丑孟冬望。病中書於京師兌金坊客寓中木齋。

翁未作六十六首前。既有煨芋燒肉二短歌。詠唐宋事。及見李西涯擬古樂府。新用其體。詠本邦事。余亦未作六十六首前。既有咬炒豆。兒索餐二短歌。詠二木儒。及見翁樂府。再做其體。詠本邦事。可謂事相類也。翁之作限六十六首。以應吾州數。今此篇附以前所作二短歌者。六十六州之外。更有二島之意也。大齋再識。

子玉未醉。恂々如鄙人。其既醉。號呶起舞。使人頻顧。及此。豪出。觀者始驚其為奇才。不識何暇若讀書若作詩也。一夕質諸子玉。則笑曰。僕第夜多不寐耳。酒則近來成癖。請自今立限矣。余於是知其所以能讀書能作詩。而酒限之果立乎。後來所讀所作。非可限量。信可畏哉。往時履軒先生為余云。才子不足畏。才翁實可畏。子玉尚壯。不可以不告焉。

庚寅臘月

小竹散人筱崎弼僭批

或評素菟詩曰。我讀公詩如讀史。能兼才學識

三長。余於此卷亦云爾。彼翁之評。多先得我心處。直批其評。以代吾筆。請恕。

癸巳臘月 廣謙旨批

予讀邦人詩集。必置卷首六七葉。而不讀。以其有擬古樂府也。是近兒戲。而諸家汲々焉。甚哉習俗之愚人也。今閱此卷。清新奇逸。醒人耳目。但未觀子成詩。不知伯仲孰在爾。元伯亦有新樂府。專諷時事。有裨世教。子主他日試一為之。豈不轉奇乎。

日本漢史

三十三

建題

明治元己官許新鶴

西京

三幸柳馬場

尚書堂

四條御旅町

文求堂

書實

柳馬場御池

文石堂

青山延壽 著

讀史雜詠

慶應二年（一八六六）江戸玉巖書堂刻本

據慶應二年（一八六六）江戸玉巖
書堂刻本影印

讀史雜詠二卷 并附錄一卷

水府

青山延壽李卿著

慶應二年
歲次丙寅
六月五
書坊五
書堂鐫
版

讀史雜詠序

余少時耽讀史傳。至明主碩輔遭逢之際。則如在其廷。而聞其都俞之聲。至於良將偉人忠烈孝貞之事。則如接其人。而承其謦欬。或時夢寐見之。及杖劍遊關西。聞某原有某帝陵。某野有某人墓。某像某碑在某地某祠。則跋履山川。披荆棘。踐蒿萊。以訪之。其問長篠也。採甲將斷碣。剝苔檢字。導夫訝之曰。君得無甲士之遺胤乎。何其搜索之詳也。其癖古如此。但性不文。尤短於詩賦。每弔陳蹟。尋遺址。拜陵墓。謁神像。懷古之情。填于胷。而風雅之調。不暢乎辭。常以為恨。今讀青山李卿讀史雜詠。凡曩昔所經歷之東海。東山。五畿。山陽。南海之古蹟舊址。哲王英猷。賢將之頌。卓行奇操。俊乂之贊。皆見於詞章。大率予之所欲言而不能者。筆到意隨。何翅麻姑搔痒。據其附錄。自注李卿本欲訪賢哲英豪之陳跡。謁其祠觀其碑。以有所題咏。而羈於官束於法。而不能遂其志。故就史咏懷。以成是卷。如

讀史雜詠

序

此則其情懷適與予同而其能不能則有相反者也。昔人有好游湖山欲摸真而五指拳曲不能秉毫者其友有足跣而巧描山水者乃口授指畫囑之以寫已所觀皆如其意乃相得以娛焉。予之於季卿殆乎有類于此及其請叙欣然題之。

慶應紀元乙丑九月

昌平學儒負鹽谷世弘序

讀史雜詠

序

二

石齋高豐珪書

題辭



詩有詠史。蓋始於漢晉。今讀其詩。皆有所寄託。非專詠古人也。專詠古人者。始於唐。唐人胡曾有詠史詩二卷。余嘗怪其詩殊無精彩。不類唐人。何以能流傳至今。豈其用心之苦。有不可得而磨滅者邪。李卿頃以讀史雜詠示余。余不知其工拙如何。然史學先人餘業。李卿用力不為無由。而又著之篇翰。以備遺忘。亦不為無益。夫胡曾唐人也。然專詠古人。至百餘篇。則不類唐人。勢使然也。今李卿又踐其轍。何以能工。然至其用心之苦。則未必減胡曾。又安知其不傳於後世哉。

安政丁巳人日

愚兄延光題



男延年謹書

讀史雜詠卷上

水府 青山延壽 李卿著

五瀨皇子

皇子 彦波瀲武鸕鷁草葺不合尊長子 神武帝兄偕征長髓彦中流矢還薨於紀伊因葬竈山神聖猶未起擾擾大八洲 皇孫降自天區域漸肇脩遐方與幽裔猶未被 帝麻訖訖 諸神孫丕承宣大猷一征清紫海再征定備州百勝非謀善養銳兵暫休潛伏已三歲一舉方遏劉長髓爾何者不倒戈順投想見五瀨王贊戰一何道皇天未悔禍踉蹌

讀史雜詠 卷上

藤原東湖曰
紫雲山神
神武後詩曰
以此何似
神一坏事殊
而感同

長冠雖王沒猶有弟王志豈不酬王弟實神武再舉洩王仇豪宇翕清廓丞黎咸歌謳雖由王弟聖焉知非王謀況王尤尊長勇猛才亦優臨死猶慷慨撫劍凜清秋吁嗟草昧日大功疇能傳綿綿三千歲於今仰冕旒竈山知何處無人薦庶羞

豐城皇子

皇子 崇神帝長子 帝命皇子治東國 景行朝以王孫彦狹島王為東山道都督道薨東人傷王不來竊取其屍以歸葬焉蓋東人追思先王之德也而古史缺略其績無所考可惜也

曾聞怨毒甚墓木猶發掘誰知盛德後死猶愛其骨乃孫猶愛戴乃祖知何如乃祖實賢王節旄鎮東隅撫宇樹嘉政誠孚及豚魚蚩蚩魚肉民一一被吹噓皇化及遐方王功真卓絕欲贊王大勲難奈墳籍缺後來小碓王一征靖東陸雖由皇子武先鞭非王誰餘慶及孫子孫子皆英哲一孫定蝦夷一孫靖胡羯世世濟其美無乃王餘烈之景行朝御諸別王定蝦夷之亂應神朝荒田別伐四世之孫也

稚郎皇子

皇子 應神帝少子立為太子 帝崩讓位於皇

讀史雜詠 卷上

兄皇兄不聽相讓三歲知皇兄志不可奪自殺太子明叡姿前聖合符契妙年師真儒夙窺天人際叢爾高句麗知我彊難當表辭故嫚言欲欺我本強我邦有神人豈受汝譟張片言凜生風貢使驚且惶聖衷常有眷東闡正儲位兄賢臣欲避恐傷慈聖意隱默不敢發一朝展高義弟讓兄亦辭此座誰復蒞操守何爾烈一劍誓宿志嘗讀南朝紀不覺淚沾襟苟能師王意翠華緣何南一念私大寶神州亦陸沈

磐坂市邊押磐皇子

皇子履中帝長子、及正允恭二帝皆履中之弟也、安康帝允恭之子、於皇子為從弟、安康嘗欲讓位皇子、蓋以其嫡嗣也、肩輪之變、雄略帝又以允恭子履位、忌皇子而殺之、皇子之死、有仲子殉之、有使主父子奉其孤、皇子之賢可知矣、終之二王子皆昇天位、天道福善、蓋昭昭焉、王是真皇嗣、宜照臨萬邦、偶遭世逆、遭顛沛罹禍、袂宗英誰若、王帳下皆忠良、使主奉二孤、殉難有仲郎、豈弟神所佑、後嗣果熾昌、藐諸兩稚子、昇平二天皇、

讀史雜詠 卷二

舍人親王

王、天武帝子、文武朝奉敕、修日本書紀、

稚宮置國史、川島撰、帝紀邈矣、二千歲終皆歸亡

是纔存、太子撰、全勝金匱書、古風稍可徵、體裁猶或

粗、後來舍人王健、筆主記載、雖有浮誇、終之垂百

代、太祖崩、皇業殺伐、我武揚、崇神敷國本、景

行營四方、皇后實雄武、神威振絕海、胎皇修文德、

仁德亦繼、美偉哉、群聖巡、苟無王、討刪千有餘年、

間、幾為鴻荒看、靖難負、直筆婉、微為君父、闕紀、君莫

尤、猶有朝廷語、書紀以、天武紀、直繼、天智、

桓武諸皇子

三皇子、平城嵯峨、淳和三帝也、葛原親王、

萬多親王、賀陽親王、葛井親王、良岑安世、

遍照安世子也、賀陽王子亦有忠貞王、

延曆千歲主、孫子皆鸞鳳振振、三皇子、九天徐、翱翔

譜學推萬多、射技稱葛王、賀陽富巧思、遍照妙詞章、

良岑與葛原、皆是萬夫望、餘王亦落落、誰非一時良

維城、屬宗子長仰、天業昌、

忠貞王

忠貞、桓武帝之孫、容貌甚醜、志尚高遠、清和

讀史雜詠 卷上

朝歷任諸州、建學教民、風聲大著、

皇孫出、能吏實是宗臣、模吏治、崇儒雅、心勞為催租

鄉校、勸生徒、德化遍一隅、到處人額手、欣見使君旗

子羽、貌雖醜、邵伯政又殊、忠貞非王誰、王名本不虛

廢太子恒貞

太子、淳和帝第二子、幼岐疑、能讀經史、仁明

帝受禪、立為皇太子、後以讒廢、

山嶽鍾秀氣、列宿讓光彩、令德夙升聞、青闈奉甘旨、

臨學舉隆典、祖訓實尚齒、預期太平象、佗日明天子、

青蠅何紛紛、一朝逢飛毀、從容處危地、泰然甘廢徙、

藤公託椒房輔佐焉用彼王寃猶不雪鄼侯知徒爾
太子之變藤原良房奏之
文德帝嘗期良房以蕭何

重明親王

王 醍醐帝第四子好學有才名性至孝 帝之
崩哀慕不已心喪三年

吁嗟殷宗後諒闇誰接武漢唐千年間晉齊才二主
猶誇文明國尊大稱中土 神州開國日捷伐振威
武中世資文教郁郁仰九序維王宗室長真是國藩
垣遠追殷宗軌哀慕感蒼旻百世聞王風可教薄夫
敦賦性較豪爽稍招時人喧大本已如此瑣瑣何須

讀史雜詠

卷二

五

論

前中書王 後中書王

兼明親王 醍醐帝子 圓融朝為左大臣以讒
退營莊小倉又為所沮作菟裘賦以寓懷世稱中
書王 具平親王 村上帝第七子能文工和歌
兼通陰陽醫卜諸藝世呼為後中書王又稱六條
宮

王風稍不競直道鬱難伸彼狂負門閥跋扈席而冠
奪我公孤位不許首丘槃扶桑忽有影浮雲蔽清曦
叢蘭秀幽谷秋風破芳芬吾讀菟裘賦古今同一嘆

卓矣六條王文采雕鳳鸞同出 天潢派交主風驗
壇美哉兩中書高躅誰亦攀

以仁王

王 後白河帝第二子惡平氏專與源賴政起兵
不克賴政族賴朝奉王令旨終滅平氏

一劍定劇賊神勇推碓王間關扶 王業接武有護
良悠悠二千年緣見兩皇子王雖非其倫志氣或一
軌慷慨事不就普天推主盟白旗何悠揚實藉王威
令誰道旭將愚其美安可壞敷奏是正論萬古日星
挂義仲嘗稱王功欲立王
子以為主事不行

讀史雜詠

卷上

六

護良親王

王 後醍醐帝第三子帝誅高時王謀居多日本
武尊以後勞王事者唯有王死非其罪天下寃之
皇室遘陽九黑氣纏京畿臣主同奔蕩中原豺虎馳
維王實天縱英略蓋九圍叱咤驅驅兒風雲從指麾
樓槍倏滅迹日月耀旂旗老幼擁道周爭仰盛朝儀
神器終有守鐘簴亦不移區宇再造功誰爭皇子才
與望實所愜主豈更有誰我 皇耽鴆毒禍水是龍
祭咫尺為萬里剝肝無由辭精誠感天地白日潛光
輝痛哉帝狼窟萬死去如遺老賊曾寒膽一身繫安

愚廣云沒羽
之技射潮之
力四云吹蕭
擊筑之善清
夜讀之萬山
俱紫者

危、皇室終偏安、沉寃伸無時、志士堪慟哭、長失中興機、

後醍醐帝諸皇子

後村上及皇太子恒良成良親王寵姬藤原氏出也、尊良親王、宗良親王、懷良親王、

芝蘭生宮庭、實是邦家瑞、天步方艱難、出受蕃宣寄、維帝與嗣王、賢掩中宮伎、宗良與懷良、各當方面、帥懷良最後出、始終執大義、尊良出嫡長、壯烈真絕類、况又護良功、堪比碓王懿、可憐諸王賢、誰非廊廟器、大本苟不振、崎嶇何攸遂、後先迭喋血、不拯帝

讀史雜詠

卷上

七

業隆

野見公宿禰

垂仁皇后之崩、帝使羣臣議葬儀、公奏以土偶為殉、先是、帝禁殉死、至是以公議為定制、

古人重恩義、一飯尚致死、况是君恩重、棄生我所喜、不然、神聖世安有用殉理、其原非不善、其弊終散、我皇心不寧、咨諏逮與臣、維時野見公、出意一何仁、是土搏為馬、是土搏為人、凡百器無玩、累累遂道陳、生人長不用、誰為黃鳥戚、君臣共濟美、千歲仰至德、嗚呼大賢後、予知不聞寂、果然管相公、崛起佐

衣職中塗、遇蹉躓、後嗣愈滋殖、鎖鑰主北門、於今冠侯國、

田道間守

垂仁朝遣至常世國求香菓、及還、帝已崩、間守至伏見陵、慟哭而卒、

一鷁凌鯨濤、奉使常世邦、常邦知何處、萬里望汪洋、飄蕩幾歲月、喜見神僊鄉、仙鄉何所有、四時菓常香、非棗又非桃、其味如瓊漿、一嚼長不老、何須練丹方、持還獻我君、事往空渺茫、鼎湖拜遺弓、慟絕泣彼蒼、君看晁秘監、留學何所受、寄語好秀才、曾讀我史否、

讀史雜詠

卷上

八

蓋李卿得意處

橘媛

日本武皇子東征至相模、海上遇風、船將覆沒、媛白曰、海神為祟、妾請以身贖之、言訖投海死、

皇子東征日、大旆至海坳、東望水彎環、如鳥奮雙翅、王曰咄小湊、前洲躍可至、風姨忽鼓鞭、波濤洶騰沸、王舟歛、斂揚翩、如秋葉墜、中軍貔貅、士勇銳何所施、維王有淑媛、此時又陪侍、肅拜前、致言海神實為祟、妾身不足惜、一死代君累、低頭言未畢、投身一何勢、至誠動天地、陽侯已逃避、水天共一色、千里澄瀾翠、

楓清云、第一沖心自隱風、致婦人、好談論、結案

勅住有力

婦人在軍中、由來損兵氣、何料纖纖手、却辨此大事、皇子凱旋、回望揮涕淚、至今吾孺語、猶呼八州地、大臣武內公

大臣事 五主執大柄、在官二百四十四年、不詳其年壽、

總角圖畫上、曾識武內公、鬚眉欺霜雪、蒼顏含和容、壯歲閱史策、初悉大臣功、公生今 天弘、少年已豪雄、奉命窮遠地、方見規模隆、慎恪輔聖后、廟勝決大策、萬艘衝風濤、一舉靖絕域、付托奉稚乳、韜略定反仄、定命侔伊霍、討讖隣禹稷、一心佐 五主、歷年過讀史雜詠 卷一 九

真根子

應神帝信讒、遣使殺武內公、時真根代公而死、衆煦尚漂山、積羽猶沈、船何況萋斐語、近出同胞親、岌岌武大臣、命輕秋毫顛、倘無真根子、焉能得生還、善哉真根子、一死事兩全、上掩 聖主、類下脫忠臣、冤嗚呼真根子、一死重太山、

荒田別 阿部比羅夫

荒田別 應神朝討新羅、定其餘七國而還、比羅夫 齊明朝為越國守、擊蝦夷肅慎、克之、

神后捷伐後、皇化被馭、古新羅持負強凌弱、逞狡譎、荒公受 帝命奮伐、入帛穴、渠酋已泥首、小國爭上謁、矯矯越太守、北門擁麾鉞、蝦夷與肅慎、自古事侵軼、太守展壯猷、孤軍張殺伐、一征定北塞、丹沁及遐絕、膺懲伏二將、海外實有截、一靖海西虜、一夷塞北孽、相距四百年、後先爭輝烈、王威振絕海、四夷咸來賓、雖由 王家盛、亦繇鷹揚臣、想像食肉相應侔、帝頭人、

讀史雜詠 卷一 九

阿直岐 王仁

阿直岐百濟王子、通經典、應神朝來朝、帝嘗問汝國有賢於汝者乎、曰有王仁者、乃徵王仁、王仁來朝、獻論語、稚郎皇子實從而受學、

萬里開洙風、大東揭朗日、二子著先鞭、其功誰能匹、我邦本有道、古來尚質實、質實非不美、光輝未充溢、取彼以為善、亦是仁之術、先皇實知此、此故招其逸、阿直亦誠臣、坦然無妒嫉、俊秀推王仁、精理益詳悉、聖經無津涯、先講洙泗訣、一傳至皇子、讓德並日月、後來言大臣、舉世推贊述、贊述果何事、空傳唐文

應神朝五論
付體
德園云先好
意焉最缺入

物

田道

仁德朝伐新羅有功已而伐蝦夷不利死之田道妻聞之慟哭而卒

航海討不庭堅壁養精銳擣虛致奇勝實因公大計一戰徂奇勝或招莫救怙東伐終不利千慮致一蹶閨秀亦濟美貞烈激千世好使澆漓俗更知重伉儷的戶田宿禰

仁德朝高麗貢鐵的公射而洞之麗人大驚後奉使責新羅闕貢羅人懼奉命蓋亦一箭之威也

讀史雜詠

卷一

二

蠢茲小狡虜其情懷輕侮鐵的瓦上貢敢欲試我武大庭引虜使鴟鷂簇廊廡清風灑珠簾紅日耀殿宇決拾推的公臨場何容與一發已如破鐵的飲白羽虜人破心膽天顏帶春煦莫道一箭微折衝在樽俎

縣守

仁德時吉備中國川島河有巨蚪行旅被害縣守入水斬蚪悉斷其種類河水為赤

皇化被四表萬姓浴聖治况是近畿地焉得育魍魎洋洋川島水盤渦多分岐老蚪為窟宅卵育種其兒

行路被毒蠱人人為長嘯時無良守令誰投告蚪辭縣守知何人勇悍如熊羆聞之髮指天撫劍立河湄老蚪亦怖膽竄避知何之白日澹無光緩流寒不漪單身入其窟醜類無復遺河水赤三日宛覺紅雲垂其勞實難滅賞典何參差願是史闕文空遺壯士規

難波日香蚊

日香蚊事大草香皇子安康帝信讒殺皇子日香蚊傷王無罪不勝悲憤自刎死其二子亦從死雄略帝即位求其後賜姓大草香吉士

讀史雜詠

卷上

十二

讒人交罔極竟蔽我皇明微臣可奈何悲傷割五情君父寧可讐一死表臣誠死則共其苦生便同其榮吾爺已如此兒何肯求生歸死甘如薺一門忠孝并英主表高節長傳吉士名

佐伯部賣輪

仲子一名

賣輪事押磐皇子雄略帝殺皇子賣輪抱屍呼號帝併殺之顯宗朝改葬皇子賣輪與皇子同坎不可辨別即作雙陵葬儀如一仁賢朝以賣輪後為佐伯造

仲子亦誠臣操同難波節於波表臣義此便遭慘烈事均出一帝刑賞何爾別天道本昭昭忠臣豈湮

沒、幽埋曾幾日、崇封及泉窟、遺墳擬、帝陵墳樹鬱、
箭勃、看波僧道鏡、狐媚竊王號、一朝桑田變、竄極有、
誰吊、

日下部使主

使主事押磐皇子、蚊野之變、使主與其子吾田彦、
奉王之二子、竄伏、已而恐誅、自縊、蓋使主之意、以、
為吾事皇子、日已久、人之所知、吾而不死、恐并害、
王子、故自經、以絕其蹤耳、吾田彦始終奉王子、固、
執臣節、是亦可以為一證也、

天步多艱難、吾王罹憂虞、帳下皆禽奔、何人護龍雖、

讀史雜詠

卷上

三

老臣為之前、吾兒為之後、爺是為程嬰、兒便是杵臼、
一家出二士、成就真、天皇天皇實、明敵舊勞豈敢、
忘、優渥禮老嫗、旌表及朽骨、田彦知何在、其功真難、
沒、

巴提便

欽明朝巴提便、使於百濟、雪夜其兒為肅所取、巴、
提便行認肅蹤、竟刺肅殺之、

長程紅日沈、晚投海濱驛、朔風吹密雪、霏霏入窗隙、
呼兒兒不應、斑斑見肅跡、中情鬱如焦、瞋怒皆欲裂、
行時攜兒至、去時亡兒還、此恨倘不報、何顏復見人、

縱橫認肅跡、終慰亡兒瞋、神州自古昔、風氣尚勇、
決臣非輕、皇命、恐辱武夫節、

物部公尾輿

欽明朝百濟獻佛像、帝欲禮之、公奏、國家恒敬、
事天地社稷、今拜蕃神、恐非、神明之意、

皇風稍不振、異教始顯赫、爾來一千年、士庶多陷溺、
賢如小松公、不免佞佛癖、清如西行師、猶來悖倫責、
況彼蚩蚩者、奔波何足、適蕩蕩、神聖道、一髮引鈞、
石、何人撐、橫流須要霹靂力、偉哉物部公、謹議闢邪、
辟、已在千載上、預知百世瘡、伽藍付一炬、鬼教頭剪、
讀史雜詠 卷一 一〇

讀史雜詠

卷一

一〇

調伊公儼

欽明朝將軍河邊瓊、五代新羅輕進失利、全軍皆、
降、伊公儼獨奮、罵死之、其子舅子亦抱父而死、
主將失戎律、旌旗低不翻、慷慨獨不屈、始知國士尊、
咄爾新羅王、忘我再造恩、汝肉不可食、汝幸啖我贖、
我寧為義鬼、不為校虜臣、兒子亦孝烈、不醜阿爺門、
區區雞林王、今日何須論、羞殺河將軍、不及使君賢、
上毛野形名妻

舒明朝彤名討蝦夷不利為賊所圍其妻親佩劍
出戰令婢妾鳴弦以助其勢賊遂散走

蝦夷負險遠魚休抗 皇命主將經軍律遐征過暴
橫締突無成算三軍咸奮逆孤旅遇重圍主將鬱憂
柄朔雲滿寒空頽陽失輝映鼓角凍無聲緜帟罷不
競何料閨中秀脫腕洗粧靚慷慨一何壯揮桴新獅
令士卒起裹瘡爭先衝堅勁苦戰得大勝竟能定梟
獍為國護吾夫非為求金印歸來拋弓刀笑對菱花
鏡

大伴部博麻

讀史雜詠

卷上

十三

博麻筑紫軍丁也 齊明帝百濟之役為唐兵所
虜在唐幾三十年輸忠 本朝 持統朝得歸
大白失光芒我兵皆奮軼博麻獨何人志氣貫金鐵
為國鼓其身中夜肝肺熱奴虜三十年千辛為誰說
往時髮如漆還來鬢似絲唯有一心丹炯炯涅不緇

道公首名

文武朝為筑後守攝肥後事勸勵生業教督耕種
又興陂池以廣灌慨人蒙其利及卒百姓祠之
彼亦人之子疇不辨妍媸本為饑寒切竟作無賴兒
道公古良吏為之設良規孜孜務教督指畫剖毫釐

邱隴細麥秀金穎正離離汚邪藝粳稻秋露含涼颼
瓜瓠蔓經畦雞豚亦得時溉灌無天旱汪汪水為陂
勞倖教民稷功勝治水圭治化洽二州政聲垂百祺
遺廟無由問隔在天一涯

文部路祖父曆 安頭曆 乙曆

元正朝父石勝坐盜官漆斷流刑三子長十二少
七歲詣官請為奴以贖父罪

阿爺觸王法一朝趨海隅無父何所怙可憐三子孤
大者髮纔晞小者吻尚濡再拜扣北闕爺非跼跼徒
積年厭貧苦難完三子襦所以私官物爺過即兒辜

讀史雜詠

卷上

十六

力役贖吾爺請輸三子軀九重一破顏公卿皆嗟吁
父是脫重譴兒亦免官奴走來如黃犢不知覓梨無
贈右大臣藤公百川

孝謙帝崩公建議立 光仁帝實 天智帝裔孫
也其後抗言立山部王子緒嗣亦以直言顯

四家藉舊業貂蟬盈廟堂誰知華紱門又見出忠良
相公真秀出沉毅才難量割封護直臣定策立 聖
皇公論議始愜皇胤永盛昌風雲際會日披瀝露琳
琅垂紳決大疑直氣撼玉牀力當排萬牛竟回日月
光誠操堅金石松柏爭老蒼乃子亦忠亮實挹鐵石

勝抗言論時事直節凌秋霜何事群兒愚橫是生否
滅額將天河水為公洗汚名

和氣公清麻呂

孝謙朝公以忠烈顯嘉永四年三月朝廷褒公
之忠贈官賜號讓王神距公之薨實千餘年

堂堂和氣公實是萬夫雄天子感忠烈千載猶褒
崇憶昔垂簾日妖祲蠱聖衷朵頤九鼎重矯命宇

佐官公時奉使幣誓死報祖宗神州天地闢君
臣已不同聖主與神孫繼繼傳無窮妖腰魚亂

領須勞斬馬鋒此是神所教敷奏稟生風滿朝為失
讀史雜歌 卷一 十二

讀史雜歌

卷一

十二

色九重回聖聰老狐膽已落九天日再中忠精貫

白日神意識至忠烈風雜雨電天公驅靈霍身出萬

死餘名垂百代中狂猾骨已朽僭竊事亦空衣冠拜

冕旒萬國咸朝宗依然舊天地於今仰鴻功

阪將軍田村麻呂

桓武朝屢征蝦夷每出有功東陸遂寧

自古化外地叛服本無常耽耽磨牙齒乘隙便披猖
邊徼羽書急聖主方憂傷桓桓阪將軍爭推膂力

剽便眼如蒼隼鬚髯挿金芒登壇總元戎薄伐及朔

方朔風翻旗影鐵衣帶寒光萬騎聲肅肅鉦鼓響鏜

鏜白羽纔一揮百萬心已強犬羊先奪氣脅息懷逃
亡王師做多殺本意遏冠攘勁騎掃群虜威同卽驅
羊綏懷疑時雨威令嚴秋霜獻俘已奏捷築城還撫
降猛氣振朔北威聲冠搏桑塞外役方銷海內弓長
藏天子頻傾注寵錫方贊襄倉卒靖國難指顧掃
攬槍生為百萬將死作閻羅王於公固易事何足以
表彰烈氣結不散風雷護帝鄉栗野一堆土還共皇
祚長

藤原高房

淳和朝任美濃介郡有陂渠堤防壞決相傳有神

讀史雜歌

卷一

十八

不欲過水逆者死公脩之曰苟利於民死不恨

渺渺千畝渠四時水潏潏村村蒲魚足灌溉被鄉縣

歲久堤防墮叢葦空葱蒨傳言渠有神不欲脩堤堰

堤堰一脩葺主者有災譴是故前太守因循不敢繕

磊磊藤使君真是邦家彥一身苟利民百死予不恨

千鍾揮成雨万頃翠歛歛境瘠與荒區一一得耕佃

村犬無夜吠百里治化徧想知解綬日攀轅相留戀

橘氏

仁明朝父逸勢坐事遠流女徒步役之監吏叱之

乃晝止夜行及父死踰眺葬之廬於墓側

天門九重隔，爺究亦訴誰。追蹤赴東州，一朝不忍離。
夜聞豺狼嗥，旦恐官奴嗤。髮絲亂紅頸，無復鈿粉施。
遐阪遂色養，百年擔不睨。白日易偏照，賤妾亦誰歸。
河水尚可竭，妾淚無盡時。山石亦可轉，妾心長不移。

衣縫金繼女

衣縫金繼少喪父，泣血獨與母居。邑有川人病涉，
母子買材造假橋，積年不止。仁明朝表門閭，

溶溶惠賀水，如帶遶荒邑。冬日水及臍，行人苦利涉。
乳管金繼女，孤寡相倚立。至性如阿香，異行誰又及。
施財造徒杠，歲歲勞脩葺。行人皆歡忻，不憂無舟楫。

讀史雜詠

卷上

十七

金閣薦冥福，不補生人急。箇是真菩薩，後來誰承嚴。

閑院藤公冬嗣

淳和朝任大臣，置施藥勸學兩院。養寒族，教子弟，
嘗建佛舍，以祈福祚。子良房，良相皆賢。子孫大興，
閑院。四朝老，曾秉輔佐權，條奏論化原，調和見一。
斑藥院養貧，遠在范公前。建學教子弟，墳典要力。
研有德，必有後。孫子實詵詵，大兒與小兒，褒然稱世。
賢，乃孫亦俊英，在勞輝史編。忠蓋天所佑，尊榮豈偶。
然誰言一字力，贏得孫子繁。

紀夏井

文德朝為讚岐守，政化大行，任滿百姓詣闕乞留。

吏民贈遺一無所受，唯留紙筆。母亡執喪三年，

吾慕紀肥州，卓犖廟堂姿。弊履見天子，不顧俗子。

嗤眉目，明如畫，一見聖主知。此是千里蹄，空受鹽

車疲，擢冠多士，機務多補。一麾守海邦，夙夜勞

臣思，拮据求人瘼，吻嫗養老羸。政平民皆舞，令簡風

速移，使君未來日，闔境告朝飢。使君臨此地，千村有

餘貲，我有荆與棘，使君實伐之。我有蟲與蟻，使君實

過之。畏侔鬼神威，恩同父母慈。穎州借寇公，二歲勞

卧治，龐眉餞劉寵，纔留一錢資。菽水盡歡樂，慰此堂

讀史雜詠

卷六

二

上慈，勲勞如使君，賞宜及宗支。奈何為弟傲，空棄醫

國醫。

大辨藤公良繩

清和朝南年名江音人，藤基經班皆在大辨下。大
辨曰：彼皆才賢，吾不肖，豈可居其上。遂稱病。

善男燒北闕，還誣源大臣。源光陷菅相，蕪家失天親。

營營何所為，實由爭秉均。溫溫藤大辨，獨見古人純。

南公與江老，一時推偉人。北家少將公，亦是廊廟珍。

願余斗筭器，恥居三子先。謝病深閉門，避榮就下陳。

謙挹無痕跡，高義何嶙峋。吁嗟澆薄世，奔競爭要津。

全季卿以讀
昭宣公基經

焉得如公者挽回風化淳吾詩雖不工請君書諸紳

昭宣公基經

公事 文德清和陽成光孝字多五朝任大政大

臣廢 陽成帝立 光孝帝藤氏攝關以公為始

皇家猶未衰華門見良宰秀氣貫斗牛局量吞河海

風度凝且遠雲岑肇秋旻夙負台衡重密勿仰經綸

調和致時雍廟略宣禍亂任是如阿衡地實似周旦

精鑒懸冰鏡造次知真龍垂紳定大計舉止何從容

乾坤已變換不用大聲色人安如山嶽尤見公大德

却愛調梅暇往注耽清吟高誦西山句三嘆有餘音

讀史雜詠 卷上

二十一

藤帥府保則

清和朝為備中介風化大行民愛之如父母出羽

之亂攝政基經舉公命以招討之任

吾希藤帥府肅然廊廟器固宜調鼎實却勞百里治

易簡人無訟訟庭生蒿蓬和風扇百邑惠露洽一邦

政成去府日垂髻將戴白爭先奉脫酒填塞哀離席

東夷妨 王化猖獗亂邊隅相公信知人煩君勞一

麾孤軍趨帟穴意氣一何烈胸中藏萬甲不用勞尺

鐵拊循推赤心宣布 王家恩犬羊爭投戈納款拜

軍門 王師在安人不戰制全勝千里無遺寇一州

咸平定天威實致此臣是有何勞功盛身益下位
卑名愈高勲庸畫麒麟清風激懦頑卓哉藤帥府實
為千古人

平將軍貞盛

朱雀朝將門反據下總勢甚猖獗公父國香亦為

所殺公擊平之以功任從五位下

藤氏掌洪鈞一家皆拖紳才賢沈下寮狗鼠滿郊閭

終使凶豎子狂悖擬 帝宸將軍資忠純棄官起國

艱於臣則父仇於法是不臣老將諳兵機鬪智不鬪

人潛蟄九地下誰得窺機關姦驕一開門神兵下九

讀史雜詠 卷一

二十二

旻八州無立草一時咸風偃那知忠將孝一舉得雙

伸向若無將軍三細何緣振相門怯爵賞纔作五位

身

右府藤公實資

三條朝人爭附道長公獨不屈道長嘗病公注候

鬼憑人曰賢者來不可不避病即瘳呼曰賢右府

赫赫御堂公三世握大權吹噓變霜露榮枯由唇吻

鬼魔亦同物相倚轉纏綿堂公日勞悴鍼石亦無神

右府朝命駕聊問堂公瘡眾鬼忽奔逃不肯見真仙

扁倉何須問沉疴頃刻痊人間呼鬼魔動罵傾險人

鬼魔若休爲知避不用賢

孝僧

僧事母至孝其母嗜魚時白河帝嚴禁屠殺僧不能羞母自往桂河捕魚爲吏所執

已受桑門戒大倫固不顧雖云絕大倫良心何曾除
譬如地中泉觸機即發露舉世奉瞿曇慈悲是先務
數澤禁羅網小惠祈福祚獨憐孝和尚擊鮮養老嫗
新鮮無由求之河爲漁捕忽逢巡邏來誰何縲絏去
僧言吾有母朝夕待吾哺無魚空對案竟日不下箸
無魚即無母是故犯王度嗟此兩頰尾縱放豈能啣

讀史雜詠

卷上

二十三

顓以此頰尾贈母脩菜茹此顓苟得遂甘心就刀鋸
言辭一何切淚與言共注彼已絕倫理不免嬰兒慕
人本非木石誰能無愛惡佛亦人而已何事說頓悟
伊豫守源賴義

後冷泉朝賴時反公受命將兵攻河崎柵會雨雪
官軍大敗已而大舉殲之

胡雖負兵力狂妄懷輕蔑將軍赫震怒奉詔問驕賊
愁雲慘不開敕降朝雪旌旗凍如繩鐵馬蹄欲裂
飢氣橫胡霜白草塗碧血回顧問傷夷壯士爭效節
利鈍本常事殘類安得活再駕整萬騎一舉夷巢穴

窮寇未送死跳踉氣咆勃將軍揮白旌陣勢學蛇擊
呼聲撼天地虜軍咸奔軼緩轡勞將士一笑撫素髮
輕騎合重圍天意殄妖孽暴風供驅使虜巢付一蕞
空餘亡國妖金翠粉黛抹將軍不一顧惟思將士烈
辛苦何所得空憐髮絲溼公破厨柵中美女數十人盡賜將士

安倍則任妻

源豫州討貞任貞任弟則任妻見軍破曰夫子將
不免妾義不獨生請先於君乃抱兒投淵死

昨日失一壘今日陷一壁大公已隕命纔保厨川柵
東軍旌旆揚北軍日窘迫顧念妾所天性命在旦夕

讀史雜詠

卷一

二四

又憐掌中珠念念不能息中夜起彷徨泣下沾妾臆
妾寧先君死不忍見君危抱兒投深潭水操凌秋碧
至今厨川水潺潺鳴淒咽

江帥匡房

掘河朝爲太宰帥其家以文學著者八世嘗云
我家文章當關朝家盛衰八幡公亦從受兵法

江家八世業權帥推太宗盛年見標格一時振文風
曾言我家學當關朝汗隆書樓三萬軸何須憂祝
融兒子真豚犬我家文章窮別有金針在付與一代
雄

鎮西八郎爲朝

爲義第八子、驍勇善射、保元之亂、流於大嶼、終領大島、嘗至琉球、子孫王焉、諸島至今立祠祭之、

八郎真男兒、威猛冠今昔、意氣凌虹霓、弓聲飛霹靂、天地昔橫潰、烟塵暗、王國數騎當方面、堅勝千仞、壁笑拈兩隻箭、萬人皆辟易、左府實憤憤、何怪致顛、路隘家耐酸鼻、孤身幸遠謫、此島嶼地、割據戎所、擇一劍唾手起、絕域初霸迹、誰知千載後、威稜猶赫、赫纔呼八郎名、已驅厲鬼、厄不恠島嶼間、至今奉廟、氏間至今注往書八郎名、貼門以驅疫鬼云、

讀史雜詠

卷上

二十五

中納言平知盛

壇浦之役、西軍不利、宮女泣問狀、知盛笑曰、事固當如此、今復何言、乃自掃除舟中、自刃而死、

相國本多福、生子亦麒麟、前有小松公、後有中納言、臭味雖不均、要是百世人、英雄有逆遭、安可成敗論、堪憐掃蕩志、至死猶不伸、四面皆楚歌、笑掃御舟塵、能登守平教經

清盛之弟教盛之子、驍果善射、壽永之亂、數戰有功、殆得源判官、事不成、投海而死、

月下弄長笛、花底耽歌詞、風流貴公子、爭敵東男兒、

一箭未相送、膽落立島、擊唯一能州人、推忠勇安、驅使摧衄餘、欲抗源家師、大厦方將倒、獨力何可支、羿射還無神、空殪九郎、斯奮闢入敵艦、宿志亦參差、命窮知奈何、兩度逸牛兒、

清原賴業

賴業諳朝儀典故、朝廷每有咨議、引證古今、辨析精覈、嘗讀禮記、表出中庸、據經爲解、

皇家全盛日、西邦使聘通、絳藻艷如春、爭鳴皇家、隆落落清夫子、後進錄奇功、學術究淵源、一洗李家、風道德高一世、鬱爲此道宗、卓哉惺窩翁、千歲繼芳、

讀史雜詠

卷一

二十六

雜

袈裟

袈裟源渡妻也、遠藤盛遠見而悅之、欲劫其母、奪之、袈裟始盛遠代其夫而死、

亭亭山上松、蒼蒼長欣榮、婉孌源家婦、紅顏如薜英、顧盼宛生姿、相逢魂暗驚、妄人起狂想、橫逆誰敢撓、欲絕彼妄念、妾母萬無生、若狗狂夫欲、何顏見眼明、妾心無所極、搖搖如懸旌、與生辱其身、何若死守貞、好言誅夫子、孤衾眠東楹、更闌衆星沒、河漢亦西傾、陰風起庭樹、撼撼動窓櫺、此身已許君、視死甘如飴、

雙淚獨何事，連連下不停。惻惻復惻惻，誰知此時情。
玉碎光不滅，蘭死香逾清。自古誰無死，一死鴻毛輕。
芳魂長不散，至今有餘馨。

杵淵小源太 小官山內膳

重光主富部氏與義仲戰為西七郎斬時重光以
讒廢追至戰所其主已死乃馳敵陣斬七郎奮戰
死內膳事武田氏以譖廢勝賴天目山之敗遂
役死之東照公錄其後

良田嘉禾秀稂莠何驕驕佳卉生幽庭秋氣轉寥條
質直如由也猶招伯寮翹大聖如宣父不免子西妬

讀史雜詠

卷一

二

是故猶介徒抱石或沉河予憐二壯士懷忠亦坎軻
蒼蠅蔽天飛中心誰能察二主早悔悟何曾有蹉跎
堪憐傾覆日始得展異才看彼宵小輩究竟何所為
主亡獨博名二子豈為屑後來有國者莫循二主轍

上總五郎忠光

平氏亡嵌魚鱗於眼為眇挾亡首厠役徒伺賴朝
事覺忠光奮曰我上總五郎也欲報主仇耳

平宗殲西海九族無孑遺孤臣憤所切長絕興復期
懷裏利亡首聊擬仇人顛炭漆壞形體畚築雜賤廝
唯恐眼炯炯或來敵人猜魚鱗亂巖電用意何深微

忠慮云風骨
峻峭如龍虎
態

鬼武大所啓空學博浪椎我是平氏臣來報舊君知
慷慨事不就壯辭動兩儀浩氣磨不盡長看貫斗箕

平氏遺臣

平氏走西海平信兼與平家繼舉兵能伊賀守護
破之既而軍敗家繼死信兼後再舉兵不成亦死
左中太常澄長狹六郎士也六郎為平氏謀賴朝
為所殺常澄祖擊賴朝不就亦所殺平氏亡後平
景清平盛嗣潛匿糾集後皆為賴朝所禽斬

平家奔蕩日壯士爭致軀海島漂泊餘猶見出烈夫
信兼與家繼糾集據一隅常澄簡其髻忠憤懷湛盧

讀史雜詠

卷上

三

校國云漢家
骨肉相戰平
氏則一門亦
勝其下也而
效之所無
也

景清兼盛嗣起滅展壯畧天地有綱常實由數子扶
君看左典既曾蓄十州租當其摧斬時果有壯士無
麾下有名者甘為平家奴視之平氏臣狗鼠食其餘

西行

義清姓藤原勇敢善射為鳥羽帝北面不喜榮利

後遂為僧嘯咏自適賴朝嘗要之問韜略云

忠慮云傳本
况機瑣瑣之
姿

西行鸞鶴性難羈仲霄翰非無濟時策奈此官情間
飄然謝世網去作雲泉身鶯花為吾廬風月是柴關

拈來芙蓉吟高潔如其人源公內多欲何知高潔人
銀袖聊相贈徒作常人看

中納言藤公長方

長方剛毅敢言、清盛遷都福原、長方獨極言其非、
旁人為懼、清盛終從其言、

迢迢九街路、康莊平如砥、鬱鬱南山樹、直幹千尺峙、
八條納言公、沉毅抱剛腸、直節絕荆棘、勁氣凌風霜、
相國握大阿、暴戾如鬼蜮、維公傾危際、謹議折相國、
相國殊歛衽、不似前日狂、苟人為股栗、公意獨軒昂、
我豈觸庸口、本知悔心起、抗言投其機、譬如禹行水、
攘羊子證父、宣父或為非、伯宗居亂國、其妻夙見幾、
吁嗟質直人、愆尤何可免、善哉納言語、三復意繾綣、

讀史雜詠

卷一

二七

讀史雜詠卷上終

讀史雜詠卷下

水府 青山延壽 季卿著

右大將源公賴朝

公起於流徙不數年以平氏定奧羽握兵馬之權天下大勢自是一變以至今云

佐公梟雄姿夙抱興復志遵養時未至深戢凌雲翅相國已老去長公亦殄瘁兒子皆豚犬雄心誰能制一朝得雲雨投袂起海裔八州咸草偃奔走供僕使戲下萬猛士桓如帛壯吳鑑倉開霸府山海壯形勢豈意大原孽如此更昌熾相國葬無處我頭安可致

讀史雜詠

卷下

九郎亦雄傑來會浮島地友愛情可掬感泣灑涕泗今日吾見弟猶視故先帥將壇真得人忽託西討議一戰摧木曾再戰拔赤幟區宇戡定功半出九郎智高枕曾幾日排擯無不至日夕奉北難不覺老狐魅浮島亦在彼英雄何多事當日公記否欲問浮島淚

判官源義經

義經用兵如神為兄賴朝所忌措身無地終請宣旨討兄事不就出奔奥州

九郎精悍姿逸氣四海橫援桴臨元戎萬馬肅無聲鷁首衝風濤鐵蹄下絕壁鵬鵠入鴉群勁疾誰敢敵

公起於流徙不數年以平氏定奧羽握兵馬之權天下大勢自是一變以至今云

佐公梟雄姿夙抱興復志遵養時未至深戢凌雲翅相國已老去長公亦殄瘁兒子皆豚犬雄心誰能制一朝得雲雨投袂起海裔八州咸草偃奔走供僕使戲下萬猛士桓如帛壯吳鑑倉開霸府山海壯形勢豈意大原孽如此更昌熾相國葬無處我頭安可致

九郎亦雄傑來會浮島地友愛情可掬感泣灑涕泗今日吾見弟猶視故先帥將壇真得人忽託西討議一戰摧木曾再戰拔赤幟區宇戡定功半出九郎智高枕曾幾日排擯無不至日夕奉北難不覺老狐魅浮島亦在彼英雄何多事當日公記否欲問浮島淚

義經用兵如神為兄賴朝所忌措身無地終請宣旨討兄事不就出奔奥州

七匹謝枯骨可慰九泉親宿昔掃蕩志一朝已得伸功成身不退古來多招咎貝錦知誰恨困阮公自取顧公明拓質見幾一何遲乃兄奉天授公命實數奇閱闕非佳事明知力難格請教終何為此舉為公惜

佐木四郎高綱

賴朝杉山之難謂高綱曰吾得天下必與其半賴朝得志以為七國守護高綱以賞薄去入高野山龍虎爭鬪日奮躍迭競雄浩蕩宇治水晴波漲長空四郎俠烈士疾馳噴玉驄颯沓亂層浪鞭影碎輕紅萬人皆辟易頓策先登功還來不受賞飄然學赤松

讀史雜詠

卷下

君非貪人類賞薄豈介胸源公本烏喙安可共始終昆季猶不有逸足豈能容智士炳幾先獨往托冥鴻

崑山次郎重忠

重忠勇武絕人天資敦厚有功不伐為北條氏所忌及於禍

源公龍興日壯帟供驅馳就中誰尤秀秩父平莊司雄毅如杵楮無復虎侯擬元勳追韓彭還見謙讓姿

為惜忠勇人遭逢多難時及側本無跡竟貽夷族悲

木曾二烈士

越後中太能景津波田二郎

義仲宇治之敗戀藤原氏不能去中太曰敵已迫

矣何眷眷一女子邪吾不忍見主公之厄潰腹而死二郎亦諫而死

東大海氣惡牛斗兵氣橫主將耽宮體舊病如醒三軍氣已衰一戰失旆鉦何如疾歸去早據北越城而今醉未醒刺刺戀舜英忠哉二壯士不忍家國傾屠腹志何烈欲開主將首古聞有比干今見龍逢誠咄嗟旭將軍鹵莽寧須評可憐麾下士一一是忠貞霸畝悵已矣空留烈士名

鞠繪

鞠繪義仲妾也美而勇屢立戰功義仲之敗東兵

讀史雜詠

卷一

三

內田某來迫某稱力無六十夫鞠繪博斬之

百戰時不利四面皆敵旗蹀躞雖不逝勢去誰能支帳下餘七騎中有一紅姬烏帽垂紫綾跨馬揚翠眉東軍田勇士敢稱八州魁維姬無尺鐵奔突攪重圍萬眾皆披靡相搏力如罷提來血觸體銀鞍紅淋漓一軍為吐氣不類虞姬悲將軍獨漂泣還似楚歌時誰言巾幗怯見此忠勇姿豈知太平日士氣皆蕭瑟巾幗寧論勇丈夫如女兒

靜 微妙

二女皆妓也靜為義經妾義經之亡賴朝召問之

愚慮云鞠繪血戰之狀也來生勳

又強命舞乃歌離別曲人皆垂泣微妙幼時父遭讒遠竄及長思慕不已訴之鎌倉父既死終為尼

主君命何奇飄蕩逼危懷急難不相抹是季迷凌軋妾也可奈何溪山獨泣血舉頭不見君空見芳野雪二位真無情舞袖促一闌楊柳春已回妾髮為誰拂舉衣強一唱語語何悽切座上紅氍毹士感愴為心折妾心實懇懇豈為思久別吾君非同根相煎何慘烈妙也亦絕倫夙抱曾子節終天慕其父冰霜爭清潔曾聞幽閑女配作君子室誰知妓女流見此人中傑

曾我兄弟 十郎祐成 五郎時宗

讀史雜詠

卷一

四

祐成祖祐親以嫡見廢其叔某以庶繼宗故兩家相惡叔子為祐經祐親凌暴之祐經恨之竊殺其子祐泰即祐成父也故祐成殺祐經報父讐

歌啁禽鳥微猶有父子愛兒也獨何者無爺誰所致慈母撫兒髮掩袂暗灑淚爺仇負君寵出入挾輕騎唯恐驅羝羊空餒饑帟餌結髮成壯士嗔怒血盈觥孤劍長在懷或來仇人忌沈湎耽女兒日醉媚家膩源公獵富野時乎難再值結束赴獵場徘徊為潛伺炬火忽相誘照徹仇人睡震電助英威風雨鳴高誼爺恨已報矣萬段兒不懟孝烈雖足賞仇本非異類

明善云論
我及此可謂
有識矣

忍痛云極大
讀古今同

慨

骨肉相鼎鉏元是非美事予賦二子詩感愴三致意禍根於已久二子何可議寄語同宗人慎勿爭寵利

鎮守將軍藤原秀衡

秀衡年老憂子孫不堪負荷遺命推義經為大將舉國委之泰衡不從及於此獨忠衡守父命不屈鎮府百年業雄風振河朔老成推此公威稜誰敢觸所恨天奪年後事誰可屬輾轉不能寐中夜思煩促何料源公子崎嶇再托宿驚喜出意外奉戴如州牧緩急實可倚丁寧囑伯叔佐公已得隴一日豈忘蜀

讀史雜詠

卷下

五

昆季何憤憤一舉致顛覆平泉草色青荒臺遊麋鹿乃公死不瞑九泉堪慟哭三郎較可語死執父遺囑

藤家二士

由利維平
大河無任

泰衡之亡維平為虜辭氣不屈賴朝愛其勇釋為家人無任之亂死之無任言曰報父仇者有之未聞復主仇今始自我即起兵軍敗死之

一鞭投隈川百郡咸逃避堂堂追捕公涉險如平地平也出亡虜意氣何雄鷲談笑將帟鬚不用干將利任也亦壯士一呼豎赤幟君辱臣當死報國敢有貳於彼延頑民於我是臣誼藤家兩壯士孰軒孰是輕

平也壯則壯遂貪追捕餌一死雖報知不為勇士累任也雖其頑糾合本臣義寧為頑民死事君莫有二

相模守北條時賴

時賴解執權職後陽為遊僧行郡國問吏民冤枉隨而黜陟之由是守宰人人自勵風化大行維民之蚩蚩無主廼及側偉茲北條公早知過蟲賊撫字是家法視民何懇惻獎擢用清吏勤儉先百辟猶恐遐陬鄉小民或失職盛年抽簪冕雲遊托飛錫偶至難波津投宿路旁宅中有一老尼拮据辨客食敲石力不堪顏帶顛悴色問尼本何人來住此偏仄

讀史雜詠

卷下

木

老尼慘垂泣殷勤說來歷家本食此鄉出入憑華軾失天曾無幾又丁冢子盛零落無所倚鄉豪故傾逼餘喘又幾日纔計朝與夕誰知座上僧曾執天下直僧去席未寒沈寃已別白看彼老蕭公捨身何所托功德終奈何金甌付一擲

相模太郎時宗

文永中元使來時宗不受已而元掠我西鄙再使責我朝貢時宗斬之元大舉來寇時宗擊殲之神戶舉鷄林威風振百世阿曇守北門捷伐遠醜類振古盛如茲誰不仰日嗣必烈汝何物朵頤我瑞

據圖去鈞之
信佛而治
一亂如此此
其存心之異
乃爾

忍辱示近時
驕傲自是
動以相誇
即為實
當謂有
之政而
鍾君之
然則揚
劉之語
大禍而

樓閣云樓
功刊世
出此萬物
體之言
學強能

德虜掠亂我邊虛喝台我使太郎真男子見之瞋裂
賊出師罪可問方建西征議幸彼自送死來迄邊海
地我有萬猛士亦拳肅可斃況是何公麼不用我刀
利風雷供驅使拂盡腥膻氣萬艦終何在渺渺海波
翠太郎小豎子猶了此大事堂堂細戈邦神鋒誰
肯試阿墨何為者又嚴胡元智斯人不可起九原令
予思

青砥左衛門藤綱

藤綱仕時賴斷獄平允夜行墜十錢於水五十錢
買炬燭水撈之曰五十錢吾失人得十錢誰得之

讀史雜詠 卷下

七

源公初霸業爭推舉旗績公伯出推埋寧知有典籍
矯矯青砥公天賦一何直片言決冤枉綽有循良迹
惟茲六十錢吾失人亦得本強誰辨此知公有學殖
當日何所講臨風想遺式

中納言藤公藤房

建武中帝已誅高時稍倦於政武夫思亂藤房
驟諫不聽曰為臣之道盡矣去入北山不知所終
偉哉楠河州孤軍摧妖兇氣類雖或異藤公亦英雄
南朝推偉人孰若茲兩公一知言不用必致招禍凶
一知策不行必至賊內訌建武用公言四海長朝宗

延元行公策奸賊足折衝已失二大機何以治寰中
偉人鑒幾先前後一何同一去而一死南狩事忽忽
善哉先公史特書發群蒙二公去就先公揭書本紀中以見中興之不終云
准后源公親房

公深嘆中興不終著正統記揭皇統於已微而
公所據小田關二城在我常南第址猶存

橋山埋弓劍輔弼亦珍賴何人奉顧命維持皇運季
皇天遺茲老經營王家事入贊廟廊議出當藩幹
寄想見圍城中慷慨論機誼披瀝露肝腸欲發嗣子
蔽嗣子何狗鼠一忘乃公志王苗日窮蹙豺狼爾橫

讀史雜詠 卷下

八

恣宇宙如長夜孰辯真與偽老臣傷肺肝聊擬麟經
義明目揭正統挽回王風墜三綱極橫流萬古驚老
魅嗟公驅馳處邇在我常地至今久憑弔頗負景慕
意嗣子結城親朝也

贈左中將楠公正成

公首唱大義以孤城當賊衝中興之業以公之功
為第一云

三帝行窮島四海同傷悲天道有報復恢濟寧無期
歲周一甲子公實生皇畿狂獺藉積威驅使萬帟狐
腥氣遍寰宇黼坐知何移南木入帝夢伯仲見皋

伊行間受付託，獨立不敢疑。立談定大策，畫地期平夷。苟若臣而在，不必勞。聖懷一呼唱，大義隻手支。傾頽英豪爭踴躍，趨走供驅馳。鯨鯢終一掃，忽使氛霧披。偉哉公一言，燭照倖著龜。微公濟世策，誰仰大陽輝。奉盈古有規，奈何安忘危。酖毒實自招，王途奈峴崎。大福不再來，痛悔猶莫追。國論況田適，臣策亦安施。小人勿用矣，夙已見神蓍。偏安亦天意，萬古付長嘯。先公將相資，隔代是同儕。宿昔感公忠，曾表一片碑。微臣懷超膽，馳繫拜無時。感慨賦此篇，空望天一涯。

讀史雜詠 卷下

九

小楠公正行

正行嘗朝吉野，路遭高師直誘宮女，遣卒迎之，正行奪還以聞。後村仁帝即賜之，正行辭以歌。

乃公百代人，神功排冥濛。小公英且勇，不墜乃公忠。馬革常在懷，恐先朝露終。薜蘿誰不戀，公腸鐵石同。歌詠表宿志，芊綿有古風。淫雨亂菑蒲，老眼奈朦朧。誰知源三位，輸此小楠公。

楠母

正成之死，正行悲哀欲自殺，母抱止之，正行終克合義旅，以敵王愾，此母訓誨之力也。

檄聞云二位
歎老漢軍之
意見於歌詠
不一而足
輸小楠公不
啻此一字

人道楠河州，可追諸葛忠。諸葛擇匹偶，阿承是婦翁。翁子元不凡，巧思奪天工。木牛與流馬，內助與有功。楠母育遺孤，懇懇見善誘。果然獅子兒，他日任擔負。此母明而敏，何減諸葛婦。孔明室有巧思，或云木牛流馬蓋亦有本。

左中將新田公義貞

公奉護良王，令誅高時。尊氏之反，受詔征討，不利死之。後百餘年，支族大興，世以為公之遺烈。

獅子亂天紀，王討真難容。是我左中將，勤王效孤忠。投劍退海若，斬鯨安宸衷。百年盤踞地，勦定轉眄中。昊天一不傭，又降此罪罟。皇家再板蕩，長蛇吞

讀史雜詠 卷下

十

寰宇。公又擁鼓鐸，征討無寧處。天定真無期，王氣日消沮。閒關奉東儲，崎嶇趨北陲。旌旆黯無色，霜雪劍生衣。朔風透箭瘢，鞭痕膚如龜。萬苦臣不厭，所恨托孤差。前將一旅衆，殲彼滔天賊。今藉皇家威，却屈此小慝。獨木支大厦，非云事必克。臣唯盡臣義，鞠躬死乃息。才盛推源家，其孤亦難剿。木曾既安庸，鬼武還陰險。况彼昆與季，悖逆超古今。歷觀同族者，誰似公小心。昆季尊氏兄弟也。

伯耆守名和長年

後醍醐帝出隱岐，幸伯耆，長年舉族擁衛，侍御不

驚車駕再歸闕者長年之功居多

巨川失舟楫何以得利沙朕有一長年實是巨川楫

勿卒受顧托頓見風雲合揭竿糾義旅俄頃奏奇捷

三木與一草元勲誰得及前若無斯人殆同燕木急

諸公雖或勞寧仰中興業北國之役皇太子脫金崎之難舟達燕木浦浦人叛

終為尊氏所擒

備後三郎高德

高時遷皇駕高德欲奪駕舉義要之舟阪山駕

轉出別道乃沒間道趨之亦不及而止

三郎仁人勇奮身禦傾危回鑒謀不遂崎嶇事即奇

讀史雜詠

卷一

二

天莫空句踐時非無范蠡誰知風騷將從容任驅馳

不似江家兒抱才誤所施朱紫苟不別何以讀書為

江家兒廣元也

上野介結城宗廣

宗廣病將死曰我年七十死無所恨但不見滅賊

是為恨囑子親朝速斬賊首懸之吾墓子九郎親

光驍勇詐降尊氏欲刺之不就死之

華髮戴兜鍪終年就師律眼中無豺虎意氣何鬱勃

風節夙所持百折志不屈瀕死猶激昂遺命知何述

不用誦竺經不用供僧佛斬賊懸我墳挂劔義始訖

屬續爾屈強堪見此老質九郎真吾子忠肝貫白日

村上義光父子

護良親王舉事瀕危者數不死者有義光父子也

王之被幽親臣亦皆為帝所殺故其死無一人

出死力救之者矣

山河氣鬱盤一門鍾忠烈崎嶇從我王日夜竭臣節

維父與茲子捍衛同濺血我王苟得脫何顧身屠裂

精誠皎如霜終返天日沒婦言忽相煽王亦逢危撥

瓜蔓及瞽御何人相竭蹶冤魂結不散空思二子烈

讀史雜詠

卷下

十一

瓜生母

瓜生兄弟奉脇屋義治以里見時成為將援金崎

為賊所破一軍失氣母神色自若為義治起行酒

南風日不競誰能敵王愾南有金剛壘西有肥後寨

元帥困北越日夕望後繼此母有五兒寔是忠豪萃

糾集擁主帥誓解圍城悴眾寡不相當中道致一蹶

孤嫠迎脫卒號哭聲震地滿城色如灰注注懷攜賣

老嫗獨何事泰然無憂悸再拜謁郎君意氣何慷慨

兒曹不努力一戰失地利主帥不生還深違郎君寄

二兒幸徇之妾也心少慰妾家為郎君誓天舉大義

苟得猶賊平兒沒何為意所喜三兒存再舉猶可議
語畢為郎君起舞行杯罈敗卒皆激昂一消腹茶氣
皇運逢陽九誰不懷向背此母終不渝弟險見一致
楠家與菊池實當西南寄誰念一老嫗馳騁共同轡
中納言藤原邦光

高時令本間某殺父資朝邦光聞之間行至佐渡
訣別某不聽見父邦光憤殺某亡還時年十三
襁褓別阿爺不記阿爺面一見爺溫容萬死兒不恨
何事咫尺間相隔侔秦越冒險千里來豈為見白骨
此恨苟不報兒何以生為苦雨灑屋角偏添兒涕淚
讀史雜詠 卷下 十三

夜深闌彼寢孤燈耿寤紙突然觸彼眠柔拳恐難抵
躊躇費安排穴窗縱飛蟲燈火忽掩影軒聲響蓬蓬
就蓐奪彼刀直向彼吭擬一蹴攪彼眠彼起刃洞髓
家人睡初覺熟炬照簾帷主人已浪倒殷血空淋漓
賊是誰所為斑斑印紅蹠蹠小知阿新搜剔窮蹊隙
阿新無羽翮郎外有溝渠彼豈能飛去真是釜中魚
何知阿新慧遠出荆鼎上猴攀緣脩竹虹偃踰屏障
竟能脫網罟去為王朝良義風凜如霜千歲有光
芒

肥後守菊地武光

正平十四年少貳賴尚以兵六萬來寇武光奉懷
良親王擊大破之西南官軍復振

北越將星殞中軍失輝光南木亦懽賴潮氣轉淒涼
一日燭一日令人氣填腔讀至西肥事不覺吾眼明
菊家十五龍超脫推十郎八千勒精銳主帥是懷良
前軍少不振見之鬚髯張大呼進陷陳礪礪動穹蒼
河流壯軍聲白日添劍芒滿身都是膽跳盪誰相當
一噓炎燼氣吐為萬丈光英爽五百歲於今凜秋霜
酹酒亦自酌不知引數觴何啻強人意萬古扶綱常
五郎左衛門楠光正

讀史雜詠 卷下 十四

光正削髮匿南都欲刺將軍義教事覺就縛從容
作詩歌以死云義教後為其臣滿祐所弑
五郎俠烈士不恥楠家息同宗皆漸滅剽山空斬削
願七生人間必殲此國賊此是乃祖志今日誰戮力
念此氣滿膺裂眼窺仇敵彼方握大柄出入秉干鉞
混迹緇流中漂漂無所適小爵抵蒼鷹不惟毛血漑
豫讓劍空刺子房椎徒擊從容赴黃泉長歌何烈激
君死有神靈假手老鬼蜮鷄羽舞未闕孤劍已橫臆
太田資長

資長上杉氏世臣好學有壽略輔扇谷威名震東

國曾得吉夢乃築江戶城居焉即今大城也

賢人受重寄冠攘速屏迹已把濟時才又見風流伯
月露入胸脾咳唾盡成珠四疆仰文風兆庶望來撫
人和家亦給須擇形勝地夢卜得天險剪棘開府治
百年狐兔窟一朝為金湯登眺亦壯哉佳麗甲一方
東南枕巨浸沃野西北列門對品川船窗含芙蓉雪
誰料百年後終為八洲都萬井歌吹沸樓閣簾星鋪
君看真人夢先見同著蔡樗里智囊小何及規模大
當年詩人語品評折秋毫景仰今猶昔長與富山高
北條早雲

讀史雜詠 卷下

十一

早雲嘗謂今諸源稍衰平氏當興也又夢二大杉
木為一鼠所嚙仆卜人曰是公克兩上杉兆也
白旗已凋卷平宗氣當舒英豪志眼別乘除機已觀
嗟此兩管領內自相脅驅蚌鷸勢不解終來旁人狙
鼠子視英豪何知鼠化龜看彼老杉木不惟遭吞屠
况又孫與子克繼乃翁謨果然八州地竟為我版圖
偉哉早雲氏貽厥見遠模不似機山翁身死廼忽諸
陸奥守毛利元就
陶晴賢弑其主大內氏元就奏朝廷以討之賊
大舉來犯因擊殲之元就大江氏好和歌

讀史雜詠 卷下

十一

中納言小早川隆景

妖氛纏寰宇大陽失光耀若無英豪起何以持風教
老猾負智力嗜取四騰遶萬艦搏孤島殺氣迷海徼
四鄰相環視惕息失其魄豈知英雄胸夙已有成策
三軍勝敗機元在辨曲直上奏受皇命大義鳴悖
逆鷄首夜衝浪鐵騎曉斫營天地扶兵威風雷換鼓
鉦帝狼皆蜷縮芟斫皆無聲吁嗟討逆功片時致削
平賊子膽正落王綱賴以樹七道稱義舉十州歸鎮
撫念公播紳後豹韜任旗鼓儒雅有典刑無乃類乃
祖

公元就第三子出冒小早川氏大閤時封筑前就
國傾心綏緝創建寶舍繕脩神祠闔境大悅
靈芝不虛生景星有時明嗚呼早川公寔是人中英
眉目明而秀風度恢且宏汪汪千頃陂撓之無濁清
又韓崐山玉溫潤含晶瑩公本清廟器誤是事鼓鉦
壯歲輔乃公一戰梟鯨鯨中立挾孺子驟摧上國兵
暮年西征日壯氣吞韓京叱咤走風霆英聲塞寰瀛
此是世所稱未悉公平生建學拯頽俗絃誦聲琤琮
尊神新祠宇謀慮何崢嶸百世聞公風感慨淚欲橫
霜臺上杉謙信

楓傳六舍青
華清於海
顯彰重蹟
而論其節
入詩人語
李御與三
之夢見子
如日
箭

忠實云竹山
簡簡之
近代英雄
茂概成
指實
武生才
句引臨

謙信善用兵，迅速如神，所向無前，敵國畏之如虎。
旁涉文藝，軍營之作，世以為絕唱云。

精金生越北，驍驎出山東。果然遐陬地，又見生神龍。
秀骨象山嶽，萬里敵秋空。垂髫已老成，志氣排其蒙。
緩服跨飛黃，貫穿萬衆中。迅速如鸞鵬，摧陷無衝鋒。
薄險本非勇，暴寡豈我衷。仗義奉高侯，收兵避頑童。
摧強與扶弱，此公一世終。繫茲機山翁，曾稱一時雄。
越馬或南飲，狼狙鹿遇熊。祈死真上策，老物智亦窮。
矯矯八州豪，視公如蠶陸。旌旆下越嶺，骨息無地容。
有時凝遐想，高興動蒼穹。挹彼鐵石腸，騁此錦繡胸。

讀史雜詠 卷一
右府織田公信長

室町氏衰，海內分裂。公削平禍亂，崇皇室，起廢
典，章章可紀。大閣出部下，繼其志。一海內云。

中洲解皇綱，四海氛霧黑。群豪裂其土，搏噬迭起路。
江家跨關西，杉氏擁越北。非山將甲府，傑視分東國。
豺狼又縱橫，京圻為榛棘。不有真人興，誰能掃氛慝。
相公出華胄，英資何挺特。撫摩安黔黎，討擊定蟄賊。
感激奉帝詔，山嶽增氣色。一戰撲元兇，再駕走鬼
蜮。孽臣與姦驕，次第皆殄熄。廓氛對大清，排霧覩白

日，上郡神明隕，重見皇家則。英謨泣鬼神，勲庸流
社稷。遺恨養梟子，中塗遭薄蝕。相公雖已矣，後人受
遺式。王塗不崎嶇，皞皞仰帝力。宇宙開闢功，誰及
公大德。

平手政秀

右府少好任俠，政秀數諫，後為書自殺，曰：「吾納臣
言，雖死如生。」右府常曰：「吾有今日，政秀之功也。」
鬱彼生民，秀華嶽靈氣鍾。一朝受付托，寥寥見匪躬。
讜言犯主顏，難奈頑如聾。也知非常主，常套難發矇。
所以學史魚，峻節凌蒼穹。英主果開悟，竟為寰中雄。

讀史雜詠 卷一

丹青宗社勲，遠勝先登功。鴻毛一死輕，英名千載隆。
曾讀君遺言，治體何貫通。未見戰國人，學殖似此翁。
乃孫頗抗直，一時推儒宗。學術雖不醇，知有君遺風。
大宰德夫政秀之後也。

山中鹿介幸盛

幸盛仕尼子氏，尼子為毛利所亡，幸盛擁遺孤，舉
兵，羽柴氏討毛利，幸盛為守上月城，城陷死之。
古聞報父仇，未見復君讎。今我為此舉，君臣義始酬。
君亦兼任徒，志概元罕儔。糾集奉悻孤，獨力迴萬牛。
彼乘興運後，百戰振謀猷。我如轍中鱗，孤城苦幽囚。

虞淵光難迴，百折志未休。嗟此忠勇士，佐以豐公籌。
舉趾無遺策，不得復一州。始知天所棄，人力終難收。

戸次鑑連

鑑連大友氏世臣、後稱道雪、病跛、每戰乘輿、麾衆忠鯁敢言、大友氏不能用、其國日盛、有高橋紹運者、與道雪齊名、大友氏不失國者、二人之力也、又有入田親真者、以諫死、

善戰類孫吳所向無敵誰知老跛翁却堪棟梁職
豐帥元纛暴不辨白與黑奇衮奉妖教侮慢瀆神
國兆黎內離叛版宇日蕩折老臣心獨苦欲展匡救

讀史雜詠

卷一

一元

力忠言偕涕灑不解主公惑區區天一畝孰失孰為
得所愛多奇士猶能支傾仄况又道雪氏實資文武
德其主雖可唾其忠何可泐未聞褒鄂德更有王魏
績褒公鄂公
王珪魏徵

王珪公
王徽公

太閤豐臣公秀吉

公起下位佐織田公明智之亂一戰誅之西征東伐海內歸於一而征韓之役亦軒輊可驚云

太陽光所臨，我旌旄所至，五方與八極，何土非我地。
若非金烏精，誰有此心志。一朝風雲會，指顧掃亭隼。
擎來扶桑日，萬里排陰曠。八州屈強者，蒲伏爭委贄。

思誠 公豐二
鵝林 八 陽
野實 在 中 下
肉 長 洲 胡 步
御 藏 萬 三 三

雄苗猶未已。絕念王朝懿。王朝昔全盛。風化遐
城被。一自皇風歇。誰知域外事。維公擣伐餘。欲振
皇典墜。偏師馳鷄林。颺雀風雨厲。鐵騎朝航海。鴨綠
夕按轡。如何用倭賢。和議誤大計。惜哉十萬師。來往
似兒戲。七道空瘡痍。竟為豐家累。所以小兒輩。紛紛
致訾議。豈知英雄心。不為一時利。一勞而久逸。其功
何可置。後代實藉斯。長絕胡虜覲。

飛驒守蒲生氏郷

飛州少時，織田公一見為英物，以女妻之。飛州雄傑有大志，小人從而媒孽之，其死蓋非良死云。

讀史雅詠

卷下

三

英確明藻鑑夙已辨真龍是我好佳婿可配阿孃客
後來果嶄絕宛如百鍊鋒光世新發矍矍稜稜凌白虹
權奇多英略真能類婦翁塞垣風塵起馳驅叱鐵騶
孤軍入虜地忽逢風雪衝意氣益飛揚奮疾似驚鴻
長絕北顧患頻策平定功才高來忌冒終爾招偶凶
蛩沒名花詠從容氣更雄古來英雄人不見克有終
大塔負奇冤判官苦飄蓬尤物多薄命君莫恨狂風

肥後守加藤清正

征韓之役、肥州向咸鏡道、轉北至兀良哈、縛王子、望富嶽於天南、晚讀論語、深感託孤寄命之章云、

懷國公
為人不少
賢哉
將將軍也
蘇三同

懷國公
為人不少
賢哉
將將軍也
蘇三同

忠宣公
岐節史
可不稱

大閣簷八荒驅使皆驥跡就中驛將軍超騰推逸足
長驚鷄林西轉關超河朔穴處擬太古野食交為肉
赤手縛帛子信義感異俗縣軍一何遐天南仰富嶽
再征據孤壘明軍皆挫衄歸來聚樂城遺弓寄望哭
忽收韜鈴畧還就聖賢學服膺子與語輒躬友傾覆
真成社稷臣不復絳灌屬可憐趙家相魯論夙寓目
遺孤知安在半生枉講讀

天野三郎兵衛康景

康景邑有人攘竹卒所之盜者誣訴於官官判卒
當斬康景曰殺盜天下通法若為罪吾請坐之

讀史雜詠

卷下

三

舐痔冀重賞解子投其嗜澆俗無特操叔世競寵利
逢迎或不得傾險何所至吾見野夫子素無肥遯志
曾執翹材柄陳力當重寄一朝逢巧言進退實無地
臣欲伸臣誼公法或失墜臣欲伸公法無辜負罪累
所以萬戶侯遺棄如脫屣雖跡涉矯激本為一夫忤
月衷實炳如合契聖賢懿吁嗟衰菴日詎得有此事
始信陶唐世下有巢許類

伊賀守板倉勝重

勝重為京尹時大阪未亡人情危懼勝重綏撫得
宜民懷其德仰之如父母年老薦子重宗自代重

宗克繼其緒民敬之如神重宗弟之子重矩亦為
京尹沒後民思其德以至祀之云

關左開大府濟濟富輔綱倉戾維異才出居具瞻職
制子方嘯聚輦下多奸慝施為中機宜從容定及側
聽斷實如神姦盜皆屏息令行吏難欺政簡民易憚
千里已妥帖不用搏擊力仁風周上都美譽布東城
令子克幹蠱不辱乃父識大倉與小倉後先迭暉奕
乃孫雜儒雅清操欺水蘂一門延三世聲擢司神閫
古來無此奇於今推大德願借歐馬筆細寫循良績
惺窩藤原肅 羅山林信勝

讀史雜詠

卷下

三

東照公數召肅講書本邦學者崇信程朱以肅為
始信勝事公出入帷幄參贊密勿多所補益
馬上得天下寧可馬上治真人經綸日夢寐求碩師
藤子乃崛起一時推表儀學術窺天人際會興文時
燕間受清願妙語剖毫釐林子接踵起參贊侍幄帷
獨任振絕學四海文教熙吁嗟百年間生才何超奇
先鞭推二子千古日星垂瓣香仰拍人遐蹤卓難追

忠宣公
字子瞻
先生
遺之秋

讀史雜詠卷下終

附錄

日本武皇子廟并序

我常陸係皇子東征所嘗經營水戶城東南里許有廟曰吉田社以為府下之鎮即常陸二十八社之一也華表旁有小阜俗呼曰三角山傳云皇子菱薹之地至今人皆敬憚無敢登涉者云

王家經營日四方皆招綏蠢蠢東北阪狂狼難羈縻蝦人尤兇囂其性如梟鴟信信相嘯呼披猖負嶮巖涉山疾度鳥走嶮如驚麋駸駸犯版籍王民咸怨咨皇天眷我皇神人出宗支垂髻已英武西討據神

讀史雜詠 附錄

規靖定曾幾日復勞東征師征師正烈烈其鋒誰肯支王武赫如震胡虜皆懾祗神略本無敵何用血戰威推耄擁道路歡忻觀天儀簞壺迎王卒玄黃拜神旗率土皆王臣萬國歸緝熙我州雖遐遠曾駐皇子驪高林鬱蒼蒼空翠撲人肌此地曾菱薹崇奉建廟祀棟宇仰盛勳春秋薦馨采臨風灑感淚欲賦送迎辭

大織冠藤公祠丁未南

常陸鹿嶋郡有小祠相傳公所生處也大鏡簾中抄皆云公常陸人據此土人所傳或可取信云

忍讓云惟
出郭

東湖云使
不覺正聲
坐

寶祚垂千年威稜冠萬國興衰迭推遷不免生鬼域一帝兼一王憂辱使人惻誰料常陽陬生此伊周匹一朝逢聖主魚水兩相得料知擎履手已藏回天力談笑運廟謀俄頃平老賊青天拂雲翳日月免薄蝕興文見碩師制禮由絕識偉哉中興業千載輝日域鄉人慕公賢奉祀北浦側春秋薦蘋藻公神或還食我亦同州人無奈今古隔讀書或庶幾夙昔仰遺式來拜仲夏望喬木晝昏黑猶疑英靈在凜覺清風逼

菅公祠

讀史雜詠 附錄

二

水戶城之西里許祀宇佐宮以為府下之鎮宮傍有祠祠公焉

喬木森參天濕翠滴瑞籬深沈先皇廟巍巍仰飛棟傍有數株梅繁榮蔽古祠云是祀菅相肅拜陳巴辭皇家昔不振勳戚多專制聖主內憂勞宵旰思救弊維聖實知賢雲龍仰神契爰立以為相出入司獻替大旱得秋霖舟楫濟巨川夙夜熙帝載蹇蹇滯忠肝貧人繁有徒羅織實多端休烈未泯洽竟折凌雲翰榮枯本小事公豈敢介意誰知公出處還關道否泰災變本偶然托公亦公議感悟誰道晚猶

慰萬人思志雖屈往日道則伸千祺生為一代宗沒
作百世師美名垂宇宙香火遍邊陲煥乎 勒天皇
文教輝日域公生千載後樂育推學殖斯文不墜地
實由相公力配享出自然蘋藻酬大德威稜共赫赫
長護詩書國

丁未南遊汎浪逆湖南望壯源將軍賴信討平

忠常擒之慨然有賦

南行到鹿島一望水淼漫長風翻白波拍岸岸欲宛
舉首看青螺云是總州山緬懷源將軍此地將魏廓
欲濟無舟楫何以平校虜校虜學乃叔憑陵亂邊圉

讀史雜詠 附錄

平公但誓師三歲空舞羽將軍實雄豪氣吞萬獠
一鞭直絕水校虜失險阻悠悠八百年何處公濟所
感慨懷英風買舟空弔古悲歌歌未就伊軋數聲艣
乃叔將門也

北遊至勿來關誦八幡公山櫻歌詠想像其英
風因賦焉

五世忠勲家又見真將軍意氣蓋八洲叱咤生風雲
皇威漸陵遲遶疆亦多事咄此犬與羊負強迭負嬰
將軍鎖邊藩仗鉞問亂原西風驅黃落颯颯鳴囊韃
白露夜濕旆殘月曙傳柝壯士心飛騰殺氣暗絕漠

據圖云佳年
讀此地景
古蹟相傳
風光正爛
不覺慨然

風光正爛
之七絕
者李梅亦其
人子

亂鴻驅虜伏六郡皆震驚草木總旆幟風鶴亦鼓聲
一舉殲群頑頓立不世烈神兵纔一動四海妖氛絕
治亂反覆間呼吸關成虧崎嶇本為國何問公與私
我來勿來關春光正爛熳願公戎馬間歌詠何璀璨
韜戈二百歲邊塞弭風塵不知詞壇上何人繼芳勲

小松內府塔

水戶城西數里有小松寺平氏之滅其臣貞能竊
負內府骨來伏於此故有公塔塔旁又有貞能墓
數雁橫遠天萬里秋色霽飄然出郊坰來訪小松寺
寺門何深嚴古木鬱幽邃山上有古塔下埋平公軀

讀史雜詠 附錄

忠常云源平
之事當以斯
詩為證

回首憶往事感愴橫涕泗嗟公生叔季一身當重寄
何事放廟子九族竟犇躡人尤公失著予謂是公意
興衰有無數人力庸可冀鬼武負智力慘毒及乳穉
蓋棺土未乾子孫無所庇請看平公後聯綿還昌熾
貞能預知此千里負公骸靈魄托此地潛伏待時至
我來吊忠魂欲語千載事魂兮招不來蕭蕭落葉墜
廟子指無倉公公之
不死內府之力也

佐竹秀義故壘

治承中冠者秀義據金沙山拒源賴朝賴朝遣諸
將攻之不利已而叔父義弘有異心為敵內應城

遂陷

長林氣莽蒼，修壑紛參互。陟嶺景屢變，俯崖目頻注。
山頂有古祠，祠下坦可步。踞巖瞰平野，川雲自翔翥。
冠者亦雄豪，此地曾割據。敢將一旅衆，能敵八州賦。
於今餘陣趾，威風足欣慕。叔也本陰險，反戈致大誤。
千年遺真在，山雨洗難去。俯仰古情多，杖策暫迴駐。
殘陽忽倒射，不覺四山暮。

本多重次墓

重次墓在下總相馬郡井野邑宅趾亦存井野則
其采邑也墓上有雙松高百尺竊然可敬案重次
始居土

讀史雜詠

附錄

五

總小原邑後
移居此去

脩路訪荒阡，高松何轟轟。古人托幽宮，四時柯葉綠。
憶昔龍關日，諤諤當均軸。遭事皆崢嶸，磊磊驚群目。
末俗口含蜜，鱗甲實在腹。偉茲夜叉公，外猛內清淑。
直立無支蔓，宛似千丈木。墓下供溪毛，聊擬登薦肅。
樵採雖或絕，荒苔亦可剝。誰能構祠宇，春秋脩奠祝。
稱揚發潛光，顛振澆濁俗。

題本多中書圖

頭戴鹿角盔，手提蜻蜓槍。立馬臨流水，英姿凜秋霜。
知是龍泉後，眼中無猿郎。一旅抗十萬，義勇冠扶桑。

忍虛不棄
雄偉之氣

曾聞侯在陣，人賴如鐵壁。白戰無癰病，一顧驚勁敵。
況臨艱險地，屢振老成策。翊贊冠多士，屹為邦柱石。
霸主以傾側，廣座極稱揚。奈何片言重，欲收三世良。
戾言實凜凜，驚破老將腸。知君鐵槍利，不及志氣剛。

晃山神廟

風塵傾洞日，殺氣溢彼蒼。不有真人出，誰知區宇清。
輿望歸將種，名胄本天潢。積德過三世，累仁致百
祥。馳驅皆肅關，心膂亦鷹揚。風節容忠貞，撫孤護典
常。雄豪爭搏噬，先後遞興亡。蠟屈遵時晦，豹韜見策
良。五方均翊戴，一顧掃欃槍。蒸庶免魚肉，惻誠感帝
皇。

讀史雜詠

附錄

六

狼止戈，觀聖武。經世仰文章，上將仍龍錫。下民共仰
望，吐哺常待士。入謁實尊王，祖賴過劉集。業由貽
厥昌，閔宮依勝地。瑞靄滿神鄉，碧水環層麓。霽曦照
畫梁，澗溪含秀色。草木發幽香，結構元崢嶸。丹青亦
炫煌，拜趨思遺烈。躑躅感中腸，臣亦沐恩者。賦詩空
激昂。

杜昭陵之作
唐書八十八
與趙俱亡
力進道
鳳
事上之四
劉集
劉集
廟作應公多
讓

姪 延年校

六朝盛唐諸家詠史多但叙其事耳晚唐至宋則專主議論八讀李卿所作併叙事議論而發之筆力健舉可以當一部史論矣

安政乙卯維夏校園散人森蔚書于珂水寓居

李卿詞伯讀史雜詠一百首辭意精到光焰逼人應與嚴海珊明史雜詠賴山陽日本樂府對壘而無愧色矣

楓灣居士滕貞松贊評

李卿世以史學名家今詠古今之人物至一百首可謂勤矣且其有所見而作詞義極可觀間有不尔者蓋篇什之多乃至此也然所舉英雄豪傑是李卿得讀史雜詠

評

意之人故詩亦多得意之作要其典雅宏壯有少陵之風致

石河明善妄評

中唐而還詠史之作皆本義山樊川競巧於律絕之間焉耳斯集特以五古出之李卿之意其在太冲淵明之際者歟

枕山居士厚妄評

讀史雜詠跋

余嘗每讀近時諸家集鈔其係詠古之作者一集之中不過寥寥數篇而已至閱蜨巖集則載詠古雜詩十首風格高雅議論俊爽蓋鏤中錦錚者逮賴山陽興以詠古擅聲集中殆居其半而極思研推多援漢典觀得失乎影中一時稱為破天荒手矣余友青山季卿家世精於史學是以洞悉乎歷朝人物之賢愚奸濫每有所感輒以五言往體評論之叙功罪於藻致璀璨之上寓褒懲于韻調鏗鏘之間蓋其淵軼之思組織之才別出機軸不寄人籬下者使山陽在世讀史雜詠跋

跋

一

當讓一頭地於季卿也屬者編其詩為二卷寄跡屬評余固惛懵史乘謾贅數筆歸之

旃蒙亶安南呂月

忍廬友部熙拜識

跋

余嘗謂本藩修大日本史也當時史才不乏其人學識文章各擅其長刪述粗全然而其所據實錄外不過偏紀瑣言而英弼良將名聲轟世者觀其傳乃或斷爛淵略首尾不能全蓋載籍疏缺事實無徵雖大手筆亦末如之何而後儒討論不無所發明亦唯無古書可援不獲載之傳中而本史不係論贊於義雖當而治亂盛衰之所由人物臧否行事得失不能一讀了然豈不遺憾哉鐵槍子於史學夙承家範發明匪尠曾入史局與修志表而讀史雜詠跋

二

以其餘力詠古今人物以為是卷賢豪英傑之迹忠孝貞烈之事每篇首必舉其槩略焉其遣辭也縱橫馳騁所謂斷爛淵略者彼此相證以發其義而風調溫雅者可以當傳贊也義理明確者可以備史論也於是人物臧否行事得失殆了了然非遽於史學者其孰能之至于詩之巧拙所未及論也

慶應紀元乙丑十月之吉

津田信存拜撰

手冢心直書

李卿弟多而讀書嘗有元旦作曰十歲都
如夢今朝屈指空先子誦之喜曰多作如
此足以繼箕裘矣李卿稍長涉獵歷史比
及十七八既通十七史隨讀隨筆因目曰
讀史偶筆爾後頗究國史而欲有所論著
然伯氏專力史學既有成編森所措手李
卿於是乎別出手眼詠懷古今標史論之
所未及以為讀史者之一助也凡事之沈
滯鬱抑者務暢其情其情之曖昧不明者
務雪其冤蓋以溫柔敦厚之旨歸之微顯
闡幽以義而其刻苦亦可想矣此編之成
先子沒既十有年其僅見少作而不及見
此編耳伯氏之叙事李卿之誦史並行而
不相悖則其表之業庶乎不墜也今茲慶
應乙丑杪冬剞劂將終乃書以為跋

佐二木重之於卿識

高橋白山 著

征清詩史

明治三十年（一八九七）東京高橋作衛鉛排本

據明治三十年（一八九七）東京高橋
作衛鉛排本影印

一唯忠渡

明治丁酉春日

華仁題



敘征諸之役高橋月
兼中善詩文又喜和
亦同嗜每橫槊觀戈
我戡賊彼和詩樂視
偏凱旋和歌中揮毫
子

若千首靈白山後細批評其得
月山之尤也添刪詳其
所補足余之當時欲立而
未遑及者也得不多識戰
地而能如此國竊余之頃
者月山亦將所著征諸詩

史求余序之閱之生東洋
大勢著華至平和克彼之
日其渴海陸兩軍激戰奮
關之杖居以二十一字觀
之金休秘序井然字字視
韓之各篇事跡昭然確乎確

精強敵使眼如巨斧
銳密人忼慨存心於
國事當時讀大戟小
關莫不歎為閨者宜乎
其強矣詩從歷觀塞地
三者也國士所感以贈

明治三十年三月

花浦士井航三藏

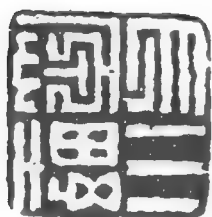


光緒二十五年
歲次庚辰
正月



明治下南之書
白山文宗屬

二十卷 波瀾山卷



征清詩史叙

國之所以致隆盛者。以有國民愛國之誠也。我

先王之君臨億兆也。養以恩愛。結以信義。列聖相傳。仁慈之政。儉勤之行。莫敢或怠。垂統一系。繼々承々。二千五百年于茲。其樹德流澤。可謂深且遠矣。上之臨下。一以至誠。而下之奉上。亦以至誠。慕之如父母。仰之如日月。四千萬國民。愛國忠君。猶手足之扞頭目。宜乎征清之役。我軍勇戰奮鬪。以震懾四隣也。然而東洋兵力。不能以制宇內大勢。媾和之日。使歐洲強國置喙於東邦之事。論者多歸咎於政策。以爲失其宜。然一時之得

喪者。事之枝葉也。凡物有根本。而枝葉生。國民愛國之誠者。國之本也。本已完矣。何患於其末之不繁盛乎。養以俟時而已矣。余每想見征清軍勇戰狀。竊有所感。因作七絕詩。紀忠臣烈士偉績。命曰征清詩史。傳之家庭。使我子孫。日夕誦誦。如置身於苦戰間。而存愛國之念焉。亦自養本之意也。其詞務取與通常言語同一者。使幼童諳解。不辭淺近粗俗之嘲。若夫慷慨激昂之氣。悲壯淋漓之音。大吐肝膈。而爲一場痛哭者。欲自禁不能也。

明治三十年仲春

白山 高橋 貞識

立國之體
名義爲重

保和不在
親好

征清詩史

征清詩史

白山高橋先生著

男

作衛校

金蘭社

藏

白山曰。凡事有不可忽者。有記而不可忘者。方今東西邦國。對峙爭雄。所以其立國護民。全名義者。惟有和與戰而已。和破則戰。戰敗則償金。割地。和戰之機。間不容髮。而保和之道。不在於親好矣。夫兵備不全。則和不可保。知和之不可保。而修兵備。兵備全而後和可保矣。是乃字內現時之大勢也。若夫以和議已成。謂外患不足虞。以敵艦未來。謂無事可久。苟生安逸之心。則國勢陵遲。爲強邦所侵掠。而不自立焉。抑立國之體。名義爲重矣。先王創業垂統。二千五百年于此。未嘗受外邦

忠臣倭業
不可不繼
侵之端
侵東洋戰

同胞流血
枕骨之垢

以死爲榮

使掠奪。先王遺業。自立于東洋者。皇國之大名也。揚先王威武。不受外邦之侮者。皇國之大義也。思名義之所存。察大勢之所趨。修兵備以應不測之變者。今日之急務。而不可一日忽焉。征清之戰。啓端於朝鮮。我國寬恕。屢讓步。而清國頑傲。恣其譎詐。四千万臣民。扼腕切齒。將懲之師。出於萬不可止。而公憤之所激發。自將校士卒。至軍夫馬丁。莫復期生還者。進當彈丸雨注。衝勇戰奮。圖以死爲榮。枕骸橫野。屍漂海。至其偵騎陷圍。艇隊襲敵。堅冰凍膚。積雪傷肉。危險艱苦。不可名狀。積勞累功。悉披遼東。城寨殲滅。北洋水師。殲和之日。清國割我。所畧取之地。其地皆我同胞。抹血沈骨之場。收爲版圖。理固爲當。而歐洲強邦。橫暴恣睢。妄容其喙。是乃臣子之所爲憾。而不可須臾忘者。也。嗚呼。此憾亦惟兵備未完之所致。若不早圖。將有再悔。大修兵備。此爲時矣。況於有忠臣烈士。偉業不可以不繼者乎。方今各邦之人。欲奮智勇。以張國力。而或能致富強。或陷貧弱。其貧富強弱。莫不關於邦人優劣者。平和之不可僥倖。侵略之無所底止。優勝劣敗。時勢之變。遞至於此。而征清之役。一戰破驕清。昏夢進當危難。衝路則以此役爲啓東洋戰伐之端。誰曰不然。夫歐洲兵力。屢協東洋。蓋非一日。奕佛版圖。遍於南。海。各韓民。疏弱輕佻。無復一人愛國家者。是實東邦危急之秋也。豈不戒懼哉。余竊察宇內大勢。詳和戰所由。以說兵備之爲急務。觀強邦橫恣。侮忠臣烈士。致死。而以論其志業之不可不繼。使後人有所興起焉。

使掠奪。先王遺業。自立于東洋者。皇國之大名也。揚先王威武。不受外邦之侮者。皇國之大義也。思名義之所存。察大勢之所趨。修兵備以應不測之變者。今日之急務。而不可一日忽焉。征清之戰。啓端於朝鮮。我國寬恕。屢讓步。而清國頑傲。恣其譎詐。四千万臣民。扼腕切齒。將懲之師。出於萬不可止。而公憤之所激發。自將校士卒。至軍夫馬丁。莫復期生還者。進當彈丸雨注。衝勇戰奮。圖以死爲榮。枕骸橫野。屍漂海。至其偵騎陷圍。艇隊襲敵。堅冰凍膚。積雪傷肉。危險艱苦。不可名狀。積勞累功。悉披遼東。城寨殲滅。北洋水師。殲和之日。清國割我。所畧取之地。其地皆我同胞。抹血沈骨之場。收爲版圖。理固爲當。而歐洲強邦。橫暴恣睢。妄容其喙。是乃臣子之所爲憾。而不可須臾忘者。也。嗚呼。此憾亦惟兵備未完之所致。若不早圖。將有再悔。大修兵備。此爲時矣。況於有忠臣烈士。偉業不可以不繼者乎。方今各邦之人。欲奮智勇。以張國力。而或能致富強。或陷貧弱。其貧富強弱。莫不關於邦人優劣者。平和之不可僥倖。侵略之無所底止。優勝劣敗。時勢之變。遞至於此。而征清之役。一戰破驕清。昏夢進當危難。衝路則以此役爲啓東洋戰伐之端。誰曰不然。夫歐洲兵力。屢協東洋。蓋非一日。奕佛版圖。遍於南。海。各韓民。疏弱輕佻。無復一人愛國家者。是實東邦危急之秋也。豈不戒懼哉。余竊察宇內大勢。詳和戰所由。以說兵備之爲急務。觀強邦橫恣。侮忠臣烈士。致死。而以論其志業之不可不繼。使後人有所興起焉。

轉是君臣
恩如父子

着風和氣

一種唯忠

皇家威德

人。皇家威德日維新。一系神孫臨兆民。義是君臣恩。父子美風卓絕。万邦

日本統紀

皇系聯綿。樹德崇深。根固蒂自無窮。三千統紀。雍澍化。人在春風和氣中。

日本文教

黎元輯穆。國風淳樸。誦聲連文。教新。一德唯忠。四千万。無非義勇奉公。人。勅語曰。義勇奉公。可以扶翼皇運矣。

白山曰。我國臣民。奉万世一系。皇帝盡忠。皇室子孫世繼其志。而

不為忠臣
為孝子
者。不得

天風爛漫

唯知有死

男裝瓊六
軍權

日本士風

勤勞王事。國民之於皇家。義為君臣。恩如父子。夫續先世之績。成父祖之志者。於孝道為重矣。然則不為忠臣者。不得為孝子也。

日本士氣

邦人一致奉皇家。義膽忠肝。吐國華。請見神州。剛毅士天。真爛漫。平叶似櫻花。

武功

寶刀有氣。斗闇明。慷慨淋漓。報國誠。五尺身軀。都是膽。唯知有死。不知生。男裝自握大軍權。遙突賊巢。策全醜虜。驚惶申誓約。補金帛八十船。右神功皇后

策可取退守
寧進當萬
總衝。不
求戰成和

武功開文
治者極多
萬
殲元兵十
累城封侯

白山曰。神后征服三韓而百濟薦秀士獻論語。尋致織縫釀治諸工。我國文化大進。自古武功之開。文治者極多。歷山王東征。而亞細亞西部諸國。傳希臘語。十字軍終。而歐羅巴各邦。始趨文明。徵之東西史乘。邦國之趨開化。不獨關於文教也。

敵海。騰糧巨煩。西陲寇逼。不啻驚。太耶眼界。原無敵。殲滅胡元。十萬兵。

右北條時宗

入道朝山河唾手收。夙期異城建封侯。長驅万里如風雨。震動朱明四百

州。

右豐臣秀吉

白山曰。論者或曰。秀吉之征三韓。不及時宗破元寇之功。時宗一擊殲

十萬虜兵。使外寇不再窺邊疆。秀吉遠出兵於海外。連戰七年。不能成其志。末路僅完軍而還。可以見其優劣矣。今之用兵者。宜倣時宗所爲。不可學秀吉。是徒觀成敗之跡。而不知時勢者也。方今東西相對峙。而東洋諸邦。輸一臂於泰西者。蓋乏於進取氣力之所。致也。方此之時。苟爲東邦謀。寧學豐公所爲。進當方艱之衝。不可倣太耶以取退守策也。

和戰

列邦對峙。試驅馳。鷙鷙奮飛。障猛獅。求戰成和。和啓戰機。唯一髮見安危。白山曰。邦國互爭。雄長和則爲文明。鬪則猛虎。鸞狼變詐。無所不至。情僞不可測。知和戰之機。間一髮耳。論者曰。自古不以和鑿國者。幾希。獨我北條時宗。先斬元使臣。決防禦策。故不辭亡國覆轍。可以爲處外

和成則意
兵備。和不能
戰。

以和為主

危急焦眉

進取之不
可已者。必
然勢也。

不載錄者。
東洋諸國。

寇之法。余以爲不然。如時宗所爲。可行之當時。而不可行之今日。用於胡元則可。用於歐米各邦則不可。不知變通之道。過激處事。適足以啓大釁。且夫以和譏國者。和成則怠於兵備。和破而不能戰。屢和屢戰。屢戰屢和。自取覆亡而已。抑和戰者。安危之所係也。治國者。畏命爲重矣。安得不以和爲主哉。雖然。保和之要在修兵備。兵備完則和戰之權歸於我。和戰之權歸於我。而後和可保矣。嗚呼。兵備之不完。雖欲保和。其將能乎。

成敗

朝成暮敗。幾興幾衰。大勢變遷。非可支進。取誰能據。臂起東洋。危急在焦眉。白山曰。余嘗讀萬國史。有普通史。有特別史。分普通史爲二種。其一合

萬國以爲一大體。邦國文化。及於全體。其兵力關於大勢者。紀之。不然者。雖舊國不載。錄而其所紀者。歐洲之各邦也。所不載。錄者。東洋之諸國也。今屈指東西諸邦。曰英。曰露。曰獨。佛。澳。伊。至蘭。瑞。等各小邦。其文化。兵力。與大勢相應。足以自立矣。而如東洋諸國。印度。緬甸。暹羅。安南。朝鮮。支那。或歸歐國版圖。或惴々焉憂其侵略。幸一日無事而已。史之不錄。抑有故也。嗚呼。亞細亞之大如此。而國力之不振。如彼。豈可勝嘆哉。雖然。宇內大勢之變。不窮。朝成暮敗。興衰變遷。強弱易地。則進取之不可已者。必然之勢也。方此之時。興文化。修兵備。挽回東洋。賴勢以迴國名於史上者。非我忠勇四千萬臣民。其誰望耶。

外寇

經紀南島
大勢字內

廖亡黃纂

其禍生不虞

人心國憂

獨縉青史坐更深。一穗寒燈照古今。安逸易招傾覆禍。邦家興廢在人心。
白山曰。外寇之禍。不在一國勤勞日。而在上下安逸時。不憂勁敵之難
禦。而憂人心之易怠。竊察治亂成敗。陟安逸。愈久則人心愈怠。變生不
虞。其禍不可救也。當豐臣秀吉時。我國喪亂。機平人心未安。秀吉以外
征爲事。將士皆裹瘡。遠趨海外。于壯斃兵役。老弱疲餉。秀吉中道
沒。將帥不和。方此之時。使明韓併力大舉來乘其隙。我國之安危未可
知。而當時不聞有外寇之禍也。德川家光爲久安無事之計。鎖海港。以
絕外交者。二百餘年。不復知宇內形勢。人心日怠。兵備弛廢。至是歐米
風氣益開。我國獨受固陋之弊。及米國來乞互市。朝野洵々和戰不決。
內訌外患。事不可爲。由是觀之。外寇之禍。不生於勤勞之日。而安逸之

疆國適足以取傾覆之禍矣。今而回顧幕季之事。使人毛骨俱悚。惟
聖斷英果。輔弼忠良。賴祖宗之靈。與皇天之佑。轉禍亂機。爲大業復
興。會興文講武。二十餘年。擊破驕清。懶眠奏前世未曾有之功。今也和
議方成。國家無事宜。及此時修海陸軍備。經紀南島。警戒北門。進制宇
內。大勢矣。苟憂國家者。近察之幕季。遠鑑之豐臣氏。以勤勞爲常。雖勁
敵不足以爲患也。

東洋諸國

佛英經略。遍南陲。露國雄圖。難測知唇齒相依。殷鑑炳日。清離合卜興衰。
左氏傳曰。唇亡齒寒。

白山曰。東洋諸國。印度。緬甸。安南。暹羅。爲英佛所略。露國中央亞細亞

白
海
相
合
可
保
洋
平
和

清
國
不
知
恐
懼

歐
洲
侵
犯
何
所
底
止

我
機
彼
廟

和
戰
紛
紜

鐵道夙奏其功。西伯利亞鐵軌計畫已定。方此之時。日清兩國相合。則東洋平和可保矣。離則其安危未可知也。

清國不知我欲修兵備保平和以應字內大勢。

滿清國老日蹙。踞恃人民土地多。却妬神州文武。縛不知我意在平和。

白山曰。電氣瀛力。運轉機械。過山渡海。歐亞猶比隣。然東洋大勢。不得

以不一變。清國徒恃地大人多。徜徉容與。爲不足虞。如坐弊船。將入深

淵。我國夙有憂于此。欲興學講兵。制大勢以保東洋。平和清國妬我文

武成績。以爲有異圖。及見廢琉球。藩扶掖朝鮮。國猜疑。陰房暗生敵懷。

之心。頑冥之不可諭。昏眠之難醒。覺不復顧東邦。氣運將日衰。若非

有我國儼然當衝路。以護其頻運。則歐國侵蝕。何所底止。豈不戒懼哉。

傲頑侮我。妄啖遠。不問東洋大勢。非無復提携和好意。北洋艦隊耀兵威。

白山曰。清國呼我爲倭。指朝鮮爲東藩。干涉韓政。教唆權臣。以妨我商

業。修北洋軍備。以示其兵威。我讓而彼益驕。欲無背馳。不可得也。

征韓議不協
明治六年九月十三日

半島朝鮮蠻民頑且痴。愀然屬我。極嘲嚙。廟論和戰。紛紜後。不出征韓問罪

師。

朝鮮國王父李是應。將大院君。遜璋延政。憤歐國釁。貸東洋諸國。固執獲夷。澆殺觀佛

國宣教師。及僧徒。屢應二年。秋佛國軍艦至江華島。爲韓兵所破。李是應傲然曰。歐兵

不足惧耳。建碑京城鐘路。刻洋夷侵犯。非戰則和。主和賣國。十二字。見日本吏人服裝

倣洋製。生輕侮。意韓人榜日本館曰。日人親歐。均爲賊耳。不可共交。若犯此禁。可處以

斷頭刑。李是應又移文八道。與榜書。意同。我士人聞之。莫不憤懣。著明治六年辛未。廟

韓兵砲擊

朝鮮獨立

倭寇東顧
死忠勇陳

有可憤者
其憤有已乎

私與燕帖
非於此時

任
西鄉薩摩
將當道韓
金權大使

時。

也。

幾歲欲修隣好儀。江華各暴舉促其期。日韓更結通商約。正是朝鮮獨立。
德川季世。通好歐米諸國。自是朝鮮不復來聘。大政復古後。隨嘗欲修復好韓。延不應。
朝廷寬宥。遣花房義賢商戰東萊府使。定日韓通商之事。因駐外務官一員。建日本館
於釜山草梁。是爲維新後。日韓通商始。明治八年八月。韓兵砲擊我雲揚艦於江華島。
我兵應戰。援其砲臺焚永宗城。九年一月。遣黑田清隆。井上馨詰之。韓廷謝罪。更約通

日韓修好
明治九年二月

亦快乎。然當識和之日。強邦容喙。正道之不行。公憤之不振。又有類於
辛未之憾者。忠臣烈士之志。不可以不繼。則嘗瞻臥病。寤寐爲念。以後
時機。至使遼東戰死之鬼。瞑目於地下者。是臣子百年之務。而非可已

白山曰。臣子之愛國也。有公正之憤。不可已者。而謬譔致仕。抗爭戲死。
夫公憤者。臣子之至誠也。使臣子無可憤之事。則已若夫有可憤之事。
而不能伸其憤。則臣子之憾。其終有已乎。楠公七世教賊之言。可以想
矣。余傷私學黨之不得伸公憤。而悲其愛國之志。征清之役。大師一舉。
使清韓悔過伏罪。彌二十年間公憤之所鬱積。足以慰隆盛等魂矣。不

丑役

堂決征韓陸軍大將近衛都督西鄉薩摩將當道韓全權大使任道北村重賴別府
晉介子朝鮮池上四郎武市熊吉子。遼東觀地理險易。察游韓事。稍會岩倉右府木戶
大久保諸氏。自歐洲歸。大非征韓舉。曰。歐國之視東洋。非一日也。宜治方內。而及外。其
今啓陳清韓兵運。禍結不解。曠日彌久。紛糾相爭。爲漁父所獲。已。廟職紛紜。岐爲兩派。
及平和論。制勝主戰者。隆盛以下諸參議。聯袂去朝。私學黨之禍。隱兆於此時矣。有丁

日韓保平等權

我國使館駐韓京

還償金開冥頑

五十同胞罹虐殺

激成我國人怒啓兵端

商新開二港定測東朝鮮近海營漁業等事朝廷乃認朝鮮以爲獨立國告之歐米同盟列國於是朝鮮始爲獨立王國日韓通商嗣盛

朝鮮國獨立證

列國同知獨立至清廷答語已昭然劈頭第一新條約共保日韓平等權
慶應二年清國公使魯佛國明治九年又答米國曰朝鮮非支那屬邦也明治六年答我副島公使亦爲明治九年二月日韓條約第一條曰與日本共保平等之權

明治十五年朝鮮京城亂

亂餘善後議方成內地旅行壇里程謝罪賠償條款定日州軍隊駐韓京
朝鮮京城衛兵作亂戮我公使館堀本中尉以下死者七人朝廷發兵問罪要求數事
韓廷謝罪因定條約六款增內地旅行里程駐我軍隊於京城使韓廷供兵器費
還附償金四十萬圓助韓廷改革費十七年

四黨分歧意不同朴金憲國見誠衷大東高義扶孤弱欲啓冥頑變陋風

韓廷權臣分裂爲四黨派曰開進守舊嚴黨兩端開進黨朴泳孝金玉均等銳意謀除積弊我政府重鄰好還附償金四十萬圓補助其國政改革費以開冥頑

明治十七年朝鮮京城亂

清兵凌辱不堪聞又見韓王投彼軍五十同胞罹虐殺京城落日慘寒雲
韓廷開進黨首領洪英植朴泳孝金玉均徐光範等殺守舊黨高官數人把握政柄閔族依清兵作亂圍韓王宮王惧投清軍我國人罹虐殺者五十餘人婦女被凌辱者數人

屈辱激成我國人怒

入洲壯士髮衝冠日本刀鳴紫氣寒公憤猶如怒濤起激成終見啓兵端
十七年京城變我國人罹慘毒禍而天津條約只定三款而已不足以伸其屈辱矣防殺賠償不過十一萬圓我商人損失猶多蓋對外策賤而清國彌益傲頑激成我國人

對外策謀

具體機狀

慈終啓兵端

刺客殺金玉均二十七年五月二十七日

星日光輝明晦時國家風氣闔開期已哉志士回天業一木難支大廈欹半途事敗不成功慷慨空傷頑陋風猛虎毒龍知苦節嚴霜烈日見孤忠
清李經芳防金玉均於上海使韓刺客洪鍾宇殺之具體機狀金玉均流寓我國敗虜朝野之士多與之交及聞其死憤潸人誠昨與韓人殘忍莫不起敵愾之心者

白山曰余嘗遊小野田警保局長家觀金玉均書局長在小笠原島曰興玉均交爾後音問不經因談玉均事蹟甚詳曰明治十五年玉均與朴泳孝同奉使來于我國接朝野名士始知宇內大勢後因井上外務卿言有所覺悟以改朝鮮弊政爲任歸國之後與朴泳孝等收攬志士

欲脫支那羈絆而全朝鮮獨立半途事敗朴金二氏遁投我國閩族請執之不許又將託清國要求於我政府慮以生大覺移玉均於小笠原島數月轉北海道居五年又抵東京朝鮮政府發刺客伺朴金二氏三十七年五月清李經芳誘致玉均於上海使刺客洪鍾宇殺之致屍於韓廷韓廷大喜梟之漢江楊華津榜曰大逆無道金玉均之屍寸斷四肢梟之各道金玉均憂國之士固執公道者也韓廷權臣挾私怨而戕之清國助之以恣其殘忍公道之不行至此清韓前途可以見矣我國人尤重公道待物甚厚如金朴二氏豈忍棄之乎孔子不射宿仁者護窮鳥清韓之人口稱仲尼而其行为如此所謂未讀論語時是此等人讀了後又只是此等人便是不會讀者歟

我國尤重公道九重物甚厚待

山河盡爲
甲兵

呼哨聲爲
原野

隱英兩國
所納訊

隱御出兵

朝鮮東學黨亂韓人呼洋教曰西學稱東學黨者其惑排洋教也

志士乘機除暴橫國族指

國民未止怨嗟蹙閔家再執韓廷政入道山河。

盡甲兵。

閔族握韓廷權貪污無所不至國民怨嗟十七年閔進黨乘機蹙蹙與毒其柄閔族依
清兵作亂再攬政權無幾東學黨起二十七年三四月交亂民會集至五月蜂起者及
一萬餘人以除暴官污吏爲名

清國出兵于朝鮮以公文報之二十七年六月二日

知照行文理不當惹衰誤國李中堂自稱猶踐天津約枉唱屬邦言似狂
天律條約曰出兵于朝鮮則可公文知照六月二日李鴻章報曰屬邦朝鮮有內亂請
援因出兵隨失津約道之責邦

白山曰十八年英國軍艦略取朝鮮巨文島露國促清國政府撤去英

兵清國告英政府曰巨文島朝鮮國之所領也朝鮮國實臣屬我幸勿
害我權利英兵輒去清國喪答我國及米佛公使曰清國不關於朝鮮
國和戰大權其所言前後異辭而露英兩國亦無所鞫訊詭譎之無窮
公法之不明往々若此今李鴻章公然呼朝鮮爲屬邦者安知非藉口
於巨文島之事乎。

政黨相爭互掣拳紛論橫議亂如麻清廷誤作分離兆豈計一邦同一家。
論語曰邦
分崩離析

清國見我政黨相軋議論不協海軍擴張鐵計識不如意以爲人心分離兆隱御我
不能用力於外事而出兵於朝鮮

大島公使入朝鮮京城二十七年六月十日

大島公使
參入京城

退成旅團
一部隊入
京城

發公文求
撤回

李翁心算
離

清庭伺隙出精兵進上牙山已六營公使黎明侵大雨疾馳如矢入京城
大島公使搭入重山經至仁川常備艦隊戰隊護衛公使冒大雨入京城時潛兵上牙
山者天津三營旅順三營皆稱精銳

第五師團中退成旅團一部隊入京城

皇軍振旅上仁川銃劍相摩五夜天進據京城根本地出師一躍着先鞭
二十七年六月十二日我第五師團退成旅團一部隊一千餘人搭和歌浦丸至仁川
時我軍總樞為千代田萬雄自福州赤城自芝罘來與吉野銳將大和等同在仁川近
海護衛運送船上陸即夜向京城以定我根據絕牙山平壤連絡潛兵孤立失勢

第五師團中混成旅團達仁川

王旅飛從天外來耳難及掩迅奔雷李翁陰計齟齬甚還發公文求撤回

我陸軍就第五師團中編成混成旅團大島少將義昌將之廿七年六月十一日發李

品港兵凡五千人運送船十隻十四日達仁川於是李鴻章應計大為齟齬還發公文

人心一決
日望開戰

小門解紛

施駿公使

舉獨立實

我國人心一決

以要求我兵撤回

大鎮狁勢欲驕一朝殺氣滿乾坤廟堂未下旂懲令猶有深謀遠慮存

國國人心一決日望開戰然政府豫知和平日有刻國干涉之事慮其辭柄隱忍俟

時機至

韓兵砲擊大島公使

韓王謝意太慰勳急使迎來大院君獨立實明開國政京城小鬪解紛紜

大島公使迫韓廷要求廢清韓條約攘斥潛兵三軍七月二十三日將謁韓王拂曉至

光化門韓兵俄然砲擊公使我護衛兵應之斃十餘人奪親軍總雲進入城中韓兵爭

先逃走森少佐護衛王宮公使謁王有所奏謁王陳謝賜勅語曰予知弊政不可不改

而為事情所掩蔽庶其國好意自今以後將唯教皇從因馳使召大院君委以國政於

是韓廷一新免清國干涉貶貪污權臣棄賢才除積弊設軍國機務所攘斥牙山潛兵

長
為
樺
山
中
將
進
試
攻
堅
艦
隊
聯
合

拒
喉
指
勝
算
定
於
中
精
兵
戰
於
外
前
一
期
戰
先
驅
以
海
軍
為
先

定
征
清
戰
畧

定征清戰畧

以明獨立之實

作戰先開第一期。直前掃蕩北洋師。幄中夙有籌邊策。渤海灣頭樹旭旗。白山曰。唯幄征清之策。雖不可知。然讀以彰仁親王任征清大總督勅書。而見分戰畧綱領。以為二。蓋掃蕩北洋敵艦。把握韓清二海樞。寧遠陽奉天。而樹旗於渤海灣頭者。是為前期戰。全軍渡海。置大總督府於旅順。堂々之陣。正々之旗。破山海關。取太沽砲臺。進而陷北京城者。是為後期戰。所謂扼喉拊背者也。我軍之勝算。定於中。而精兵戰於外。投機應變。進退如意。不異臂使指。宜乎百戰百勝。能立曠世之功也。若非我寬洪許和。則長驅萬里。制四百州之命。期已在三旬間。抑前期之戰。

以海軍為先驅。使我艦隊不得全勝。則後期之功固難必矣。然而開戰於豐島。首奏殊勳。黃海之役。大破清軍。以制海上之權。威海濱之戰。殲清國水師。永雪艇隊之身。以震懾歐洲強邦矣。六銀鰲。狄敵海航行。直上敵地。拔要港。陷堅壘。馳電擊。將赴日。迫北京。以奏後期之捷。清國雖驕。頂烏得不酬。罪論乞降於軍門。哉。嗚呼。如征清之役。可謂能不達戰畧之所豫期者矣。

編制聯合艦隊二十七年七月

編制新成艦隊。全進軍遙指北洋天。蒼為政。勢當衝路。把握韓清海上樞。清國北洋水師。稱為精銳。戰艦堅牢。蓋非易當。老成諸將。候皆有所慮。戰略未決。樺山中將建畿。欲進試攻堅。有時。旨以樺山中將任海軍々分部長。合常備艦隊。西海艦隊。

豐島之役
坪井中將在旅敵艦不為禮啟日清戰端之號傷

與日成功
優征清役

悔失言復
何益
中將之慮
可謂遠矣

伊東中將
為司令長官
坪井少將
為先鋒
相浦少將
望西海艦

及諸艦編制一大艦隊稱聯合艦隊伊東中將為司令長官坪井少將將第一遊擊隊
相浦少將將西海艦隊編制已成集合海軍全力其勢大振

白山曰我政府觀東洋形勢知將有不測之變夙決海軍振張齟齬山
中將時擢為海軍大輔巡回歐洲觀視兵制招歐國高等技師用力於
軍艦製造之事拮据積勞經營慘澹黃海之役我艦之喪殊勳者其製
作多係中將在職日明治二十五年帝國議會中將固執海軍擴張議
銳意論辨不遺餘力當時議員攘斥海軍不容中將之言至今悔其失
言復何益蓋中將之慮可謂遠矣征清之役中將以特旨當大任編成
一大艦隊集合帝國海軍全力進取攻勢以把握海上權其功豈不偉
哉夫中將之當時用力於國防拮据積勞者經十有餘年而後其功大

豐島海戰啟日清戰端

二十七年七月二十五日

顯自今以後任國防責者猶中將之當時用心果斷從事不少解怠則
兵備益完國勢益張他日能成大功庶幾乎有優於征清役者矣因略
叙中將經歷欲使後人倣之也

吉野排波快若飛將軍應砲不怠機卒逢清艦制全勝開戰偉功揚國威
七月二十三日聯合艦隊致佐世保向朝鮮海第一遊擊為先鋒二十五日午前七時
吉野秋津洲浪連三艦進至豐島沖遇清國北洋水師濟遠廣乙二艦坪井少將在旗
艦吉野敵艦見之不表意意悉開砲門連為敵備既而彼我交發砲聲隆隆
戰開旗颺意氣豪猛風捲海怒濤高火光一閃驟前碎波際先傾廣乙號
激戰凡一時二十分消艦若閃然我第一遊擊艦隊稍銳固非可當廣乙先擊我丸大

韓邊曉逃

慶沒高陞

日本軍艦
行為正當

減煙力知不能返向東岸淺渚而貼岸遠倉皇不遑避險沿島陰走後見旗乙破碎委
綯東小澳蓋清兵自火其火藥庫而逃也

濟遠倉皇冒險馳操江搖搖揭降旗千兵號哭高陞沒滿海腥風漂死屍
會消經操江駛商船一隻來見我軍艦驚走而知其不可脫揭白旗軍艦浪速士官就
商船檢之則英船高陞號為清國所雇假將校十六人陸兵一千二百人野砲十二門
將至穿山鵝也因命隨行船長從命清兵脅之不肯隨行便勒船長去船將軍又沮之
異頑難曉移晷四時我艦敵敵來襲搥赤旗以示危急意遂擊沒之船長以下得免者
三人並入聞之頗生勦英圖軍洋艦隊司令長官以日本軍艦所為為正當泰西公
法學者亦同歸正於日本事得明白

晚隙強邦如虎狼騷然物議變難量光明心跡誰容喙日本行為歸正當
白山曰高陞號籍英國及我艦擊沈之英人置喙者甚多然至審議其
當否莫一可指斥者事歸明白物議全止蓋我艦之處事在急遽忙劇

豐島戰功

倭將
不并少將
不失應砲

振作四千
萬人勇氣

韓海不復
見各邦商

間而不愆其措置亦敏乎

豐島風雲慘未開高陞沈沒最堪哀自茲韓海全歸我歐米商船不復來
白山曰戰陣之間有預期成功而其功最偉者豐島之役是也明治二
十五年帝國議會議軍備擴張之事稜論不協言涉冗雜使海軍失信
於國民矣及征清役起皆曰陸戰勝可必矣海戰之輸贏未可知也多
懷危疑者豐島之戰卒逢清艦不失應砲之機一戰制全勝擊破廣乙
捕操江走濟遠而我艦體不少毀損兵士無死傷者於是乎使國民知
有我戰鬪力大超過於彼者以解其惑振作四千萬人勇氣豈非不期
而得偉功者乎高陞號之事又發於不期偶於開戰之初擊沈強國一
船而各邦商船不復見隻影韓海全歸我有得擅運漕船來往可謂偉

敵強照不精

直隸練軍

松崎大尉

水沒泥脚

咫尺不辨

水田沼相連

深泥沒脚

功中允偉者矣。

安城渡夜戰二十七年七月二十八日夜

雲影蔽天星失明。全軍噤寂。肅無聲。川流泛溢。橋梁斷。沒脚深泥不可行。退成旅團。屯紮京龍山三句七月二十五日。旅團長大島義昌發龍山二十八日。至素沙坡。南有成歡驛。清軍據丘陵。與我陣地相距里餘。水田沼澤相連。中央有川曰安城。渡清軍列壘。張左右翼。正而南。處築二砲臺。壘前開豁。彈道長伸。不得近之。大島少將分軍爲二。使武田中佐將右翼。自將左翼。將乘暗襲成歡。廿八日夕。各隊裝以待令。下。此夜宿營掩天。晦冥不辨。咫尺夜半有命曰。直可進擊。兵士躍然而起。全軍斷柝。肅々無聲。二十九日午前零時三十分。左翼隊渡安城川上流。右翼隊直行涉水田。敵環斷絕。橋梁盡墜。下流。水沒肩泥。掘脚不得脫。戰時山中尉以下溺死者二十餘人。渡川過沼澤。則村間伏起銃彈。如響。松崎大尉從容列隊於塘陰。而應戰。武田中佐下馬。勵聲曰。邊大尉又來援之。

塘陰列隊向清兵。應騎衝。鼙鼓地生。奮進致身。松大尉安城一死策勳名。

松崎大尉先衆折進。丸來中腔。大尉不屈。益進。突敵。丸又貫其肺而墜。神州男子不思生。銃劍連鋒。斃敵兵積道。遺屍清勁卒。紀胸直隸練軍名。我軍連統鎗突敵兵。敵兵敗走。遺屍橫道。檢之胸下。黑簪曰。直隸練軍砲兵並李鴻章所兼養之勁兵也。

第五師團中混成旅團。援成歡壘。二十七年七月二十九日

皇軍渡水據丘陵。雲捧旭旗。松翠凝。堪笑敵彈。德正。砲聲轟破。九霄層。安城渡戰。凡三十分間。清軍敗走。右翼武田支隊。正列前進。既而左翼隊渡上流。對敵右翼。列砲於高丘松林射擊。第七堡武田支隊。攻第五堡。敵壘開立砲。應戰。砲然震天。然照準不精。發擊正鵠。我相繼殲命。中數回。開計號。大島少將下令突擊。陷第一堡。進援第二堡。武田支隊又陷第四第五二堡。

一堡先陷。四堡危。勇兵肉薄。敵難支。戈鏃委地。牙旗倒。中有軍營日記。遺我全軍。內海第三營清兵。乘牙旗爭逃。遺總兵清士。成軍營日記。此戰我將校死者二

古志少佐
憤慨伏刃

宣戰詔

人下士卒三十二人敵死傷凡五百八

混成旅團先鋒後期古志少佐憤慨伏刃

淚。漣。戰。袍。疲。未。乾。乃。兵。吊。死。共。凄。酸。軍。歌。激。新。添。譟。一。曲。韓。山。行。路。難。
參謀本部當出兵之初以馬關爲兵站部根據地設倉庫庫其本源仁川嶺山各設
兵站雖然軍夫募集未足供其使用朝鮮內地兵站部徵發韓民韓民避役逃輸失便
行軍困難最甚七月二十六日混成旅團先鋒古志少佐將向振威所雇人馬悉逃後
期而不得發憤發病伏刃而死

發宣戰詔二十七年八月一日

復。和。永。遠。保。光。榮。聖。詔。昭。々。大。義。明。熱。血。淋。漓。四。千。萬。一。齊。傾。注。北。京。城。
詔曰期依願汝有衆忠實勇武速克復平和於永遠以至帝國光榮先是豐島之役日
清兩國已啓戰端因以八月一日發宣戰大詔

聯合艦隊大舉襲威海衛二十七年八月十日

威海衛挑
戰

敵頭裂毗水茫茫波上何邊決戰場威海衛空無艦影砲臺時見白煙颺
二十七年八月十日伊東中將率金龍隊二十隻及水雷艇向威海衛進入灣內回轉
數次不見敵艦岸上砲臺時試射擊而已

日韓兩國結攻守互相助盟約二十七年八月二十六日

討。平。亂。黨。東。學。鎮。猖。狂。驅。逐。騎。兵。游。兵。撲。陸。梁。爲。結。日。韓。攻。守。約。不。將。弱。肉。
委。貪。狼。

山縣大將出征二十七年九月九日

賜。刀。大。將。總。戎。行。雲。日。瞻。々。旗。影。颺。命。軍。宮。中。親。補。式。陛。辭。万。里。帶。榮。光。
我征清軍大舉將入嶺州第三師團全軍戎裝已成第一師團亦將續發八月三十日
行親補式於宮中以山縣陸軍大將補第一軍司令官賜寶刀九月九日向第三師團
長桂中將發字品港

山縣大將
出征

大兵 搜索 騎達

野隊 中將 豫定 更母

警進 大本

駐大藏于廣島二十七年九月十五日

遠進大警威力至。總收海陸二軍。權東洋。正值風雲會。仰見飛龍在碧天。
玉仗煌々照碧空。錦旗高揭九天風。廣陵城外。夜將半。欲消聲興涼月中。
王師大舉。分爲三軍。欲一渡。助緣江。略蕤陽。奉天。一上金州。半島。取襄港。以扼渤海。
喉計。盡已。悉。九月十三日。軍。還。發。東京。十五日。駐大藏于旅島。行營。凝。統。制。陸。海。兩。軍。

豫定取平壤策

將軍計畫豫期程。暫待敵師湊一城。海陸臨機相策。應欲殲清國八旗兵。
我軍將攻平壤。第五師團長。野津中將。都署諸將。大島少將。將退旅團。爲前衛。立見
少將自朔寧。佐藤大佐。自元山。各將退旅團。支隊。而進。柴田中佐。將本隊第一行進
團隊。友安中佐。將本隊第二行進。團隊。安滿中佐。屯京城。大迫少將。屯元山。平野大尉。
屯洛東。以八月三十一日。發京城。同十五日。達平壤。行軍十五日。蓋此役。集清軍於一

城而欲殲之也。將軍入平壤者。盛字軍十一隊。提督總兵衛汝貴。統之。奉軍九隊。提督
總兵在實貴。及總兵郭桂林。分管之。盛字軍八隊。馬玉昆。統之。奉天練軍。盛字營四隊。
豐陞阿統之。凡三十餘隊。一萬三千餘人。

搜索騎力戰而死

日本刀寒吐白虹。丈夫臨死氣逾雄。人稱一騎當千勇。朱染亭邊戰血紅。
八月十日。我搜索騎至中和達。騎兵百餘人。而田中尉。竹內少尉以下。死者六人。西莊
平見捕。不風而死。得脫者。僅二人。

第五師團向平壤

二十七年八月三十一日發
京城九月十五日達平壤

鐵蹄高響玉驂騑。百里平城指點中。煙火荒涼。鴉影亂。溪村秋近夕陽風。
第五師團達平壤。九月十日。

夏將覘機。握豹稍健。見倉突。撫吹毛。胡笳聲動。韓山夕。敵壁橫。空月影高。

城陷平壤

朝鮮第一雄鎮

大島少將馬戰

欲與聯隊旗同斃耳

按牡丹臺

陷平壤城自九月十五日至十六日

斷岸懸崖平壤東山河繁帶地形雄峻乎絕險連西北箕子臺高摩碧空平壤城東斷岸高峻北西有牡丹箕子乙密等。高臺西控大同江流山河繁帶要害連接。只南方朱雀門地勢稍低。還朝鮮第一雄鎮也。

船橋里戰陣地平衍。敵據高堡。併力夾擊我軍。我軍當野砲着發點近接連發銃火線內而我山砲不得陣地。適在後方。試稍緩彈。不能奏功。因進砲隊忽為敵丸所集。永田少佐負傷。山本大尉戰死。激戰終時。各隊彈藥已竭。戶少佐部隊將校盡死。傷武田中佐部隊士官皆死。我軍色沮。西島武田二中佐。長岡少佐等。疾呼勵衆。大島少將義昌挺身奮進。日吾與聯隊旗同斃耳。遂破清軍。

合擊一朝諸墨類爭登天嶮。牡丹臺清兵股慄無逃路。四面皇軍吶喊來。

一卒開玄武門

滿洲突騎

敵揚白旗

立見少將將期寧枝隊。佐藤大佐將元山枝隊進攻諸墨元山支隊。拔一臺二臺頭寧支隊。拔三臺四臺。遂陷牡丹臺。時攻城砲未達城壁堅牢。不可破壞。日午牙城只獨存。榴彈駁中碎。周垣神州兵空膽如斗。踰壁直開玄武門。三村中尉部下一卒。跳險城壁。開玄武門。我軍進入城。本隊鼓旗觀示也。勢威孤城落日陷。重圍滿洲突騎。能輕命。三百精兵不歸。

野津中將將師。因本隊渡大同江。至平壤西一里山川。祠而陣。意甚決矣。曰。此城而不拔。則乃公葬地也。徐進迫城。々中色動。滿洲騎兵出城。馳突我步兵。叢射之。敵騎悉突。不止。斃者二百六七十人。暮天雷起。雨如傾。忽見城門揭白旗。一夜溪流紅血。漲伏屍斃馬亂縱橫。

十五日午後四時。驟雨如傾。各隊收兵。四時三十分。城中砲聲頓歇。白旗。訓七星門有一韓人。持書至元山枝隊。佐藤大佐一見。致之立見少將。時大雨沛然。書字濕潤。漫漶。

餘馬滿身。思敵艦。伊軍中將。率主戰艦。陳坪井少將。爲先鋒。

黃海之役

治韓人病

急劇之策
其功著矣

野津中將
戰略不遠

敵岸沈船
鮮血漲溪

不撓紙軍
潛國將校

征清討史

三十九

聖島戰後。敵艦深潛渤海。不出。我艦隊大舉至威海衛。而空歸。不聞砲聲三十餘日。餘馬滿身。思敵艦。會清國送兵於朝鮮。其揚陸地。在蔚綠河口。大東溝。得因揀江。艦長言而知。然未能審敵消息也。十六日夜。伊軍中將。率主戰艦隊。出大同江。吉野。高千穗。秋津洲。浪速。爲先鋒。坪井。少將。在旗艦。吉野。率之。松島。千代田。嚴島。橋立。比叡。扶桑。

如城。

北方遙望黑煙生。櫓影逾高艦。體明。橫陣向吾張。羽翼中央。二遠。定遠。鎮遠。屹。

黃海之役
二十七年九月十七日

能自伸。觀望成敗。以懷兩端者。韓人之病也。而使韓人決其向背。在平壤。一戰。然則中將急劇之策。不獨殲清軍。以奏功於平壤。而又能治韓人兩端之病者也。

難辨。少將讀書。去了靜海。大同。等諸門。皆揭白旗。少將自與桂大尉。過德。臺。下。至小管門。欲審敵情。言語不通。要求筆談。清國將校。無携筆紙者。不得以明其意。因約明日相見而去。此夜。城兵向義州。靛山。二街道。逃走。我兵要擊之。殺傷無算。箕子臺。下。死者最多。街道二十四五間。凡百二十八人。屍體與三十餘馬。相枕藉。鮮血淋漓。溪水爲紅。其慘狀。可以想見矣。此役。我軍死者。將校八人。下士卒百五十餘人。敵死傷。凡二千餘人。降虜五百餘人。將校左寶貴。徐玉成。楊建春。金得鳳。定祥。周某等。皆死。其餘死者。猶多云。白山曰。余觀平壤之戰。考之行軍日程。見其所豫定之不遠。而知野津中將明於戰略。後有傳中將言者曰。平壤之戰。肉薄高壘。以一日拔堅城。據歐國軍法而論之。爲失於急劇者。夫良將之用兵。猶國手之應病投方劑。所用之藥石。不一而效驗愈多。蓋急劇之策。用之歐軍。則不可。用之清兵。則其功著矣。是中將之所以能制全勝也。且夫屈從清國。不

三十八

樺山中將

敬會隔隔

先鋒諸艦
疾如驅風

揚威超勇
蒙九火起

敵艦健固

我艦回轉
操縱尤巧

擊非少佐
擊斃出函

新井大佐
巧爲回旋

爲本隊伊東中將在旗艦松島擊之赤城、西京丸從之樺山中將在西京丸觀戰、經總十二隻爲亂機陣、向海洋島航行、午前十時二十分、遙望一抹煙於北方、稍近則數隻艦影也、煙筒愈高、艦體愈大、於是揭信號、整戰備、使各艦就列、暨赤城、西京丸於列外、海程已望明知爲敵艦隊、衆皆踊躍、勇氣倍增、敵艦定遠、鎮遠來遠、經遠、致遠、濟遠、遠、靖遠揚威、超勇、廣甲、廣丙、及鎮南、鎮中、鎮十四隻、伴永雷艇六隻而來、北洋水師提督丁汝昌在旗艦定遠獨逸客將其爲顧問、左翼總兵林泰宗在鎮遠、右翼總兵劉步蟾在旗艦定遠、各當督帶官任、蓋護運送船、發旅順口、至帕綠河口、大東溝將、隨會我艦隊因欲決戰也、敵艦隊、環左右翼以爲擁陣、定遠鎮遠在中央、逆軍在其後、先鋒破浪、逼清兵疾若颶風、艦影輕、海路六千九、僅達劈、空敵砲、萬雷轟、先鋒諸艦疾如驅風、斜過敵前、逼其右翼、距離六千米、突敵旗艦先開砲、諸艦相繼爭發、我軍以其距離猶遠、不應而進、巨丸如織、毒煙橫、殺氣冥濛、晝不明、戰士鼓、呼快、絕揚威、超勇一時傾、我本隊繼先鋒、掩赤城、西京而進、砲戰已開、聲震天地、敵後翼爲我先鋒所迫、陣亂取

苦揚威超勇被九火起、不能進退、先鋒諸艦、繼進射之、超勇沈沒、揚威逃至大鹿島、辟淺落膠着焉、中軍本隊制敵威如虎、前隊第一應機健似龍、一線陣形、頭尾活、常山蛇勢、作操縱、敵中堅、不顧後翼、危急迫我本隊、本隊諸艦、砲利而速力、優敵艦、被我九甚多、定遠大槳爲折、敵艦不川、奮進他圖、定遠、鎮遠來遠、經遠、致遠等、欲與我本隊決、唯孤島等諸艦、與先鋒、吉野等、總敵艦爲回轉、操縱尤巧、一線陣形、頭尾相應、如常山蛇、比淑扶桑赤城、西京諸艦、體弱、速力遲緩、不能堪激戰、故陷危險、僅能得脫、扶桑沈殺術無遠、比淑勇剛能出圍、小艦赤城、大膽、西京、天祐脫危機、比淑、速力遲緩、與本隊隔、敵長、櫻井、少佐欲亂敵陣形而走、進入經遠、定遠間、勢甚勇、猛敵艦隊、欲捕獲之、少佐發速射砲、敵屍累積甲板、會巨彈來、墮下甲板、火起、三宅大軍醫、村越、少軍醫、石塚、大主計以下死者十餘人、苦戰出函、而居、列外、比淑已脫、列扶桑、孤立甚危、定遠進來、忽將衝空、艦長、新井、大佐、夷然不懼、巧爲回旋、以左舷

扶桑沈殺術無遠、比淑勇剛能出圍、小艦赤城、大膽、西京、天祐脫危機、比淑、速力遲緩、與本隊隔、敵長、櫻井、少佐欲亂敵陣形而走、進入經遠、定遠間、勢甚勇、猛敵艦隊、欲捕獲之、少佐發速射砲、敵屍累積甲板、會巨彈來、墮下甲板、火起、三宅大軍醫、村越、少軍醫、石塚、大主計以下死者十餘人、苦戰出函、而居、列外、比淑已脫、列扶桑、孤立甚危、定遠進來、忽將衝空、艦長、新井、大佐、夷然不懼、巧爲回旋、以左舷

以非戰員
實東中將
敵丸衆中
風血雨

高影激戰
狀者四回

水雷不中

赤城彈丸
命中來還
起火

坂本少佐
中丸

諸砲二齊射定遠艦腹徐行合本隊。艦體最小。故在列外。射擊定遠鎮遠。然速力甚微。不能續於本隊。來遠致遠。廣甲來逼。佐々木大尉先傷橋口少尉。戰死。艦長坂本少佐奮勇督衆。巨丸壞艦橋。而擊少佐。佐藤大尉代之。敵丸屢中。艦橋傷。佐藤大尉松岡大尉。又代督戰。近藤兵曹代松岡大尉指揮砲臺。發連射砲。中來遠起烈火。發第一遊擊來遠。敵艦始出死地。西京丸武裝。又在列外。因本隊而進。見比叡赤城陷重圍。揭信號以告艦隊。艦隊頗救二經。西京丸忽失掩護。孤立當敵衝鋒。巨丸來碎。飄器不能轉。其舵機平遠。廣丙率水雷艇數隻來射。西京丸避之水雷掠左舷而去。敵再射以爲命中。放聲歡呼。西京丸亦決死。水雷又過船下。此日軍令部長樺山中將。搭西京丸觀戰。船襲砲丸大小二十餘。損傷最甚。然無死者。

白山曰。此日。樺山中將。在西京丸觀戰。敵見其船體大。認爲上將所搭。爭進迫之。中將當砲彈衝。悠然使船員寫影激戰狀者。凡四回。英雄胸中。綽存餘地。此可以見矣。嘗聞海軍將校。評中將曰。寧喪全艦隊。不可

喪中將。中將我海軍精神也。蓋此役。水雷之不中。安知非皇天護我海軍精神哉。

黑雲炫爛。限時彈多。白水跳騰。着發丸。着發丸落。鐵艦衝撞。壓戰急。腥風血雨。湧狂瀾。

旗艦炎々起。戰氛火光百道。照演雲巨丸。聚中多傷死。血沫迸飛。陳肉紛。

旗艦松島。揭將旗先進。爲敵丸所破。中火藥爆發。震動欲裂。火移艦體。不可撲滅。炎烟照天。白煙滿海。砲坐砲架。多摧。死傷八十餘人。志隊大尉伊東少尉皆死。血迷肉飛。伊東中將。泰然立艦橋。指揮兵士。以重藥隊等。非戰員補填砲隊。奮勇力戰。

海雲慘澹。日光陰屢見。悲號清艦沈。敗敵遠逃。天已暮。水波渺々。跡難尋。凱歌聲起。飲斜暉。水盡天空。賓雁飛。涵影孑星。韓海綠涼風。吹上健兒衣。敵艦超勇先沈。揚威傷走膠著。鎗聲來遠。平遠火起。經遠致遠。相尋沈沒。濟遠廣甲廣

收戰而還

將士兵卒
被能精敏。

因前後皆逃定遠健勇損傷最甚。火燒不滅。橋立破。島千代田扶桑齊迫之。鎮遠獨掩。定遠奮當我諸艦收戰而退。時五時三十分也。此役清艦沈沒者三艘。殘者一我軍。不失一艦。清軍免全艦。陳覆沒者賴鎮遠定遠力。

皇國威名揚九區。若斯激戰古來無。歐人休說壞伊役。世界爭觀黃海圖。白山曰。余閱日清戰艦比較表。清國艦隻五十二噸。數六万九千。多於我二十四隻。一万一千噸。其一等甲鐵艦。定遠鎮遠。皆世界有數良艦。而富於戰鬥力。如我帶甲艦扶桑。噸數居其半。製作係於舊式。速力遲緩。獨水雷艇噸數。有過於彼。而黃海之戰。不與觀之比較表。戰勝固難必矣。唯恃我艦速力稍優耳。而大破清艦一舉。收海上權者。是乃將士士卒技能精敏。勇敢無比之所致也。此日敵艦。或燒。或沈。或傷。而逃。奮鬪不屈。收戰而去者。定遠鎮遠二艦也。若使我艦有才能當之者。此役

不能得將士精銳

鐵。清艦亦非難也。抑海上之戰。堅艦利砲。爲主。不能獨恃兵士精銳也。後之憂外患者。宜鑑於定遠鎮遠善戰。以製艦鑄砲爲務。

我海軍收黃海之權

戰後雲開。水接天。波頭無影。各邦船。旭旗相照。連千里。一勝歸吾黃海權。黃海一戰。敵艦損沒殆盡。深潛渤海。不能復來。望海上之權。全歸我有。航路安全。還漕如憲。獻黃海捷也。皇上特遣勅使於艦際。昭曰。制壓敵。摧殘。勳無比。嗚呼海軍之功。不亦偉乎。

白山曰。朝鮮海日。清兩國必爭之地也。得其權者勝。失之者敗。勝敗之決。在其海權得喪。豐大閣之征朝鮮也。我海軍爲韓將李舜臣所破。海上之權歸朝鮮。而輜重不接。陸軍雖精銳。然不能過福祿之水。征清之戰。若使敵水師擅海上權。我第一軍孤立。不得深入敵地。亦何與文祿。

一旦緩急
倉然協合

將士忠勇
凌駕英人

極多
海軍功績

役異乎。然而黃海一戰。大破敵軍。收海上權。以制全勝者。賴海軍功。抑九環之國。以海軍爲防備主。英人屢與西班牙戰。以擴張海軍爲務。盡國力於堅艦利砲。積勞累功。兵力日強。及佛帝拿破崙第一世與西班牙併力來襲。英將納爾森率艦隊橫衝路鑿沒佛軍。拿破崙抱曠世之才。擁歐洲精兵。而不得近於貌列頗島沿岸。蓋英國之雄視世界者。海軍之力也。我國地勢。酷肖英國。而黃海之役。與特拉華爾牙戰相類。將校士卒忠勇。凌駕英人。而伊東中將之功。不讓納爾森。豈不盛哉。雖然。國家安危。關於海軍。弛張勝敗之數。歸於海權得喪。而我國之致力於海軍。歲月猶淺。戰艦未全。則擴張之務。不可少怠也。傳曰。勝則狂。狂則怠。勝而克戒。是國之所由保也。其言可以鑒矣。

靈應有明二十七年九月十七日夕
戰。休。楸。上。止。靈。應。黃。海。波。恬。瑞。氣。凝。九。万。雲。程。翹。勁。一。騰。欲。掣。北。溟。鵬。

黃海戰勝夕有一鷹來止於軍艦高千穗檣桁鐵嘴鈎爪深時放光斂翮欲揚隨供
天覽賜名稱高千穗昔者神武東征金鷄上翔神后討蝦赤鱗獲棚今靈應又來
止于艦楫一軍以爲敵勝兆

開臨時帝國議會二十七年十月十六日開會

人。車。駕。親。臨。勸。諭。臣。天。顏。咫尺。龍。光。新。軍。資。一。億。五。千。万。滿。院。無。非。協。贊。

十五日開帝國議會於廣島車駕親臨會堂十九日決募軍費一億五千萬圓之譜
白山曰我帝國議臣外爭內和國家無事則儼言侃々樹黨爲羽一旦
緩急則翕然協合如面手之不期而相救抑我國民戮万世一系皇

室。一國猶一家。然豈不懿美哉。

第一軍達義州。二十七年十月廿日。

繁霜如雪。滿軍營。月照韓山。雁影橫。鴈綠投鞭期已近。夢魂飛繞北京城。我征清軍以第三師四第五師團編成第一軍。山縣大將爲司令官。許律中將爲第五師團長。桂中將爲第三師團長。大島少將義昌爲第九旅團長。立見少將爲第十旅團長。大迫少將爲第五旅團長。大島少將久直爲第六旅團長。黑田少將爲第一軍野戰砲兵監。小川少將爲第一軍參謀長。將進渡順綠江。前軍已過安州。入定州。先是清國潰兵掠奪而過。沿途韓民聞我軍至。荷擔皆逃。微發甚難。運輸失便。經二十日。得達義州。行軍六十餘里。

清國嚴守備。

虎山遙接九連城。六十餘營三萬兵。聯系堡高天險地。寒流拍岸大江橫。

出征
大山大將

大山大將出征。第二軍發字品港。二十七年十月。

平壤已陷。清李鴻章增發援軍。擊四川提督宋慶爲征討總帥。稱爲老將。知兵者。盛設守備。以待我軍。盛字軍十八營。銘字軍十二營。毅字軍十營。謹防淮勇。及古北口練軍四營。淮軍七字虎勇五營。總二萬四千五百人。安東縣太孤山守兵十三隊三千七百八。黑龍江兵馬步十二營。四千人。豐陞阿。慶祥。珪。桂林。倭克津。泰等統之。設幕營於順綠江邊。據虎山險。築聯系堡八所。

恩賜龍駒。嘶日邊。天旗照水陣。雲鮮巨。扁。戕。荆。連。蒼。海。排。破。風。濤。漣。漪。煙。波。濤。洶。湧。地。如。浮。橫。梁。賦。詩。眞。壯。遊。人。立。敏。頭。遙。騁。眼。水。雲。一。抹。古。金。州。我征清軍以第一師團及混成旅團編成第二軍。以大山大將任司令官。賜寶刀駿馬。十月十五日。大山大將。率山路第一師團長。乃木。西。兩旅團長。井上參謀長。以下數十人。發字品港。十五日。夕。漸次達漁隱洞。運糧船三十餘隻。

第二軍達花園河口。二十三年十月二十四日。上花園河口。

征清詩史

四十九

入鳳凰城

四十敵營失守

一夜架橋

警備尤力

第二軍達花園口
擄花園河口

竹節迎刀。不覺堅馬頭。望鳳凰城。名煙八旬。老將何顏。面健走棄城。道奉。

第一軍第五師團。進入鳳凰城。九月十日。

二十五日。大迫少將。署右翼。渡軍橋。登東方高山。桂中將。將本隊。渡軍橋。追敵。墨正面。敵見軍橋。成大驚。黑田少將。列砲於高地。助本隊。與兵應戰。不遁。大迫支隊。窺慮自東山。敵射壘中。此兵擾亂。敵將。率九連城兵。二千來援。其勢甚銳。立見少將。邀擊之。敵走入梨子園。我兵尾擊。陷梨子園。桂本隊。大迫支隊。進拔虎山。二十六日。攻九連城。城兵已遁。此役。我兵死者十九人。敵死屍凡五百餘。虎山敵壘。四十餘。皆失守。

第一軍。渡鴨綠江。取虎山。九連城。清兵。夜潰。十月二十五日。

鴨綠江。分爲甲乙丙三流。甲丙二流。水淺可渡。乙流。經八十間。深一丈。許我工兵。乘暗夜。造繩橋。於乙流。作梁柱。橋於甲流。遂至鴨綠坡。攻。

甲流。鴨綠江。乙派。鴨綠江。奏奇功。千尺軍橋。若鬼工。夢破。清兵。膽先落。長江。一夕。現飛虹。

第一軍。工兵第五大隊。架軍橋於鴨綠江。二十七年十月三十四日夜。

此夜海上。警備尤力。至夜半。一艦放空砲。於是各艦。以電燈照海。備敵艇來襲。夜色。漾々。煙霧。濃。闇中。登莫水雷衝。電燈照海。明如晝。十里波頭。躍白龍。

聯合艦隊。掩護陸軍。十月二十四夜。

帝國艦隊之在漁隱洞也。伊東中將。遣入重山。磐城。島海等諸艦。於金州半島東岸。探究第二軍。揭陸地。十數日。而得好地點。即花園口也。蓋此地。點雖敵人未嘗知也。地點已定。中將。即艦隊。離第二軍。以十月二十三日。發漁隱洞。至海洋島。則日已暮。然不點燈。而進。二十四日。達花園河口。千代田陸戰隊。先上。旅軍艦。旗以爲首標。

船不點燈。終夜馳。二軍始入滿州時。海兵先上花園口。丘頂排雲。擊國旗。

健步山路中將

艦隊泊長島山

燬破鐵扉

鬼上官

天。

征雁高飛。樹影稀。迴颼颼。石點戎衣。連旬日本刀藏室。風蘭先人遑。孟威。清將宋慶受命爲元帥。日意氣頗揚。曰此行不能損後。一死以報國耳。及虎山四十餘營失守。而知鳳凰坡亦不可守。慨然曰。敗勢至此。何顏再見。帝額齡八十。餘生何惜。枕城死耳。部下陳之。遂走奉天。清兵將走放火。街市延燒不滅者一晝夜。

第二軍取金州城。十一月六日。

太子山。名山東。轉路迂回十里。跋崢嶸。健行中將猛於虎。夜到乾家。地名爲露營。

第二軍上花園河口。進魏子窩。自魏子窩至金州行程凡二十里。十月五日。至黃家店。河野大佐攻東方。乃木少將向前面。山路中將出敵背。中將轉路迂回涉險十餘里。入夜露營乾家屯。衆皆營中將健步。

鼓動城來。

十一月六日。何野支隊拔大和尚山二營。列龜山上。臨金州城中。師團本隊自復州街道入。進追城。賊兵狼狽。屢槍爭走。

堅城。聲在白雲中。仰見重門鎖半空。金鎗鐵扉皆粉末。一團火藥奏奇功。本隊哨賊將入城。壁而三丈餘。四方城門固鎖。因裝爆藥。破城。鐵扉而入城。

聯合艦隊泊長山列島邊。長山島在黃海。

角聲高入碧雲層。寥廓清虛夜氣澄。白露金風秋欲半。長山影冷一輪冰。第二軍之攻金州。艦隊泊長山列島邊。與之策應。進而爲攻。大連灣。謀顧而掩護。花園口外商船。

第二軍取徐家山。十一月十七日。

征鴻詩史

五十三

立馬壓天

近者喜還

敵著我器

連隊入大

皇軍陷大

陷徐家山

徐家山峙勢噴噴征雁影高風日寒。堅壁空兵已走紅沙崖下白雲殘。
徐家山在大連灣與金州城之間砲臺巍然縱空我陸軍敗書海軍亦攻之無敵不
敵而走。

皇軍陷大連灣砲臺十一月十七日

進行無復一兵勞到處清軍棄守逃。巨煩裝填供我用。居然唯見敵臺高。
大連灣金州半島要害而堅壘利砲備焉。我軍期敵力爭十一月七日黎明逼攻不見
守兵諸臺大砲裝填彈藥臺中遺棄旌旗兵仗甚多。中有水雷圖及防禦方略圖書等。
艦隊入大連灣。十一月十七日。

拘引敵船探水雷。大連灣外幾旋回。旭光輝到三山島。忽報皇軍領砲臺。
聯合艦隊在花岡河口長山列島拘引敵艦凡三十餘隻。十月二十七日捕敵水雷布
設船捷順號。名大連丸。十一月六日。進至大連灣外三山島彈擊站尾信號臺既而
筑紫赤城二艦來報曰。和尙島敵島見我國旗。翻水雷艇二十三號又報曰。敵島砲門

皆仰空盡此時皇軍自陸路入大連灣砲臺也。

金州城內置民政廳十一月十二日

創置金州民政廳。十條政則行。政護頑冥戰時禁止携我器嚴戒軍夫及
馬丁。

第二軍預令禁止軍夫馬丁帶我器。置民政廳于金州城內以觀蓋頑爲務。

恩德並施安土人。嚴明軍律政從仁。撫綏招諭惟爲務。近喜遠來逃。軍民
論語曰近者
莫遠者來。

第一軍第五師團偵察隊。破連山關清兵奪降天嶺險。十一月

連山關險勢岩嶠。四十人家晝寂寥。偵騎凌雲勢絕壁。摩天嶺上立寒
鷗。

第一軍過順綠江天險。拔虎山四十餘營入九連城。取安東縣一帶。地面以鳳凰城爲

假根據地置司令部以立見少將爲司令官少將發偵察隊搜索遼陽奉天敵情十一月十一日偵隊進破連山關連山關有長舍四十南北峻嶺連亘西有摩天嶺嶺十二日偵隊更進遂摩天嶺敵

第一軍第五師團偵察隊逢敵兵于寨馬集近傍十月十三日
猛烈突吉林兵出沒妨吾北進行候騎衝圍試勇戰不隕日本男兒名
吉林清兵出沒奉制我北進更立見旅團偵察隊與之相逐敵戰數回十一月十三日
足立大尉一中隊與清兵三千戰于寨馬集近傍平井大尉來援且戰且退柳原中尉
殿取不遺數日之後復其劍鞘於戰地

聯合艦隊再挑戰于威海衛港十一月十七日

陣形一字破波馳艦影縫天直若絲松島赤城儼成列定知清將訝神奇
十一月十六日聯合艦隊再挑戰於威海衛海戰後清艦潛匿已經三旬松島修理全
毀赤城西京比叻前後皆復艦隊聯合艦隊勢力更加於是大舉至威海敵將皆陷黃

吉林兵善

柳原中尉
殿取不遺

松島比叻
諸艦皆復

城陷旅順

天嶺人工
兼備

黃金山

歐人海旅
順之嶺

海之役毀沈松島比叻等至此此等諸艦儼然在列其驚愕可想矣十七日我主戰艦
十二隻作重縱陣形而游戈于港外敵艦終不出十八日我艦隊歸大連灣

皇軍陷旅順城十一月二

白玉峯東水作灣鷗冠山對二龍山人工天險全兼備城背嵯峨不可攀
旅順口在白玉峯下城背山脈一帶自爲周郭形勢更北端椅子山砲臺當衝路其東
有松樹山二龍山二砲臺鷗冠山砲臺與二龍山相對地勢高峻營寨堅牢天險人工
兼備

砲臺四周齊應機金山峻拔勢婉々轉回三百六十度鐘大彈丸八面飛
旅順砲臺大小二十餘所脈絡相接首尾互應黃金山砲臺地勢最高裝置大口徑巨
炮爲三百六十度回轉以逼對壘

歐將皆稱旅順城東洋第一豈虛名自然形勝暗函險單騎堪當千百兵

長谷川族
圖援七雲
陷二龍山
堅嶺城背
堅嶺城陷
西少將部
隊奪第一
品

大山大將
爲司令長
官
山地中將
爲師團長
將軍大振
全軍大振
萬然無聲
二萬軍幕

歐國海陸將校皆曰。攻旅順背面。必要六萬。而非失數千兵。則不能陷之也。我第二軍。將攻旅順。大山大將爲司令。長官山地中將爲第一師團長。長谷川少將爲旅團長。十一月十一日。前衛西少將。進兵于三十里堡。長谷川混成旅團。進金州。攻城砲。廠上陸之報。亦至。於是。部署諸將。定通軍行。爲秋山少佐。將搜索騎兵。益滿中佐。將右翼縱隊。山地中將。將左翼縱隊。長谷川少將。將混成旅團。各隊以十七日發。二十日。進旅順行程。凡十三里餘。十八日。搜索騎兵。第一大隊一部。至土坡子。遂敵騎兵八百步。兵三千人。苦戰收兵。淺川大尉。負傷中。舊中尉。及騎步兵。下士官。以下死者十一名。敵軍。來襲似潮。生蔽野。黃青赤白。旌殘忍。辦奴亡狀甚。土坡小圃。激吾兵。

土坡子戰。清兵屠我戰死者。屍殘忍。最將將士切齒。全軍大振。旗影。摩空。敵成。閉角。聲瀏。嘹白雲間。一轟碎。壘攻城砲。驍將先登。椅子山。

十一月二十日。大山大將。示攻城方略曰。第一師團。宜先陷椅子山。進取樞山。混成旅團。取三龍山。左翼縱隊。在東北方。牽制敵軍。攻城砲廠。射擊椅子山。進向各砲臺。搜索騎兵。警西方海岸。令下而士皆決志。二萬軍。肅然無聲。只見衛兵。劍光耳。二十一日。

黎明。我攻城砲廠。設陣地于敵壘下。平原曠。僅築肩。掘耳。午前六時。開砲彈丸命中。椅子山。敵兵大亂。我野砲二十四門。亦齊發。既而西少將。部隊。進砲臺。敵彈如雨。我兵死者數十人。先鋒丸井少佐。田原少尉。皆喉脊第一。壘。於是二壘三壘。皆望風改。椅子山已陷。寨子山。望台二寨。及山麓。殺字軍。不戰而走。

椅子山頂。倒敗旗。臺頽。壘碎。敵難支。屠城。鏖戰。喋鮮血。快劍。脫函光。陸離。椅子山。陷。我野砲。進向樞山。砲敵火。藥庫。敵兵潰走。長谷川少將。部隊。攻三龍山。攻城砲。射程甚遠。又無野砲。攻戰。未苦。死傷最多。然奮進。不加。遂拔其七雲。二龍山。亦陷。

戰苦。皇軍。氣愈雄。士於死地。立奇功。二龍已敗。鷄冠。陷。城背。堅。靈。敵影。空。二龍山。戰。敵彈雨。注。又。陷。地雷。火。我兵死者甚多。士官呼曰。何不。張九州。男兒。膽氣。乎。盟入。敵壘。左翼。益滿。部隊。攻鷄冠山。砲。甚。固。花岡。少佐。死。焉。益滿中佐。力戰。遂拔之。於是。旅順。城背。堅。臺。盡爲我軍。所陷。

市街。鮮血。沃。腥。臊。軍樂。聲。興。意。氣。豪。二十。砲。臺。歸。我有。黃金。山上。旭。旗。高。

士
隱伏兵

三傳方圓

寶金何用

鐵金零古金

諸壘盡陷。獨黃金山砲臺。猶逼射熙山地。中將使伊瀨知中佐攻之。中佐部兵直入旗市街。屠潛伏兵士。適變黃金山絕壁。敵兵不戰而潰。海岸東端砲臺亦爲沮成。旅團所援。時二十一日午後五時也。黃金山以東及北西海岸諸砲臺。皆棄守。逃旗原口。二十有餘砲臺。兵營。船塢。造船廠。水雷營。各種兵器機械。一朝盡歸我有。其價不下三億。方圖云。此役我軍死者。將校二十八。士卒三十六人。敵死者二千五百餘人。

皇軍二万盡忘躬。實日精忠氣吐虹。赫赫武威千古照。汗青長紀六師功。

烏合清兵不足尤。大連失守又金州。寶資幾億果何用。旅順經營三十秋。

旅順陷。皇軍全略金州半島。

三軍劍氣。擲星杓。戰艦秋乘。渤海潮。天地撼搖。搖尾虎。懷王師。先畧古金遼。渤海灣。頭樹旭旗。將帷。豁暑不愆期。一朝已扼咽。喉地。万里長驅。拊背時。

白山曰。以歐將之所論。觀旅順城之役。如我計畫未當。而得勝於饒倭。

是之謂乎。

者。老成歐將。以旅順城爲東洋第一要害。曰。攻其背面。要數万大軍。陷之。管費許多時日。見戰死者。及數千人。蓋所熟計精畫也。而我軍用二万兵。一日而拔之。戰死者。僅三十八人。夫今之論兵者。察勝敗於軍備精粗。而不問其兵勇怯。若使清兵不怯。劣如彼。我軍不勇敢。如此。則勝固爲幸。否則我軍之所策。未爲不當也。兵法曰。知敵知己。百戰百勝。其

清軍襲金州城。十一月

七千敵騎。若雲屯。橫列縱行。白馬奔。巨礮一轟。先破膽。清軍不敢近城門。

我軍陷旅順。日。敵兵乘虛襲金州城。河野大佐力戰退之。清軍步兵七千爲橫列縱行。騎兵三百。皆跨白馬。東馳西奔。最爲壯觀。來逼城門。城兵僅千三百人。開野砲二門。每發命中。敵兵不敢近城門。既而智進。欲奪我城外陣地。勢甚猖獗。平原野少。尉防禦而死。

清軍襲金州城

征清詩史

六十一

三
三
三

三
三
三

六十

寒威酷烈
小銃不爲用

不敵知走
不敵知走

取岫巖

通拔步兵
奪取高嶺

東半島嶺
要之地

城兵又開野砲射擊敵軍敵軍少沮午後二時三十分有傳旅順已陷者我軍氣大振無敵敵將收兵去此役我兵死者十八人敵屍委路者五百餘

第一軍將向海城。

漠々寒雲鎖燕京。方重鑒影杳前程。兩軍第一軍氣脈要連接半島樞機是海城。

海城皆遼東半島樞要。塞北京師路故不取海城以逆第一第二兩軍氣脈則不能得北進之便也。

第一軍枝隊奪黃嶺子險。

半空黃嶺万岩重。據險敵營峯又峯。選拔步兵兵纔四十。冒丸奮進唱先鋒。第一軍欲掃岫巖敵十一月十七日三原枝隊達黃嶺子躡敵步兵千五百人騎兵二百五十人野砲二門據險要我町田中尉戰選拔步兵四十人攻之山皆岩石峭立如削頂上置兵彌登彌高已奪一峯敵猶在一峯中尉較勇奪其最高峯敵兵望之下寨

第一軍取岫巖。

人走懸崖捷似猢猻兵早已奪嵌岫。霧晴惟幕樓烏在本隊徐々入岫巖。十八日三原枝隊進岫巖城町田中尉戰選敵騎兵奪河岸高地敵兵棄城走大迫少將豫知敵走不欲勞我兵宿紅家堡子曉霧已晴不見守兵徐整本隊而入城。

第一軍破清兵于崔家房。

暴雪狂飈白水城。拔刀直拂黑龍兵。陣頭箐火萬星耀。笑見清軍驚脫營。敵竄我第一軍側面山縣大將下令使西島大佐助立見少將駿遠寬甸寨馬嶺敵立見少將命西島大佐部隊備寨馬嶺自率旅團本隊至柳河城敵軍二千在崔家房前衛友安中佐吶喊奮高地敵營敵更據最高丘隔水銃戰既而日暮山上清兵與山間清兵自相射擊我軍笑之時寒氣酷冽小銃橫杆凍結難用因以蘇火取燬清兵望之寨山上陣而走。

十中及五
感懷傷者

敵衝風圍

潛軍不再
近風凰城

草鞋靴履
凍結如鐵

第一軍第五師團第十旅團破清兵于樊家臺。十二月

猛兵、勇卒、凍傷、多、墮、指、高、寒、雪、沒、驍、清、將、乘、機、何、所、獲、又、橫、死、屍、滿、山、阿。
立見少將部下兵患凍傷者十中及五、敵謀知之將襲鳳凰城時桂中將向海拱立見
少將軍制黑龍江將軍依克唐阿兵擊旅團本隊至樊家臺與黑龍江兵三千餘相值
地勢險峻敵據左右峯巒立見少將使安滿少佐上高地奮之又列砲六門射擊敵右
翼安滿大隊追擊敵第一聯隊砲隊亦移射擊敵第二聯隊敵兵普戰不敢退一步安
滿大隊呐喊追之敵軍色動立見少將便令田豫備隊突之今田少佐揭聯隊旗先進
一隊及刀入敵中敵兵不能支而走此役我兵死者十一人敵死屍百十五捕虜十五
人。

第一軍第十旅團破清兵于一面山。自十二月十四日

猛火、挾、風、燒、雪、天、喊、聲、動、地、突、中、堅、沙、場、塗、抹、淋、漓、血、一、隊、清、軍、獨、肅、然。
十二月十日黑龍江敵軍來追我風凰城東北處十二日城兵應戰凡三時間敵兵進

第一軍取柞木城。十二月

登一面山相持不戰者一日。十四日富田少佐放火上風破一而山敵左翼山口少佐
突入其中中央陣地敵一隊在右方高地肅然不動開砲隨我將校威實進止有法
伏兵葱嶺射清軍斃屍填溪號哭聞一面敗餘無敵影響烽不照奉天雲。
立見少將伏兵於葱嶺要敵走降敵兵死者甚多清軍不再近風凰城邊
弱兵驚悸望風逃柞木城頭寒日高戰馬嘶雲鏑吹急迴颼捲雪滿征袍。
我軍每戰必勝然輜重不繼故不能進軍遂決意北進將攻柞木城桂中將將師團本
隊大島少將久直爲前衛大迫少將將右側枝隊佐藤大佐將左側枝隊岡田木村二
少佐率輜重隊十二月十二日至柞木城敵兵棄城而逃此役無敵之可記者然地雪
堅冰草鞋靴履凍結如鐵行軍艱苦不可勝言也。

第一軍第三師團取海城。十二月

二十八年
戰地新年

戰血染衣
凍如鐵

金軍呐喊
突敵三回

馬園子戰

紅瓦寨戰

驅逐殘兵
入海城

春風。
政廳治化助軍功。關市無征聽訟公。皇德猶如陽氣發。奉天省名冰雪已。
馬革皆期包戰屍。身猶未死值年移。王師十萬懷門曉。縹緲唱興君代詞。
春回戰地祝新年。海陸國旗千里連。十萬貔貅稱寶壽。一齊散禮拜東天。
明治二十八年。乙未元旦。我征清軍。迎歲於戰地。

野戰病院
行軍百里跋嶢嶢。露幕風帷夜枕戈。白雪染紅原上血。銃傷兼見凍傷多。
我兵患銃傷。凍傷在海城野戰病院者。無慮二百餘人。紅瓦寨役。傷者橫於雪上。體失知覺。鮮血染衣。凍硬如鐵。脚絆靴襪。冰着皮膚。不可解脫。院醫。割截其肉。因注以微溫湯。待冰解除而後施治云。

第一軍第二師團拔紅瓦寨。十二月十九日。
北風動地白沙驚。軍蹙兵交決死生。激戰移時紅瓦寨。雪中伏屍亂縱橫。
海城為遼東樞要之地。清將經渠而後大悔。欲併力以復之。元帥宋慶。合兵萬餘陣紅瓦寨。示方略曰。總兵張光前可以部隊四千大砲十門。固守蓋平。城提督聶士成。總兵呂本元。攻鳳凰城。黑龍江將軍倭克唐阿。衝鳳凰城東北。而宋慶自壓紅瓦寨守側。通復海城。桂中將驤知之。以十二月十九日。攻紅瓦寨。馬園子戰最激。我將校士卒死者頗多。鮮血淋漓。積雪皆紅。我兵奮戰。連逼紅瓦寨。敵兵頑抗。不風諸隊苦戰移時。金軍呐喊。突敵三回。終援。聚此日。劇戰。自午後一時至五時。我軍死者五十四人。敵死者不下三百人。

鶴唳風聲心易驚。敗餘清兵只希生。皇軍每戰無傷死。驅逐殘兵入海城。
桂本隊。大島前衛。大迫旅團。行破敵兵。入海城。我軍無死者。海城當四通八達。衛路市街。安成足以為策。續進第一第二兩軍氣脈矣。

日本內地明治二十八年新春。

陸戰森嚴日色明。雲成五彩錦旗擎。山陽猶駐親征陣。趙々干城護大營。
外征將士若鷹揚。內國人民氣激昂。一致精神四千萬。滔天敵愾滙東洋。
屢報遼東破戰奴。祝聲如涌滿街區。三竿旭日曠曠影。照到皇家新版圖。

第二軍陷蓋平城。二十八年二月十日。

勇兵冒險試登攀。奮進彈丸激射間。敵壘鼓衰旗影亂。皇軍先奪鳳凰山。

山。

清軍欲復海城營口蓋平高刊互通氣脈增發援軍我第二軍已陷旅順使混成旅團
攻蓋平城乃木少將將本隊齊藤少佐爲前衛應岐大佐將右側枝隊秋山少佐率騎
兵蓋平守兵約五千人。大砲十餘門。出城而據高地。一月十日我軍追城平野噴瀾敵

陷蓋平城

先登第一

彈。遠。越。竹。中。少。佐。登。步。兵。道。奪。鳳。凰。山。敵。勢。稍。衰。
東。南。屋。角。樹。軍。旗。高。叫。先。登。第。一。名。少。將。叱。咤。衝。敵。陣。渡。水。直。取。蓋。平。城。
小。川。少。尉。縱。蓋。平。河。東。南。角。樹。隊。旗。是。爲。先。登。第。一。營。口。敵。兵。作。縱。隊。衝。我。左。翼。勢。甚
猛。烈。乃。木。少。將。叱。咤。勵。衆。渡。蓋。河。水。營。營。敵。兵。敵。兵。披。腹。遂。進。陷。蓋。平。城。此。役。我。兵。死
者。將。校。一。人。下。士。卒。四。十。五。人。敵。死。者。凡。四。百。餘。人。

大斥候隊

忠勇忘身十七名。不知咫尺有清兵。望山大雪眞天助。僅脫危難達海城。
第二軍欲與第一軍通氣脈。便由中尉黎選振兵十七名至海城中。尉行候蓋平敵
快。遇。香。家。屯。近。傍。消。兵。三。千。知。之。將。掩。擊。會。大。風。雪。不。果。斥。候。隊。僅。脫。危。難。而。達。海。城。
於是第一第二兩軍氣脈始通。

第一軍與第二軍連絡。二十八年二月十日。

王師連戰破清兵。署收蓋平連海城。一二兩軍通脈絡。燕山自是可橫行。

斥候隊達
海城

第二第二
兩軍始合

關大尉遺功

關大尉遺功

軍城外二萬

警備嚴然

四百餘州。環卵危挫。摧敗。駭力難支。笑他兵勇。威豚犬意。氣今猶說。入旗。桂中將。使門司少佐。率制蓋平敵。貨至則蓋平城已陷。於是第一軍與第二軍。運緒。

清軍四襲海城。自二十八年十一月十七日至二月二十一日

敗。餘清將。按兵留城外。戰塵猶未收。四堡相連。臨曠野。儼然警備。在高丘。清軍欲復海城。來襲四回。桂中將。陸冕。甲。唐王。欲。景。變。龍。四。山。警。備。嚴。而。却。之。

騎兵。馳逐。玉。驛。願。積。雪。如。銀。接。遠。空。戰。隊。三。重。弧。線。狀。清。軍。列。在。畫。圖。中。桂師。四。長。與。舒。津。司。令。官。同。巡。堡。點。至。歡。喜。山。眼。界。紛。紛。似。雪。如。銀。敵。攻。毀。隊。連。旦。三。里。爲。弧。線。狀。騎。兵。數。百。西。馳。東。奔。觀。如。畫。圖。諸。將。時。不。敢。逼。城。爲。我。軍。所。毀。破。

白。草。黃。榆。日。欲。隕。敵。督。旗。幟。亂。續。紛。向。車。噓。斧。張。虛。勢。城。外。蠢。々。二。万。軍。清軍。襲。海。城。我。軍。持。重。欲。待。敵。兵。近。城。掩。擊。殲。之。清。將。不。憚。以。爲。我。兵。寡。單。悉。軍。來。襲。者。四。回。殺。傷。過。當。我。兵。死。者。前。後。僅。八。人。耳。敵。死。者。三。百。五。十。餘。人。捕。虜。四。人。

海陸併力將夾擊威海衛

怯敵深潛大港中。海軍志業幾時終。艇員艦隊致全力。欲奏清師殲滅功。清經。尙。清。威海衛。渤海之權。未全歸我。因欲海陸併力。殲威海衛。敵。

關海軍大尉遺功

山東地理太分明。記事精詳畫策成。千古遺功關大尉。文書今見裨征清。白山曰。故海軍大尉。關文炳。信濃人也。久在清國。政涉山川而相地勢。險易。時乘小舟而測量渤海沿岸。或變容貌以遍觀各所砲臺。明治二十五年。辭我公使館。將歸本朝也。故取迂路。過芝罘。威海衛。榮城。濟記。其城。壘市街村落里程等。記事精確。詳密無遺。今而見大尉之所爲。猶豫知有征清役而爲之者。其智可謂明矣。大尉歸路。至巨文島近海。遇。

大尉雖死
不朽

奉制清軍

靈光照海
靈為壯觀

颶而沒。豈不惜哉。皇軍之將攻威海衛也。得大尉記事。所裨益極大。其容易陷港背砲臺者。大尉之功居多。嗚呼。大尉遺績如此。雖死不朽也。

第一遊擊艦隊砲擊登州府。二十八年一月十八日。

煤氣衝空。鐵艦趨蛇。礮廟島日方晡。海天釀雪寒雲淡。敵岸高臺影欲無。十八日。敵島少將軍第一遊擊隊。過直隸峽。通至登州府。砲擊敵臺。以牽制其陸軍。

第二軍。上山東省榮城灣。十日。

敵海船。懸旌旆。連寒風激浪。蹴長天。燈光照徹魚龍窟。巨艦堂々護大船。第二軍。欲拔威海衛背後砲臺。二月二十日。進至山東。陬角榮城灣。大山大將。為司令官。井上少將。為參謀。長佐久間中將。為第二師團。長山口少將。為第三旅團。長少將。貞愛親王。為第四旅團。長黑木中將。為第六師團。長大寺少將。為第十一旅團。長伊東中

上陸在大
風前一日

陷威海衛

陷摩天嶺

入萊城際。

將軍艦隊。連送船其揚陸。經五日而終。其明日大風。剛浪。破壞機橋。二十四日。進砲。破震山。極萬雷。全軍向敵。仰崔嵬。右縱併力。左縱隊。齊陷堅年諸砲臺。我軍。進迫威海衛。背而。一月三十日。將攻諸砲臺。二十九日。定諸將所。向黑木中將。將古。繼隊。退。少佐。為右翼。大寺少將。為左翼。佐久間中將。將左繼隊。山口少將。為右翼。少將。貞愛親王。為左翼。左繼隊。向鳳林。集東南高地。右繼隊。獨攻。官尺。陸所。諸營。左繼隊。陷。鳳林。繼隊。連絡。以助。攻戰。及戰方酣。其勢互變。右繼隊。獨攻。官尺。陸所。諸營。左繼隊。陷。鳳林。集東南高地。

陷威海衛背面諸砲臺。十日。三

百尺崖。高氷雪凝。砲臺。在。白雲層。軍先陷摩天嶺。煩火照空山。欲崩。

學秋訣別

擊沈定遠

敵防村聞

不屈將死守

砲臺西面諸

砲臺陷東岸諸

兵戰太力

征清詩史

七十五

飲悲歌。趨敵時。海天月。黑斗杓。垂士能決死。成功地。果見波頭定。遠敵。水雷艇隊。擊沈敵旗艦。定遠。二月四日夜。二月四日。我艇隊。將製敵艇。第二水雷艇隊。五隻。藤田少佐。在司令艇。二十一號。第三艇隊。四隻。今井大尉。在司令艇。二十二號。艇員。將起敵地。無復生還之意。舉杯訣別。

水雷艇隊。除防材通航路。二月三日。水結。我衣海水寒。巨材鐵索激波瀾。一夕用心真慘愴。先開艇隊偉勳端。敵設防村。於威海衛灣內。張徑口一寸三分鉄索三條。結東大木。附着以備其一端。自日島。龍廟附近一端。直達劉公島。長凡二里。構造堅牢。不可破壞。我艇隊。欲乘暗夜。潛敵艇。二月三日。入灣內。百方苦心。六號艇。最致力。值開航路而歸。

第二軍援威海衛背面諸砲臺。聯合巡隊。威敵逃。走登萊港口。最嚴時。猛風怒濤。雪城銀山。遙相擊。排湧搖松島等。大艦猶搖。小舟之狀。此間艦隊。砲擊日島。劉公島。者。數回。敵死守而不屈。

取威海衛市街及西部砲臺。二月一日。極天鳥道。望悠悠。峯影糾紛。殘日收。三萬貔貅。戰袍凍。朔風吹。雪滿崖頭。艦隊屢砲擊。要塞砲臺。銀山起伏。怒濤生殺。氣宛陵。巨礮晞。落日黃龍旗。未倒。此蟬援。絕數千兵。

威海衛背面諸砲臺。其堅牢。不遜於旅順城。築連系。堡自百尺崖所。至驤天嶺。最為絕倫。我軍。奮擊。陷驤天嶺。楊峯。撤清兵。防禦太力。我軍。列野戰砲。及敵臺。兩挺砲。射之。敵不少。預定。遠鎖遠路。然又砲擊。驤天嶺。以援楊峯。旗彈着。精確。粉碎。砲臺。外部。既而趙北嘴。百尺堡。等諸砲臺。皆陷。楊峯。旗。被撤。險。賊射。會火。獲軍。藥九。炸破。敵兵。乃走。午後一時。威海衛東岸諸砲臺。悉為皇軍所陷。此戰。我軍死者。將校二人。下士卒六十四人。敵死屍凡七百餘。

昌降丁汝

我艇隊震
撼歐國

敵艦獲砲

擊沈靖遠

倭機敏捷
命中奏功

威遠寶華
擊沈來遠

定遠始傾

置酒當年肝膽傾。勸降書致友情誠。白旗垂下風無力。一死欲全千百兵。
北洋水師提督丁汝昌乞降。二月十日。
伊東中將往年與丁提督交遊酒談笑。配肝膽交。因贈勸降書。曰。苟小節者不能立天

功。以證其効力。而我艇隊勇往敢爲。使歐洲強國。疑憚矣。豈不偉哉。
外裝水雷。其後有魚形水雷之製。而效用未明。征清之役。用之能奏奇。
白山曰。米國南北戰爭後。世始知水雷效用。露士智白。清佛諸役。皆用

彈藥不給。
大尉以下死者數人。此日敵臺所發。皆用堅鐵彈。不復見榴彈。既而應戰漸衰。因知其
程甚近。照準精確。每發命中。敵臺敵亦盛開砲火。擊破天龍艇。損傷萬城。敵砲中野
日。第三遊擊又攻劉公島龍廟嘴二砲。九擊沈靖遠。十一日。第三遊擊又迫劉公島射
見砲架。日島砲火全熄。八日。第三遊擊隊攻劉公島。第一遊擊破堤防。切斷鐵索。九
我艇隊擊碎捕獲。不脫一隻。第二遊擊隊發九爆。敵日島火機庫。第三遊擊狙擊其隊

艇中死士氣成虹。敵海截波如疾風。震雷歐洲斯一事。征清允偉水雷功。
水雷艇隊擊沈來遠威遠寶華三艦船。二月五日。
二月五日夜。第一艇隊四隻將再襲敵艇。併原少佐率之。令各艇隨後。而發此役。敵
艇錯地警戒。最嚴電燈照海。炮如百晝。我艇隊望燈光而馳。敵敵愾愾之砲。銃發射艇隊
冒丸急進。射來遠者三發。又擊沈威遠及運漕船寶華。狙擊領遠不中。此夜艇隊排縱
極敏。命中奏功。而不損艇。體無死傷者。至是清艦存者。唯鎮遠平遠濟遠。殆遠廣丙耳。
敵勢大衰。二月七日。聯合艇隊大舉攻敵。張張砲臺。砲戰太烈。敵水雷艇隊伺隙而逃。

傾。
八五日天明。遙望是遠航行。無異秋我艇員竊疑魚形水雷無効。至午後定遠艦開始
因棄艇上陸。二十二號艇爲敵所迫。坐礁。鈴木少尉溺死。六號艇擊砲彈一銃。抵四十
而爲敵艇所知。皆蒙彈丸。九號艇破。機關室部員悉死。傷十九號艇。來敵敵尾擊甚急。
隊二列。直進夜色暗黑。岸端犬牙。不得正陣形。進近定遠發水雷者五隻。命中者三。既
悲歌憤慨。三更月落。星斗滿天。艇隊進入綽內。迫敵錨地。爲悔愛宕發砲。牽制敵艇。

與國風
提督所爲

給康濟號
以慰了督
亡靈

以將官禮
吊之

爲體休戰
欲全生靈

功不能立
拘小節者

漫言一死救兵民巨艦堅臺委敵人以我國風論士道丁提督豈是忠臣
白山曰論者或以丁提督爲善節孤忠有古烈士之風曰二萬敵軍擁
後數十艦艇迫前堅壘盡陷巨艦皆沈孤城無援彈盡食乏提督之致
艦納砲臺一死以全清國歐洲將校兵民乃不可已之勢而其所爲莫
不可者乃口附和稱揚極矣然使提督重清帝之命知其責任之所存
身與艦共碎將校皆橫尸於砲臺下不殉兵民而殉清帝振起清人志
氣有所決則我軍雖精銳未能遽踰山海關太沽之險也提督之所

論丁汝昌

遼總十集

四八下士卒二十三八敵海陸降服軍人將校二百二十三八下士卒以下四千九百
一人有五千二百二十四人捕獲軍艦遠平遠濟遠廣丙鎮東鎮西鎮南鎮北鎮中鎮

戰休孤島水蒼茫慘澹陰雲日隱光透柩猶有淚無情草木亦悲傷
一月十三日劉公島牛道臺來戰降伏條約不決十四日議成締結十一條規約使海
陸軍士官兵卒及外國人宣誓不再與日清現在戰爭之事給與康濟號還了提督
極以慰其亡靈也許清國外國海陸將校便乘便之隨意航行此役我海軍死者士官

吊丁提督

功閣下暫遊日本徐爲清國謀以盡其願運不亦善乎閣下果率艦隊來投我軍我
皇寬容待以體貌是余之所保也余言發友誼之誠閣下諒之了提督見書曰友情良
可感矣然報國之義固非可棄也既而堅艦屢碎彈藥亦盡千百兵民同見慘狀期非
遠也乃致降誓曰欲保全生靈爲請休戰威海衛衛船艦劉公島砲臺兵器於貴國望
不傷害海陸軍內外國官員兵勇而許其歸鄉敵艦北提降旗軍使程璧光至伊
東中將與諸將戰了提督前程璧光復命了提督曰得保全生靈吾事足託後事於
英客將而自殺定遠管帶官劉步蟾劉公島統領張文宣靖遠管帶官葉祖珪殉死我
旅艦傳信號告了提督死於艦際停止奏樂以蔭官禮吊之

與睢陽死
守事相反

爲果能如此。優於保全生靈之功也遠矣。此之不思而致軍艦衄衄。以。利。於。敵。人。與。睢。陽。死。守。人。相。食。之。事。相。反。今。盛。稱。提。督。使。我。國。人。做。其。所。爲。害。國。風。甚。大。嗚。呼。如。丁。提。督。以。我。國。臣。子。之。道。論。之。豈。得。稱。苦。節。孤。忠。之。士。哉。

我軍取太平山

二月十四日

萬。統。如。雷。散。刺。華。士。逢。勁。敵。勇。逾。加。將。軍。叱。咤。風。生。地。頑。抗。清。兵。亂。若。麻。

第一軍北進第二軍發金州二十四日第一師團將攻太平山乃木少將將左翼枝隊

西少將將右翼枝隊山地中將將師團本隊爲豫備隊午前七時乃木枝隊取太平山

東部西枝隊取其西部清軍左翼兵力強盛列新式利砲於要地彈道長伸射法亦巧

其右方西七里溝莊黃家宿甫防禦完備敵將馬玉崑部下趙雲奇等進致窮戰尤劇

烈既而清兵益加頑抗不敢退一步進爲攻勢山地中將下令試一大隊擊毒西七里

死綽雲奇戰

飢寒兼至

及河水未
解欲北推

朝來開戰暮收兵大雪埋原不可行。僅連軍營糧食乏飢寒一夜待天明。

此日午前六時開戰午前八時將赴宿營大雪埋原不分行路加以糧食缺乏飢寒兼至患凍傷者不下千人。

第五師團將北進

二月二十日

曉。月。光。寒。水。在。巖。旗。獵。獵。陣。雲。披。望。風。弱。敵。如。衰。葉。山。海。關。南。四。萬。師。

清帥宋慶龍四萬兵在海城近傍扼我軍北進要路我軍欲及遼河水未開路取營口牛莊田庄等二月二十二日第五師團北行將會第一第三兩師團因集海城街道黃花甸

第一軍第三師團破沙河沿清兵

二月二十八日

石頭山侵曉奪崔嵬。清將難支長虎。地。名。二十砲門齊向敵。雲間堡壘起

新式連發無煙火藥
如城牢固
商家牢固

大部隊攻
牛莊

萬卒不能
一夫當敵

聚中敵壘
取敵蘇堡

炭埃

敵兵益加將近海城桂中將使大追少將備觀喜山使大島少將久直攻沙河沿大島少將傍晚上石頭山以銃鎗突敵々敗走即砲山上射擊長虎臺敵棄壘走大迫部隊攻大宮屯敵防暇不顧歡喜山開砲二十餘門擊中敵營敵又棄壘走此戰我兵死者十五人敵死者二百餘人捕虜一人三月二日大島少將進兵乾線堡堡以民屋爲假堡三月二日前衛內藤林二大隊侵雲追堡會天晴敵知我兵至懾悸爭先走時午飯未終營中列食膳

第一軍第三師團入鞍山站三日

老虎山名蹟空鐵石山高一夫當險万兵勞鞍山要害金湯固烏合清軍棄壘逃

鞍山站距海城七里爲遼陽街道一大驛堡有老虎鐵石二山所謂一夫當險萬卒不能遇之者也桂中將觀其形勢發難期必勝之嘆三月一日我第五師團聞道迂回出

第一軍大部隊攻牛莊城四月

鞍山站背面敵饒知之狼狽乘虛而走桂中將留富永少佐部隊守鞍山站進至劉家臺待第五師團來

街道坦然如砥平商家構造固於城頑奴死守當衝路壁上彈丸驟雨傾我軍驟定進軍方略第一軍第三第五兩師團將陷牛莊城與第二軍第三師團相會大舉拔田庄臺牛莊當遼東樞要爲日清兩軍必爭據地勢平坦衍徧廣淵可以行車軍萬馬焉將觀光濟李光久劉樹元等率十九營兵守之其數不及一萬我軍大部隊攻之步兵十二大隊騎兵二中队及四小隊砲五十門工兵三中队第三師團爲右翼縱隊桂中將將本隊大追少將爲前衛第五師團爲左翼縱隊與中將將本隊大島少將義昌爲前衛三月四日齊進追牛莊城牛莊市街只有城名耳然商家構造牢固如城市外新築厚壁爲設郭狀四日與中將使大島義昌攻牛莊正面敵持無煙火藥新式連發銃九下如雨平原廣淵無避敵彈之地死傷頗多我兵陷屍爭堆山砲野砲兩隊援隊豫備隊齊進援大島枝隊

先登少佐中丸。僵激戰。移時多死傷。爆裂藥。一。翻天地動。塵飛粉碎。二。

堅增。

富岡中佐。追牛莊東北端。今田大隊。與山大隊。激戰。涉二時。審敵東面。第一防禦。繞大平橋。東有燒耐店。屋壁最堅。以大砲射之。不得破。壞敵在壁中。狙擊我兵。與中將。患多損兵。使工兵。以爆裂藥。破壞敵。塹馬塹。少佐。用九連城。所獲地雷。炸屋。九連城所獲地雷。炸屋。

九連城所獲地雷。炸屋。

獲囚者二百八十名。

佐藤大佐包創連戰。

兩回爆裂。揭降旗。伏地求哀。頑悍兵。辮髮。繫來如縲。縛。就囚二百八十名。

我工兵。將入。爆敵家屋。清兵。懼。攜白旗。出。就囚者二百八十名。四日。桂中將。使大迫少將。攻牛莊北面。使大島少將。久直。迂回。出其西。大迫。旗團。先鋒。佐藤。大佐。迫防。線。挑戰。敵不應。射。程。愈。遠。壕。陰。伏。起。萬。餘。發。射。傷。大佐。腹。大佐。包創。連戰。大迫。少將。使石田大佐。赴援。石田。大隊。唱。軍。歌。進。與。佐藤。部隊。吶喊。聲。應。如。海。潮。來。我。各。隊。勇氣。大振。砲丸。碎片。又。傷。佐藤。大佐。膝。骨。而。倒。門。司。少佐。代。指。預。聯。隊。殊。死。而。戰。銃。劍。相。接。敵。不能支。我軍。進入。市街。大島。少將。久直。迂回。出。牛莊。西。又。與。林。大隊。至。東南。部。襲。敵。退。路。斃。

之甚多。三好大佐。取牛莊西北一帶民家。內。藤大隊。驅逐。敵兵。入市街。南。鈴木大隊。攻西北。部。南。部。貨。店。年。如。故。郭。敵。兵。伏。匿。頑。抗。不。屈。投。擲。降。書。二。回。不。應。因。放。火。々。移。火藥。庫。乃。致。降。書。就。囚。者。將。校。十。餘。人。下。士。卒。四。百。餘。人。

剪屠。轉。圍。血。如。流。到。處。街。頭。屍。作。丘。徹。夜。銃。聲。餘。響。在。朝。來。始。見。戰。塵。收。四日。市街。盡。爲。我軍。所。陷。逃。路。已。盡。殘。兵。據。家。屋。抗。戰。徹。夜。不。絕。餘。聲。至。五。日。戰。全。休。此。役。我軍。死者。將。校。三。人。下。士。卒。六。十。九。人。敵。死。者。凡。千。八。百。八。人。降。虜。將。校。二。十。三。人。下。士。卒。六。百。十。一。人。

第二軍入營口。三月六日。

敵帥自知營口危。牛莊已陷。勢難支。天寒。遼水冰。猶合。一夜。撤兵。西岸。移。營口。距牛莊十二里餘。清帥宋慶。知牛莊已陷。營口孤立。難守。及遼河水未開。撤營口。老爺廟。後。家。油。房。等。軍。退。守。西。岸。三。月。六。日。山。地。中。將。率。西。旅。團。及。獨。立。大。隊。以。乃。木旅。團。爲。左。翼。將。攻。營口。隱。特。大。佐。進。入。市。街。敵。兵。已。渡。遼。河。水。而。逃。

西岸消兵退守。

敵夜不絕。

百餘人。就囚者四。

將閔第二
置大總督府于旅順口
放火驅敵
門砲二百餘

用軍以上
大兵

維持市中秩序

保護營口順民及居留歐人

戰後經營太苦辛。又看皇德及歐人。逐河波穩民安堵。雨露恩沾。率土濱營口北消夏港也。歐米人來住焉。野津司令官。維持市中秩序。撫綏港內順民。加特別保護。於居留人生命財產。英米領事。厚謝之。營口所得軍艦一隻。小漁船二隻。大砲四十五門。小銃百八十挺。火藥四百四十餘箇。

第一。第二。第五。三師團。齊向田庄臺。

日本寒兵衝大軍。霜風一鶻。入鴟群。三師始會庄臺。田庄役正々。旌旗拂白雲。

日清開戰以來。我軍海戰。以寡破衆。平壤之役。以第五師團。大部分與十八聯隊。虎山九連城之戰。以第三第五兩師團。一半與第十旅團。旅順口威海衛役。加一師團。以一族團。耳合三師團。用軍以上。大兵者。以田庄臺役爲始。

三師團齊進。陷田庄臺。三月九日。

地廻組練。曙光浮。二百砲。門陣。頭戰。罷寒天雲。霏々。連營警角。蕭狼狽。三月九日。三師團齊進。攻田庄臺。第三師團。攻其正面。第一師團。圍其右。第五師團。扼敵退路。第三師團。在中央。第一師團。爲右翼。第五師團。爲左翼。開二百餘門砲。火聲動天。地敵不能支。爭先逃走。爲我兵所襲。擊死屍成堆。我軍之向田庄臺也。欲合圍殲清兵。清兵伺隙。緣空隙脫去者六七千人。沿河岸走者。五六百人。殘兵猶潛市街。我軍懲牛莊役。放火。擊之火不滅者。一晝夜。此戰。我兵死者。僅十六人。敵死屍二千餘。

置大總督府于旅順口。三月六日。

作戰方開第二期。皇軍海陸奏功。時將官進退權尤重。一品親王總大帥。三月。置大總督府于旅順口。十六日。以參謀總長小松宮一品。移仁親王。任征清大總督。將以四月十三日發字品。港向旅順口。勅曰。征清海陸各軍。既經作戰。第一期將開第二期。委以全副指揮。在彼以將官。任免權。

見案軍期
非遠

除污穢改
習

不絕絲竹

覺遠入勝

白山曰我征清軍取旅順威海衛至營口田庄臺是爲作戰第一期陷
太沽拔山海關長驅入北京是爲作戰第二期今也第一期旣奏功因
進總督府于旅順口屬以大本營作戰諸機關一部欲以開第二期之
戰皇軍之入北京軍門見橐車白馬期非遠也不亦快乎

旅順口

貯糧督役課詳工根據已完軍奏功政務井然皆就緒神州雨露化蠻風
旅順口司令部貯糧督工以修軍備除污穢改習以撫順民於是治化大行
王師猶未偃干戈已見順民歸德多急曲繁絃聲若湧劇場歌舞見人和
旅順口有積劇境雖敵時然未嘗絕系竹聲可以見其人和矣
颶風猛蹴天寒人倚軍廳放眼看敵將致身降艦到港中現出一峯樹

春風至旅
順口

和清國請

歸和議定

血流漂杵
絳闌壯圖

降艦鎮遠入旅順口艦體巨大如港內現出一峯樹者

北海春光何處求寒雲漠々水悠悠々人傳總督新開府一陳東風到港頭
清國悔渝盟使李鴻章來請和許之七月十四日

總督進營師北行剋期欲迫北京城清廷大悔渝盟覺罪也割地償金輸厥
誠

清國大悔渝盟以李鴻章在欽差頭等全權大臣以李經芳在欽差全權大臣來請和
朝廷許之以伊東博文隨與宗光爲全權辦理大臣議於馬關四月十七日締和議定

日清兩國媾和條約

赫々神功維聖謨宣示有徵見宏模血流漂杵遶東野貔虎桓々闢壯圖
我皇帝陛下宣示有衆曰點撥日清兩國全權大臣所定締和條約無所間然因批准
之第二條曰以奉天省南郡自前線江口至平安河口自平安河口至鳳凰城海城營

平島之地
不屬發羅

雲在保東
洋平和

傳微戒漸

生金雞光

馬城來廷

勝我版圖
澎湖及臺灣
澎湖列島

白山曰。我邦與清國同文而唇齒相依。兩國離合。東洋安危之所係也。皇上之眷々於平和。聖慮可謂遠矣。事無方全理唯一斷。不吝於取捨。智者之事也。今夫歐洲之強。非易爭。而東邦之好。不可棄。則先修隣交。固根本。以期成業於百年者。固國家之至計。而區々半島之地。不異於弊屣也。語曰。見小利則大事不成。信哉。

李鴻章。

心忘正義。不知羞。智力窮來。逞詐謀。李氏外交。非有術。宋人故智。賄歐洲。白山曰。世人稱李鴻章。爲善外交者。然李氏不顧字內之大勢。不爲與

永遠平和。朕恒眷々於東洋。平和而與清國交兵者。亦欲以謀平和而已。清國既悔渝盟交。戰理由炳。蹇寬洪。遇事亦不損帝國威嚴也。因答友邦忠直。遠附半島。地百倖臣。庶能體朕深視。時勢大局。慎微戒漸。勿誤邦家大計。

口至遼河口折線以南地及城市堡壘兵器製造所在遼東灣東岸黃海北岸屬奉天省諸島嶼臺灣全島及其附屬諸島嶼澎湖列島永遠割與日本國第四條曰清國以庫平銀二億兩爲軍費賠償金與日本國

大。師。凱。旋

馬。城。來。廷。師。凱。旋。南。薰。旗。影。祥。煙。膺。懋。大。典。皇。威。震。萬。歲。祀。聲。殷。動。天。

欲。迎。百。戰。奏。功。人。早。起。倚。門。垂。白。親。壯。士。歸。家。餘。勇。在。戎。衣。猶。見。血。痕。鮮。王。旅。嘽々。武。是。揚。功。臣。稽。首。拜。勳。章。斗。間。未。歛。紫。龍。氣。驟。下。新。生。金。雞。光。

謹。讀。還。附。遼。東。詔。勅。

義。戰。大。名。輝。炳。然。和。親。復。舊。德。罔。愆。慎。微。戒。漸。邦。家。計。謹。奉。勅。書。期。百。年。還。附。遼。東。詔。勅。曰。踞。獨。兩。帝。國。佛。國。共。和。政。府。以。日。本。帝。國。傾。遼。東。半。島。地。爲。不。利。於

力盡援可
告變援

我國提擄以保東洋平和之計。驕傲生隙。力盡智窮。而哀告攀援。依歐洲強國以逞其詐術。至是局面一變。東洋危機。間不容髮。善外交者。其豈如此乎。

沙塲埋骨

原野橫屍。我武揚忠。臣鮮血。國家光黃沙。埋沒同胞骨。烽火猶青百戰場。

遊魂難招

烈士碑前日欲甯。征人去盡鳥空呼。遊魂万里難招得。泣見奉天新地圖。
盛京省海城葬我軍戰死者。墓石題曰殉國烈士祠。

白山曰。征清之役。觀礮北洋水師。悉拔遼東城寨。懸軍万里。海陸並進。而知陷北京之非難矣。見燐和議定。開版圖於海外。而知我國勢將大

烽火青

烈士碑

東洋自有
實詳權

伸張矣。抑東洋自有東洋之權。我軍百戰百勝。宣揚威武。殲和之議。無所間然。而使歐國置喙於其間者。蓋東洋諸國兵力。不能制彼橫暴。自全權利。清國屢納重賂。以啓其心之所致也。嗚呼。歐國堅艦橫行於五洲。而東邦之兵備未完。何以能戰。何以能守。思之至此。使人凜然。堅立毛髮矣。

凜然堅立
毛髮

嘗瞻臥薪

有時。蟠屈待龍伸。驕氣全消。忠憤新戰士。瘡痕猶未癒。又爲嘗膽臥薪人。白山曰。任富強之務者。非有寬弘之量。何以勝其重乎。非有剛毅之志。何以致其遠乎。余嘗見歐洲航海者所爲。而知其豪膽堅志。優於東邦之人。歐國之欲開通諸大陸航路也。自十三世紀至十七世紀。從航海

驕氣消而
國運自全

高橋勳於
寢室

爲之不已
何憂不成

船一周地
球而歸

之業者五百年矣所計畫四其第一爲廻亞非利加大陸而南航者葡
 國航海王腓勉從事三十餘年而其業未成後王繼志千四百九十八
 年一艦隊始達印度其第二爲向西航行達東洋者千四百九十二年
 閣龍至亞米利加近海哥倫比亞千五百二十二年麥哲倫達亞米利
 加其船一周地球而歸其第三爲過北冰洋而東航者距今十八年前
 瑞典碩學某得開航路其第四爲過北冰洋而西航者未聞奏其功蓋
 歐洲天候微溫土地磽确所產貨物不足以充需用洲人專事交通貿
 易當開航路前者不歸後者繼焉千難萬艱不少屈折必達其志而後
 已足乃所以致其富強也余見東邦之人未嘗振力從其事事不成則
 曰欲爲不能能之豈不爲乎嗚呼是不爲也非不能也苟任富強之務

者宜以剛毅爲志以寬弘爲量見事之不成爲之而不已何憂其不成
 戰語曰士不可以不弘毅任重而道遠余感歐人之弘毅不撓經五百
 年久以致今日之盛而嘆東邦之不振因叙其航海事業概略以告與
 吾同屬者

魏々高德

魏々高德勳宸衷爲讓遼東百戰功須記奉天南部地一朝在我版圖
 中

白山曰余讀西史竊有所感據爾日三世之行奇政也佛國助華盛頓
 成米利堅獨立拿破崙一世之將合歐洲也聯邦之兵破之悉復其舊
 士尼歌拉士歷山二帝之屢略土耳其也英佛等諸國爭之使魯國還

國名也

必列國那

日本隆興
紀元

其侵地英魯佛歐洲之強國也然兵敗力窮或喪屬邦遭流竄或激戰
流血多亡兵士屈辱亦甚矣夫忌強護弱者列國之常而忌強者實也
護弱者名也當其忌強以護弱為名不復問正理之所存斥公為私以
是為非要在兵力耳蓋三國之強尚受屈辱者不計其力之過也我之
征清國以平和為主其處侵地也智明事當有可取之理而取之有可
還之義而還之不矢取與之權矣然歐國以我取遼東為害東洋平和
則使歐國不得取之者亦保平和以全我國權之道也我之所任可謂
重矣自古成大業者必先有驚宇內耳目之功可以鎮列國邪心矣征
清之役我軍海陸並進百戰百勝威武震動宇內是乃進立旋天轉地
偉勳之秋也振起東洋之策豈可不講哉

告子孫

愛國心開富強源至誠只合答 皇恩試看忠士征清績日本隆興新紀
元

征清詩史終

征清詩史

九十七

跋

乙未夏征清役起。不肖奉命從海軍趣清國。急遽之間。不遑歸鄉辭於家君。後歸舊里。則家君更使兒談從軍中所聞見。詳細周密。無復遺漏。家君深嘆國事。丙申冬。據兒所報。與戰史戰報等所記。著征清詩史。以傳家庭。蓋有所感也。今茲丁酉三月稿成。命兒校閱。兒方在征清海戰史局。因證之公報。改其傳聞有異同者。三閱月而訂正全畢。謹按此書。首稱皇家威德。以叙國民忠愛。致身立功之所由。次觀東洋大勢。將一變以說兵備。爲急務。終傷忠臣烈士之死。而論其志業。不可以不繼。嗚呼。家君有所感。作史傳家庭。則捧讀不怠。存心於國事者。子孫之務也。因書卷尾以自警云。

明治卅年六月念九日

高橋作衛識

明治卅年七月廿八日印刷

全 全 三十日發行

長野縣上伊那郡高遠町七百五十六番地

著 者 高 橋 白 山

東京市本郷區森川町一番地

編 輯 兼 發 行 人 高 橋 作 衛

東京市京橋區宗十郎町十五番地

印 刷 者 足 助 房 太 郎

東京市京橋區宗十郎町十五番地

印 刷 所 國 文 社

佐藤憲欽 著

讀正續日本外史

明治十一年（一八七八）甲府刻本

據明治十一年（一八七八）甲府
刻本影印

合

巖谷公序

英

咀

巖谷公序

華

明治戊寅八月
一六居士倭題

巖谷公序

讀正續日本外史序

頌其詩。讀其書。而尚論之。之。謂友古
人。儒者之修史。垂警誡于萬世。事業
之極大。而難者矣。若夫正史。學士奉
詔撰之。參考多。書贊成。有人。記次。卒
業。則以聞。而行。故有似難而易者。至
如私史。不然。搜蒐乏于書。纂彙獨自
任。及其全成。苟觸諱忌。則不獨書之
不行。足以賈禍陷罪矣。豈非難之又
難者哉。山陽賴氏。以一布衣。涉獵群
籍。參訂闕疑。刊精多年。修撰日本外
史。煩簡得宜。綜記成體。世稱良史。與
大日本史並行。而卷帙非浩穰。不難
於購求。遭際維新。文明之運。學宮私

讀日本外史序

塾莫不絃誦之。可謂其功偉也。夫緒史者。講讀之久。而至好之。不置。乃論議諷詠。摭其要。以示後生。亦是學士之務。所以詠史之詩。續出不絕。以是乎。佐藤氏有讀日本外史著。非啻惡姦邪。美忠良。而諷詠之。已短章小詩。使蒙學坐卧詠誦。備乎遺忘。則佐藤氏贊翼外史之功。亦偉矣。而又可謂賴氏隔世知友也已。及囑序言。不敢辭之。而誌松本萬年。

續日本外史序

續日本外史序

讀正續日本外史序

議論超衆。而益於名教。猶且觸忌諱。則罰識度拔群。而功於國家。然而罹憲法則誅。學者際此時。修正古史。審其治亂隆替之狀。覈其正邪忠佞之情。以垂懲勸于無窮。見榮辱于既死。使後世王者鑑且戒。使亂臣賊子膽落肝寒。是豈不難也哉。山陽賴翁。以卓起之學。拔羣之識。修成國史於忌諱密網之世。叙記數千年間。治亂隆替。正邪忠佞。可褒貶者。可抑揚者。皆以自家神力運之。組織乎楮絹之外。彰著于不律之下。而間又以其不得志者發之。故非心志高正。學識超拔之人。誰能爲之。況於評之論之乎。佐藤君某著續日本外史。介人徵序余。余未接其人。未見其書。不知君之心志果高正。學識果超拔。與否。則似不宜序焉者。然據介者言而推之。則其詩鏗鏘。其論諤諤。析毫釐分寸於短篇小句之間。使

耳食之徒知翁微意之所在。與讀史著眼之處者必有焉。果然。則此書益于後進。豈少哉。雖然。淺於交而深於言。古人所戒。誹於腹而譽於口。亦我所不為。且書之為序。

七生狂士青木貞撰

續日本外史序

二

讀正續日本外史

日本外史編次

源氏

平氏

北條氏

新田氏

楠氏

新田氏

足利氏

續日本外史

足利氏

足利氏

後北條氏

武田氏

上杉氏

毛利氏

德川氏

織田氏

豐臣氏

德川氏

以上

續日本外史

二

讀正續日本外史卷之上

羽後 梅軒 佐藤憲欽

余自少好讀山陽賴先生日本外史手不釋卷爾時讀史之作凡得五言古詩十九首七言絕句三百六十首不以爲意棄擲有年于茲幸免覆瓿頃者出而讀之體裁鄙俚字句雷同殆如出別手不復加刪潤雞肋視之豈曰公之大方哉明治九年秋八月

續日本外史

聖子將神孫初降爲武門徽章分赤白姓氏別平源俱受于城寄長此護至尊出則征不庭入則衛禁垣中世皇綱弛妖霧暗乾坤動兵輦載下鳳闕殷血痕如何彛倫變骨肉互噬吞平相何跋扈宗族盡封侯遷都且廢帝無爲不自由子弟况多暴終結天下讐賢儲從祈死犯顏誰匡救露々朱門內歌舞日未休寧知東海龍待時潛清湫

東方源九郎奉宣討平宗用兵妙如神誰又當

英鋒揚帆破惡浪躍馬下危峰進軍西海上血戰塵群山歸來欲獻俘阿兄不敢容空出腰越驛雙袖淚龍鍾

義旗揚東區家人盡競趨何啻雪祖辱兼使斯民賴終握兵馬權四海歸雄圖君王遂垂拱不復勞聖謨沃々八州地爰開鍊倉都蕭牆時一閱骨肉自相屠寡妻與陪隸更弄天下樞

逆取思順治盡心致變理入幕多嘉賓家庭亦濟美威權歸既久由來真有一朝加誅鋤欲

續日本外史

復王政始類運挽不同皇天其奈否將軍何足云絕島流天子神人爲之怒勤王兵四起嗚呼七世基忽焉長已矣

蒙古吞宋初宜威欲致速遣使數贈書言辭多不遜頭足直異處真不辱邦憲彼主忽必烈聞之大恚恨戰艦凡幾艘精兵十餘萬舳舻相啣來向我責貢獻忽被神風覆冠軍偏委頓飽試日本刀猶未覺滋鈍

盛哉中興業翠華歸鳳闕欲雪蒙塵耻敵心深

銘骨行在通下詔。凶賊盡誅伐。無奈寵閭徒。更又司賞罰。當時戰功臣。視之如賤卒。誤聽老姦。讒皇儲。幽土窟。藤公既隱逃。楠子亦敗歿。南風終不競。芳山沈日月。

天步方艱難。夢寐思良圖。忽感南木兆。得斯烈丈夫。際會真所稀。忠義絕代無。鯨鯢雖就戮。豺狼又逃誅。再命南山狩。聊保偏安都。可憫一宗內。三世殉顛扶。英名揭日月。長與天壤俱。千秋萬歲後。可爲臣子模。

續日本外史

三

新田將足利。同出八幡公。門閥互相誇。吾宗爲嫡宗。當斯中興際。翼戴總元戎。奉公與營私。由來道不同。安待交訟日。然後見勞功。芭苴內謁行。讒譭壅主聰。兩端懷僥倖。寧足御英雄。殺身祈滅賊。誰謂非至忠。請看後興者。實在遠裔中。皇統歸閔位。南北元同宗。神器相傳授。車書初一同。搖々神州草。稍偃大樹風。僭侈亦何甚。與服擬六龍。萬里修使聘。更與外邦通。千載傷國體。無爲受僞封。

板蕩花亭季。將壇無主盟。群梟競相起。中原與爭衡。朝陽照岐山。初聞鳳凰鳴。唱義扶大樹。興禮奉天庭。彼髡擁兵者。一時極嚴刑。行旅通四方。闕市不復征。斯民待來蘇。行將致太平。惜哉蕭牆變。功業半途傾。

流落欲安依。孤劍寓關東。韜略且休說。唯在攬英雄。終定八州地。威名一隆々。子孫偏負力。不敢霸主從。帝爲授節刀。海陸使共攻。計窮無所出。投戈遂乞降。創業與守成。優劣何不同。

續日本外史

四

風雲鬱缺間。實爲豺虎窟。嗟彼四隣民。山野曝骸骨。吞噬不知飽。猛威何猖獗。欲遂中原志。修盟和北越。移兵向帝京。所過皆斬伐。殞命銃丸下。誰謂非天罰。後嗣况豚犬。宗祀長滅沒。復讐將助弱。義勇人所慕。逐父將殺兒。悖逆人所惡。既挾孫吳術。兼之千乘賦。同世且接境。豈謂非奇遇。相持終不決。經略何辛苦。兵法並傳今。長爲武門度。

奕葉毛利氏。曩祖維廣元。曾入錄府幕。翼贊多

讖言流風將善政。濟美至子孫。上書誅陶賊。義氣震中原。興學修治教。絃誦起西藩。弟謀兄且戰。智勇在一門。講和不變約。還借兵器援。請看豐太問。猶感當日恩。

相將元有種。崛起若君稀。唱義誅弑賊。侯伯歸指揮。一時唾手取。七道與五畿。但恨絕海外。猶未服皇威。萬里遠出師。直欲合區宇。叱咤如風雷。鏖盡三韓虜。其功雖不成。長此耀吾武。可憫浪華城。遺業同金塢。

續日本書紀

五

五老受遺命。勳力贊廟謨。佞豎偏營私。自要握機樞。託言德川氏。將不利於孤。百計誘群梟。陰謀舉異圖。還尾東伐後。夾擊發中途。中途忽回旆。神算孰能虞。烏集與瓦合。倒戈是前徒。一戰血漂杵。元惡就天誅。振旅遂入奏。不復問坂都。太傅誠忠心。爲君畫三策。三策棄不收。還被群小隔。群小遂得意。更又開亂隙。吾公令天下。飛檄召牧伯。雖纔填周池。猶未散浪客。驕婦與駭獮。終不得不辟。重此移大師。一舉拔城壁。天命

既有歸。無爲徒剪馘。

龍德乘天運。風雲盡飛揚。乾坤遂再開。日月更增光。高開征夷府。萬古表尊王。剖符封侯伯。藩屏守四方。詢謀及芻蕘。廟謨任賢良。詩書藏闕闕。弓矢在橐囊。立廟祭宣尼。春秋薦馨香。重譯來殊俗。治化流八荒。振古至于今。未見如此昌。恭順誠盈滿。惕若鑒興亡。聖以長傳聖。世祀屬無疆。

續日本書紀

六

吾朝建國。厭繁文。文武一途。曾未分。請見四方。如有事。九重天子。即將軍。降至中朝。倣李唐。官分文武。任賢良。衣冠介冑。無常職。出立軍門。入廟堂。常把犁鋤。從耨耕。或持弓矢。宿軍營。天民初見。兵農別。千載長傳武士名。宿衛胡爲豪且橫。制符頻禁屬。源平。誰知諸國豺狼者。元是六軍。驅虎兵。曾從皇祖降皇孫。萬古千秋奉至尊。大逆於吾。觀神器。至今唯有一將門。

平家元祖葛原王。血統相傳至國香。一時縱被將門殺。還伐將門餘澤長。

清和之胤六孫王。降列武臣介武藏。天子一從賜源氏。旌旗千載白爲章。

一以兵權附二宗。子孫遂襲割符封。相門出相將門將。長使君王拱九重。

誰言權柄去天朝。形勢由來非一朝。藤原執政源平際。多使英雄沉下僚。

帝王代々出藤原。終以威勲凌至尊。有之相似

續日本外史

七

聞其語。不罪將門罪相門。

相家弄柄亂朝章。不以武人齒廟堂。若使將門拜官了。當時未必作新皇。

天寬馴致保平年。國勢終從世運遷。莫把武人奴僕視。武人還握大君權。

源平並立衛王家。兼爲相門作爪牙。不是諸源就衰廢。諸平爭得詫榮華。

武衛堪思滿仲賢。二刀鍛鍊子孫傳。請看干將莫邪利。不及截鬚與膝圓。

皇威猶未遍東邊。前後長征十二年。誰識虜酋就誅日。滿頭白髮盡蒼然。

東征士卒苦焦蕪。頻廢赤符用白符。不是將軍能勦賊。爭令荒服屬皇圖。

鶴岡新造八幡宮。偏仰威靈賽戰功。爲是士民眼恩信。千秋長自鎮關東。

兄弟閼牆還啓戎。二衡遂叛八幡公。恨將王討爲私闘。不下官符賞戰功。

足柄山頭月色深。秋風吹送鳳笙音。可憐當日

續日本外史

八

援兄意。不似他年殺姪心。

陰聽忠言載贄行。大江學士是先生。自憐奧羽東征日。雁陣亂邊知伏兵。

父祖相承善用兵。風雲常自護皇城。誰知御惱平痊日。獨立空庭試射聲。

意氣誰如忠盛豪。電光一射使人逃。從容手授殿司去。白刃初知是木刀。

微幸暗迷祇苑花。陰風吹火雨斜斜。侍臣尤是眇能視。不認山僧爲夜叉。

苦心以死顯家聲。承寵累遷刑部卿。帝賜宮人
舉男子。命名清盛。禱清榮。

皇統失傳。天降災。四方頌詔募英材。如何父子
君臣際。還釀保元兵亂來。

法皇未葬。即揚兵。朝野恟然。奈物情。苦怪大漸
遺命日。強宗還自逸。諸平。

堂々何用待僧兵。臨戰先知事不成。猿臂數奇
長已矣。徒令豎子就功名。

一勝定君何用疑。火攻夜戰在神奇。阿兄英略

續日本外史

九

己知道。先我應爲吾所爲。

臨戰何須論弟兄。吾應行處當強兵。枉脫阿兄
元有意。還言弟射未能精。

諸門分隊各相持。不映聊將一矢遺。甲冑冑題
唯所命。叔兮方與伯兮爲。

少年不屑父兄傍。遙在鎮西稱八郎。巨箭勁弓
如鑿鐵。于今傳得亦爲槍。

爲朝臂力晚猶強。射沒軍船何處亡。竟入琉球
果然否。子孫長祭大王。

武臣赴戰。不期生昇殿。攝衣何若情。家弟唯言
八郎足拜官。詎用一時榮。

八甲飄零不可尋。白頭削髮就生擒。一時以刃
推同氣。忍叔心如忍父心。

己忍阿爺何有兒。天王乙若鶴將龜。覆巢之下
無完卵。吹盡悲風老樹枝。

義朝東走義平西。先後就誅各地齊。清盛元非
憐鬼武。無何池氏盡情啼。

火攻已沮八郎籌。逆戰還違源太謀。從古懦夫

續日本外史

+

多誤事。長令壯士抱心憂。

檻車千里謫流人。沿道相看目送頻。無是深山
還放虎。關東將士本家臣。

父子源平幾處分。一時輦轂起妖氛。倉皇倒著
兜鍪去。枉道忠臣不背君。

赴急寧辭兵少多。致將名簿示無他。豎子不知
廼公策。昨今予取果如何。

指揮子弟據金鞍。血戰敢言王事難。天助吾宗
須努力。年爲平治地平安。

櫻橋欄邊七匝時。兩家嫡子競雄雌。可憐源氏空官出。好拔白旗樹赤旗。

大宮一戰樹功勲。君賴家臣臣賴君。行到巷頭被弓立。再生復見平將軍。

關門子弟盡華紳。身准三宮帝寵頻。請聽當時平族語。若非吾族便非人。

曾以微勲至大臣。不言過分受恩頻。當時呼曰高平太。無怪萬人齊反唇。

古來忠孝兩難爲。王事寧將家事辭。淨海禁中

續日本外史

移帝日。小松邸內徵兵時。

一孟母乃慰切々。相獻相酬內府醪。怪殺傳家

小鳥外。好兒更以無文刀。

丞相疎豪老益狂。又無爭子制跳梁。福原一日

遷都去。板屋三間幽法皇。

日會山莊夜未歸。外人何得識幾微。瓶子已先

平氏倒。衆之應屬檢非違。

天涯日夜望鄉關。萬里東風報賜環。無奈恩波

猶未遍。三人同謫二人還。

諸平文物亦彬彬。忠度風流重盛仁。詠歌雅趣動天地。祈死深情感鬼神。

白頭自喜拜恩殊。歌詠無爲寓歡吁。樹下曾言拾稚子。澤邊猶憶抹菖蒲。

忍見平宗凌至尊。古稀舉事唱諸源。當時鬼武弟兄外。先有斯公揚白幡。

欲復深仇滅賊平。同宗何事亦交兵。還恐他人笑相肉。暫提鐵騎北州行。

西軍乘勝陷諸城。義仲聞之遽進兵。前驅先奪

續日本外史

寒原險。擊退西軍使入京。

老大酬恩國士情。歸鄉衣錦有餘榮。白頭染作

下年色。青史長留千歲名。

一出峽中揚白旗。當時勇略動京師。無是沐猴

而冠者。何如鬼武使人思。

深悼以仁殞厥躬。道因遺命樹微功。法皇唯納

寵姬語。義仲偏稱北陸宮。

奪將大邑自相封。幽掠四邊侵九重。爲是市朝

齊失望。使人更復憶平宗。

旭日將軍據上流。充龍偏泣南冠囚。爲帝爲院從吾欲。若公若卿任汝求。

臨戰如何慵著鞭。英雄耽色故留連。帳中惜別美人泣。烈士諫君死帳前。

躍馬幾回從戰場。將軍臨別奈巴娘。行到粟津驢不逝。旭光消作野田霜。

從與將軍別粟津。爲尼削髮負芳春。世俗不知巴女志。誤言污節嫁他人。

平氏榮華彼一時。諸源並起入京師。京師父老

續日本外史

十三

皆相道。今日何圖見白旗。

舉宗奔走互提攜。遽奉乘輿赴海西。不惜我家惜神器。相看與作數行啼。

欲誅無道報天朝。東國家人館下招。經俊不知當世務。嘲言猶是鼠圖貓。

石橋一敗命將窮。潛匿暫投僵樹中。須識英雄有神助。雙鳩飛出八幡宮。

無是兩端持異圖。速來何不下風趨。初識此公成大事。使吾後陣待招呼。

好誘觀望張幕旗。關東豪族到來時。一麾忽得二州地。天下唯公所欲爲。

初征八牧起關東。忽伐木曾鎮洛中。偏使滿朝想風彩。大頭公是一時雄。

東伐京兵幾萬人。夜驚水鳥不成屯。千秋傳博武門笑。勿怪圓顧丞相嗔。

水魚交契見君臣。臨別一言敢自陳。若使高綱猶未死。不將先渡讓他人。

各賜名駒赴戰場。預知景李怨高綱。一時若不

續日本外史

十四

以言免。殆使佐公喪二良。

闔門祇令死京華。回首海山雲路賒。龍舟鳳輦無歸日。行在春風亦落花。

還從南海徙山陽。臨海負山兵勢張。九郎忽下九天上。一谷生田不復防。

鶴越懸崖百仞高。長驅先衆義經豪。一鞭直下三十騎。復使乘輿航海逃。

烟焰一時漲海風。鑾輿狼狽出行宮。殘陽不飲舟中臂。血變暮潮天地紅。

海陸戰爭猶未央。殺傷誰識各相當。射穿七札能登守。勇冠三軍源九郎。

裨簾梅花一陣香。軍容誰又及源郎。爭魁獨躍驂驄去。散入春風滿戰場。

敦盛芳齡二八春。懷中瑤笛獨堪親。月樓吹盡梅花落。一夜沙場飛作塵。

平家運命既將窮。赤幟無光落日空。一帶戰場孰點點。彤弓流水扇飄風。

生爲亡虜最堪慙。飽殺敵人死亦甘。借問納言

續日本外史

十五

笑何事。宮嬪不忍睹東男。

安之二字最傷心。碧海茫茫怨恨深。千載琵琶演平語。使人腸斷淚沾襟。

南冠君子美容華。遙在鎌倉思帝家。帳裏絃歌勸盃夜。暗風吹雨落燈花。

臨終一語又何云。擁枕兒孫同所聞。不斬敵人供墓祭。徒行却匝敵人墳。

悚然請宥亦堪嗤。魚俎加刀意未知。不類父兄君勿怪。此兒元是傘工兒。

自將首虜入京城。抗疏誰憐兄弟情。昨日威勳今國賊。朝廷何得庇諸平。

特向平宗罪不臣。矜功擅寵豈無因。寄言兄弟聞牆者。孰與閨門沈海人。

一自王權歸武門。地頭守護似成藩。若把源平議功罪。諸平何必減諸源。

八州草木偃英風。叔府鎌倉賞戰功。內助況還兼外輔。諸臣誰抗北條公。

忽起風雲卷八州。能因公義復私讐。唯爲蔓草

續日本外史

十六

當年計。不省北難他日憂。

削髮爲僧竟不聽。讀書學劍度幼齡。九郎心事應須見。獨自加冠曰義經。

討滅平軍揚武威。有功不賞與心違。範賴失言駟難及。義經逆鱗猪耶非。

西征縱是奏功回。庸劣元非卓越才。不與九郎爲貳舞。阿兄何事苦相猜。

幾歲漂零棟蓼枝。相看悲喜淚先垂。如何腰越獻俘日。不憶黃河握手時。

密叩幕命欲誅姦。窺隙徘徊京洛間。面縛從他偏。毆我我顏便是阿兄顏。

強理衣妝上舞筵。一聲唱出想夫憐。難。難。昔日爲今日。望斷芳山白雪邊。

眼嵌魚鱗雜役徒。欲將利刃試公軀。伯仲之間看豫讓。若令得志失雄圖。

將軍遊獵既將還。二子復仇夜破關。史筆唯書多死者。不言當日獲如山。

胄子生來十二年。從公遊獵鹿應弦。一禽何用

續日本外史

十七

勞專使。十載猶思母氏賢。

一夜金函夢亦奇。照來妝鏡見妍媸。何物家奴能料理。殷勤更與致相思。

錄府遺臣多若雲。正邪聚訟太紛々。驕子不能御群下。寡妻誰道尼將軍。

還將新附奏新功。能以舊臣奉舊公。試把二人爲比較。和田義若畠山忠。

文墨從來任所爲。府中元老被人推。當時生殺在君手。兵事還言不與知。

一府當年稱老姦。于今耻齒士林間。謾言反覆尋常事。借取他官竟不還。

擬將官職耀家門。不誠滿盈慮子孫。大禮未終元已殞。空遺一髮代其元。

鎌倉右府非常人。誤賴外姻捐懿親。骨肉不終三世業。長令軍政屬陪臣。

張弓擐甲動旌旗。十九萬人西上時。不是君王偏好戰。健兒何得拜京師。

不計弱強不待時。先幾已有諫臣知。還言近事

續日本外史

十八

非天意。欲以首謀歸阿誰。

無前逆賊批龍鱗。廢立帝王誅大臣。舊史縱文承父事。官家畢竟叛何人。

父子三皇三處遷。各居窮海見無緣。纔因石窟庇風雨。行在爭禁十九年。

久以陪臣執國權。箕裘相繼愛逃禪。臨終一偈心如鏡。大道元來是坦然。

寒雲漠々夕陽斜。乞宿旅僧歸路賒。誰道主人殺風景。代薪燒盡盆梅花。

手提壺酒點燈光。探皮求有將。侑觴殘醬擎來爲下物。雖無供給興情長。

入幕幾年謀治安。不須武斷好文官。階前千里君當誠。門外便爲萬里看。

經濟齊稱青砥賢。平生心事笑參禪。十錢不惜一錢惜。炬火猶思照滑川。

盡心民事信無僞。跋扈視君如贅瘤。功罪相償從末減。不令胡虜覲神州。

鑿盡虜兵破虜舟。伏屍蔽海海成邱。誰言宋主

續日本外史

十九

崖山恨。此日還假吾手酬。

縱開幕府號征夷。委政陪臣無所爲。與駕當時從倒載。將軍却被謫京師。

鼓樂喧然日極娛。還將幕政附庸奴。高時一自失家法。再使王權歸睿圖。

群嫠終日鬪前庭。醉舞夜深猶未醒。一曲高歌人不見。天王寺裏妖靈星。

府中第宅委灰塵。訣飲先塋酌酒頻。試數當時殉節士。六十八百有餘人。

東魚吞海日沈西。西鳥食魚東海齊。終使獼猴掠天下。休言識記屬無稽。

天步艱難入夢時。鞠躬盡力報相知。敢辭褊裨供驅使。唯願君王帥六師。

楠子勤王揚義旌。四無聲勢守孤城。僅將九百有餘士。鑿盡關東十萬兵。

臨機應變叵端倪。鬼策神謀不可訾。垣上斷繩飛巨石。筒中噴火燒危梯。

一片孤城拔不能。諸州豪傑望風興。金剛圍解

續日本外史

二十

拜天日。遙率親兵迎玉乘。

兩暗行營夜色深。題詩櫻樹立庭陰。誰知天子蒙塵日。私有三郎慰敵心。

擬奪鑾輿奉紫宸。元弘天子此蒙塵。寄言護衛親狝士。解讀小詩知幾人。

夜間通津迷海灣。好投豪族避時艱。白龍魚服逃船底。天步還登船上山。

行在一時奏捷來。鑾輿還闕尚遲徊。天子自將周易筮。大君有命國家開。

天恩一日遍朝簪。舞女歌童裂土頻。六十六州如個大。更無尺地與勞臣。

千里名駒汗血來。滿朝皆賀得龍媒。見幾獨有藤公在。物外振衣去不回。

漫聽讒言囚帝儲。庶官誰奏訴冤書。朱唇含刃血吹霧。白眼睨天怨有餘。

曾贊中興慰敵心。還因群小惱宸襟。皇恩佛德知多少。土窖經函孰淺深。

尊氏東征不肯還。却驅兵馬入重關。重關忽失

續日本外史

廿

貌貅守。遽奉乘輿幸叡山。

夜掃城營抽一身。空留白骨委灰塵。鬼神未得

計生死。泣血呼天善哭人。

賊軍乘勢逼京畿。暫幸叡山避逆威。不知兵事

在奇道。千載長令廟略非。

一行拜闕出京師。櫻井驛邊分手時。便把寶刀

手相授。片心唯有此刀知。

遺恨千秋日月昏。猶留塊肉報天恩。至今川上

往來客。先弔忠臣楠子魂。

楠公節義凜秋霜。深悼忠肝塗戰場。更有後賢追慕切。能令潛德發幽光。

泣從阿母忍生初。拜別天顏萬死餘。吾謂武侯前後表。精神不及小楠書。

大舉方逢賊帥侵。微臣致命在如今。延元廟裏題名處。百卅三人盡一心。

大節寧因禍福遷。闔門餘烈無間然。千秋厄運縱難復。支得三朝五十年。

新田足利本同門。重畫何如中黑尊。無將成敗

續日本外史

廿三

論天道。後世終歸公裔孫。

曾因驅使敵官軍。歸順偏能策異勲。尊氏如何

冀非望。上書還自欲云々。

一聽彈箏不耐情。英雄心事感恩榮。君王何識

蛾眉斧。還壞自家萬里城。

一戰已堪梟賊頭。頓兵京洛却淹留。千秋失策

因何事。遂使鯨鯢吞九州。

持運兩端非所聞。倉皇臨別始云々。攀轅齊踐

忠臣淚。枉使鑿與幸賊軍。

無是水魚情未通。徒將僥倖待英雄。君臣共失當時策。不向關東向越中。

百戰無因破四圍。夢中誰識臥龍非。錦囊獨帶親書詔。不滅賊軍終不歸。

挽回皇運一時隆。內外藤楠賴二公。爲官無利爲私利。無怪新田不奏功。

白鳥村邊白日悠。獨行忍聽小童謳。可憐一草與三木。不以榮枯負九秋。

幽居日夜惱宸襟。陰出花山何處臨。老賊唯言

續日本外史

廿三

吉祥事。不將物色四方尋。

一自良哉失股肱。南風不競竟誰憑。遺臣無奈何遺詔。空使英皇按劍崩。

南朝日月竟陰々。再造神州奈陸沈。武怨文諛豈無故。姦雄還得姦雄心。

門地從來堪自誇。何須臣隸役京華。時遷勢變至今日。擬屬官軍興我家。

無奈將軍拒我曹。斷然切髻既禪逃。敵屍一自傳官檄。忽釋法衣穿錦袍。

清平姦賊是將軍。開府花亭近要君。誰道春秋無義戰。余於足利亦云々。

或擁數州又數城。關西望族是山名。六分天下有其一。義滿即時誅氏清。

戈戟稍看平四方。乘輿何意擬天皇。能知太上辭追號。還受僞封恭獻王。

禪室清風入賦詩。自知權柄久難持。當時若問令終者。唯有細川一賴之。

還俗將軍襲職時。道爲父祖不能爲。赤松邨裏

續日本外史

廿四

他年事。須識乃公自取之。

白銀閣就映青天。一世豪華付茗烟。還怪四方多事日。不求良弼夢歌仙。

東北名山營別莊。祖孫相襲競餘光。只今唯有金銀閣。遺業蕭條託梵王。

不使將軍執鼓旗。東西兩陣各相持。雄雌未決身先死。天下兵爭無息時。

徒擁虛名失實權。中原板蕩奈兵連。鎌倉終覆花亭弱。渾爲上杉與細川。

落魄江湖欲賴誰。知臨暫得大君宜。碌々如公
小人耳。負來致寇又奚疑。

祚薄門衰失舊圖。中原何處寓斯軀。熱辱祖先
計安逸。不將名號與人奴。

間關避亂棹輕舩。纔寓西藩亦可憐。但爲主人
存舊誼。重看鞍馬到門前。

其本不治如末何。蕭牆常自動干戈。連綿足利
十三世。唯見亂臣賊子多。

孤劍單身流寓餘。八州五世叔基初。不就豎儒

學兵法。英雄方略顧何如。

從他呼做丐兒孫。宿志須看功業存。三島神祠
夢中畿。一霄嚙仆兩杉根。

八川沃野入并吞。煮海鑄山貽子孫。試問關東
都會地。繁華先數小田原。

曾將寡少得奇贏。豚犬願聞當日情。無是英雄
窺手段。憑君容易勿談兵。

軍營布野陣雲屯。時見腰鎌刈麥人。大國郎君
意何厚。炊新餼欲饗嘉賓。

士民往々似斷冤。政滯偏看法令繁。還使老臣
弄權柄。恬然不省旅僧言。

送款敵軍尤可憎。告將大事亦堪稱。八州城壘
終難守。五世君臣何足憑。

山河百二玉關重。勢擁風雲堪折衝。何物猴奴
將口舌。一時欲奪八州封。

君家父子兩相嫌。小少何知志韜鈴。新策奇功
駭群下。猶爲愚色賺尊嚴。

問安幾歲欠趨庭。悖逆自知犯五刑。削髮未堪

償大罪。痛頭傭讀串珠經。

中年宴樂事遊嬉。廢政風流耽賦詩。還有親臣
以詩諫。彫蟲不是丈夫爲。

越軍不動又何爲。拂曉陰令候騎窺。候騎未知
車陣法。唯言直向犀川馳。

雲鎖西條殺氣多。兩龍相鬪筑摩河。植旗越將
收殘卒。撿馘甲軍揚凱歌。

十二年來徒構兵。多喪士卒奈功名。好撰力人
期賭鬪。信玄獨取貝津城。

頻以大兵抗武田。北條口實復今川。講來啄木
取蟲理。臣主相看暫默然。

用兵迅速得天資。叱咤風雷千里馳。除却乃公
無敵手。一時輸與我家兒。

甲斐威炎未可爭。關東千里任橫行。如何當日
北條氏。大旆摩門不出城。

疾風掠野勢如山。何事半途稱疾還。遺命秘喪
欺敵國。人傳身殞銃丸間。

掎角中原戰正酣。相持未決視耽耽。長歎投箸

續日本外史

七

憐才意。唯有當年不識庵。

試問諷方湖水潯。姦雄蹤跡渺難尋。生前預作
千秋計。石槨誰知用意深。

一去家山寓駿河。年來八十子孫多。當時嬰鏖
老猶壯。狂暴終如故態何。

終捐古府築新城。二嬖勸君頻四征。豚犬不關
遺誠在。唯看抵死事佳兵。

舉族纔棲天目山。猶慶援甲獻酬間。可憐樽俎
未終禮。數萬敵兵四面攀。

將監逃亡已浹旬。更看殉節慕君人。舊臣曾識
有今日。今日無言答舊臣。

構怨四隣未息兵。猖狂自速國家亡。乃翁不遂
生前志。我送汝頭使入京。

甲越元非有宿仇。一時唯爲寓公謀。聞風猶使
懦夫起。無道功名屬鵩蚌。

氣如狂鬼貌如禪。霜刃斬人不食鮮。斯公心事
誰能會。徒養螟螣棄祖先。

直入鎌倉詣鶴岡。八州豪族盡隨行。漫看將士

續日本外史

八

如蟲蟻。長使關東屬氏康。

春日山頭不識庵。戰餘禪味與誰參。當時多少
殉難士。自以香花祭一龕。

運漕禁令詎須嚴。高販還令價直廉。堪笑二家
卑怯甚。不爭弓箭事魚鹽。

能越江山入望時。轅門對月拈吟髭。英雄餘韻
猶堪想。千載風流在一詩。

自勒諸軍約束成。溘焉詎計赴佳城。可憐皮履
都人士。脫劍無由拂扇迎。

京畿震懼不安居。細作歸來報死初。抵掌喜將投箸歎。二公心事果何如。

嫡庶不分疏間親。閱牆日夜用兵頻。如何百戰經營地。一旦舉之附敵人。

遠賽神祠何所求。山陽風景入清遊。家臣不識志天下。唯願郎君主藝州。

相兼漢祖與唐宗。隆準偏驚音吐洪。助資爲獻黃金日。天子嘉之賜菊桐。

私教兒玉問元郎。小少用心如老強。看取英雄

續日本外史

廿九

眈色過還憐醜婦勝空房。

墮落沙門流竄卿。生平文弱奈干城。黃泉吞恨臨終日。一紙遺書囑義兵。

下詔四方誅逆臣。將軍管領尚逡巡。唯有關西毛利氏。能令大義一朝伸。

善戰善謀弟與兄。能修治具得賢名。何圖天下亂離後。西地還聞絃誦聲。

福島雄名後代垂。曾經被小早川嗤。橫屍原野丈夫事。臨死何須華押爲。

資望從非伯叔儔。爭權天下似無謀。乃翁若用令郎策。安失八州爲二州。

單騎揚鞭詣熱田。精兵無一不當千。龜中鳴甲稱神助。英傑欺人自古然。

一敗何須即退兵。更乘雷雨斫屯營。老將喪元殘卒遁。應知奇策有奇贏。

平氏遠孫興織田。桶間一戰斃今川。雄名從是聞天下。偉績千秋照史編。

君家住婿本嘉雄。衣髮還宜鹿野風。無怪相看

續日本外史

三十

不相禮。岳翁便是路傍翁。

復讐不敢慰幽魂。流寓四隣謀苟存。如今人誦今川狀。還笑渠忘曩祖言。

欲向京畿大出兵。結和須與德川平。不如使彼當東面。我略其西霸業成。

天使幾回臨尾張。斯公威武益飛揚。入朝偏謝郊勞日。親著戰袍拜御香。

近畿將士賀正來。岐阜雄圖一壯哉。愉快有斯好下物。爲君滿酌盡餘盃。

應仁兵亂久紛々。勘定憐君樹異勲。壯麗皇居
安帝坐。拓修幕府奉將軍。

經畧京畿及四邊。士民初見太平年。秋毫不犯
皆安堵。行旅途中委素眠。

髻首弄兵真可憎。抗衡王命動憑陵。誰憐一片
敵山火。焚盡當時破戒僧。

欲居王土報王臣。詔拜征夷辭命頻。何比越州
長尾氏。假他名器擬誇隣。

軍中置酒何爲看。擊節高歌矢腹敵。一座俱傾

撈蝦舞。奇謀誰識覆爲巢。

首戴兩端西又東。經營辛苦五畿中。上杉已斃
武田滅。天下英雄有乃公。

醉調親臣鼓禿頭。一時遊戲殺風流。斯公胸臆
多猜忌。到底不知豎子謀。

材藝自誇無等倫。文深修飭似良臣。何知今日
弑君者。卽是當年殺母人。

幾日周旋心事空。忽休饗禮卽兵戎。鼎彝蓮豆
知多少。投向琵琶湖水中。

續日本外史

三

遙向山陽赴戰場。連歌催宴會西坊。無端更被
傍人怪。卒問本能寺外墮。

不向阪西趨備中。舉鞭直指桂川東。忽言敵在
本能寺。初識主人叛主公。

右府功名駭鬼神。誰圖大業委灰塵。不知天子
關何事。還使皇臣勞逆臣。

已斃信長與信忠。自將霸主待群雄。可憐女婿
細川氏。不以私親與岳翁。

何計蕭牆意外憂。前軍早已壓西州。縱然身被

家奴弑。猶有家奴復大讐。

和議將成內變生。徐延敵使告軍情。他家亦作
他時計。援我還。能借我兵。

星夜提兵誅逆臣。收屍灰瀝弔靈神。奈何公族
與諸將。一箇曾無來會人。

還捐諸叔立孤幼。豪傑所期各不同。遂將奴輩
看儕輩。從此猴郎是主公。

吾軍狙勝不收兵。使者三還日已傾。却以老成
爲老怯。咄嗟令彼得奇贏。

續日本外史

三

炬火燒雲夜轉明。簾壺咽路競相迎。舅翁頓足待甥氏。湖上已聞戰鬪聲。

勝敗一時分死生。出門相送閉門迎。憐爾獨來呼小字。正看戀々故人情。

一輪瑞日入懷中。吉兆誰知占黑熊。兒戲還爲軍旅事。山僧不省是英雄。

自以揠金千織戾。形軀矮黑面如猴。誰知今日拏鞋手。終握扶桑六十州。

大行寧將細謹評。封侯終報主人情。若令身死

續日本外史

西征役。千載唯傳戡竊名。

富貴明朝未可期。夫妻情義在相知。瓦缸藁席成婚夕。玉食金衣爲福時。

百步城墻壞未修。有司日々又何謀。語君莫漫忽工事。方是四隣窺隙秋。

凱歌新自坂西還。庭實驚看積若山。能以五年收五國。猴郎不復昔時顏。

欲擒二帥竟無因。還失吾良敵氣振。忽得敗門投袂起。僵屍蔽野不看人。

百計求和未成。卑辭厚禮苦相迎。智窮更出奪妻策。勢屈寧鮮質母名。

新結婚姻樂未休。相看俱話戰長湫。但因佳婿多佳士。使我更無東顧憂。

強兵富國兩能全。封殖何須獨自專。府庫金銀幾千萬。一朝散盡邸門前。

大坂地形便運輸。四通五達舊皇都。金湯唯賴山河固。不爲子孫謀永圖。

久據西陲欠會同。跳梁自負故家風。寧知海內

續日本外史

歸方略。王事唯言近衛公。

終緇其服髡其頭。輿觀行臺亦耐羞。猶贏身死醫師宅。長使子孫失八州。

無事初欣遇太平。帝臨聚樂會公卿。一心協力同盟後。御製賡歌應制成。

文武百官從六龍。衣冠初見舊儀容。伶人齊奏五常樂。穆々清風入肅雍。

看君拜跪一何恭。滿座諸侯皆改容。誰識姦雄多作意。楮袍相贈飭情濃。

纔守藩屏在信濃。還於山道作先鋒。自憐殿下
一言命。恰勝即時百萬封。

雲蒸龍變本縱橫。帝授節刀征不庭。殷勤寄語
北條虜。無以乃公比弱平。

伐敵何須徒自全。能兼生殺見兵權。誰言不是
人君語。二世忽諸豈偶然。

八道兵威震九天。城中宛似釜中煎。日張妓樂
勞軍士。好造歌詩被管絃。

平定關東奏凱回。故鄉駐馬暫徘徊。邑中父老

續日本外史

三十五

休惶恐。前度藤郎今復來。

新滅北條開土疆。論功行賞好相償。信雄未識
處時變。不以五州換勢張。

眇小男兒名正宗。數懷反側掠隣封。當時自有
風雲遇。磔柱不屠獨眼龍。

君道青年馬上過。世平白髮不堪多。餘生祇合
從天命。富貴功名樂奈何。

功名蓋世不因人。丹羽柴田豈等倫。礪落終羞
冒他姓。自稱新姓曰豐臣。

初稱平氏中藤原。苦擬征夷非姓源。勸君祇合
爲關白。統御百官亞至尊。

蛭島揚兵忽勃然。名門餘烈豈無緣。爭如吾自
人奴起。徒手咄嗟迴九天。

豐公英略震三韓。尊虜于今肝膽寒。若使吾邦
無此事。一編青史亦慵看。

四道精兵分九軍。入明割地與諸君。此行何必
從良史。將使彼邦用我文。

或賜龍駒或寵章。清正此日調行長。吾身元自

續日本外史

三十六

藥商起幟號何妨。用藥囊。

叱咤三軍如疾雷。攻城野戰各先勉。如何諸將
相爭切。元帥還非統御才。

乘勢追來十萬兵。碧蹄驛外好相迎。如松一敗
以身免。和議全因此戰成。

冕服儼然威有餘。數行明冊捧來初。封王全被
賈兒賣。太閤生平不讀書。

惟敬元來反覆臣。賣邦左右媾和頻。寸分無効
報明主。投我欲爲歸化人。

大閤用兵稱若神投鞭欲絕金山津請君聽取
當時諺驚欲啖人被啖人

辭君西北入殊方豈計西南望故鄉說是芙蓉
峰上雪免登下馬拜寒光

懸軍萬里入遐荒當箭開襟示印章西伐功勳
推第一能擒王子若擒王

洞兵敵甲苦清恬口舌何如刀刃銛大明援軍
四十萬日殺二萬二旬殲

精兵十萬伐三韓強勇誰如鬼上官無怪歸朝

續日本外史

鰲且悴蔚山飢把土泥餐。

坐盡庭沙話戰勞。一時讒口奈聾々。垂涕還思
襁褓愛。可憐阿虎類吾豪。

不代乃翁從外征。還荒禽色偷安榮。寧知開白
爲何物。攝政誰言是殺生。

餘怒那如餘愛深。謫居唯是欲懲淫。山僧何事
無情甚。不解乃公誠子心。

淫逆招災何足言。一時濫殺亦啣冤。官人斜是
畜生塚。誰以香花弔詭魂。

暴師海外幾經春。行樂探花摘貴嬪。半醉半醒
看不厭。從他將士憶歸頻。

自託幼孤慮未休。更看垂死復貽謀。一棺纔蓋
家將亂。後事誰言不足憂。

內慮內憂外外征。不知命孰撤吾師。世間莫漫
信浮說。一戰臨歸復得贏。

遣使行臺息遠師。各聞遺命淚先垂。誰知四百
餘州地。正是舉朝相賀時。

萬死出來得一生。行長此日服清正。欲棄故怨

續日本外史

新結好。奈何吾子善三成。

征韓諸將盡歸朝。清讌相期各自招。久戍於吾
無若酒。當炊粳粥饗同僚。

風生長鬣入公門。坂邸依然舊誼存。寄命託孤
今日事。懷中短劍報君恩。

欲誘群雄濟己私。真成不是憶孤兒。弄將太閤
山河去。經始德川霸業基。

貽魚秘計似輸誠。治部猶能告內情。今日初知
同被賣。無言彈止負平生。

彼屬前田此德川。圖之百計苦周旋。誰知推戴陽尊意。欲斃兩公專事權。

已看七將率兵臻。天下難容短小身。不識五家因底事。百方爲地庇姦人。

萬死投吾何不容。欲牽七將與爭鋒。誰言以彼爲奇貨。便解兵權令就封。

德川行事多可疑。頻背遺令欲何爲。三成不聽吉隆諫。自我啓釁彼有辭。

同僚交誼復迴輿。枉賭乾坤定議初。但爲國基

無敵手。前知一著已輸渠。

取許從臣還取之。路傍伐竹紙爲麾。卒時不啻誅奴輩。能使風雲歸指揮。

俄休東伐議西還。勝敗將分向背間。兒也謹聞留任命。不令敵出白河關。

反側諸侯當屬誰。東西勝敗未分時。上杉景勝爲何事。佐竹義宣不出師。

廻旆中途向帝畿。當時誰得計神機。功名一被儉人誤。多少英雄徒自非。

續日本外史

三十九

我欲制人先著鞭。道看甲背豈其然。無將飯匕漫爲矩。今德川非舊德川。

勝肅宵綦檢。戰時注藥將校後。賜兒發縱得宜。雖亦俊。雉而遇鷹固如斯。

獨後師期滯信陽。中原逐鹿已終場。輸贏祇合論全局。詎用區々事一方。

取道沼田將有言。還催守卒上城垣。可憐抬婦持門戶。不使夫翁看乃孫。

弟與坂西兄坂東。東西向背決家翁。還憐阿弟

逃高野。猶使阿兄領信中。

各爲主公忘我身。好從末減鎮藩臣。當時反逆知多少。不啻山城守一人。

分疏陣門頻謝辜。乾坤一賭決贏輸。乘時舉事英雄漢。觀望兩端真鄙夫。

關原振旅遂朝天。六十餘州服德川。大臣不問幼冲子。城裏物情初帖然。

使臣銜命入關時。自及報君不復辭。百卒何能當一士。吾將爲我所將爲。

續日本外史

四十

金城高閣黨青天。一道無端忽起烟。不以妖火爲鑒誠。終令舌斧破瑚璉。

質母關東用意深。其餘二策亦忠忱。鐘銘唯道觸嚴忌。兒女安知太傅心。

深圖無事媾和親。還以忠臣爲逐臣。奈何駭獮將驕婦。不省太公旦夕人。

狠招群小動干戈。好意識和未肯和。自有婦翁神算在。寡孤不悟竟何如。

老侵風雪自西征。天使慰勞臨柳營。勿怪軍中

續日本外史

四十一

隨女監。欲完孺子計和平。

大坂事情何足云。坐令內嬖制諸軍。清正已死且元逐。無復親臣輔嗣君。

還以忠謀付不聞。終因私愛誤郎君。祇令將校策方略。巡視何須娘子軍。

一死唯知報寵光。使街君命蒞盟場。空憐甲冑結纓日。髣髴猶餘頭髮香。

十槍成列馬標翻。士氣奮然將死恩。最後軍容壯如此。不看一步出櫻門。

金甌映日見華桐。四海誰人不偃風。敬奉旗章臣事畢。甘心伏劍死城中。

子母新蒙再造恩。拜趨將欲謝軍門。肩輿未到銃丸發。不爲主家貽禍根。

別守子城持鼓旗。敢因成敗負相知。當時殉節人多少。孰若信陽容將兒。

高義抗強微弱扶。豐臣孤若織田孤。後來論者昏時勢。還病吾公不亦誣。

吾公宗祖起參河。親戚繁榮榮家國。和從容嘗向

續日本外史

四十二

老臣道。一邑不如一士多。

微號從來中黑尊。三葵兼用有根原。公身未得踐靈夢。日下握人附子孫。

幼冲轉質在今川。嘗盡艱難知幾年。人力由來非所及。吾公英略授從天。

欲向中原一建旌。甲陽諸將此移兵。誰言衆寡元難敵。唐首還牽強項名。

信玄所向本無前。欲滅德川及織田。誰料兩軍交綏夕。城門不鎖獨安眠。

國亡家破血猶腥。甲斐生靈未得寧。萬事吾公因舊制。獨除厚歛與苛刑。

深存舊誼撫遺孤。小牧長湫入戰圖。勝算看將覆巢窟。恨君一旦逸猴奴。

使臣最後載書時。初得怡然釋舊疑。三事宛如合符節。兩雄唯有兩雄知。

深結歡心在此行。定知舅氏喜相迎。能將野樣爲京樣。一箇兒郎直幾城。

德川舊業在參河。敢望移封更向他。爲是土豪

續日本外史

四十三

元占地。八州不及五州多。

誰向乃公一矢加。談兵席上起風沙。不材猶有家康在。殿下何須獨自誇。

戲弄愛兒懷抱中。試從室內視諸公。美髯如戟何能作。應恐上頭鰲面翁。

手談常自慰幽襟。一局何須賭萬金。誰識千秋廢碁恨。絕絃不獨伯牙琴。

風雲偏自傍三台。白髮將軍幕府開。前騎後乘皆牧伯。直叩天關拜恩回。

有如白日結盟文。牧伯協心奉嗣君。天下從來天下物。前將軍讓後將軍。

畢生心事在勤王。沐雨梳風百戰場。從諫如流君自有。直言功勝一番槍。

病謝良醫唯任天。竟因灸藥得平痊。老奴喜極還顛倒。嗚咽沾巾亦可憐。

輕財重士育英豪。一騎當千死不逃。每戰血槍長坂在。更看信一膽生毛。

德望從來無比倫。君々更又見臣々。本多重次

續日本外史

四十四

紀綱僕。烏居元忠節義人。

德川家士總千城。就中數子最知名。作左夜叉高力佛。彼此無偏三郎兵。

獨出重圍達本營。馳歸無奈遇邏兵。一言未畢及叢死。不使解揚偏得名。

家臣唯識主公尊。衛士何須叱植村。手託寶刀面譽道。宛如樊噲在鴻門。

本多兒子有寧馨。慙以主公比義經。鹿角何須忠信冑。長槍自愛截蜻蛉。

土屋遺孤最俊髦。託僧何料箇中逃。請見吾公今日獵。載歸一口護身刀。

君家佳癖信堪憐。輕變重常殊泰然。團扇拂蠅筍與去。紵衣黃掛草屨穿。

擬卜菟裘終樂鄉。令人何事苦相妨。開原決戰血標杵。大坂燒和城復隍。

東討西誅輔一人。山氛立歇泰平春。誓首奉揚天子命。喜看朝野共津津。

躬滅群凶致太平。還將天下委群英。大終一語

續日本外史

卷五

誰能算。不拘諸侯護柳營。

關左有原名武藏。連空草色接茫茫。經畫地形興邸第。開成天府據金湯。

用武曾經此相攸。豐公亦爲我公謀。江流南控海千里。地脈東連關八州。

天主朝天樓閣高。粉牆倒影落城濠。庶民唯見經營速。公伯不言驅役勞。

烈祖神靈絕代功。四民誰不戴恩洪。元和天子賜追號。千載稱爲東照宮。

外諸侯與內功臣。鎮壓邪心屬懿親。無論封建徒言勢。制勢須知本在人。

創業兼看垂統長。將門三世益全昌。自今牧伯朝覲日。堂上相迎不下堂。

便蹇休偏誇舊勲。身從襁褓作將軍。一日內藏賜刀處。已看志氣壓邦君。

親爲外戚體乾元。位極人臣浴帝恩。不啻雄圖傳萬世。兼令威德及諸蕃。

附

續日本外史

卷六

讀日本外史謾題其後

事業曾將外史居。用心邦典有誰如。縱橫上下千年際。涉獵沉思萬卷餘。愉快姦兒誅既斃。偏欣忠義得延譽。謙恭不擬春秋筆。唯道一編相所書。

讀山陽賴先生日本樂府

日出文章帶日華。西邦人士莫相誇。奈何正享諸先輩。漫學他家舍自家。

又

健筆縱橫摘古辭。自家本色見雄姿。嗟吾篇什雖多矣。不及六十六闕奇。

自題讀外史詩後

文章敢問拙將工。直筆千秋議論公。迂拙笑吾暗時務。徒從陳迹品英雄。

又

史家褒貶拆秋毫。不使姦雄地下逃。欲賦新詩寓餘論。匹如瘁處隔靴搔。

又

續日本外史

早七

謾議英雄莫失倫。沈吟閣筆暫逡巡。吾心若遇古人問。不識如何答古人。

讀正續日本外史卷之上

終

讀正續日本外史卷之下

頃者有一友人袖近世日本外史來謂余曰
斯書膳所人杏宇開機先生所著子未視之
且子嚮有讀日本外史之什贈炙人口盍復
詩之余受而讀之其爲天下有用書固如某
氏序中所稱也於是乎舊癖再發以此爲下
物頻舉太白拍案絕叫復得七絕百餘首將
以贈其人童子側笑曰先生亦詩壇中馮
婦哉余乃書其言于卷端明治十年十月佐

續日本外史

藤憲欽識

源將軍秀忠

趨庭講武且修文。憂國寧辭夙夜勤。看破人間
俗言誤。應知公是守成君。

源將軍家光 二首

爲人賢哲且聰明。恭順偏能持滿盈。東照之孫
台德子。長傳三代將軍名。
忠節殉君真可傷。一朝不啻失三良。祇因茲事
累仁德。爲廢毛詩黃鳥章。

德川賴宣並那波方

手以佩刀試死囚。巍然宗室大諸侯。一時忽聽
儒臣諫。褒賞還看禮意優。

德川賴房

戰國流風殉死頻。苦將遺命禁遺臣。一從幕府
令天下。長使人君免不仁。

德川光圀 二首

親藩元老弼台槐。好學兼看良史才。何料西山
栖隱日。衡門茅屋鎖蒼苔。

續日本外史

曾聘遺賢爲我師。且將雄筆勒豐碑。英魂有識
應來饗。千載長存楠子祠。

松平正之

輔佐時君輔養篇。丹心國爾本忘身。請看西海
揚波日。却使東陞高枕眠。

大久保忠教 柳生宗矩

爲唱邪教煽國民。直令親將鎮烟塵。二臣所料
如符節。應見當時朝有人。

井伊直孝

欲誅失火懲其後。還以一言誠信網。無怪生平嘲噲等。綽然自有大臣量。

後西院天皇

擊劍尤令叔感長。勝重以死諫天皇。詔言南殿設壇位。將視武人刳腹方。

板倉勝重二首

上扶天子令諸侯。鎮壓關西三十州。識拔新蒙京尹命。歸家好與細君謀。

清閒爲政古賢風。常恐吾心有不公。誰識生平

續日本外史

壬子

聽訟理。悠悠自在碾茶中。

松平信綱並九橋忠彌

新鎮西隅奏凱回。誰言不是將兵才。和田門外逢凶豎。已識他時爲賊魁。

阿部忠秋

求仕諸侯意可嘉。誰言嘯聚釀群邪。憑君莫漫逐游士。好使財能益國家。

板倉重矩

室題咬茶素風存。官暇逍遙自灌園。至竟深心

誰得解。還將舊額揭朱門。

池田光政

雄藩威武本飛揚。嚴毅解顏聞諫長。當時已識官衙假。畢世唯稱新太郎。

藤原肅二首

曾航絕海阻風波。求道遺經獨琢磨。若問吾邦漁洛學。權與先自說惺窩。

常在軍中開講帷。賢名已辱聖君知。求師當世不求得。千載還爲王者師。

續日本外史

壬子

林信勝

室町已來僧作儒。衲衣祝髮却操觚。何知吾道卽人道。舉世目爲制外徒。

林信篤

此翁矍鑠信堪憐。歷事五君六十年。不怪茂卿苦相謝。一言先已誠將然。

熊澤了介並由井正雪

我說經書彼說兵。一時相見不知名。碩儒識鑒姦豪目。肝膽無端照得明。

山崎嘉

歸儒斥釋又崇神。濂洛源流道德淳。更比仲尼多過半。門生受業六千人。

中江原

躬行從來信守仁。弱年致仕養慈親。聞風遷善知多少。皆道先生是聖人。

石川凹

挺進先登事已非。飄然即日棄官歸。畢生不涉鳧川水。長向東山臥翠微。

續日本外史

手二

伊藤維楨 二首

天子求文世所榮。虛心平氣避浮名。著書一任他人駁。更誠門生莫與爭。

血脈從來鄒魯傳。功名慙比武侯賢。誰知夫子平生業。偏在孟軻第一篇。

貝原篤信

初從王陸後朱熹。常好和歌不好詩。爲是著書多國字。田夫紅女亦便之。

朱之瑜

欲吹殘焰起衰明。數到吾邦乞我兵。奇節終慙食清粟。西山長遂采薇情。

朱成功

母死夫家父帝家。千秋厄運使人嗟。至今院本傳佳話。猶說當年國姓爺。

陳元賢

避亂憐君到日東。明家進士賦詩工。殊方無限交遊契。自在元々唱和中。

大石良雄

續日本外史

手二

憐君忠義元天性。受業儒宗上講堂。識者已知堪大事。時々微睡亦何妨。

細井知慎 二首

揮毫落紙墨痕香。中使傳宣獻感長。誰道書名掩其器。好將奇勝揭君堂。

平生氣義接豪雄。學劍兼看筆札工。竊聞密約望揚火。立盡寒宵風雪中。

新井瑛 二首

不啻風流工賦詩。潛心經史翰林司。當時已講

和蘭學。無奈世人猶未知。

通曉古今涉漢和。青雲著述不堪多。生前未遂封侯志。死作閻羅定奈何。

室直清

六諭譯成又五常。兩朝侍講將軍傍。當時信任誰能及。處置得宜爲典章。

荻生茂卿 二首

下問曾爲入幕賓。豪才博洽本無倫。熊知伊行加吾學。東海初生一聖人。

續日本外史

五四

四術教如萬象春。自言斯道在安民。茫茫宇宙無遺憾。千古知吾有聖人。

伊藤長胤

善繼箕裘到裔孫。須知斯道有淵源。喜看幕府右文政。褒賞長令家學存。

伊藤長堅

妙年博學且能文。聘到雄藩禮未分。爲君方講聖人道。那得巍然坐褥聞。

源將軍綱吉 二首

終復主讐一戰擒。諸臣忠烈將軍欽。殺生在手猶堪惜。左右何知公苦心。

漫令寵豎冒松平。期日且將封百城。無奈營中大終夜。斧聲燭影不分明。

源將軍吉宗

恭儉仁明奉至尊。謚爲有德不須論。畏將僧上累先代。命毀城中四脚門。

大岡忠相

曾聽訟獄直山田。遂被將軍知睿賢。當時何限

續日本外史

五五

神明宰。隸卒于今稱越前。

肥田賴常並牧野忠精

終使夷人感謝回。修船養病暫遲徊。臨機應變非常事。賢宰偏容卓越才。

上杉治憲 細川重賢

巨鎮雄藩各儼然。盡心國事舉名賢。當時先語邦君治。東有上杉西細川。

紀德民

先生德義四方傳。應聘諸侯上講筵。欲見薰陶

藩政美。至今猶誦野芹篇。

林子平 二首

豈將異說動人心。作六無歌獨自吟。猶有君平服。先見休言海內少知音。

千秋事業託遺文。厄運一時何足云。請見鑒與東狩日。小牢命祭子平墳。

高山正之

氣節慨慷無等倫。三條橋上望楓宸。一時不顧途人笑。拜跪自稱草莽臣。

續日本外史

五十六

唐崎常陸介

目逆何須問阿誰。途中執手定交時。世人不解二人意。徒訝黃泉去後隨。

蒲生秀實

元與正之志趣同。聲名常擬祖先隆。漫嘲措大行裝鄙。無狀胡爲田舍翁。

蒲生秀實 高山正之

欲以微軀報國恩。二人氣節貫乾坤。誰知今日維新政。長錄子孫表里門。

林銜

一時諸子各成門。學德爭如泰斗尊。但使聖朝無闕事。草茅遮竇有危言。

佐野政言

每憤豎子擅權頻。敢惜成仁殺此身。給繹香花人不絕。稱爲救世太明神。

松平定信並柴野邦彦 尾藤肇 古賀

樸 赤崎貞翰 賴維完 岡田恕 二首

爭傳賢宰出關東。節用愛民賞罰公。一洗當時

續日本外史

五十七

貪暴敝。能令天下化餘風。

擢用名儒振學風。江東文物一時隆。清高最是堪稱處。早脫朝簪號樂翁。

賴襄

後輩仰之先輩推。多通博覽字量恢。古今有一應無二。三十六峰外史才。

加茂真淵 本居宣長 平田篤胤

精究國學一何頻。或作金聲又玉振。本居加茂平田氏。後世稱爲三大人。

光格天皇

周王苑圃漢皇臺。新築舊章歎美哉。欲知千載明良遇。請見永言乙夜裁。

源將軍家齊

天子嘉勞內旨傳。固辭不復得遷延。軍職何妨兼太政。斯公在職四十年。

井上因碩並林元美

節儉有名不足稱。富強無實只相矜。當時肉食何經濟。救敝還因碁局僧。

德川齊昭

二首

續日本外史

五八

留心軍事有誰如。自歎敵風未易除。莫怪藩情動搖甚。數參大政數幽居。
蒼顏白髮與心違。却向南陽臥舊扉。但有千秋遺憾在。不令海外仰皇威。

鍋島齊正

先臣受命鎮西藩。緩急常思報國恩。卽今初聽墨夷入。宛若敵兵破後門。

彼理

墨使強梁專對才。國書擬謁將軍開。要津一自求通信。萬里洋船陸續來。

阿部正弘並堀田正篤

爲是天災荐自臻。分任聊欲附他人。難將古例律今事。終使幕威歎不振。

太田資始並板倉勝靜

佐々木願發

井伊直弼

狂士危言憂國餘。宜從寬典網羅除。奈何他日櫻門禍。己釀濫刑獨斷初。

續日本外史

五九

堀利熙並安藤信正

投書時相裂忠肝。碧血淋漓猶未乾。誰道或成激徒手。爲君一讀髮衝冠。

間部詮勝

獨任寧知踏禍機。暫清君側奏將歸。九重天子賜真劍。偏使幕臣懼帝威。

吉田松蔭

米船附載竟難行。輦下狙仇還不成。幽囚自著留魂錄。徒以數奇誤一生。

藤森大雅 梁川孟緯

黨議一時罹網羅。清狂獨自得天和。星翁死免君生免。酷吏終如無罪何。

賴醇

少年豪氣號狂生。自比天祥奚若情。風雨時々動苔石。猶疑夢裏斬長鯨。

梅田義質

從他妻子泣飢寒。感激抽身殉國難。一箇書生百夫長。風雲相帥擬登壇。

續日本外史

李

武田正生

欲誅姦黨遂揚兵。慷慨誰憐志士情。死爲賊鬼終天憾。願察微衷除賊名。

藤田小四郎

寅黨營私彪黨公。戰爭常陸二毛中。一時勝敗何須問。到底應看賊命窮。

毛利慶親 毛利定廣 五首

誰象木偶三條中。慘虐偏看發墓同。無端更聽寬容議。游士戴君如主公。

誰命藩兵扼要津。九重城闕動烟塵。數條軍令有如日。休道三臣是暴臣。

協和朝幕兩無因。力盡年來掃海塵。物論如今雖已定。盟夷人是攘夷人。

昨日忠臣今逆臣。藩情無路訴天人。當時詔勅出誰手。謾以舊新分僞真。

支藩謝罪上書餘。總督班師復命初。若使當時便終局。一場大劇竟何如。

永井時庸

續日本外史

李

承命周旋卿相間。苦陳時勢諭堅頑。難將要領報藩主。獨向關東空手還。

佐久間啓

往來輦下跨洋鞍。開國須看眼界寬。睥睨遂招游士惡。轉知明哲保身難。

蜂須賀茂韶

痛心疾首抱深憂。效計幕中不見收。神算應圖馭戎策。方今豈是苟安秋。

山内豐信

愆憑將軍解大權。一途政令固當然。舊規難守
今時勢。須立鴻基謀萬全。

伊達宗城

青雲致仕避賢名。尊操寧忘魏闕情。不向春山
得高枕。宗城畢竟是干城。

長岡護久 長岡護美

爲把詔書爭僞真。石方調護庇慶親。翩翩濁世
佳公子。折簡兼爲入幕賓。

源將軍家茂 三首

續日本外史

李三

新興廢典入皇京。登降拜恩謀太平。委任偏看
名望定。一時何限渭陽情。

天下紛紛未止戈。身逢多難獨悲歌。欲將軍職
讓慶喜。無奈君王不允何。

欲討強藩張幕威。出師西國滯京畿。如何一夜
將星墜。千載長傷霸業非。

長澤蒼翠

盧陸風流經濟才。深論時事亦堪哀。喟然更以
點茶手。還向公門上疏來。

前將軍源慶喜 三首

小少名聲動市朝。人言英邁類齊昭。當時軍職
成何事。祇合終身爲一橋。

奉還大政舉皇維。英斷千秋即一時。奈何臣屬
矯君意。託事更揚清側師。

咫尺之間進步同。或爲豎子或英雄。欲識古今
成敗處。機關唯在一領中。

松平宗秀

專決已令囚虜還。長防消息有無間。爲君移贈

續日本外史

李三

唐賢句。自起開籠放白鵬。

德川慶勝 三首

遺書幕府諫親征。須察長人謝罪情。隆替已知
在斯舉。出師畢竟奈無名。

不將小隊入京師。還以大軍抗錦旗。遺恨十年
謀國事。終令祖業至傾危。

一時議論亂於麻。抵死勤王說諭加。無奈諸藩
執迷者。宗家不助滅宗家。

松平慶永

受罪宗家彼一時。勤王内外任驅馳。到底攘夷難。俄行當初已有此公知。

松平容保 三首

丹心深感拜恩殊。飽贊皇謨謀霸圖。社鼠於君果然否。任他呼我做城狐。

獨守孤城戰且防。死屍橫地極悽愴。但至米人忠告日。初知總督是親王。

白髮青衫又女兵。砲聲日夜雜鐘聲。紙鳶線絕風威烈。一片降旗纔會城。

續日本外史

林昌之助

宗室支藩歸順年。君臣名義已嚴然。倔強獨有昌之助。獻邑朝廷屬德川。

勝安芳並大久保逸翁

海道先鋒至品川。往來内外頗周旋。周旋能爲表恭順。終使聖朝垂聖憐。

大鳥圭介

東台族罪獨憂歎。聖詔偏看數等寬。脫走不從恭順命。橫行總野啓兵端。

榎本武揚並松平太郎 荒井郁 三首

奪將瀛壖敗亡餘。何此主家恢復如。欲爲北門關鎖鑰。朝廷不省叛臣書。

荐陳順逆擬吹噓。決死轅門意自如。欲以微衷報皇國。爲遺海律一編書。

報以青檮事亦奇。軍中交際轉堪思。爲君猶使開陽在。今日相看未可知。

古屋作左

絕海樓船萬里風。回天力盡氣猶雄。可憐置酒

續日本外史

六十五

屠牛處。笑坐流彈破裂中。

中島三郎介

百戰淋漓新血痕。猶聞危急後來援。終於北海埋豪骨。不負平生壯士言。

島津久光 二首

意氣揚々妄自尊。斬夷如草血傾盆。當時主使人安在。空出償金二萬元。

處士橫行若虎狼。上侵權貴下農商。京尹威令方墜地。還將鎮定命三郎。

島津茂久 四首

薩海砲烟遺憾深。講和返錨果何心。未知萬國有公法。不使英人費一金。

大藩僂蹇號多材。愚弄諸侯動上台。還通間使請開港。攘鎖論言安在哉。

頻唱尊王與攘夷。闔藩心跡頗堪疑。幕廷未識薩長合。飛檄猶徵問罪師。

誰將介胃換簪裾。萬里江山霸國餘。王網如今非不密。西州却漏吞舟魚。

續日本外史

李六

伊達慶邦

督將納言私滅讐。激徒狗罪斬參謀。主盟畢竟成何事。與羽連衡十七侯。

三好監物並但本土佐 坂英力

枉使忠臣就縲囚。勤王心事屬浮沤。激徒不解朝廷意。畢竟二魁是首謀。

上杉齊憲

謙信雲孫富且強。欲將牛耳霸東方。看君歸順勤王速。翻作先鋒伐會莊。

南部利綱

甘以米仙爲王盟。一時國論定連衡。寧知窮鳥入懷意。還向秋藩投二卿。

佐竹義睦 二首

終破同盟節義高。四隣受敵獨焦勞。王師奏凱東旋日。先賜名刀與錦袍。

報國偏懷敵愾心。弱兵難抗大兵侵。若無烈士扶孤竹。直節虛中恐不禁。

大久保利通

續日本外史

李七

欲除宿弊廓皇謨。僻在何須據一隅。官家從用非常策。江戶十秋是帝都。

大山綱良 二首

運謀帷幄擁旌旄。百戰寧辭汗馬勞。爲是三卿復相合。教吾此夕枕初高。

自誅賊使狗軍門。與羽初知天子尊。英雄末路真何事。不報國恩負國恩。

西鄉隆盛 二首

薩海投身豈有他。維新功業歷年多。誰道觀人

觀後半蒼生今日奈卿何。

豈有雲夢問叛人。功名自誤百年身。却執良弓

驅走狗。淮陰比汝尚純臣。

佩綬猶爲縫掖人。闔鄉文物故彬彬。青衿子弟

知多少。徒被先生誤一身。

附

讀近世日本外史

人間萬事去悠悠。壓制無蹤得自由。天下論須英傑定。祖先功到子孫休。看將郡縣替封建。還

續日本外史

李八

轉霸都爲帝州。絕筆維新今日業。東遷何比獲麟秋。

讀近世日本外史之作脫稿乃係以斯詩

慶長筆削至明治三百年間紀盛衰。創業守成

垂大統。興王滅霸後鴻基。文章已耐稱良史。褒

貶何須罪拙詩。屋下慙吾還架屋。厚顏不顧世

人嗤。

讀正續日本外史卷之下終

或人來難曰斯卷所詠舊幕以來三百年間上自

天子下至庶人苟關國事者網羅之而褒貶不

遺餘力謂之一部詩史亦可然而絕無一語

及簪紳何居余曰唯々否々夫自王綱解紐

武門握權簪紳之於國事唯幕命是從其間

縱令有可稱所謂因人成事者要未得謂之

特立獨行君子矣是固時勢所使然今也王

政復古風化之美卓絕千載英雄豪傑輩出

續日本外史

李九

一時則余望之以特立獨行君子也如其事

業與拜其賜之不遑豈帝詩之而已哉或人

領而去卿以解難併爲跋云爾

佐藤憲欽撰

無名氏雜詩

附錄

西夷乘隙劫關東。和戰頻年議未同。天子九重雖按劍。將軍高枕柳營中。

妖氛日夜襲皇居。弓箭無威幕府空。上變不知因底事。相公門外匿名書。

終違讜議約和親。萬里洋船載使臣。未見西風送歸信。相公授首草萊人。

窺覲策略在和親。窮理機心妙入神。袖手坐收蚌鷸利。休言夷狄更無人。

續日本外史 附錄

七

蒸氣炎々五兩輕。西洋東海一橫行。工夫遙出漢人上。多少苦辛嘗得成。

聞說天書出紫微。悉教侯伯會京畿。論兵不是簪纓事。無爲君王誤大機。

京洛風塵近若何。蕭牆或恐動干戈。將軍直駕樓船去。擬破長風萬里波。

冠蓋相望日若雲。平安城裏待將軍。由來入幕多賓客。誰復爲君能解紛。

朝旨元將幕旨違。遂令廟算誤樞機。當今獻策

人多少。開港攘夷孰是非。

日夜洋船入港來。殊方百貨自成堆。東人開國西人鎖。開鎖論中戰已催。

英夷設難入津來。促報猖狂猶未回。行路不知應接事。唯看飛騎漲紅埃。

海外纔消阿片烟。腥風吹到大東邊。禦戎元自非無策。爭使茲都似乍川。

三郎意氣冠今時。直以瑤刀斬外夷。徒勇不關天下計。萬金枉贖一男兒。

續日本外史 附錄

七

市人驚擾互相憂。城外無家何處投。浮浪不知逃竄苦。笑談攘臂說封侯。

浮浪橫行不可當。閭閻白日劫豪商。盡忠報國知何事。唯見公門養虎狼。

大槍列戟嚴成行。巡察閭閻頻預防。傍觀真同兒女戲。陌頭相逐捉迷藏。

部伍相分約束頻。街頭日夜幾回巡。捕來七尺一男子。即是佯狂使酒人。

意氣常言敵萬夫。鬪爭到處未嘗輸。出身幸屬

新徵部。元是江湖無賴徒。

百金應募去家鄉。來屬教場第幾坊。誰道軍門嚴紀律。粗豪一任步兵狂。

二百年來浴太平。因循姑息奈人情。一朝忽欲改風俗。舊弊未除新弊生。

政令無常屢變更。唯教朝野動人情。安得賢如伊呂者。爲君變理致昇平。

政出皇門不自由。霸王無力制諸侯。青雲變態何須問。昨日拜官今日休。

續日本外史 附錄

七十三

多難頻求公輔才。安車強起老君來。白雲肯爲紅塵役。道灌山頭去不回。

豺虎當途日鬪爭。華陽未得遂真情。當時弘景成何事。枉得山中宰相名。

爭承玉帛會平安。聊奉君王一笑歡。咫尺鈞天聞廣樂。人間唯作夢中看。

列卿齊侍紫宸班。擬以皇威壓百蠻。海內衣冠朝會日。五雲深處拜龍顏。

禁闕頻召海內兵。太平天子擬親征。東藩將士

疲奔命。西土諸侯苦屢盟。

鳳輦時巡出帝城。衣冠扈從漢公卿。風前親拜旌旗色。雲外遙傳警蹕聲。

洛下狂兵亂若麻。東方千騎護天家。西藩縱勸河陽狩。無路君王出翠華。

誰道將軍在帝臺。錦帆無恙向東回。天恩仙寵知多少。嘗得金莖露一盃。

上洛諸侯悉錦衣。一時輦轂滿光輝。黃金用盡平安市。誰憫垂橐空自歸。

續日本外史 附錄

七十三

長藩意氣動關西。霸府威權列國齊。車馬蕭條朝會少。大城門外草萋萋。

周南士氣太英豪。帝賜旗章賞戰功。曾擲萬金贖蠻舶。一朝何事委狂濤。

惡見洋船過要津。一時東海欲生塵。攘夷似不君王意。莫學無謀輕舉人。

日月新懸龍虎旗。擬驅同列作前麾。何圖天上浮雲變。還向西藩移六師。

還以忠臣爲暴臣。叩心泣血訴冤頻。論言自古

稱如汗。可憫終朝三視人。

憂時議論動紛紛。殉節深衷各見真。名義從來似無定。負爲亂賊勝忠臣。

新改衣冠纔歲餘。復看禮服曳長裾。滿廷齊學邯鄲步。顛倒猶疑拜謁初。

不是嚴城無守晨。金湯一夜委灰塵。焦眉爛額知多少。中有添薪助火人。

朝戍東門暮北門。遠征邏市太頻繁。大藩觀望小藩怨。天下恐懷夷狄恩。

續日本外史 附錄

五

紅粉凝妝羅綺新。同心徧結幾多人。即今桂玉難生活。一女還能養二親。

百官何處拜新年。城闕荒涼生野烟。三十三門戒嚴急。春風唯恐死灰然。

城北城南處處災。春風特地漲炎埃。朝來相遇街頭客。總是爛焦救火回。

一針海路指南津。蒸氣船中已入春。請看金殿朱門客。亦學浮家泛宅人。

脫走七卿終不回。君王命孰掌鈞台。京城齊繫

雲霓望。前度將軍去復來。

繇來天意與人同。沮格多年意未通。今日初降哀痛詔。斷然國是定宸衷。

虞廷喻咈互賡歌。再造乾坤見太和。掃盡妖氛新日月。金甌無恙舊山河。

帝頒爵命賞功勲。海內新看貢賦分。應識天顏無限喜。御盃手賜大將軍。

都下新開六百餘。誰何自覺往來疎。國門白日禦人者。閃躲從今無所居。

續日本外史 附錄

五

新徵士子不知愁。白日斬人紫陌頭。近爲公門頻削籍。八州東去作群偷。

日々都門物價高。八州群盜亦如毛。殺人縱火尋常事。父老奔趨何處逃。

宗室亡臣頻舉兵。攘夷漫借烈公名。憑陵傳食諸侯國。到處載將神主行。

久偃干戈安太平。藩屏徒自擁虛名。八州宛若無人野。或恐諸侯假寇兵。

西山寇盜太橫行。不使良民得耨耕。西落東村

無所寄。纔攜妻子向江城。

城地堡障儘摧殘。父老逃來日訴官。常野生靈墮塗炭。如何君是等閑看。

西北干戈動一時。由來聲勢似相期。已看步騎分雲陣。又聽樓船勒水師。

罪己愷心天地寬。百方枉要萬邦安。暴臣不奉深仁詔。強以軍船迎玉鑾。

竟將兵火刼台槐。九陌三條作燼灰。何料尊王攘夷士。還爲賊子亂臣來。

續日本外史 附錄

七十六

九重天子忽蒙塵。車駕倉皇出紫宸。若問今來兵禍本。全因一二老藩臣。

怪得朱門晝不披。青雲臥閣起來遲。寄語相公能記取。方今豈是懶朝時。

偷安無奈小人心。還笑忠臣憂國深。唯慣生來太平俗。不知世變到如今。

降服從來非竊生。軍門力盡悉投兵。可憐多少英雄士。千載長傳群盜名。

巍然磐石古諸侯。嘗以風雲據十州。勝國以來

雖削地。餘威今日更無傳。

長門軍備冠西邊。每隊精兵各數千。無怪攘夷初舉事。鑄山煮海幾多年。

九重城闕動烟塵。誰道偏因三老臣。爲是幕師來問罪。一時斬首細開陳。

六師何日向長州。京攝風塵空滯留。將軍頻上退休表。恩命不容營菟裘。

長臣拒命太粗豪。帝召將軍授節刀。豈料中原兵革起。四方共苦轉輸勞。

續日本外史 附錄

七十七

日。三都米價高。傍觀何忍聽悲號。閭閻元自多豪富。不爲窮民拔一毛。

忽看三兩戲童兒。屋宇困倉俄頃墮。怪力亂神應有意。尋常豈是小人爲。

上國烟塵方動兵。狂飈况又誤秋成。僵屍相接無人歛。大道西風掩鼻行。

諸藩不敢出救兵。坐視長人陷石城。乘勢更因咽喉地。九州四國欲橫行。

海陸分爭血未乾。坂西兵氣動平安。誰言軍馬

知難敵。欲以黃金倩佛蘭。

東軍底事久蹉跎。母乃綸言擬止戈。昨夜天南將星墜。柳營經畧竟如何。

百萬西移問罪師。拔山翻海勢難支。誰料南風終不競。凱歌變作輓歌悲。

誰言旅櫬葬京華。東望江都雲海遐。幸有軍船蒸氣速。鮑魚何用輶涼車。

旅魂千里返江城。編素何禁臣子情。都下人心知底事。通衢日夜放歌行。

續日本外史 附錄

七十八

新因大喪解重圍。百戰沙場棄甲歸。歸來枉向家人說。再舉功名猶未非。

竹竿高建乞兒旌。十字街頭成隊行。白日滿城皆罷市。更無長策鎮民情。

西走東奔紫陌塵。市門到處乞憐頻。誰知藍縷呼寒者。曾是滿身羅綺人。

曾聞社法備凶荒。何使斯民散四方。寄語廟堂諸肉食。建言先爲發困倉。

一時權政恤窮凶。構屋聊施救水供。數口縱然

免饑渴。單衣奚若禦三冬。

幕府重開京坂中。新除縞素總元戎。陪臣漫奏還城樂。早晚歸帆來向東。

急裝短後一時新。陌上相逢誤異人。遙學趙王胡服計。變夷誰道負皇神。

人有華夷異古今。見幾先作意何深。東洋亦學西洋術。應變須知天地心。

書劍飄零一敝裘。諸藩何處不周遊。縱橫且挾孫吳術。隨意英雄割據秋。

續日本外史 附錄

七十九

一自綸言下玉京。貔貅百萬悉歸耕。腐儒幸值休兵日。願向春風頌太平。

將軍不及列藩雄。終以大權歸上公。二百餘年霸王業。土崩瓦解一時空。

錦旗一片指關東。已見江門霸氣空。當時入幕人多少。革面還誇攻後功。

千歲朝儀盡破除。還教草莽雜簪裾。金甌元自非無缺。創業匹如神武初。

右無名氏雜詩八十余首。雖未審何人作。然

叙舊幕末年事情首々中繁窳有如褒者有如貶者似怒似喜或泣或笑世變人事鋪叙陳列似無漏罅是亦言之無罪聞之足以誠之意讀了百歎息

憂天生州

無名氏雜詩附錄終

續日本外史附錄

八十

明治十一年六月十日版權免許
全 十一年九月五日出板

秋田縣士族

著述人

佐藤憲欽

秋田縣羽後國由利郡石脇村三百十番地

山梨縣平民

出版人

內藤傳右衛門

第一區甲府常盤町四番地

發兌

同支店

東京通鹽町十二番地

西川文仲 著

日本外史樂府

明治十三年（一八八〇）京都石田忠兵衛刻本

據明治十二年（一八八〇）京都石田
忠兵衛刻本影印

藁園西川文仲著

日本外史樂府

京都書肆

同盟舎藏

日本外史樂府序

周樹

山陽賴翁如化日本樂府方成
祝之田能村竹田之郎誦每一
篇拍掌激賞曰好結了好結了
字六之變皆然山陽起拍亦有連
呼曰老狐精老狐精因相其書及

日本外史樂府序

噲能何云草六十六箇中雖多
妙語而多為詠論聲氣多在結
句是山陽之慣也而竹田之所就
既破頌頌之觀西川君亮所著
日本外史樂府百箇篇章題目
一攤出物故其此法之主詠論而標

述多實典存漢合時體詩書詞
壇語直取便於學家記誦也囊中
函子玉而多新樂府筆力才調非世
可賞而校校高儼多華少實不如法
篇之朴雅近於古焉君亮自少受
學牧仲侯而侯侯出於賴門則

日本外史樂府序

君亮之書乃傳其師之衣鉢者
謂之山陽後繼宜可也哉而實益
於書者為不鮮也但憾不使竹田
再生評此百寶耳

少子之入公職臣撰并書

凡例

一斯編就日本外史攬摭題目以樂府體行之而源平以還興衰治亂可一誦而獲矣青衿輩讀之有所裨益焉

一斯編熟讀國史略日本外史及政記等可盡識故不注々唯記故事典故耳

一大日本史之浩瀚非青衿輩所易窺故先讀斯編則能領得時事一百矣

一外史文叙大亂大戰處語脉亘十數葉

日本外史樂府凡例

斯詩以數句繫之聊其一斑耳故逢難解處乃敷讀外史而可以窺全豹矣

一樂府體詠史除李賓之尤展成外有賴山陽樂府中子玉新樂府余之不才何敢謂方駕乎諸家聊收其餘唾而擬製焉欲便於青衿輩耳若夫高人之笑罵亦所不避也

日本外史樂府目錄

卷之上

淺處騎渡

信源賴

雁行乱

家源義

燒營取煖

家源義

足柄山

光源義

鬼髮束針

盛平忠

猿臂善射

朝源為

鹿谷會

藤原親

待賢門

信藤原

浴室

朝義

龍門

盤常

烙記馬

朝源仲

鼠圖猫

朝源賴

衣錦歸鄉

實齋盛

栗鼓腔

義木曾

琵琶奉還

正平經

舵接笛

經平清

池月磨墨

高佐木

栗津

義木曾

鷄越

源義

一矢斷扇

義木曾那須

馬三嘶

盛平知

千手

義木曾

東國男子

盛平知

我面二位

義木曾俊昌

國法仍舊

朝源賴

魚鱗眼

忠藤原

饒人

景柁原

正統縮

朝源實

善走

義北條

撈錢

義木曾

妖靈星

高北條

赤阪城

成楠正

船上山

長名和

櫛田祠

武菊池

投佩刀

義新田

旗號一番

高足利

重畫抹中

義新田

七生殺賊

及楠正成

畫月扇

相本間

資氏及

三鱗廢

泰宇都宮

引決方

義新田

錦囊詔

義新田

院耶犬耶

義土岐

提鐵挺

義新田

四條畷

義楠正

矢口渡

義新田

有髮童坊

義細川

卷之下

名家降賊

義楠正

兩統更立

義大內

今日舍

義山名

金閣

義滿利

三管四職

義足利

負殺君名

義上杉

障子二萬

義足利

築城術

義太田

鼠齧杉根

義北條

日下人

義松平

直言

義鈴木

管領命駕

義上杉

眇目痿臂

義山本

九灯背旗

義本間

血槍

義長坂

嚴嶋

義毛利

洞園金	松下之綱	白布裏面	上杉謙信
力士闘	越甲	閑塩	上杉謙信
一步極樂	長土屋	竹枝號	三松永久秀及
鹿角冑	忠勝多	蛇年人	信武玄田
金瓠馬表	秀羽柴	撈蝦舞	忠酒并
蝶兄鏡弟	及大久保	忠世	
幽石窟	大河内	土兵刺肋	光明秀智
七槍	加藤清正	福為正則	加藤嘉明平
野長泰	脇坂安治	片桐且元	糟谷
武則			
二壁	勝武田	小牧山	秀豐吉臣
疲癯翁	本多	袴後拗	勝板倉
八州敵天下	北條氏	村巷小闘	伊達宗達
榜令	北條氏	釜中魚	上合
藥囊號	小西行長	殺生閑白	秀豐次臣
鰲面翁	德川家康	四無應援	鳥井忠
勝甫冑綦	德川家康	學絕傳	細川藤孝
宰相傳餐	秀毛利	觀望	佐竹義宜
國家安康	德川家康	媾和三事	秀豐臣

四處布陣	幸村	矢長堤	長宗親
尺前無寸卻	小笠原秀政		
先登	德川忠直	裂封紙	井伊直孝
通計一百闕			
目錄終			
日本外史樂府	目錄		

日本外史樂府卷上

淡海 西川文仲 著

淺處騎渡 源賴信

海中淺處可騎渡。我能諳之夜潛赴立葦。為表賊未知。麾軍一鼓。任馳驚。恃險不戒。隙堪乘。國家母忌是邊戍。

雁行乱 源義家

雁行乱是有伏。縱兵搜索果獲伏。曾就江氏受兵書。今日行軍豈敗覆。不通古今非

日本外史樂府卷上

英雄狄青折節勤文學

宋狄青見知于韓琦。范仲淹。仲淹以左氏春秋授之。曰。將不知古今。匹夫勇耳。青折節讀書。悉通秦漢以來將帥兵法。

燒營取援 同上

燒營取援何用。營虜柵陷沒在黎明。初敵就擒。猶求活。求活可戮。國有刑。廷議私開不酬績。蔑視武將輕軍征。曾獻玄弓鎮。勢魔威名凜々。破鬼膽。後世錄倉鴻業興。誰

菊池純曰。險韻。唯見其穩。不識其險。巧手妙腕。皆係三溪隱士。評批點人。如意山。俱用典。尤確。

朝權歸于武門。全在此。

知當日已有漸

足柄山 源義光

足柄山會月明。路傍布楯坐吹笙。吹出鳳音授秘曲。忽起飄々伊洛情。兼程躡來元為此。一闕訣別分道行。

列仙傳。王子喬者。周靈王太子也。好吹笙。作鳳鳴。遊伊洛間。道士浮邱公接以

上嵩高山。

鬼髮束針 平忠盛

日本外史樂府卷上

異日醉。之。子。跋扈。弄威。柄。蓋。貽。將。於。吹。國。夜。幽。矣。

祇園祠畔有嬖姬。黑夜潛幸風雨時。鬼髮束針見怪物。直往捕捉檢狀。姿材武可倚。帝心有嘆息。平氏他日跋扈曾不知。

猿臂善射 源為朝

猿臂善射凌諸兄。總追捕使任自稱。八甲風漂臣母用。所憾長袖不知兵。一矢洞五著六袖。甲冑題吾何謬。火攻頻起宮闕灰。伯氏忍父豈恕有縛流大島。拔臂筋弓力猶能掃四邊。卻笑羊侃二十石巨鏃射。

結末好典故。

艦沒波瀾

梁書曰羊侃膂力絕人所用力至二十

石馬上用六石弓

鹿谷會藤原成親

鹿谷會宴馬放逸誤仆瓶子是元吉祇園

祭縱火攻我可逞莫忽々豈料豎子私自

首大事未舉謀全漏獨有鬻拳進諫言或

殺或流事纔收

左傳鬻拳強諫楚子楚子弗從臨之以

日本外史樂府卷上

兵懼而從之拳曰吾懼君以兵罪莫大

焉拳遂自刎也

待賢門藤原信賴

待賢門難防禦豎子舉事無雄武赤甲黃

馬排門來大庭橫行如闕虎追而垂及馬

踰壕射馬々倒猶遁逃可惜兩將搏戰際

小松公死間容毛

浴室源義朝

力士潛伏浴室傍窺隙奮躍何倔强赤手

鬻拳並指
小松內府
歟

如覽江戶
錦繪

龍門

搏擊被刺殺返斬三人是金王酒間聞變
舉坐起君臣橫死事倉皇嗚呼弒逆之報
誰又怪聖賢萬言垂規戒

龍門常盤

三子伏匿龍門里捕母有寵釋三子平族

勢威日赫然源氏瑣尾奴僕視君不見尺

蠖之屈欲求伸漢高韜晦芒碭間

秦始皇嘗曰東南有天子氣於是東遊

以厭之劉季即自疑亡匿隱於芒碭山

日本外史樂府卷上

澤間

烙記馬源仲綱

烙記馬曰仲綱仲綱憤怒忽鴟張平氏專

權正可戮欲舉大事高倉王謀泄王遁三

位去家臣佯仕奪馬驚烙記馬曰宗盛宗

盛慙恚也起兵薰蕕同器不相入頓見天

下如沸羹

鼠圖源賴朝

源圖平鼠圖源賴朝歷說豈應八州豪僵樹逃

烙馬之事
真如兒戲
卒身死國
亡三位未
路洵可憫
笑也

收筆有力

匿誰又怪一跌不拆心益牢。初建大業自
有命不因勝敗因威柄。

衣錦歸鄉 齊藤實盛

衣錦歸故鄉一死有餘香。涅髮伍壯士雖
老尚倔強惜君曾無甘露食。史天澤髮洗
見白。

明皇雜錄曰。李林甫以鄭牟為省郎。髮
白。上賜甘露羹。能烏髮。服之果然。

輟耕錄。史天澤鬚鬢早白。一朝忽盡黑。

日本外史樂府 卷五

世祖見之驚問。對曰。臣覽鏡見鬚髯盡
白。竊傷年且暮。盡忠之日短。因添之使
報効之心不異疇昔耳。

栗殼磬 木曾義仲

栗殼磬。安宅渡。敗死如麻。西軍怖將帥僅
免卒何收。源氏如犬。平氏兔。走入京城尚
不安。舉族西奔。奉鑾輅。強弱母乃手覆翻。
盛衰自是脚往還。

琵琶奉還 平經正

乍變格調
牧筆老手

彈琵琶泣數行。愛玩曾貺仁和王。叙別欲
去。由何事。軍威散。敵敵難防。我元良家子
舉族向西海。此器已奉還。一死亦不悔。

舵樓笛 平清經

舵樓吹笛月皎然。擣得憤鬱聲徹天。曾辭
洛城航滄海。敵騎來逼日。翻々山水無邊
何處徙。幽魂長為抑浦鬼。

池月磨墨 佐々木高綱

池月磨墨競先登。翻空萬鏃紛有聲。亂流

日本外史樂府 卷五

百鞭我何後。抵岸足誇第一名。免道駛湍
馬欲溺。馬不如意無是績。

栗津 木曾義仲

殘兵稍聚又張軍。北地再舉得便難。一矢
中額馬陷淖。栗津原頭松風寒。曾出蘓山
圖恢復。賀越席卷何神速。恃功狼戾茂王
家。法住寺事足赤族。

鶉越 源義經

鶉越險鹿能踰。馬亦可踰。欲馳驅懸崖絕

壁一鞭下三千騎兵齊號呼。畏。推轉蜀人駭。炬火傳城如燃。鬚平氏奉輿航滄海。晉軍爭舟々中指。九郎威力豈易言。萬鈞歷卵真足比。

晉鄧艾伐蜀。以旃自裹。推轉而下。將士攀木緣崖而進。

左傳。晉中軍爭舟。々中之指可掬也。

一矢斷扇鼓。那須宗高

艷姬顏如玉。扇竿植艦舳。去岸數町求射。

日本外史樂府 卷上

呼。良弓一矢斷扇鼓。君不見紀昌望蟲如

車輪。豈失器物如邱山。

紀昌學射於飛衛。々使學視小如大。昌

以鼈懸蟲於牖。望之三年如車輪。乃以

射之。貫蟲心而懸不絕。以告衛。々曰。得

之矣。

馬三嘶。平知盛

馬三嘶。不忍殺。吾正危。由此脫。子死報恩

父。弄子奔。事在他人。我唾面悲。我軍國氛

予當論知
感。張々重
不滿意者

然也

診辰。

千手。平重衡

虞氏。淚楚歌。色開宴。朗吟酒頻頌。千手琵琶工。藤鼓奈何。西海戰血腥。俘囚可殺不

可辱。亡國之臣不欲生。

項羽至垓下。漢軍圍之。數重。聞四面皆

楚歌。大驚曰。漢已得楚乎。何楚人多也。

乃夜起。飲帳中。虞姬悲歌慷慨。自為歌

詩自殺。

日本外史樂府 卷上

東國男子。平知盛

東國男子立鵠首。汝輩前死母卻走。張世

傑。陸秀夫。氣節凜々。武刼々。躍入敵船。索

九郎。餘力不遺。縱擊拊。嗚呼。天斬趙祀。命

脉終。塊肉竟。葬魚腹中。傘工家兒不引決。

恨就生擒辱吾宗。

元。張弘範。攻厓山。宋師大潰。張世傑斷

維。以舟奪港而去。陸秀夫走帝舟。々大

且諸舟環結。度不得出走。乃先驅妻子。

讀去不竟
涕泗滂沱

入海。即負帝同溺。後宮諸臣從死者甚衆。

我面二位面 僧昌俊

大達塵起。人行踉蹌。鞍馬設具。士卒戎裝。夜半變亂。無由遯。從士來救。稍拒扞。面縛毆面。尚抗言。我面即是二位面。誰取古人比壯雄。一身是膽。趙子龍。

蜀趙雲將數十騎。值曹操軍大出。雲前突其陣。且鬪且却。魏兵追至營。雲大開

門。魏疑有伏。引去。劉備視之。曰。子龍一身都是膽也。

國法仍舊 源賴朝

興羽席卷落籌策。國法仍舊勿更革。晉陽精兵入關中。人民案堵就版籍。恰是執柯以伐柯。曾無方隅起風波。

沛公之入關中也。與秦父老約法三章。悉除秦苛法。吏民皆案堵如故。

魚鱗眼 藤原忠光

魚鱗眼雜役徒。懷有利刀非區々。漆身吞炭是我侶。荊卿聶政名豈虛。精衛木石填東海。形骸不亡情何止。

燕太子丹使荊軻刺秦王。軻引匕首以擣秦王。不中。

聶政為嚴仲子刺韓相。

山海經發鳩之山。有鳥名精衛。炎帝女溺于東海。精衛常取西山木石以填海。

讒人 松原景時

讒人蠅營殺豫州。尋又萋斐及參州。小山亦墮掩鼻計。右府畢世寵倨優。孤寄鑒殺猶天幸。此輩可向豺虎投。嗚呼此輩可向豺虎投。

詩曰。營々青蠅止于樊。豈弟君子無信讒言。又曰。萋兮斐兮。成是貝錦。彼讒人者。亦已大甚。又曰。彼讒人者。誰適與謀。取彼讒人。投卑豺虎。

鄭哀謂楚美人曰。王愛子甚矣。然惡子

之鼻。子見王。必掩其鼻。美人從之。王謂鄭哀曰。美人見寡人。必掩其鼻。何也。對曰。似惡聞王之臭。王剗之。

正統縮 源實朝

源氏正統縮。其裘計有辱。家臣往々遇。溫誅。子孫相共。戕骨肉。手提髑髏。血模糊。君子平常戒不虞。

礼學記曰。良弓之子。必學為其良。治之子。必學為其衰。

善走 北條義時

善走者有押松。齋詔。歷說東國。雄卻言。陛下喜鬪戰。謹獻士卒十餘萬。舉兵長驅。敗官軍。帝王廢立已取斷。君不見旭日將軍。無是幸。史傳尚以叛賊書。

撈錢 青砥藤綱

過滑河。墜十錢。捐五十錢。撈十錢。得不償失。人皆笑。不思錢盡還民間。能知大體事。平允丙吉牛喘屬迂遠。

丙吉為相。道逢死傷。不問。逢牛喘。問之。曰。三公典調和陰陽。職當憂。

妖靈星 北條高時

天王寺妖靈星。醉舞婆娑。倡歌聲。歌終醉醒。無所見。焚狗往來在輿上。群鬪宛如爭尸狀。圓顯滿朝。又何為蔑視王家。任偏私。嗚呼。國家之亡。必有妖孽。石言蛇鬪。嘻々出々。

左傳曰。石言于晉。師曠曰。石不能言。恐

有憑焉。又曰。內蛇與外蛇鬪于鄭。內蛇

死而厲公入。又曰。或叫于宋。太廟曰。嘻

々出々。鳥鳴于亳社。如曰。嘻々。甲午宋

大災。宋伯姬卒。待姆也。

赤阪城 楠正成

隻手可掀赤阪城。々設活垣。斯敵兵。攀垣蟻附。斷繩索。熱湯灌沃。長柄杓。應變出奇。如湧泉。馬援曾是有謀畧。

後漢馬援奉詔。憑使鎮慰邊衆。乃招集

豪傑曉誇。卷戎謀如湧泉。勢如轉規。遂救倒懸之急。存幾己之城。

船上山 名和長年

奉帝船上山。因樹植柵。扉為垣。近豪記章。舉旗幟。賊來望見。不敢前。幸會昏黑。大雷雨。擠賊谷中。鏖千人。布衣忝受帝者託。猥許馳驅。見方畧。

櫛田祠 菊池武時

櫛田祠前馬不行。何物牛鬼沮義兵。一矢

日本外史卷之七

卷上

射龜馬輒步。孤軍先攻太宰城。少貳大友。鄙豎子。反覆無常。是何情。

詩話。牛鬼蛇神。不足為其虛荒誕幻也。

投佩刀 新田義貞

投佩刀。波濤中。海岸潮退。道已通。麾軍一鼓直攻擊。傳火府第。烟焰濃。兇囊既假。粧既諸將齊。進敵壘。粉嗚呼。百年之跡。無節尸。七世之主。豈不覲。

旗號一番 足利高氏

二百騎先至。旗號一番。字。我家嘉兆正。可知。況又右府曾贈賜。祥瑞天休。必應人勝。持寺亦丁。佳辱。

重畫抹中 新田義貞

重畫抹。其中々。黑有淡濃。惜君賊兵狼狽。際破竹。建銳不追蹤。嘯聚九州。募銳士。海陸並來。無防計。僅取苟安。失時機。兵衛自古戒濡滯。

七生殺賊 楠正成及正季

日本外史卷之七

卷上

七生人間。殺國賊。昆弟耦。刺留魂魄。揚業麾下。無生還。張順勃々。有生色。名將元知。勝敗機。血戰幾合力。不遺。可惜朝議落常套。昏闇之見果屬誰。

宋揚業與契丹戰。敗。麾下尚百餘人。業謂曰。汝等各。有父母妻子。與我俱死。無益也。可走還報天子。衆感激。皆戰死。無一生還者。

宋張順等。轉戰百二十里。抵襄陽。城中

後尊氏殺資氏實因以此役一箭

押韻盡用助字毫無窮末態以爲老手

久絕援聞救至踴躍氣百倍及收軍獨失順越數日有浮屍遡流而上被甲胄執弓矢視之順也身中四創六箭怒氣勃々如生

畫月扇 本間資氏及相馬忠重

畫月扇射挾月我箭一發曾不失我且欲試甲脆堅賊惧不進氣先奪官軍不如賊兵強精技却落第二術

三鱗廢 宇都宮泰藤

日本外史樂府卷上

三鱗廢重畫興重畫衰中黑榮北陸義士皆欣喜傍近望風氣益增人心稍歸天心捨金崎城中人食馬

引決方 新田義顯

引決方余未知答云君視臣所爲樹刀左脇畫至右奉刀即死其如斯君不見東海一箇男子國視死如歸何惶惑

錦囊詔 新田義貞

討賊任一煩卿錦囊有詔賊兵驚白箭貫

額吾事畢昨夢卧龍豈非靈股肱雖竭無天運一死南北換正閔

院耶犬耶 土岐賴遠

院耶犬耶敢下我卻執弓矢不下馬當日何知萬衆君院且欲下況將軍天子無功昇王位王實向臣承鴻恩天有盛衰人強弱幕府威力倒乾坤

提鐵挺 篠塚伊賀

提鐵挺開門出勢無當氣勃々徐步千兵

日本外史樂府卷上

萬馬中賊軍披靡皆驚怵一人必死可橫行拮敵忘身即是生

四條畷 楠正行

四條畷北軍至一鼓衝突衆氣勢渠魁授元又非真二世血戰死王事精忠如石還如金后天后土可表心

矢口渡 新田義興

矢口渡舟設陰計載至中流忽拔枓舟沒伏起英雄死巍然奮雷恨未霽杜伯尚能

好典故

射宣王請省立祠鎮幽怪

墨子云周宣王殺杜伯不以罪後宣王
田于圃見杜伯執弓矢以射宣王伏弓
衣而死

有髮童坊細川頼之

有髮童坊被斬辱礼式五箴堪感服文武
正士侍幼君俗風一新何神速室中難掃
唯蒼蠅近日蠅盡臣可瞑

日本外史樂府卷上

七

日本外史樂府卷上 終

日本外史樂府卷下

淡海 西川文仲 著

名家降賊 補正儀

名家孫向賊降一朝玷汚貫日忠南風不競南木折後世辨論孰適從當年卒病黜鬼簿地下何面見乃父

晉人聞有楚師々曠曰不害吾驟歌北風又歌南風南風不競多死声楚必無功

兩統更立 大内義弘

兩統更立媾和議遂向北朝授神器楠菊枯稿霜風嚴搖落不濃南山翠幕府專輒盟已寒爾後屢起忠家孫金藏自殺恨未盡尚據湯淺張孤軍

今日舍 山名氏清

今日舍明日反親出討伐可蹂踐背恩舉事是逆臣失道徑淖軍逆蹇六分一氏天不扶果垂狐尾罪豈免

唐書吐蕃以累世戰沒為甲門敗懦者垂狐尾于其首以表狐之性怯

金閣 足利義滿

道義似道
同一僑倭

北山起金閣麗飾目炳燦僭擬王室舉世知誰許名家濫貪攫就第呈署吏文書可謂西湖葛嶺居

宋賈似道上疏乞歸養帝賜第西湖之葛嶺於是五日一乘湖舫入朝不赴都堂治事吏抱文書就第呈署大小朝政

一切決于館客廖瑩中掌吏翁應龍宰執充位而已

三管四職 今上

三管四職勢超然七頭八館亦出群將軍專輒倍天子陪臣強力倍將軍將軍垂拱充高位天子牢落擁虛器

負殺君名 上杉憲實

怨負殺君名拜伏謝神靈奉令討君々自殺權威堂々正相凌周鄭交貨名分乱判

然可用董狐筆

呂祖謙曰左氏叙平王莊公之事始以
為周鄭交質終以為周鄭交惡並稱周
鄭無尊卑之辨

左傳趙穿弑晉靈公董狐書曰趙盾弑
其君孔子曰董狐古之良史也

障子二萬錢足利義政

障子二萬錢第宅造營極奇珍徭役民疲
不加意日耽遊宴獨忻然國政不出天子

不出幕府東西陣起街衢烟焰鬪貌虎

築城術太田道灌

江戸西城
築道灌所
管築要害
壯固稱天
下第一矣

道灌惟精築城術八州將士歸恩恤陰計
速欲除此人酒間命浴々室殺君不見爾
後武昌江戸城趨朝二百六十名二百餘
年襲典型

鼠齧杉根北條早雲

鼠齧杉根化為虎况復小國任侵渙大族
欲斃必族斃癰疽潰裂乃可圖敵將驕傲

我詐走卻勒夜兵縱攻梧馬景西去非逃
亡鳳翔失據即踐蹂

唐紀朱全忠患李茂貞堅壁不出馬景
與衆騎皆出忽躍馬西去詐為逃亡入

城告茂貞曰全忠舉兵遁矣獨留傷病
者近万人守營今夕亦去矣請速擊之

於是茂貞開門悉衆攻全忠全忠鼓于
中軍百營俱出縱兵擊之又遣數百據
其城門鳳翔軍進退失據自蹈藉殺傷

殆盡茂貞自是喪氣

日下人松平清康

引用古典
左右逢源
可以見書
卷堆積於
腹笥中

日下人是々字日下在握即至貴夢亦可
信豈茫然子孫欲開太平治仲子歸魯亦
如斯自古往々有此類王濬四刀懸壁頭
三刀益一其益州永樂廷試頭生角果知
解縉被選擢橫外慧敏解得詳海龍禪寺
見遺芳

左傳仲子生而有文在其手曰為魯夫

人。

晉王濬夢懸四刀於壁上。濬問主簿李毅。曰。夫三刀為州。而益一。其臨益州乎。

明永樂初。廬陵錢舉發解南省。及廷試。夢頭生角。同年曰。頭角崢嶸。在此舉矣。旁一人曰。羊角乃解字也。恐有解姓者。復居首耶。及發榜。臚傳名果得解縉。

直言 鈴木某

直言功愈一番槍。啓沃彌縫豈可亡。弋園網濠被拘繫。有臣蹇諤懷剛腸。取鯉烹煮自犯罪。公怒鼓刀。臣諫張。以魚易人是暗主公。悟忽排一言昌。

管領命駕 上杉憲政

管領命駕止再三。兵漸寡弱聞不堪。弓僧難凌根來寺。伊勢弓兒謀慮深。白布渡河軍擾亂。黃八幡出影銷沉。

眇目瘻臂 山本晴行

黃八幡則指北條綱繁耶。

結繳湊合尤妙。

眇目瘻臂是廢人。侮易嗤笑駿州臣。胸橫武術不取語。但待知人能任君。甲主側席見大說。直取九城建殊勲。孫良夫眇卻克跛竭來殘疾有聲聞。

穀梁傳。季孫行父禿。晉卻克眇。衛孫良夫跛。曹公子手僂。同時而聘於齊。使禿者御禿者。使眇者御眇者。使跛者御跛者。使僂者御僂者。蕭同叔子處臺上而笑之。客不悅而去。齊人曰。齊之患自

此始矣。

九灯背旗 本間某

九灯背旗燭闇主。我軍擾亂氣消沮。單騎奮戰效死忠。八州曾無此雄武。九灯授敵換幟標。敵元不聞眼如炬。

血槍 長坂信政

每戰槍鋒血模糊。徒手退却非武夫。欲獲首級可突入。常向敵地先馳驅。不是典韋恐哥翰。八十斤戟或半段。軍無斯人無奇。

字々有輝光。又猶九燈燭闇夜。

功我公唯恃此英雄。

江表傳與韋每戰先登名冠三軍好持

大雙戟長幾一尋軍中為之語曰帳中

壯士有典君手提雙戟八十斤。

吐蕃盜邊與哥舒翰遇吐蕃拔其軍為

三行從山差池下翰持半段槍迎擊所

嚮輒披靡。

嚴為毛利元就

大風雨天助我薄暮登船々掀簸警然如

飛破浪行唯認一點牙舩火上岸佯言疏

前兵賊無警邏隙可乘吹螺鳴鼓號呼起

義旗整々戮長鯨直行奇險有奇績曾祈

嚴鳴得神力。

嚴鳴得神力。

胴園金松下之綱奴與助

攘得胴園金常懷仕進心他日報償又何

有如此小節不足慙猿面心捷面皮厚入

尾為奴不厭醜君不見兵馬群中兼軍麾

曾是人後爭鞋手。

豐公獲志後償獲金七四二萬石豐公亦能報故主恩眷者

白布裏面上杉謙信

白布裏面駟馬跳罵呼甲將舉大刀麾扇

障扞扇欲折救兵揮槍馬驚逃武術迅速

見變化觀釁伺隙在毫毛。

力士鬪甲越

甲越構兵十二年勝敗不決喪士民相約

一日力士鬪々勝絕力越國臣拓地畫疆

又何爽越取河中甲貝津古來神武曾不

殺良弓射馬不射人。

杜詩挽弓當挽強用箭當用長射人先

射馬。

射馬。

閉塩上杉謙信

爭在弓箭不在塩平價販鬻曾弗禁駭相

豎子重困汝畢竟忘却雄武心一言正當

漢宣詔德量鴻大誰得較侮弱取國我不

能好敵下世實可悼。

漢宣詔曰塩人之食而價貴衆庶重困

其減天下之塩價。

一步極樂 土屋長吉

進一步生極樂。刺日來攻何太虐。為鬼為域皆舊臣。如今並叛可驚愕。獨有土氏倒槍鋒。不厭地獄厭我公。厭我公見卓絕。我公墮命國摧裂。

竹枝號 松永久秀及三好三黨

竹枝號抵京師。新第未全正。及時訴狀往。復兵入府。攢槍弑逆委賊兒。當日威權移。臣隸臣隸得色主。式微。

詩。式微。式微。胡不歸。

鹿角胄 本多忠勝

鹿角胄。截蜻蛉。軍騎馳突。兩軍驚。敵兵雖多。不肯逼。甲陽陣中。姓名馨。遇春執弓。與敵會。殺敵二十。敵大潰。花雲稱得黑將軍。躍馬拔劍。衝賊群。嗟哉乎。二子之勇。又何有。主家過分。併唐首。

兵畧纂聞曰。常遇春攻河南。元兵五萬屯洛北。遇春單騎執弓矢入陣。敵以二

十騎。攢槊共刺。遇春發一矢。殪當先者。麾下壯士從之。遂殺其二十騎。敵大潰。東邱候花雲從上於臨濠。上使將兵略地上。將取滁州。雲單騎前行。遇賊數千于道。拔劍躍馬。衝其陣。而過。賊驚曰。此黑將軍。不可與爭鋒。

蛇年人 武田信玄

蛇年人死是何象。與氏筮得筮不爽。生歲辛巳乃信玄。決意忽歸參州軍。城樓吹笛敵未聽。定準發銃。手覺應一騎顛墮狼狽。還爾來甲陽復不競。君不見李牟吹笛蛟龍來。蛟龍殆殪也可哀。

李牟則指村松芳休也。

國史補。李牟吹笛天下第一。月夜泛舟吹笛。寥亮。俄而客呼船共載。請為吹之。其色精壯。山石可裂。疑客乃蛟龍也。

金瓠馬表 羽業秀吉

桐號瓠馬表。海內如電掃。敵望趨避何猛然。一捷一瓠積。至千席。卷明國。不承報。欲

賺外裕內吝人。

撈蝦舞 酒井忠次

撈蝦舞。鼓。箎。和。進。請。決。戰。膽。何。大。爲。巢。山。墨。守。雖。堅。奮。然。一。鼓。忽。可。下。公。恐。漏。泄。斥。高。論。陰。招。附。得。兵。五。千。軍。有。機。變。人。或。沮。正。是。妙。處。不。可。傳。

世說。司馬大傳。問謝車騎。惠子五車。何以無一言入玄。謝曰。當是妙處不傳。

蝶兄鏡弟 大久保忠世及忠佐

蝶爲兄。鏡爲弟。參州元有佳士。在如臂使指。督衆來所。向披靡敵。驚駭。軍勢飛鳥或翔龍。不然勁風振秋蓬。

玉海。龍翔鳥飛。上下其勢。行陣整也。

何法盛。晉書。執朽轡。以禦逸馬。乘勁風。

以振秋蓬。

幽石窟 大河內政局

幽石窟。八年。足痿不肯起。勾踐范蠡極苦酸。只甘皇天免一死。唾罵不降甲陽軍國。

朝復見畢資倫。

吳越春秋曰。吳王拘越王勾踐。與大夫種范蠡於石室。

金史。泗州破。畢資倫爲宋軍所執。說之降。不屈。宋人以資倫忠義。欲活之。鈴以鉄繩。囚於鎮江土獄。脅誘百端。時一引出。問云。降否。資倫或罵或不語。如是十四年。

土兵刺肋 明智光秀

土兵刺肋。墜馬死。鬼神一擊報如此。鯨波逼發天王山。洞嶺觀望軍不起。終達勝龍圍數重。難免椒殿弒逆辜。

唐天祐元年秋八月。朱全忠遣朱友恭及叔琮。弒昭宗於椒殿。

七槍 加藤清政。福島正則。加藤嘉明。平野長泰。脇坂安治。片桐且元。

糟谷武則。

濃山炬火北軍驚。衆暗欲返。不許行。関色如雷。山谷震。七槍齊進。功相爭。余吾曉風。

賤岳月兩戰一日雌雄決朝敗暮勝手覆翻勢如破竹併北越

二壁 武田勝頼

二壁專柄沮軍機謀臣宿將事難裁孤子獨臣唯知義衆畔親離誰驅馳社稷二十八傳世創殘四十餘男兒惟惺臣已既十日難支天目山頭樓盧杞奸邪余不覺得豈有此敗覆

唐書德宗從容與李泌論即位以來宰相曰盧杞清忠強介入言杞奸邪朕殊不覺其然泌曰階下覺之豈有建中之乱乎

小牧山 豐臣秀吉

小牧山吾後矣羽黑敗聞亦可悔晋梁曾爭無石山悉銳馳驅敢死士大義征討轉移文一首欲購金一千潜擣空屋却逢敵長湫僵尸暴紛紜戰機由來宜急擊到底二魁就鋒鏑君不見徐達屢捷警戒嚴退

入城中先歛跡

五代史梁軍已登無石山莊宗遣李嗣昭轉擊山北而自以銀槍軍趨而呼曰今日之戰得山者勝晋軍皆爭登山梁軍遽下陣於山西晋軍從上急擊大敗之

典故紀聞曰徐達等北征屢捷太祖遣人諭之曰聞將軍已下齊魯諸郡中外皆慶予獨謂勝而能戒者可以常安而能警者可以常安戒者雖勝若始戰警者雖安若履危云々

疲癯翁 本多重次

疲癯翁手足缺伶仃孤苦誰憫恤疔毒雖篤正足療君自絕命謝醫術如今一瞋事可知臣不欲生死先決君不見甲州將士折腰向我求吾亦如此豈不羞疲癯翁一評論付醫救藥疔全瘳

袴後勘 板倉勝重

面命駿府奉行職願與妻計歸我宅歸宅
誓妻約尤嚴慎勿向我添汝心破壞公事
因婦女苞苴內謁是峻禁袴後勘妻欲正
汝何肯誓不奉令冀妻奉饒待如賓治國
安民莫若敬政理元自備閨門為婦畫眉
乃醜行

左傳曰季使冀見冀耕耨其妻饒之敬
相待如賓與之歸言于文公曰敬德之
聚也能敬必有德以治民君請用之文
公以為下軍大夫

漢書京兆尹張敞為婦畫眉長安中傳
京兆眉嫵有司奏敞宣帝問之對曰臣
聞閨房之內夫婦之私有過于畫眉者
上愛其能弗備責也

八州敵天下北條氏政

閑左八州敵天下函谷難跨何如我富水
驚鴨忽群飛平氏恒悖狼狽歸驕傲本自
取禍道豐家下視比嬰兒投鞭斷流險勿

恃維汝不朝移六師

符堅會群臣曰自吾承業垂三十載四
方略定唯東南一隅未露王化今畧計
吾士卒可得九十七萬以吾之衆投鞭
於江可斷其流又何險之足恃乎

村巷小鬪伊達政宗

豐公此時
氣已并
吞海宇獨
眼龍帽服

村巷小鬪三十餘紛爭幾箇在一隅休道
縱虎郊野外五十四郡不足虞某軍西海
道某軍南海道部勒大兵汝未觀指示曠

良有以也

原天杳々不肯仰視瞻正寒恰是雄兒達
鷹鷂

榜令北條氏政

僧觀榜令知將已三十年前三四章今則
三倍又多事煩政擾々莫敢違委任有人
君不省唯恃閑左八州強

金中魚同上

金中魚烈火烹受圍數重城難撐老臣款
敵欲賣國石垣山頭闕內情親臣宿將互

疑阻交勸和議破防禦圍而後降法抵刑
可_レ怜昏惑上鼎俎

昌獮降于禁諸將皆以當送太祖禁又
與獮有舊禁曰諸公不聞令乎圍而後
降不赦雖舊不敢失法泣涕斬

藥囊號小西行長

藥商用藥囊我軍正足張冒濤先抵金山
浦拔城擒將武維揚到底難免是故慙又
欸辨主上和議

殺生閑白豐臣秀次

攝政閑白是殺生手及臣屬何無情諫言
不納日益虐姦點怨讎隙堪乘覆亡可必
豈得脫獨怪侍妾三十人名曰畜生有何
說

鰲面翁德川家康

鰲面翁可畏小子汝能記可畏必非魁偉
形可畏宿哲過人智小牧之事在眼中弓
箭之道不讓公諸將相顧皆駭栗翁獨耽

辭意從容君不見道原腹心不少許面前
是非犯介甫

裨史王介甫用事凡百措置舉天下莫
能奪劉道原直指其事而是非之或面
刺介甫無所忌諱變色如鉄受之者寒
心聞之者起而避席道原略不以介意

四無應援鳥井元忠

四無應援死報國他將不可留貽敵堂上
用杖步履艱曾傷一肢病跛臂太斐奈此

孤城何留守之任何用多只恨與君永訣
別老羸就死豈嘆嗟九江守將有李黼揮
劍叱賊見雄武

元紀曰徐壽輝攻九江李黼守孤城中
外援絕賊兵入猶與之巷戰力不能敵
乃揮劍叱之曰殺我母殺百姓賊刺之
墮馬死

勝肅胄綦德川家康

勝肅胄綦又何為勝則有敗誰忘危曾是

晉文作憂色。況又闕西元大師。天下勝敗。一日決。諸將血戰皆絕。南宮松尾共狐疑。心懷觀望。可謂拙。此役大捷。昏向明。豎子開。纍若為情。今日事不出仲子。却推天下。付長鯨。

左傳。城濮之役。楚師敗績。晉文猶有憂色。曰。得臣猶在。憂未歇也。

學絕傳 細川藤孝

國朝歌。唐土詩。共是言志。摘藻微。皇家曾

重古。今集授受絕傳。悔何追。山陰老將長詞學。諸子不及名馥郁。敵兵攻戰銳不九。廷臣來諭行。成速須更東軍有捷聞。怛怛天壤弗容身。

宰相傳餐 毛利秀元

宰相傳餐。失戰期。心意未決。懷狐疑。戰起。觀望不力。戰闔族誰見。君子幾。順逆雖明。奈強弱。況復舉事。因黥兒。

觀望 佐竹義宣

觀望兩端。良可鄙。仇敵雖恕。却憎此。乘時舉事。是英雄。常州豎子。無羞耻。左右周利。求龍斷。廢為廢人。又不齒。

國家安康 德川家康

國家安康。是詛我。大小釋迦。欲代我。忽停慶儀。人目驚。可怜豐家。却速禍。二女辨銘。賜溫言。五山註文。更判然。諛臣誤君。釀內亂。忠謙被疑。赴故山。嗚呼亡。微有幾。鮮人識。屢孤其服。實作難。

周宣時。有童謠曰。廢孤其服。實亡周國。適有鬻是器者。宣王使執之。其人逃於道。見棄女。衣其夜殤。而取之。逸於褒。至幽王之時。褒人有罪。入是女。於王。是為褒姒。王嬖之。

媾和三事 豐臣秀賴

媾和要三事。客兵不忍棄。會議不決。漫紛紜。前後相反。監官言。遂定誓約。填隍壑。壯士泣盟。茶臼山。口血未乾。圖再舉。真是割。

肉投餒虎。

凹處布陣 真田幸村

凹處布陣待與軍。稍邇令曰皆執槍。又令曰皆起。敵驚狼狽萬馬奔。東兵雖強膽正寒。右府知臣々不負。果知武術冠西軍。

矢尾堤 長宗我部盛親

矢尾堤兵伏匿。東軍為走亦不憶。徑田上提忽聞聲。二將授首出不測。君不見呂布進至逼魏兵。魏兵來堤皆顛踣。

魏武志注

呂布來戰。太祖隱兵大堤裏。

出半兵堤外。布益進。乃令輕兵挑戰。既

合。伏兵乃悉乘堤。步騎並進。遂大破之。

尺前無寸卻 小笠原秀政及本多忠朝

有尺前無寸卻。愛馬百里敵中躍。左奮鐵

搥。右大刀。兩人戰死。曾為約君。不見狼蹕

一怒死彭衙。正是當日雄武夫。

左傳。先軫黜狼蹕。而立續簡伯。狼蹕怒。

其友曰。盍死之。蹕曰。吾未獲死所。云々。

子姑待之。及彭衙之役。以其屬馳秦師死焉。

先登 德川忠直

身先士卒。是張暢。奏功第一。陳和尚。二子之功亦堪咄。氣節勃々誰可讓。一蹴欲入閻羅廳。馬後聞聲勢益增。京口門破城兵潰。傳火樓櫓迅於霆。嗚呼豐公崛起執國命。須臾失鹿付他姓。

宋張暢傳。魏攻彭城南門。并放火。暢躬

自前戰。身先士卒。

通鑑宋紀。陳和尚擐甲上馬。以四百騎。

大敗蒙古八千之衆。士氣皆倍。蓋自蒙

古之難。二十年間。始有此捷。奏功第一。

名震國中。

裂封紙 井伊直孝

封我百萬石。此約不可成。幕議紛紜難速裁。頓使奇才作計策。笑裂封紙付火爐。欲嚇不嚇豈可嚇。

通計一百闕

日本外史樂府一百闕。湊合彼我典故。對
襯雙綰。如天衣無縫合。間亦雜以議論。甄
別淑慝。表章得失。可以見其腹笥中。書卷
繁富。無不具也。謂諸三十六峰外史之後
別建一幟。其誰曰不然邪。明治九年丙子
三月十又一日。識于西京六條僑寓。菊池
純評

日本外史樂府

卷下

三十三

日本外史樂府卷下 終

明治辛未、解藩以後、余無殊
掌、實天地間素餐士耳、雖自
勅正志、而遂著伶仃、亦未
以之氣勢、故富中一、其、不能
也、因就日本外史中、採取題
目、以誌樂府體一百卷、既承源

日本外史樂府

平以還、治亮興廢集之、
可一編而為矣、其用典、故按漢論、
差余之近意、不知大才之少、
也、世之誤者、自能是非之可也、
明治七年三月、東園西川、既後

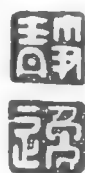
以陽角、以李西涯、撰古、未府、
為、物、本、心、六、十、國、以、
有、一、痛、之、生、氣、洵、為、中、部、
未、府、有、之、出、富、中、人、作、家、
所、有、之、未、府、之、強、之、其、西、
川、君、亮、既、事、一、數、百、卷、更、

日本外史樂府

為、之、史、學、其、此、國、史、樂、府、
百、篇、之、為、未、府、之、其、其、撰、
出、之、使、自、其、下、一、其、利、之、日、
必、日、其、有、所、作、而、未、果、也、
以、其、其、其、其、其、其、其、其、
之、其、其、其、其、其、其、其、其、

美書子涯宋府及云
肯創色名語墨出既
被之為強自是天地
又余余獨斯語以移
為改

山田獻



明治十三年九月七日出版々權御願
同年十月五日版權免許
同年十二月刻成發兌

定價金二拾五錢

滋賀縣士族

著者

西川文仲

上京區第二十組西大路甲
第四百一十一番地寄留

京都府平民

出版人

石田忠兵衛

上京區第廿五組柳六町目
二百七十七番地

全

全

風月庄左衛門

上京區第廿八組大恩寺町
二百五十六番地

清宮秀堅 著

北總詩誌

明治十年（一八七七）東京玉山堂鉛排本

據明治十年（一八七七）東京玉山堂
鉛排本影印

清宮秀堅著

北總詩誌

東京書肆

玉山堂發兌

北總詩誌序

余與紫陰交。昔年于此。而余今年七十有六。紫陰少余七年。共豐稷。歷歷。自賀自愛。紫陰曰。尚有高年者。曰。神山。其歌。名。蕭。蕭。年九十。曰。伊能。穎。則。亦。善。歌。有。名。于。國。事。年。七。十。三。曰。柳。田。正。齋。善。書。亦。能。詩。年。八。十。一。共。北。總。人。也。紫。陰。嘗。著。下。總。舊。事。考。今。亦。探。事。跡。可。詩。者。曰。北。總。詩。誌。請。序。於。余。昔。者。白。樂。天。當。唐。之。盛。時。集。會。眉。壽。之。人。僅。得。九。人。而。文。字。之。有。無。不。可。知。而。今。我。北。總。一。州。得。五。老。皆。有。文。字。且。天。爵。亦。高。則。不。爲。少。紫。陰。此。著。如。其。苦。心。則。見。書。中。不。復。贅。也。因。喜。而。引。卷。首。又。

以備異日之佳話云。

明治十年夏六月

範宇芳野世育識

小引

余少年之時。遊于安房上總。足跡殆遍於全國。然所賦之詩。皆係虛景。其得事實者。尠。所謂詩人之詩也。今讀清宮翁北總詩誌。其詩皆得事實。附以小傳。傳即風土記。而詩即詠古之詞也。北總全國瞭然於一卷之中。其詩趣清瀟。亦爲詩人之詩。嗚呼。余對此卷。不得不悔少年之浮華也。丙子秋日。東京枕山老民藤厚書於下谷熙々堂中。

北總詩誌小引

舊聞其事。遠追和銅。負笈孤行。客程蕭寂。時以韻語排遣。漸積至一百餘首。不忍覆瓿。集錄存家。題曰北總詩誌。然興之所會。衝吻而成。性又粗率。不能加鍊磨。故聲韻不諧者亦居多。但爲吾家記事珠云。

弘化丁未晚夏

下總清宮秀堅穎栗氏

絕地探討三十年于茲。頗加詳悉。爲四方問絕地勝跡者。錄舊製用古詩數十首。并新得若干。其間分註事跡。以答問者。在昔東坡守杭之日。錄其地之勝跡十八首。

各章之間。插疏其勝。余做焉。猶監學月之同一拙工夫也。

秀堅重識

北總詩誌一名北總事

北總 清宮秀堅著

垂州所傳逸事及地名等。分疏各首下。間雖正史所載者。亦記以備遺忘。

地占八州函嶺東。刀江曲折貫其中。平原雖恨雲烟乏。澤國堪誇鰕菜豐。

北總疆域。在本邦極東。地勢平衍。水脉縱橫。絕無峰巒之可覽觀。特魚鰕饒裕。不讓他州。

府址看來勢壯哉。王家遺業自雄恢。溶々太井南歸水。也有雲帆向北回。以下寫餘郡

國府址在國府臺村。孤邱巍然。四周下低。西面帶太

井川。洵足控制全州。○太井川。見更級日記東鑑等。射眼綢花向日摧。率然小挫氣何頽。勝機一決不容髮。恰值溟濛微雨來。

永祿中。北條氏康部下。太田美濃。叛降里見義弘。出陣國府臺。氏康自將討之。義弘援美濃。氏康與子氏政。陣太井河西。義弘佯退誘之。氏康部下遠山直景。富永政家等乘之。義弘反擊。直景。政家等戰沒。氏政奮曰。前敗以我兵在西。面日不能仰視也。今既過未陣。彼此相反。時不可失。父子分爲二軍。前後襲義弘。會微雨溟濛。義弘不覺。大敗。氏康獲義弘孫弘次。及

其驍將數十人。斬首五千三百餘級云。風飄楓葉。繼橋寒。碎錦爛斑。委碧灘。不說龍田紅緇水。做他手女口脂看。

其間弘法精舍。庭有老楓。詞人所豎說也。磴下細流。架畧約云。是所謂繼橋。其傍有手兒奈女祠。事見萬葉集高橋蟲磨。山部赤人等歌。

德輝元自足文。讀借當年七寶光。殘礎猶存國分寺。那邊護國四天王。

國分寺。亦號金光明寺。在國分村。庭前有巨石數十。相傳天平時舊礎。按續日本紀。天平十三年三月。每

國僧寺施封五十戶。水田十町。必令有二十僧。名金光明四天王護國之寺。

寸地何須與水爭。可憐泛濫不聊生。誰教太井河流下。恢拓隄防恣意行。

利根河故道。會隔田川。開府以來。導入中川。後又導合大井河。漸東漸狹。又開宿下有木棚壅水。是以全流過半。奔總常二州。而下流水害。不可舉言。按東鑑曰。下河邊莊隄壞。使清久保久修築之。則刀水爲患。從古然。○下河邊莊。謂今武藏國葛飾郡北方。俯仰古今唯獨吁。七分天下付浮屠。頑然一片銅牌子。

想見天平三寶奴。

小松川村善照寺。國分尼寺之遺址。土中出銅牌。幅三寸許。豎尺二寸。鐫天平寶字四年六月云々。寺號善照。蓋當時國分尼寺之祖名全照。全善音訛。余所見本州金石。以是爲最古。

鐵椎欲挫祖龍威。鹽面新遭諸葛誅。倡義長傳平等院。英靈空吊舊辰埒。

古河城中。有源賴政墓碑。題故賴政墓。嘉元三年乙巳仲春云々。十數字。其地稱立埒。又賴政郭。蓋其建石距賴政死後百餘年矣。按永享記。下河邊清恆納

賴政首於笈。佯爲山伏。歸于下總。瘞古河東南辰埒。然則所傳亦久矣。山槐記。盛衰記等。並云。下河邊清恆匿賴政首於平等院床下。平家搜取之。不記其所。瘞尊卑分脉曰。美濃山縣那蓮華寺有賴政墓。常陸國誌曰。在河內郡龍ヶ崎。左倉風土記曰。在印播郡結緣寺村。今從碑文永享記。斷爲古河立崎村。辰龍邦訓通。○龍ヶ崎。則邦訓龍。立通之誤。結緣寺。則埋分骨或遺器。所謂結緣寺村可推。而千葉常胤存于日胤之後。稱圓城寺。則以賴政之死爲倡義。常胤厚誼可想。結緣寺則爲賴政迫福可知也。○佐倉地方有城村。圓城寺

在此。蓋爲日胤建也。請將爵祿換民憂。循吏操心獨出儔。能啓無前錄。府業總憑多士布謀猷。

下河邊莊。當時下河邊行平之采邑也。行平嘗從源賴朝詣鶴岡祠。有左中太常澄者。以賴朝爲舊主讎。謀刺之。行平見而異之。即擒以獻。賴朝曰。今日之功。我賞卿以一事。聽其所請。行平曰。臣邑貢馬。百姓甚苦。冀免之。賴朝偉之。因給下文下總貢馬別當所。獨

不見青砥只夕陽。獨披荆棘覓遺莊。村童也說滑川事。

一點松明千古光。

青戶村相傳青砥藤綱食邑。太平記。北條九代記等書曰。青砥藤綱伊豆人。出於大場近鄉。先世食上總國青砥莊。傳至藤綱。據此則青砥應在上總。而房總志料曰。上總無青砥莊。今按上總。蓋下總訛。上下誤文。往往有之。

妙齡英氣有誰當。草賊豈知源九郎。一片寒光中。戶月依依猶照舊村莊。

中戶地方。稱深栖鄉。蓋深栖賴重居址矣。按盛衰記云。承安四年。源義經抵下總。倚賴重。時會賴重家有

盜竊馬。義經赤手縛之。又群盜入民家。義經赴之。立斬四人。賴重憚平族聞之。固戒義經。々々乃赴奥州。復離心志一朝成。再仰半天星月明。可惜兩杉蒼風夢。將來不見古河清。

寶德中。古河成氏。與其臣結城成朝等。謀誅管領上杉憲忠。蓋以爲父持氏爲憲忠父憲實所迫死。報之憲忠。且欲假之取威以復父祖故業。然上杉族強盛。不能守鎌倉。去居古河。稱古河公方。會北條氏起。竟不得志。○星月夜鎌倉冠辭。空慕芳山失路人。飄零再浣馬蹄塵。遺衣長托荒村裏。

五

一、榊餘香野寺春。

中田驛。光了寺。藏稱靜女舞衣者。其墓在伊坂村。蓋靜女事蹟。傳言紛々不歸一。按漫遊文章。陸奥針生村。有靜女墓。不知孰是。

亭々片碣在荒村。老木蕭森畫亦昏。稽首爲薰香一瓣。傾將雙淚弔冤魂。

大堤村。鮭延寺。有熊澤蕃山夫妻墓。

防曲周遮阻阨川。關譏不算往來船。誰知東海魚鰕富。却執西州豐歉權。

關宿城。跨新利根川。其地設關譏。舟船來往。城中商

賈多鱉魚粕。本州物產。輸於關西者。此物爲最。當初神算典。型存海國。不須鹽政煩。鹹氣大都無厚薄。精粗應就水沙論。

行德夷鹽。其來久矣。天正開府。大增鹽戶。以備軍儲。或云。鹽之精粗。在沙與薪。而不在海潮之淡鹹。十里靡蕪。幾々芳。輕籠瑞靄。華山陽。憐他放牧當年趾。即是方今大閱場。

金作村。有大君駐駕趾。寬政中所構云。平原漢々古猶今。南自東。金北小金。一路涼風千葉野。秋花無數付蟲吟。以下千葉郡

六

千葉野歌。見萬葉集。亦本州勝區。

故城園繞萬株松。全國七分歸舊封。斐敬當初進規畫。贊侯遲暮更溫恭。

源右將奠府鎌倉。千葉常胤所建議。常胤兄孫繁榮。能全晚節。自鎌倉氏元曆比。至天正。葛飾郡以下利根川以南。七郡則多千葉氏所管。結城猿島豐田。田

未分利根川以北三郡。則多屬結城氏。是當時大勢。草沒荒墟。絕往還。遺糧時現野田間。海潮空弔當年夢。落日秋風猪鼻山。

千葉氏城址。在千葉猪鼻山。岡阜斗絕。臨海要地也。

其地田隴間。時出燒米。堅硬如石。蓋千葉氏時遺糧。兵火餘燼云。

漁市蟹村灣又灣。夕陽明滅。水煙間。回頭指點冥鴻外。雲裡雙螺是豆山。

登戶海。

久矣坎離爲鬭爭。燒箕煮豆太冤生。從來不解阿哥意。漫剪同根鬻敵情。

生實舊作小弓。國語通。有小弓義明館址。義明古河高基弟。得罪父政氏。奔陸奥。大永五年。上總武田豐三。迎而爲主。擊小弓原友幸。陷之。義明徙居焉。里見

七

義弘。及房總將士多屬之。天文七年十月。義明出陣。國府臺。與北條氏綱。及其子氏康戰。義明攻陷四近。威名頗顯赫。高基忌之。諭北條氏綱擊之。氏綱恐其漸強大難制。急赴剪滅。

驚駕遠巡東海陸。威加草木盡風靡。謂爲平聲印波湖上留連址。遺愛猶存鳥見祠。以下印

常陸風土記曰。大足日子天皇。登坐。下總國印波鳥見邸。留連遙望。顧東曰。海即青波浩汗。陸是丹霞空濛。國在其中。今小林村有鳥見祠。村臨刀江。地勢高爽。蓋景行天皇經過故址。而人無知爲何址者。

不愧程嬰存趙孤。苦辛支得主家危。名門奕葉螽斯族。獨有胤安稱丈夫。

岩戶胤安。千葉庶族也。仕于白井祐胤。正和中。祐胤卒。嗣子竹若僅三歲。志津胤氏利其幼弱。有篡奪心。陰謀害之。胤安覺之。竊負竹若至鎌倉。托之建長寺。胤氏怒攻岩戶城。胤安苦戰死之。竹若既長。改名與胤。誅胤氏。爲胤安建寺修冥福。今西福寺是也。云。○

坤阿辰者。與胤安同謀。被擒殺云。

鳥羽之椎白井樟。偶然擗樞閱星霜。可憐千載全夭壽。不似春花開落忙。

八

鳥羽地有老椎。魁岸扶疎。與白井大樟爲伯仲。共千年外之物。

西兵氣勢壓東陸。卓立將門山上旗。四十八城降同日。也無一箇是男兒。

天正十八年。豐臣太閤陷小田原。遷東照公之封於關東。東照公遣使者徇二總房常。七月十一日。使者到櫻城。二總房常之地。屬小田原者。所在四十八城。皆降。先是。地方士人相共期與西村血戰。至此無一人戰者。○櫻城舊治在本佐倉將門山。

西籍茫洋無朕垠。看來足破刻舟論。地中或有偉材伏。

山腹時看貝殼存。

天明中。官命鑿印波湖。湖南高臺地中。至深五丈許。多出巨材。土人剝作白。或作基局。今現存焉。○龜成地方山腹。螺蚌殼紛然。西洋說所謂太古洪水。桑滄變遷。蓋此類矣。天地間事。自有不可以目前常理論者也。

禹鑿猶因。餘故資。鄭渠。何識秦強基。五侯工役成何事。不是荆公梁滌爲。雲渠雨卷。衡漳功就。鄴旁。鑿稻梁。只恨江湖間處少。煙波何處覓嚴光。

九

湖水疏通。自下井新田。至檢見川。凡四里許。

萬鱗成隊。濠梁游。魚樂。噲。噲。意自悠。笑擬崑崙星宿海。旋渦無數。遊中流。

印波湖中。吉高安食等下。多有噴水穴。土人謂之鱷魚穴。以秋冬之交。鱷魚集於此也。漁人候魚集。投網打之。一舉獲萬鱗。

朱家俠氣儘堪憐。不是尋常岳政流。墓木風寒當日恨。憐他赤族爲人謀。

木內宗吾。公津村人也。寬永中。以田賦事。爲衆奉訴。狀驚大駕。事允。然以大不敬。承應二年八月四日。其

鎮主處之礫科。先殺其子。次刺宗吾。宗吾在礫柱上。晚日。吾必報怨。後屢爲祟。果如其言。墓在臺方村。就地祠。在將門山。稱口宮。每歲八月四日。有祭薦。今猶香華絡繹云。

人安爾我盡裸程。六鷁退飛時有聲。千驪休誇齊景富。何如白里萬漁盛。以下匪菱郡

自銚子犬吠鼻。至上總大東崎。今里法凡十六七里。而謂之九十九里。是古令制五町爲一里之遺也。古令法五町則吳服尺。所謂大尺。俗稱六町。則曲尺。所謂小尺。其實猶同。是今里法十六里半。合古九十九

十

里。猶錄倉海邊一里強之地。而謂之七里濱也。○九

十九里浦。百里而減一里。故謎語或作白里。

風、簑、獨、速、雪、來、天、剗、地、田、疇、白、砂、然、行、客、不、迷、二、絕、路、一、條、界、破、栗、山、川。

栗山川。發源於香取。各所細水。合流至上總蓮沼村。入海。

村名猶記舊屯倉。地勢隆高控海疆。萬古滄桑人世變。狹邪樓下繫輕航。以下海上都

三宅村。屯倉村轉。蓋上世屯倉故址。其傍有松岸村。々有妓樓。

古史曾傳菟上名。當時國造鎮邊城。海天日落。風全死。時看鵬帆雲裏行。

舊事記曰。應神天皇世。以上海上國造同祖孫久都伎直。爲下海上國造。○海上古事記作菟上。

金麾拋却送桑榆。一臥邊陲儻石無。瀝々檐瓢殘夢覺。休論錢馬絕塵驅。

慶長中。飯沼芝宿之地。有隱者曰總歸居士。倚樹結廬。常掛一瓢於簷下。受鄉人之餽。以充旦夕。日誦法華經。齡七旬餘。其十六年。烈祖放鷹於河越。新莊直賴從焉。語次謂直賴曰。聞下總海上有隱者。意彼玉

十一

好氏族。往年卿父直昌。戰死于攝津江口。卿當時年幼。不知其詳。彼必詳知之。卿盍往問之。直賴拜命。往海上。物色之。因問江口戰狀。居士果語其顛末。及直昌戰死之事。直賴潸然流涕曰。是吾父也。居士驚惋久之。直賴又問曰。聞爾時有把金麾指揮者。其人爲誰。曰。是我也。而終不告其姓名。○圓福寺有墓碣。題早器居士。山城人。文祿五年。逆修十數字。文祿五年。距慶長十六年。在十六年前。是預建之年也。○總歸早器異字。然古昔記載文字。音近假借。不足怪也。○或書云。總歸龍川一益也。

古色沁肌絲爛斑。郎當千載閱塵寰。還思清見當年事。驛路鈴聲夜過山。

圓福寺藏驛路鈴一口。不知何緣故。

舟楫操成意匠新。恢々巨網泣潛鱗。何知注子三千戶。漁市開於木國人。

貞享中。紀伊人來銚子。創八朶船操網。自是土人始知洋上漁魚。外川飯貝根等地。魚戶繁盛。歲增加數百戶云。

潮勢過流河勢遲。年年淤塞作陂池。誰治河患寬民隱。禹蹟九河是我師。

十二

常陸鹿島郡。有稱日川村。蓋新川之轉。父老云。往古入海故道。

曾將受妾付馮夷。溟海潛師征遠陲。駭浪掀天珠浦險。猶思萬里掛帆時。

安房有太玉祠。上總有玉前祠。本州下長井村。亦有玉崎祠。傳言日本武尊東征橫絕此浦。日本紀有尊渡玉浦之事。玉浦者。蓋房總邊海。古時之總稱也。

首夏鉛錘資抵珠。秋風不說四腮鱸。豈圖海濱魚鰕市。潑刺香魚上酒廚。

銚子海邊有小流。土人稱田尻川。又磯見川。產香魚。

亦本州一奇而人少知者。

懸厓瀉出一條泉。驚見長虹掛半天。更聽涓々鳴碎玉。不知雌霓在何邊。

岩井村有雌雄二瀑。而雌則荆棘陰翳。不得見其狀。

萬世不磨齋主名。神靈威德溢東瀛。鄉人芻馬闕郊外。鄉俗年年擬點兵。以下香取郡

香取地方。每歲夏月。家作芻馬芻人。送之野外。揚言

香取鹿島軍勝。蓋上世點兵之遺俗。

萬頃涵天香取湖。勝區千載占東隅。女兒也說夏衣什。夜々秋風吹葦蒲。

十三

香取海。見人麻呂歌。加茂真淵以爲本州地。夏衣歌。

藤原定家作。載續千載集。尤膾炙人口。

大結高津舊地存。乃知牧政有淵源。枯來養馬趙家事。說與仁人仔細論。

延喜式。馬牛牧條中。有高津。大結等馬牧。高津。蓋千葉郡高津村。大結。蓋岡田郡大生村。說見于舊事考今香取

郡有油田。矢作等牧地。其他內野。高野。柳澤。取香。小間古等。在埴生。印播之間。延豆上總地。以上七牧。謂之佐倉牧。中野。上中下高田臺。印西。在葛飾。印播。以上五牧。謂之小金牧。

蕭寺猶餘勅使門。蕩然無復古編存。長生惟有喬杉在。欲問當年默不言。

吉岡大慈恩寺。有勅使門。相傳往古香取宮例幣使。以此寺爲旅館。寺前有老杉一株。大數十圍。呼香取杉。蓋當時標樹偶存者。

狡謀欺世幸逃誅。倭佛捨田原是愚。往迹銷沉何用說。厭看遺臭石浮圖。

曆應中。足利直義。每國建塔婆一基。曰安國寺。慈恩寺亦在其一。寺藏直義寄田券數通。可徵。下總當時係足利尊氏管國。

十四

冕服匆匆代至尊。尙思崔瑗雅望存。披荆來弔墳三尺。兒女猶呼小御門。字恭雅

名古屋村有藤原文貞公墓。土人稱第六天。元弘之役。笠置城陷。平高時執後醍醐帝近侍諸公卿。流之遠國。公配下總。寓于千葉貞胤。尋薨。實元弘二年十月也。初公受命代帝。登于叡山。募繼徒。事不成而去。○名古屋千葉庶族大須賀氏所據。蓋貞胤實公於此。而使大須賀氏看護也。○名古屋有稱小御門地。國命潛移不可收。季孫於魯亦同流。誰憐享德無窮恨。東善寺前土一杯。

千葉胤直墓。在寺作村東漸寺。胤直家宰原胤房納古河成氏囑。勸胤直與上杉氏絕。胤直不聽。胤房愠之。密導成氏兵。襲千葉城。胤直奔多古。其子胤宣奔志摩。享德四年八月多古志摩并陷。胤直父子自殺于土橋東善寺中阿彌陀堂。其臣椎名胤家以下數十人死之。土橋今名寺作。鎌倉大草紙作東覺寺。蓋善寺體訛。善音近之移。胤將筆管換刀鎗。歷世詞壇。獨擅場。自有古今傳授在。從教故國橋莊荒。

東胤緣千葉常胤第六子。分食東莊。因稱東氏。子重胤善和歌。爲源實朝所親昵。子孫相嗣。專修其業。至

十五

常緣。遂爲中古歌學祖。所謂古今傳授。始於常緣。○東氏世在京。因又食美濃郡上地。○東莊又稱橋莊。見于圓福寺文書。和名抄橋川。香取郡地名。東山茶宴薄軍功。勇退能存國士風。播得天真正傳術。經神餘烈仲無窮。

飯笹家直。稱伊賀號。長威飯笹人也。以擊劍顯。嘗祈香取神。其技大進。因以神道名其術。後世稱劍技流派者。大抵發源神道流。相傳長威嘗仕足利義政。未幾歸隱。長享中卒。墓在香取不斷所。死稱卒。五位以上人也。而今據神題。不改。宜斟酌。

利害關心。各敗圖。難堪強敵。恣吞屠。支吾獨有老莫月。一死能存六尺孤。

伊能朝辰。大須賀氏之庶族也。祝髮稱莫月。慷慨有志。永祿天正之際。庇國分氏遺孤。與上總正木正康接戰。不克自刃於矢作城。城址在國分氏孤子獨免。大崎。時正康勢威加香取。鹿島地方。詳見房總治亂記。名門久矣。負朝恩。細故翻爲大隙。根前是求官後爭獲。一門兩度擾中原。

長元中。平忠常陪隸某。與平忠度奴某爭獲鹿。忠常聞之。大怒。因有隙。遂據椿湖構城。反報狎至。朝廷遣

十六

檢非違使平直方。中原成道等討之。不克。又遣源賴信討之。忠常乃出降。事初平。先是。平將門冀爲檢非違使。不得謀反。伏誅。皆平高望之後。○今小南村。忠常所構城址云。道鏡高懸。冷似水。却嫌枯淡。荀蔬僧。一槌打破。椿湖凍。機老參禪。超一乘。

僧鐵牛。因幡人也。親炙隱元禪師。爲槩門巨擘。寬文中。開壘椿湖。鐵牛與有力焉云。其墓在小南福聚寺。○機老鐵牛別名。

盛運雅照飽驢虞。花亭錄府固區々。寒鄉猶費千鍾粟。

况又西來百萬壺。

東鑑曰。建長四年九月。奉行人等。檢禁錄倉中民家所註酒壺三萬七千二百七十四口。吾佐原一村釀酒。歲一萬石餘。錄倉時。一壺不詳其容幾斗。而以人力量之。大抵一人之所負擔。不過今一糟之重也。因以古一壺擬今一糟。約畧相同。○西州酒輸江府。歲一百萬槽云。

夜風乾峭。短蓬霜。月落長天。入水光。萬網壓流松。火信早看潑刺上輕航。

松崎下。沿江十四村。入小寒節後五六日。村民拂曉

十七

打鯉魚。大獲者滿船。少者猶數十頭。謂之十四川漁。不厭古墳荆棘多。荒村僻落又山阿。須知卅日圍城苦。展作千秋擊壤歌。

香取郡松戶村大法寺。有原河孫平墓。孫平鳥居長源公家臣。伏見殉節之一人也。○森戶當時鳥居家封內地。

斷代天正一切灰。齊東野語事悠哉。休論成氏來寓否。確爾村名御所臺。

御所臺村。係古河成氏寄寓地。土人所記紛然。以訛傳訛。不足取信。

累葉名門。理骨場。豐碑沒字。足悲傷。千秋遺恨。荒萊裏空。弔詩人。一辨香。

寺作村東禪寺。有千葉胤直。及其家臣圓城寺某等七人墓碑。原胤茂雖爲主建。五輪巨石。而碑面不刻一字。當時之制然邪。將胤茂自愧之。故沒其迹乎。亦未可知也。

宿世因緣暗自驚。忽然觀世歎浮生。家臣能忍屠君腹。獨有山僧不耐情。

享德四年八月。僧中納言房。時在東漸寺。觀千葉胤直以下數人死。不堪悲慕之情。潛然賦歌。自投於栗

十八

山川。事見于錄倉大草紙。雲衲共栖天目山。君心有愧士無顏。憐他一死全公義。不做九年面壁頑。

僧麟岳。武田氏族也。曾住與倉村大龍寺。聞勝賴屢敗。歸省訪之。天正十年三月十一日。竟殉于天目山。松妍水綠白沙明。宛似關西舞子汀。勝迹曾無人道出。一篇題咏答山靈。

須賀山鹿戶地方。有稱狐敷原。々皆白沙。絕無寸草。而松樹嬌媚。刀水紺碧。亦本州一勝區。

文章於道九牛毛。俯仰殊思德義高。風采人稱小藤樹。

鄉評不是過情褒。

竹憲先生。姓窪木。名清淵。津宮村人也。以德行聞。文
化中。木府國老中山某。引見問治。其郡宰小宮山昌
秀。設鄉校於南郡。延先生教導子弟。○先生風采。與
中江藤樹相似云。

眇視賊矣。固偶然。借靈平賊事空傳。金瑤銅瓦究奇巧。
都爲俳優作率先。以下重

成田有不動像。相傳爲藤原秀鄉所持。秀鄉祈靈得
討平賊云。○百年以來。香華薰赫。海內所不多見。

一雙十六阿羅漢。筆墨生靈奪化工。慧眼射人光奕々。

十九

傳神阿堵寸圖中。

飯岡永福寺。有十六羅漢圖。相傳兆殿司所畫。與吉
岡慈恩寺所藏圖相伯仲。○慈恩寺所藏。五代馬遠
筆云。

相野當年貢桔梗。去據今證古不容疑。虞初一自傳虛
賦。遂錯荒墳說豎姬。以下相

米野井村。有稱平將門妾桔梗墓者。按延喜式雜藥
條內。載下總貢桔梗事。而今藥舖桔梗上好者。稱相
馬。後小說家附會以爲將門妾名云。○此地桔梗。今
猶不著花。○大抵藥種。用根者去花。而實其根。不特

桔梗。

張皇漫說七將門。鐵額銅頭是妄言。俚語荒唐堪一笑。
紛紛休詫偶人存。

岡村延命寺。有土偶土馬。土人云。將門以妖術驅使
土偶。此所謂七人武者之遺。按將門多兄弟。蓋兄弟
同扮裝而出戰。故有七人武者之稱也。後遂謬傳以
爲驅使土偶。或云。是將門之葬具。此亦非。夫將門反
逆伏誅。何得禮葬。蓋古塚中所出。上世貴族代殉者。
垂仁天皇使群臣議。皇后葬儀。野見宿禰曰。夫山陵
壅埋生人。誠不仁也。非所以示後世也。乃召出雲土

二十

部百人。自督之。以埴作人馬及諸物象獻焉。帝嘉之。

下詔以爲定制。厚賞野見宿禰。

忠、鯁、平、生、持、虎、鬚、豐、公、勢、焰、也、如、無、屈、盤、老、樹、千、年、絲、
即是傳神小照圖。

本多作左衛門重次墓。在井野村。宅址亦現存。蓋井
野及青柳等地。係其采邑。則老此地也。可知舊史以
爲上總誤。○墓表有雙松。高百尺許。崑崙如畫。
已把浮生付槁灰。晚花何復對人開。清標一樹存芳躅。
來見寺中恩賜梅。

僧日山。少時嘗在濱松。得眷寵於烈祖。暮年移住布

川賴繼寺。慶長中。台駕駐布川。館賴繼寺。日山拜謁。命使住江府。辭以繼流不堪市廛。於是賜梅一樹。賞其志操。今佛殿前梅是也。○賴繼寺爾後改來見寺云。

雲門下里固懸殊。燕石寶藏何太愚。若箇陳編兔園冊。家家認作照乘珠。

俗間有題東國戰記書。記應仁以後關東小戰。而經常二州事居多。原本一卷。多賀谷氏。岡見氏等遺臣。雖其所編錄云。後舌耕家。增多粉飾。成十數卷。卑陋猥雜。不足取信也。

二十一

難免續貂遭世嗤。輕粗舉動英雄窺。由來不解鄉人意。匹似鼻亭存彖祠。以下據島郡

岩井有國王祠。傳言祀平將門靈。即將門建偽都之地。或以爲相馬守谷地者誤。

薰天氣餘掩東陳。旬月盡收關八州。猶有同胞全去就。不輸武思避僞周。

將門之反。其弟將平諫曰。帝王之業。自有天命。非智力所可妄冀。將門不聽。後將門叙任其兄弟。獨無將平名。蓋不肯受僞命也。

南薰微動拂殘花。新綠初勻苗嫩芽。狹島近來欺菟道。

苗。裙。纖。手。摘。龍。牙。

近日關左。各所製茶。而猿島最多。就中邊田地殊出佳品云。

墨藩香流大塔宮。一麾收得魯陽功。展來忽覺除煩熱。真是當年芳野風。以下據田郡

水海道村松信氏。藏古旗一旒。題大塔宮御身方新田義貞旗下。長江馬守十六字。松信氏言馬守之後。當時有故改姓。○余觀之。時適盛夏。

運日行々花柳村。杖藜相訪故人門。何圖咫尺總州裏。有此天間至寶存。

二十一

大史網羅金石鐫。南山逸事瞭然傳。豈思奉勅正中語。却在元弘夢賚前。

水海道村秋葉氏。有稱楠公遺器鎮宅符者。原某親王家司某氏所藏。有故歸秋葉氏云。據識文正中元年云云語。則公倡義在元弘夢賚前。可以正國史之謬。想見當年疏導南。一條絹水綠拖藍。景雲偉績無人說。絮絮聽累女談。以下據田郡

續日本紀。神護景雲二年八月。自結城郡小島達常陸川曲。分疏毛野川。以先是本道問民苦使藤原海辨建議也。○鬼怒川累女事。小說家話柄。而世之所共知也。

不用投巫驚野翁。疏通灌溉兩全功。長令民庶饒粱稻。除却西門有此公。

井澤爲永。稱彌惣兵衛。紀伊人也。祿五百俵。享保中。奉命講水利。當時關東西灌溉開墾。概其建議云。○飯沼開墾。及小貝川灌田。亦係爲永所規畫。

日暮寒雲生遠愁。蕭然行李獨相求。推敲欲望柴門月。人道東林訪惠休。

飯沼弘經寺。稱壽龜精舍。寺主梅痴上人善詩。

一變輕神純武功。懸將播殖教東總。千秋天富桑麻利。所在由來祭舊宮。以下結城郡

二十二下

古語拾遺曰。天富命。率阿波齊部。來東土。教導麻穀之業。蓋與天日驚命俱焉。○結城地方。殊多驚祠。邈矣阿波齊部遷。神工開物幾千年。江河不廢源々澤。豔說當時穀木綿。

結城穀木之邦語。見古語拾遺。結城木綿爲世所稱。毛原陰濕盡榛荆。積鬱凝成砒石生。一笑多機老空外。却看圓首野狐精。

結城有僧源翁墓。源翁一號空外。嘗化度那須野狐崇。事膾炙人口。

陶工緻密費精神。亦見古人風氣淳。好注清泉試磨去。

香雲徐展墨池春。

矢畑村竹林中。有結城寺址。土中敗瓦布滿。其紋菊花。實有布理。收作硯材。能潑墨。

千葉結城連故墟。總原毛野跡紛如。春光滿路青々草。猶是當年席卷餘。

總地雖無大山脈。培塿岡阜連亘起伏。故地方土豪。割據故址。所在布滿。不堪枚舉。概曰千葉。曰結城。其詳不可得知也。

誓將一死爲郎君。政長杉家十萬軍。莫恨當年時命薄。裔孫占斷越山雲。

二十三

結城氏朝。朝光十一世之孫也。永享中。足利持氏子。春王。安王。避上杉憲實兵。匿于常陸。氏朝惑之。奉歸養于其城。足利義政大怒。命憲實遣上杉清方。率兵十萬圍結城。氏朝與部下原光義等。以一千人拒之。既而矢盡。開門祈清方營。餽關二時。交綏。氏朝知竟不可支。竊載二孤於女輿出之。清方覺而捕之。氏朝怒放火城中。復出戰。殆獲清方。々々逃避。氏朝遂十字割腹死。光義等亦死之。

斷碑敗壘一村々。甲古寧遐孝子門。茅棟依然人逝矣。庭苔尙覺異香存。

上山川有孝子。曰金六。家貧傭作。奉養父母。備極艱難。看者感動。人數勸娶妻。金六懼懈養。不肯。及母沒。不得已娶。時年四十六。其妻亦能事其舅。始終不變。事聞。寬政七年八月。官賜銀米若干。旌表門閭云。難遇中郎絕妙辭。口碑虛實幾遲疑。編成石室書堪托。敢道丹心在濟時。

余夙欲修本州地志。特苦援書乏。古河二志。佐倉風土記。香取私記等。寥寥單冊。不足飽枵腹也。

最爾關城一簡書。千秋披閱涕漣如。慨慷不減漢諸葛。惆悵勝他唐敬輿。

二十四
二十五

東面勤王獨歲寒。孤城守禦太艱難。賀蘭無意睢陽困。只作悠悠成敗看。

常陸關館村。是北畠親房防賊舊址。所謂關城是也。

其地勢雖八面受敵。亦足以支持。丁未之夏。採訪其

遺跡。不堪慷慨。不覺泣下。恭賦小詩。叙志。及今料理

詩囊。附記于此。關城書事。中山宿名曰當時或合。敘書。綴述此書。或然。說別在焉。

白旆掀空向會津。關西洶々又生秦。何知百里荒原裏。

獨有東風早識春。

小山驛

每篇出於實話。與情故詩。與紀事。皆疎々有風致。其聲韻不諧者。却覺有古趣。蓋亦作者自負處。
已酉花月初八日。觀於岩屋九里香園南軒下。
鹽谷世弘批許。

先鞭着眼費居諸。伏字解難科斗書。遺惠千秋誰識得。人間孰不仰甘諸。以下為節部

青木昆陽墓在馬加村。相傳有故建此地。碑面題甘諸先生之墓。按西來之品。在當時。甘諸為第一。辛酉以來。則以牛痘為救生良法。昆陽名敦書。字厚甫。武藏人。初唱洋學。洋學當時嚴禁。而有德公以其益於世。縱禁習焉。於是蘭化。磐水等輩出。而今則旺焉。嗚呼。時也哉。

松戶小金古驛區。隅田太井也要途。千秋事迹今如見。都鳥何知是海鬼。

二十六

更級日記。松里津。蓋松戶。而鏡瀨是小金。同書東鑑。隅田太井。二川今名同。○都鳥名義紛然。蓋今海鬼。而方今所見者是也。

葛東西共屬同鄉。總武判然。墨水長。不須考據費音語。

二州橋識二州疆。

葛西古屬下總。中古或屬武藏。各有古書足徵。而衆

訟不一。然以兩國橋為據。則為下總城必矣。

泥字休為論有無。勢津蘆荻異稱呼。三山知是寒川社。

茂侶三輪同一株。

相模國一宮村宮山地。有寒川神社。則千葉郡三山。

亦官山之省訓。且延喜式位次。寒川社次。香取。則二宮之稱相當。二宮社之爲寒川神社。必矣。○茂侶社。與三輪社同。又稱室社。室。茂侶。邦訓同。今三輪山村。三輪明神之爲茂侶社。可推。

逐次利根河道遷。古來南走入隅田。疏通不識何王代。轉倒本支。會絹川。

利根川入隅田川。是古道也。天正開府。避水害。新疏中川。使之東。尙以其害之不止。又導而會太井川。先是。開宿地方。疏常陸川。會絹川。而其歲月在何年也。不得詳之。

二十七

六百星霜老樹蟠。濤聲破夢旅衾寒。回頭當日存遺美。公議翻爲俗諺看。千葉郡

本朝俗諺志曰。千葉笑者。千葉家爲本郡守護時。部內吏人得失。每歲期日。使市人會談笑。其賢否。吏人慚之。往々改其行云。

韃韞洗岩波浪翻。總東盡處三崎村。特胎珠玉吾何識。依舊月光照海門。

三崎北絕極東。斷岸臨海最宜觀。月宜乎。鴨長明之有詠歌。歌見其家集。

經津主命策元功。副帥鳥船仍盡忠。當日共彰神德大。

可堪埋沒一歸空。以下香取郡

在昔經津主命。鳥船命。共爲佐命元勳。而經津主命者。其祠在香取。而鳥船命者。其祠無在。因憶大戶社。神崎社者。其荒魂祠。和魂祠。而今謂手力男命。面足惶根命者。謬傳也。所謂神崎社。神木ナンジャモンジャ者。識者謂是樟腦楠。果然。則爲石楠船之餘材。遺種也。必矣。兩社之祭祀。有船木神事。其事可推。且地勢川尻村無堤防。以前。回視熟考。則大戶則爲大津之訛。無疑。

與水爭。壚水怒深。其如衝突歲駁々。休言父老橫流害。

二十八

何識田園在水心。

香取郡沿利根川地。南北田園。皆古香取浦之泥沙淤塞。新成村落者。俗稱新島者是也。是以每歲水害相尋。不能如何之。

眸光一道釋總存。靈冊紛然獨自翻。當日如無明月記。何知此地是莊園。

橘莊當年爲藤原定家莊園。事見明月記。

椿湖壘柵一朝成。何怖雲屯鹿島兵。標葦當年是奇畧。畧在降心不在城。

長元中。平忠常據椿湖叛。兵勢頗旺。源賴信受命討。

之。出兵鹿島。其間隔大江。古稱毛野川。今下利根川是也。或云。溯上流。迂回攻之。費十餘日。賴信曰。聞此江有淺處。誰知之者。有一人標導之。餘衆繼之。忠常不知所爲。蒼皇出降。事見古本。今昔物語。

連漢透迤望不迷。南帆東去北帆西。愛看江綠沙明外。也有暗香停馬蹄。上。

香取郡濱賀山村。所謂菰敷原。南方有古墳。相傳正平中。僧聖尋葬此。土人謂之上人塚。聖尋上人。邦音近。或曰。僧意教墓。不知孰是。聖尋事跡。詳見大日本史。

二十九

足跡勤勞東又西。百聞一見愧無稽。卅年探古未知止。不是風流是夏畦。
西行竹杖府樓頓。希觀何慳金萬千。散盡家貲身作丐。猶乞和銅一古錢。
或誠泥古之癖。而作一話云々。與五雜俎所載文王之杖。夾谷之席同。洵吾輩之殷鑑。詩以記之。今及訂北總詩誌。有感附後。

正誤

- 第三葉裏五行目ノ(左倉)ハ(佐倉)ノ誤
- 同七行目ノ龍ヶ崎則ノ下(立崎)ノ二字ヲ脫ス
- 第八葉裏八行目ノ(西村)ハ(西將)ノ誤
- 第十葉裏五行目ノ(發)源於香取。各所細水。合流)ハ(發)源於香取郡各所。細水合流)ノ誤
- 第十二葉裏五行目ノ(本州)ハ(本郡)ノ誤
- 第十五葉裏五行目ノ(經神餘烈)ハ(帥靈餘烈)ノ誤
- 第十七葉裏四行目ノ(松戶村)ハ(森戶村)ノ誤
- 第十九葉裏六行目ノ(眇視跛免)ハ(眇視跛與)ノ誤且

- 欄外(天浦曰好笑々々)ノ評語ヲ脫セリ
- 第二十葉裏八行目ノ代殉者ノ下○ヲ脫ス
- 第廿三葉下裏三行目ノ(齋部)ハ(齋部)ノ誤
- 第廿四葉三行目欄外評茶村曰云々冷眼ノ下(看)字ヲ脫ス

明治九年十月十七日版權免許

明治十年七月出版

著者并出版人

千葉縣平民

清宮秀堅

下總國香取郡佐原村
二百三番地居住

東京日本橋通二丁目

稻田佐兵衛

發兌書肆

同橫山町三丁目

太田金右衛門

菊池晚香 著

瀛史百詠

明治三十九年（一九〇六）東京鉛排本

據明治三十九年（一九〇六）東京
鉛排本影印

瀛史百詠

瀛史百詠

瀛史百詠

瀛史百詠題詞

上下三千年。長短一百篇。語語驚人。句句感神。入燕許門。攀李杜壇。筆力可挽萬鈞。才氣將凌青雲。莫爲遊戲觀。須做傳贊看。茲題數言。以代序文。

祖宗以武顯。父祖以文鳴。欽君襲厥後。志業期大成。學問何該博。千古胸中明。文章何宏麗。咀華又含英。百篇詠瀛史。長短筆縱橫。風霜挾三長。論贊自衡平。思緒綵雲騫。詞鋒銀濤驚。昔賢難擅美。時俊孰能爭。

瀛史百詠

此是一小著。猶足振家聲。

甲辰三月

藍田殷野琢

瀛史百詠序

聖經之訓誡。不若史傳之勸懲。史傳之勸懲。不若詩賦之感興。蓋聖經深奧。難入庸耳。以爲陳言套語。措而不顧。史傳寫其人。叙其事。如目睹而身接。善惡報應必至。誰不勸而懲焉。至詩賦。則咨嗟詠歎以發之。

長短抑揚以誦之。使人不覺手舞足蹈。誰不感而興焉。況於詠史兼備史傳詩賦者乎。南紀菊池晚香著瀛史百詠。問序於余。余閱之。自神代至今世。神聖英豪文士才媛凡百事迹。隨感隨詠。出以樂府體。短節勁音。悠揚如褒。激越如刺。悽婉如怨。諷詠吟誦之間。使人感興勸懲不能自己。漢魏姑置之。將摩樂天西涯之壘。與山陽子玉並鑣馳逐也。往時晚香祖考溪琴先生。詠秦皇有句曰。萬里蓬萊舟未達。君王已上輜輶車。一時傳誦。余猶幼童。善其音調。嚶嚶相和吟

瀛史百詠

二

誦。既而讀史傳審其事。更知漢武以下歷代帝王惑神仙之害。進讀聖經傳說戒黷祀。仲尼不語怪力亂神。益信其旨深奧矣。嗚呼。是一首之詩耳。一神仙之事耳。猶能使余感興嚮學如此。況此編歷詠古今凡百事蹟。於感興青年嚮學之志。又勸懲世人之姦良。其益豈鮮少哉。是爲序。

明治癸卯秋

陪鶴老仙三島毅撰

瀛史百詠序

南紀海莊菊池翁。詩名高海內。余謂翁資性英豪。學識才幹。必有可見者。若詩其緒餘耳。而燕雁相違。竟不得叩其蘊。常以爲遺憾。頃其孫晚香來訪。余喜延之。敘寒暄外。先問翁之遺著存否。晚香曰。存。問其部類。曰。奏議建白上朝廷。及呈藩主者凡百篇。其他經史論說及雜著合八百卷。余拍案曰。翁果非一詩人也。既而晚香示自著瀛史百詠。索余評及序。其詩始于瑞穗國。終于詩星。其體倣古人詠史樂府。而歷朝

瀛史百詠

三

時事人物治亂盛衰。博采該舉。引典確實。文字簡鍊。如精金琢玉。見一斑。亦足以知其學識才幹之全豹矣。嗚呼。此祖而有此孫。可謂衣鉢不滅矣。余遇此孫。有接其祖之思。亦足以慰平素之遺憾矣。乃書所感於卷首。以爲序。

明治三十七年三月

南摩綱紀

瀛史百詠叙

或當而喝破。或奮臂疾呼。或寓規諷於隱微。或寄褒貶於幾微。時而轟雷掣電。震天撼地。時而長空一碧。皎月萬里。忽焉春風駘蕩。花舞鳥歌。忽焉青燐出沒。鬼氣襲人。是可以評吾菊池晚香所著瀛史百詠矣。晚香紀州人。南朝名將正觀公裔。而溪琴先生孫也。先生以氣節文章。著名天下。晚香夙受家學。又從同族三溪翁。修經史詩文。後遊慶應義塾。早稻田大學。外國語學校。攻法律經濟。兼及英德支那俗話。皆卒

瀛史百詠

四

其業。遂爲早稻田大學教授。說經講文。清韓生徒。亦從受教。歲閱其課文。至三萬六千餘篇。勤勉可知也。時來問詩文於余。余素惡近時詩家。多應酬唱和。少吐露胸臆。因作南朝詠史示之。晚香曰。僕亦有志於此。居數月。百詠之著成矣。蓋吾邦開闢殆且三千年。聖皇明主。賢宰智將。忠臣烈士。孝女貞婦。垂名竹帛。勒功金石者。不啻千百。而大奸巨猾。狡黠巧佞。嫉賢害能。素倫壞俗者。亦復不少。然世論未必無褒貶失當。毀譽誤實者也。晚香具超卓之識。揮奇峭之筆。抉

隱摘微。抵隙搏虛。擒縱予奪。變化不測。探英傑之心。奪奸兇之膽。古人之面目。恍現乎紙表矣。此篇一出。世之爲應酬俗套。咕咕自喜者。必知有所自警焉。使正觀公溪琴先生讀之。將拍掌呼快也。乃爲之序。

明治三十六年十一月

東京 依田百川撰時年七十一

瀛史百詠

五

瀛史百詠引

南紀之地。江山秀麗。多生偉人焉。祇園南海。曾以一夜百首顯。今也菊池晚香。著瀛史百詠。欲以追其蹤。木下順庵稱南海云。卮言甜似蜜。藻思湧如雲。余將移此以贈晚香也。

明治三十六年十一月 省軒龜谷行識

瀛史百詠序

廣瀨旭窓有句云。自恃排專誇詠史。字要湊合流詠調。此作者出於偶然耶。抑有所指摘耶。蓋恃排專似賴山陽。要湊合似野呂松廬。流詠調似中島子玉。子玉纖巧柔弱爲女郎詞。松廬字句冗漫。多雷同。不足以爲法度。獨山陽則不然。史學之達。詩律之細。格調之奇。殆逼真李西涯尤展成。尙且不免恃排專之誹詠史之難。可以知矣。昔白香山作新樂府。輒近王新城。有詠史小樂府。音韻優揚。命意寬厚。而暗藏議論。

瀛史百詠

六

規世諷時。得漢魏遺意。非淺薄詩人模倣刻畫所能企及也。南紀菊池仲幹。博洽多識。尤好詩。頃擬漢魏樂府。著瀛史百詠一卷。上自瑞穗國天門。下以至近世英雄豪傑。奇才異能之士。網羅靡遺。寓勸誡於勁韻。含風刺乎短節。音韻優揚。離奇突兀。欲駕松廬子玉而攀香山新城。何其才之偉也。夫我邦天地精靈氣所鍾。忠臣孝子偉人傑士。不爲不多。而其事蹟不甚傳于海外者。由詠史之便於吟誦者鮮耳。今也西洋貿易歲昌。日清交通日密。此是等人。因其詠史。以

博名海外。不亦文明餘澤乎。仲幹齡未滿知命。已有百詠。若更躋香山新城之壽。則未知其累幾百首矣。余少壯不自揣。嘗有此志。而才劣學陋。氣不能充其志。今者年垂七十。萎荅自甘。百事無爲。豈能騰頰舌以論古今詠史之得失哉。然平素讀香山新城李西涯及山陽樂府。愛其短節遒勁而暗藏議論。竊有鑒其世焉。詠史譬之美人。衛后之鬢髮。飛燕之輕態。人偏其所好。則漢魏之蒼莽。六朝之富麗。唐宋元明之肥瘦濃淡。婀娜窈窕。吾誰之適從。其爲香山爲新城。

瀛史百詠

七

爲李西涯尤展成。亦各從其所好。何必一家之拘拘。要在本事外。不贅他辭。持論諷世已。旭窓又曰。方今大東仰文明。較之古昔幾倍蓰。嗚呼。是仲幹之所以壓倒松廬諸士也歟。

明治三十六年歲在癸卯十月上浣

恕軒學人信夫榮文則撰

瀛史百詠序

詩文之與山水相待也尙矣。畿甸山水以南紀爲最。南紀山水最推那智瀑與九里峽。士之生其間者。豈無詞華壯麗與之相稱者邪。其在前有若祇南海。其在後有若菊池溪琴野呂松廬等。皆善詩。常發揮崑洋。以雄視一代。而今以強壯之年。崛起南方者。爲溪琴翁孫晚香。余與晚香交有年。晚香才思英發。詞翰如流。頃著瀛史百詠。奇姿橫生。往々出新意。殆將與山水爭勝以接踵前人。嗚呼山水之振起人文如此。

瀛史百詠

八

而人文之闡揚山水亦如彼。謂之詩文與山水相待。不其然乎。抑晚香不獨善詩與文。兼通歐洲學術。且富春秋。他日載此才筆。歷游海外。拔古露羅土長峽之奇。攬內耶雅羅大瀑之勝。則其壯觀必將有壓前人而上焉者。吾企而望之。

明治三十六年龍集癸卯十月上浣

鳳洲土屋弘伯毅撰

瀛史百詠序

本朝詠史。自讓子成子玉兩家擅場。然子成粗樸處。仍與茶陵同病。其所謂理語近僧。未免尤而效之。子玉則力闢生面。淪入幽僻一路。竟近鐵崖之妖矣。菊池君晚香。南紀著姓。爲溪琴先生之後。所作瀛史百詠。依賴鳥二家體。而別出心裁。卓詭蒼辣。節短勢勁。純用本事。組織成文。而其議論足以定史案者。往往令人於語言文字外領之。非家學淵源有自。而能若是乎。王弇州稱西涯奇旨剗造。名語疊出。自是天地

瀛史百詠

九

間一種文字。田竹田稱山陽。腕靈舌妙。意暢神酣。有百億萬字亦不可包盡者。倘就其長處論之。晚香寔能奄有前賢。雖橫視一代可也。

甲辰暮春

槐南森大來識

瀛史百詠凡例

一詩家競技。或線香一炷。草百絕。或一夜賦百律。世稱神才。然唐賢有詩曰。兩句三年得。一吟雙淚流。知音如不賞。歸臥故山秋。余獨欽仰之。

一近時詩風。趁綺靡。無復感慨激越。鼓舞士氣者。余竊歎之。

一此書大旨。在忠勇義烈。間插仙人美姬。亦萬緣點紅之意耳。

一漢詩朗吟之法。有二。一遵支那音。一據日本語。前

瀛史百詠

十

者或似古音。然仄聲大變。後者音訓相交。全不關平仄。然自有一種節奏。今賦漢詩。唯從古音。不通二法。則難於朗吟。余致三思焉。

一諸家評語。過獎不敢當。然評語發揮言外之意。可以充註釋。因揭之。

一本朝古來事蹟。可入詩者甚多。寥寥百篇。何能括之。余期隨感隨賦。上數千首。前程遼遠。今纔發軔。

明治三十九年秋 晚香散史菊池武貞識

瀛史百詠目錄

- 第一 瑞穗國 (大日本)
第二 天門 (天巖戸)
第三 金鷄 (神武天皇)
第四 一枝橘 (田道間守)
第五 白鳥 (日本武尊)
第六 舟師 (神功皇后)
第七 天孫 (應阪忍熊二王)
第八 菟水 (稚郎子)

瀛史百詠

十一

- 第九 功滿王 (蘇秦後裔)
第十 名媛 (衣通姫)
第十一 珠纓 (大草香皇子)
第十二 蓬萊 (浦島子)
第十三 驪珠 (億計弘計二王)
第十四 蹴鞠 (天智天皇)
第十五 風從虎 (天武天皇)
第十六 老仙 (役小角)
第十七 國祚久 (和氣清麻呂)

- 第十八 都鳥 (在原業平)
第十九 御衣 (菅原道真)
第二十 伯牙 (蟬丸)
第二十一 毒蠅 (藤原秀郷)
第二十二 木蘭 (清少納言)
第二十三 日本紀 (紫式部)
第二十四 赤符 (源賴義)
第二十五 龍笙 (足柄山)
第二十六 八甲 (源為義)

十二

- 第二十七 養由基 (源為朝)
第二十八 青餞 (源義朝諸弟)
第二十九 奔電 (源義平)
第三十 老僧 (俊寛)
第三十一 壯漢 (文覺)
第三十二 嵯峨 (小督局)
第三十三 三姬 (祇王祇女佛姬)
第三十四 入道來 (平清盛)
第三十五 進退窮 (平重盛)

瀛史百詠

十三

第三十六	遺吟	(平忠度)
第三十七	怪禽	(菖蒲姬)
第三十八	平等院	(源賴政)
第三十九	粟津	(源義仲巴女)
第四十	李將軍	(佐佐木秀義父子)
第四十一	狐埵	(梶原景季)
第四十二	金扇	(那須宗高)
第四十三	銀貓	(西行)
第四十四	鹿四足	(鵜越)
第四十五	逆櫓	(屋島)
第四十六	鶴岡	(靜女)
第四十七	白羽	(源賴朝)
第四十八	白旆	(源實朝)
第四十九	毒蟲	(大江廣元)
第五十	神風	(元寇)
第五十一	緇衣	(北條氏)
第五十二	妖僧	(鎌倉)
第五十三	長劍	(土岐賴員)

瀛史百詠

十四

第五十四	錦旗	(村上義光)
第五十五	行宮	(笠置山)
第五十六	范蠡	(見島高德)
第五十七	龍馬	(藤原藤房)
第五十八	正統紀	(北畠親房)
第五十九	孝子	(日野阿新)
第六十	藤嶋	(新田義貞)
第六十一	美人	(勾當內侍)
第六十二	花隊	(新田義宗)
第六十三	湊川	(楠正成)
第六十四	四條畷	(楠正行)
第六十五	忠臣	(楠正儀)
第六十六	莫耶	(楠光正)
第六十七	龍種	(南朝二皇子)
第六十八	天誅	(足利尊氏)
第六十九	猿樂	(足利義教赤松滿祐)
第七十	茶甌	(銀閣寺)
第七十一	笑嶽	(桶峽)

瀛史百詠

- 第七十二 新月 (山中幸盛)
第七十三 孤城 (高松)
第七十四 桔梗 (本能寺)
第七十五 二龍 (明智光春)
第七十六 夜叉 (柴田勝家小谷局)
第七十七 金烏 (豐臣秀吉)
第七十八 葵花 (徳川信康)
第七十九 玉殿 (結城秀康)
第八十 快馬 (南龍公)

十五

- 第八十一 白扇 (直江兼續)
第八十二 凶豎 (石田三成)
第八十三 寶兜 (木村重成)
第八十四 孤島 (浮田秀家)
第八十五 高材 (山田長政)
第八十六 龍笛 (太宰春臺)
第八十七 山鬼 (伊能忠敬)
第八十八 鬼燈 (平賀梅溪)
第八十九 神人 (本居宣長)

瀛史百詠

- 第九十 勤王 (頼山陽)
第九十一 清流 (橋本左内)
第九十二 正氣 (吉田松陰)
第九十三 烈士 (近藤勇)
第九十四 城山 (西郷隆盛)
第九十五 雄心 (北白川親王)
第九十六 丹血 (陸奥宗光)
第九十七 旅順 (廣瀬中佐)
第九十八 日本海 (東郷大將)

十六

- 第九十九 將星 (見玉大將)
第一百 詩星 (家祖數世)

瀛史百詠

南紀 晚香菊池武貞仲幹氏著

第 瑞穗國 (大日本)

依田學海曰自地形
說起極典則
森槐南曰龍委一句
光芒四射開卷令人
矍目
桂湖村曰龍掉天擎
二句可充神州頌

學海曰起手有力

信夫恕軒曰太神微
啓窻戶窺之狀如觀
槐南曰嘉微二句古
光幼鬱直逼漢魏

恕軒曰起二句自然
好對

南摩羽峰曰眼光如
炬讀古史者不可無
此眼
恕軒曰此公本職
槐南曰史眼然犀

破巨浪。凌長風。龍姿矯矯光熊熊。偉哉瑞穗
國。豈啻武威隆。龍掉首尾走南北。天擎日月
臨西東。照見龍德大。天壤長無窮。

第二 天門 (天巖戶)

天門匿景四宵冥。八百萬神愁眉青。香山拔樹

瀛史百詠

懸玉鏡。神女起舞蘭佩馨。熹微一綫動閭闔。

須臾復見赫曜靈。古史非誕有真理。天無二日

鑑聖經。

第三 金鵄 (神武天皇)

金鵄光赫奕。神弓風鏑鳴。中州氛祲息。豐葦

擁皇城。當日御詠萬人和。長鯨奔躍雀羅破。

第四 一枝橘 (田道間守)

一枝橘。廿年苦。遣臣拜陵淚如雨。帝意關迴

裔。微葉何必求。上古史傳多殘缺。鑿空獨誇

恕軒曰起得好
槐南曰神武十字異
常精采

學海曰太陽一句用
當時韓人語警甚

學海曰此事千古疑
案欲得隱微筆有陽
秋
湖村曰通體頗能蒼
勁

槐南曰哀調倍神

博望侯。

第五 白鳥 (日本武尊)

照穴勦老熊。賊魁嘆神武。神威掃烈饒。蒼龍
手中舞。東夷西戎盡景從。白鳥高飛儼威容。

第六 舟師 (神功皇后)

太古歸化天日槍。皇風萬里振殊方。新羅百濟
是藩服。何物韓狗敢陸梁。擊髯一慟弓劍在。
舟師三千渡遼海。太陽西出江逆流。咄哉貢茅
何懈怠。我武維揚文教興。雲蒸龍變國光昇。

瀛史百詠

今日北狄制馭術。壯圖夙藏神功陵。

第七 天孫 (應阪忍熊二王)

赤豬噬白璧。氣宇自雄快。老將擊巨熊。蹤跡
趁詭怪。二王雖兇本天孫。誰呼龍種比毒蛇。

第八 菟水 (稚郎子)

帷幄運籌誅逆臣。玉階拋書叱韓使。太子文武
已絕倫。何事遽巡避天位。阿兄德高我豈當。
先皇濫愛非我志。一死且斷衆庶疑。謙讓長見
瓜葛義。菟水沄沄繞荒陵。月明鳴咽老蛟淚。

羽峰曰：王帝公句句對照妙。

羽峰曰：右色有德狀得盡。

忽軒曰：末段一節，掉起全節。

槐南曰：藤殿二句，見幽閒貞靜之操。

湖村曰：回避作見筵

何如見筵出于五代史。

學海曰：滅沒隱現，妙見意匠。

忽軒曰：起得味麗。

湖村曰：懷玉十字，理趣盎然，不陷卑淺，幾乎得樂府之遺意。

學海曰：有情有色。

忽軒曰：宛轉流媚，有曉風楊柳之致。

第九 功滿王 （蘇秦後裔）

功滿王。融通王。舉族歸化勸蠶桑。漢錦吳綾飾國光。仁德帝。雄略帝。銳意圖治獎技藝。坡公秦公奉器幣。君不見楚人一炬燼咸京。嬴秦遺孽在東瀛。

第十 名媛 （衣通姬）

湘妃回避窈窕妃姑。瓊膚生輝欺玉兔。不用靈泉洗凝脂。不須金蓮學仙步。一笑百媚妾豈望。節義鑄骨磐石固。詔使七降意何敦。強掃蛾眉

瀛史百詠

三

朝至尊。藤殿秋風茅宮雨。蛛絲歌成幽淚吞。飛燕玉環豈其匹。光風霽月贊名媛。

第十一 珠綬 （大草香皇子）

一領珠綬禍何烈。皇子吞冤龍吐血。懷王小人危。挾寶群魅竊。君不見先皇有遺制。風掃雨打宸宮敝。

第十二 蓬萊 （蒲島子）

澄江島子年甫冠。蘆花風裏弄釣竿。老龜出海長毛綠。化爲少女顏如玉。一笑相携駕海風。

槐南曰：委婉入情。

學海曰：奔流二句，用弘計王歌，確不可移。槐南曰：爭此落筆。

學海曰：尺幅萬景。忽軒曰：文情相生，意到筆隨。

槐南曰：奇彩奕奕。

湖村曰：起手瑰奇，高之昌谷，低之者不下青藤。

羽峰曰：含蓄不露，妙甚。

忽軒曰：一氣流轉，筆無停機。

槐南曰：詞微意顯，詩家南董。

湖村曰：造語間肖古歌謠。

學海曰：模寫有趣。

遊遍蓬萊山幾曲。白露黃葉賓鴈鳴。秋風忽動尊鱸情。少女殷勤進玉匣。再會有緣仙膠歃。歸來家鄉陵谷遷。翁嫗恍惚說千年。啞然開匣紫雲吐。巖阿新棲白眉仙。

第十三 驪珠 （億計弘計二王）

空山月落夜雲黑。王氣一道逼宸極。國司徵租驚驪珠。君臣執手淚沾臆。君不見奔流激怒撼堤楊。枝葉不亂根柢長。

第十四 蹴鞠 （天智天皇）

御簾紅濺妖鹿血。老蝦墮火肝腦裂。世亂時窮眞主生。旋乾轉坤偉功成。當時蹴鞠一場戲。君臣遭遇風雲志。

第十五 風從虎 （天武天皇）

龍乘雲。虎遊野。安得聖斷安宗社。風從虎。雲離龍。龍闕慘澹烟塵封。千秋誰揮董狐筆。雲霧晦冥閉石室。

第十六 老仙 （役小角）

巖穴避烟火。咒術役妖魔。天風爲車雲爲駕。

瀛史百詠

四

笑他人間情累多。老仙未忘孝道重。奉母去踏
萬里波。

第十七 國祚久 (和氣清麻呂)

忽軒曰憂國撫事其
氣尤壯。
槐南曰片言七字筆
力千鈞。

舌可拔。骨可裂。吾心如鐵不可折。咄渠妖髡
敢梁跳。誓摧爾頭飲爾血。呼清爲穢清却伸。
氣通神靈動紫宸。片言護持國祚久。古今東西
絕比倫。

第十八 都鳥 (在原業平)

學海曰史眼燃犀。
忽軒曰首尾相應常
山蛇勢。

公乎公乎。出關何之。屈鮑赴水心已晒。夷齊

瀛史百詠

五

隱山跡亦癡。臣擅朝權。君擁虛器。誓抽忠義
去民累。遣恨勢不禁。吟衣濺血淚。東遊文。
都鳥歌。公乎公乎意如何。

第十九 御衣 (菅原道真)

槐南曰方樓公無渡
河樂府辭得其音響
於李昌谷爲近。
又曰在五知己。
湖村曰結語不着論
議而意有餘。

恩賜御衣拜餘香。一首詩斷萬人腸。奉天子。
擊豺狼。世弊除。政綱張。豈知被髮下大荒。
空山藹足神慘愴。

第二十 伯牙 (嵯九)

羽峰曰伯牙子期比
得佳。
忽軒曰寫得凜凜千

逢關秋老風清涼。淡雲微月夜色蒼。盤涉一曲

歲如生。
槐南曰幽咽泉流水
下灘亦可以喻此時
之懷懷。

學海曰結末出意外
妙。

羽峰曰新皇毒虬搏
爲一團更以子孫毒
蟻結之深思筆力真
驚人。

忽軒曰議論風生。
槐南曰合兩事爲一。
具見匠心。
又曰值得一風。
湖村曰疊用新皇毒

蝦蟇調宛轉如珠走
圓。

羽峰曰句句精巧

槐南曰寫出清婉玲
持處。

又曰雖知木蘭是女
郎借以爲實造句偏
覺森森。

學海曰先說形勝以
及日本紀筆有聲色
羽峰曰起得清麗。
忽軒曰陸翁結法。
湖村曰秋風七字神
致幽遠。

伯牙恨。良宵無人訪幽房。誰知子期立門外。

三年憔悴鮑風霜。莞爾相逢披肝膽。流泉啄木

韻淒鏘。淵魚赤鱗馬仰秣。萬古騷人足感傷。

第廿一 毒虬 (藤原秀鄉)

飯粒墮。饑涎出。新皇舉措何輕卒。毒虬死。

湖神邀。一劍我能斫群妖。新皇不皇是毒虬。

我豈屈膝受其祿。東鎮數世說餘功。子孫却學

毒虬風。

第廿二 木蘭 (清少納言)

瀛史百詠

六

龍馬殘骨尙千金。燕雀何知鴻鵠心。西宮一夕

侍宸宴。六花亂點燦上林。香廬御詠開白戰。

起揭珠簾慧心見。光怪陸離枕草文。木蘭黃土

驚紫電。

第廿三 日本紀 (紫式部)

琶湖烟波三百里。秋風鶴鳴月在水。好景騷

思。咳嗽珠玉美。天子嗟賞。湖神驚起。萬古

膏馥資沾漑。精通何獨日本紀。

第廿四 赤符 (源賴義)

學海曰描寫曲盡

赤符廢。白符行。將軍髮髮霜華映。巨巖裂。
靈泉生。天神地祇知忠誠。懸軍萬里。苦戰九
載。覆賊巢。救民弊。偉業撼坤乾。子孫握霸
權。

第廿五 龍笙 (足柄山)

土屋鳳洲曰風趣獨絕。
恕軒曰描寫詳悉。
槐南曰逸音鏗鏘。

鶴鶴情重身命輕。匹馬長驅指邊城。廣陵散絕
萬古恨。爲君一曲奏龍笙。關山秋高鐵衣冷。
吹飄天上桂花影。神悲鬼哭激商音。月光照徹
師弟心。

瀛史百詠

七

第廿六 八甲 (源爲義)

學海曰鎮西八郎點得奇絕。
槐南曰結作次章之引又是避熟一法。

八甲漂。片夢驚。老將奉敕淚縱橫。分甲赴難
家道墮。骨肉相爭踏湯火。誰識一甲在海陬。
割據百年騎老虬。

第廿七 養由基 (源爲朝)

羽峰曰起得奇偉。
恕軒曰筆力挽強。
槐南曰英姿颯爽來酣戰。
又曰茫茫百端付之一笑。

義和蒼黃失控馭。兩日爭天夕欺曙。猛士勇卒
急奔趨。紫宸白河各割據。將種時有養由基。
虎頭猿臂貌貅姿。大小二百三十戰。勁箭巨鏃
神淋漓。長袖豈能解韜畧。遺恨絕技徒拋却。

鳳洲曰勁直俊逸樂府本色。
羽峰曰紫亦青下得巧。

恕軒曰俊偉。

槐南曰用意警辣。

鳳洲曰勇壯奇拔惡源太躍躍欲出。

學海曰英氣鬱勃如驅迅雷。

羽峰曰勁健。

恕軒曰步武俊嚴筆力斬鐵。

槐南曰掀雷抉電揮決於天地之垠此其是矣。

湖村曰飛輪驟瀉清壯激揚勝十萬之衆。

羽峰曰反案妙甚何等才筆。

淚墮蠻雨蠻煙中。君臣天涯齊落拓。

第廿八 青餞 (源義朝諸弟)

阿兄過矣果何成。不識吾徒是萬兵。猛鷲駕風
自鏖羽。諸弟齊恨隨亡父。紫禁門上赤旗揚。
有人吐舌青餞長。

第廿九 奔電 (源義平)

亂鉞豎髮朱激晴。桎梏吞恨氣崢嶸。保元之亂
夜下刃。白日濫刑何無情。攝郊一擊容我策。
奴輩豈能持隻兵。汝欲斬我速斬我。我爲靈隱

瀛史百詠

八

絕汝生。煩冤鬱轡天亦怒。一旦奔電驅黑霧。

白馬青鎧神弓鳴。勇士頭碎驛駒仆。

第三十 老僧 (俊宣)

鹿谷秋荒風捲草。醉歌擊節瓶子倒。可笑諸公
不足爲。機謀未熟怯誅夷。老僧遠竄孤嶋外。
鳥羽爲衣草蔓帶。官船載友逐海烟。日暮悵望
淚漣漣。知否京洛戰塵滿。榮華倏忽春夢斷。
不似海上鷗鷺遊。春潮秋汐意悠悠。

第三十一 壯漢 (文登)

學海曰：稜稜俠骨，橫寫如生。
羽峰曰：筆如精鐵，結末尤勁。
忽軒曰：地下有靈，文覺笑頷。
槐南曰：宛然杵六指，大薩摩關手如白雨點時也。

鳳洲曰：高山二句，道盡當日幽栖之趣。
羽峰曰：起手絕佳。
忽軒曰：清雋。
槐南曰：凄入心脾，與謠曲雄鹿鳴一段，聯美南郭長古，或難爭勝。

又曰：結語精鍊，在明朝化作北山霜之上。
湖村曰：懷婉含情，斷腸二字，是其用意處。

鳳洲曰：一結悟境，透徹。
學海曰：情況宛然。
羽峰曰：句句精鍊，結尾最妙。
槐南曰：三姬合傳，自少不得此一番鋪叙。
又曰：大家團圓，頭同說無生話。

河漢傾倒天欲墜。奔流激怒摧山谷。黑霧陰嵐凝爲霜。玄龜凍死老龍哭。壯漢心骨金石堅。瀑底誦經學枯禪。死而還蘇終不死。七晝七夜立深淵。乍見紫雲巖間燦。菩薩來揖顏如蓮。何事遁世猶慕世。去訪流人說奇計。

第三十二 嵯峨 (小督局)

胡枝花碎芙蓉老。秋風吹斷嵯峨道。玉鞭細馬帶鶴書。路傍忍見斷腸草。高山流水松籟淒。柴戶深鎖知幽棲。御衣拂露嘆永夜。使臣復命

瀛史百詠

九

淚交下。明朝憶車還入宮。絕世恩寵椒房同。爭奈春華若轉燭。佛燈一穗隨秋蓬。

第三十三 三姬 (祇王祇女佛姬)

昨日君恩如海壑。今朝君情紙片薄。草芽春生秋風枯。不怪哀傷從歡樂。素壁寫歌墨痕青。輕裝踏月影伶仃。姊妹晦跡嵯峨北。疎燈幽花照梵經。四野無人螢獨語。微聞剝啄響柴戶。移燈乍見繡衣同。三姬相對淚如雨。疇昔玉殿侍盛筵。嬌歌妙舞拂金蓮。榮華夢覺業鏡破。

學海曰：詩筆若鐵，史眼如炬。
羽峰曰：鬼氣襲人。
忽軒曰：一結無限感慨。
槐南曰：淨海薰天勢，烟大地二句括盡。
湖村曰：樂府好題目，自成奇詔。

學海曰：論斷極當。

羽峰曰：不知內府泉下何辭以答之。
忽軒曰：一轉妙絕，筆有仙氣。

鳳洲曰：首尾照應，妙在自然。
羽峰曰：末句警甚。
忽軒曰：口吻似坡公。
槐南曰：用千歲字，殊工貼。

天心無雲秋月圓。

第三十四 入道來 (平清盛)

龍尾塵動碩鼠跳。滿庭鬼語邀群妖。巨槽注水水如火。烈燄炎炎腹背燒。遷都本是經綸術。如何雄斷速讒嫉。大地震動入道來。一陣旋風刮皇室。闔族榮華夢未醒。天河夜潰漂將星。可憐海道零丁客。薄衣掩兒潮痕腥。

第三十五 進退窮 (平重盛)

欲忠不孝孝不忠。處變無策進退窮。熊嶽禪神

瀛史百詠

十

神爲泣。趙宋進醫醫無功。惜君小節學兒女。不問禁城烟塵舉。轉瞬遺族隨滄波。老奴收骨血淚沱。

第三十六 遺吟 (平忠度)

鐵衣錦囊帶歌卷。從容授元知俊彥。當年荒都弔殘春。嬌嘶紫燕踏芳塵。烽火萬道起東北。六條甲第秦灰黑。一首遺吟不署名。千歲想見師弟情。

第三十七 怪禽 (宮蒲姬)

學海曰：雲端以下，寫出如睹。
羽峰曰：狀得墨躍筆舞。
恕軒曰：老杜風格。
湖村曰：句亦怪奇。

鳳洲曰：螢火切于苑道。
學海曰：節迫氣勁。
羽峯曰：語短意長。
槐南曰：入筆嶮峭，結亦含蘊，總然。

學海曰：多少感慨情，致深遠，聯不遑尤切。
恕軒曰：實比項王義仲可以服矣。
槐南曰：英雄氣短兒女情長，古今同歎。

恕軒曰：引據的切。
槐南曰：實輕八字，無限婉痛。

紫闕風腥黑雲罩。羽林警夜劍戟開。妖聲震殿聖夢驚。六宮妃嬪失玉貌。奉敕蹶起臣賴政。勁弓響奏犬馬效。雲端血迸白羽飛。怪禽墮地啼如豹。天女忽降萋蒲姿。金蓮浪搖仙步遲。天子嘉賞群臣賀。奇績長傳弦月詞。

第三十八 平等院 (源賴政)

老樹無花瘦葉墜。三十一字揮愁淚。陳涉首難計猶疎。田榮爭霸志未遂。平等院荒春夢醒。夜烟籠水螢火青。

瀛史百詠

十一

第三十九 栗津 (源義仲巴女)

雕不逝兮可奈何。湖山四面起楚歌。壯志摧兮鐵衣重。虞兮憐汝賣餘勇。去年雄兵震漢關。北道百里戰血殷。京塵一掃是我力。何事倉卒呼爲賊。松風蕭颯恨落暉。深泥沒馬霸圖非。越山他日虞兮淚。化爲栗津風雨飛。

第四十 李將軍 (佐佐木秀義父子)

父守義。子盡忠。三郎四郎萬夫雄。賞輕罰重。若沒遺家。君不見一門數奇李將軍。勁箭貫石。

學海曰：筆力矯健，末以四郎結，具見卓識。
槐南曰：男子漢如此收場，良可歎。

學海曰：昌谷遺響。
恕軒曰：柴栗山不得擅美於前。
又曰：末段收佐野丁伯，湊合得妙。
槐南曰：直以平語爲粉本，鑄出偉辭，自然。

妙絕。
湖村曰：琵琶作陶真何如。

學海曰：神韻飄渺。
槐南曰：落花七字，神味無窮。
湖村曰：剛出山家胸中，無復餘蘊，水風六字，尤能縹緲超俗。

學海曰：起手勁拔。

無功勳。

第四十一 狐埒 (槐原景季)

萬死競先登。激流躍玉驄。快刀斫堅陣。梅花亂春風。榮名纔揚賊名惹。狐火夜青狐埒下。君不見四郎勇決知時機。笑拋鐵衣披法衣。

第四十二 金扇 (那須宗高)

鳳闕風塵錦旛裂。六龍踏濤濤吐雪。明眸皓齒彼何人。高擎金扇映玉玦。阪東男兒萬夫雄。風背霹靂鳴雕弓。鐵蹄蹴破滄波紫。默禱慘澹。

瀛史百詠

十二

神意通。金扇斷飛紅日墜。兩軍歡呼撼天地。千歲琵琶說奇勳。猛士勇將吞暗淚。

第四十三 銀貓 (西行)

蹴幼女。拋銀貓。大笑拂衣去飄蕭。指海雲。參禪理。落花風裡眠不起。胸藏韜略竟何施。策分王霸無人知。柳營刻燭吁勞矣。花洛鳴珂彼一時。問遺踪。論幽抱。水洋洋。風浩浩。

第四十四 鹿四足 (龜越)

鹿四足。馬四足。鹿能馳。馬何不續。貌貅三。

忽軒曰：覺山陽外史徒費遠能。
湖村曰：起得簡古。

學海曰：逆櫓四句有氣勢。
忽軒曰：豪宕矯健，如九郎行兵。
槐南曰：一眼觀破。

學海曰：靜女心情實如此，寫至亡見他人未道及。
槐南曰：美人二語慘而難。
又曰：撲盤獨出月荒涼，酒城已遠波聲小，音節勢聲相似。

槐南曰：三代慘禍，鬼語啾啾。

千下峻崖。人馬宵鞍相擊觸。東門西門戰正酣。
矢石紛飛捲腥風。誰料奇兵從天降。一城震盪萬雷閃。斷臂滿船龍騎鯨。寶劍隨龍入大瀛。
遺恨九郎急功名。龍闕枉開闔婆城。

第四十五 逆櫓 (原島)

逆櫓千萬任汝取。我唯知進豈退守。攝海夜黑一燈飛。雄兵百五駕颶母。猛火燒盡屋嶋城。赤旗漂波秋葉輕。偉勳一代聖紫電。不怪天賞聽昇殿。謾口成禍嗟可悲。禍機夙伏捧盃時。

瀛史百詠

十三

第四十六 鶴岡 (靜女)

鶴岡祠頭動羯鼓。戟冠長劍陳貔虎。美人蕉萃扶舞衣。綵絲腸絕海棠雨。歌聲未終右幕噴。咄汝何物慕流人。瘦馬荒驛送孤影。皇天不降撫育仁。妾聞將門能出將。亡兒材器必超倫。鶴領原裂叫鷗鳥。天邊回首將星小。

第四十七 白羽 (源賴朝)

雨鳩白羽。載飛載鳴。源公墓古草花碧。猶想石山朽木橫。朝殺季。夕殺叔。祖廟夜深聞鬼

哭。滅平興源果何功。樞肉未冷霸業空。君不見外戚詭計紛於雨。不數冠者奏貳舞。

第四十八 白旆 (源實朝)

高祖欽仰六孫王。歷世忠義奉聖皇。假使海枯山嶽裂。葵心豈肯背朝陽。牝雞夜叫太白墜。可憐將軍擁虛器。梅花寂寞恨春風。一絲頭髮抽清淚。鶴祠月黑酸風吹。白旆無光哭青狸。

第四十九 毒蟲 (大江廣元)

莫道毒蟲螫猛獅。莫道詭謀煽東夷。一代才學

瀛史百詠

十四

第五十 神風 (元寇)

風雲會。霸道聊試胸中奇。阿瞞問計苟文若。苻堅稱賢王景略。亂世何遑問順逆。雄脚踏破麒麟閣。鎌府擾擾幾將軍。牽絲一場傀儡躍。咄咄胡元何驕縱。來問神州鼎輕重。我有太和魂。士氣撼乾坤。身代國難是朕願。天子禱神神風翻。知彼知我戰規在。驕兵自速千古悔。疇昔厓山鑒敵手。反拋爾兵沈東海。

第五十一 緇衣 (北條氏)

學海曰：案銳高懸者，乃如此耳。
槐南曰：道簡和尚終是廣鼎。

槐南曰：鬼語。
湖村曰：怪偉斗健，振鐵生光。
田邊松坡曰：朽壤作忽土何如。

忽軒曰：輕輕收策。
槐南曰：如此作結，大是滑稽。

學海曰：山櫻一語，宛見其人。

學海曰：起手善學昌谷。
羽峰曰：荒涼凄慘。

緇衣披。錫杖飛。七道民物察精微。廢將軍。學良吏。一意經營家門利。儉素唯問牛磔醬。不問三帝沒風浪。

第五十二 妖僧 (鎌倉)

鳶肩豺目猛鷲羽。道士中庭奏歌舞。宴散玉殿夜風醒。獸蹄鳥跡紛旁午。龍威赫奕驚妖僧。南天大星吐紫稜。打毬鬪狗歡未半。九世金湯朽壤崩。

第五十三 長劍 (土岐賴員)

瀛史百詠

十五

長劍斫柱。巨杯吸川。禁苑新開無禮筵。天子深慮。志士密議。風鷹將鼓摩天翅。豈料鄙夫溺閨房。萬馬夜驚賊氣揚。君不見溪女浣衣雙脰白。雲破飛仙墮沮澤。

第五十四 錦旗 (村上義光)

一喝奪錦旗。人馬俱辟易。激鬪護親王。山路亂雲闢。父子忠烈萬人嗟。旭日映發山櫻花。

第五十五 行宮 (笠置山)

金猊骨裂噴殷血。禁城無人夜風咽。笠置山深

忽軒曰：山陽賴氏輸一籌。
槐南曰：雖學長爪郎，猶見健格，末段慘澹可傷。
湖村曰：石破天驚，長吉口吻。

鳳洲曰：雄詞麗藻，百誦不厭。
學海曰：末句冷峭。
羽峰曰：結得好。
忽軒曰：任改作笑。
槐南曰：字向紙上皆軒昂。
湖村曰：以對句起，不墜律調，所以奇拔。

學海曰：沈痛。
羽峯曰：悲悽。
忽軒曰：王朝世臣，予服二人曰：藤原曰西行。

羽峰曰：語短意長。
學海曰：結語尤緊。
忽軒曰：長短錯綜妙。

開行宮。絕壁千尋植積鐵。擁麓賊軍鼓鼙。長緇巨梯肉薄登。風鏖雨虐大蟲折。石破天驚亂雲騰。乘輿播遷迷草澤。四海之家藏不得。落日人弔雉兔蹊。荒墟萬古土花碧。

第五十六 范蠡 (見島高德)

白虹貫日日收彩。旋風驅龍龍踏海。皇天猶能護國家。越王不孤范蠡在。一夜風雨捲行營。暗中微聞鐵衣鳴。櫻皮慘裂筆痕黑。天顏有喜人不識。忠節萬世警懦夫。任他史家論有無。

瀛史百詠

十六

第五十七 龍馬 (藤原藤房)

兵革纔戢進龍馬。群臣爭賀龍墀下。豈知雍齒猶未侯。沙場偶語鬼啾啾。尙方誰乞斬馬劍。東陲封豕倚天塹。一夜深殿諷夷齊。掛冠北山衲衣淒。九重有淚濕龍袞。天使幾降仙踪遠。鎌山妖氛雄狐號。神州瓦裂神龍逃。父老千年說遺愛。古利老松百尺高。

第五十八 正統紀 (北畠親房)

出將入相何匆匆。誓挽頽日照大東。職原抄。

槐南曰：定斷六字，更不須多言。
湖村曰：末語鏗案不可動。

恕軒曰：阿新九單身報父讐，勝四十七士遠矣。

槐南曰：隱隱約約，如見跳躍人影。

學海曰：末段悽悽，神人共怨。

槐南曰：噫，昔二解，展拓得好，結末悽咽。
湖村曰：筆致飄杳，如風雨至。

恕軒曰：黃絹幼婦，槐南曰：直寫本事，乃爾奇影。

正統紀。書成邊城酣戰裡。王綱尙旋綴。神州方陸沈。三寸管。萬古心。

第五十九 孝子 (日野阿新)

夜風淅瀝吹鬼域。群蛾亂點鯨燈黑。快劍斫斷仇人頭。血路繞開衆兵逼。一彎流水竹影森。亂世不孤孝子心。

第六十 藤島 (新田義貞)

求馬塚上不求馬。雙刀揮霍亂箭下。將軍單身能殿戰。吶喊來迫何爲者。西海老鯨露尾長。

瀛史百詠

十七

拍天卷地波濤揚。介士十萬犯畿甸。翠華蒙塵宸襟傷。噫昔南山乞密旨。孤軍反旆戮封豕。忠義名震麟閣頭。一代盛舉誰能比。今日三軍鼓聲衰。匹馬破圍歸來遲。陛辭攬淚向邊邑。北風吹裂中黑旗。從此天日失光耀。金甌化灰妖炎燎。藤島秋荒蟲語淒。千歲幽憤屬遺廟。

第六十一 美人 (勾當內侍)

鐵椎擊破天柱山。神龍畫臥戰塵間。左眉箭瘡知中將。錦囊盛詔紅爛斑。去年後官拜恩賜。

湖村曰：末句冷峭。

學海曰：花隊團扇好材料。
恕軒曰：一結輕妙。
槐南曰：末段音旨蒼涼。

學海曰：一讀毛髮凜然，是李長吉本領。
槐南曰：光顯發露。
湖村曰：一結蒼涼，歇歇欲絕。

學海曰：起結悽惋。

玉簾半捲舞態媚。齒如編貝唇激朱。雲鬟蛾眉抽春翠。一朝天涯同斷腸。峭風吹裂素霓裳。美人收淚參古佛。空山鐘動秋月蒼。

第六十二 花隊 (新田義定)

藤島風腥龍臥地。矢口雲黑走鐵騎。英魂殺魄護王師。我力誓達父兄志。花隊蔽野敵勢張。死士鼓勇團扇揚。扇起疾風花可散。萬馬奔逸碎累卵。石濱秋老聞斷鴻。江霧蒼茫落日空。當時敗卒掬指處。漁舟輕度蘆花風。

瀛史百詠

十八

第六十三 湊川 (楠正成)

前門狼。後門虎。七道妖魘卷霧雨。赤阪壘。金剛山。倚天長劍護帝關。臣如不死賊可滅。一語凜然拔冰雪。可歎皇道猶陵遲。流水空濺忠義血。憶昨行宮聖夢醒。御盃浮菊恩露馨。天旨殷勤命興復。一株南木托朝廷。南木摧兮南風息。萬古湊川落日青。

第六十四 四條囃 (楠正行)

斷屏苦蝕鏤痕青。梓弓一曲幽淚零。君父之志

槐南曰：造句沈鍊，
湖村曰：良神六字高
古。

槐南曰：南北對寫，當
時形勢盡于十四字
中。

學海曰：帝下席三字，
自國策來，警甚。
槐南曰：短歌碎激，竹
石俱碎。

忽軒曰：感慨動人。

誰復紹。四條暖上風冥冥。昨日瓜生野。隻兵
排萬馬。前年譽田林。雄畧服衆心。餘勇亦能
及俘虜。金甲玉驄恩賚普。嗚呼芳山半壁待君
擊。天日纔保弦上明。七生討賊賊未滅。闔家
濟國國未平。良臣塞。神龍遠。南朝五十七春
風。花泣鳥悲王氣空。

第六十五 忠臣 (補正儀)

父兄殉節。豺狼逼疆。南山夜濺杜鵑血。北關
晝放熒惑光。臣有秘計。誓挽頹勢。休道秦檜

瀛史百詠

十九

徒議和。休道向戌漫弭兵。班馬一去無史筆。
誰辨忠臣無限情。

第六十六 莫耶 (補光正)

天崩地拆帝下席。妖星吐燄夜雲赤。兩統更立
息壤存。何物奸魁弄詭策。莫耶三尺斫秋風。
遺恨當日逸狡童。輪囷豫章老根裂。百年寥落
枝葉空。

第六十七 龍種 (南朝二皇子)

山河破碎王氣微。北風無賴劍璽飛。敗餘殘卒

槐南曰：長安有皇子
陵，借用殊好。

學海曰：簡約精確。
羽峯曰：長短錯綜，句
格勁健。

學海曰：勁。
忽軒曰：句法似左氏。
槐南曰：變起倉卒，寫
得出。

學海曰：滿城七字，用
後花園天皇賜足利
義政詩句，尤見痛切。
羽峰曰：當時狀寫出
妙。

忽軒曰：措辭得體。
槐南曰：將軍獨闖東
山茶，歎幕府之陵夷，
千金茶甌映錦帷，慨
王室之式微，賦同一
事，而用意各別。
湖村曰：讀滿城一詩，
不成奮興起者，其人
必不忠矣。

護龍種。志氣雖烈奈重圍。荒陂夜雨皇孫淚。
天巡地轉恨依依。

第六十八 天誅 (足利尊氏)

三弑皇子。再欺天皇。逆燄焦天見機槍。南北
分統。東西開府。將士反覆如風雨。豺當途。
虎負嵎。誰圖身後五百載。父子駢首伏天誅。

第六十九 猿樂 (足利義教赤松滿祐)

猿樂興。廐馬逸。門鎖甲發風雷疾。捨士用獮。
雖猛何爲。今日之事公自取。謀逆何獨三國

瀛史百詠

二十

主。

第七十 茶甌 (銀閣寺)

滿城紅綠爲誰肥。兒女遊戲升玉陛。成功錢。
關白米。帝室懸磬廢典禮。奸賊跋扈。窮氓流
離。東山銀閣凌雲起。千金茶甌映錦帷。

第七十一 芙嶽 (補峽)

芙嶽爲岩龍河池。數世積威立霸基。鐵馬金甲
無匹敵。眼底何存吉法師。四山忽裂振鼙鼓。
瘴風猛雨驅貔虎。短兵電閃胡牀前。白旗斷送

忽軒曰：句工語切。
槐南曰：行筆亦如風雨。
湖村曰：反襯見趣。

忽軒曰：幽淡。
槐南曰：起六字絕妙。
鹿之助像贊。

學海曰：高松死守狀。
龍宛在目睫。
羽峰曰：狀得精妙。
忽軒曰：上下千年，唯有此人，百詠中不可

無者。
槐南曰：一結便覺精神。
湖村曰：激昂悲壯。

鳳洲曰：語語勁拔，當年狀貌宛然。
忽軒曰：詞氣雄壯，風神古雅。
槐南曰：躍功右府，確是史裁。

忽軒曰：融板爲逸。

三州主。泰否循環何勿勿。他年京刹夜烟紅。
却鏡打破山河寂。萬象均見泡沫空。

第七十二 新月 (山中幸盛)

拜新月。憶故主。新月出雲雲尚從。雲中士氣
豈俄偏。誓期報復功。萬死抽孤忠。其奈雲破
天道梗。空見新月似弓影。

第七十三 孤城 (高松)

釜竈水綠亂蛙鳴。炕牀魚躍藻荇橫。晉陽雖險
援兵絕。洪濤五月吞孤城。慷慨仗義清長左。

瀛史百詠

二十一

紫電煜煜動碧睛。抽髮更衣拜君命。隻顧且代
滿城兵。萬古甲水帶餘憤。激流恍聞變徵聲。

第七十四 桔梗 (本能寺)

喊聲夜半撼佛堂。桔梗花發妖氣揚。蹶起執弓
虬鬚怒。咄汝豎子敢鴟張。四方削平功將就。
海飛山走劍折鋒。亂世始建尋王績。雲霧解駁
天日光。

第七十五 二龍 (明智光春)

千瓢萬馬何紛紛。我有快舉誰能抗。錦袍描龍

槐南曰：湖心七字如畫，末結出人意表。

學海曰：渡合妙。
槐南曰：末段意在吞吐間，節促味長。
湖村曰：警拔驚人。

忽軒曰：鑿鑿入骨。
槐南曰：結尾水冷。

忽軒曰：詩畫一致。
槐南曰：與秦扶蘇同痛。

人騎龍。二龍八蹄踏激浪。巨虯驚竄老魚藏。
湖心一道紫烟長。人怪龍宮葬英魄。不知孤城
完畫策。天下珍寶我豈貪。長繩垂壁光赫奕。
右府九原笑相迎。遺骨憑汝得新塋。

第七十六 夜叉 (柴田勝家小谷局)

夜叉柴田。破襲柴田。仙姥錄功功已偉。雄威
震盪北道天。咄咄擊鞋猿冠者。我豈俛首就汝
下。賤岳一夜走風霆。篝火燒山萬骨腥。嚼昔
擊鞋手。擊碎夜叉首。小谷血淚千萬行。淀江

瀛史百詠

二十二

禍水流湯湯。

第七十七 金烏 (豐臣秀吉)

身起人奴。位極人臣。何物金烏化偉人。手伐
鷄林。氣吞禹域。百萬勁兵成羽翼。一朝金烏
落虞淵。壯圖電滅趁荒烟。唯見耳塚畜生塚。
鬼哭不斷三百年。

第七十八 葵花 (德川信康)

虬鬚怒張眼如電。妒婦私書是罪譴。霜刃吹血
英魄摧。葵花纔發風雨濺。甲山妖氛虎豹吼。

忽軒曰沈婉。
槐南曰既得平淺。

羽峯曰眼中無鴻域。
忽軒曰意存言表。
槐南曰言外之感善
于立說。

羽峯曰活像高於人。
數簿。
忽軒曰意格入神。
槐南曰待是射鵰手。

旌旗蔽空挑激戰。尾海狂浪鯨鰐跳。玉帛登壇
闔權變。當時帷幄富籌謀。何事袖手喪龍珠。
三尺孤墳萬古恨。蓮嶽崩場龍瀆枯。

第七十九 玉殿 (結城秀康)

玉殿春開花光吐。霓裳羽衣奏妙舞。侍宴將士
皆歡呼。何事公子淚如雨。丈夫手握十萬兵。
局趣肯趁驍駒盟。雄圖未成身將老。忍見女兒
擅盛名。

第八十 快馬 (南龍公)

瀛史百詠 二十三

舉良佐。闢南荒。葵光赫奕國勢張。巨刃摩天。
豪氣蓋世。遺恨無復十四歲。擾擾明清。蠻
觸相攻。皇天儻容風雲志。快馬一蹴禹域空。

第八十一 白扇 (直江兼賴)

白扇受黃金。簸揚不敢取。休怪北鄙人。視寶
如敝帚。相公雖貴當擊鞋。銅臭薰手歲已久。
臣手雖小不可租。異日中原風電走。指麾三軍
是此手。

第八十二 凶豎 (石田三成)

槐南曰言下慨然。
湖村曰小人弄智之
狀。蠶燈六字盡之。

鳳洲曰當日美談千
歲傳芳。
學海曰先敘盟約意
匠尤密。
忽軒曰丰姿可觀。
槐南曰俊逸字眼。
湖村曰俊逸二字品
藻得當。

學海曰善寫其心事。
忽軒曰落想巧甚。

學海曰有氣力有情
致。

盡測海。螳擊車。漫道雄畧制長蛇。忘君思家
是凶豎。視恩做讐是姦邪。君不見釵裙猶能辦
順逆。母子均吞劍華白。

第八十三 寶兜 (木村重成)

莫道老軀乏股血。臣奉使命請速決。舉止嚴然
訂國盟。敵將嗟嘆推才英。數旬減食吾豈怯。
清淨持身兵家法。一死頭髮香膩流。沈檀甲煎
在寶兜。豐氏兩世養將士。俊逸似君竟誰是。

第八十四 孤島 (浮田秀家)

瀛史百詠 二十四

孤島英雄恨海風。朝雲夕霞千里紅。敝衣猶留
錦繡色。大城當據備山北。憶昨難林督萬兵。
金甲映日寶刀鳴。又憶關原參機密。簸揚風雲
氣勢逸。老去天涯奈楚囚。殘喘虛憑北來舟。

第八十五 高材 (山田長政)

中原逐鹿機已去。高材疾足奈敗絮。長嘯倚劍
睨南雲。豈無殊域待偉勳。鵬背雄風扶搖起。
電馳一夕三萬里。蠻王手授金印燭。討逆堵難
我武揚。礪岳帶河鐵券在。不問桑田與碧海。

吁嗟慘矣長城頽。短狐射影釀奇災。楚材晉用有餘烈。玉帛航海效臣節。

第八十六 龍笛 （太宰春岑）

槐南曰：特筆揭明，爲春岑吐氣。

拋龍笛。辭左驂。王門令人我豈甘。講古學。論新政。宿志擬執經濟柄。物門才俊圖雄奇。

獨見駿臺樹赤旗。

第八十七 山鬼 （伊能忠敬）

恕軒曰：舊韻。

山鬼泣。水神哭。流星夜入老嫗腹。炙膚輝足七十年。天經地緯關幽玄。舉世空案說功利。

瀛史百詠

二十五

對君誰免頭低地

第八十八 鬼燈 （平賀鳩溪）

學海曰：起手用鳩溪幼時語，精勁，末段尤拗峭。
恕軒曰：氣韻高涼。
槐南曰：秋墳鬼唱鮑家詩，同此深明。
湖村曰：鬼氣逼人。

嗟爾且來我獻茶。我豈屈膝媚勢家。巨牛可吞帥可奪。卯角氣宇已峭拔。本草學成才愈適。東西說遍幾王侯。寶光在手拔雄礦。墾荒移民進嘉猷。莫如充耳官路窄。孤負燕領與虎頭。陋巷授徒豈我志。老驥伏櫪待驅使。蓬勃雄氣吐長虹。凝爲文字足魂異。矢口稗史洩忠憤。金廟演戲寓諷刺。等身著書嗟何爲。澌盡英雄

萬斛淚。文恬武熙誇太平。誰知偉材沒榛荆。古丘夜黑老狐舞。鬼燈青熒照霧雨。

第八十九 神人 （本居宣長）

恕軒曰：詩亦破天荒。
槐南曰：用本事趣甚。

撼地軸。破天荒。三十六鈴何鏗鏘。妖蝦噴火墳典滅。晉乘楚橋交詭譎。炯眼始辨神人理。百代君臣儼不死。

第九十 勤王 （賴山陽）

恕軒曰：幽秀古雅可人。

覆霸勤王機未動。鬼哭神愁一燈曠。史筆絕前古。儒林開別天。蓬勃龍興氣。先動水明山紫邊。

瀛史百詠

二十六

邊。

第九十一 清流 （橋本左內）

恕軒曰：有證之語，不同祭魚。
槐南曰：如聞啾啾之聲。
湖村曰：氣味慘澹。

清流投濁流。奇材釀奇禍。骨原夜烟青。陰風吹鬼火。君不見膽氣吞人老西鄉。猶服左內大器量。

第九十二 正氣 （吉田松陰）

學海曰：短節勁音。

長鯨掉蹶東海黑。朔風割地陽和息。刀鋸斷頸不斷心。正氣一歌感慨深。門下才俊傳師法。翼贊煌煌中興業。

槐南曰：三百年江都
俠風，以此爲殿。
湖村曰：矯健絕群。

龜谷省軒曰：筆力雄

剛金鐵錚錚。
槐南曰：周旋妙不費
辭。
湖村曰：南洲定案。

學海曰：綽綽矯健，神
逼青藤。
湖村曰：典重。

第九十三 烈士

(近藤勇)

關左風雲激壯士。深夜祖遜聽鷄起。手裏霜刃
新發硎。鵬鵬淬花鮫胎腥。斫人如草眼不瞬。
銃丸貫肩猶奮進。堂堂列藩幾俊豪。側目屏息
歎英髦。寧願一官就局束。新撰隊長我分足。
嗚呼江門霸氣衰。恢復之策竟何施。古驛秋風
鳥聲怨。荒草低迷烈士碑。

第九十四 城山

(西鄉隆盛)

掃戰塵。捧天日。中興元勳誰第一。膽如斗。

瀛史百詠

二十七

氣若虹。八千子弟仰英風。出處類古俠。順逆
何必論。聖恩及枯骨。榮爵在兒孫。酸風射眸
灑遺迹。城山一角大星白。

第九十五 雄心

(北白川親王)

晚節何烈烈。風雲見偉勳。少時何蹇蹇。香火
醺妖氛。青燈幾歲丹心在。閱盡古今翰畧文。
帝授虎符。身登將壇。普率無事。願明據鞍。
渤海鯨吼濤勢逼。羽檄旁午烽烟黑。快馬飛度
南溟雲。新疆百里布皇德。蠻風滅。文教開。

羽峰曰：國難二句名
言。
槐南曰：拈出蹇蹇錄
此公庶乎不朽。

學海曰：廣潮軍神，凜
有生氣。

槐南曰：雷霆電燭，生
氣奕然。

學海曰：轟轟烈烈，文
有雷霆之勢。
槐南曰：直詠本事，
純用本色，毫不依
傍，古而未嘗不妙。
絕。
湖村曰：遺勳生新，句
句鋒銳逼人，以擬大
將運兵，而足奇妙，方

衆貨雲起。庶民子來。君不見毒霧瘴烟唾手拊。
雄心遙接日本武。

第九十六 丹血

(陸奧宗光)

國難生國士。名門出名流。讀書眼冷國扉月。
獻策功高金闕秋。樽俎折衝風電走。乾坤旋轉
鬼神愁。一部蹇蹇錄。丹血千古留。

第九十七 旅順

(廣瀨中佐)

鯨濤險。我能乘。水雷爆。我能凌。輕舸衝雨
冒萬死。笑視敵軍探海燈。百難誓效封鎖績。

瀛史百詠

二十八

渾身是膽飄風擊。一卒徒死是我恥。不辭我頭
委霹靂。嗚呼旅順之港深幾尋。不及中佐義烈
心。

第九十八 日本海

(東鄉大將)

海龍夜跳海霧黑。海上不辨波濤色。大將按劍
待電警。一嘯一噏戰機逼。哨艦報道敵艦來。
兩三嶺外動風煤。忽見巨鷲般中舞。樓船百隻
鬱崔嵬。大將蹶起揮軍扇。皇國興亡在一戰。
旗艦鼓輪衆艦從。左旋右轉制機變。海霧始開

四

夕陽高。空洋萬里析秋毫。敵兵狼狽逃無處。
四面掩擊卷洪濤。砲火亂射天地赤。鐵艦轟沈
山嶽擲。雷艇乘夜奇兵縱。激鬪驚殺海龍魄。
敵帥就擒敵軍亡。鄂王寒膽鄂民傷。日本海放
日本光。吁嗟日本海放日本光。

第九十九 將星

(見玉大將)

省軒曰：慘氣滿紙。
槐南曰：劈頭揭出秋
事，用爲論贊，有史遷
筆意。

拜紅旭。凝深思。將軍忠義天地知。鎮南疆。
制北狄。帷幄籌謀舉偉績。赤嵌民物盛。黑江
風濤收。金字賜一級。雷名撼五洲。一夜東天

瀛史百詠

二十九

將星墜。神人齊咽萬斛淚。

第百 詩星

(家祖數世)

鳳洲曰：表揚先美，空
無厭辭。
忽軒曰：孤營七字，可
泣鬼神。
槐南曰：謝家述祖德
詩，無此矯健。
學海曰：愈詩星收筆
文占地步。

白羽洞扉流血紫。妖蛇蜿蜒馬前死。王師所向
勁敵無。九州誰敢酬一矢。南風不競劍挫銳。
少貳大友何陸梁。孤營四面楚歌動。絕命詩成
秋思長。兒孫異日守遺訓。奉戴皇嗣竭臣分。
朱明聘使責無禮。筑河鑒戰家聲奮。王霸升沈
五百年。漁樵空記將門權。忠肝義膽長不滅。
化爲詩星照南天。

瀛史百詠

三十

晚香詩。一種氣格。與溪琴先生不同。其趣處。極
可見也。方今雕蟲爲工。殆且成風。讀此諸作。大
強人意。

癸卯九月 學海依田百川拜讀

瀛史百詠。率劈空見奇。鍊局峻峭。使字凌厲。李
乎徐乎。要之瀾出一副心血來者。

癸卯九月 鳳洲土屋弘拜讀

瀛史百詠。皆感慨悲激。不減杜少陵。語氣雄放。
逼真陸渭南。余深愛其詩。而深慨其時也。

癸卯九月初八

學友 信夫祭文則拜讀多罪

詠史百篇。新警奇拔。醒人耳目。體不必做楊李
諸家。而長篇往往沈鬱頓挫。更見筆力。

甲辰秋日 田邊新拜讀妄批

瀏覽大作。奇肆橫逸。不拘古法。妙於自運。摩子成之壘。奪子玉之塞。蓋文長中郎之流亞也。

甲辰開歲第五日 湖村桂五拜批

大作諸篇。皆詠古今史事。蓋於其設題。深致意焉。行辭亦正亦奇。味在酸醎之中。子成子玉以後。自克拔戟成隊矣。委讀之餘。惏然傷心。端然改容。

瀛史百詠

三十一

丙午立秋後五日 湖邨五拜批

明治三十九年九月六日印刷
明治三十九年九月九日發行

定價金五拾錢

著作兼
發行者

東京市牛込區新小川町壹丁目十四番地

菊池三九郎

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

藤本兼吉

印刷所

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

株式會社秀英舍第一工場

東京市牛込區早稻田

發行所

早稻田大學出版部

河口寬 著

海外詠史百絶

明治十年（一八七七）東京濃香樓鉛排本

據明治十年（一八七七）東京濃
香樓鉛排本影印

河口 寬著
千賀節堂校

海外詠史百絕

濃香樓藏

枕山翁曰天上無爲之樂竟應生倦厭之心抑不若世上有爲之苦而他人欲爲凡人可以知矣

健齋翁曰禽獸蟲魚受賂苦果何理

又曰太古有大洪水爾後無之既可推落句極妙

枕山翁曰九八分長九州之小者

又曰燕苟美酒忽到我前雖誤我事得得不舉夜光杯哉

健齋翁曰詠云微上之下即是也

又曰似託天神

海外詠史百絕

巧制時勢也。時勢既變。不唯制度之物。而風俗變焉。人情變焉。至於詩亦不得不爲之變也。其不計黃色人。而計白哲人。不依風騷慣用字。而用書牛硬語。不必歸于溫柔敦厚。或涉於勸過激。亦時勢之所使然。吾豈好變哉。讀者勿咎之。

優游樂地幾年春。無食無衣飽煖身。當日不逢天帝。詭茫茫世界更無人。

人類之祖男曰亞當。女曰夏娃。在于地堂樂園之中。不衣不食。優游有年。及後夏娃得罪於天帝。遂受賂孕之苦云。

生靈藹盡。地球新劫後。只餘舟裡人。三子三州各爲祖。花旗誰是殖蒸民。

紀元前二千九百四十八年。全地球大洪水除諸亞。舟中所在之外。生類無遺。諸亞有三子曰。閃曰。含曰。姪曰。亞細亞。州祖舍。爲亞弗利。加州祖社列多。爲歐羅巴。州祖。亞墨利加州。後世所創見。而不知其人種之所由。

熱到葡萄第幾枝。陶然一醉臥涼風。人生誤事皆因酒。笑殺仍孫學祖翁。

諸亞洪水後。一歲山舟。拓地植葡萄。殺其液。造酒飲。而大醉爲裸體。

領獸携家不計程。蹤追水草澹無情。民風上古應如

我邦亦然所謂
神祇政治也

枕山翁曰七年
之諸本于堯水
湯早知未然之
智亦有所據者
盤齋翁曰原始
知終亦此理乎

又曰與亡果在
人邪抑在天神
邪談曰天命多
是此類

許枉道天神命此行

社兒氏有亞伯拉罕者因神勸與其妻利子易其地出國過
亞伯利移于巴比倫

當初孰見孰傳之古史荒唐儘可疑只辨七年飢饉
備。花。零。落。不。曾。知。

爾居特羅道惟布最賢兄弟急之費於商令携之於埃及及
布有知未離之智埃及王召使官其未離曰可有七年洪水七
年飢饉王以重布為宰相

謀成忽解十年閑馬腹離國伏禍機亡國亦應神所
約何唯拉塞一王如

的律王子曰巴利斯神約妻世界第一等美人當時世界第一

等美人為法塞德王紀後也利斯達王紀降的羅布羅人怒
舉兵圍的羅城過十年布羅人堅言奴臣造木馬々腹伏兵置
於海濱而去的羅人奉木馬入城是夜兵士自內啓門入希羅
人的羅人大敗

萬和綠遍水之濱舟裡颯々索乳頻當日若無公主
認耶和十誠付何人

枕山翁曰舊蒲
中亦后稷之臨
蒼乎
盤齋翁曰摩西
前人間豈無十
誦邪亦見其說
之旁矣竺土五
誦支那五常果
何人授之邪

又曰應非坊間
都々一力士甚
句亦皆入吟何
官橫文

處世何人無性情歐洲花月入吟評橫行文寫溫柔
旨不許周詩獨擅名

枕山翁曰善讀
寓規竟能全他
路入果為賢也

盤齋翁曰法律
元為治民非為
亂民有法律而
足亂民何取於
法律後之議注
律者可用必嚴

又曰吳起兵法
起於美人々々
有越兵亦奇哉

又曰竹林之化
果為何益可謂
文明進步隊長
也
枕山翁曰筠挺
竹林人有成敗
竹君何知

又曰吾邦武田
二郎佳兵取亡

希臘人工詩而波爾列為第一等其勇武頗多佳句
誰能德澤得深淳學世吹虛仍傲矜善講率知微
旨路人莫乃是賢人

雅典國法使都人書其所悉於陶器碎片充六千個陶器之等
和亞里的斯有名望一日出于市要路入而使書其所悉則已
之名也亞里的斯問其故曰吾要於問世人稱亞里的斯之賢
因為此故耳

初將法律御黎民苛酷殆難免暴秦美政影々期繼
起後三百歲有櫻倫

希臘國紀元前八百八十一年猶屬草昧創屈兒者初立法制
太苛酷至於其五百六十年櫻倫更定法律寬裕便於民

嬌柔不畏故州兵繼藉爺々示款誠莫把傾城呼彼
美々人此處是長城

初羅羅之埃羅馬城也愛人民之寡而隣國服之不難一日
設大祭隣國士民携家來遊羅馬人起察其女為妻其父兄舉
兵圍城女居間和解事遂寢

山川秀美海之灣七個賢人出此間不似竹林疎禮
節各將文學化夷登

希臘國上古有七賢人開于世歷會變亞耳齊些包些母歐
多胡列亞那屈列思波尼的亞斯列是也或工詩歌或長
學術

強士徒誇富且豐佳兵護國古今同君王一敗悔何

與此何異此人
得活幸矣

及。已。落。平。均。天。理。中。

呂底亞得豐富王恩見愈尼書問機倫曰字宙間最得幸福者
爲維機倫曰凡人有始有終者最爲得幸福王曰如諸人者
何如機倫曰一時幸福必有一時衰微爲之平均幸與不幸非
蓋皆後難定焉王不悟後信希臘人譚言起兵代波斯大敗爲
虞始有所悟高聲呼機倫名波斯王聞其故憫之不殺

右手雖無刃有餘丹心豈敢負當初直將壯語壓
敵莫道荆軻劍術疎

羅馬之爲共和政也有復古黨引某王軍與共和黨戰共和黨
中有私加烏利者潛入敵軍伺其王有排衣倚樹者誤爲王七
昔刺之轉至王前王曰汝宜白馬馬中默然有死耳私加

四

又曰始皇之暴
兼恩公之惡其
不似新田公也
宜矣
機齊翁曰得
猛我狀妙

架橋輓海々應怒草檄增山々不移何似扶桑左中
將只投一劍感馮夷

又曰如是始稱
國手也
枕山翁曰藥已
有君臣君豈無
君臣哉

衆理元來出彼君君臣比喻最精富良醫易地即良
相治病方同治國方

醫聖必保加刺的斯者生干小亞細亞之格致初補西藥藥人
疾嘗曰醫者臣而自然者君也

又曰詩人之賢
近於王綱焉

一任外邊兵馬驛看花間鳥淡生涯腥風吹散滿街
血不灑詩人賓駭家

儒翁翁曰仁厚
之化何國無之

想見賊心易感人豈唯朝署號超倫敵讐猶自痛其
死何況地方新附民

歷山王代波斯生獲其王太流士母侍之太厚矣選代東方諸
國將抵印度一夕置酒罹病而薨矣地方新附臣民哭之如本
國人大流士母亦慟哭而死矣

亂邦寧可寄生涯行道轉高身轉危無罪就刑非所
恨昭々心事有誰知

希臘人索因拉斯修德講學國王聽之賜藥其徒請欲使逃去
索因拉斯不聽從容仰藥其徒悲其無罪而死索因拉斯曰汝

又曰古今同賦

枕山翁曰此老
以日影爲衣被
豈欺瞞之人也

朝日常軒暖似春負喧欲歇更無人歷王枉駕譚閑
事不問蒼生問赤管

希臘古賢某貧甚歷山王訪之某正貧賤王曰先生如有所缺
某曰吾百事足矣唯所缺者王之立吾前遮日光而已矣

放棄荒曠歲月深哭君憂國淚冷冷功成却逐楚臣
跡引得人民推戴心

以色列爲北里私人所攻太關立大功遺恩厚居有年矣以色列
列王掃羅太關發表悲哀國民推太關爲王太極富強

兩婦紛爭日欲沈庭風急落花深刀光一閃兒將
死便見天然母子心

機齊翁曰似大
國仁政錄

以色列王些路門即位初有兩婦爭兒爲所者王挂劍曰吾將
斬兒爲兩段各持一段去甲辭色不變曰誰奉命乙哀泣不已
王曰是汝之兒也

粉妝打扮美人委紡續從教漏箭移決死投身狂焰
裏撒王此處是男兒

亞齊王撒兒那把列不動敢面盡粉着婦人腰面訪其將
叛起兵王知不免聚實貨於一宮自焚而死

手未瘳時心已狂突關銀箭響華堂比于不死吾兒
死畢竟君王是紂王

波斯王國庇斯取酒侍臣布歷亞私夥斯建之王叫曰酒亂吾
心疾吾手頃之王使布歷亞私夥斯子立堂隔射貫其胸

六

梳山翁曰有稱
水術而不有稱
實術也噫

偶然浴處覺身輕金質純應辨得明獨情官途無此
術混他邪正不分明

希臘某國王贈金冠王使亞幾墨的斯屬其金之純否否矣亞
幾墨的斯不得其術一日入浴忽有所悟遂得知其區他實乃
今之稱水術是也

又曰獨夫可伐
獨將可憐

名望終能建壯國行收寶貨入羅都離兒也解鄰家
訣不伐人君伐獨夫

這些兒戲雖並爲羅馬共和政斷續官館些兒有名望噫是
之些兒與噫陸々々做走離些兒以其寶貨不進噫陸日先
伐無將士卒後伐無卒獨將矣

噫齊謂曰可謂

料知決死在於官騎虎勢危停亦難寶貨貽民邦國

些兒知己

敵遺書一字一長歎

離些兒爲國寧立憲法與大利人民悅服噫陸之黨就議政集
會之席談之離些兒噫噫曰實貨國國胎離些民國胎離些

梳山翁曰國城
中貨一統之泰
夫如此則吾陽
之浸所自取也
將怨離些

怒海暴漲浸城闕醉夢驚回一枕春手裡祝杯殘酒
在濕吾鮮血獻他人

波斯王精刺斯及巴比倫城々因不降有一川饑饉巴比倫而

波刺斯斯預塞上沈穿澤饑饉一夜巴比倫城中會將士傳說

杯頂更面川決水至兵卒踏踏波斯軍入城殺傷無算血滿說

杯

曰卷題因成
敗古今通義太
史公劉琨記亦
未免於此矣

天道雖然均且平人間百事欠公評古今善惡因成

七

敗美德休言博美名

離兒徒私臨死曰德者博一美名而已矣

十字架頭紅血鮮蘇生匝月亦前終當時引力知何
在不管飛騰去上天

耶蘇受十字架刑三日後復甦在世四十日而上天去○西人

云地有引力引萬物故萬物不向地而墜焉

離安倦政古來然例敬功臣奪大權欲戮一蛇無氣
力一車焚燒又他年

羅馬帝智龍則屬精治晚年荒顯嘗賞功臣曰耳麻尼風私
子得利屈斯爲嗣則曰朕將遺一蛇倘吞羅馬人民又遺一車
焚其蛇

又曰佛魔一如之理

豈唯武族與儒林祇逆乾坤罪障深亡國亡家皆自取不知魔術在其心

羅馬帝內倫大進無道有名學士武功將帥皆處死刑獅子隊起亂攻王內倫臨死書曰朕為何魔術所滅哉

嘆做活神非所誣謫民恩德四邊福卅年不作封疆計一將功成萬骨枯

羅馬帝安和恩在位二十八年國家無事無史可記當時有儒神之稱○結言極成句

寶王從來不是珍只須稼穡殖民設王有此公明語欲贈富途用事人

羅馬帝設布智聖聖列院則曰願庶民務農耕又口朕平生

八

莫物不有然無一以益於我矣

曾是術商野牧身清齋學道禮天神英雄教法無多子只把兵戈濟度人

回教羅馬哈喇沙時為牧為商旋閉居餘邊四十著得創一宗每語其徒曰不信吾教者宜以兵代之還擊亞利伯地方

將卒雖亡未策動依然片月亞州雲教人教是殺人器二百餘年十字軍

耶穌教徒提耶路撒冷禮拜以為例後耶路撒冷為回教徒所取耶教徒起兵攻之自千八十五年至千二百年間竟不能取耶路撒冷教徒軍以十字為號回教徒軍以半月為號

大法宗臣議得成君桃已見一毛輕祇今立憲稱嚴

又曰吾邦山中幸遇以半月為號國于守國回教徒亦以此為號保百有餘年半月蓋多缺於所以得神之助者歟

羅馬帝曰獲吾

心佩服々々

肅都自當時暴處生

英王約翰見暴無比貴族等迫定大法曰國民有罪必其主按問成刑曰微軍實必當國會謀之今日刑法之權歸於上院金獄之權歸於下院蓋由於此大法云

豈唯同等視黎民無復威權在貴人佛國史中狼虎是慈祥却被喚麒麟

佛第九世釋迦廣置民於第三等之法大創貴族之權有一大匠按其事述其情世稱神聖釋迦

立召己創國家基易置何堪比奕枰枉使生靈坐塗炭牽連取號百年師

佛第四世加爾斯無子路易斯侯子立第六世非立弗是

九

也初加爾斯神錄英第二世漢德瓦生第三世漢德瓦德瓦以其外甥故自謂可繼佛帝位起兵入佛從是騷亂不已世謂之百年師

擇君雖在擇英明王統何須構甲兵咬殺爾殺紅白戰紅花難弟白花兄

英約克開加斯得爾當以王統之事戰爭殆三十年矣約克軍微用白滿蓋爾加得爾軍微用紅滿蓋

人民解體國王癡隻手誰撐大厦危少女唯能號神使更無一個是男兒

佛王第六世亨利賴在不理事及其妻美人大舉而至吾國城望風而降矣太子守基城且夕將陷有女子若彼者年甫十八

枕山翁曰前半離壯後半結鹿

又曰用得倚倚者翁曰藉口於神使亦英雄家傳邪

枕山翁曰御花
無應盡

又曰張氏之難
陽補氏之金剛
山皆爲燕北國
東人之墓田世
界中又有爲人
之墓田者你矣

自稱神能以結人必解國非沐子即位繼復諸城○結花影矣
人咸句

征帆西去指天涯
漫碧茫々進退疑
忽認浪頭萍草
渡仙台一缺得花旗

格倫布向西而航久之不見地水手怕相將盡乞還適見海草
之近船而流乃知新世界之不遠終得達於未利堅

暖恃豐饒擬俊賢
弄兵曠武已多年
僅看千古教人
煉羅馬城頭是墓田

佛帝第八世加爾斯即位當國富兵強之時自欲做歷山王之
功業起兵數伐伊太里朕人庫財云伊太里國者佛國人之
墓田也

德壽翁曰紅蓮
面世宗教之權
何世無之不堪
慨然

妄論執權宗教門法王尊勝國王尊貴金許贈冥々
罪莫性民心向異論

羅馬教徒中有一僧曰人犯罪僧許之罪則減矣其未犯者僧
許之犯亦可也法王亦是此說因大得財有僧得者諱之法
王怒斥之諸國多黨得者起兵攻羅馬法王被獲於是路得
唱新教能力單宗是也蓋能力單者異論之義

舊教會稱護法榮春閣事孔舊嫡姬羅王不發堂々
號却許成他豎子名

英第八世國理事齊教羅馬法王而以護法者名後愛安者欲
廢其府邸於法王后爲日帝第五世查爾斯妹查爾斯亦奉舊
教法王不能決願理慈與法王絕奉新教自稱教長

新舊之門本一門是非只自愛憎論女王暴惡是羅
刺血身于今餘身存

英女王馬利奉舊教新教徒多被殺者世稱血馬利

鳥之將死作哀鳴一敗知他百悔生銘我心肝要汝
記勒斯文字太分明

馬利與英及佛大敗失其加勒斯加勒斯原佛地入英既二百

餘年百諸風俗變矣至此漸悉又病馬利曰吾將死吾死汝

果爾吾服視之加勒斯之字爾在吾心矣

漏屋弊衣年又年解嘲一語足知賢此心異域將誰
比崇上遙看萬靈烟

枕山翁曰一帝
之傲漢世之澤
德壽翁曰我
仁皇却無此謂

佛帝第十二世路易滿視節用管曰朕以儉素受朝臣之贈而

又曰守錢府可
愧死

不以奢侈使位萬民也

勸儉直堪保一生誰知鋒刃利於兵黃金畢竟成何
用只買人間自主榮

英人培尼爾云借金在保於自主之榮英人查克斯畢云借金
於人錢於我對餘之鋒刃矣

欲廢公論々却多民心背處即兵戈君王不立兩安
策末路放亡終奈何

英第一世查爾斯廢議院蘇格蘭叛起兵攻王王降議院長曰

王安我危王危我安竟爾安難而立矣遂廢王國於共和
治

想見當年立偉功尚存金戒兩辭中須知舊律勝新

法未必空言除弊風

佛宰相利設斷斯叔撰政權大有功績每語人曰新法不面言
法除惡弊不在空言而在實行也

又曰余亦有此感今讀之慨然
聚得星沙太苦辛此心須要立其身千金一刻休輕
擲能積光陰是富人

又曰山翁曰中庸
云天之至大為
昭々之所積西
城之聚字積字
是為骨子

英人亞微南云光陰者母金也善用之必可致富焉天上之星
地上之沙雖強不已可得聚之也

大功不立不歸邦勝魯伐波威武揚若使北州無勁
敵應呼一個歷山王

瑞典王第二世加爾列年甫十八歲征誓不歸侍兵八千人
敗得軍六萬轉入波蘭戰勝廢其王威靈遠播後為帝彼得

所被寓于土耳古

滿胸豁畧秘英奇忍耻包羞此一時無復當年太流
士鄂羅爭得比波斯

得帝彼得與加爾斯戰大敗帝曰朕將學勝彼之術於彼耳後
攻瑞典屢勝佛居間和解加爾斯曰願盟於諾斯架城下彼得
聞之咲曰彼縱欲學歷山王世奈無復太流士何蓋太流士波
斯國王為歷山王所破者

內地遷民就戰運待他兵士凍饑時後來佛帝落其
殺何惟瑞邦黃口兒

加爾斯大舉入魯之哥羅諸國彼得使居民退內地加爾斯驅
兵而進適天寒雪深而糧道絕矣於是彼得率精兵六萬擊之

豐公亦有此界
可謂不期而同
又曰生悔心即
英達凡人所無
枕山翁曰結川
李義山句法便
健

又曰得意之後
會集故友不現
功名富貴之狀
能得人之歡心
固為難也古今
不得幾也
儲齋翁曰異英
雄心事寫得妙

又曰近時雖國
之詩一以造化

加爾斯大敗矣○千八百一十二年佛帝那保列前率兵百萬入
魯々燒其都諾斯哥而逃時大聖兵乏糧食苦飢那保列前
叔兵營追擊得大勝蓋似由於彼得遺謀者也
無復滿頭長髮低短衣窄袖學州齊百般制度取其
長莫道姿容唯泰西

彼得漸其制度文為之不如歐洲諸國欲改之自謂不如先變
即換體貌選下令定衣服之制又使斷髮漸髮
故人無恙故居幽一夢忽々十八秋忘却功名兼富
貴團樂酌酒話會遊

彼得之在荷蘭也伍工丁學造船術後十八年遊荷蘭訪故居
大會故友酌酒話會滿座莫不感思垂淚者

十三

無復諸夷犯四疆君王獨自悔顛狂臣如犬馬后如
敵得侍夜筵唯杜康

彼得為人劇烈夜間必飲美酒沈湎不省事御侍臣侍后妃如
仇敵後自悔曰朕敗國之過而不能改身之過也

從教天主謾尊天只禁昇王與議員束縛人心有如
此宗門不許自由權

英王第二世慈遜弗奉天主教惡奉他宗者因是國亂其始荷
蘭大統領給嚴起兵攻之國民廢慈遜弗奉維廉為王維廉設
法與國民誓天曰第二世慈遜弗一族及奉天主教者自今不
得昇王位又不得充議員之選

食花山水兩兼之更辨行雲變幻姿不向人間求粉

爲師是故愈望
愈奇夫師人者
焉得奇哉
慥齋翁曰師化
工何啻奇工

本。化。工。畢。竟。是。吾。師。

佛人古勞德羅倫以誓開千世人家田園山水花鳥必就真景
寫之或至於終日望行雲變幻天色明暗而立

恨終無寸土寄單身。漫將白梲替黃金。自此邦家逐歲貧。買得人民何限。

蘇格蘭人羅烏長理財見佛玉造製紙幣供國貨之說大得信
任紙幣漸多而金貨漸減焉終至國國無替紙幣之金而紙幣
之用頓廣矣羅烏出奔

風前看得菓辭枝自此談天術最奇莫間傳承從那處商量妙理有唯思

英人牛蒡一日步樹下見菜畦忽悟地有引力遂推究日月星

十四

運行之理以成一家學或問曰子因何得此大發明牛蒞曰吾唯思之而已矣

不論地角與天涯萬里遙音信一絲自此小兒名不朽
電、光、即、是、記、功、碑、

米利堅人弗蘭克林發明電同於起氣之理或嘲曰此發明成何用邪弗蘭克林曰小兒不能用而至大人始常有利用焉○西國勸功業於石者謂之配功碑

是非便合決當時誤事休官悔已遲廢留猶欽心恣
大滿釐不做子孫遺

英與西班牙有歐國人諸戰事相繼伯瓦爾波不欲戰而尋機乘隙強從之戰不利後國人諸咎於羅伯由是去官羅伯雖被

物議亦有宰相之度利祿與人律身法履

萬卷何如一百兵，徒將條約結同盟。果然俊傑知時務，墨未乾時已砲聲。

日帝有一女國法非男子不傳位與各國議改國法將軍某不
喜曰萬惡得結條約不如一百兵守之帝崩女即位未幾亂起

不問天家是女兒，民心足卜國安危和成封境各休
舊狂了八年相續師

佛軍巴哈理國主即日帝位攻埃女帝出奔而在行在募兵破
佛兵逼巴哈理國主先是字亦攻埃而英援旗自七七百四十
年戰其四十八年而議成焉初各國之意在於廢女帝而選
埃之地至此各國封疆無所損益世謂之埃地利相續師

十五

枕山翁曰楊廣
周盟合爲一人
可畏令令

婦操已非貞且堅，婦才堪執大邦權。英風偉業古今

魯女帝第二世加他納爲第三世彼得之后弒帝即位攻土攢其羣勝瑞興伐波蘭而取之建學校修道路其功業亞第一世彼得

一語何曾傍教門。看來實理實心存分明說盡行仁法。誰料歐州出魯論。

英人查斯德費耳士著家訓頗似論語○西人論道德書不傍

披衣理髮向清晨，几案曾無半點塵。書冊理時，馴狗吠離門，俗吏是文人。

又曰案牘整齊
不是俗吏常是
循吏

hi
:
○

德壽翁曰金馬門隱士與非俗史文人一針

梳山翁曰人之機智巧於造化

又曰黑兒壽星玄關通曉之他亦可現嘆之人乎

德壽翁曰無提亦可比西施乎

蘇格爾人斯格爾為小吏俗務紛劇中立課程讀書不倦每朝五時著服理髮六時對文案查冊排列在側九時至家會食俗語人曰吾欲以職務得口糧而不願以文藝為生計也

不省官家君不君護因名士禁新聞噤聲難及民皆背華盛先頌獨立文
英王第三世若爾日時有維爾格爾斯者刊新聞紙諷刺王下之獄諸新聞紙於是民心騷動物議驟然王不得已故維爾格爾斯未幾米國叛維爾格爾斯為將傳其獨立文英伐之不勝
點滴聽餘夜已闌細思氣性就眠難阿嬾不解後年業只作尋常兒戲焉
英人瓦德年甫十四適在茶莊茶當七於茶櫃口較其茶氣為

十六

水而滴其母以為戲叱之由是悟蒸氣有權力至於用以運諸器機
讀律逐條經兩春何曾一視不同仁從來犬馬充驅使前黑兒翁始喚人

英人額爾米爾沙伯乞廢黑奴賣買法院不許之從是職務忽劇中讀法律書二年巴力門條例法院議案莫不博搜廣羅終得其要領乃曰英國法律中英奴使他人以為直者又著書痛駁之後來黑奴賣買之廢以沙伯為嚆昔
遮莫呼妖又喚狂廿年經驗苦辛嘗人生自此顏皆好不辨西施與六郎

英人日納爾發明牛痘法時人不信之目為妖術日納爾不以

又曰君臣之制或可廢矣而其義則終古不可廢

又曰吾邦亦有其人
梳山翁曰華行之境豈有飛丸之懼邪

又曰女中刺客優於諸政矣
德壽翁曰丈夫可愧死

又曰餘快々々々
梳山翁曰長眠之語古人既已言之但以轉句新新是亦成新

為事切確二十年始得大行王世
君臣本分豈昭明原自人民協職成憂國深心滄海似瀝來作此不平鳴

佛人烏兒罕耳傳學多識唱民權說宗教其黨雖稱亦書題曰民約其大旨曰凡君臣之分政體之綱原係人民相約而所定焉故今自人民廢君臣政體固無不可也此說一出全國康和之說來之大變革蓋啓源於此云
德行勝兵身可防任他朋黨日槍樓邸門不掩長高枕無復飛丸到睡鄉
佛人孟與德行顯于世內亂之際朋黨相札多被害而擇神中不閉門者獨孟與而已矣或曰孟與一身之行自足防危害勝

十七

於一隊之兵也遊矣
雲霞花顏何偉哉壓人山岳手傾攢成仁竟學丈夫事肩斧瓶當誅巨魁

佛國之為共和政也數黨互相擠排而釋山岳黨者最懷恣睢令奇酷倍於立君之時有女子哥爾的者年尙少懷七音訪山岳黨巨魁馬爾斯刺之大呼曰吾為國誅此賊遂受縛旋經就死

文明也及墓門邊梵寺絕無香火烟抹鐵天堂地獄說只言一死是長眠
佛之為共和政治也廢邪惡教毀寺院而迦葛門曰死者永世之眠也

又曰奇夫子格
先生弄多少工
夫

誰將奇術奏奇功自此休言色即空。明。月。不。虧。花。不。落。唯。由。硝。子。棉。生。功。

佛理學家加爾斯者偶見銀盤之觸日光變黑色用之寫物形於紙是為寫真鏡之初爾後經數氏研究終至於用沃頓極其精妙

醫齊翁曰千古
不朽可謂列壽
知己

魯英字煥各侵疆大業併身共敗亡猶剩六編律在森然到底有誰當

佛帝那保列壽即位之初憂從前法律之紛雜條緒之紊亂納為一書凡六編曰憲法曰民法曰訴訟法曰商法曰治罪法曰刑法近世歐洲各國莫不取法於此書者

新國將畧更無倫一代威名震四隣功德我能升帝

十八

位冠儀何倚異端人

于八百四年五月十八日那保列壽即位其十二月二日行大禮此日羅馬法王來巴利斯將行加冠之式而那保列壽不喜之自取冠戴之又自取冠加后之頭

戰勝仍須訂舊盟使臣長策說連衡不知身已屬衰兆謝絕張儀猶進兵

千八百一十二年那保列壽敗于魯於是魯李率兵侵佛羅那保列壽親將戰勝過兵使遊說家墨的爾尼說曰陛下及今宜退日耳曼之地埃將居間味和是為陛下萬全之策也那保列壽曰今我戰勝不能退寸步雖然埃國之所乞亦有情誼不得已者唯退登蒙里亞耳曼的爾尼曰埃帝以陛下網成故特遣

又曰英雄末路
往往有加斯者
可慨歎

枕山翁曰大學
斯々等之八國
似無能然能治
人國者

枕山翁曰太似
宋神宗為政者
可鑒哉

臣進此說陛下若不容壞亦要力於魯字與佛決取耳英雄欺世語生新為惜奇才却害身不識無能堪治國枉言二字屬愚人

那保列壽曰無能字見於愚人之字奇

文明稱合伍齊民莫學權苗國一新瑪帝不知君主道速行却作退行人

士曾第二世瑪馬天性智勇慕得帝彼得之為人改兵制建學校定新律謀醫學設新聞而痛駁回教會通說但其求治之急國民不知新法之為益而生抗敵之念騷亂相踵致希臘埃及之獨立海爾維之叛

寶刀在手不揮屈膝偷生愧世讓未心英雄諸古

十九

典且將符節敵重圍

塞爾維亞土推手兒尼若爾日為元師兵不充八九千人土兵數萬因之遣使曰宜脫劍乞降以全命至兒尼若爾日答曰欲得劍請來取焉蓋此語係希臘斯巴爾太國王勒利尼達之所

憂國能為天下先歐洲也有仲淹賢始終排擊共和說身係安危十七年

起於者美人也仕為首相當時佛人唱民權國政終變於共和政治應的委其說之及於我經師討佛羅有勸和者不聽當時國中無事為其功居相位十七年矣

同是人間第一流用兵誰劣是誰優英雄只被英雄

又曰泰西出甲

枕山翁曰十七
年之相所希見
矣范仲淹被廢
出故不能致十
分之力可惜

認莫。惟。知。音。在。敵。讎。

英大將密林登善用兵與佛帝那保列聯戰于瓦得路初那保列聯語人曰朕今日之戰但在於與密林登試用兵優劣耳鐵路車初了功三十六里一時中地球縮得行程近誰料人工勝化工

英人士提反孫幼而負力役自給年十八始讀書遊獵車鐵道一時間行三十六里先是有造此器者未成其用至士提反孫始成矣

白日堂々付水流空論自悔作優游厨爲書空箱爲案千首詩輕萬戶侯

英人振母兒德留者罷工也好論國政至夜造靴一夜能打革

又曰洋西有張公子作者詠之亦杜牧之流亞

有聲小童自戶外曰靴工盡間隔游至夜勞作德留不覺曰實然徒是勉戰讀書家屋狹隘以危厨爲書室以風箱爲文案作詩賦著文章以自遺○結杜牧成句

風急旗旗三色潮私論爭得敵公論四條法廢相辭職難慰人民未死現

佛帝第十五世某爾斯不喜民權爲政任意當時貴族僧徒僥倖志懷渣爾斯布新法四條其旨在抑民權於是府民憤懣擄兵壓迫王宮時千八百三十年九月廿七日也官兵散散府民踏折王旗章而樹記自由自主字三色旗廿九日帝不得已下令曰廢新法四條聯宰相汝輩宜引去府民曰此二事未足以值數千人戰死之費三十日遂以路易菲立爲全國總督

又曰我國之仁爲敵國之不仁自非賢聖人不人能同仁之文明不足恃也

喫烟爭比飲芳醇不恤滿清全國民苦覓戰端謀大利文明人是不仁人

英女王維多利亞即位初國人驚阿片烟於清今人腹之多種病者消禁之英人私運之不已清怒追其甲比丹使出阿片烟燒之其價抵三百萬磅於是英起兵攻清今敗割香港償銀二百一十萬元而和成焉

用兵也託法門神界世心圖在四隣五國纔能安一國休言國力是平均

英土於宗教之事有隙起兵侵土驅英佛出兵與普給資各按土魯兵軍土軍英佛兵進黑海破魯特遜和議成焉○託宗教何人國兄子魯帝彼得遺訓○歐洲諸國強攻弱必他國援

又曰蛛絲爲虹竿氣成采盤香露曰巧綴

之號稱國力平均蓋在於防自國之害也拂曉涉園成趣時偶然落想沒人知誰圖未雨長虹影元是蛛蛛一縷絲

英人伯拉溫一日拂曉涉園述如絲橫露忽有所悟遂用銀繩而架張懸橋

雖才欲和大風歌雲不飛揚竟奈何猶有遺民懷乃祖投票何姓姓名多

第三世那保列聯千八百三十六年起兵叛佛被放于米利堅其四十年又率第一世那保列聯舊臣五十人舉事無應者被禁錮逃在干英後因投票爲大頭領未幾開議院而捕諸員百八十八下之獄終昇帝位

又曰諺云智者
眼前有三尺時
殆謂此也

會誓皇基也等閑六軍一敗血痕斑身爲囚虜國民
賀翻覆人情三月間

千八百六十九年是班牙國將以李王子爲嗣約已成矣那保
列翁令李破其約又使約李國王李此後不爲是國嗣李不聽
却其使時其七十年七月十一日也李起兵攻佛今廢敗矣其
八月三日那保列翁降于李先是五月二十一日那保列翁使
國民李百歲後其太子可繼位至此國民相賀李其太子并后
變於共和政治

又曰名言不朽

衛、義、假、仁、天、下、同、虛、談、豈、足、決、雌、雄、智、人、秘、計、無、他
事、只、在、彈、丸、火、藥、中、

李音和比須末兒克日假仁術義滔々皆是險論不足以決事

二十一

唯有銀與火而已矣

稼穡辭官苦自嘗風耕雨耕幾星霜辛勤先創兒孫
業豈超成都八百桑

比須末兒克少年承父遺業去官力耕大發富

狂歌醉舞送生涯喚馬呼牛任世嗤唯有楊家紅拂
妓羅絲喬木寄相思

又曰古云英雄
好色信然
枕山翁曰秋波
之利能射英雄
漢

比須末兒克克少壯放縱無賴固難惜之某氏友有容色比須末
兒克贈書乞婚父母不許而女歸嫁

自由自主說何新欲把邦權付萬民固執一君專治
法東洋英斷有斯人

千八百三十年後李國多唱民權說者比須末兒克獨曰君主

又曰失故步者
極多可歎可笑
和魂
德齊翁曰似法

衆怒何辭萬口喧排他模倣倣倣英論憑君莫學邯鄲
步失却天然李國魂

比須末兒克嘗曰李國人自有李國魂不得倣英模倣也

片言不說別離哀說到那家淚暗催最是書中感人
處孔丘盜跖俱塵埃

比須末兒克事使在于魯贈妻書中多憂國之語其末曰凡人
或彈丸或疾病早晚不得免死一爲白骨誰復辨智愚。結杜
甫成句

二十三

尤同張潮之外別闢一境所以這體
無一猶人語也 枕山厚敬批

龔歲賴山陽藤東湖二氏並以詠史
鳴于世自此天下之詩人相爭模倣
開口輒曰詠史々々而問其題則陳
腐其意則踏襲譬猶萬人同射箭集
一的焉今此篇所詠皆係歐米諸國
其事未經人道而能出之以雄渾典
麗或寄託胸臆或規勸一世絕無陳
腐蹈襲之病可謂別張一的而射之
者矣敬服乙丑紀元節 鈴木魯安評

自宋學士賦日本竹枝清人或
有傲
舉者而若外國詠史未曾聞有之此
篇可謂新發見一詩國其功不在關
龍下也哉乙丑新年小寒後三日由
僭批多罪

明治十年四月廿六日屆

著書並出板人

茨城縣士族

河口 寬

東京第五大區六小區
下谷稻荷町廿五番地

東京神田明神下
松住町

發兌書肆

島屋平七

日本漢文史
籍叢刊

第四輯

系譜
咏史詩

ISBN 978-7-313-12132-5



9 787313 121325 >

定價：26350.00圓（共三十一冊）

[General Information]

□ □ =14664123

SS□ =14664123